

転生魔女さんの日常

やーなん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——私は生まれ変わった。これからは好きなように生きるの。

ある時を境に、人々は異能を扱う転生者や超能力者を認知するようになった。

これはそんな常識が変わりゆく現代に転生した魔女さんと、彼女を取り巻く人々のちよつと変わった日常の物語である。

これは小説家になろうにも投稿していません。

目次

始まりについて	1
××アプリについて	16
死化粧について	32
本質について	48
墮落について	65
異能について	84
学級について	98
念写について	112
調停者について	125
馴れ初めについて	140
馴れ初めについて	154
友達について	174
後編	
前編	

事故物件について	191
聖職者について	208
前世について	223
恋の魔法について	244
おもてなしについて	258
編入について	274
顔合わせについて	293
結成について	307
妖精について	324
カラスについて	340
アートについて	358
絵画について	375
非日常について	390

筋について	410
契約について	426
財産について	445
時代について	462
罰ゲームについて	480
キマイラについて	496
ゲツシュについて	513
特典について	534
親について	550
魔術について	566
人間について	583
内職について	599
親友について	614

警察組の初夏	640
天狗について 導入編	660
天狗について 事件編	677
天狗について 解決編	691
籠絡について	718
被虐について	736
規範について	752
師弟について	772
下準備について	792
自由研究について	807
暴力について	826
魔性について	841
逆転について	859

迫害について	877
各地の反応について	899
遭遇について	918
追憶について	934
仮面について	954
侵略について	970
カリスマについて	987
情について	1006
占いについて	1022
案内について	1041
到達について	1059
悪魔について	1081
招待状について	1098

イヴの決起会	1211
イベントについて	1212
二次会について	1214
魔王について	1216
第二部？編 十年後について	1218
葛藤について	1215
夏の終わりにについて	1229
『人位遡行』	1246
イヴについて	1262
父親について	1277

始まりについて

悲しき、悔しき、怒り。

そして何より、憎悪。

一体どこで間違えてしまったのだろう。

言ってくれさえすれば、自分は直したと言うのに。

脳裏に浮かぶのは、親友だと信じていた人たちの嘲笑。見下したような表情。

……もう、耐えられなかった。

こんな日はずっと続くと思うと。

私は暗く閉ざされた体育館の準備室の片隅ですすり泣きながら春先の寒さに耐えていた。

助けを呼ぶことはできなかった。

今携帯機器を持ちえない高校生は居ない。

だけど、そうなると助けを求める先は学校や家になる。

後から考えれば、もっと良い言い訳とか思いついたけれど、その時の私はそんなことを考えられる心境ではなかった。

私が受けた仕打ちを誰かに話したとして、余計惨めになるのは明白だった。これは耐久レース、我慢比べだった。

ゴールは私が誰かに助けを呼ぶ屈辱に折り合いをつけるまで。

私をこんな目に合わせた連中は、私がこのことを誰かに訴えるだなんて考えてもいない。

人間、十代半ばにもなれば踏みにじる相手が自分に反撃してくるか否かぐらい判別するようになるのだから。

もしかしたら彼女らは、悪意なんて無く、ただの悪ふざけでこんなことをしたと言うこともある。

惨めで、悔しくて、憎くて、怒りが治まらない。

私とその孤独にずっと耐えて、この仕打ちに抗っていた……そんな時だった。

「誰か居るの?」

突如として開かれる、鍵がかかった準備室の扉。

顔を上げた私は、黄昏の夕日の光を背にした魔女と邂逅した。

その時私は、きつと彼女に魂を奪われたのだ。

§ § §

新年度、新しい季節。

中学生の頃、小学生のように毎年クラス替えが無かったことに不思議に思ったが、この高校はそうではないらしかった。

クラスの半分は新しい顔ぶれ。

もう半分は見知った顔だった。

私はその中にある人が居ないことに落胆しながらも、新しい女子グループの中に身を置いていた。

「おはよう」

私が登校し教室に入ると、ここ数日で仲良くなつた三人が机を囲んでいた。

私はそちらに近づくと、彼女らも気付いたようでゲツとでも言うようにこちらを見た。

「えー、どうかしたの？ 三人とも」

私は愛想よく三人に問いかける。

この三人にハブられるようなことはまだしていませんもりだったのだけけれど。

「あー……あのさ、春美ってあの『魔女さん』の知り合いつてホント？」

「そうだけれど？ それがどうかした？」

私は間髪入れずに即答した。

それを聞いた三人のクラスメイトは、心配そうに私を見やった。

「それがどうかしたって、あの人って、ホンモノらしいじゃん」

「去年、あの人に関わった奴が何人も登校拒否になったって言うし」

「噂じゃ、自宅の部屋に閉じこもっておかしくなってるって……呪われたんだって」

彼女たちは声をひそめてそう言った。

私は、少し意外だった。

あの人との関わりを知った人たちは、誰もが私と離れて行った。

心配そうにされるほど、この三人とは仲が良かったわけじゃないのに。

「大丈夫だよ。話してみれば、案外普通の人だよ」

私はにっこり笑ってそう答えた。

彼女たちは顔を見合わせると、先生がホームルームにやってきたのもあり、その場での追及は終わった。

私たちの会話の行く末を恐る恐る見ていた他のクラスメイト達も。

四時限目が終わり、私たち四人は机を合わせて昼食を取る。

「実際のところ、春美は聞いてないの？」

「何が？」

「いや、それは、呪われたっていう人たちのこと……」

もぐもぐと、夏芽ちゃんは言った。

「止めようよ、夏芽ちゃん。そんなこと聞くの」

そんな彼女を諫めるように、千秋ちゃんがそう言った。

「そうだよ、不謹慎っていうか、こつちまで呪われるかもだし……」

呪いを殊更に恐れている様子の真冬ちゃんも彼女に同調した。

「少なくとも、あの人はホンモノだよ」

そう答えた私に、三人はギョツとした。

ここ十年くらいのことである。

世界各地の、魔法使いやら魔術師やら、超能力の類を持つ人たちが静かに、示し合わせたように世間に知れ渡り始めたのは。

今では某動画サイトではホンモノの魔術師が生放送で雑談を配信し、霊視能力者が犯罪捜査に呼ばれることも多くなった。

不思議なことに世間は混乱こそ起きなかったが、法整備などは当然進んでいない。

魔女に呪い殺されたとして、それは泣き寝入りするしかないのだ。

「じゃあ、春美は見たことあるの？」

——あの人が魔法を使うところを」

「うん。とてもすごかった」

そうとしか、言いようがなかった。

私はあの人に魂を奪われた。耽溺した。墮落した。

もう、あの人の居ない世界なんて考えられない。

「ねえねえ、今日カラオケでも行かない？」

放課後、千秋ちゃんがそんなことを口にした。

良いねえ、と他の二人もそれに賛成。私も特にいやではなかったので、誘いに乗った。

三人を見ていて何となく感じていたけど、彼女たちは今年同じクラスになるより以前から既に友人同士のようなようだった。

幼馴染同士で、小中高と同じ学校なんだとか。腐れ縁だと、夏芽ちゃんは笑っていた。

「思ったんだけど、どうして始業式の時に私に話しかけてくれたの？」

三人はもう既にグループとして完成していた。

どうして今さら、私に声を掛けたのだろうか。

「え？　なんでそんなこと聞くの？」

せつかくクラスが変わったんだし、話したことの無い人と友達になりたいと思わない？」

と、夏芽ちゃんは不思議そうにそう言った。

私も、去年までそう思っていた。

「あと、あれじゃない？」

私たち、夏芽に千秋、真冬だしき。春美ちゃんが居たら春夏秋冬って感じで語呂も良
いかなって」

「そう言えばそんなこと話してたよねー」

千秋ちゃんと真冬ちゃんは、そんなことを言つて微笑んでいた。

「ああ、確かに、そう言えばそうだね」

私は正直、三人の名前にそれほどまで興味は無かった。

だからそんな共通点があったことに、気が付きもしなかった。

そんな話をしながらカラオケ店に歩いて向かっていると、私たちの目の前を黒猫が横
切った気がした。

§ § §

安さが売りのカラオケ店でたつぷり二時間歌った後、三人は春美と別れた。

彼女だけ帰り道が別方向だった。三人は小学校以来の腐れ縁の為か、家も近くだった。

「春美ちゃん、意外とノリノリだったね」

「普段からあんな感じだったらしいのにねー」

帰り道の道中、千秋と真冬はそんなことを口にした。

「でもなんていうかさー、春美がああ魔女さんと知り合いだったの、納得だよな」

夏芽は両手を頭の後ろに回して、あつけらかんとそう口にした。

三人が春美と一緒に話すようになったのは、クラスで彼女だけ独り浮いていたからだった。

ただ物静かで周囲との関係を控えているというには、その雰囲気は他とは違っていた。

まるで、同じ室内に居ないかのように。

「……なんだか、今日はクラスがいつぱいいるな」

丁度、空を見上げるような格好になった夏芽がぼつりとつぶやいた。

「ホントだ。でも、なんか気味悪い……なんだかこっち見てるし」

釣られて二人も上を見上げれば、電柱や電線にクラスがずらりと並んで三人を見てい

た。

「早く帰ろう」

「そうだね……」

三人は無性に嫌な予感に駆られて、足を速めた。

そんな時だった。

「こんばんわ」

三人が、逢魔が時に魔女に遭遇したのは。

薄暗い路地の奥から、こつこつとローファアの音が聞こえてくる。

思わず三人は足を止め、息を呑んだまま呼吸を止めていた。

魔女、と称するには彼女の容姿は日本人そのものだった。

年老いて顔に刻まれた皺も、長い鼻も、長い白髪も無い。

三人と同じ高校の制服を着ていて、とんがり帽子もかぶっていないが、黒い黒い闇に溶けるようなケープを羽織っていただけだった。

ただひとつ一般人と違うところは、彼女の左手には燃え盛る松明があったことだった。

しかし、それが問題にならないほど、彼女の纏う雰囲気は浮世離れしていた。彼女はどこか耽美で、退廃的で、冷たかった。

「春美とは仲良くしてあげてね、今日はそれだけ」
すれ違いざまに彼女はそれだけ三人に言うと、そのまま歩いて去って行ってしまった。

三人が息をすることを思い出したのは、少し後だった。

.....

.....

.....

某動画サイトに、登録者数百万人を超える動画投稿者が居る。

チャンネル名はシンプルに『魔術師の工房』。

その名の通り、彼あるいは彼女の投稿動画の殆どが簡単な魔法の道具の作成と銘打っており、頻繁に生放送も行っていった。

そして今日も、魔術師は雑談と称した生放送を行っていた。

『初見です』

彼の放送する生放送に打たれたコメントが、機械的な音声によって読み上げられる。

コメント欄は人気投稿者だけあって滝のように流れているが、何らかの基準で読み上げがなされているようだった。

「初見さんどうも」

魔術師は男性とも女性ともつかない中性的な声で、初見の視聴者にそう応じた。

彼の放送する動画の内容は、目深にフードを被った黒衣の人物の何かしらの作業風景だった。

『これって何をしてるの?』

「あー、これはですねー、ちよつとした護符ですねー」

あまり直接的な効果は無いんですが、まあ無いよりマシなので」
読み上げられる機械音声に、魔術師はそう答えた。

『無いよりマシww』

『ちよ、せつかくマネしてるのにww』

『またこのパターンだよww』

と言ったコメントが流れるが、それらは機械音声で読み上げられることは無かった。

『これ、コメントが読み上げられるかどうかの基準ってなんなの?』

「ああこれはですねー、私の使い魔にやらせているんですよー。」

配信の趣旨に則ったコメントに、私が返答を返す形になってます」

魔術師は読み上げられたコメントの一つに、そのように淡々と応じる。

「魔術の工程には集中力が求められるので、コメントしてくださいださる皆さんには申し訳ないですがこういう形を取らせてもらっています」

『初見です、配信の趣旨って? どっかの概要に書いてあるの?』

「初見さんどうも、ああ、それはですね」

魔術師が初見の視聴者に応えようとする。

『テンプレ乙』

『でた、魔術師さんのテンプレww』

『もう何十回も聞いたww』

『本日三回目』

と言ったコメントが先んじて流れた。

「まあ、知ってる者としての警告ですね」

魔術師は質問にそのように答えた。

「皆さんもご存じでしょう、魔術の知識を持つ者や超常の異能を持つ者の存在を。

私もその一人です。彼らが世界中で度々ニュースで話題に上がっているのもご存じの筈です。

私を含めその多くは約十年前を境に何かしらの原因によって転生し、再びこの時代に命を得た転生者です」

魔術師は淡々と語る。

『リアルチート転生とか裏山……』

『俺も転生してればなあ』

『今生がダメなら来世に期待してもダメだぞ、魔術師さんが言ってたやないか』

コメントにはそのような嘆きが流れ始めた。

「彼らはとつくに廃れた筈の魔術の知識や技術を会得したまま現代に生れ落ちます。

皆さんの周りにそうだと思われる人物が居たら、近づかない方が宜しいでしょう。

他人の記憶を奪ったり、周囲の人気を払う魔術など、私に言わせれば基礎ですから。

我々が世間に受け入れられ、混乱が起こっていないという訳ではないのです。

——もう既に、水面下では多くの異変が起こっている」

それが、魔術師の発する警告だった。

『考えるだけでマジ怖いよな……』

『うちの隣の市で儀式殺人とかあったし、マジヤバイ夜歩けない』

『最近近所に変な新興宗教とかできたし怖くて近づけない』

その警告を受けて、コメント欄もそのような言葉で埋め尽くされた。

「勿論、私のように現世の価値観を受け入れ、自重している者も多くいるはずです。

ですがすべての人間が善人ではないように、魔女狩りや異端審問も廃れたこの時代に自分勝手な振る舞いをする者もいるでしょう。

だからせめて、私の動画や生放送を視聴してくれている視聴者の皆さんに、簡単な護符の作り方などを伝えているわけです。

……あと、私の研究費用と素材代と生活費」

『草ww』

『ここまでテンプレ』

『欲望に忠実ww』

いつものオチが付いたらしく、コメント欄では明るい雰囲気に戻ってきた。

そうしていると、ふと、魔術師は作業を止めて作成中の護符を置いた。

『あれ、どうしたの?』

『うそマジ、リアタイで初めて見た』

『あッ（察し）ってことは』

「初見さん、いらっしやい。

でもイタズラは大概にしてくださいね」

初見だ、というコメントも無いのに、魔術師はカメラに向かってそう言い放った。

彼の手にしていた作りかけの布の護符は、真っ黒に黒ずんでボロボロに腐敗していた。

コメント欄が恐怖で阿鼻叫喚になるなか、作り直しですね、と魔術師は淡々と作業を再開し始めた。

××アプリについて

始業式が終わり、高校生の一大イベントとは何だろうか？

それは勿論、五月上旬から中旬頃に控える中間テストだった。

学校によっては五月下旬になることもあるが、少なくとも春美たちが通っている高校はそうだった。

「はあく、テストとかだるいなあ」

まだ二週間以上余裕があると言うのに、夏芽がそんなことをぼやくのは理由があった。

つい先ほど、ホームルームで新しい担任の先生にクラス全員に中間テストについて釘を差されたばかりだったのだ。

「春美はテストの点数どれくらい？」

「去年の期末テスト、平均75点」

「嘘、ふつーに頭良い……」

春美は1限目の教材を用意しながらそう答えると、夏芽は自分の机にぐったりとして

しまった。

「夏芽ちゃん、去年の期末テストは赤点ギリギリだったもんね」

「テスト直前に泣きついてくるからだよ」

くすくす、と千秋と真冬はそんな彼女を見て笑っていた。

この二人は彼女に対して余裕そうであった。

「小学生の頃は私だって平均90点だったんだよ!!」

「……小学生のテストじゃねえ」

夏芽の主張に、千秋もため息を吐いた。

「はあ、テストとかマジで面倒だよなー」

「ホントだよ、おかげで部活も無しだしさ。」

次の大会まで腕を鈍らせるわけにもいかないし」

クラスの男子たちもそのような会話をしていた。

「そう言えば、3人ってどこの部活入ってるの?」

春美は何となく気になったのでそんな話題を出した。

この高校ではどこかの部活に必ず入部しないとイケない。

春美も写真部に所属している。幽霊部員だが。

「私が書道部で、夏芽ちゃんが水泳部、千秋ちゃんが料理部だよ」

「へえ、あれ、うちに水泳部ってあったっけ？」

「プール清掃部の間違いだよ、真冬」

春美の疑問に、夏芽がうんざりしたようにそう訂正した。

他の二人に比べて活発そうな夏芽は、春美の予想通り運動部のようなだった。

「えーと、じゃあ、あの人は？」

真冬が恐る恐るそう口にした。

あの人が誰なのか、春美にとっては尋ねるまでもなかった。

「勿論、美術部」

「私、幽霊部員だけど写真部だからさ。」

文化祭の写真展にこの写真を展示したの」

昼休み、春美はスマホのアルバムを開いてその写真をみんなに見せた。

「へえ、よく撮れてるね」

「モデルが良いからね」

千秋の称賛の言葉に彼女は謙遜してそう言った。

彼女のスマホには、油絵を描いている魔女の後姿が夕日に照らされている様子が写し

取られていた。

春美はその画像を宝物のように見ていた。

§ § §

放課後、部活に顔を出した真冬は廊下を歩いていった。

他の三人にも言えることだが、彼女は部活にあまり力を入れて活動してはいなかった。

この学校は部活動への入部が強制の為か、文化部は活動したいときに活動すると言った姿勢に寛容だった。

そんな彼女だったが、入部している手前新学期活動初日ぐらいは真面目に部活動に参加した。

真冬は他の三人と一緒に、角の立たない言動を選ぶようにする傾向にあった。

多少礼儀を欠いても平気な間柄であろうとも、周囲との同調を重視する。

だからいつもより多少早めの部活動の終わりだったが、最後まで部活に参加していた。

「あ、プリント机に入れたままだった」

彼女がカバンの中身を確認していると、今日配られたはずのプリントを教室に忘れて

いたことに気付いた。

五時を回った学校は静寂に満ちていた。

もうすぐ日が落ちるといふ事実には急かされるように、教室の自分の机から忘れ物を取り出す。

教室の扉を閉めて廊下に出た時、どこからか話し声が聞こえた。

「……幽霊じゃ、ないよね？」

お約束、と言うべきか、この高校にも七不思議というが存在した。

その一つが、無人の教室から話し声が聞こえるという物だった。

真冬は人一倍怖がりな癖に、幽霊の不在証明の為にこつそりと声のする方向を覗き込もうとした。

すると、話し声は教室とは関係の無い、昼間でも殆ど人の使わない階段から聞こえていた。

それは男女の言い争いだった。

何だ痴情のもつれか、とホツとしたのもつかの間。

ぴたりと言ひ争う声が消えてしまった。

もう帰ったのかな、と疑問に思つて廊下の角から奥を覗いてみた。

そこには、女子生徒に抱き着かれた男子生徒の姿があった。

そして、真冬と、男子生徒の目が合った。

真冬は気まぎれなうって、御馳走様でした、と内心お邪魔したことを詫びてその場から駆け足で退散した。

〃〃〃

〃〃〃

〃〃〃

「そう言えばさ、聞いたー?」

翌日、夏芽はにんまりと笑って机を囲むほか三人に言った。

「聞いたって、何が?」

お弁当のグリーンピースと格闘している千秋を横目で見ている春美が尋ねた。

「陸上の早坂先輩って知ってる?」

「あー、去年の全校集会で表彰されてた?」

「そうそう」

春美の答えに満足したように夏芽は頷く。

「何と!! あの先輩に告白をかました輩がまた現れたのだ!!」

「ふーん。どうせフラれたんでしよう」

「ところが!! どういう訳だか、先輩ってばオーケーしちゃったって噂なんだよ!!」
「へー」

他人の恋愛事情なんてまったく興味のない様子の春美は、昼食のコツペパンを齧りながら相槌を打った。

「ノリが悪いなあ、早坂先輩ってもう何人も告白を断ってるって有名なんだよ?」

「うちの学校にもそんな人物が居るってことに驚きだわ」

「で、誰なの? 先輩にコクったって人」

グリーンピースとの戦いを制した千秋が興味深そうに尋ねた。

「それがさー、今年入ったばかりの一年なんだって」

「マジで? 年下が趣味だったの?」

「年下って、ほとんど変わらないじゃない」

驚きを隠せない様子の千秋に、春美は呆れたようにそう言った。

「真冬はどう思う?」

「えッ、なに?」

「どうしたのさ、だんまりしちゃって」

「(ぎ)めん……」

話を振られた真冬は、言葉に詰まってしまつて思わず謝つてしまつた。

「もしかしたら私、その告白みちやつたかもしれない……」

「ええ!?! それマジ?」

「うん、その誰も使わない階段で抱き合つてた」

「マジでマジで? どんな感じだったの?」

「やたらと食いつきの良い夏芽に若干うんざりしながらも、真冬はわからないと答えた。」

「えー、分からないってなんなのさ」

「本当にわからないの。何だか言い争っているようにも聞こえたし」

「はあ? じゃあ真冬が見たのは見間違ひじゃないの?」

「かなあ。でも、女の人は抱き着いてたし」

「じゃあ、顔は見たの?」

「どつちも見えない。男の子の方は女子の顔で半分隠れてたし」

真冬は昨日のことを思い出しながら答えた。

あの時は本当に、目だけが合ったのだ。より正確には、片目だけだが。

「真冬が見たのつて、もしかしたらうちの学校の七不思議か何かなんじゃない?」

「えー、去年の学内新聞で七不思議についてやってたけど、そう言うのは無かつたよ」

「そもそも、今時七不思議って……」

ついには夏芽は真冬の日撃情報に懐疑的になり、千秋も春美もそんなことを言う始末。

「やっぱり、幽霊か何かだったらやだなあ」

魔法使いやら何やらの実在が当たり前になったこの時代、幽霊や妖怪と言った怪異が実在しても可笑しくは無いのだから。

昔から少しばかり信心深かった真冬は、内心少し涙目だった。

そして、その日の放課後。

真冬は今日も部室に来ていた。

新入生がどこに部活に入部するかを目安にする為、各部活動のオリエンテーションをするのだが、彼女はそれが終わるまで手伝ってほしいと先輩に頼まれてしまったのだ。

内心、どうせそんなのは先生たちにオリエンテーションをしました、というポーズをするだけのものと分かっていたが、真冬は断れなかった。

どこの部活動に入部するかなんて、最初から決まっている生徒はわざわざ説明されるまでも無いし、それ以外は適当なのだから。

そんなわけで、新入生に見せる作品の選別を手伝い、真面目に活動している一部の生

徒の実績などを紹介する段取りを決めて、その日の真冬の仕事は終わった。

「あの……」

彼女が部室から出て一人廊下を歩いていると、突然声を掛けられた。

「あなたは……昨日の？」

その人物が誰なのか、真冬は直感ですぐに分かった。

昨日、女子生徒に抱き着かれていた男子生徒だった。

「ああ、よかった、一瞬だったから、自信がなかったんだ」

彼は何やら、ホツとしたようにそう言った。

「ええと、あなたですよ、昨日の……あれを見たの」

「ああー。ごめん、そのつもりはなかったんだけど」

男子生徒の顔は強張っていた。真冬はバツの悪そうにそう答えたその瞬間だった。

「ツ、ごめん!!」

彼が手に握りしめていたスマホを向け、画面を指でタップしたのだ。

かしやり。

「えッ」

頭痛。何が起こったのか、真冬は理解できなかつた。

吐き気。焦点が合わず、足元が不確かになった。

直後、パリン、と廊下の窓ガラスが割れ、黒い何かが飛び込んできた。

「うわあ!?!」なんだ、こいつ!?!」

目が白黒していた男子生徒は、突如として現れたその奇襲に対応できなかつた。持っていたスマホを、襲撃者に奪われてしまった。

「大丈夫?」

「……………え?」

頭痛と吐き気に襲われ、蹲っていた真冬は顔を上げる。

そこには、整った人形のような魔女の顔があつた。

その彼女が片腕を横に広げると、ばさばさと黒い襲撃者が鷹のようにその腕に降り立った。

それは、大きな鴉だつた。

「ありがとう」

彼女は彼が唾えているスマホを受け取ると、その鴉の頭を撫でた。

そして、彼は割れた窓から外へと飛び去って行つた。

「起きられる?」 とりあえず、保健室に行きましよう?」

「は、はい…………」

真冬はただ頷くことしかできなかった。

「あなたも、良いわね？」

スマホを奪い取られた男子生徒も、こくりと頷くことしかできなかった。

§ § §

「催眠アプリ、ねえ」

そんなものが実在すると聞いた時、真冬は頬が引きつるのを抑えきれなかった。

いつからこの世界はエロゲーやエロ同人みたいな代物が蔓延るようになったのか、と。

この高校に住まう魔女は、男子生徒のスマホにインストールされた件のアプリを弄っていた。

「ごめんなさい、本当にこれが効果があるなんて知らなかったんです」

「でしようね」

いつの間にかスマホにインストールされていた、と証言する男子生徒の言葉を、彼女は否定するでもなく頷いた。

「じゃあ、どうして早坂先輩にそれを使ったの？」

「それは……その……」

保健室のベッドに座る真冬が咎めるようにそう言うと、彼は口ごもった。

そして彼はぼつりぼつりと話し始めた。

友達同士の罰ゲームで先輩に告白することになったということ。

たまたま陸上で成績不振気味だった彼女の虫の居所が悪く、激怒させてしまったということ。

そして散々なことを言われて打ちのめされた彼は、とっさにこのアプリのことを思い出したという。

「私に使うとしたのは？」

「それは……僕がこれを先輩に使ったところを見たのかと思つて、忘れてもらおうつて二の句を継げないとはこのことだと、真冬は思った。

自分はその肝心な場面を見ていなかったと言うのに。

「危ないところだったわね」

と、言うのは自分に向けてアプリを試したりしている魔女だった。

その言葉は真冬では無く、男子生徒に向けられていた。

「これ、使用者から強引に魔力を奪い取る仕組みよ。」

調子に乗つて乱用していたら、ミイラみたいに干からびていたわ」

その言葉に、さしもの男子生徒も青ざめて身を竦ませた。
はあ、と魔女はため息を吐いた。

「最近、こう言った科学技術を装った魔術の産物をよく見かけるわね。

これも時代かしら。先輩の処置は私がしておくから、これは今すぐ消しなさい」

「……はい」

男子生徒は二人が見ている目の前で、催眠アプリをアンインストールした。

「ところで」

これにてこの小さな異変が終わったと思いきや、彼女は真冬に顔を向けた。

「あなた、この催眠アプリの効果を一瞬抵抗したように見えたけど、どこかで魔術の心得でもっ？」

「あ、もしかしたら、これかも」

真冬は自分のスマホのストラップに付けているアクセサリーを示した。

「これ、魔術師さんの動画で作り方を見て、作ってみました」

「ふーん、かなり簡略化されてるけど、ルーン文字の護符なのね。

いい出来だわ、こんなのも当たり前前に作れるようになってるなんて、これも時代かしら」

何て事を言いながら、彼女は保健室のドアを開けた。

「それじゃあね」

そう言つて、彼女はこちらを流し見て去つて行つた。

その日、家に帰つた真冬はパソコンを立ち上げ、いつも見ている某動画サイトにアクセスする。

そこでは今日も魔術師が自身のチャンネルで生放送をしていた。

これはあんまり他の幼馴染二人にも言つていなかったが、真冬は少々オタク気質でサブカルチャーに興味がある少女だった。

酷い目に遭いかけたが、彼女の心臓は非日常に遭遇したことで早打つていた。

そして彼女は、『動画の護符効果がありました、ありがとうございます』とお礼のコメントを打つて、その日は眠つた。

「催眠アプリい!？」

翌日、真冬が昨日のことを話題にあげると、夏芽が疑わしそうにそう言つた。

「ホントだつて、魔女さんにお世話になつたし」

「マジかよ……怖ッ」

そんなものが無作為にばら撒かれているという事実には彼女も顔を顰めた。

「でも、夏芽には必要だったんじゃない？」

「え？」

「だって、それがあれば真面目に勉強する気にもなるでしょう？」

「こんにやろー!!」

痛いところを突かれた彼女は、おかしそうに笑う千秋に逆上した。

真冬は自然と春美と目が合うと、揃って苦笑をするのだった。

死化粧について

「千秋、おかずくれー」

「はいはい、どうぞ」

昼休み、いつものように机を囲んでいる四人。

千秋が自分のお弁当のおかずを夏芽に分け与えていた。

「ありがとう、もぐもぐ」

彼女は千秋から煮物を食べさせてもらうと、その味が消えないうちに自分で握ってきただろう不格好な握り飯をバクバクと食べ始めた。

「助かる、今日はおにぎりに具を詰める時間もなくてさ」

「もつと早く起きればいいじゃない」

ジャム入りコッペパンを牛乳で流し込む春美がそう言った。

それが出来れば苦労はしない、と夏芽は首を振ったが。

「そう言えば最近、煮物ばかりだな。美味しいからいいけど」

「ふふ、田舎っぼいって言われなくてよかった」

「言わない言わない、もう一個くれ」

「いっよ」

千秋は里芋の煮物を口を開ける夏芽に放り込んだ。

「うまうま……」

「すごいよね、千秋ちゃん。毎日自分のお弁当作ってくるなんて」

この四人の中で最も女子力の高い千秋に、真冬はどこか羨望の眼差しを向けていた。

「流石料理部だね」

「私なんてまだまだだよ、お母さんの方がずっと上手いし」

率直に褒める春美に、千秋は謙遜してみせた。

そのように日常を謳歌している四人の一寸先は闇とでも言うように、非日常の影は間近にあった。

「なあなあ見て見ろよ、これ、今朝もテレビでニュースになってたぜ!!」

やや興奮した様子でクラスメイトの男子が、友人たちと一緒にスマホで動画を見ている。

「なにあれ？ 何かあったの？」

「たぶん、このことじゃないかな、SNSで今めっちゃ話題になってるよ」

真冬は自分のスマホを取り出して画面を皆に見せた。

画面には無料ニュースアプリが開かれており、一番上の見出しにはこう書かれてい

た。

『稀代のロックスター、葬儀中にまさかの復活!?!』

「これって、たまたま死んでなくて息を吹き返したとかじゃなく?」

「違うみたい。世代じゃないから名前ぐらいしか知らないけど、この人有名なロックスターみたいでさ。」

葬式にテレビカメラが入ってたらしいんだけど、その目の前で棺から起き上がったんだって。

そして一緒に棺に入れられてたギターで一曲披露した後、遺言を述べてから動かなくなっちゃって」

「……ロックだなあ」

真冬がニュースの内容を掻い摘んで伝えると、夏芽はぼんやりとそう言った。

最後の最期に伝説を残したロックスターに呆れているのかもしれない。

春美もスマホで件の事件を探してみると、検索するまでも無くプラウザのニュースで取り上げられていた。

ロックスターの遺言の内容や、いったいどんな魔法が使われたのか、とか論議が交わ

されていた。

死体の復活は当然賛否両論のようだったが、多くの情報の中に共通した単語が存在していた。

ロックスターが復活した場で述べた遺言の最後に、ある人物に報酬を支払えとあった。

どんな魔法かという論議が成されている掲示板でも、その人物の正体についてこう考察されていた。

その人物の呼び名は『化粧屋』。

——遺体に異端の死化粧を施すネクロマンサー、死霊術師だと。

§ § §

千秋はこれからは『化粧屋』詐欺が流行るだろうな、と思っていた。
死者との対面は多くの人間が望むものだ。

キリスト教では神の御業であるし、古代エジプトでも死後に復活する肉体が残されたまま埋葬される。

あのようなパフォーマンスみたいな真似をしたのだから、きっとあの『化粧屋』を騙

る者が死者を蘇らせてあげましょう、と持ちかけるのだろうと。

「昨今、魔法の道具詐欺が猛威を振るっているらしいし。

だからこれも、きっとその詐欺なのだ。」

「や、待った？」

放課後の待ち合わせ場所のカフェに現れたのは、少々パンクなファッションの若い女性だった。

サンングラスに皮製の服装、動物の毛並みのような髪型。

死霊魔術を生業にしている人物にはとても思えなかった。

「このチラシ、本当なんですか？」

千秋はポストに入っていた簡素なカードを見せた。

『死者の降霊・蘇生、請け負います。』

遺体は遺灰だけでもOK!!

金庫の番号や遺言までも何でも聞き出せます!!

報酬は要相談 化粧屋 X—○○○—▽△▽△』

「当然。これは身内の葬儀が近くにあった家だけに送っているからね。

他には恋人とか、親しい友人とか、未練を抱えて死んだ人って私には見えるから」

「……………」

化粧屋はサングラスの奥はどこか落ち窪んだ深淵に繋がっているように千秋には見えた。

「証拠を見せてください」

「うん、いいよ。おいで」

化粧屋はそう言つて踵を返し、千秋は彼女について行つた。

……千秋には、彼女の家族には先月に死者が出た。

それは彼女の祖母で、病気とかではなく寿命だった。

数年前から認知症を患つて、両親はその介護に四苦八苦していた。

幼い頃、千秋の記憶にある祖母は優しく穏やかだった。

いつか千秋の晴れ姿を見たいとか、口癖のように言つて彼女を可愛がっていた。

だがその記憶は、すぐに厳しい介護の記憶に塗り替えられる。

自分のことを忘れ、介護には抵抗し、目を離せばいつの間にか外を徘徊していた。

ベッドに寝た切りになつてからは、両親に罵倒を投げかけるなんて毎日だった。

子供に過ぎなかつた千秋にとって、祖母の存在は苦痛で、家族の重荷でしかなかつた。

料理を覚えて自分で弁当を作つていくのも、両親に負担を掛けない為だった。

そして、先月祖母が亡くなつた。

葬式で涙は出なかった。

化粧屋は千秋の通学路にある道路脇に退かされている猫の死体を抱き上げた。

その猫は今朝、もう既に亡くなっているのを千秋は見ていた。

猫とはいえ直視しがたいその姿を手に、化粧屋はすぐそばにある公園へと歩いて行った。

猫をテーブルに置くと、彼女は始めた。

異端なる死化粧を。

それは人形の修復のような光景だった。

車に轢かれた衝撃で潰れた内臓を体内に押し込み、脱脂綿を詰め込み、ゼリー状の何かを注入して膨らみを持たせた。

丁寧に傷口を縫合し、血で汚れた毛を水場で洗う。

その後、いくつもの薬品を使って外見を整えた。

猫の死体は、一時間も掛からずに死体であったとわからないほどに復元されていた。

そしてこの一般的な死化粧の過程に（勿論千秋が一般的かどうかなどわかるわけがない）魔法の類が使われていたのか、千秋には判別できなかった。

「よし、ほら、飼い主の元に戻っておいで」

そして驚くべきことに、或いはおぞましいことに、全ての作業を終えた途端、猫の死体が動き出したのだ。

きよろきよろと周囲の様子を窺い、足取り軽くジャンプしてどこかに去って行った。

「これでどう?」

顔だけ振り返って尋ねる化粧屋に、千秋は頷くことしかできなかつた。

「あの、化粧屋さん。報酬のことなんですけれど」

さて、目の前の人物がホンモノだと分かつた途端、千秋は申し訳なくなつてしまった。なにせ、彼女は相手に支払える金銭などたかが知れているのだから。

「うん? ああ、別にいいよ、お金は。今は懐が温かいしさ」

「えッ? どういうことですか?」

「この稼業、半ば慈善事業みたいなもんなんだ。」

君らにはわからないだろうけど、見え過ぎるつてのは苦痛でね」

化粧屋はずれてもないサングラスの位置を戻してそう答えた。

「だからお金は持つてる人間に、私の懐の寒い時にだけ貰つてる」

そう言つて、彼女は肩を竦め微笑んだ。

§ § §

千秋は仮に死後の祖母に対面できたとして、何を言えば良いのかわからなかった。

それはかつての優しかった頃の祖母に会いたかったからなのか、美化された思い出が本物か確かめたかったのか。

死者と対面し、対話できるという常識ではあり得ない出来事に不安が募るばかりだった。

「よいしょ、つと」

化粧屋は額の汗を拭った。

それとはまた別に、彼女に手伝わされたことにも千秋は不安になった。

彼女はホームセンターで大量の塩を買い込み、台車に入れて墓所に運び込んだ。

その手伝いを千秋はしたのである。

幾ら人気の無い時期だからと言って、大量の塩の袋を運び込むのは人目に憚られた。

「こんなにいっぱいの塩、なんに使うんですか?」

「ん? 君のおばあさんの肉体は火葬されたんだろ?」

代わりの肉体が必要なのだ。これに遺灰と」

化粧屋は千秋の家の墓に収められている骨壺を取り出した。躊躇いも無く墓をあばいたことに面を食らう千秋。

故にどのように言い繕うとも、化粧屋のしていることは外法なのだと思ひ知るのだ。彼女は骨壺に片手をつつまみ、中から遺灰と骨を取り出すと台車に空けられた大量の塩の上に振りまいた。

「〃人体を構成する塩、硫黄、水銀よ。

御魂と精神を此処に降ろし、三位一体となして仮初めの肉体とする〃」

それは、ゲームやアニメのような呪文や詠唱と言うよりは、命令に近い声色だった。

そして、宙を舞う遺灰の残滓が、ヒトの形を取った。

台車の大量の塩が、そのヒト型に沿うように盛り上がっていく。

やがて、人を模した塩の像が独りでに出来上がった。

その人智を超えた現象を目の当たりにした千秋は、目を見開いて絶句した。

『(ハハ)は、どっかだい?』

すると、塩の像が人の言葉を発した。

無機質で、老若男女の判別のできない声音だったが、そこにはたしかに感情があった。

「お、おばあちゃん、なの?」

『その声は、千秋ちゃんなのかい?』

塩の像が首を動かす。ぼろつ、と形作られた塩の一部が地に落ち塵になる。

「あんまり時間は無いからね。終わったら呼んで」

作業を終えた化粧屋は、踵を返して片手を振って千秋の目の届く範囲から消えて行った。

「……おばあちゃん、私のこと、覚える？」

『ええ、覚えているよ。まるで頭の中の霧が無くなってしまったみたいだ』

二人きりになった千秋が尋ねると、塩の像に宿る彼女の祖母は答えた。

『……千秋ちゃん、あなたには迷惑を掛けたわね』

「迷惑って、そんな……」

『こうして彼岸を垣間見るようになって、三途の川の向こうにおじいちゃんを見たよ。』

そして人の肉体は、大きな枷だと悟ったのさ』

その言葉は、まるで悟りを得た仏僧のように穏やかだった。

『娘には、これでよかったのだと伝えておいてほしいの。』

でもひとつ、千秋ちゃんの晴れ姿を見れないことだけが心残りだったの』

「おばあちゃん……」

『ああ、そう言えば、昔約束したねえ。』

千秋ちゃんが大好きだった煮物の作り方、教えてあげよう」
そこまで言った時、塩の像の三分の一は崩れていた。

「覚えてて、くれたんだ……」

千秋はここ最近、子供の頃に食べた煮物の味を再現しようとしていた。
彼女に残された数少ない祖母との思い出だったから。

千秋はカバンからノートとシャーペンを取り出し、祖母の語る煮物のレシピを書きだした。

そのすべてを書き終えた時、塩の像は跡形もなく崩れ去った。

その時初めて、千秋は祖母の死と言う事実には涙を流した。

くくく

くくく

「ふうはあ〜」

墓地の石段に腰かけ、化粧屋は古めかしいパイプに火を入れ、煙を吐いた。

「やあ、久しぶり。……それとも、初めましてかな？」

彼女が夕闇に視線を向けると、そこに明りが灯った。

松明の炎だった。それに照らされるように、学生服と黒いケープの魔女が現れた。

「ここは私のテリトリーよ。」

この辺りの地脈を支配しているのが分からないの？」

「第一声がそれか。まあ、あなたらしいと言えばそうか。」

今日は挨拶に来たんだ。回りくどいのは勘弁してくれよ？」

直接会いに行ったら、攻撃されると思ったからね」

化粧屋はそう言つて肩を竦め、「武装」済みの魔女を見て苦笑した。

「挨拶？ 何が目的？」

「かつての知人に会うのに理由が居るかい？」

せつかく生きやすい時代になったんだ。君がどうしているか気になっていろいろ探し回つてみたんだ」

「……生きやすい時代、ね。」

あなたにとつて日本が生きやすい場所だとは思えないけどね。

この国は火葬が徹底されているわ。どうせならアメリカに居ればいいのに」

「あそこはキリスト教の国じゃないか。」

あそこじゃ、私のアートは理解されない。忌々しい十字架も、この国じゃ意識しなければ視界に映らないし」

日本人のキリスト教徒は僅か1%だと言われている。

死体を弄する死霊術師が過ごすには、確かに良い場所なのかもしれない。

「まあ、ここには十字軍も異端審問官も来ないでしょうけど」

「それにこの国の法は、私たちを罰せないし」

「いや、あなたの場合、普通に死体損壊罪が適用されるんじゃない？」

「え、マジ？」

ぼろり、化粧屋のパイプが地面に落ちた。

「この国の警察も、いろいろと手を打っているようだし、あまり舐めない方が良くわ」

「マジかー、趣味と慈善活動を両立しようとしたんだけどな」

「それにしても、あなたのような変態が慈善活動なんてどういう心境？」

「ああ、それな」

魔女の問いに、化粧屋はパイプを拾い上げてため息を吐いた。

「誰よりも死に近い仕事をしていても、実際にこの目で死後の世界を垣間見るとね。

……多少価値観が変わるってものだよ、君もそうだろう？」

「……私はもう、十分好き勝手に生きているわ」

「そうかい。それはよかったよ」

化粧屋はそれだけ聞き出すと、小さく笑った。

「あなたはこれからどうするの？」

「まあ、ぼちぼち活動しながら、他の知り合いを探してみるよ。」

これ、私の連絡先。そのうち、当時のメンツで昔の同窓会でもしてみようぜ」

「そう」

魔女は素っ気なくそう言つて、踵を返し夕闇に松明の光ごと消えて行つた。

「相変わらず、つれないねえ」

化粧屋は火が消えたパイプの埃を払つて、そろそろ術が切れる頃か、と思ひ起こすの
だった。

§ § §

「千秋、おかずくれー」

「はいはい、どうぞ」

昼休み、いつものように机を囲んでいる四人。

千秋もいつものように夏芽に煮物を分け与えた。

「もぐもぐ。あ、今日のいつもと味付けが違うねえ」

「味付けの違いが分かるほどおかずをたかるな」

春美が軽くチョップを入れると、夏芽はエヘへとはにかんで笑った。

「まだ、このレシピをものにしてないから、まだまだ作ってきてあげるね、夏芽ちゃん」
「お、サンキュー、ありがと千秋、愛してる!!」

「調子いいんだから」

真冬もちやつかりしている夏芽に苦笑していた。

それに釣られて、千秋も笑った。

脳裏には、昨日の祖母の伝言を伝えた母の泣きはらす姿が浮かんでいた。

そして祖母の仏壇にした懺悔も。

千秋の母は祖母の介護に疲れ、やがて手を抜くようになったのだと言う。

そんな母親を父は慰め、千秋も赦した。他でもない祖母がそう言っていたのだから。

当分は、家族の間の空気がぎくしゃくするだろうことは想像がついた。

それでも、千秋はこれでよかったのだと思うことにした。

だってようやく、千秋は祖母の為に泣くことができたのだから、

本質について

「はあ、中間テストとかマジ要らない」

中間テストの最終日、最後の試験が終わると夏芽は机にぐったりしだした。

今日はテストだけなので、彼女の友人たちだけでなくクラスメイトも帰りの準備をしていた。

「早く帰ろうよ、夏芽ちゃん。」

せっかかくテストが終わったんだし、ファーストフードでも行こう」

「うん、そだねー」

真冬に促され、夏芽も友人たちと教室を後にする。

テストが午前中に終わったので、四人は某ファーストフード店でハンバーガーやらフライドポテトやらを摘みながら駄弁っていた。

話題も尽きてそれぞれがスマホに向かい出し、頃合いを見て解散の流れになろうとしていた時だった。

「真冬ー、またストラップ増えた？」

「え？ あ、うん」

唐突に夏芽に話しかけられ、真冬は反射的に頷いた。

彼女の言うとおりで、真冬のスマホのストラップはじやらじやらしていた。

ただ、そのすべてが女子高生らしい可愛い系とかではなく、お守りや動物の牙、文様の刻まれた石といった物ばかりだった。

「これ、魔術師さんの動画見て作れそうなの作ってみたの。

無いよりマシ？ みたいだけど、一応効果あるみたいだし」

「真冬ー、そう言うの私の前に見せないでくれよ」

夏芽は眉を顰めてそうぼやいた。

「ごめん、とバツが悪そうに真冬は眼を逸らした。

「あれ、夏芽ちゃんって今時そういうの信じない性質なの？」

「違う違う」

春美が不思議そうに呟くと、千秋は笑いながら否定した。

「夏芽ってさ、高校入る前は——」

「ちよ、待って千秋!! それはもう言わない約束だろ!!」

「いやだ、言っちゃう!!」

つぶつぶ、だって夏芽って昔は古の魔女の血筋だとか魂を継承しているとか、すごく香

「ばしかったんだから!!」

「やめろー!!」

可笑しそうに幼馴染の黒歴史を暴露する千秋。

夏芽はテーブルに顔を埋めて髪の毛を掻き毟っていた。

「ああ」

まあお年頃だったんだね、と察した春美は傷口に塩を塗ることはしなかった。

「ほら、夏芽ちゃん、髪の毛ぐしゃぐしゃだよ」

見られなかった真冬が櫛を取り出し、沈黙した夏芽の髪を整え始めた。

「とにかく、そう言うのとはとつくに卒業したの!!」

「これ、中学時代の夏芽のキメ顔」

「ぎゃー!?!」

千秋のスマホの画像フォルダには、フツとした感じに笑った夏芽のキメ顔が映っていた。

「ちあきのきちく……」

再び撃沈してしまった夏芽だった。

「ふーん、でも意外。夏芽ちゃんはこのようなのは無縁だと思ってたのに」

「夏芽ちゃん、昔から魔法少女モノのアニメとか大好きだったよね。」

私も一緒によく見てただけで、まさか拗らせちゃうとは……」
「ふふ、そうなんだ」

苦笑する真冬につられ、春美も笑みをこぼした。

「なんなら、あの人に弟子にしてもらったら？」

そしてその春美の言葉に、三人はギョツとした。

「え、魔女さんって弟子とか取ってるの？」

思わず、と言った風に夏芽が尋ねた。

「うん、私、あの人の弟子一号」

にこりと、春美は笑みを浮かべたままそう答えた。

「マジで……じゃあ春美ちゃんも何か魔法使えるの？」

「ううん、まだまだ、全然。ちよつとした道具を作れるくらいだよ」

「そうなんだ、びつくりした」

千秋も真冬も目を真ん丸にして春美を見ていた。

「じゃ、じゃあ……」

ぐくりと唾を呑んで、夏芽が問う。

「惚れ薬とか、作れるの？」

四人の間に、沈黙が落ちた。

「ほ、惚れ薬って、使う相手いないじゃない!!」

「う、うるさいやい!! 別に良いじゃないか、ロマンがあつて!!」

千秋にからかわれ、顔を真っ赤にして夏芽は椅子から立ち上がった。

「……惚れ薬があるかどうかわからないけど、不妊に悩む女性に処方する薬の作り方とか、切り傷に効く傷薬とか、その、び……く……とか」

春美は言葉の最後のあたりがもによもによとしながらそんなことを口にした。

「へ、へえ〜」

「ふ、ふーん」

「そ、そうなんだ」

結局、四人揃って初心な女子高生たちは顔を赤らめて黙り込んでしまった。

§ § §

「ただいま」

夏芽はファーストフード店から解散した後、そのまま幼馴染たちとまつすぐ自宅へ戻った。

そして返ってくるはずのないと分かっていながらもそう呟いた。

玄関から台所に向かうと、テーブルの上にはいつものようにメモが置いてあった。

夕食は冷蔵庫にある、と言った内容を一瞥し、手洗いうがいをして夏芽は自室へと戻った。

ばたん、と他に誰も居ない家に自室の扉が閉まる音がした。

学生鞆を抛り出し、ベッドに倒れ込む。

ごろり、と仰向けになり、ふと、押入れの扉が目に入った。

もそもそとベッドから起き上がると、夏芽は押入れの扉を開けた。

そこには『封印』と書かれたガムテープに封された段ボール箱がうつすらと埃を被っていた。

「あとで捨てよう」

その中には、夏芽の黒歴史が封じられていた。

とはいえ、段ボールのまま地域のごみ収集に出すわけにもいかない。

だが、その中身を取り出してゴミ袋に放り込む作業さえ、億劫だった。

夏芽が黒歴史から、中二病から卒業したのは、ある出来事が原因だった。

それから、夏芽は夢から冷めた。

夏芽の両親は共働きだ。

忙しい仕事で、家に帰ってくる日も少ない。

夕飯が作り置きされている日がマシなくらいだった。

だからもともと彼女が幼い頃は、二人の幼馴染の家にお邪魔することも多かった。

二人の両親は彼女の家庭環境をよく知っていたので、彼女が遊びに来るのを快く受け入れていた。

だが、小学生になった頃には千秋の祖母の介護が必要になり、その邪魔をしない為にもつばら真冬の家に入りに浸るようになった。

真冬は昔からアニメが大好きで、その影響で夏芽も一緒によく見ていた。

お気に入りのアニメは、魔法少女モノ。正義の魔法少女が、悪を倒し弱きを助ける王道の展開だった。

この頃には既に世間には魔法使いやら超能力者が現れ始め、その黎明期に値した。

アレイスター・クロウリーの転生者を自称する複数の人物がアメリカの番組で対決した結果全員偽物と判明したり、サイコキネシスに覚醒したヨーロツパ人が一躍有名人になったりしていた。

この当時の魔法少女モノは、魔法の力に覚醒した少女たちが物理で悪役を殴ったりするものも多かったが、これらのトレンドを取り入れ、魔女っ娘に原点回帰した物も多く出

始めた。

童話のように優しい魔女のおばあさんが現れ、選ばれた少女たちに悪と戦う魔法の力を与えるのだ。

夏芽は熱中したのを覚えている。

毎週日曜日には欠かさず幾つものシリーズを見ていたし、中学生ぐらいになってからだんだん香ばしくもなった。

自分で衣装を作ったり、魔法の杖やとんがり帽子も自作したりもした。

魔法名を考えたりオリジナルの呪文を練習したり、とそんな夏芽を幼馴染二人は生暖かい視線を送って見守っていた。

——そんな彼女の青春が冷めるのは唐突だった。

「え、パパが倒れたってどういうこと？」

それは、彼女の母親からの一本の電話だった。

中学三年生の、冷たい冬の出来事だった。

夏芽は母親からの一報を受け、急いで病院に向かうと、そこには変わり果てた父親の姿があった。

身体に黒い手の刺青のようなものが浮かび上がり、それがまるで首を絞めるかのよう

に彼女の父親を苦しめていた。

呪詛だった。

警察がやってきて、事件性があると断定され、やってきた捜査官が強い恨みを持つ者の呪殺の類だと漏らしているのを夏芽は聞いてしまった。

犯人はすぐに判明したらしい。

彼女の両親に強い恨みを持つ人物が、闇ルートで仕入れたホンモノの呪術の道具を使い、その代償で自らも命を落とした状態で発見されたと言う。

夏芽の母親は、彼女を何度も抱きしめて泣いて謝った。

彼女の両親は弁護士だった。

二人が弁護し無罪にした相手に恨みを持つ者の犯行だった。

色々と複雑な年頃の夏芽には、まったく理解できない所業だった。

なぜ自分の父親が呪い殺されようとしているのか、どうして自分の命を対価に使ってまでそんなことをするのか。

夏芽が病院から帰ったその日に、自分の作った物をすべて段ボールに押し込んだ。

大好きだったそれらが、呪われた道具に見えてしまったのだ。

それでも、それでも今日の今日まで捨てることが出来なかったのは、未練だったのだ。

ろうか。

父親の呪詛を払う為に、彼女の母親が幾人もの呪い師や祈祷師を呼んだらしいことを覚えてる。

その多くが、一目で手遅れだと断じたのも。

そして、そんな連中を恨めしげに見ていた自分の記憶も。

やがて、彼らはあの人に頼むしかないか、と言って誰かを紹介していた。

疑心に満ち溢れていた夏芽は、彼らが詐欺師にしか見えなかった。

どうせ、紹介した人物とやらは自分たちの弱り目に付け込んでお金を絞り取ろうとする気だろうと。

事実、そう言う類の詐欺は近年被害総額数十億円規模になるまでになっていた。

だが、彼女の母親は藁にもすがる思いで、紹介された人物に会ったらしい。

思春期真っ只中で、嫌悪に満ちた対象に会うのも嫌だった夏芽は、結局その相手には会わなかった。

だが後日、あんなに苦しそうに衰弱していた父親は弱弱しげながらも元気そうな姿を見せた。

夏芽は肩透かしを食らったような気分で、怒りと憎しみのやり場を失ったのを覚えて

いる。

結局、夏芽の中に残ったのは青春の己の黒歴史や魔法に対する忌避感だけだった。

「あ、飲み物切れた」

夜の七時、冷蔵庫の作り置きを温めて食べた夏芽は、ジュースを飲むうとしてそれを切らしているのに気付いた。

「買ってくるか」

少々面倒ながらも、彼女は近くのコンビニに買いに行くことにした。

自宅に鍵を掛け、夏芽は通学路の途中にあるコンビニに向かった。

まだ寒さの残る五月上旬の夜風に当たりながら、最寄りのコンビニにたどり着く。

「あ」

「あら、こんばんわ」

コンビニの自動ドアが開くと、忘れられない人物がレジで精算をしていた。

とても同級生とは思えない、黒衣の魔女が微笑んでいた。

「こ、こんばんわ」

この人がコンビニに何の用があるのかと、何を買っているのかを挨拶をする間に盗み見た。

ゲーム課金用のプリペイドカードだった。

「画面の確認ボタンをお願いします。」

はい、合計で二万円になります」

しかも一番高いやつだった。

えええ、と何とも言えない感情に襲われながら、夏芽はコンビニ入り口に立ち尽くす羽目になった。

「星が言っている、今こそ引けと」

買ったその場でポイントカードの番号をスマホに打ち込み、望遠鏡で夜空を見ながら有名ソーシャルゲームのガチャ画面で待機する魔女の姿が自宅付近のコンビニで目撃できるとは、夏芽は思いもよらなかつた。

「あ、あ、ああ!! ああ……」

そして彼女のガチャの結果はあまり振るわないようだった。

「よし、もう一度……」

「いやいや、その辺で止めときましよう」

もう一度一番高いプリペイドカードを手にしようとすると魔女の姿を見て、流石の夏芽も見ていられなくなった。

「そう、そうね、この辺りが止め時よね。」

……次のピックアップアップの時までにラビットフットを大量に作っておきましょうか」

これはだめかもわからんな、と夏芽は目の前のソシヤゲ中毒の魔女を見て思うのだった。

不思議な気分だった。

この超常的な雰囲気を持つ人間が、ガチャで爆死して落ち込んでいる姿を見るだなんて。

「あの……」

「何かしら?」

ガチャで被ったキャラを処理しているらしく、スマホの画面をぼちぼちしている魔女に夏芽は話しかけた。

「魔法使いも、ソシヤゲするんだなって。ちよつと不思議で」

つい、自分の本音を言ってしまった。割と失礼だった。

「私は自分が特別だと思ったことはないわ」

絶え間なくゲームキャラの音声流れるスマホに顔を向けたまま、彼女はそう言った。

「魔法を使える人が特別じゃなかったら、それができない人はみじめじゃないですか」
「価値観の相違ね」

仮にも普遍的な人間である自分からの逸脱を望んだ身であった夏芽がそんな不満を漏らすと、魔女は一言でそれをバツサリと切り捨てた。

「ねえ、あなたは誰かを呪い殺したいと思った時、どうする？」

「え？」

どくん、と夏芽の心臓が脈打った。

「そんなの、やっぱり、呪いのアイテムを見つけてくる、とか？」

「ふふふッ」

笑われた。夏芽の内心が羞恥や理不尽に対する怒りで染まった。

「これを見て」

魔女がスマホのゲームを中断し、とあるニュースの記事を見せた。

「ああ、これって少し前に騒がれてた」

そのニュースの内容は、夏芽にも見覚えがあった。

何年前か前、猟奇的な殺人を犯した犯人の家族が、ネットや社会のバッシングを受けて自殺したと言う事件だった。

「これって、科学技術の呪詛と言えなくないかしら？」

魔術に精通し、それを行使する魔女は皮肉げに笑ってそう言った。

「それは……」

「この時代は科学万能の時代なんて言われていて、誰もが科学技術を信奉しているけど、私に言わせればお笑いだわ。」

このスマホだって、昔の私がマジックアイテムだと言われて渡されたら信じていたわ。

この道具の仕組みを説明できる人間なんてこの世にどれだけいるの？

これと、魔法の何が違うのよ」

その言葉には、そこはかとなく怒気が混じっているように夏芽は思えた。

「昔、私は師に魔導の本質は何かと問われたわ。」

師は言った、魔導の本質は“恐怖”である、と。

信仰、と言い換えても良いわね。要するに、何をしているか、何をなんだかかわからないことよ。

そうすることで、私たちは地位を保てるのだから、そうしろと言う教えね。時代が変わっても、それは変わらないわね。

魔女は携帯会社に代わり、その恩恵を与える代わりに地位を約束される。

私には彼らが理不尽な裁判に掛けられ、火あぶりにされない理由が分からない」

「科学だろうと、魔法だろうと、本質は変わらないってことですか？」

「そうね、さしずめ、携帯料金は代償と言うべきかしら」

上手いこと言ったつもりなのか、くすくすと魔女は笑っていた。

「……ガチャの文化を作った連中も火あぶりされないかしら」

魔女は笑っていた。目は笑っていないかったが。

「……」

夏芽は何かを言おうとして、結局喉元で止まってしまった。

自分が何を言いたかったのか、そうなった時にはもう忘れてしまっていた。

そして結局、ソシャゲ魔女はポイントカードを買いにコンビニの中に戻ってしまった。

「あれ、夏芽ちゃんじゃない。お買い物なの？」

「あ、ママ？ もうお仕事終わったの」

その様子にも何とも言えない気分になっていると、仕事帰りらしい夏芽の母親が偶然通りかかって彼女を発見した。

「うん、今抱えた案件が早く片が付きそうなの。

……あッ、その節はどうも」

すると、夏芽の母親はコンビニから出てきた魔女に会釈をした。

彼女も小さくお辞儀をすると、夜道の中へと去って行った。

「え、ママってあの人と知り合いなの？」

「知り合いも何も、パパを治してくれたのあの人のよ」

「ええ!？」

夏芽は思わず、彼女が消えた夜道を見やる。

夏芽は、世の中は案外狭いと感じつつも、彼女に支払われたと思われる報酬がソシヤゲに消えなかっただろうな、と祈るしかなかった。

墮落について

「……そろそろ時間かな」

春美はSNSでクラスメイトの三人と話しながら時間を潰していた。

時刻は深夜二時。春美は会話を打ち切ると、自室のベッドから降りた。

そしてパジャマを脱いで、下着姿になった。

彼女はドレッサーに化粧道具に混じって置いてある代物を手に取った。

それは、薬局などで貰える水色の蓋の軟膏容器だった。

しかしその中身は市販の塗り薬ではなかった。

春美がその蓋を開けると、中身はでろでろとした名状しがたい粘液が半分ほど入っていた。

その中身の臭いに顔を顰めながらも、彼女はそれを指で掬い身体に塗り始めた。

程なくして、春美の意識が「飛んだ」。

彼女は思った。何度やっても、この感覚は慣れない、と。

地に足が付く感触と共に、春美の意識はストーンと体に落ちてくるような感覚を味わっ

た。

「こんばんわ、春美」

「こんばんわ、師匠」

目の前には、自らが仰ぐ魔導の師がいた。

電車通学をしている春美は、自宅が高校の近くにある魔女の部屋まで直線距離にて実に何十キロも一瞬で移動していた。

様々な説と共に魔女の伝承を彩る秘薬、通称「魔女の軟膏」の効果だった。

「師匠、今日は何を教えてくれるんですか？」

勝手知ったる師匠の部屋にあるクロゼットから、黒いローブを取り出し春美は尋ねた。

残念ながらこの超常の御業は、着ている物までは一緒に飛んではくれないのだ。

「そうね、そろそろあなたも、毒の調査を知っても良いかもしれないわね」

魔女のその言葉を聞いて、春美はついに来たかと心臓が早打った。

自分が教えを乞う魔女術——ウィッチクラフトの特に彼女の流派の真骨頂は、毒薬の調合にあった。

それを極めた彼女は人間の精神を自在に支配し、命までも手のひらと指先一つで遊ぶ。

この魔女に言わせれば、他人を呪術で呪い殺すなどリスクいで婉曲的すぎる、との事だった。

その秘技を、春美はかつて目の当たりにした。

§ § §

ハッキリ言って、春美は生来の根暗だった。

その内心は鬱屈していて、人付き合いを面倒と感じる性質だった。

それと同時に、己の性根を嫌悪し、改善しようと思う程度には社会に溶け込む努力はしようとしていた。

人間は社会的な動物である。

周囲とのコミュニケーションを築き、維持しなければ生きていけない生物だった。

中学時代、彼女はそれを嫌と言うほど理解した。

孤高を気取る女性が持てはやされるのはラノベの中のような幻想だった。

女子グループから爪弾きにされれば、孤高なんて単語は “いけ好かない” に上塗りされる。

だから春美の中学時代はそうして爪弾きにされた女子を見ながら、自分は楽しくも無

い女子グループのひとりとして笑みを張り付けて過ごしていた。

ああはなりたくない、ただその一心で。

しかし因果は巡るのか、ただ単純に順番が回って来ただけなのか、高校に上がったばかりの春美は特に理由も無くクラスのカーストの最下位に叩き落された。

今にして思えば、くだらないことだった。

自分を偽るのも、社会に爪弾きにされることも。

ところで、世間一般に中二病だと呼ばれる物を患ってしまう人たちは、なぜそうなってしまうのだろうか？

春美は思う、それは己が凡庸であることに耐えられないからだ、と。

空想への憧れや、単純に好きだからという理由もあるかもしれない。

だが、彼女の得た答えは己の無力さへの現実逃避だった。

ほんの一端に過ぎないが、超常の知恵に触れてそう思った。

「ああはは、だっさい!!」

ああ、そうだった、これは回想だった。

その日は彼女は女子トイレに押し込まれ、蹴飛ばされて尻餅をついていた。

そのまま屈辱的な姿勢を強いられたりしながら、その姿をスマホで写真に撮られていたりしていた。

その日のうちにその画像はSNSにアップされ、笑いものにされるのだと分かっていた。ながらもどうしようもできなかった。

女子トイレで行われていたことなのだから、当然何も知らない利用者も居た。

だが彼女らは、中で何が行われているのかを一目見ると、何も見なかったふりをして踵を返して去っていく。

少なくとも、彼女らは賢明だった。この様子を誰かに知られたところで、やってくるのは己が次の順番と言うだけ。

だが、この日は不幸なことに、賢明ではない女子が現れた。

……そう、春美をイジメている者達にとって余りにも絶望的な不幸が現れてしまったのである。

「あの、邪魔なのだけけれど」

その女子は迷惑そうに、春美を取り囲んでいる女子生徒たちにそう言った。

「何よ、私たち取り込み中なのよ」

「あつちのトイレを使えばいいでしょ」

この段階で、彼女らは煩わしそうにそう言っただけだった。

「はあ、見苦しいわよ。」

猫だつてネズミを弄ぶ時は己自身でやるわ。

数を揃えないと何もできないのはわかるけど、それが己の格の低さを証明していることになぜ気付かないの？」

それはあくまで彼女らの所業を否定しているのでもなければ、煽っているわけでもなかった。

余りにも純粋に、彼女らを見下していたのだ。なぜ猿以下の下等生物が人間の姿をしているのか、とでも思っているような目だった。

それは、彼女らの癩に障るのは当然のことだった。

きーんこーんかーんこーん。

「ああ、予鈴が鳴っちゃったわ。仕方ないから今は我慢するわ」

そして彼女らが何かを言う前に、その子は去って行った。

春美は彼女らが激怒する声が耳に入らないほど、その子の姿を目に焼き付けていた。

「ちよつとあんた、来なさいよ」

昼休み、春美をいじめていたグループは先ほど女子トイレに入って来た生徒が同級生であるのはわかっていた為、彼女を探し出して教室に入って連れ出しに掛かった。

春美はその様子を、誘蛾灯に誘われる虫のように遠くから見ている。

「あんた、なに馬鹿にしてくれてるわけ？」

「ちよつと調子乗ってんじゃないの？」

「土下座しなさいよ、土下座!!」

彼女は人が全く寄り付かない理科準備室に押し込まれ、いじめグループに囲まれていた。

「私、こういうのはよくないと思うのだけれど」

「ふざけんじゃねえ、謝れよ!! 今すぐだ!!」

「女の子の言葉使いじゃないわね」

そこで、初めていじめグループ側から手が出た。

怒り狂ったグループのリーダーが、平手を打ったのだ。

ぶんツ、となぜかそれは空振りに終わった。

「え?」

その様子を見ていた取り巻き達は目を見開いた。

なぜなら、リーダーの平手が彼女の顔を素通りしたのだから。

「ねえ」

その声は、彼女らの後ろから聞こえた。

彼女らが振り返ったその視線の先には、今まさに取り囲んでいた相手が気だるげに人体模型の心臓を取って手のひらで弄んでいた。

「多少は手加減しようかと思っただけど、気が変わったわ」

ぎゆう、と少女の手が人体模型の心臓を握りしめた。

その瞬間、いじめグループの面々が一齐に顔色を変えた。

彼女らはまるで、自身の心臓を握りしめられたような圧迫感に苦しめられていた。

そして金縛りにあつたように、全身が棒のように動かなくなっていた。

「な、おまえ、なにを」

「あなた、中学の頃も同じようなことをやってるわね。」

小学生の頃に味を占めたのかしら？ ストレス発散？ 弱者をいたぶるのは楽しい？

この時、ようやく彼女らは理解した。

目の前に居るのは、少女の姿をした何かだと。

自分たちは致命的な失敗を犯したのだと。

これは狩りではなく、蹂躪だったのだと!!

「おやすみ」

春美は、彼女たちが人として終わる瞬間を理科準備室の扉の隙間からジッと見てい

た。

それ以来、いじめグループは二度と登校することは無かった。

——この学校には魔女が入学した。そんな噂が学年中に、学校に知れ渡るのはすぐのことだった。

彼女たちが直前に誰を連れ出したのか、多くの人たちが見ていたのだから。

「あの……ありがとうございます」

春美は、学校の昼休みの時間に屋上で鴉と戯れている彼女にお礼を言いに来た。

「私は別にお礼を言われることをしたつもりはないわ。」

集団で誰かを辱める連中が心底嫌いなだけ」

普通なら触ることが出来ても触ろうとは思わない大きな鴉の毛並みを撫でながら、
魔女は言った。

「むしろ、私は良い薬を処方した気にいるわ。」

だつてもう、二度とストレスに悩まされることはないんだもの」

「……………」

噂では、あの連中の末路がどうなったかという話が幾つも流れていた。

どれも筆舌しがたい、聞くにも耐えない有様だった。

春美は、それを知って、身体が、魂が震えるような感覚だった。少なくとも、その感覚は。

「あの!! お願ひします、私を弟子にしてください!!」

自分も、彼女に毒されたのだと言うことだった。

§ § §

春美の師事する彼女は、生まれ変わる前からどちらかと言うと異端だったらしい。

彼女の前世が生きていた時代にも、魔法の定義は難しかった。

地域や土着の信仰によって、さまざまな形があったからだ。

その中でも彼女は、キリスト教が異端視する今でも伝わる典型的な魔法の概念の塊のような存在だったらしい。

そんな生きざまを貫いたのは、当時の風潮が気に入らなかつたからだと言う。

似たような考えを持つ同業者とつるんで、ヨーロッパ各地を渡り歩いたようだ。

春美はきつと、そんな社会に迎合しない生き方に心を奪われたのかもしれない。

それは、この問いの答えを聞いた後も考えは変わらなかつた。

「師匠はどうして、素直に学校に通っているんですか？」

師匠の魔術の腕なら、今の時代何をしても平気でしよう？」

「あなたも、あと十年も生きればわかるわ。」

人間ってただ生きるだけで存外に恨みを買うのよ。

それに、証拠も無いのに殺しに来る連中に何十年も追われ続ければ、いい加減嫌気が差すものだわ」

要するに、師匠は丸くなったんだな、と春美は解釈した。

「私はあなたに伝授した技術を何に使おうとも口を挟まないわ。」

その代り、責任も持つつもりもない。好きに生きて、勝手に死になさい」
「それは分かっています」

別に春美も、誰かに師匠から得た技術を見せびらかすつもりはなかった。

ただ、もう二度と面白くも無いのに笑顔を張り付けて無理矢理居場所を作ったり、いつ自分に順番が回ってくるか怯えるような人生は嫌なだけだった。

そして出来れば、師のそばで助手にでもしてもらえればそれでいいとも思っていた。
春美は、生粋の根暗だったのだから。高望みなどしなかった。

「これが何か、教えたわよね？」

春美が回想に耽っていると、彼女の師はとある植物を目の前に差し出した。

日本でも毒草として有名な代物だった。

「トリカブト……」

「そう、我が神の象徴の一つね。」

今日はこれの見分け方と、薬用の為の処理の方法、そして魔術の触媒としての使用方法を教えるわ」

「触媒としては、つまり」

「有り体に言えば人の殺し方よ。もつと言えば、服毒させずに毒殺する方法ね」

そんな矛盾に満ちたことが可能なのか、春美は問わなかった。

それが、現代には伝わっていない失われた魔女の秘術なのだと悟ったからだ。

「使うな、とは言わないけど最終手段にしなさい。」

それに現代ではトリカブトを所持するのはリスクいわね。

使いどころは滅多にないと思うけど、どうして私がこれを魔術として最初に伝授するか分かるわよね？」

「はい、使い方次第では己の命をも簡単に脅かすからです」

「そうよ、私たちの秘術は生かすも殺すも自在だわ。」

だからこそ、半端は許されない。ほんのわずかな調合ミスが、毒の存在を露呈させる」
春美は一字一句聞き逃すまいと、神経を集中して脳内に知識を叩き込む。

それが現代の倫理や道徳からかけ離れた、異端の外法であろうとも。全ては、その技術を継承し、師から認められる為に。

「出来て、しまった……」

魔女の秘術を本格的に学び始めて、数日。

春美はトリカブトの劇毒を抽出し対象に発生させると言う人智を超えた現象を自ら起こしてしまった。

目の前には、その実践のために用意された鶏が息絶えていた。

科学的な検査を行えば、その鶏の死体からトリカブトの毒が検出されることだろう。今さらになって、春美は恐怖した。

これが、中世ヨーロッパの人々が忌避し、恐れた魔女のおぞましい所業なのだと理解したからだ。

小市民の彼女は、こんな技術を持った人間が近くに居るなどと考えたなら、そして自分が疑われると考えると恐ろしくて眠れない。

「その恐怖が、正しい使いどころを見極めさせるわ。」

よくその恐怖を噛み締め、慎重になることを覚えなさい。

恐怖を知り、恐怖を支配するのよ。それが魔導に身を墮とすと言うことよ」

「は、は……」

怯える春美を、彼女の師は抱きしめた。

安心させるように、優しい毒のように。

そんな師弟の秘密の修業が続いたある日。

魔女の軟膏で移動する感覚があんまり好きではない春美は、己の師の家からそのまま帰ることにした。

勿論徒歩では時間が掛かりすぎる為、空飛ぶ箒を作成し、空を飛行し帰ることにした。

「ううう、やっぱりもつと練習しておけばよかった——!!」

竹箒に乗って飛ぶというより、竹箒に抱き着いて飛んでいる春美は、ある意味では魔女の軟膏以上の気持ち悪さを味わいながら夜空を移動していた。

箒で空を飛ぶのは、彼女が学んでいる流派とはまた別で、彼女の師も空を飛ぶのは物理的に目立つので滅多に使用したことが無いと言うことで教える側の技術的な完成度も低かった。

それでも、箒で空を飛ぶのはロマンだった。

春美は己の師匠に頼み込んで、作り方を会得した。

そしてこの有様だった。

「うえー、吐きそう。一回休もう」

空中でへろへろになった春美は、人目に付かないところに降り立った。

考えてみれば竹箒はかさ張るし、目立つので確かに夜ぐらいしか使えない。習得してみても、やっぱり使い勝手が悪かった。これで宅急便とか無理である。

廃れるには廃れる理由があるんだな、と思いながら橋の上から川にげろげろする春美だった。

しばらくして落ち着いた後、もう歩いて帰ろう、そう思った時、彼女は気付いた。

近くの手すりの上に、誰かが立っていた。

どう見ても、川に飛び降り自殺しようとしていた。

「ちよ、ストツプストツプ、危ないですよ!!」

「えッ、きやあ!？」

「あああああ!!」

春美は根が根暗でも、目の前で自殺しようとしている人を見捨てるほど薄情ではなかった。

しかし彼女は間が悪く、間抜けだった。

手すりの上に立っている人間に後ろから急に声を掛けたらどうなるか、誰でもわかる

と言うのに。

彼女が多少冷静だったら、飛び降りに踏ん切りがつかない様子が見て取れたことだろう。

「うぎ、ぐぐぐ」

それでも何とか、腕をつかむことには成功していた。

だが、女子高生の、特に鍛えているわけでも無い女子の腕力など高が知れていた。

「ほ、箒い!!」

ここで運よく、彼女は手に持っていた箒を掲げた。

魔法の箒の何か魔法的でふわっとしたメルヘンな浮力で重力を無視し、人間二人の体は空中へと浮かび上がった。

「はあ、はあ」

「は、は、急に話しかけないでください!!」

「ご、ごめんなさいい」

超常現象が目の前で起こったと言うのに、自殺志願者は恐怖で混乱して命の恩人にそんなことを言う有様である。

そして素直に謝ってしまふあたり、春美もメンタルクソ雑魚だった。

そんな感じでお互いに極限状態を過ぎた後。

「た、助けてくださってありがとうございます」

「ど、どういたしまして……」

これに懲りたら飛び降りなんてやめてほしいところだったが、ここで両者は初めてお互いの顔を見合わせた。

「あれ、もしかして」

「あなたは……」

その自殺志願者は、春美の顔見知りだった。

中学時代、まだ彼女が顔に笑みを張り付けていた頃、身を置いていた女子グループの標的だった女の子だった。

「そう、まだ続いているんだ」

「……うん」

自殺を図った理由は単純だった。

たまたま中学時代の人間関係を引きずったまま、春美とは別の高校に進学してしまった彼女は、いまだ陰湿ないじめに耐えているらしかった。

それも最近になって人数も増え、日に日にエスカレートしていると言う。

それこそ、自殺を図ろうとするくらいには。

「やっぱり、自殺は考え直そうよ」

「……あなたに何が分かるの？ ずっと見ているだけだったあなたに」

少女はぼそりと呟いた言葉に、春美の心に棘が刺さる。

「どうせ、これからずっと酷い目に遭いつづけるんだ。」

ねえ、どうして止めたの？ せっかく決心が付くところだったのに」

それは、八つ当たりに近い言い草だった。

彼女が本当に自殺に踏み切れる確率はかなり低かった。彼女に、そんな度胸があるわけがなかった。

ここで、ふと、春美は当時のいけ好かない連中の顔を思い出した。

不愉快な三年間に付き合わせてくれた、くだらない連中のことを。

「……ねえ」

「ひッ」

深夜の暗闇に浮かぶ春美の表情に、少女は小さく息を漏らした。

「——私と一緒に、あいつらに復讐しない？」

そこには、墮落した魔女の笑みが浮かんでいた。

その笑顔に晒された少女は、こくり、と恐怖のままに頷くことしかできなかつた。

「やれやれ、これは要矯正ね」

ちやんと帰れたか心配になつた黒衣の魔女は、二人の一部始終を水晶玉を通して観察していた。

力を持った人間は、得てしてそれを振るいたがる。

そして、暴力の美酒の味を覚えてしまうのだ。血の味を覚えた獣のように。

とりあえず、彼女は弟子の手際を確認してから、躰に使う薬品を吟味することに決めるのだつた。

異能について

「ねえ、今日のニュース見た？」

「見た見た。うちの近くの高校で集団食中毒だつて話でしょう？」

「怖いよね、原因もすぐに特定できなかったんだつて」

いつもの教室、いつもの幼馴染三人組はいつものように昼休みに昼食時にそんな食欲が失せる話題を上げていた。

「でもこの時期に食中毒つて珍しいよね」

「何はともあれ、うちの高校で起きなくてよかつたよ」

千秋の言葉に、夏芽は苦い表情でそう言った。

「春美ちゃんも、まさか食中毒じゃないよね？」

「まさか、ただの風邪だろう」

心配性の真冬は、ここに居ないもう一人の友達のことを思ったが、夏芽は笑い飛ばした。

実際には、もっと酷かったが。

「あ……あ……あッ」

春美はベッドに横たわっていた。

だがその様子はとも普通ではなかった。

目を見開き瞳孔は開きっぱなし、口元は緩んでおり唾液で汚れていた。

時折、思い出したかのように痙攣し、体温は低く肌は青白かった。

それでいて、意識はハッキリしていた。彼女が痙攣しているのは、自身の身に起きて
いる恐怖に震えているからだだった。

「私は、あなたのすることに口に挟まないとは確かに言ったわ。

でもこれは私の落ち度でもあるわね。だって、私が免許皆伝を与えるまで面倒を見る
つもりだったもの。」

私もそこまで放任主義ではないわ」

春美の魔導の師たる彼女は、別に春美がしたことを怒っているわけではなかった。

ただ、行動を起こすには未熟で、浅はかで、愚かだと言いたかったのだ。

「食中毒に偽装したのは、素直に褒めてあげる。」

でも昔、ペストでやらかした奴が居てね。大変なことになったわ。

そしてあなたは自分の住む国の厚生労働省を甘く見過ぎている。

私が食中毒の発生源を偽造していなければ、今頃魔術テロだと断定されて公安の伝手

で暇な同業者が捜査しに来ていたわ。

あなたは少し、遠い海の向こうでイスラム過激派が異端審問を再開し虐殺が起こったって話を重く受け止めるべきだわ」

「あ……あう……ご、ごべ……ん……な……」

「私の知り合いが今は生きやすい時代だと言ったけど、とんでもない。

私たちよりよほど魔術じみて、そして執念深く厄介な連中が確かにいるのよ。

そう言った心構えを教えるのが遅れたのは、私もこの平和な国に毒されたと思って一緒に反省しましょう」

意外に思われるが、この魔女は饒舌だった。

物静かでミステリアスな雰囲気にして、お喋り好きなのだ。

だからその饒舌さで春美の心を抉るのは酷く惨めで悲しく、涙が出た。

まるで、死が目の前に迫ってくるような感覚。

自身が自分の意志でどうにもならず、他者に命運を握られる悪寒は筆舌にしがたい苦痛と恐怖だった。

「この際だから言っておくけれど、私は貴女のことを可愛い弟子だと思っているわ。

でも私の弟子であることに對する事実と我が秘術と誇りに泥を掛けるのなら——あなたを殺すわ」

それが師匠としての責任だもの、とスマホでゲームのイベント周回をしている魔女は言った。

「はひ、はひ」

「精々肝に銘じなさい。」

私も、あなたも、この世界にとってほんの少しも特別であることなど無いのだと」

こくこく、と必死に頷こうとしている春美を横目で見ながら、彼女はスマホを弄り続けた。

§ § §

「んまあ、私らは特別だからな。頼りなくなっちゃうのも分かるわ」

車の後部座席にふんぞり返っている女に、運転席の男はため息を吐きたくなる衝動に襲われた。

このくたびれた四十代の男は警視庁所属の警察官である。

階級は警部、役職は異能係係長と言う物であった。

異能係は、比較的最近に新設された部署だった。

日本では魔法や超能力を扱う人間を正式には『異能者』と呼称し、彼らの起こす犯罪

などの取り締まり、混乱を収める為に尽力していた。

しかしながら、日本は異能者に対する法案や対応は世界的に後進国だと言わざるを得なかった。

アメリカやイギリスは意の一番に彼らの役職を与え囲い、法律の整備も進みつつある。

それに対して日本は様々な要因で二の足を踏んでいる状態だった。

本来なら二人以上で行動する警察官が部外者と共に行動していることから、異能犯罪に対する人手不足や対応が遅れていることを如実に示されていた。

その理由の大きな部分の一つに、異能犯罪の解決には異能者の協力が必要なことが多かったからである。

だがこの異能者たちが揃いも揃って——特に魔法使いやら魔術師とか呼ばれる連中は——個人主義で、国家や警察に非協力的だった。

公安警察が異能者の把握と勧誘に尽力し、その殆どが袖にされている。

その異能者の能力もピンキリで、殆ど一般人と変わらない者もいる。

世間一般では彼らは全員が超常現象を起こす超人のように取り沙汰されるが、そんな人間はごく少数だった。

そして彼の運転する車の後部座席に座る女は、凄腕で変わり者だった。

『化粧屋』を自称し、その名で公安警察にマークされていた彼女は、どういうわけか最近になって自分の能力を売り込みに来た珍しい人物だった。

そのくせ、自分の手柄は公表しなくていい、あくまで協力者として必要な時に手を貸す、と言った条件を持ちかけ、それを警察上層部に呑ませたらしかった。

公安にマークされるだけあって、彼女は色んな意味で有名だった。

日本の歴史に残るロックスターに最後の伝説を作る手伝いをし、各地で死者を呼び起こし混乱を招き、時には死者による復讐殺人さえもさせた疑いがあった。

当然、公安は彼女の弱みを握ろうとしてその素性を探ろうとしたが、どこの誰かも不明。

彼女の髪の毛などをDNA検査したところ、検査する度に別々の死者のDNAが検査結果として上がるなど、あらゆる意味で常軌を逸していた。

しかしその異常な経歴が、彼女を凄腕足らしめることを示していた。

悲しいことに、異能者たちは凄腕であればあるほど現代の価値観からすれば狂人の類であることが多かった。

彼女もその類に漏れず、死者を冒読することを躊躇わない狂人にして外道だった。

そんな人間と一緒に行動せざるを得ない彼は、時代が変わったことのためにため息を漏らさずにいられなかった。

「ところで、私に頼んでまでつてことは、どっかの同業者の仕業か？」

「上は、あんたをまだ信用しちやいない」

「つはは!! 信用してないか、そりゃあそうか!!」

何が可笑しいのか、彼の言葉に化粧屋は手を叩いて笑った。

「……私を試したいわけか、いいぞ。その方が面白い」

警部の聞いていた通り、化粧屋は常人とは違う思考回路をしているようだった。

「でもまあ、私が出張るつてことは死体が出たんだろう？」

「私に掛ければ死体は生きてる人間より雄弁だ」

「……ああ、その通りだ。」

「判断が難しい案件だと聞いている」

「ふーん」

化粧屋はそれだけ聞くと、現場に着くまで口を開かなかつた。

現場はアパートの二階にある一室だった。

既に鑑識が入っており、中は警察が封鎖していた。

「異能係の伊藤だ」

警部が警察手帳を示すと、警備をしていた捜査官がご苦労様ですと言って二人を通した。

室内に入ると、腐敗臭が二人を向かい入れた。

「この臭い、この時期だと死後五日つてところか」

死臭に顔を顰めている伊藤刑事の横で、化粧屋は飄々とした態度でそう言った。

二人がリビングに入ると、何人もの鑑識や捜査官、そして女性の遺体がテーブルにうつ伏せになって倒れていた。

「あなたは？」

先に現場入りしていた刑事らしい男が、変な組み合わせの二人を見て顔を顰め尋ねた。

「警視庁異能係だ、判断が難しい案件だと聞いて、たまたま近くだったんで応援に来た」

「異能係？ どう見てもこれは異能事件じゃありませんよ？」

露骨に管轄外だろう、と言わんばかりの表情に、伊藤刑事もバツが悪そうだった。

「ははは!! 　　すげえ、ドラマみたいだ!!」

特命係とか居ないの？ 私、めっちゃファンなんだけど」

化粧屋は警察の事件現場に立ち会っているのにこの態度である。

「これが、異能者？」

「悲しいことに、凄腕らしい」

警察官二人は哀愁に満ちた表情で、こんなのを現場に入れないといけない現状を嘆くのだった。

そして、伊藤刑事は女性の遺体の身元を尋ねた。

身元はこのアパートの一室を借りている本人だと間違い無いようだった。

問題は死因である。睡眠薬の大量摂取による自殺という線が濃厚だった。

しかし、被害者はアパートの大家にストーリーカー被害について相談しており、第一発見者もまた大家の女性だった。

前回の相談から数日も音沙汰がなかった被害者を心配し、何度か呼び掛けるも反応は無く、異臭を感じ鍵を開けたら……と言った経緯で事件が発覚した。

「警察に被害届は？」

「一応出していたらしい」

なるほど、難しい案件だと、伊藤刑事は思った。

ストーリーカーを苦に自殺したのか、ストーリーカーに殺されたのかで、世間の警察に対する評価はまるで違う。

もし仮に他殺だとして、ストーリーカーの特定に時間を掛ければ取り逃がす可能性もある。

長期化すればするだけ、不利になる案件だ。

「大家さんの話によると、ストーリーカーは毎日手紙を玄関に投函していたようですね。被害者は証拠の為に保管していたようです」

「指紋は？」

「ありません。文字も手書きではありませんね」

鑑識の言葉に、伊藤刑事も唸る。

普通なら、捜査は自殺と他殺を視野に入れて始まることになる。

だが他殺だった場合、そのストーリーカーが犯人である証拠が見つかる可能性が薄かった。

もう既に鑑識がそれなりの時間入っていて、それらしい物を見つけていないのだから。

「へえ、警察の捜査って面白いんだな」

そして化粧屋は鑑識の作業を興味深そうに見ていた。

「……はあ、化粧屋、あんたには頼りたくはないが、参考までに意見を聞かせてくれ」

「んー、直接犯人を炙り出すのと、彼女に直接聞くの、占いするのとどれが良い？」

化粧屋の言葉に、彼女に尋ねた伊藤刑事だけでなく他の捜査官たちも呆気に取られた。

彼らは昨今増えている異能犯罪に遭遇したことは一度や二度ではないし、捜査の為に魔術的予備知識も多少はあった。

それでも現場で魔術の類を実践しようとする協力者はまず居なかった。

警察にとって協力者はあくまで助言者であり、一足飛びに事件を解決させる人物ではないのだ。

「……遺体に手を加えることは許可できない」

悩んだ末に、伊藤刑事が絞り出した言葉はそれだった。

「オーケー、じゃあ聞いてみてください」

化粧屋は古めかしいパイプを取り出し、何かの粉末を入れて火を入れた。

「おい、こんなところでタバコなんて!!」

捜査官が彼女の行動に怒りを示そうとするのを、伊藤刑事は手を伸ばし止めた。

「ふう……………えッ」

化粧屋の、雰囲気が変わった。

ぼとり、とパイプが床に落ちた。

「え、嘘、なんで、私、私、死んでる!?! 嘘、いや、いやあああ!!」

彼女はまるで別人のように豹変し、取り乱し、叫び始めた。

「取り押さえろ、手伝ってくれ!!」

そんな彼女を、伊藤刑事が捜査官たちに呼び掛け、手足を押さえつける。彼らも現場を荒らされては堪らないと、必死だ。

「落ち着いてくれ、私たちは警察だ!!」

あなたを殺した人間を追っている!! 犯人を君は見たのか!?

「違う違う違う!! 私まだ死にたくない!!」

まだいっばいやりたいことあるのに!! どうして、どうして死ななきゃならないの!!

「教えてくれ、頼む!! 君は殺されたのか!!」

「どうして、どうしてなの!! 信じてたのに、嘘つき嘘つき嘘つき!!」

そして、化粧屋は憎悪に満ちた表情で叫んだ。

第一発見者である、大家の女性の名前を。

事件は、程なくして解決した。

豹変した化粧屋を拘束し、犯人に離れたところから引き合わせたところ、恐怖のあまりに自供したのである。

「第一発見者が犯人なんて、ありきたりな結末だなあ」

事件の結末を知った化粧屋は、つまらなそうにそう言った。

犯人の動機を聞いても、ふーん、の一言だ。

「それにしても、私に死体を弄らせなかったのは正解だったな。

あの様子なら、きっと犯人をぶっ殺してた」

「そして俺の首も繋がったわけだ」

もしそんなことを許していれば、伊藤刑事とてどんな処罰を下るか分からないところだった。

ちなみに、二人はファミレスで食事中だった。

この食事代が、今回の報酬で構わないのだと彼女は言う。

警察の謝礼ではなく、伊藤刑事が奢る羽目になっていた。

「なあ、なぜ死者を冒読するような真似をするんだ？」

「うん？」

「あんたの腕ならそんなことしなくたって……」

そこまで言つて、伊藤刑事は言葉に詰まった。

「そんなことしなくたって、なんだ？」

そんなことしなくたって正しい使い方を出来るだろう、とかか？

おいおいおいおい、あんたの仕事は生者を冒読する輩をとつ捕まえることだろう？

それに私が正しさなんてあやふやな物の為に警察に力を貸したとでも？」

化粧屋はサングラスの奥の目を細めながら笑い飛ばした。

「では、なぜなんだ？」

「言っただろう、ファンなんだよ。刑事ドラマの。」

何ならシーズンごとの名場面について語ってやろうか？」

「……………」

化粧屋はそんな冗談みたいなことを言い終わるとハンバーグを切り分ける作業に徹し始め、伊藤刑事も黙り込んだ。

そして、ため息を吐いた。

何となく、この変人にこれからも関わらざるをえないという予感を抱きながら。

学級について

「そうですか、分かりました。

何かあったら相談に乗りますので、ご連絡ください」

バタン、と音を立てて一軒家の玄関のドアが閉められる。

まるで何も期待していないことを語るように。

「……はあ、本当に相談されても困るけど」

そうぼやいて、彼女は家の敷地から出て行った。

後ろから聞こえる、動物の喚き声のような奇声を無視しながら。

「教師になって、ならなければよかったかなあ」

後悔と共に、彼女は夕闇の夜道を歩いて行った。

彼女の不幸は、新任当初から始まった。

新人研修を終え、新しく赴任した高校でベテランの先輩教師と一緒にクラスを任せられることになった。

その若さからやる気に満ち溢れていた彼女は、早々に現実を突き付けられた。

イジメだった。

数人の女子グループが一人の女子生徒をいじめている。

今時、珍しくも無いことだった。

「知らなかったってことにしておけ」

担任だったベテランの先輩教師は若い彼女にそう一言だけ漏らした。

その先輩教師は、もう既に責任を取らされ転任している。

なぜそんなことになったのか、彼女にもよくわからない。

ある日突然、いじめを行っていた女子グループが一斉に登校拒否になり、彼女らの親たちに学校へ事情の説明を連日求められた結果だった。

当時対応することになった先輩教師と彼女は、彼女らに会いに行つて絶句した。

一人は極端な躁鬱状態を繰り返し、一人は妄想の世界から帰つてこない。

そしていじめのリーダーだった女子生徒は、ケダモノそのもののような振る舞いを続けた。

先輩教師が心を病み休職状態になり、復職と同時に転任になったのは学校の責任逃れだけではなかったのだろう。

結果として新任だった副担任の彼女がクラスをそのまま引き継ぐことになった。

誰も、彼女のクラスの担任をやりがらなかったからだ。

あのクラスは呪われている。

そう、教師の間で囁かれるようになったからだ。

当然だが、学校はこのことを公表などはしていない。正体不明の奇病だとして、当校は関係ないという姿勢を貫いている。

だが、このことが表沙汰になればクラスどころか学校そのものが呪われていると評判が付きかねない。

それのどこが間違いなんだ、と彼女は内心思っていた。

それから毎週、彼女は元いじめグループの女子たちの家に訪問するようになった。

一年もそうしている内に、一人、一人とこの土地から逃れるように引越し、学校を辞めて行った。

そして今ではリーダー格の一人が残るのみだった。

彼女の『奇病』の改善の見通しはない。

「近年、生徒たちの間でお呪いの類が流行っているそうです」

朝の職員会議で、初老の教頭が教師たちにそう告げた。

「コックリさんなどが私の若い頃にも流行しましたが、教育委員会から通達があるほど全国的に流行し、稀に参加した生徒が異常に見舞われたと報告があったそうです」

話半分に聞いている教師は居なかった。

だが、この手の話題はこの高校ではタブーに近かった。

昨今、魔法使いやら超能力者やらの異能を持つ人間が現れたことは周知の事実だった。

今やオカルトと現実の境は曖昧と言えた。

だからこそ、子供たちは好奇心とスリルを求めて火遊びを行うのだろう。

或いは、自らも異能者の仲間入りできると考えているのかもしれない。

異能者たちの扱う魔法や魔術は、一部は素人でも再現可能な異常現象を引き起こすものが存在しているという。

その事實は、非現実には飢えた子供たちにとっては甘い毒だった。

「くれぐれも、生徒たちがそのようなことをしないように指導してください。」

それから、放課後の校内の巡回をするようにしましょう」

彼はそのように教師たちに言い含めた。

「教頭先生、一つ宜しいでしょうか」

「……なんですか、早瀬先生」

教頭は若干引きつった声音で、若い女教師に尋ねた。

「もし、例の『あの子』が学校でお呪いをしていたらどうすればいいですか？」

「……指導しなさい。当校の生徒に違いは無いのですから」
「わかりました」

彼女は教頭の言葉に静かに頷いた。

数年前、超能力高校生が現れテレビで一世風靡した。

異能者は世代を問わず現れている。

そして、彼らの勤めるこの高校にもホンモノとされる人物が存在していた。

教師たちがその「例の生徒」の異能を直接見たわけではない。

だが、その生徒のクラスの授業を受け持った教師は口を揃えてこう言った。

とても十六歳には思えない、と。

成績はそれなりに優秀、授業態度や出席に関して問題も無い。

腫物のように扱う要素はどこにもないはずだった。

最後に彼女と接触したいじめグループの女子たちが、見るも無残な有様にならなければ。
ば。

恐ろしくて、誰も彼女にそれをやったのか尋ねる者は居なかった。

女教師の早瀬は自分が周囲に気を使われていることぐらい理解していた。

しかしそれは正の方向ではなく、負の方向だった。

誰だつて、自分の代わりに変わり果てた生徒の家庭訪問などしたくはない。

そして彼女は魔女に差し出す生け贄か何かのように、例の生徒の担任になった。

「最近、他の学校ではお呪いの類が流行っているようです」

彼女が受け持つことになった二年生のクラスの朝のホームルームで、生徒たちにそう告げる。

その瞬間、それまで若い先生と言うことで舐められ騒がしかった彼女のホームルームが、初めてびたりと静かになった。

生徒たちも言われずとも知っていた。

このクラスの一番外の窓際の席に座る女の子が、この学校のタブーであることを。

「皆はくれぐれも真似しないでくださいね」

しん、と静かになった教室に、彼女の言葉だけが落ちて行った。

§ § §

「先生」

朝のホームルームが終わり、受け持つ教科の授業の準備をしに行こうとした時、彼女は驚いて心臓が止まるような錯覚に陥った。

件の生徒に話しかけられたのだ。一切の気配がなく。

「な、なに?」

生徒たちから目が死んでるから「メガシン」なんてあだ名を付けられている彼女の瞳に恐怖の色が乗った。

お呪いなんてするな、なんて言ったから癩に障ったのかと考えていると。

「昨日、書道部の部室の近くの廊下のガラスを間違えて割ってしまったんです。ごめんなさい」

すつと綺麗なお辞儀をして、そのように謝ったのである。

「あ、ああ!! あれね、そう言えばそんなことがあったって言ってたような」

「弁償した方がいいでしょう?」

「う、ううん。学校の備品だし、わざとじゃないみたいだから、先生の方から言っておきますね」

「そうですか、よかったです。ありがとうございます」

少女は微笑んで、自分の席に戻って行った。

そこで、早瀬は気付いた。

他の生徒たちが二人の様子を固唾を呑んだような様子で見守っていたのを。

彼女はなんだか居づらくなって、速足で職員室に戻って行った。

その日の六時限目、時間割に定められた週に一回のホームルームの時間だった。他の授業と違ってリラックスした様子の生徒たちが席に座り、がやがやと雑談に興じていた。

それは授業の開始を告げる本鈴が鳴り、早瀬が教壇に立つても同じだった。

「今日はクラス委員長を決めてもらいます。

……誰かやりたい人はいますか？」

二年生になったばかりの生徒たちに早瀬は生徒たちにそう告げた。

本日二度目の、クラスの静寂が訪れた。

なんでクラス委員長を決めるくらいで、と彼女は思ったが、すぐに理由が思い当たった。クラス委員長なんて役職は所詮は生徒の役職だ。

選ばれてもホームルームの時間を前に出て仕切ったり、学校行事に関してクラスの意見を募ったりする程度のものだ。

いずれにしても学業に差支えの無い雑事を行うに過ぎない。

とはいえ、「あの子」に関わらざるをえない可能性があると言うのは強烈なデメリツトなのだろう。

生徒たちの誰もが、彼女を恐れていた。

「じゃあ、私がやりましようか？」

だから、その恐怖の対象が自ら手を挙げ、立候補した時はクラス中のみんなだけでなく早瀬も目を見開いて彼女を見やった。

「え、でも、いいの？」

「だって、誰もやりたがろうとしていないじゃないですか」

ねえ、と小首を傾げ、自分の方を見て驚愕している他のクラスメイト達にそう言った。彼らは逃れるように姿勢を正面に正した。

「ええと、じゃあ、お願いするわね」

いずれにせよ、このままでは授業の終了までクラスがだんまりを決め込む可能性もあつた。

それは誰にとつても拷問だ。

「じゃあ、副委員長やほかの委員を決めることになるので、委員長の初仕事をお願いします」

「わかりました」

先生の言葉に、彼女は机の椅子を引いて立ち上がった。

教壇の前に立った彼女は自分と目を合わせないようと必死なクラスメイトたちを見て、くすくすと意地悪く笑った。

「それじゃ、学級活動を始めましょう」

§ § §

クラス委員長という名の独裁政権の発足により、他のクラス委員はスムーズに決まった。

副委員長に選ばれた少女は気が弱そうで卒倒しそうになっていたほどである。

早瀬の目から見ても、彼女は面白がっていた。

これから事あるごとにクラス委員長という建前で、クラスメイト達をおちよくる未来が異能者ならざる早瀬の目に見えた気がした。

目に見えて舐められていた早瀬だったが、翌日の朝のホームルームの最中に彼女がぼそりとこんなことを言った。

「クラス委員長として、目上の人が話しているのにちゃんと聞かないのは人として無様だと思うわ」

それ以降、早瀬の担任のクラスは先生が話す時は静寂が訪れるようになった。

そんな感じで恐怖政治が敷かれるようになったクラスのこととは教師たちにも瞬く間に知られるようになった。

当然である。クラス委員長になったと言うことは、職員室に来る機会が増えると言うことである。

しかし名目上、彼女は優等生に分類されるし、一応基本的に無害なので教師たちは気にしないことにした。

なんだかんだで一つのクラスの授業態度が改善されたことは良いことなのだから。

やつてはいけない、と禁止された行為ほど実行したくなる心理をカリギュラ効果と呼ばれるらしい。

悪いことだとわかっているのに、やるのを止められない。

それが分かっているから、教師たちは放課後に各教室で居残りが居ないか見て回る。

そして、それは巡り合わせの妙なのか、或いは運が悪かったのか。

「コックリさん、コックリさん、教えてください」

早瀬は、放課後の一年生の教室からそんな声を聴いてしまった。

たまたま彼女の巡回が担当の時であった。

「あなた達、何をしているの!!」

彼女は教室の扉を開けて、中に入って声を荒げた。

中には一つの机を四人の男女が取り囲み、ポピュラーなコックリさんの用紙が置か

れ、十円玉の上に指を置いて儀式を行っていた。

突然の先生の登場に、生徒たちは驚いて指を離してしまった。

コツクリさんはいくつものパターンや方法があるが、その中の一つに儀式が終わるまで指を離してはならないと言う物もある。

そして運の無いことに、この儀式はその類だったようだ。

ばりん、と教室の窓ガラスが砕け散った。

「ひいッ!？」

「おい、落ち着け!!」

突然の怪奇現象に、女子生徒が一人恐怖のあまり蹲ってしまった。

恐怖の現象はそれだけには留まらなかった。

ガタガタ、とコツクリさんを行っていた机が激しく揺れ始めたのだ。

「う、うそ?！」

もはや誰も、十円玉に指を置く余裕はなかった。

だと言うのに、ガタガタと揺れる机の上の用紙に置かれた十円玉は忙しく文字の上を独りでに動き回っていた。

しね しね しね しね、と。

幾つもの悲鳴が上がり、教室内は混沌の坩堝としていた。

早瀬も恐怖で尻餅について、理解不能の現象に思考が停止していた。そんな時、がらり、と彼女が入って来た教室の扉とは反対側の扉が開いた。恐怖と混乱に満ちた教室内に、黒いケープを羽織った魔女がまっすぐと怪異の中心へと歩み寄る。

「コックリさん、コックリさん、お願いします、おかえりください」

忙しなく動いていた机の上の十円玉を指で抑え、彼女は嘆願する。

しかし、十円玉は用紙の「いいえ」の場所に移動した。

予想通りだったのか、はあ、と魔女はため息を吐いた。

彼女はカバンから棒状の物体を取り出した。

それは、松明だった。

彼女はその先端に百円ライターで火を付ける。

燃え盛る松明の炎が、風も無いのに生き物のように動いていた。

「コックリさん、コックリさん、我が女神の巫女として願ひ奉ります。

—— さっさと失せろ!!」

松明が振るわれ、炎が踊る。

同時に、悲鳴のような動物の鳴き声が聞こえた。

ばちばち、と松明の炎が燃える音だけが教室に残っていた。

魔女は儀式に使われていた用紙を松明にくべて燃やすと、ただ見ているだけしかできなかつた四人の生徒たちを見下ろした。

「なんで禁止されているのか、これでわかつたでしょう？」

こくこく、と怯え顔中体液まみれの四人は頷いた。

「先生、大丈夫ですか？」

「え、あ、はい」

彼女に手を差し伸べられた早瀬は、松明の持つていない方の手を握って立ち上がる。

「それじゃあ、私はこれで」

不思議なことに、松明の炎は自然と鎮火していた。

それをカバンにしまうと、入って来た扉から魔女は去る。

この後、儀式を行った四人は職員室でたつぷりと叱られ、親まで出張る始末だった。

後日、早瀬は尋ねてみた。

「……あの、どうしてクラス委員長を引き受けたの？」

すると、黒いケープの魔女はこう答えた。

「先生には、ご迷惑をお掛けしてますから」

念写について

これは、春美が高校に入学して半年頃の話である。

「……師匠、前から気になっていたんですが」

「なにかしら?」

春美はすり鉢で乾燥した植物や昆虫をすり潰し、秘薬の調合をしている最中に己の師に疑問を投げかけた。

「今作っている薬品って、一応魔術の産物になりますよね?」

「そうね」

スマホゲームのエンドコンテンツに挑んでいるらしい彼女は、真剣な表情でスマホの画面をぼちぼちしながら頷いた。

「でもこれって、普通の人でも作れますよね?」

私たちの認識だと、なんかこう魔法は物理的に不可能なことを実現するようなことを言うような気がするんですよ」

「魔力を扱った術について言いたいなの?」

「そう、それですよ!!」

そのなんかスピリチュアルな不思議エネルギーのことです!!」

「私に言わせれば電気で動く機械も未知の力で動く十分不思議な物なのだけれど」

この魔女は未だに魔力と言う物に幻想を抱く人々に首を傾げるのだった。

「魔力とて既知のエネルギーの筈よ。」

ただ、万人に扱える電気の方が便利だから淘汰され、遺失しただけのことでしょう?

私たちと同じ境遇ではない人間で魔力を扱える人間を、私はそこそこ知っているし。

でも、それらを実感できるほど扱いに習熟した現代の人間は出会えなかったわね」

「やっぱり、魔力を実感できないとそれを扱う術は使えないんですね……」

「電気回路の使い方も知らずに機械を組み立てるような物ね」

「はあ、先は長いなあ」

こんな調子の春美も、半年先には曲がりなりにも魔力を扱えるようになるのだから師の教え方は確かであった。

「本当ならもつと幼い感受性の高い年頃から修業する方が良いのだけれど。」

そう言う意味ではあなたは飲み込みが早いわ。私が教えているのだから当然だけれ

ど」

「え、それって本当ですか!？」

「嘘を言っただうするのよ」

春美は才能があると褒められてうきうきしながら地味な作業を続けるのだった。

勿論、それが彼女の師の飴と鞭であることに気付かぬまま。

「……………へえ、面白いわね」

ふと、スマホで遊んでいた魔女が唐突に顔を上げた。

「師匠、何か言いました?」

「ごりごりとすりこぎを動かしながら、春美が彼女の方を向くと、何やら己の師は鏡台の前に立った。」

「え?」

春美は目を見開いた。

鏡台の鏡に映っていたのは、師の顔ではなく見知らぬ少女の驚く顔だった。

黒い魔女は鏡にそつと手を添えて、その少女の首を絞めるようにゆつくりと手を握りしめた。

すると、鏡に映る少女は涙目になって、いやいやするように顔を左右に振った。

まるで本当に首を絞められているかのようだった。

「春美、よく見ておきなさい。

これが呪術の基本よ。今時の言い方をするなら類感呪術ね。

魔力の性質を理解すれば、直接手を触れずとも遠くの人間に手を触れることができる」

「あの、師匠、その子めちやめちや苦しそうなんですけど……その子、魔法使いなんですか?」

「おそろく違うわね。同業者ならこんなお粗末な遠見はしないわ。

多分だけれど、突然変異ね。今時の言い方なら超能力者かしら?」

「えッ、超能力者なんですか!」

春美の記憶には、数年前に高校生が超能力に目覚めたとしてテレビで騒がれていた覚えがあった。

基本的に、超能力者は前世の記憶を持ち魔道の知識や技術の持ち主たちとは別口の存在だった。

ある時を境に現れるようになった、超常の異能を生まれながら宿している人たちである。

「……師匠、そろそろ放してあげませんか?」

「死んじやいますよ、本当に」

鏡を通した向こう側では、超能力者の少女が絞首を振りほどこうと足掻いて両手が空を切っていた。

その顔色はかなり切迫していた。

「え？ 殺すつもりよ」

「ちよ、え、マジですか!?!」

まさか本当に殺す気であるとは思わず、春美はギョツとして声を上げた。

「遠見の術で対象を視認し、呪詛を掛けるのは呪殺の典型例だわ。

私たちの業界では霊的に位置を探り当てられるのはそれだけ致命的なのよ。

これは明確な敵対行為だわ」

この魔女が語るように、約半年後に化粧屋が大まかな彼女の位置が分かっているにもかかわらず、約半年後に化粧屋が大まかな彼女の位置が分かっているにもかかわらず、確に特定せず回りくどい真似をしたのはこんな理由があったからである。

「……あの、私、師匠が誰かを殺すところ見たくないです」

小市民でメンタルクソ雑魚の春美は流石に目の前で殺人が行われようとしていることに忌避感を抱いていた。

それでも、大恩ある師匠に口答えするのは憚れるのか、ぼそぼそした物言いだった。

「……そうね。わざわざ今生も、己の魂を汚す必要も無いか」

彼女も思うところがあるのか、その手を放した。

鏡の向こう側で、少女が解放され倒れた。そして必死に呼吸を整えている。

「春美、行きと帰りの分の薬を」

「はい、師匠」

春美は薬品棚から、魔法の軟膏を師に差し出した。

「じゃあ、ちよつと“飛んで”くるわ」

彼女は服を脱ぎ捨てそれを身体に塗った。

そしてその姿がスツと消えたように春美の目には映った。

己の師の姿が消えた後、春美は無意味に周囲をきよろきよろすると、床に残された衣服を畳んで無言で顔に押し付け、しばらく色々と堪能するのだった。

§ § §

どうして、こうなったんだろう。

「ふうん、あなた、望む海って書いてノゾミって言うのね」

覗き見の方があっているんじゃないかしら、と望海は目の前に突如として現れた素っ裸の魔法に頭を掴まれ、早くも後悔していた。

彼女がその異能に気付いたのは、全くの偶然だった。

今時、赤ん坊すらスマホを持つ時代だと言われている。

だと言うのに、望海の両親は時代遅れなことに中学の卒業まで携帯機器の所有を許さなかった。

中学時代の友人たちには古臭いと笑われ、SNSで当たり前のようにやり取りする彼女らを横で見ることしかできなかつた。

高校に上がり、念願のスマホを手に入れた彼女はそれで遊び倒した。

毎夜のようにSNSで友人たちと話し込んだり、ゲームアプリをとつかえひつかえし、様々なスマホの機能を使用してみた。

そんな彼女が、スマホの写真機能に目を付けたのは当然の帰結であった。

今はスマホ一つで映画すら作れるような機能が備わっている。

自撮り写真等にスタンプや文字を書いて加工することなど朝飯前だ。

彼女の友人たちの間で、そう言った自撮り写真をSNSのグループにアップして見せ合うのが流行っていたのである。

どんな感じで撮ろうか、と悩みながら角度を考えている、偶然ぱしやりと一枚撮れてしまった。

失敗失敗、とそのミスショットを消そうと画像フォルダを見てみると、望海は困惑し

た。

それは到底自分を映したようには見えない、靄が掛かったような一枚だったのである。

気のせいかと思い、その写真を消してもう一度自撮りに挑戦した時も、また真っ白だった。

これは壊れているのか、と家族に相談したところ、彼らが試しても異常は全く無かった。

不思議に思った彼女だったが、ようやく己が取りたい自撮りが決まったので、ぱしやりと一枚撮って、目を見開いた。

その一枚は明らかに、自分の全身を映していたのである。

自撮りなのだから普通は上半身が収まるのが精々で、スマホを持つ手が何の道具も無しに映るはずもなかった。

明らかにスマホのアプリの範疇を超えた異常現象だった。

人によつてはホラーな出来事であり、悲鳴の一つも上げるような事態だったが、望海は生来好奇心が強かった。

他人の噂話が大好きであり、当然それは現代に蔓延る異能者への興味も殊更だった。だから彼女は試した。

そして気付いてしまった。己が、異能者であることに。

彼女の異能は、端的に言って「念写」だった。

遠くの場所の光景をカメラなどの撮影装置を通して何かしらの媒体に映し出すことだった。

その汎用性は静止画に限らず、動画さえも撮影可能だった。

そう、好奇心旺盛な彼女はこれ以上ない「オモチャ」を手に入れてしまったのである。

彼女は異能を使い、遊びに遊んだ。

最初は、物理的に不可能な位置からの写真撮影程度で満足していた。

だが、望海の好奇心はどんどんエスカレートしていった。

彼氏の居ないはずの友人の逢瀬の瞬間、遊んでいると噂の女子生徒の援助交際の現場、近所の人妻の不倫の様子などなど。

他人の色事情で喜んでいた彼女は、次第にスリルを求めるようになり始めた。

芸能人の麻薬売買の瞬間、ヤクザの銃取引の様子、そして、ついにはヤバイと噂の同じ学校に通う魔女の真実へと手を伸ばそうとしたのである。

……手痛いしつぺ返しが来るなどと、想像させせずに。

〃〃〃

〃〃〃

〃〃〃

「うわあ、趣味悪い」

望海のスマホに保存されている写真の画像を見て、春美は呆れたようにそう言った。

「……これを使って誰かを脅したりしてないでしょうね？」

「ま、まさか!! そんなことはしてないですよ!!」

そんなことを疑われては堪らない、と慌てて弁明する望海だった。

「師匠、どうします、これ？」

学校の放課後の屋上にて、鴉と戯れる己の師に春美は尋ねた。

「別に。私は好きに生きて勝手に勝手に死ねばいいと思うわ」

「まあ師匠はそう言いますよね」

春美としても望海の覗き見趣味を咎めるつもりはなかった。

流石に今回のことで大分懲りているようであったし。

「それにしても、えへへ、魔女さんにお弟子がいたんですね……」

望海は卑屈に笑いながらも、好奇心が抑えきれない様子でそんなことを言った。

「そう言えば望海さん、あなたこの超能力のことを誰かに言ったりしたの？」

「いやあ、まさか。こんなこと、誰かに言えるわけないじゃないですか」

望海は浅はかではあったが、馬鹿ではなかった。

「アメリカじゃあ、異能者は魔法使いだろうと超能力者だろうと“ミュータント”だつて蔑称で差別されたり排斥運動までされてるじゃないですか。

ちよつと前に超能力高校生がテレビに出まくってましたけど、プライベートが丸裸にされて周りは相当大変だったみたいですし、揚句飽きられたし」

望海は現実を見ていた。

自分の異能は、己の身を守るのに役には立たないと。

彼女にとって異能とは、ただの変わつたオモチャに過ぎなかった。

「でもまあ、将来はこの力を有効活用して、フリーの記者とか探偵とかやってみようか
なつて思つてますけど」

その言葉を受けて、春美はたくましいなあと思うのだった。

「異能に目覚めて、それほど時間が経っていないのよね？」

「え、はい、そうですけど」

「私、あなたの異能を伸ばす手伝いをしてあげてもいいわよ」

その魔女の言葉に、二人はぼかんとした表情になった。

「ちよ、し、師匠!! それってどういうことですか!!」

「少しばかり、興味があるのよ。超能力者が普通の人間と何が違うのかとか」

「そんなあ、私と師匠との時間が減るじゃないですかあ」

春美が彼女の足元に泣きつく。鴉が迷惑そうに春美を見下ろしていた。

「…………え、あの、それって本当ですか!?!」

「勿論。だってあなたは本当に運が良いもの」

望海は目の前の恐ろしい魔女に手解きをして貰えると言う事実には、殺され掛けたことなど忘れて喜んだのだが。

「あなたの能力、ある種の霊視も含まれている。

あなたの写した写真の幾つかに、肉眼では見れない者も映っていたわ」

「…………え?」

彼女の言葉に、望海は冷や水をぶっかけられたように青くなった。

「そのうち良くない物を見て死ぬ未来しか見えないから、今のうちに身の守り方を教えてあげるわ」

黙り込んでしまった望海に、魔女は慈悲深くそう告げるのだった。

「むうう、でも、師匠の一番弟子は私ですからね!!」

春美は威嚇するように、彼女を睨み付けるのだった。

さて、こうして魔女の手解きを受けることとなった望海だったが、彼女の能力は思いのほかすぐに頭打ちになった。

その為、二人の時間を取り戻したかった春美はホツとしたのだが。

まさか、望海が彼女らにとつて日常を騒がしくするトラブルメーカーになるなど、魔女たる彼女にも予想がでしなかつたのである。

調停者について

「皆さん、ごきげんよう。魔術師です」

ネットの海に鎮座する某大手動画サイト。

その中に無数には動画配信者が存在するが、彼または彼女はかなり上位のチャンネル登録者数を有していた。

自らを魔術師と自称し、幾百万もの視聴者に本物の異能者であることを信じさせている人間だった。

投稿している動画は十にも満たず、それだけで娯楽の提供を主にする他の配信者たちとは隔絶した姿勢を取っていた。

普段は作業枠の生放送ばかりを配信し、事務的に対応するばかりだが、それが却って口コミで人気を呼んでしまった。

「今日は雑談枠にしようと思います」

勿論、それだけでは飽きられるのが世の常だった。

だから時折、彼は作業以外に雑談枠を設ける。

ホンモノの異能者と会話する機会が限られる一般市民は、端的に言って変わり者であ

る彼の動向に注視していた。

生放送以外では世間への露出を殆どしない彼の一举一動は、それだけで想像力が掻き立てられた。

顔は口元しか映さず、性別さえも判別しにくい声音をしている為か、無数のファンアートが存在するほどである。

『雑談粹キタコレ!!』

『うわ、久々ww』

『待つてました!!』

雑談ををすると言うだけでこれだけ盛り上がる配信者も他に居ないだろう。

「リクエストボックスに寄せられた質問などに答えようと思います。」

えー、まずはこれですね。『魔術師さんは生放送以外の活動はしないんですか？ 企

業案件とか色々なお話がくるとおもうんですけど』

魔術師は淡々と質問を読み上げた。

その質問の内容も配信画面に映し出される。

『あー、確かに、そりゃあ来るよね』

『魔術師さんの企業案件とかめっちゃ気になる!!』

『でも魔術師さんがゲーム実況とか商品の紹介とかしてる姿が想像できないww』
視聴者の反応はそのようなものだった。

「ええ、そう言った多くのお話は確かに伺いました。

ですが全て丁寧に断りさせて頂いています。これ以上の活動の規模の拡大に意義を見いだせないのです。

さて、次に行きましょう」

魔術師は丁寧に、冷たくそう答えた。

彼はコメントの反応を見るまでも無く、次の質問を画面に映した。

「『魔術師さん、こんにちわ!! 私は大学で人類学を学んでいます。』

魔術師さんは転生者で、他の魔法使いの方々も転生者だと仰っています。やっぱり前世の記憶とかあるんでしょうか? プライベートに差支えないのなら、年代やどのような活動をしていらしたのでしょうか?』

『ああ、それは気になる』

『普通に考えて失われた歴史の生き? 証人だもんな』

『学者さんたちからすればぜひお話を聞きたいだろうなあ、勿論、俺らもだけどww』

と、視聴者も質問の答えに興味津々の様子だった。

「……まあ、これくらいならいいでしょう。」

私の前世は古代ケルト人の末裔だと言い伝えられました。

それもドルイドの、かなり高貴な血筋だと」

魔術師は彼にしては珍しく、己のことを述べた。

『え、マジなの!?!』

『ドルイドってあれだろ、生け贄の儀式とかしてたっていう』

『生け贄って、それマジかよ』

コメント欄も魔術師の前世に驚きの様子だった。

「尤も、その教義や歴史は私の前世の頃には既に遺失して千年以上経過していました。

私の知識が歴史の補填にお役にたてることはないでしょう。

迫害から逃れ続けてきた私の過ごしていた一族に残ったのは、実用的な神秘の技術だけでしたね」

『世知辛い……』

『魔法の技術だけしか残らんかったのか』

『千年以上迫害され続けたらなあ』

と、貴重な歴史の知識が失われてたことを嘆く視聴者たちのコメントが多く寄せられた。

「私の前世は、祖先たちの行ってきた魔導の復元に尽力していました。」

今生でもそれは同じです。私がこうしてみなさんに警告を発しているのは、まあ調停者だったドルイドの末裔としての役割のようなものだと考えています。

さて、次に行きましょうか」

彼はそのように語り、話題を次に移した。

「『魔術師さん、知り合いがあなたのことを偽物だとか嘘つきの偽善者だとか批判し、ネットでそのような書き込みとかしていたらしいのですが、仕事が全く来なくなつて取引先が次々離れて行って、一家離散したという噂がありました。

もしかして本当に魔術師さんの仕業なんですか？ あ、個人的にそいつは嫌な奴だったので私は気にしてません』

『草ww』

『怖ッ、でも草wwww』

『偶然じゃね？ 偶然だよね……？』

『いや、これが読まれる時点で……』

この時点で、嫌な予感を察している視聴者もいた。

「そうですね、私の所為かと言えばそうとも言えますし、そうではないかもしれませんが」
そのある種の肯定に、コメント欄は悲鳴や面白がる言葉でいっぱいになった。

「その方だけではなく、私の活動当初も似たようなことを散々言われました。

仕方がないので、私はドルイドの調停者としての力を利用することに決めたのです。古代のドルイドの権威は、王者よりも上でした。そしてその権威と力は魔導の力によっても保障されていたようなのです」

つまり、と魔術師は前置きした。

「私がドルイドとして調停者の役割を果たしている限り、私を批判し、私の行動を貶めようとする者の社会的信用や地位は失われることでしょう。」

私が悪意を持つて誰かを呪うなど、言いがかりだと言わせて貰います」

『いやそれ、結果的には同じなのでは?』

『普通に言語統制じゃねーか!!』

『そりゃあ迫害されるわけですから……』

ちよつと感性のずれている魔術師の言葉に、コメント欄もツツコミが滝のように流れた。

「私はこうして姿をさらしているだけで、同業者たちから面白く思われてはいないでしょう。」

そのリスクを背負い、こうして警告しているのですから、自分の発言に責任を持たない人間にどうこう言われる筋合いは有りません。

私を通して私の警告が皆さんの身に染みたるなら、それはそれで私の目的は達してい

るのです」

『じゃあ、警告する以外のことはしないの?』

すると、コメントの一つが機械的な音声で読み上げられた。

「私はあまり、世俗には興味ありません。」

無法を働く同業者たちを取り締まるつもりも、その義務も私にはありませんから。

何度か警察の方々から捜査の協力要請をお願いされましたが、それはそちらの仕事だと断らせてもらっています。

私はあくまで、ある種のパラダイムシフトを迎えつつあるこの世界で、あなた方と私たちの調停者と勝手に役割を演じているに過ぎません」

異能者との間に立っている以外は、まるで自分は単なる一般人と変わらないとでも言うような物言いに、コメント欄も困惑した様子である。

「とはいえ、完全に世俗と断つことができないのもまた事実。」

前世では我慢できた貧しさや不便さを現世の生活を知った今では、それらを捨てることはできませんし」

ある種の悟りを得たような落ち着いた物言いをする魔術師が、ここで初めてため息を吐いた。

「企業案件とはまた違いますが、有名どころの大学の教授や魔導の研究をする機関など

からお会いしたいと言ったメールなどが届いたりしています。

私自身、研究は嫌いではないので、彼らのお話を聞いてお仕事をすることになれば、その体験を皆さんにお話しする機会もあるかもしれないかもしれません」

魔術師のその発言に、話題に飢えていた視聴者たちのお祭り騒ぎが始まった。

§ § §

「いやあ、魔術師殿。あなたにお会いできて光栄です。

まさか私のお話を受けてくださるとは」

そして最初に魔術師が受けた話と言うのが、日本のローカルな大学に研究室を持つ老教授だった。

この老人から見て、やはり魔術師は異質だった。

服装は普通の現代と変わらない量販店の代物だったが、顔には木製の仮面がつけられていた。

年頃は二十前後、体格からして線は細いが男性に見えた。

「どうも、魔術師と名乗っています」

「ええ、では立ち話もなんですから、私の研究室においでください」

教授はわざわざ大学の入り口で彼を出迎えると、満面の笑みで共に研究室へと歩いて行った。

道中、あの変わり者の教授がにこにこして仮面をした変な奴と一緒に歩いている、と学生たちに奇妙な物を見る目で見られていたが、彼はそんなことが気にならないほど心が踊っていた。

「ささ、手狭ですが」

「……」

教授の言うとおり、彼の研究室は魔術師が一瞬躊躇うほどに物が溢れていた。

棚には奇妙なサンプルが規則正しく並べられており、書棚に人類学の本が収まりきらず床にも重ねられている始末。

壁には珍妙な仮面が並べられており、一緒に動物のはく製も存在していた。

自分の工房でもここまで混沌としていない、と魔術師は思うほどであった。

「今、茶を入れますわ」

「いえ、結構です。それより、メールにあった物を見せてくれませんか？」

「おお!! さっそくですな」

教授は上機嫌で、最低限の居場所が確保されているテーブルとイスに座って、ある代物を見せた。

「これは、興味深い……」

魔術師は丁寧に布でくるまれたそれを広げ、中身を見てそう漏らした。

「でしよう？ これは私がイギリスにフィールドワークに出かけた際、かつてドルイドたちが儀式をしていたと伝承が残っている地にて出土されたオークの木片です」

教授が示したそれは、焼けたオークの木片だった。

ドルイドの伝承を語る上で、外せないのが生け贄の儀式であった。

彼らは己の教義や歴史を口伝でしか残さない為、その儀式の理由は未だ不明瞭とされていた。

「……おそらく、ホンモノでしょう。」

これは何らかの儀式に用いられたオークの木だ」

「やはり!! いやあ、そうでしたか!!」

それを聞いた教授は嬉しそうに頷いた。

「ええ、精霊の息吹の残り香を感じます。」

オークの木を触媒に用いる術は多いので、どんな用途で使用されたかまではわかりませんが」

「ウィツカーマンに使用されたかどうかも分かりませんか？」

「炎を扱う儀式は負の念が残りにくいのです。」

怨霊の存在を恐れているような時代ですから」

「ある種のお炊き上げの一種であるとき？」

実に興味深いですな、そのような風習は日本だけでなく世界各地で見られる。

やはり霊能力の類を持つ人間が古来より実在していて、その対処方法がある程度経験則的に理解していたのだろうか」

教授はぶつぶつと思慮に耽り始めた。

「ああいや、失礼。好きなことの話になるとどうにも……」

「いえ、わかります」

魔術師は教授の不作法を咎めなかった。

彼の研究室を見ればよくわかる。

本棚には世界各地の魔法や魔術の資料が、壁にはアフリカ先住民の呪術に使われたと思われる仮面が、と彼は研究者であると同時に根っからのマニアだった。

そういう研究肌の人間は、魔術師としても好感が持てたのである。

「いやあ、残念です。あなたが良ければ、一緒に論文を発表したかった」

それから二人は何時間もの間、議論を交わした。

お互いに失われた知識を追い求める者同士で気が合ったように思えた。

だから教授は共同論文の提案をした時、魔術師が断つたことが残念でならないようだった。

「魔術師殿、最後に一つだけよろしいでしょうか」

「どうぞ」

大学の門まで見送りに来た教授は、魔術師に尋ねた。

「ドルイドには輪廻転生の概念があつたと伝えられています。」

それを実際に体験した身として、どのようなにお考えで？」

「……教授は、死が恐ろしいですか？」

「ええ、ですが、あなたを見て一つ確信しました。」

もし私に來世が訪れていても、私の若い頃のような情熱は取り戻せそうにないのでしような」

教授は少し寂しそうに笑いながら、今の質問は忘れてください、と言った。

「教授、これを。大したものではありませんが、この出会いに感謝を」

「これは……」

魔術師が彼に渡したのは、四葉のクローバーの押し花で作られた葉だった。

「不運を退ける護符です。」

あなたにケルトの神々の加護と精霊たちの祝福があらんことを」

「ははは、うちは仏教なんですがね」

教授と魔術師は、可笑しくて少し笑った。

魔術師が最寄りの駅に向かう帰り道、商店街の近くだと言うのに人通りがびたりと止んだ。

「魔術師、だな？」

そこで奇妙な二人組に出会った彼は、無言でオークの杖を懐から取り出した。

「待て、敵対の意思はない。私はこういう者だ」

二人組の片割れであるスーツの男は、警察手帳を見せた。

「警察官が何の用です？ 捜査協力ならお断りしたはずですが」

わざわざ同業者まで連れて、と言わんばかりにもう片方のパンクな女の方を見やっ
た。

「あー、化粧屋からの伝言があるって言えば話を聞いてくれるか？」

「化粧屋？ 嘘を言うな。」

あの権威や権力を嫌う「男」が警察に関わりがあるとは思えない」

魔術師は刑事の言葉を戯言だと切って捨てた。

「……男？ おい、彼はそう言ってるが」

刑事が相方に非難がましく視線を向けた。

「くっくくく」

女は、笑いをかみ殺しながらパイプを取り出し、火を入れる。

異様なタバコの臭いが周囲に立ち込める。

「色々とあんたの噂は聞いているぜ、馬鹿は死んでも治らんのかな」

「貴様、化粧屋か!! お前もこの時代に居るとは聞いていたが……相変わらずだな」

「これは自前だぜ? 今生はちゃんと女だ」

「それだけ身体を弄りまわしておいてよく言える」

魔術師は唾棄すべき物を見るような視線で化粧屋を見やり、そう言葉を吐き捨てた。

「ま、お互い積もる話もあるだろうし、場所を代えようぜ」

「断る。不愉快な名前ばかりか不愉快な奴にまで会ったんだ。」

「これ以上私に不快な思いをさせるのなら、こちらにも考えがあるが?」

「まあまあ落ち着け。面白い話を聞かせてやるから」

にやにやと笑う化粧屋に、魔術師はついに杖を向けるが。

「たとえば、私たちを殺したあの野郎がこの時代にも居る、とかな」

「……なに?」

「笑えるだろう?」

少なくとも魔術師に彼女の話を聞く価値が生じたのか、彼は杖を下した。「せつかくのもう一度の人生だ、楽しもうぜ。」

とりあえず、美味しい飯でも食おうや」

「お前のことだ、『魔女』殿や『博士』の所在も掴めているのだろう?」

「ああ、割と苦労したぜ。どっちもこの国にいるみたいだ。面白くなってきただろう?」

「終始楽しそうにしている化粧屋の言葉に、魔術師は鼻を鳴らした。」

三人がその場から去ると同時に、その辺りに人通りが戻り始めるのだった。

馴れ初めについて 前編

「なあ、聞いた聞いた？」

先週、うちの学校で一年がコックリさんをやったんだってさ」

「うええ、マジ？ 怖い物知らずだねえ」

高校の昼休み、四人は代わり映えも無く机を囲んで昼食をとりながら雑談に興じていた。

「あれって良くない物しか呼ばない上にはほぼ失敗するから止めた方が良いつて、あの人も言ってたよ」

「あー、魔女さんもお墨付きでヤバイのねえ」

春美が眉間にしわを寄せて言うのと、真冬も納得したように頷いた。

「最近、物騒な都市伝説とか聞くし、なんで自分から怖いことに近づくんだろうな」

「でも、面白そうだったのは分かるなあ。」

「何だかんだで、皆も興味あるじゃん？」

「それは、まあ……」

「勿論、自分たちに危険に及ばない範囲で、だけど」

夏芽も、千秋が言うことはわからないでもなかった。

今時、オカルトに興味のない人間などそうは居ない。

その典型だった夏芽は、それを否定することはできなかった。

そんな会話をしていると。

「春美さ〜ん!!」

教室の外から聞こえるその声に、呼ばれた本人が顔を顰めた。

「春美ちゃん、呼ばれているよ?」

「悪いけど、居ないって言っておいて」

親切なクラスメイトが彼女を呼んだのだが、当の春美は居留守を決め込もうとした。

「あ、春美さん!! やっぱりいらっしやっただ!!」

来訪者はクラスの中に顔を入れて彼女の姿を認めると笑顔になり、よそのクラスだと言うのにずんずんと中へと入って来た。

「ちよつとお話を聞いてほしいんですけどー」

「帰って」

「そんな冷たいなあ。私と先輩の仲じゃないですか」

「私は人前で話しかけないっていう配慮が欲しかったの」

春美は、へらへらと笑みを浮かべている望海を睨んでそう言った。

同席している三人も、クラスメイトも二人のやり取りに目を白黒させていた。

「そう言ったって、春美さんが私のお話を聞いてくれた試しなんてないじゃないですか」

「察してくれない？ 私、あなたのこと嫌いな」

「そりゃあ、春美さんとあの方との蜜月をお邪魔した自覚はありますけど……」

何もそんなに嫌わなかったっていいじゃないですか、と寂しそうに体を背けて望海は春美を流し見ながらそう言った。

そんなことまで言われて、春美も席を立った。

「……………次、余計な口を利いたらもう二度と顔を合わせずに済むようにするわよ」

「わ、わかりましたよ……。我らが女神に誓います」

怒りと羞恥で殺意さえ漏れだしている春美に、面の皮が厚い望海も流石に恐れをなして頷いた。

§ § §

校舎の端にある利便性が全くない階段に、二人はやってきた。

「これで、ようっ」

春美は奇妙な文様の描かれた短冊状の紙を壁に貼ってから、望海を睨んだ。

「あのね、一つだけ言わせて。」

私にも友達はいるし、学校生活もあるのよ」

「あの方と一緒に世俗から離れようとしている人間とは思えない言葉っすね」

「師匠も私も、利用できるものは何でも利用する性質だからいいのよ。」

私たちが師匠の邪魔をしてはいけない、そうでしょ？」

「それはそうですけど」

それは友人に対する物言いなのか、とまでは望海は口にするほど愚かでは無かった。

「それで、いったい私に何の用なの？」

「いやあそれが、実はこんなものを見つけちゃいました」

望海はスマホを取り出し、春美にそこに映っていた画像を見せた。

それは、空間の異常だった。

画像の中心の空間が球体のように捻じれ、その中は周囲とはまったく別の場所の光景が映っていた。

「……………これって、どこなの？」

「さあ、それはまだ。でも、私はこれを最近聞くようになった都市伝説の正体だと睨んでるんですよ!!」

ほら、歩いていたら知らない場所にいるの間にかたどりに着いてたって」

「……………」

春美は呆れたように望みを見やる。

不可思議な現象を語る彼女はイキイキとしていた。

「他にも、これとか。この事故現場、何だかおかしくないとはいませんか？」

望海が画面をスライドして別の画像を示した。

それは交通事故の事故現場の画像だった。

「これ、どうやったらこんな事故になるの？」

その事故現場は、狭い通路の途中にある民家の塀に自動車が真正面に衝突した光景だった。

だが、どう見ても塀を破壊できる速度で、塀に対して垂直に自動車が突っ込めるほどの道路に余裕は無かった。

「それで、これが警察の事情聴取の最中の記録です」

今度は、望海が念写で映したと思われる事故現場の事情聴取の光景が録画されていた。

『本当なんです!! 公道を走ってたら、いつの間にか目の前に塀があったんですよ!!』

『分かりましたから、落ち着いてくださいよ』

『こんな狭い道、普段から通らないようにしているのに途中の家に突っ込むわけあるか!!』

と言った、車の持ち主と警察官の会話だった。

「相変わらず便利な覗き見ね……」

この光景を、望海は自ら現地取材したわけではない。

それどころか、都合よく事故現場を見つけてすらいない。

彼女の念写は魔女の指導により、見たいと思つた場所をある程度時間さえ遡つて見れるようになったのである。

「しかもこの人、走っていたのは隣の県だったみたいなんですよ。」

突っ込んだ民家の住人に通報してもらつた時に初めて自分がどこに居るのか気付いて驚いた顔は見ものですよ」

「そして相変わらず趣味が悪い……」

春美はニヤニヤして動画を見返している望海を、あとで師匠にメてもらおうなどと考えていると。

「こういう超常現象は私じゃなくて師匠に相談すればいいじゃない」

「嫌ですよ、あの方に一人で話しかけるのなんて。」

SNSで相談しても、それはソシヤゲの周回作業より価値があるのかしら？ とか言

われるし」

「ああ、最近師匠はガチャでお気に入りキャラが最後まで限突できなくてイライラして
るみたいだから……」

「あのゲームって最高レアの限界突破って最後まで行くのに十体必要になりません
でしたっけ？」

うん、と春美は肯定した。望海は何とも言えない表情になった。

「とにかく!! あの方は魔力の異常くらいなら今の春美さんでも何とかできるとのこと
なので、御同行をお願いしたいのです!!」

「嫌です」

即答だった。

「何ですか!!」

「そもそも、あなたはこの怪異に対して何がしたいの？」

「師匠があなたに身を守る術を授けたのは、危険に首を突っ込ませる為じゃないのよ
?」

「それは……」

望海が超常現象を遊びの延長としか捉えていないのは、春美にはお見通しだった。

「あなたは自分が超能力者だと知られることに対しては臆病なくせして、超常現象に対

して危機感が無さすぎる。

師匠も言つてたじゃない、あなたの能力は危ういつて」

「それ、めっちゃブーメランじゃないんすか？」

「ここまで一方的に言われていた望海も、流石にムツとした様子でそう返した。

「魔法使いの弟子なんかしてるのに、新学期になつたらお友達作つて。陽キヤの真似事ですか？」

魔力の扱いを修めると良くないモノを引き付けるからつて、あのお方は私に目を掛けてくれましたけど、それつて春美さんも同じですよね？」

私は友達と距離取りましたよ？ ハブられて今はめっちゃ悲しいですけど。

でも、一緒に修業してる時は友人とか無駄だとかスカしたこと言つたのに、それを忘れてイメチェンですか？ 正直、ダサいつすよ」

むかつ腹が立つた望海は早口で思いのたけをぶちまけた。

二人で同じ師に師事していた時から、お互いにいろいろな物を捨てる羽目になつた。

望海は友人を、春美は家族を。

望海は姉弟子はいずれ、師のようになつていくのだと漠然と思つていた。

それは彼女の価値観からすればイカしていて、美しかった。

だと言うのに、姉弟子は二年生になつたら仮初めの友達ごっこになんて興じている。

望海にとって春美は、ある種の“教義”を破つたに等しかった。

「……」

「……………すいません、先輩、言い過ぎました。協力を頼む態度じゃなかったですよ」

望海はある種の失望を抱えながら、礼儀として謝罪を述べた。

お互いに友情やら同じ師に師事している絆やらが無くて、仲間意識ぐらいはあるのだと期待していたのが間違いだつたのだと。

きーンきーンかーんきーン。

「あ、清掃の時間だ。もう行きましよう、春美さん」

望海は上下の階層へと繋がる人気のない階段から、喧騒にまみれた廊下へと歩み出た。

清掃の時間になつた為か、掃除をしに生徒たちがやってくる。

いつの間にか、春美の張つた短冊状の札の効果は切れていた。

春美は、ギュツと拳を握りしめて望海が去つて行つた方を見ていることしかできなかった。

§ § §

「はあ、当てが外れたなあ」

その日の放課後、望海は昇降口で怪異の発生地点を洗い出していた。

「別に誰かに見せびらかす訳でもないのに。

せつかく得た力を使わないでどうするんだか」

望海の師は言った。好きに生きて勝手に死ね、と。

だから彼女はそうしているだけだった。他人に迷惑を掛けない範囲で、好き勝手にしている。

人がお金を稼ぐのは、ため込む為ではなく使う為なのだから、春美の物言いは彼女にとって出し惜しみにしか聞こえなかった。

結局のところ、望海は若く幼いだけだった。

「ん？ 二人とも、あれって昼休みの」

「あッ、ホントだ」

その声に、望海もスマホから顔を上げる。

その視線の先の女子たちに、望海は憶えがあった。春美と机を囲んでいた三人組だ。

「ちよつとー、あんた春美となに話してたの？」

あの後、春美つたらちよー不機嫌だったんだけど？」

「そうだよ!! おかげで午後の授業ずっとピリピリしてたんだけど」

と、夏芽と千秋が望海に絡み始めた。

「あー、あんたら、春美さんのお友達？」

「そうだけど、あなたも？」

「まあ、ちよつとした縁があるってただけだけど」

あんまり事情をおおっぴらにしたいくない望海は、真冬の質問に曖昧に答えた。

「どういう関係だか知らないけどさ、春美が困ってたじゃん。ああいうのよくないと思
うよ」

「ちよつと、聞いてる？」

望海が夏芽の注意を聞き入れる様子の無いのを見て、千秋も顔を顰めた。

当人は三人を無視して下駄箱へ歩いて行っている。

「あなた、ちよつと待ちなさいよ!!」

このあんまりな態度に憤った千秋が望海に詰め寄ろうとして、他の二人も喧嘩になり
そうだと慌てて追いかける。

「いい加減、しつこいんですけどー!!」

速足で歩く望海と、それを追いかける千秋。

そんな二人をハラハラした様子で追従する夏芽と真冬。

「だから待ってて言ってるでしょ!!」

勿論、千秋が望海を追いかけているのは激情故だった。

もし彼女を掴まえたところで、原因とは関係ない感情に任せた無意味な論争が始まるだけだ。

それでもお互いに駆け足になって追いかけてつこが始まらないのは、女子としての最低限の品性を保とうとしているからなのだろうか。

とにかく、なぜだか走って逃げたら負け、走って追いかけたら無様、と言うような謎の共通意識がお互いに芽生えていた。本当に謎である。

「千秋、もうやめとこうって。明日学校で良いじゃん!!」

「ねえ落ち着こうよ千秋ちゃん」

焦る夏芽に涙目になる真冬。

この三人組で昔から沸点が低いのは千秋で、決まって二人がなだめる側だった。

追われ、追いかける二人。

望海も速足で不規則に曲がり、三人を撒こうとしているが、その程度で負けるほど女子高生の身体能力に差などない。

だが、やがで千秋は望海に追いついた。

「ようやく掴まえた!!」

千秋は、唐突に足が止まった望海の肩を掴んだ。

そして彼女の正面に回って、ようやく異変に気付いた。

「……………え？」

青い表情をしている望海、コンクリートの道路と塀に囲まれていた筈の道中。

それが、見覚えのない田んぼだらけの田舎道になっていた。

更には、二人を追っていたはずの夏芽と真冬もキレイさっぱり消えていた。

望海は反射的にスマホのカメラアプリを起動し、動画撮影モードに切り替え、背後を映した。

そこには、見えないはずの空間の歪みが閉じて行き、何が起こっているのか分からず、呆然としている夏芽と真冬の姿があった。

その二人の姿も、空間の歪みが閉じきって見えなくなった。

「なに、それ……………」

彼女の異様な行動を、千秋は背後から見ている。

勿論、彼女がスマホで録画している異常現象までも。

「嘘でしょ、まさか私が都市伝説に巻き込まれるなんて……………」

何も異常を示さなくなった目の前の空間を呆然と撮影している望海が、そう呟いた。

録画を切り、何度見返しても彼女が撮影した動画は異様な光景を映していた。

見たことも無い田舎道に取り残された二人の耳には、夏でもないのにうるさいほどのセミの鳴き声だけが鳴り響いていた。

馴れ初めについて 後編

「ねえ、どうするのよ、これ」

千秋が望海を見やり、そう言った。

それは彼女を咎めていると言うよりも、この場で話し相手がいるという事実を確かめたかったようにも思える。

「なによ？ 私の所為だつて言いたいの？」

勝手についてきたくせに、私一人だけ神隠しに遭えばよかつたつて言いたいの？」

だが、精神的に参っている望海にはそうは聞こえなかつた。

「そうは言つてないじゃない!!」

「それ以外にどう聞こえるつて言うのよ!!」

二人の怒鳴り声が、二人の座る田舎の古びたバス停の待合席に空しく響いた。

やがて、無駄な体力を使うだけだと悟り、二人の言い争いは鎮火した。

「もうやめよう……」

「そうだね……」

どちらからともなく、二人の勢いは無くなった。

二人が身も心も疲れ果てているのは、理由があった。

彼女らが見知らぬ田舎道に放り出されてから、既に一時間以上経過していた。

最初は民家や人里を求めて歩いたりもした。

だが、一向に田舎道は続いて行く。目に映るのは田んぼと、道だけだ。

「ねえ、このバス停、さつきも通らなかつた？」

「そうかも……」

千秋の指摘に、望海も見覚えのあるバス停を見やる。

この道はループしている。二人がそう結論を出すのは当然だった。

……やかましいほどのセミの鳴き声が、ずっと鳴り響いていた。

「ねえ、最初に都市伝説だつて言つてたけど、あなた何か知ってるの？」

「知らない。私の知っている都市伝説は、いつの間にか知らない遠いところに人が飛ばされているつものだった。」

「こんな、奇妙な場所に連れて来られるなんて、どこにも……」

望海は待合席に座ったまま頭を抱えて首を振った。

「……あのさ、待ってればバスが来ると思う？」

「そんなのが来るって、少しでも期待しているの？」

会話が途切れるのが嫌で、千秋が言った言葉は即座に否定された。

二人の居るバス停の時刻表やその地区を示す文字はまるで子供が書きなぐったようにぐちゃぐちゃだった。

「ここが狂った異常な空間である証左でもあった。

「もし来るとしたら、それは死神カロンのお迎えよ」

正気を失いつつある望海は、低く笑い声をあげた。

§ § §

春美が友人たちを先に帰して、向かったのは美術室だった。

美術室では、美術部が活動している時間だった。

部員たちは各々活動していて、新しく入って来た春美など気にも留めていないようだった。

その中で独り、浮いている人物がいた。

窓際の席で、夕日に向かってキャンパスに筆を走らせているのは、黒いケープの魔女

だった。

彼女は迷いなく絵具をキャンバスに塗り、平面に世界を彩らせていた。

春美はその後ろ姿を、美術室の椅子を借りて黙って見ていた。

彼女はこのどこか幻想的で、哀愁に満ちた姿が好きだった。

魔女が描く絵は、まだまだ未完成だった。

油絵は乾くのが遅く、一日に描けるペースがある程度決まっている。

一枚の絵を描くのに数か月掛かるのも普通だった。

「……………」

春美は、少しずつ毎日彩られていくキャンバスを見やる。

そこに描かれているのは、独りの女性と大勢の人々だった。

テーマは以前に聞いていた。『ジャンヌダルク』の火刑である。

そしてそこに描かれているジャンヌダルクの姿は、現代において名誉を取り戻した聖

女ではなく、当時のプロパガンダで魔女としての汚名を着せられた姿だった。

その表情は憎悪や怒りに満ちていて、足元の炎にはボロを着たドクロがくべられてい

た。

春美は特に何かを考えるわけでも無く、遠くの景色を見るように完成に近づいて行く

絵を見ていた。

最近では友達付き合いがあつた為、しばらく来れなかつたので以前より大分彩が増えていた。

絵の中の聖女は、以前より明確に感情を露わにしている。

そんな静かな時間も、唐突に終わりが訪れる。

ぴろりん、と春美のスマホに着信音が鳴った。

春美は静かに廊下に出て、スマホの画面を確認した。

夏芽たちのグループチャットからだ。

夏芽

『千秋が大変なの、すぐに来て!!』

真冬

『ごめん、ちょっと冷静じゃないの。』

場所はすぐ伝えるからちよつと待ってて』

春美

『わかつた、すぐ行く』

春美はすぐにスマホをしまつて、昇降口へと向かつた。

「二人とも、何があつたの!!」

昇降口の下駄箱から出て、二人の場所を確認した春美は駆け足で二人の元へとたどり着いた。

「それが、それが、私たちにもわかんなくて!!」

「千秋ちゃんが、目の前で、目の前で消えちゃったの!!」

二人は混乱していて、目に見えて怯えていた。

「わかった、わかったから落ち着こう。ね?」

春美はとにかく二人を落ち着かせることにした。

カバンから自作した特性のアロマキャンドルを取り出し、火を点けた。

心を落ち着かせる香りが、周囲に漂い始めた。

「なにこれ、良い匂い……」

「すごい、落ち着く」

二人は落ち着くを通り越して若干うつとりしているが、春美は気にせず二人から話を聞き出すことにした。

「つまり、千秋ちゃんと望海が目の前で急にいなくなった、と」

「そうそう」

「私たちにもいったい何がなんだか」

二人の話を聞いて、春美は何が起こったのか大理解した。

「望海の奴、怪異に近づきすぎたな」

望海たちが怪異に遭遇したのは、ある意味偶然ではない。

昔から、怪異や超常現象がそれ足らしめていたのは、それらが正体不明だったからだ。それらは、自分たちを暴こうとするものを許さないのだ。

都市伝説として、それは同じだ。

「私が望海に聞いた話では、どこか別の場所に飛ばされているって話だったけど、連絡は取れないの？」

二人とも、春美の質問に首を横に振る。

彼女の望海のスマホに電話を掛けてみたが、電波が届かないと出るだけだった。

「二人が消えたのは、どの辺りなの？」

「ちようど、あの辺だけど」

夏芽が、道路の真ん中あたりを指差す。

「……………うーん」

夏芽が指差した辺りを目を凝らして見てみるが、春美には特に何も感じ取れなかった。

「これ、バレるとちよつとヤバイ薬なんだけど……」

春美は友人たちに聞こえないようにぼやきながら、常備していた秘薬を口にした。

魔女たちが霊的感覚を養う為に使う薬で、一時的に靈感が高まる代物だった。未熟な春美にはそれを使用しないと何も感じ取ることができない。

そして、それを服用した春美の視界に、別の世界の視界が重なった。

「……ああ、見える、妙な魔力の痕跡が」

「何か、分かったの？ 春美ちゃん」

「うん、人為的って言ったら語弊があるかもだけど、ここに空間の捻じれた痕が見えるの」

おずおずと尋ねる真冬に、春美は雲の輪郭をなぞるように両手で魔力異常の残滓に触れた。

「ど、どうにかなりそう?」

「わからない。わからないけど、たぶんこれって扉のようなもので、今は不活性化状態になってるんだと思う。」

だからきつと、こうすれば……!!」

不安そうにしている夏芽の視線を背に、春美は閉じた空間の歪みに魔力の乗った指で触れた。

すると、解きほぐされるように、空間の歪みが開かれた。

時刻は六時過ぎ。空は夕焼けと星空がせめぎ合っている。

だというのに、その空間の歪みの奥に見えるのは、美しい夕焼けの空と田舎道だった。「……ねえ、二人にはこれが見える？」

春美は後ずさり、後ろの二人に問いかける。

二人は無言で横に首を振った。

「望海の言っていた都市伝説って、人が別の場所に飛ばされるんじゃないじゃなくて、神隠しの類だったのかも」

或いは、望海が調べていた都市伝説とは全く別の怪異に遭遇した可能性すらあった。

「あの、何かわかったの？」

「たぶんだけれど、二人は今、異界に居るんだと思う。」

それがどういう場所に繋がっているか分からないけど、今はまだ狭間にいるかもしれない。ない。

そのままでも戻ってこれるかもしれないし、二度と戻ってこれないかもしれない」

春美は己の師からそう言った話を何度か耳にしていた。

「異世界、異世界かあ、神様が出てきて転生させてくれるわけでも無さそうだね……」

「魔法の国の使いのマスコットとかも居なさそうだ……」

真冬と夏芽は精一杯の冗談を口にしたが、異界に迷い込んだ二人が無事か気が気でな

い様子だった。

「下手に手を出すと、マズイと思う。」

中の二人に出口が開いたこと、気付いてもらうしかないか」

春美はこの場からどうやって中と連絡が取れるか、思案するのだった。

§ § §

異界に取り込まれた二人の間に、会話が途切れて少しの時間が経った。

少年誌ならここで友情が芽生えたりするのだろうか、元々初対面に等しい相手同士だった。お互いに励まし合うなんて出来るはずもない。

だが、そうも言ってもらえない事情が目の前に迫っていた。

「……………え？」

千秋が異変に気づき顔を上げ、釣られて望海も顔を上げた。

ぶろろろろ、とセミの鳴き声に混じって自動車の音が聞こえた。

二人が狭い待合席の室内から立ち上がって外に出ると、昔の歌の歌詞にでも出てきそうな古臭い田舎のバスがやってくるではないか。

どうしよう、と二人はお互いに示し合わせたかのように顔を合わせた。

そうしている間に、バスはバス停の前へと停車した。

そして、バスの入り口のドアが開いた。

乗客は中に誰も乗っていないかった。

「……運転手に誰かいるみたいだけど」

少しでもバスに近づこうとした千秋を、望海は手を取って引き止めた。

「下手に近づかない方が良いと思う」

「でも、道ぐらい聞けるかもだし」

「馬鹿じゃないの!! こんな場所でもともな道なんてあるわけないでしょ!!」

望海の叫び声に、思考が麻痺していた千秋もハツとなった。

「とにかく、こんなあからさまに危ない物の近くに居ない方がいい。逃げよう!!」

彼女は千秋の手を取ったまま、バスの進行方向とは反対の方へと走り出した。

徐々にバスの後姿から遠ざかっていく二人。

やがて、バスからどれだけ離れたか確認しようとした二人が振り返った時、二人の表情は恐怖で引きつった。

そこに、黒い壁があった。

「なによあれ!!」

千秋がカバンを抱きしめながら絶叫した。

それは迫りくる、黒い靄のようなものだった。

そしてその中から這い出ようとするような、無数の手が蠢いていた。

こつちにおいで と、得体のしれない声音が二人を誘う。

悪夢のような光景だった。

「うえッ」

その光景に目を奪われ、望海が足を取られてすつころんでしまった。

「ちよつと!! 嘘でしょ!! こんな時にベタなことしないでよ!!」

そんな悪態を吐きながら、千秋は足を急停止させて盛大に地面に倒れて蹲っている望

海の手を引つ張り上げた。

「痛い、めっちゃ痛いよお」

「泣きごとは後にしなさいってば!!」

今にも泣きだしそうな望海を引つ張り、少しでも後ろから迫りくる悪夢から逃れようとした。

「……待って」

「なあに!!」

恐怖に焦る千秋に、望海がか細い声を掛けた。

「なんとかなるかもしれない……」

「嘘ツ!? そう言うことは最初に言つてよ!!」

「だつて自信無かつたし……効果あるかもわからないし」

「それつてこうして当てもなく走るのとどっちが良いの!!」

千秋とて、このまま足手まといを連れて永遠に逃げ切れるとは思っていない。

望海がこの場から逃げられるお呪いとかを知っているのなら、試す以外手立てはなかった。

「丁度、ここは十字路みたいだし」

望海は周囲を見渡す。田んぼだらけの田舎道なので、十字路はそこらじゅうにあつた。

彼女はスマホの画像フォルダから、一枚の女神像を選び出し地面に置いて、蜂蜜入りのジュースのペットボトルを並べた。

そしてさすがのように跪き、手を組んで祝詞を述べる。

「冥府の女王にして我らを守護せし大いなる女神ヘカテーよ。

我が願い、我が訴え、我が祈りを聞き届けたまえ。

どうかこの地に来訪し、暗雲に閉ざされた道を示したもうお願い致します」

「ちよ、この土壇場で神頼みなの!？」

「ただでさえメツチャ略式なのに、女神様への礼を失してどうするのよ!!」

望海のとつた手段に不満を言い始めた千秋だったが、彼女はかなり切羽詰まった形相で睨みつけた。

「あなたも祈つて、ほら!! 決して目を開けちゃダメ!!」

「わ、分かった、分かったわよ!!」

千秋とて祈る為の偶像がスマホの画像で、捧げ物がジューズなこととか言いたいことは沢山だったが、黒い霧はもう目の前に迫っていた。

もはや神頼みぐらいしかする余裕などない。

もう細かいことを考えるのを止めて、千秋は望海に倣って祈りを捧げ始めた。

「もう神様でも何でもいいですから助けてください、お願いします!!」

視界を閉じる恐怖に震えながら、彼女は必死に祈りを捧げた。

耳障りなセミの鳴き声と、おぞましい呼び声が遠ざかっていく。

その代り、何かの足音が聞こえてきた。

それは、ゆつくりとこちらに近づいてくる。

「目を開けちゃダメ、見たら怒りを買う、帰ってこれなくなる」

ぼそり、と望海が言った。

千秋は何度も頷いて、この場を乗り切る為に必死に祈った。
やがて、足音が二人の近くで止まった。

そしてゆっくりと遠ざかって行き、すぐに聞こえなくなった。

二人はどちらからでもなく、目を開けた。

供物のジュースは中身が空っぽになっていたが、それを気にしている余裕は無かった。

夕焼けの田舎道は、不気味な暗い夜道へと様変わりしていた。

「た、助かったの？」

「たぶん、まだ。ねえ、百円玉持つてる？」

「え、あるけど、どうして？」

望海はカバンから財布を取り出し、顔を顰めてから千秋に尋ねた。

「あとで返すから、一枚貸して」

千秋は言われるがままに望海に百円玉を取り出し渡すと、彼女はそれを口に含んだ。

「えッ、汚い……」

「……日本人なら、死神の渡し賃ぐらい知ってるでしょ？ 六文銭とか言われているや

っ」

「そりゃあ、まあ……」

「古代のギリシャじゃ、死者に銀貨を含ませて吊つてたんだって。

銀貨は向こうの死神の渡し賃。要するにあの怨霊の塊みたいなのに私は死者の仲間ですって示しているのよ」

それがある種のお呪いだと悟り、嫌々ながらも千秋も彼女に倣つて百円玉を口に含んだ。

「あれは、たぶん私たちを向こう側に引きずり込もうとした。

あのバスもきつと、死神の渡し船みたいなものなのかも。なら進行方向の反対側に行けば出られるかもしれない」

それは、希望的観測に過ぎなかった。

だが千秋は、その望海の推測に従うほかなかった。

二人が歩いていくうちに、周囲が霧が出てきた。

その霧はすぐに前が見えないほど深く、濃くなつていった。

「ねえ、あれつてやつぱり」

「知らない振りをして」

二人は濃い霧からはぐれないように、手を繋いでまっすぐ進んでいた。

彼女らの周囲には、黒い人影がぼんやりと浮かび上がり後ろの方へと過ぎ去つてい

く。

望海は努めて正面だけを見ようとしていて、千秋も周りを見ないようにしていた。やがて、二人の前に黒い影が現れた。

思わず足を止めた二人だったが、黒い影は霧の中から輪郭が露わになる。それは、黒い犬だった。

その犬は二人を見やると、くるりと踵を返して去って行った。

「……あ、あつちが出口なんだ!!」

「ほ、本当なの!？」

「それ以外考えられないじゃない!!」

望海は確信があった。犬は彼女が祈りを捧げる女神の遣いなのだから。

二人は走って、黒い犬の影を追う。

やがて、周囲の黒い影も見えなくなっていくた。

「……………え？」

誰かの声が聞こえた気がして、千秋は振り返った。

そこにあつたのは、電灯に照らされた暗闇だけだった。

「千秋!!」

「千秋ちゃん!!」

聞きなれた声に前を向くと、そこには幼馴染の二人がいた。

「か、帰ってこれた……の?」

「春美さーん!!」

望海は、目の前で跪いて女神像に祈りを捧げている春美に抱き着いた。

「助けてくれたんですねー!!」

「ありがとうございますー!!」

「……すごく略式の儀式だったから、この後正しい手順で供物を捧げるわよ、手伝って

よ」

「はい、喜んで!!」

望海はわんわんと泣きながら春美にしがみ付き続けた。

「……………」

「大丈夫か、怪我は?」

「千秋ちゃん……?」

もう一度背後を振り返った千秋の姿に、幼馴染二人は心配そうに声を掛けた。

——まだ、こっちは早すぎるよ、千秋ちゃん。

「ううん、気のせいだった」

未だ耳に残る言葉に物悲しさを感じながらも、千秋は二人に微笑んで見せた。

「これ、昨日借りた百円玉です。きっちり洗っておきました」

翌日、お昼休みの時間に望海が春美たちのクラスにやってきて、千秋の前にやってくる。百円玉を差し出した。

「普通に別の奴にしてくれればいいのに」

しぶしぶながら、千秋はそれを受け取った。

脳内で早めに自販機に入れる算段をしながら。

「昨日は御迷惑をお掛けしました。春美さんも、お手数おかけしました」

「別にいいわよ、私も助けられたし」

何だかんだで、望海の知識は魔女に師事しただけあって確かだった。

その知恵と機転が無ければ、千秋もきつと亡者の一員となっていたのだろう。

「ところで」

マーガリン入りコッペパンももしやもしやしていた春美は、望海に鋭い視線を向けた。

「何であなた、都市伝説なんて調べてたの？」

「あ、いやー、それがですね……」

望海は彼女の追及に言いづらそうにしながらも、観念したようにスマホを操作し、画面を見せた。

「実は、ブログを始めようかなくて。

ブームは繰り返すって言うし、私もオカルト写真をアップして広告料で荒稼ぎしようかと」

「ふっざけんな!!」

激怒した春美を三人が取り押さえ、望海は脱兎のごとく逃げ出した。

「もう二度と私の前に顔を見せるな!!」

春美は早くも、望海を助けようとしたことを後悔し始めるのであった。

友達について

「春美さーん!!」

その忌々しい声が聞こえた瞬間、春美は手にしていたコッペパンをぐにゆりと握り潰した。

中からブルーベリージャムが外に漏れだす。

「私は、もう二度と顔を見せるなって言わなかった?」

「またまたあ、先日は何だかんだで助けてくれたじゃないですか」

「あんだ、あんなことがあったのに全然懲りてないのね」

へらへらと笑っている望海を見て、千秋は心底呆れ顔だった。

「帰って。二度目は言わないわよ」

「ところで、春美さんってバイトとかする予定はあるんですか?」

「なんでそんなことを訊くの?」

「だって、ねえ? お金掛かるじゃないですか」

そう、魔術はお金が掛かる。

逆に言えば大抵の物事はお金で解決できてしまう、と二人の師は時代が変わったことを嘆いていた。

二人は先日 of 怪異に遭遇した後、女神への感謝を示すためにラム肉のブロックと国産蜂蜜を供物として捧げた。

これだけで諭吉さんが一枚消えて行つた。

遙か昔だとどれだけコストが掛かったか考えたくもないレベルだ。

「あの方もどんな方法で稼いでソシヤゲに廃課金しているかは知りませんが、いつまでも師匠におんぶにだっこつてのはどうかと思いません？」

「……」

春美は苦い表情になつた。全くその通りだったのである。

彼女の扱ふ魔術の素材等は、修行と言う名目で彼女の師が調達した物ばかりだった。

「私のブログ、初めて間もないんですけど、SNSとかでも宣伝してバズっちゃってかなり人が来てるんです。だから結構収入が見込めそうなんですよ」

「どうせ、はした金でしょ」

「わかつてないなあ、春美さんは」

近くにあつた椅子を引き寄せ、春美の横に寄せて座る望海はやれやれと首を振つた。

「私が記事でそれとなくホンモノの異能者と伝手があることをほのめかしたらメールに

霊障とかで困っている人から何件か相談が来たんです。

「この手の案件の報酬ってどれくらいだと思います？」

「……どれくらいなの？」

「(い) (よ) (よ)」

春美は望海が耳打ちしてきた内容に目を剥いて彼女に顔を見合わせた。

「そんなに？」

「少なくともそれだけの金額は提示してきましたね」

「……」

春美は実に苦々しい表情になった。

いかに世俗から離れて魔導の研究に没頭しようとも、生きている以上お金は切っても切り離せないことを実感したのである。

ましてや、現代の生活を知りながら電気ガス無しの自給自足になんて不可能だった。

「春美のやつ、なんであんな顔してるんだ？」

「たぶん、魔術師さんと同じような悩みなんだと思うよ」

傍目から見ている夏芽と真冬はそんな感想を漏らした。

「春美ちゃん、毎日コンビニの百円パン食べてるしね」

魔法使いも世知辛いなあ、と思う千秋だった。

「悪霊ぐらい、私たちで余裕でしょう?」

「あのね、望海ちゃん」

春美は一息吐いてから、周囲を見た。

クラスの連中が二人を見ていた。

「そんな話、ここでしないでくれる?」

「こうして会いに来ないとお話を聞いてくれないじゃないですか」

望海は少々不満げにそう言つて、椅子から立ち上がった。

「それじゃあ、放課後再びお話を伺いに行きます」

そう言つて、彼女は教室から去つて行つた。

それから春美は終始不機嫌そうにしていたので、友人たちも扱いに困つた。

そんな彼女が魔女の弟子だという噂がクラスに広まるのは、そう遠くない未来の話だつた。

§ § §

「……あの、春美さん。なんでこの人たち連れてきちゃつたんです?」

放課後、校舎裏で待つていた望海は春美とその後ろの三人組を見やり眉を顰めた。

「あのね、望海さん。あんた、あんなことがあったのにまるで懲りてないの？」

春美が何かを言う前に、千秋が前に出てそう言った。

「何ですか？ 素人は引つ込んでくれますか？」

望海はうつとおしそうに彼女に対応した。

「この間、あんなに酷い目に遭ったじゃない。」

なのにどうして危険なことをしようとしてるわけ？」

「私は千秋さんと違って身を守る手段がありますから。」

あの時、なーんにも出来なかつた千秋さんと違って!!」

「すつ転んでビービー泣いてたくせに」

「勝手にねつ造しないでくれますか?! 私がいっぱい泣いたって言うんです!!」

「その下手な敬語止めたら？ キモいよ」

二人の視線が交わり、火花が散った。

「はいはい、それまでにしとけて二人とも」

「千秋ちゃん、挑発しちゃダメだよ!!」

本格的に喧嘩が始まろうとした瞬間に、夏芽と真冬が間に入った。

「だって、こいつが!!」

「春美さんも大変ですね。」

こんな面倒な人に仕方なく付き合っただけでいいわよ？」

二人に遮られているのを良いことに、望海は嘲るようにそんな挑発を投げかけた。案の定、千秋は激怒したが、二人が必死に彼女を抑えた。

「彼女たちを連れてきてしまったのは悪かったわ。」

「だけど、それ以上下らないことを言うなら私は帰るわ」

「本当に、分かっているんですか、春美さん？」

望海は少しだけため息を吐いて、三人を見やる。

「私たちはあの御方に師事した時点で、普通の人生なんて無いも同然ですよ？」

春美さんは高校を卒業したら素敵なキャンパスライフでもしますか？

サークルに入っただけで仲間と遊んだり飲んだりする日が来るとでも？

否が応にも私たちは周囲を巻き込みますよ？ この間の私みたいに」

望海は真剣に春美の目を見てそう言った。

だが、いい加減に春美も彼女の物言いに嫌気が差していた。

「そんなこと、分かっているわよ!!」

でも私に穏便に距離を置く方法なんてわかるわけないじゃない!!」

そんな彼女の唐突な叫び声に、望海だけでなく三人組も固まった。

「師匠の弟子だっただけのことほのめかしたりしたけど、全然ダメだったし!!」

だって普通、師匠みたいに皆から恐れられたりするものでしょう!?

私にこの三人みたいに仲のいい友達なんていなかったんだから、今でもどう接すればいいか時々わからないし!!

今こうして一緒に来るって言われた時も断れなかったし!!

それに師匠もこういった時にどうすれば良いか教えてくれなかった!!」

春美は感情のままに、矢継ぎ早に思った言葉を吐き出し続けた。

「どうせボッチの私を面白がってるだけだと思ってるのに、気が付けば一か月以上経ってるし!!

そりゃああなたが言ってた通り、滑稽でしょうよ!!

もう要らないと思ったモノが、もう切り捨てたと思ってたことが!! 目の前に転がり込んでくるんだもの!!

あなたに言われなくなっちゃって、自分が惨めだって分かってるのよ!!」

「あ、いや、春美さん、落ち着きましょう?」

今まで見たことのない姉弟子の姿に困惑しながらも、望海は彼女を落ち着かせようとしたのだが。

「そうよ、あんたの方が正しいわ!!

私だってそう思うわよ!! でも世俗と完全に切り離して生きるなんて師匠にだって

できないじゃない!!

今時中卒なんてあり得ないし、でも私たちが学歴を気にするのは無駄だって分かってるわよ!!

私にだって師匠に免許皆伝を貰うまでは人里で過ごさないといけないのよ!!

でもどつちにしろ私に山奥で暮らすなんて無理だし、世間体を気にするなら高校中退とか嫌だから!!」

「私は別に学校を辞めろだなんて言ってもせんよ!!」

話の方向性が明後日の方向に行っていることなど気にせずとにかく言葉を涙声でまくし立てる春美に、怒鳴られ続ける望海も泣きたくなってきた。

「一番ムカつくのは!!」

春美はもはや望海を見ることさえせずに、何かに向けて当り散らしていた。

「結局、周囲に同調しているのが性に合ってるってことなのよ!!」

全ての感情を発露させた彼女は、荒い息を整えるように肩を上下させた。

春美にとって人間関係とは、我慢と忍耐だった。

それらを感じなくて済むことを教えてくれる人に出会ったら、今度は煩わしいはずの人付き合いが悪くないと思えてしまった。

こんな不条理を馬鹿馬鹿しいと言わずなんと言うのか。

己の師と、三人組。出会う順番が逆なら、きつと春美の人生は真逆のモノになっていたのだろう。

だがそれでも、それを春美が認めることは出来なかったのだ。

彼女は、そんな素直でまっすぐな性根をしていなかった。

「あの、春美ちゃん……」

実に居心地が悪そうに、千秋が口を開いた。

「なんだかごめん、無理言っつて付いて来たりして……」

「私も喧嘩になるの分かってて止めなかったし」

「正直私も二人が何を話すのか気になって」

千秋に続き、夏芽と真冬もバツが悪そうに春美の背中にそのように謝った。

彼女たちは稀有なことに、或いは悲しいことに、今まで春美が出会ったことのない種類の人間だった。

そして彼女らの素直さや優しさは、性根が根暗な春美を余計に惨めにさせるのである。

「望海ちゃん」

黙って顔を逸らしていた望海が、彼女の言葉に顔を上げた。

「あなた、ネズの秘薬を持ってるでしょ？」

「え、はい、護身用に」

言つてから、望海は春美が何をしようとしてるのか気付いてハツとした。

「ちよつと、春美さん!？」

なにもそこまでしなくたって!!」

「いいから貸しなさい!! あなたが言い出したことでしょう!!」

春美にそう言われてしまつては、望海も苦渋の表情でカバンの中からペットボトルを差し出した。

それは350mlの容器で、中に緑色の液体と木の枝が入っていた。

「なあ春美、それ、なんの葉なんだ?」

夏芽とて、そのペットボトルの中身が緑茶などとは思っていない。

嫌な予感がひしひしと、春美から伝わってくるのだから。

「大丈夫」

三人に振り返つた春美は寂しげに微笑んだ。

「後遺症とか、無いから」

ペットボトルのキャップを外し、その中身が開け放たれようとした。

「はあ」

そんな時、深いため息が聞こえた。

「春美」

「ッ、師匠!!」

なぜ今まで気付かなかったのか。彼女の言葉に、全員が驚きの表情でその姿を認めた。

黒いケープの魔女が、校舎の壁に背を預け立っていたのである。

「その薬、人間相手に使ったらどうなるかしら?」

「す、数日は眠ったまま起きません!!」

「それが普通ではないことだと、どうして思い当たらないのかしら」

ゆつくりと、魔女は春美に歩み寄る。

たったそれだけの仕草だけで、春美は竦み上がっていた。

「あなたの悪い癖ね、一時の感情に身を任せ過ぎる」

「し、師匠!! 春美さんが、彼女たちの記憶を奪おうと!!」

春美は焦って師に告げ口をする妹弟子を恨めし気に睨んだ。

「分かっているわ」

黒い魔女は最初から一切の表情を変えず、望海に頷いて見せた。

そのやり取りを見て、三人組は春美を見た。本当なのか、と。

「春美、あなたは無責任だとは思わないのかしら？」

「え？」

まさか師からそんな言葉を投げかけられるとは思わず、春美は顔を上げた。

「今さら彼女たちの記憶を消したところで、縁は切れない。」

私が放課後、校舎や町を見て回っているのは知っていますでしょうか？」

「はい」

「私はこの土地の地脈を掌握し、恩恵を得ている。」

その時点で、この町は良くない物を引き寄せている。

あなたが誰かに関わろうと関わるまいと、私がこの町に居る時点で同じことなのよ」

その会話を聞いて、三人は思い出す。

この黒衣の魔女と初めて遭遇した時のことを。

「それに、なぜあなたが悩むのか分からないわ。」

何かに巻き込んでしまうことが嫌なら、あなたがどうにかしなさい。

この間、あなたがそうしたようにね」

「ですけど、私は全然未熟で」

「だから？ 私は咎めているわけでも言い訳を聞きたいわけでもないわ。」

仮に彼女らの記憶を消したところで、何かしらの怪異にでも巻き込まれたら……どうせあなたはうじうじと後悔するわよ。

そんな調子で、私に教えを乞うと言うの？」

「……」

彼女の言うとおりであった。

春美が三人の記憶を奪って他人面したところで、結局同じクラスなのだから意識しないわけではないのだ。

「当たり前のように勉強を学び、当たり前のように友人と過ごす時間は貴重よ。」

なにせ以前の私はそんなものは得られなかったのだから」

「……はい」

「まあ、説教するつもりは無かったのだけど。このままだとあなたがあまりにも哀れだから」

もう一度、学園の魔女はため息を吐いた。

なぜ今時の人間は自分たちが恵まれていると理解できないだろうか、とでも言うように。

「私を言い訳に使うのは止めて頂戴。」

私は少しも、あなた達の生き方を縛るつもりはないのだから」

弟子二人にそう言って、黒い魔女は校舎裏を去っていく。

「あ、あの!!」

魔女の足音だけが聞こえるようになった校舎裏で、一人の少女がその背に声を掛けた。

真冬だった。

「こ、この間はありがとうございました!!」

良ければ、また今度お話でもしませんかッ!!」

彼女は精一杯の言葉で、同じ同級生にそう言ったのだ。

「……ええ、また今度ね」

肩越しに振り返って、魔女は微笑んでそう言った。

「……三人とも、ごめん」

「あー、じゃあ、何か奢りな。二人は?」

「私もそれでいいわよ」

「私もー」

「じゃあそれで」

ペーり、と頭を下げる春美に、夏芽が二人の意見を取りまとめて笑った。

§ § §

「いやー、悪いですねー、春美さん。

私の分まで奢ってもらっちゃって」

四人、ではなく、五人はあの後、ファーストフード店に直行した。

「別に、あなたにも怒鳴っちゃったし」

「この分は例の件の報酬で返しますね」

「忘れてたわ……」

結局その話は出来ずじまいだった。

「なあなあ、私らもそれ、見に行つていい？」

「ちよつと、何気なく私たちを巻き込まないでよ」

ハンバーガーをもしやもしやしている夏芽に、千秋が横目で睨む。

「あ、でも私は興味あるな」

「真冬まで……」

しかし真冬の方は興味津々なようであった。

「あなた達ねえ、遊びじゃないのよ」

「良いじゃないすか、何かあったら春美さんが守れば」

望海は完全に面白がっていた。

その様子に、春美も顔を顰めた。

「師匠はああ仰ってたけど、あなたはどうするの？」

一応友人は居たんでしょ？」

「はあ？　ちよつと忙しいからSNSで返信遅れただけでシカト決め込む奴らとか私し
らなーい」

「ああ、そう……」

春美はこれ以上聞かないことにした。

主に自分の傷が開きそうだったから。

「それに、春美さんたち四人に関わっている方が面白そうですし。」

あ、そつちのSNSのグループ教えてください。連絡先教えてください」

「……はあ」

これからはこいつが遠慮しなくなる、と思うと、何だか気が重くなる春美だった。

そして、スマホを見ている四人を見て、春美はこんなことを思い出した。

昔いた女子グループは、お互いに友達だよなー、と確認するように言い合っていたこ
とを。

だが春美たちはそんなことを一度も言い合ったことは無かった。

友達はいつものまにかなっているモノなのだ、いつたいどこのマンガの言葉だっただろうか。

そんなことを、春美は思っていた。

事故物件について

「ちよつと、話が違ふんじやないんですか？」

望海は怒りをあらわにしてそう言った。

「そちらの物件に住み着く悪霊を退治する為にわざわざ遠くからやってきたと言うのに、今さらキャンセルだなんて!!」

「それについては申し訳ありません。」

ですが、こちらも余裕があるわけではないのです」

望海と男が揉めているのを、四人組は遠目で見ていた。

「なんだか、話がまとまらなそう」

「でも、どうして急に？ 依頼されてたんじやなかったのか？」

「うまい話はないとは思ったけど、しよつぱなからこんな調子か」

両者の言い争いが続き、諦念を抱き始めた真冬。

どうしてこうなったのかと疑問を抱く夏芽に、その様子に呆れ果てる春美。

「こんな調子で大丈夫なの？」

そして幸先の悪い出だしに、さっそく不安を抱く千秋だった。

四人組＋αは、休みの日に電車に乗って依頼があるという町へとやってきていた。

そこに霊障があるという物件を抱えた不動産屋が居るのだと言う。

しかし肝心の依頼主に会ったら、依頼はキャンセル。

このままでは電車で大赤字である。

話はこちら、今では望海がキャンセル料を払えと言い出している始末である。

「望海ちゃん、もう良いでしょう」

「春美さん、ですけど!! 最低限交通費ぐらいはふんだくらないと!!」

「今回はあなたの詰めが甘かったと言うことになっておきましよう。」

ところで、霊障は実際に出ているのでしょうか？ なぜ土壇場で依頼を取り下げらるん

ですか？」

未だ依頼主に食い下がろうとしている望海を押しつけ、春美が大人の対応に出た。

「いえ、実はまだうちの物件の問題は解決してはいないんですよ」

胡散臭そうにこちらを見ている不動産屋の男は、最低限説明しないと帰らないと思っ

たのか、ため息と共にそう言った。

「では、なぜ？」

「奇特な方がおられましたね。」

別のところに相談したところ、無償で悪霊を払ってくれるという人物が現れたんですよ」

「別のところ？」

「あの丁度、その方と約束の時間なのです。いい加減お引き取りください」
不動産屋が苛立たしげにそう言った時だった。

「もし」

かっかつ、とその女は足音を立てて現れた。

その姿を見て、望海と春美はゲツと顔が引きつった。

「あなた様が今回我らが教会に救いを求めておられる方でしょうか？」

その女は、修道服を身に纏う若い修道女だった。

そしてなぜか大きめの旅行カバンを携えていた。

「ああどうも、シスター。お待ちしておりました」

不動産屋はごますりしながら彼女を出迎えた。

「……彼女たちは？」

「ああいえ、彼女らとはちよつとした行き違いがあります」

胡乱な視線を投げかける修道女に、不動産屋はそんな説明をした。

彼の近くにいた二人は、いつの間にか距離を取っていた。

「撤回、皆帰ろう」

「了解です、春美さん」

春美は短くそう言い放ち、望海もそれに賛成した。

「どうしたの、二人とも？」

その変わり身の早さに、夏芽は目を白黒させていた。

「たぶんほら、あれじゃない？」

教会のシスターさんみただから、二人とは相性が悪いとか」

「ああ、そう言う」

喧嘩になる前に撤退する、賢い判断だと真冬の推察を聞いた千秋は思った。

二人は仮にも魔女の弟子である。キリスト教徒と仲良くできるはずもないと感じたのだ。

「どういった経緯かはわかりませんが」

修道女は不動産屋と春美たちを交互に見て、こう言った。

「お話にあった霊障を私が払える保証は有りません。

彼女たちにも同行してもらい、後詰めになさっては如何でしょう」

「え、ですけど……」

「彼女たちにも依頼をしておきながら、都合が悪くなったら一方的に追い払うのは不義理が過ぎましよう」

「それはまあ、仰る通りで」

そのように不動産屋を納得させた彼女は、警戒を露わにしている二人と三人に顔を向けた。

「だそうです、いかがですか？」

生気の無い視線が、彼女らに問う。

「……」

「……………」

結局、件の物件のことが心配だった二人は、同行することにした。

ただし、終始無言で修道女から常に五歩は離れた位置をキープしていたが。

「なあ、そんなに警戒するような人か？」

物件への道中、こつそりと後ろを歩く二人に声を掛ける夏芽。

「師匠の教えなの。キリスト教徒に関わるなって」

「特に悪魔祓いはろくな連中じゃないって」

ぼそぼそ、と夏芽の質問に二人は答えた。

「でも無償で悪霊退治を引き受けてくれるんだから、良い人かもよ？」

「あの目を見たでしょ？」

真冬の樂觀的な意見を、望海はまるで聞き入れる様子ではなかった。

「奴はホンモノですよ。実力のほどは知りませんがね」

「まあ、うちの学校のメガシンよりずっと死んだ目してるけど」

千秋はなぜ二人がああ修道女をここまで警戒するのか理解できない様子だった。

「実力って、教会のシスターにそんなのあるのか？」

「ってか、そもそもキリスト教は魔法とか呪術とか否定してるじゃん」

物静かな女性にしか見えない修道女を見て夏芽はそんなことを小さくぼやいた。

「連中が否定しているのは魔道の実践で、魔道そのものの存在は認めてるんですよ」

「まあ、実際に今の時代にもあるしね」

「自分たちが使う術を奇跡と言いついて換えてるらしいし、所詮はそんなものよ」

真冬は警戒心を解かない二人を見て、どういう反応をすれば困った。

「まあ、同業者かどうか判断するのに、最も確実な方法がありますけどね」

「望海ちゃん、あらかじめ言っておくけど止めてよね。フリとかじゃないから」

「私がそんな藪蛇を踏むとでも？」

ちつとも信用されていない望海は半眼で春美を見やった。

「それって、勿論呪ったりするとかじゃないよね？」

「違いますよ、単に相手を指差だけです。」

ほら、ガンドって指を差して発動する呪いがあるんですよ」

「ああ!! 知ってる知ってる、アニメで見たことある」

疑わしげにしている夏芽をよそに、真冬は心当たりがあるのかポンと手を叩いた。

「私もアニメで知った口ですけどね、それを師匠に言ったらこれも時代かって言ってしまったよ。」

あの御方と仲良くしたいなら、冗談でも指を差したりしないように。

……冗談じゃなく、指をへし折られますから」

苦々しい表情をしている望海の横で、春美もこくこくと頷いていた。

「しないから大丈夫だよ」

やや怯えながら、真冬たちも頷いた。

彼女らは何となく、日本でも相手を指を差す行為は失礼に当たる理由に呪術的意図を感じざるを得ないのだった。

§ § §

「いいです」

そして不動産屋に連れられやってきたのは、アパートの一室だった。

彼が鍵を開けると、室内へのドアが開けられた。

「なるほど」

「ああ、これはダメね」

修道女と修業で多少霊的感覚を得ている春美も、通路からでもその部屋の異質な空気を感知取った。

魔女の本格的な修業を受けていない望海も、スマホを取り出し玄関をカメラで一枚撮った。

「うわッ」

そして映った物を見て、思わず体をスマホから遠ざけた。

気になった三人組がそれを覗いてみると、表情を引きつらせた。

そこは、まるでホラーゲームのように赤黒い染みが玄関の壁紙やフロアリングに浮いていたのである。

「これ、完全に異界化してますね。ここで何があつたんですか？」

何やら不穏な様子を感じ取って不安そうにしている不動産屋に春美が問うた。

「ええと、あまり大きな声では言えませんが、以前この部屋で首吊り自殺がありました……」

「ああ所謂、事故物件って奴か。」

うちの両親も前にそれで民事裁判やったって言ってたなあ。ロンダリングされた事故物件だったって、被害者が訴えて弁護したって」

「ええまあ、デリケートな問題でして」

夏芽の言葉に頷くように、不動産屋が言った。

「正直におっしゃった方が宜しいですよ」

感情の無い視線が、部屋の中から不動産屋へ向けられる。

「人間が一人死んだくらいで、こんなになるはずがありません」

「ここはそれだけの怨念が渦巻いている」

「わ、私の口からは何も」

修道女の追及に、不動産屋は露骨に目を逸らした。

「まあ、いいでしょう」

彼女は特にそれ以上尋ねることもなく、旅行カバンからオリーブオイルの瓶を取り出した。

その中身を手のひらに零し、袖を捲って手足に塗った。

「私は行きます。救われぬ魂を導かねば」

そして、修道女は部屋の中へと入って行った。

その後、春美はドアを閉めて、五芒星の描かれた札を入りに張った。

「え、閉めちゃうの？」

「だって危ないわよ」

春美にそのように言われては、千秋には何も言えなかつた。

「たぶん、大丈夫でしょう。あの人、本職みたいですし」

「シスターに本職もなにも無い気がするけど」

「いえ、あれは——」

望海が夏芽に何か言おうとした時だった。

ドン、と室内から何かを打ちつけるような音が聞こえた。

不動産屋は青ざめ、五人も押し黙った。

それから中から断続的に物音が聞こえ始めた。

春美は無言でドアに札を追加した。

その直後、ドンドンドン、と入り口のドアを叩くような音が通路に響いた。

張つてあつた五芒星の札が黒ずみ、何十年も風化したように塵となつていく。

「焼け石に水ね、下がってて」

春美は恐怖に慄いている不動産屋や、スマホを弄っている望海と絶句している三人組を後ろに下がらせ、三叉路の中心になる位置に女神像を置いた。

やがて、きいい、とドアが開いた。

静寂。

「……ねえ、終わったの？」

恐る恐る、夏芽が尋ねた。

春美は女神像の前に跪き、祈りの姿勢のまま何も答ええない。

そこで彼女らは開かれたドアの内側には、無数の引つ掻き傷が刻まれていたことに気が付いた。

「内装工事をしたばかりだというのに!! これ以上部屋を傷つけられては困る!!」

その時、なぜか焦燥感に駆られた不動産屋が、部屋に近づこうと前に出た。

それはまるで、部屋に誘われるかのように、不自然に。

「ちよ、あのおじさん大丈夫なの!?!」

「この位置から動くと二の舞になりますよ」

スマホを弄りながら、望海が慌てた千秋に忠告した。

不動産屋の姿が室内に消えていく。

すぐに彼の悲鳴が周辺に響いた。

「あの、助けなくていいの？」

「無理そう。私の方でも何とかしてみたけど、まるで駄目。

多分、あちらの術と競合している」

祈りの姿勢を解いて立ち上がる春美が、ため息交じりに真冬にそう言った。

「まあ、自業自得でしょ」

望海はスマホの画面を見つめたまま、冷たくそう言った。

その時だった。

澄んだ歌声が聞こえてきたのは。

「これって、讚美歌？」

それは部屋の中から聞こえるのだと、真冬は感じた。

「綺麗な歌声……あれ？」

その神聖さすら感じる歌声に聞き惚れていた千秋は、両耳を指で塞いでいる春美と望海に首を傾げた。

「二人とも、どうしたの？」

「これ、霊体や活性化した魔力の持ち主にダメージを与える術っぽい」

「手こずつてるとは思ったけど、あのおじさんが来て危ないから強硬手段に切り替えた感じですかね」

と、二人は顔を顰めて言った。彼女らも多少なりとも影響を受けているらしかった。

「終わりました」

その歌が終わると、修道女は部屋から出てきた。

勿論、青ざめて震える不動産屋を引きずりながら。

§ § §

「いやあ、結局お金貰えてよかったですねえ」

にこにここと笑みを浮かべ、封筒の万札を数える望海。

しかし、他の四人は複雑そうな表情をしていた。

「あのおじさん、結構やらかしてたんだねえ」

夏芽は先ほどのやり取りを思い出し、眉を顰めていた。

あの後、仕事を終えた修道女は脇目も振らずに立ち去って行った。

これ幸いと、望海は不動産屋にキャンセル料を請求したのだが。

「ふざけるな!! お前たちは何もしていないじゃないか!!」

と、当然彼は激怒した。

しかし望海はすかさずスマホを取り出し、画面を見せた。

「この方、ご存知ですよね」

「ツ、そいつは……」

その画面には、みすばらしい老人があ部屋に入って行こうとする画像が映っていた。

「このおじいさん、バイトでしょう?」

身よりの無いホームレスにタダ同然で貸して、事故物件のロンダリングしようとした。

でもこの人、近くの川辺で身投げしたみたい。この部屋に住んでいたせいで」

望海は念写で、あの部屋の異様な有様の原因を探っていた。

たった一人の自殺で、あんな怨念が渦巻くのはおかしいのだから。

そして、この不動産屋の男が誘われたのも。

「他にも似たようなこと、何件かあったんではよ?」

あの部屋で死んだわけじゃないから、知らぬ存ぜぬを通して」

望海だけでなく、春美たちの視線も次第に軽蔑の色を帯びていった。

「あんたに良心が残ってるなら、供養代ぐらいだしなさいよ」

春美がため息を吐いてそう言うのと、不動産屋はうつむき震えながらも小さくうなずいた。

その後、二人は呪われた事故物件の犠牲者の冥福を祈った後、友人たちと一緒に帰路についた。

「往復の交通費がこれで、今日の打ち上げにこれだけ使うとして、私と春美さんの分け前がこれぐらいいかな」

「おツ、望海ちゃん太っ腹!! どこ食べに行く?」

費用を計算している望海の呟きに、食い意地の張っている夏芽が反応した。

「夏芽ちゃん、私たちこそ何もしてないんだから、そこは建前だけでも遠慮しておこうよ」

「千秋も結局建前だけなんじゃないか!!」

「春美ちゃんたちはどこ食べに行きたい?」

「待って、今口コミでこの辺の店を探してるから」

春夏秋冬の四人組はそれぞれそんなやり取りをしていると。

ふと、春美が足を止めた。

一歩遅れて、望海も気付いた。

不自然に人気の無い一本道の先に、あの死んだ目の修道女が立っていることに。

「いきげんよう、先ほど振りですね」

彼女は抑揚の感じさせない声で、そう口にした。

真冬はこの人物がああ美しい歌声の持ち主とは思えなかった。

「正直なところ、あなた達程度見逃してあげようかと思っていたのですが」

修道女は先ほどは持っていなかったギターケースを地面に降ろした。

「あなた達の扱う術には、覚えがある」

ギターケースのジッパーが開かれ、その中から現代の人間には見慣れないが誰もが知っている物体が現れた。

刃渡り九十センチ以上の、ロングソードだった。

「あなた達にその術を授けた人間がどこにいるか、拷問してでも吐いてもらいましょう」
すう、と彼女が慣れた手つきでその剣の切っ先を彼女たちに向ける。

ギョツとしている一般人三人に対し、彼女らの前に出た春美。

そして、望海は冷静に行動に移した。

「あ、もしもし、警察ですか？」

助けてください!! 刃物を持った変なコスプレした女に襲われそうになってるんです!!」

ピーポーピーポー。

「ほら、中に入って」

そして十分後、警察に連れて行かれる刃物を持った修道女という状況が誕生した。

「いや、あの、これは誤解でして」

「うえーん、あの人、私たちを拷問するとか言ってたんですー」

「だそうだが?」

「……………」

ばたん、とパトカーに押し込まれ、刃物を没収された修道女は警察署に連れて行かれるのだった。

事情聴取が終わり、嘘泣きを止めた望海と四人組は去っていくパトカーを見て哀愁を感じていた。

「時代が違うって、残酷なんだなあ」

そんな真冬の眩きに、無言でうなずく四人だった。

聖職者について

「あの、カタリナさん。そろそろ何かお話になってくれませんか？」

警察官たちは困り果てていた。

その理由が、目の前で祈りを続けている修道女のことである。

鋭利な刃物を所持し、暴行の疑いで警察署に同行してもらったこととなった。

彼女の所持品から、身元は判明していた。

だが、彼女は事情聴取に一切応じない構えを見せていた。

困り果てていた理由は他にもある。

彼女から押収したロングソードが行方不明なのである。

より正確に言えば、物証としての機能を失っていた。

「剣がいつの間にかバラの花びらになっていたなんて、どう調書に書けばいいんだ……」
重たい剣を抱えていたはずの警察官は、突如としてその重さが消えて無数のバラの花びらが目の前に散らばっていたと話した。

その上、暴行の容疑と言うことで手錠を掛けたら、現場の警察官の手錠がいつの間にかすべて破損していた。

ハッキリ言って、地方の警察署ではお手上げの事態である。

こう言う場合、すみやかに警察庁の異能係に連絡することがマニュアル化されていた。

下手に突いて呪いの類でも掛けられても困る為、事情聴取もまともにできない有様だった。

「相手方の方も、訴える気は無いと言っているし、こちらとしてもちゃんとお話をしてくだされば不起訴にしてもよろしいんですよ。」

だから聴取に協力してくださいませんかね？」

実際に剣で人を斬り殺しているわけでもなし、彼らは彼女におかえり願うことで終わりにしたかったのである。

警察庁には報告だけ済ませ、不思議な力があつたのでちよつと舞い上がった、的な感じで嚴重注意しておいたとでも調書に書いて終わらせようかという現場の判断になるうとした時だった。

「あの、カタリナさんの保護者の方がいらつしやつたのですが」

婦警が初老の神父を連れて現れたのである。

彼は彼女の姿を認めると、表情を変えた。

「申し訳ございません、うちのカタリナがご迷惑をお掛けしたようで!!」

「神父様、私は悪くありません。これは不当な弾圧です」

「だまらっしゃい!! あなたがそんな態度だから話がこじれているんでしょ!!」

神父は彼女を叱りつけると、警察官たちに謝り始めた。

「皆さん、すみません。カタリナは昔から変わったところがありました……」

「あー、それはつまり、押収品をバラに変えたりですか?」

「はい?」

警察官も言い難そうに神父に尋ねると、彼も素っ頓狂な声を上げて彼女へと振り返った。

「カタリナ!! あなた、神聖なる御業を悪用したのですか!!」

「神父様、なぜ彼らは奇跡を目の当たりにしても自分たちの行いを改めず、改宗しようとしなないのでですか?」

「ダメだ、こいつ自分がなぜ悪いのか分かっていない……」

この物言いに、神父は頭を抱えた。

「あのですね、今は民主主義の時代なんですよ。教会が権威を保証する時代じゃないんです!!」

しかもここは日本です!! 国家が個人の信仰を決める国ではないのです!! 前に教えたでしょう!!」

「だからこそ、教化は必要なのでは？　人間宣言のようにアマテラスはヤハウエであると言われれば万事解決です」

「馬鹿ッ、このお馬鹿!!　そしてこんな風に育てた私の馬鹿!!」

神父は目の前の保護対象がここまで世間知らずだとは思わず、がつくりと肩を落としたり。

「すみません、見ての通り、あまり教会から出ないもので、世間知らずなものでして」

「ええと、失礼ですが、年齢は十六歳とのことですが、通学は……」

「一応、通信制で。当人はあまり身に入っているとは言えません」

神父も警察官の質問に、心苦しそうにそう言った。

「本当に申し訳ございません、当人が特殊な事情ゆえに私が甘やかすすぎたようです。

今回のことはよく叱りつけておきますので、どうか穏便に……」

ひたすらに頭を下げる神父の姿に、警察官たちも居心地が悪そうに顔を見合わせるのだった。

§ § §

「カタリナ、あなたが他人とは違う事情の持ち主だと言うのはよくよく理解しています。

今回は私も悪かった。少しでもあなたの力が人々の役に立てるのならと、一人で送り出したのはまだ早かった」

何とか神父は警察に謝り倒し、カタリナを連れ出すことができた。

そして彼の運転する車で帰路につく最中だった。

「まったく、こんなものどこで調達したのやら」

神父は助手席に立てかけられているロングソードを苦々しげに視線を一瞬だけ向けた。

「良いですか、この国では、いえこの時代では人を傷つけたら傷害罪、人を殺したら殺人の罪なのです。

あなたは悪霊が出たと言う部屋の調査をしに行っただけでしょう？ なぜこんなことに」

「魔女が居たのです」

車窓から夜の町並みを胡乱な視線で眺めているカタリナは、そう言った。

「私の魂の記憶にも刻まれた、邪悪な魔女が活動しているのです。

この私が見間違うはずがない。奴が、この時代にのうのうと生きている!!」

その言葉は、保護者の神父にして初めて聞くほど感情の籠った声だった。

「そうは言いますがねえ、カタリナ」

神父として、昨今のオカルトブームには物申したい気持ちがあった。

だが、それでも言わなければならぬ言葉があった。

「あなた、別に異端審問官でも魔女狩り担当の判事でもなかったのでしょうか？」

「……………」

「あなたはかつて、私に言いましたね。——この世界は地獄だったと」

カタリナには、今生とはまた別の人生の記憶があった。

だがそれはキリスト教徒としては認められない事実だった。

それが事実なのだとしたら、カタリナは天国に行けなかった罪人なのだから。

その記憶が彼女を苛み、幼い頃から教会で引き取ることになった要因にもなった。

この人のできた神父にも、彼女がこの時代がどのように映っているのかまでは分からなかった。

「私はそうは思いませんよ。」

あなたの記憶も、何かしらの神の思し召しなのですから。

昨今の異端の術を扱う者達が現れたのも、もしかしたら神様が機会を与えてくださっているのかもしれない」

「それで？ その連中が神のアガペーを理解するような連中なのですか？」

「少なくとも、剣で叩き伏せるようなことをしては人のことを言えませんよ」

そんなことをする時代ではない、それはもう彼女も何百回と聞いた言葉だった。

「それに、あなたが所属していたという組織の目的はもう達成されているのでしょうか？」

ならばこそ、今度こそ天国に行けるように善行を積んでいきなさい」

神父は最初カタリナの告解をした時、その荒唐無稽な話を信じることはできなかった。

だが、彼女の持つ奇跡の力を見て、考えが変わった。

彼としては神の存在を確信したほどである。

だが、当人はこの世に絶望しきっていた。

まるで本当に地獄に居る亡者のような生気のない様子に、度々彼も心を痛めていた。

だから今回、彼女だけができることをやらせて、自信や生きる理由を思い出してほしかったのだが。

「カタリナ、どうか馬鹿な真似は考えないでくださいね」

「……………」

返答は無かった。それが、どうしようもなく彼の不安をかきたてるのだった。

カタリナの住む教会の敷地には、見事な桜の木がある。

しかし今の時期はもうほとんど花びらが落ちて、緑色の葉が顔を覗かせている。落ちて黄ばんだ花びらを掃除するのが、彼女の最近の日課だった。

「カタリナさん、おはようございます」

「おはようございます」

「今日もお掃除ご苦労さまです、カタリナさん」

「どうも」

朝の礼拝の時間に教会にやってくる人たちに挨拶をするカタリナ。

愛想は悪い彼女だったが、日本人には物静かで物憂げに見えるらしい。

「……この世界は狂っている」

カタリナは常々そう思っていた。

邪悪な魔女が蔓延り、それを持ってはやしている世間。

便利さを理由に人々は墮落の限りを尽し、貞淑は美德ではなくなっていた。

彼女の記憶には、人々はもつと必死だった。

おぞましいペストが過ぎ去り、周辺諸国は戦乱の時代に彼女の前世は産まれた。

所謂ルネサンス期と呼ばれる、当時のイタリヤだ。

芸術の黄金時代であった当時は、しかし彼女の前世はそんなものとは無縁だった。

彼女は傭兵団の一員として育てられた。

それもただの傭兵ではなく、百年も昔に壊滅したテンプル騎士団の末裔だという。

それが真実かどうかは眉唾だったが、験を担ぐ傭兵団でもとりわけ信仰に厚く、そして正義の為に戦った。

この時代、魔女とは人の姿をした人ならざる怪物だった。

人肉を食らい、魔術で人心を惑わし、墮落させる。

彼女のいた傭兵団の最終目標は、異端とされた祖先であるテンプル騎士団の名誉回復だった。

そのために、異端まがいな術に精通し、聖人たちの奇跡を再現し、領主に金を貰い魔女を殺して回った。

現代では当時の魔女狩りは集団ヒステリーやら何やらが原因だとされているが、当時を生きていたカタリナがそれを歴史書で知った時は思わず鼻で笑ってしまった。

彼女は実際にホンモノの魔術を操る人間と殺し合ったのだから。

邪悪な人体実験で神の御業を汚す錬金術師、死者を冒瀆する死霊術師、ペストを自在に操る死神の如き呪医、人々を扇動し惑わす呪術師、そして見本のような黒衣の魔女が世に跋扈していた。

ジャンヌダルクが本物の聖女か確かめる為に、調査団を派遣したことさえあった。

当時の権力者たちは、そんな連中の実在を許さなかった。

だから彼女のいた傭兵団は珍重され、必要なくなったら潰された。

その最期は無様なもので、味方から作戦行動中に命令違反をしたとして見せしめに処刑されたのだ。

彼女の傭兵団が歴史に名前すら残っていないなかったことを今生で知り、彼女は絶望した。

そして彼女たちの活動如何など関係なく、数百年後にテンプル騎士団の名誉は回復していた。

彼女の前世が善行と信じて行った全てが無意味で、天国に行くどころか約六百年も先の時代に再び生を受けることとなった。

彼女が無気力になって、亡者のようになっての信仰にすがって生きるだけになったのも無理はなかった。

「よっ！」

だから、まさかかつての仇敵が目の前に現れようなどと、彼女は想像する気力さえもなかった。

「……誰ですか？」

カタリナは掃除の手を止め、胡乱な視線を向ける。

黒い皮製の服装に、サングラス、動物の毛並みのような髪型の女が居た。

当然、知らない人物だった。だが、彼女の嗅覚は死を経ても衰えていなかった。

瞬時に魔術の臭いを感じ取ったカタリナは、地面の桜の花びらを蹴りあげた。

桜の花びらが舞い、彼女の手元に集まった。

その手には、いつの間にか先日神父に没収されたロングソードが握られていた。

「その術はシエナのカタリナの聖骸隠しの、ってことはお前、総長か!! 神聖聖堂騎士団の!!」

「その名を知っているということは、貴様も同じ境遇か。

そしてこの臭い、覚えがある。死臭に混じった毒薬の臭い、貴様、あの時に出会ったネクロマンサーか!!」

奇しくも、一目でお互いにお互いが誰だったか気付いてしまった。

「いやあ、お互い女になるなんてなあ。

こんなこともあるもんなんだな、いやあ面白い」

「私は再び貴様の顔を見る羽目になって不愉快極まりないがな」

カタリナに剣の切っ先を向けられる女は、しかし緊張感も欠片も無かった。

「おーい、見つけたぞ」

「おい化粧屋、お前何したんだよ、剣なんて向けられて!!」

女が振り返ると、教会の敷地の外から男が現れた。

「待て待て、俺は警察庁の物だ。先日の事情を窺いに来ただけで、俺たちに危害を加えるつもりはないんだ」

この平和な日本で危害を加えるもなにも無いが、初めにこれを言っておかないと酷い目に遭うことをこの刑事は良く知っていた。

「警察が、なぜそんな邪悪な人間と一緒に居るのですか？」

「うん？ そりゃあ勿論お前らの顔を見たかったからさ」

化粧屋はニタリと笑ってそう言った。

「なんですって？」

「私は今、警察に協力しててな。他の同業者の橋渡しとか捜査協力とかしてんの」

「どうかしている」

「俺もそう思う」

吐き捨てるようなカタリナの言葉に、思わず刑事も頷いてしまった。

「いやあ、まさかあんに会えるとはなあ」

「前世での知り合いなのか？」

「そうそう、こいつは昔異端狩りの傭兵団をしててな。私も何回か斬り殺された覚えが

ある」

「何回かって」

刑事が絶句していると、化粧屋はニヤニヤと笑ったまま切っ先を微動だにさせていないカタリナを見やった。

「なあ、どんな気持ちだ？」

「何が言いたい」

「時代が変わって、正義を遂行していたはずのお前たちは今同じことをすればただの殺人鬼だ。」

それでいて私のような人間がお偉いさんに重用されている。くやしいだろうなあ」

当人も知らぬうちに生気の無い表情に怒りが満ちているのを見て、化粧屋は実に邪悪に、満足そうに笑っていた。

「天国に行けなくて残念でしたねえ、お前のお仲間も、他のバカどもも!!」

——結局は神の教えを無視したタダの人殺しどもだったわけだ!!」

「おい、何を煽ってるんだよ」

「ちよつとぐらい良いだろお、これが楽しみであんたらに付き合つてやってたんだ」

刑事は化粧屋の思わぬ本音にもう一度絶句していると、彼女は手に持つ剣の切っ先が揺れているカタリナの方に歩み寄る。

「ほら、斬ってみろよ。人殺し。それとも今生はまだかい？」
「ぐ、この、ツ!!」

怒り心頭のカタリナが刃を振るっていないのは、ひとえに理性が働いていたからだつた。

世話になつてゐる親代わりの神父に迷惑を掛けまいと、目の前の邪悪を見逃そうと必死に己を抑えていた。

「何の騒ぎです!! って、カタリナッ?」

そうして矛盾に葛藤していると、教会の扉を開けて神父が現れた。

「何をしているんですかあなたは!!」

彼の声に、ハツとなつてカタリナは術を解いた。

ロングソードが桜の花びらとなつて地面に散つていく。

「まったく、ホント、今生で最も楽しい時間だった」

カタリナの殺意が消えたことを悟り、化粧屋は愉悦に満ちた表情のままに刑事に向き直つた。

「さて、仕事をしようぜ」

「お前、来世は地獄に堕ちるぞ」

「じゃあ、ここが地獄だな」

刑事の皮肉もなんのそので、化粧屋は可笑しそうに笑っていた。

前世について

まるで自身が体験したかのように、カタリナの前世の記憶は彼女を苛む。

「総長、戦況はどうです?」

「まずいな、サン・ルー砦が落ちそうだ」

「それが本当ならお見事ですな、士気だけで本当に絶体絶命の状況を引っ繰り返せるのかもしれん」

総長と呼ばれた、カタリナの前世の男は上空からイングランド軍の砦を見下ろしていた。

勿論、彼は実際に飛んでいるわけではない。

鳩の視線を通じて、術によって偵察しているのだ。

「標的は?」

「元気に旗を振ってるよ。本当にあれが十六歳の小娘かね?」

「小娘かどうかは関係ないでしょう。」

歴史に列聖なされた聖女の方々も、ほとんどがただの女性なんですから」

部下である団員たちの言葉に、そうだな、と総長は頷いた。

やがて、サン・ルー砦が落とされた。

ジャンヌダルクの輝かしい初戦であり、のちにオルレアン包囲戦と称される戦いの一幕だった。

「む？」

後方で軍旗を振る標的が、ふと、手を止めた。

そして、遙か上空を飛んでいる鳩と、目が合った。

総長は咄嗟に術を切り、視界が見慣れた野営地のものへと戻った。

「どうでした？ 噂の聖女はホンモノでしょうか？」

「本物だろう。当人の意図に関わらず」

「では、手筈通りに」

「ああ」

総長は部下たちに指示し、調査を続けることにした。

聖女の奇跡を、再現するために。

彼の取りまとめる傭兵団は、騎士団とは名乗っているが実際にそれとは程遠い物だった。

祖先であるテンプル騎士団の異端の容疑を晴らすため、異端の研究を長年続けてき

た。

いつしか、彼らは神の御業を人の身で再現させた。

それが彼らが異端視する、魔術となんら変わりない物だと言うことなど、少しも考えぬまま。

それどころか彼らは、聖人たちの起こす奇跡で異端を殺し、邪教の教えから目を覚まさせればいずれ祖先の名誉は晴れると信じて戦っていた。

「ひでえ」とするよなあ」

場面は変わる。

市松模様の、当時流行っていた服装に身を包んだ男が焼けた村を見渡していた。

「せめて死体ぐらい残しておいてくれよ」

「黙れ、それ以上口を開くな、おぞましい異端の魔術師め!!」

「なあ、教えてくれ、なんでこの村を焼いたんだ」

「知れたこと、貴様が齎したペストによる感染をこの村で留めるためだ!!」

若い団員が、激怒してその男に怒鳴りつけた。

「事実無根だよ。あんたらの雇い主がそう言ったのか？」

私はこの村の人々に親切にしてもらったから、ちよつとした術を披露してやっただけ
せい。

焦土作戦の言い訳ぐらい、もっとマシなのがあつただらうに」

男はまだ温かい灰を手にとった。

ぼろり、と焼けた骨が崩れ落ちる。

「聞く耳を貸すと思うか？ 異常者が!!」

「ただ数が多いだけで健常者振りやがって。

なあ、十戒に書いてある殺人はダメとか、聖書に書いてる隣人を愛せとか、どうして
まともに守れないんだ？

魔女を殺せて一文が、そんなに好きなのか？」

「貴様らが人々を惑わす悪魔に魅入られた者だからに決まっているだろうが!!」

「そうかい」

初めから、会話になどなりはしなかった。

「じゃあ、もう一回無辜の人々を殺して見せろよ」

ばんばん、と男が手を鳴らす。

すると、おぞましいことに村中の焼けた死体や灰が人の形を取り、起き上がった。

「総員、抜刀!! かかれ!!」

総長の号令で、死者を冒瀆するネクロマンサーとの戦いの幕が切つて落とされた。

場面は変わる。

「死肉を食るつもりか、おぞましい魔女め!!」

総長の手にする剣の切っ先の向こうには、黒衣に身を包んだ魔女が膝を突き、冷たくなつた小さな女の子を抱きしめていた。

「この子はね、母親が病気だからそれを治す薬を取りに來ただけなのよ。なぜ、斬つたの?」

「貴様がその子供に邪悪な呪いを教えていたと証言は取れている。

理由など、それだけで十分だ。その知識をそれ以上広めるわけにはいかない」

「傭兵風情が、異端審問の真似事かしら?」

殺していれば自分たちが常に正義の側でいられるとでも?」

くつくつ、と魔女は低く笑つて立ち上がる。

彼の部下たちは、包囲を固めて臨戦態勢だった。

「あなた達の死に様を見るまで、私は死ねないわね」

「ほぎけ!!」

総長の号令で、本物の魔女との戦いが始まった。

場面は変わる。

「標的はどうです？」

「どうやら、打ち止めらしい」

総長の視界には、イングランドの捕虜にされ、火刑に処されるジャンヌダルクの最期が映っていた。

何かしらの奇跡を期待していた彼らは、落胆のため息を吐いた。

聖女は最終的に魔女と言うことで落ち着きそうな気配に、団員たちの空気も重かった。

彼女の火刑は、数時間にも及んだ。

火傷によるショック死か煙による窒息か、判別はつかなかったが彼女はもう既にぐったりと息絶えていた。

だが、不意にその瞳が開かれ、鳩を通してその光景を見ていた総長の目が会った。

思わず、彼は息を呑んだ。あれは確実に死んでいるはずだ、と。

彼女の目が開いたことを、処刑を見守っていた民衆や聖職者たちは気付いた様子は無かった。歴史に記されない、彼だけが知る彼女の奇跡だった。

やがてその視線が、横に逸れる。その先には、民衆に混じって黒衣の魔女が火刑の様

子をジッとみていた。

その姿を認めて驚く総長に、魔女は言葉無く唇だけでこう言った。
次はお前たちの番だ、と。

場面は変わる。

死がそこに具現化していた。

まだ、歴史上この時代に存在しないはずの装束を身に纏った存在に、団員達は次々とやられていく状況だった。

その装束とは、つば広の帽子に全身を覆う黒い革のガウン、そして特徴的な鳥の嘴のようなマスク。

総長が知る異端の中でも、最も邪悪な存在がそこにいた。

場面は変わる。

「濡れ衣だ!! 我々は正しく作戦に従事していた!!」

ジャンヌダルクが亡くなっても、戦乱は終わらない。

そして彼らは、なぜか敵前逃亡と虐殺の汚名を着せられ、軍法会議で処刑される運びとなった。

総長たちは捕えられ、民衆の前で役人が彼らの罪状を読み上げる。

してもいい不名誉な行いや略奪、軍費の横領など、様々な不実の罪が並べたてられる。

人々の罵倒や物が飛んでいき、処刑人の斧が振り上げられた時、総長は気付いた。

魔女の扱う、薬の臭いに。

その場に居る全員が、正気ではないと気付いた時には遅かった。

民衆に混じって彼をあざ笑っている黒衣の魔女に何かを叫ぼうとした直後、処刑人の斧は振り下ろされた。

地面を転がる彼の首が最後に見たのは、黒衣を翻す魔女の後姿だった。

彼らは異端としてではなく、ただの浅ましい人間として人々に処されたのだ。

§ § §

「……」

自分は結局、何をしたかったのだろうか。

カタリナは夜に悪夢に苛まれ、飛び起きてそう思った。

現代の価値観から言えば、彼女の前世は従軍してたとはいえ虐殺者だった。しかし当時は当時の価値観があった。

時代が違うと言われるのなら、当ても現代とは違うのだ。

罪悪感が無かったのか、と問われれば、多少はあったのだろう。

総長は少なくとも、軍事的目的の為にと理解したうえで非道を行っていた。

雇われ先の都合で関係の無い人々を異端として殺したこともある。

傭兵団の長となつてからは団員たちを食べさせる為に、不本意な任務も行った。

全ては使命の為だった。

だが、肝心の総長は何故に使命に全てを捧げていたのか、思い出せなかった。

記憶があつても、感情はそうではなかった。

カタリナがかつての記憶を思い出した時、六歳だった。

それまで培っていた少女としての記憶と、異端狩りの傭兵総長としての記憶がぶつかりあつた。

彼女はどうしても、総長の記憶を自分自身だとは受け入れられなかった。

彼女の今生の精神が、過去の虐殺の記憶に耐えきれなかったのだ。

そして、全ての記憶を整理し終えた後、彼女は独り教会の門を叩いた。

絶望と諦念に身を任せて、枯れ木のようにこれまで生きていた。

だが時々、自分は前世の続きを生きているのか、カタリナとして生きているのか分からなくなる時があった。

あの忌まわしい魔女の薫陶を得たであろう少女たちに出会った時もそうだった。

最初は、本当に見逃そうと思っただのだ。

かつての自分と、今生の自分。そのどっちつかずで揺れる彼女は、少なくとも悪行を目にしない限り動く気力はなかったはずだった。

あの忌々しい黒衣の魔女の魔術の臭いを嗅ぎつけるまでは。

あの時、形容しがたい感情が彼女を支配した。

それが怒りか、憎しみなのか、その翌日に出会った化粧屋に煽られた時の感情も、まだ整理がつかなかった。

自分の心が自分で制御できない恐怖を、初めて思い知ったのだ。

ついでに自分の考え方が世間にまるつきり通じないことも。

寝付けなかったカタリナは、自室から礼拝堂へと歩み出た。

そこには、親代わりの神父が雑巾で掃除をしていた。

「カタリナ、眠れませんか？」

「はい、神父様」

「まあ無理もありませんか」

神父も、彼女が化粧屋に向ける激情を見た後ではそうとしか言えなかった。

「カタリナ、神は貴女に想像を絶する試練を課しました。

ですが神は乗り越えられぬ試練を与えぬもの。あなたの苦悩は、私には想像することしかできませんが、必ず行く先の道は用意されているのです。

時には苦しむだけではなく、考えないようにするのも手ですよ」

神父は改めてそのように彼女を諭した。

「でも神父様、私はあの邪悪を目の当たりにして、体が反応せざるを得なかったのです。

私の記憶に、魂に刻まれた異端狩りの知識が、奴らを野放しにするなど」

確かに、無辜の人々を拷問に掛けて殺すのは時代が違うのだろう。

ただカタリナはそれでも、無性にあの邪悪の存在を許容できなかった。

化粧屋の煽り文句を思い出すだけで、言葉にできない激情がふつふつと煮えたぎるのである。

「明日、私はあの忌まわしい魔女に会いに行きます」

「……むやみに立ち向かう必要などないのでですよ？」

「決めましたから。これが神の試練だと言うのなら、この地獄に救いがあると言うのなら、なおのこと避けては通れません」

カタリナの決意は固かった。

神父はそれを聞いてため息を吐いた。彼女を止められない己の無力さに嘆きながら。「わかりました、ですが約束してください。」

刃傷沙汰にはしないこと。他人に迷惑を掛けないこと、神に誓えますね？」

「はい」

「では、そうしなさい。」

くれぐれも、その言葉を忘れないように」

神父は心配そうに何度も念を押して、カタリナの決意を後押ししたのだった。

「この町ですか」

乗り慣れない鈍行列車を使い継ぎ、旅行カバンを持った修道服のカタリナは魔女のテリトリーへと降り立った。

彼女は感じていた、濃密な異端の魔力の気配を。

ここで間違いないという、確信を。

カタリナは先日警察署に連れて行かれ、事情聴取を受ける間ずっと鳩を魔術的に支配し、その視界から春美たち五人の行き先を探っていたのである。

そして彼女は、この町を見つけた。

「団員たちがいたなら、硫黄と火で町ごと焼き尽くしてやれたのに」

と、呟いてから彼女は首を振った。

思考が前世に引つ張られていたのだ。

カタリナは町を探索し始めた。

何の変哲もない、日本のどこにでもある町だった。

それでも普段教会からあまり出ないで外界との接触を殆ど断っていた彼女には、コンクリートの町並みは窮屈に感じられた。

町中を歩き回り、魔女の気配を探している内に、彼女は気付いた。

「はあ、はあ、まさか私がここまでひ弱だったとは」

そう、前世はともかく、今生の彼女は出不精の引きこもりとなんら変わりなかったのである。

神経を研ぎ澄ませ、靈感を冴え渡らせ長時間歩いてきたせいで、体力の限界に気が付かなかつたのだ。

奇跡の触媒の入った旅行カバンも重たかった。

これからは鍛え直さないと、と彼女が電柱に手を突いて呼吸を整えながら思っている。

「あの、大丈夫ですか？」

「ええ、お構いなく」

気配は一般人だったので、カタリナは気付かなかった。

「あ、あなた達は先日……」

彼女に声を掛けたのは、学校帰りの夏芽だった。当然、他の幼馴染二人もいた。

「夏芽ちゃん、やっぱりこの間の人だよ!!」

「え、どうする？ また警察に通報するの？」

ビビっている真冬はともかく、千秋は完全に不審者に対する構えだった。

「いや、でもこの人辛そうだよ」

「そうだけどさあ」

「今は剣を持ってないみたいだし、私たちは魔法とか使えないし、大丈夫でしょ」

酷い楽観だった。

平和ボケした日本人の危機感の無さと、夏芽の能天気さの顕れだった。

カタリナの前世で言えば、この三人は魔女と接触したと言う理由だけでとつくに斬り殺されている。

そしてそんな気さえ起きないほど、カタリナは呆気に取られていたわけだが。

「へえ、じゃあ魔女さんと前世からの知り合いなんだ」

カタリナは情報を聞き出すべく、ファーストフード店で三人の話聞いていた。

聞いていた……のだが、この三人に限ったことではなく、この時代の人間はオカルト話に飢えていた。

彼女はすぐに質問攻めにされる側になった。

「まあ、殺し合った仲ですが」

カタリナは抑揚のない声でそう呟いた。

その事実を、三人は重く受け止めなかった。人間同士が殺し合う実感が無かったとも言う。

「それより!! ジャンヌダルクを見たことあるって本当ですか!!」

若干興奮気味に、真冬がそう言った。

ジャンヌダルクは今時様々な創作で登場する偉人なのだから、それを実際に目にしたと言う人物の話に彼女が興奮しないわけがなかった。

「ああ、そのことですか」

「聖女なのか魔女なのか、調査したんでしよう!?

実際どんな感じだったんですか!!」

「少なくとも、あなた達と同一年だとは思えませんでしたね」

「ま、そうでしょうね」

千秋はカタリナの話の聞いて、手持無沙汰にジュースを飲みほしたコップの水をストローでじやりじやりさせながら頷いた。

「彼女の最期は、私の記憶にも印象的な出来事として残っています。

言葉を交わしたことはありませんでしたが、そう、この感情は……」

カタリナはあの憐れな最期を遂げた少女に複雑な感情を抱いていた。

それを言語化するには、彼女はまだ人間的に成熟していなかった。

「……あなた達は、止めないのですか？」

私は、彼女に会いに来たんですよ」

その言葉がカタリナの口から出たのは、この三人にある種の罪悪感を抱いたからなのだろうか。

もしかしたら、これから彼女たちの知り合いと殺し合うかもしれないという事実にも。

「えっ？」

だが、三人は不思議そうに顔を見合わせた。

カタリナはなぜ彼女らがそんな表情をするのか、分からなかった。

そして。

「でも、それって、前世のことでしょ？」

夏芽はカタリナが想像もしていない言葉を口にした。

「はっ。」

一瞬彼女は、何を言われたのか分からなかった。

思わず口を開けてポカンとするほどに。

「いやだって、前世で殺し合ったからって、なんで今の時代に殺し合う必要があるのかってことよ」

「いやいや、夏芽ちゃん。それを言っちゃダメだよ。

多分、魔女さんが魔法とか実践してるのとか許せないんだろうし」

「それを言ったら真冬だってそうじゃない。

動画で見ってお守りとか作ってるし」

「それはそうだけど」

真冬は言いよんだ。この幼馴染は弁護士の両親から肝心な物を受け継がなかった代わりに、弁が立った。

悲しいことに、その長所は口喧嘩や言い訳を述べる時にしか発揮されないが。

「カタリナさんもさあ、そりゃあ前世でいろいろしたかもだけども、それって今のカタリ

ナさんと関係無くね？

前世の因縁を引きずって殺し合うとか、ラノベやマンガの世界じゃん。

色々なことを抜きにして、悪と戦うのは私は格好いいと思うし。前世の知り合いに会いたって思うのも普通じゃないの？」

カタリナは思った。

こいつ、馬鹿だ、と。両親はどんな教育をしているのか、と。

「今の世間もそうだけどき、親の罪が子供の罪みたいに言われることがあるじゃん？」

それって野蛮なことだっけうちの両親も言ってたし。だから前世の罪も同じことなんじゃないの？」

「それは、そんなことは、神は赦さないとはいけません」

「じゃあ神様が裁くのを待てばいいじゃん。」

なんでこの世に法律があるか知ってる？ 人は人を裁けないから、法律が代わりに裁くんだった。神さまも同じことなんじゃないの？」

夏芽はバカだった。

テストは毎回赤点ギリギリの学ばないアホだった。

それでも、彼女は両親から大事なものは受け継いでいた。

「それにほら、ジャンヌダルクも今の時代に転生していたらって考えるとロマンがある

じゃん!!」

「あ、確かに!! その可能性もあるよね!!」

「カタリナさんも、そう思わない? 今度こそあのジャンヌダルクに話せるかもよ!!」

「まあ、当人が今の時代に蘇っても喜ぶとは思えないけど……」

真冬は二次創作界限の薄い本等を思い浮かべ、遠い目になった。

「カタリナさん?」

夏芽は、黙り込んでいる彼女を見て再び小首を傾げた。

「ああ、いえ、なるほど、少々納得がいったことがあります」

カタリナは思考を止め、そう口にした。

魔女や異端を赦せない激情とは別に、彼女は化粧屋に煽られた時の名状しがたい感情の理由が腑に落ちたのだ。

そう、それは、前世と今生を一緒にくたにされるといふ理不尽に対する怒りと悔しさだったのだ。

今生とは性別も異なる苛烈な人生を生きた前世は、カタリナの人格形成に大きな影響を齎した。

だが、それでも総長の所業を今生でもやって当然と思われるのは甚だ不愉快だった。

彼女は別に、前世の記憶も、奇跡の知識も、望んで得たわけではないのだから。

誰だって、生まれで奴隷だと侮蔑されるようなら怒りも湧くだろう。

「……今回は、このまま帰ります」

「え、魔女さんに会わないの？」

「今会いに行っても、前世の続きにしかありませんから」

不思議そうにしている夏芽たちに、カタリナは立ち上がってそう言った。

「彼女に伝えておいてください。いずれ、この時代を生きるカタリナとして会いに行く
と。」

そしてその時、私が邪悪を目にしたら今度こそ処断する、と」

「うーん、わかった」

夏芽は少し痛いセリフだな、と思いつつも触れないことにして頷くことにした。

「やっぱり、前世の記憶とかあると、患っちゃうのかなあ」

「夏芽、あなた色々台無しよ」

何にもわかってなさそうな夏芽に、千秋は少し苦笑してから、溶けた氷をずぞとス
トローで吸い出し始めた。

「千秋ちゃん、お行儀が悪いよ」

真冬は幼馴染の意地汚さを指摘しおえると、カタリナの後姿を目で追った。

「あ……」

彼女は駅の方に向かうカタリナのずっと背後の方に、見慣れた黒いケープの魔女が踵を返して離れるのを見つけたのだった。

恋の魔法について

その日、いつもの四人組は昼休みにいつも通り食事をしていた……のではなかった。いや、この後、いつも通りそうなるのだろうが、今は違った。

今日は週に一度しかない美術の時間だった。

授業のテーマは、『自由工作』と黒板に書かれていた。

美術の教師は何やら書類の作成に追われており、殆ど自主学習状態だった。

生徒たちには彼女から用意した粘土や木材、段ボールや布、水性の絵具などから何か適当に作れと言うお達しがあった。

女子たちは粘土で人形を作ったり、絵心のある者は適当な物を模写しはじめた。

男子の中には段ボールでミニチュアハウスを作る器用な物が居たり、木材で某教育番組のような仕掛けを数人で分担して作ろうとしたりと、思いのほか生徒たちの自主性が発揮されていた。

「高校生にもなって、工作とか無いよねー」

とか言う千秋は、段ボールを切り貼りして飛行機を作っていた。

細かなディテールは油性ペンという力の抜きどころを弁えた彼女らしい手際の良さだった。

「だよー、中学の頃に何回かあったぐらいだよー」

真冬は木の板に彫刻刀でルーン文字を刻んでいた。

普段からお守りや護符などを自作しているだけあって、慣れた手つきである。

「まあ良いじゃん、著名な芸術家の名前とか作品名とか覚えさせられるみたいな授業よりはさ」

夏芽は裁縫バサミで布を切って、裁縫道具でちよつとした女の子の人形を作っていた。

中学時代に患っていた頃、自分で衣装を作ったりした経験が生きていた。

「でも美術とかのテストって範囲が狭いから、点数の稼ぎどころだと思っただけど」

そして春美は薄い木の板を切ったり張ったり曲げたりして、環状の物体を作っていた。

何とこの四人、程度の差はあれど不器用な人間はいなかったのである。

大抵一人は極端に不器用な人間が居て、嘆いたり喚いたり笑われたりするものなのに。面白みに欠ける連中だった。

「ところでさ、春美ちゃんは何を作ってるの？」

彼女らがそんな教師に失礼な会話をしているも平気なぐらいわいがやがやと息抜きの授業を楽しんでいる美術室で、唯一何を作っているのか分からない春美の工作をようやく真冬が突っ込んだ質問をした。

「これ？ イユンクス」

「いゆんくす？」

夏芽は春美の齎した単語を反芻し、首を傾げ他の二人もみやる。

千秋も真冬も、知らないと言っても言うように首を振った。

「なにそれ？」

「もうちよつとで出来上がるから待ってて」

春美は特にもったいぶったつもりは無かったのだが、三人はどのように言われると気になってしょうがない。

春美が作っているのは、非常に端的に言うなら車輪だった。

円形に十字の軸を取り付け、その中心に二つの穴を開けて、長い紐を通して結んだ。

「出来た、これがイユンクス」

春美はそうしてできた物体の紐の端を両手で持ってビヨンビヨンと車輪を上下させて遊び始めた。

「それってオモチャ？ 車輪はどちらかというときリスト教の逸話とかにある印象だけ

ど」

サブカルチャーにそれなりに詳しい真冬もそれが何か判別がつかなかった。

「まあ、マイナーな道具だよな。」

でもこれは由緒ある呪術の道具でさ、女神アフロディーテが発明したって言われていて、
「面白いんだ」

紐を引き締め、その反動で車輪が糸を巻き上げ回転し、それをほどく為に引き伸ばし
回転させる。

やがて、車輪はぶんぶんと奇妙な音を発し始める。

やっぱり三人は春美が遊んでいるようにしか見えなかった。

「せんせー、春美ちゃんがオモチャを作って遊んでまーす」

「これが恋を成就させる道具だとしても？」

「せんせー、嘘でーす、ごめんなさい」

悪ふざけをした千秋は物凄い手のひら返して発言を撤回した。

そして残り二人同様、顔と体を出出してその道具を目に焼き付け始めた。

「なんでも、ヘカテー様をお呼びするのもも使えるらしくて師匠に作り方を教わったんだだけだよ。」

でも用途が限られるし、実際オモチャだ……よ……？？」

そこで春美は気付いた。

同じテーブルで作業していた三人だけでなく、室内に居た女子生徒たちほぼ全員が顔を突出しその道具を食い入るように見ていたのである。

男子生徒たちもそわそわして、ちらつちらつと春美の手元を見ていた。

「春美さん」

そこで、教室の異変に気付いた先生が立ち上がる。

「あ、ごめんなさい、先生……」

つい先日お呪いの類は厳禁だとホームルームで言われたばかりなのを思い出して、素直に頭を下げる春美だったのだが。

「そのの遣い方、先生にも教えて頂戴」

美術の先生（独身・三十路）が血走った目でそんなことをのたまうのだから、生徒たちもギャグ漫画のように一斉にズッコケた。

§ § §

「あ、本当だ、イユンクス。紀元前三世紀頃に実際に有った道具なんだ」

昼休み、真冬は件の道具を昼食も忘れてスマホでググって調べていた。

「ギリシャ神話によるとアリスイを括りつけて使うらしいけどそのところどうなの春美ちゃん」

自己主張の少ない真冬にしては珍しく問い詰めるような聞き方だった。

ちなみに、春美が美術の時間に作った例のイユンクスは提出と同時に先生に進呈していた。

「アリスイって？」

「鳥だよ、確か」

「え、鳥を括りつけるの!?!」

その本来の遣い方に夏芽はドン引きだった。千秋も効果のほどは半信半疑の様子だ。

「うーん、実は道具の作り方だけで、やり方の方は参考程度っていうか」

「何で!! 肝心なところじゃない!!」

「だって、そんなことするより媚薬盛る方が手っ取り早いって言ってたんだもん!!」

机をバンして問いただす真冬に、春美は思わすそんなことを叫んでしまった。

「あッ」

しん、と静かになる教室。

幼馴染三人組は顔を真っ赤にしていた。

そして、どこからともなく感じる視線に、春美は教室の外の木に留まる鴉を見つけた。

「し、師匠!? ご、ごめんなさい!!」

春美が叫ぶのと同時に、彼女のお腹が急にぐぎゆるるると鳴って、青ざめた表情になった。

「と、トイレ、トイレ……」

春美は涙目のまま内股になって教室から千鳥足で去って行った。

空気の読めるクラスメイト達は、何も聞かなかったことにして昼休みの雑談を再開するのだった。

春美は一時間くらいトイレから帰ってこなかった。

「作ってきた」

翌日の昼休み、ドヤ顔で真冬は学校に昨日春美が作ったイユンクスを模倣して持ってきていた。

「さあ、春美ちゃん、吐いて!!」

「真冬ちゃん、なんでこんなテンション高いの?」

「さあ?」

春美に尋ねられた夏芽は小首を傾げた。

「そもそも真冬に惚れた相手も居ないし、これまでも居なかったじゃない」

「もしかしたらこれから役に立つかもしれないじゃない!!」
呆れている千秋に真冬はそのように熱弁した。

恋が成就するかどうかは思春期の乙女には大事なことなのだ。たぶん。作者は分からぬ。分からぬ……。

「あのさあ、ぶっちゃけ呪術で相手の心を物にして嬉しいの？」

何かの拍子で呪いが解けたら何言われるか分からないよ?」

と、言いながら春美はクラスメイト達の方を振り返る。

何人かの女子生徒がそつとカバンに何かをしまった。

「だってえ」

「そんなに知りたいのなら、師匠に直接尋ねればいいじゃん。

そのうち一緒にお話する約束したんでしよう?」

「そんなあ、あの人にそんな恥ずかしいこと聞けるわけじゃないじゃない」

「……呆れた」

真冬がこんな感じじゃあ呪術に頼りたくなるわけだ、と春美は思った。

「皆さーん、お昼ご一緒しましょー」

と、その時、望海が四人の教室に入ってきてそう言い放った。

「あれ、真冬さん、それってイユンクスですか?」

もしかして、誰か気になる相手でも？」

望海は真冬が持っている道具を見て、口元に手を当てうしししといやらしく笑った。

「ほら、面倒なのに餌を与えちゃった」

「それで、誰なんです？ ええ、気になります、気になります」

望海は食い気味に四人に詰め寄った。

しかし、春美が誤解の無いように説明すると、なんだ、と露骨に彼女は落胆して肩を落とした。

「ねえ、望海ちゃんは使い方知ってるの!？」

真冬が望海に問う。そしてガタツと身を乗り出すクラスメイト達。

「残念ながら、道具の存在だけですな。」

でも儀式をしながら魔力をイコンクスの音に乗せる必要があるらしいので、たぶん素人が真似しても成功しないと思いますよ」

「あ、そうなんだ」

真冬は望海の言葉にがつくりとうなだれた。後ろの方でもクラスメイト達がつくりしていた。

「てか春美さん、この呪術はあの御方も嫌ってたはずでしょう？」

「その作り方を教わってた時もかなり不機嫌でしたし」

「まあ、そうだけれど」

「それが学校で流行って、また不機嫌になっても知りませんよ」

望海の物言いに、春美はややふて腐れたように焼きそばパンをもしゃりはじめた。

「え、じゃあもしかして、魔女さんもこの呪術に嫌な思い出とかあったりして？」

他人の恋路に首を突っ込みたがるのは望海だけではなかった。

夏芽は興味津津の様子でそう言ったが、望海は首を横に振った。

「いえ、神話の上でこの呪術が誰に使われたかご存知でしょう、真冬さん」

「え、うん」

望海の言葉に、真冬は頷いた。

「コルクスの王女メデИА」

日本ではマイナーな人物だが、有名な作品やアニメの登場人物になった為か近年では

知る者は多い名前だった。

「そう、イユンクスの呪術には男女を引き寄せる力があるんですよ。」

アフロディーテはその使い方をイアソンに教え、一緒のところをエロスの矢でブス

リ。

ギリシャ神話屈指の魔法使いが見事愛の奴隷ですよ」

「それとこれとが何の関係があるの？」

それはあくまで神話の出来事である。

千秋はその話がなぜ魔女の琴線に触れるか分からなかった。

「何と言うか、うちの流派の始祖ってその王女メディアらしいんだよね」

それには、春美が答えた。

「え、ええええええッ!!」

真冬から、幼馴染たちすらも聞いたことが無いような叫び声が発せられた。

「だからその、師匠は王女メディアをマジでリスペクトしてて」

「王女メディアは魔女キルケーの他にヘカテー様にも師事して魔術を授かったらしいですし、まあ偉大なる始祖って表現で間違いないでしょうね」

「私たちにとっても大先輩よね」

と、望海の方を見やりながら春美はそう言った。

「じゃ、じゃあ、捻じ曲がった短剣とか伝わってたり……」

「それはアニメの見過ぎですよ、いえ、実際私も訊きましたけど」

「こ、今度アニメを勧めて感想聞かなきゃ……」

「ノベルゲームの方は敷居高いですしねー」

割と話の合う、真冬と望海だった。

「まあそう言うわけで、師匠はあんまりその道具と術が好きじゃないみたい」

春美はそのように締めくくったが、衝撃の事実に興奮して震えている真冬には聞こえていないようだった。

「真冬がおかしくなった……なんでこいつこんなに楽しそうなんだ？」

「さあ？」

オタクならざる夏芽と千秋には分からないことであつた。

「なんだか今の話を聞くと、その道具を使ったところで二人きりになれるだけのよう
しか聞こえなかったんだけど」

「でもまあ、気を引くぐらいはできるんじゃないの？」

そこまで確実性が無いと悟り、なーんだ、と夏芽は興味を失ってしまった。

周囲からもため息が聞こえる。

「あー」

そこで、外野の筈のクラスメイトの女子が手を挙げた。

「王女メディアって若返りの魔法が使えたらいいですけど、そのところどうなんです
か!!」

とある女子生徒の、決死の覚悟の質問だった。

「……」

「……」

しかし、弟子二人は眼を逸らして答えなかった。

……静寂が訪れた。

幼馴染三人組は、椅子から立ち上がって二人にじりより始めた。

その瞳は血走っていて、般若の如き形相だ!!

クラスメイト達も亡者のようにゆっくりと二人に距離を詰め始めた。

「望海ちゃん」

「はい、春美さん」

二人は即座に二手に分かれ、教室の左右の扉から廊下に逃げ出した。

「待てえ!!」

「逃がすな!!」

「絶対に吐かせるのよ!!」

目の色を変えた女子の軍勢が暴徒となって逃げだす二人を追い始めた。

これが現代の魔女狩りの縮図だった!!

「こら、廊下は走らない!!」

「(ぎ) (ぎ)めんなさい!!」

「許すわ。その代り」

美術の先生（独身・三十路）は、くわっと目を見開いた。

「お願いだから、私を若返らせてッ!!」

「私にそんなめちやくちや高度な魔法が出来るわけないじゃないですかー!!」

春美は半泣きになって教師の手から逃げ出した。

「はあ」

もはや收拾がつかない状況になったので、その様子を呆れてみていた黒衣の魔女が指を鳴らした。

学校中に少しの記憶が曖昧になる毒ガスが散布され、ちよつとした集団意識不明事件が起こった。

原因は判明されなかったが、たぶん責任はガス会社の誰かが取るのだろう。

頑張れ、ガス会社!! 負けるなガス会社!! あなた達が倒産したら、誰が責任を取るんだ!!

おもてなしについて

その日、いつもの四人は学校には居なかった。

なぜなら謎のガス漏れ事件でその日は休校状態になっていたのである。

今頃ガス会社の皆さんが涙目で点検している頃だろう。

「それにしても、びっくりしたよねー」

「うんうん、学校中の皆が三十分ぐらい眠ってたんだって」

「あの日も安全の為にすぐに下校になっちゃうしさ。やっぱり魔女さんが何かしたのかな?」

「春美ちゃんも言葉を濁してたし、何かあったのかもね」

まさかその原因が自分達だとは思っても居ない幼馴染三人組はいつも通り駄弁っていた。

大抵彼女らはファーストフード店にたむろしているのだが、女子高生のお小遣いも無限ではない。

節約の為に彼女らは夏芽の家の彼女の部屋でごろごろしていた。

予期せぬ休日を得た彼女たちは、予定があるわけでもなく思い思いに過ごしている。

夏芽の家は両親がいつも忙しい為、大人の顔を見なくて済むという理由でこの三人はよくここに集まっていた。

夏芽

『春美く、今みんなで私ん家に集まってだらだらしてるー。』

春美もこつち来るく？ 何なら泊まってって明日うちから学校行ってもいいぜー？』

春美

『ごめん、師匠に修業を言いつけられてる。』

師匠は用事があるからいないけど、手は抜けないから』

「春美は来れないって」

夏芽はグループチャットを終えて、自分の部屋でごろごろしている二人に言った。

「わざわざここに来るのに電車使うのもねえ」

「春美ちゃんは通学にだいたい一時間かかるって言ってたし」

ぐでーつとだらけている千秋と、自宅からノートパソコンを持ち込んでいる真冬がそんなことを口にした。

「まあ、しょうがないか」

流石に夏芽もわざわざ用も無いのに電車で来てほしい、と言えるほど無遠慮ではなかつた。

「ねえ、千秋ママ。お昼なんか作ってー」

「はあく？ まあ親にはこつちで食べるって言ってきたからいいけど」

そして夏芽にとつて二人はそんな遠慮とは無縁の幼馴染たちだった。

面倒そうに間延びした声音でそう言った千秋も、そうなるだろうと思つてあらかじめ親に言つておいたようだった。

「じゃあ、二人とも何食べたい？」

「千秋シェフのおススメコースで」

「私は千秋ちゃんの得意料理がいいな」

「要するに何でもいいつてことですよ」

千秋は二人の物言いのため息を吐いて立ち上がる。

彼女は部屋を出て勝手知つたる台所の食材を確認し始めた。

それなりに保存がきく食材が冷蔵庫に入っていたので、彼女は夏芽が夕食にも食べられるようにカレーでも作ることにした。

そうして鍋に水を入れお湯を沸かし、食材の下ごしらえを終え中に投入する。

後は煮えるのを待つて市販のカレー粉を入れるだけだったその時である。

ぴんぼーん、とインターホンが鳴った。

「夏芽ー!! 誰か来てるよ!!」

千秋は訪問者の来訪を夏芽が気付いていない可能性を含めて、彼女の部屋の前でそう言った。

「はい、今出ます」

心底面倒そうな夏芽が部屋から出て、玄関に向かった。

「はいはい、どちらさま……ま……ま……」

夏芽はドアスコープで来客が誰か確認することをせずに鍵を外しドアを開け、その予想外過ぎる来訪者に己の目を疑った。

「こんにちわ」

黒いケープを羽織った、私服の魔女が彼女の家を尋ねてきたのである。

「……あ、えっと、何のご用でしょう」

夏芽は我に返ると、かしこまって彼女に用件を尋ねた。

「あら、あなたのご両親から聞いていない？」

魔術被害の原因かもしれない物品の判別をしてほしいと言われているのよ。

事務所は東京にあるからこちらに持ってくるからって」

「あーうん、初耳。ちょっと待ってて」

「ええ」

夏芽は一旦ドアを閉め、自室に戻ってスマホで両親の事務所に電話を掛け、戻ってきた。

「あー、すみません。」

今こちらに向かっているらしいんですけど、高速道路が事故かなんかで渋滞してて遅れてるみたいで」

「ああそう、そう言うことなら出直すわ」

「いや!! そんなわざわざ、悪いですよ。」

何も無いところでですけど、上がって待ちます?」

「そう言うことなら」

そんな経緯で、夏芽は思わず彼女を家に上げてしまったのである。

「二人ともー、ご飯出来たよー」

「はーい」

家の奥から千秋と、部屋の中から真冬の声が聞こえた。

気が付けば香しいカレーの匂いが家中に漂っていた。

「あ、カレー食べます?」

「じゃあご相伴に与るわ」

そう言うことになってしまったのである。

§ § §

かちやかちや、とスプーンが皿に当たる音だけが夏芽の家の台所にあるテーブルに響いていた。

「……」

え、何この状況、と千秋が夏芽に視線だけで問う。

「……」

私に聞くなよ、と夏芽は不満げに無言で睨み返した。

「……」

真冬は予想外の人物が食事を同席していることに理解が及ばず機械のようにカレーを口に運んでいた。

「ねえ」

「あ、はい、何ですか？」

不意に魔女に話しかけられ、夏芽が応対した。

「不躰で悪いのだけれど、福神漬けはある？」

「あ、そうですね、今出します」

何なんだろうこの状況は、と夏芽は考えざるを得なかった。

そりゃあカレーには福神漬けは必要だよな、と彼女は現実逃避気味に納得することにした。

「あの、らつきようでも良いですか？」

しかし残酷にも偶然この家には福神漬けが無かった。

冷蔵庫を開けて中身を確認した夏芽が振り返って尋ねた。

「いえ、無いならいいのよ。らつきようは触感が気に入らないからいらないわ」

「あ、私は食べるから持ってきて」

「うん……」

何だろうこの状況は、と夏芽は千秋にらつきよう漬けを渡しながらも一度そう思った。

四人はもくもくとカレーを食べ続ける。

言葉にすればそれだけなのに、何だかシユールな状態だった。

「(ぐ)ちそうさまです」

「あ、おかわりします?」

「もう十分よ」

食事を終えた魔女は微笑んでそう言ったが、夏芽は気になつてしようがなかった。

彼女の代名詞とも言える黒いケープの隅つこに、カレーが一滴跳ねていた。しかも当人は気付いていなかった。

え、どうしてそこに跳ねてるの? 一人だけカレーうどんでも食べてたの? 夏芽は言おうとしたが物凄く言い辛かった。

「あ、あの、今さらですけど、上着は脱いでもいいんじゃない」

「ああ、これ? 私冷え症なの」

ああだからいつもそれ着てるんだ、と夏芽は常々思っていた疑問が氷解したが、自分の親切が不発に終わったことを悟った。

彼女のケープを預かつて汚れをふき取っておこう作戦は失敗したのだった。

「あッ、そこにカレー跳ねてますよ」

「あらホントだわ」

夏芽の苦悩をよそに、真冬が空気を読まずそれを指摘してしまった。

黒い生地で目立たないのに良く気付いたものである。

魔女はケープについた汚れを指先で拭った。

夏芽はなんだか気を使い過ぎて疲れる気がした。

「ほら、真冬。ノーパソどかして」

「う、うん!!」

「私はお茶入れてくる」

「お構いなく」

夏芽はリビングに一人待たせるわけにもいかないので、結局自室に彼女を招いた。

室内で唯一のテーブルを陣取っていた真冬のノートパソコンをどかさせようとしたり、千秋はお茶とお菓子を自主的に持ってこようとしていた。

「ねえ」

「は、はい、何でしょう!!」

「そこまで気を遣わなくていいのよ、客とはいえ同級生なんだから」

黒衣の魔女の言葉に、夏芽とノートパソコンの置き場に困っていた真冬が顔を見合わせる。

この二人、或いは千秋を含めて三人は彼女が同じ年の人間だという意識が根底から存在していないなかったのである。

「え、でも、魔女さんって転生者なんですよね?」

「そうね」

「前世と今生を足したら幾つになるかはわかりませんが、普通はその分を加算して考えるべきなのでは？」

真冬は某小説投稿サイトで腐るほど転生物の小説を読んでいた。

大抵の場合、流行の小説の主人公たる転生者は前世の年齢を今生と加算して考えていたりするものである。

尤も、それが精神的に大人であることに必ずしも結びついていないが。

とにかく、真冬はそのような見識を彼女に披露したのだが。

「気持ちにはわかるけど、それって傲慢じゃないかしら」

そしてこの黒い魔女はそうのように意見を述べた。

「前世の知識があるから、そうでない他者より優れているのかしら？」

他人と違うから、成功や名誉が約束されているとでも？

だから敬われて当然だとでも？ もしそう思う者がいるのなら、私はそれ以上憐れな

人間を知らないわ」

「私は物凄く羨ましいですけど……」

「私はむしろヘカテー様を敬い過ぎてハデス様に嫌われたのだと思っただけです。」

神々に嫌われることがどんなに恐ろしいことか、今時の人たちにはわからないのでしようね」

彼女の物言いなら、この魔女は今現在恐ろしい目に遭っているということになるが、当人の表情は涼しいものだった。

「やっぱり、あなたでも昨今の転生者の人たちが現れた原因はわからないんですね」

「私に言わせれば、今の人たちは理由を求めすぎているわ。」

断言しても良いけど。その理由が説明されることはないでしょうね」

真冬は今の社会構造が面倒だと言われているようで言い返せなかった。

「未知に憧れる者は私も昔から数多く見てきたけど、それを特別視したり神秘性を見出すのは仕方がないことだとは言え不毛よ。」

私はあなた達と変わるところなど、少しも無いのだから」

「じゃ、じゃあ、私も春美みたいに魔法を使えるようになれるんですかね!!」

真冬はなぜか興奮気味の夏芽を半眼で見た。なぜ今の流れでそのような解釈が出るのだろうか、と。

「ふふふッ」

「わ、笑われた……」

「夏芽の成績じゃ無理だってことじゃないの?」

お茶を運んできた千秋の言葉の棘がグサリと夏芽に刺さり、彼女は部屋の隅でいじけ始めた。

「いえ、ごめんなさい。程度の差はあれ、魔力の素質を持たない人間は今のところ見たこととは無いわね。」

でも私はその素質を目覚めさせて幸せになった人間なんて見たことがないわ」

「それは、春美ちゃんもそうだつてことですか？」

魔女が座るテーブルの前にお茶を置いて、千秋が尋ねた。

「言い方を間違えたわ。逆ね、幸せな人間は魔導に手を出すことは無い、と言うことよ。あなた達になりふり構わず私に師事したいって気持ちが無いのなら、それは必要なことではないわ」

その魔女の言葉に、何となく三人は顔を見合わせ理解した。

魔法には関わりたいしその恩恵を出来れば得たいと思つているが、それに人生を捧げるのは何か違うのだ。

火遊びは、どこまで行つても遊びでしかないのだから。

「……じゃあ」

夏芽は部屋の隅から戻つてきて、彼女にもう一度尋ねた。

「正義や困っている人々の為に、魔法を使うのは間違つてると思いませんか？」

その為に魔法の知識を得たり、それを実践するのは不幸なことなんじゃないか」
「それは不幸ではなく、生き方の問題よ。」

そして、あなたの抱く理想や幻想を私に当てはめるのは止めなさい。

かつての私が何をしたのか、あなたが知れば幻滅するだけでは済まないわ」

魔女の言葉はやんわりと拒絶するようで、だがある種の優しさに満ちていた。

夏芽の心の奥底に根付いている憧れは、この魔女やその同業者たちとはあまりにもか
け離れたものなのだから。

「でも、あなたを見ているとかつての知り合いや青かった頃の私を思い出すわ。」

なぜ他人とは違うことができるのに、それを役立てようとしなれないのかと、私も師に
言ったことがあるのよ」

「えーと、それ、なんて言われたんです？」

夏芽が幼馴染の二人から見てもなかなか見ないレベルで落ち込んでいるのを見て、千
秋が尋ねた。

「掻い摘んで言うと、個人のできることに限りがあるし頼られるのは肝心な時だけにし
ておけ、安売りをすると軽んじられるしお互いの為にならないってことね」

「思いのほか普通っていうか、俗っぽいっていうか。」

何と言うか、神秘の秘匿の為とか、魔法の秘密を知った者は生かしておけないとかそ

んな理由だと思ったのに」

「真冬、それはあんたがアニメの見すぎよ」

今度は真冬が割と落胆していた。

そんな幼馴染二人を見て、呆れる千秋だった。

「ところで前々から不思議に思ってたのだけど、この時代でもないのに当時の私たちが使う共通認識的な専門用語が存在したり、それらを当然のように誰もが知っているっておかしくないかしら？」

「え？ どういうことですか？」

真冬はそれが深淵に踏み込むことだと分かっているながらも、尋ねずにはいられなかった。

「ほら、念話とか、結界とか、そういうものよ。そんな便利な物が出てくるのはこの時代の人間らしい発想と云うか」

「え、無いんですか、念話とか、結界とか」

「あるにはあるけど、他者との交信は物凄く面倒なのよ。」

結界の概念はあったけど、もっと漠然としたものだったわ。

言っておくけど、昔の私たちは同業者同士でそこまで横繋がりがあったわけではないし、組織的でもなかったわ。

ましてや、専門の教育機関があつたわけでも無かつたわよ。そう言うのつてもつと後の時代の発想でしょう?」

「ぎゃーー!! ラノベやアニメの設定を全否定するの止めてー!!」

魔女の素朴な疑問とマジレスが憐れなオタク予備軍に致命傷を与えてしまった。

「共通認識を利用した術もあるし、今ならそう言う物も作れるかもだけど、スマホがある時点で無用の長物ね」

「あの、もう聞こえてないみたいですよ」

夏芽は落ち込んでるし、真冬は聞こえなかつたふりをしている。

とりあえず千秋はほつといっても大丈夫そうな真冬より、夏芽の気分を変えてあげようと千秋は思った。

「そう言えば、この辺りに昔夏芽が使つた魔法使いの衣装とか呪文書とか設定集とかが入つてたような」

「ちよ、千秋、マジで止めて!!」

「いいじゃない、この際だから本物の魔法使いに見てもらおうよ」

「止めて——!!」

その反応に千秋の笑い声が響く頃には、夏芽はすっかりいつもの調子を取り戻していた。

「やっぱり、あなた達に私と同じ道は不要ね」

この三人を見て、少しだけ微笑んで黒衣の魔女はそう結論付けた。

編入について

臨時休校からしばらく経ち、六月になった春美たちの学校は、早々に珍事に遭遇した。「カタリナと申します。」

どうぞよろしくお願いします」

予想外の人物の登場に、ぼかーんとなるいつもの四人。

「カタリナさんは家庭の事情で今まで通信制の学校にいたらしくて、あまり学校に通ったことがなかったそうです。」

皆さん、彼女に偏見など持ったりせず、分からないところがあつたら助けてあげてください」

彼女らの担任先生がそのようにカタリナを紹介した。

クラス中の誰もが、それは無理だろう、と思つた。

なぜなら、彼女は今でさえ修道服姿なのだから。

「何でシスターさんが？ この時期に？」

「編入するところ、ミッシヨン系の学校と間違えてない？」

等々、生徒たちは好き勝手隣の席の生徒たちと話し始めた。

「え、これ、どういうこと?」

「……さあ?」

困惑する夏芽と、呆然と生返事を返す千秋。

「……………」

そして真冬やほかの生徒たちは真顔のまま無言を貫く春美の様子をちらちらと窺うこととなったのだった。

さて、朝のホームルームの時間に紹介されたカタリナは、急遽増設された一番後ろの机に着席した。

そして一時限目の準備を始めた彼女に転入生のお約束イベントが発生した。

「ねえねえ、カタリナさんってシスターなの?」

「はい」

「カタリナって本名なの? 日本人だよね?」

「洗礼名です」

「今まで学校に通ってなかったってホント? やっぱり教会って厳しいの?」

「いえ、神父様はかなり緩い方です」

そう、女子たちによる質問攻めである。

ハッキリ言ってカタリナはその外見や雰囲気から話しかけづらい人物だった。

それでも好奇心が勝つあたり、女子たちのバイタリティは侮れなかった。

「私の方からも質問をよろしいでしょうか？」

「うん？ なになに？ 何でも聞いて」

「同じ学年に魔女が居ると聞きました。どのクラスですか？」

しかしいかに彼女らがバイタリティに溢れていようとも、バイタリティだけではどうにもならないことは有った。

そしてそれは彼女の立ち位置を決定付けてしまう一言だった。

「あ、うーん、魔女さんねえ……」

「ねえ、私たちも授業の準備しよ!!」

「そ、そうだね!!」

女子たちは別に授業に真面目でもないのに蜘蛛の子を散らすように自分の席に戻り、教科書の準備を始めてしまった。

「……」

カタリナは周囲に視線を向けると、クラスメイト達は目を合わせまいと顔を逸らした。

「なるほど」

彼女は自分なりの解釈でその状況に結論付け、警戒するようにカタリナを見ている春美を見返した。

「やはりここは異教の教えが流布された、邪悪な魔女のあぎとの内側というわけですか」
そして彼女は、静かに祈り始めた。

その頃、屋上では一羽のカラスとハトが少しの距離を開け睨み合っていた。

お互いに微動だにせず、争うことも無く、ただじつと、牽制するように、静かに。

§ § §

——この学校に魔女さんを退治にやってきた教会の刺客が現れた。

そんなバカみたいな噂が学年中に広がるのに、お昼休みまで掛からなかった。

他のクラスの生徒たちは、二限目の終わりの礼拝の時間に十字架を机に置いて祈りながら聖書の文言を呟いているカタリナの姿を興味本位で廊下から入れ替わり立ち代わり噂の真偽を確かめようと遠巻きに見ては帰って行ったからである。

学内で宗教戦争が勃発かと思いきや、両者の動きは不気味なほど無かった。

そんな中で、彼女に話しかける人物がいた。

「あ、カタリナさん、一緒にご飯食べる？」

アホだった。いや、夏芽だった。

「よろしいのですか？」

「え、だつてクラスメイトでしょ？」

夏芽は素直にそう返した。

何も考えていないように見えて、わざわざ学校に編入したのに争いに来たわけないでしょう、と言つた考えているような無いような樂觀も入っていたが、概ね彼女の直観は正しかった。

「夏芽ちゃん、勇氣あるなあ」

「何も考えてないだけよ」

真冬と千秋の幼馴染二人は、彼女の行動力に呆れるやら何やら。

「前にこの三人があなたと会つたつて言つてたけど、何もしなかつたでしょうね？」

五人が一堂に会すると、蒸しパンをかじっていた春美が口を開いた。

「何も。少なくとも、今の私は前世のように活動する気概も無ければ地盤もありません。

私はただ、今生を生きる者として彼女に会いに來ただけです。

そのようにしたいと私のお世話になつている神父様に話したら、この際だからちゃんと学校に通つたらどうだと仰られました」

「へー、でも良くこの短期間で編入なんてできたね」

「それはまあ、あれですよ、神の導きがなんやかんやあったのです」

「なんやかんや!?! なんやかんやって何!?!」

千秋のツツコミに応えるつもりはないのか、カタリナは聖別済みのパンとブドウジュースを食べ始めた。

「でもまあ、うちの教師たちって魔女さんを怖がってるし。」

本職のシスターが居たら嬉しかったんじゃないの?」

と、思いついたことを口にする夏芽。

この場合、本職という言葉がまた別の意味を持つわけだが、当人はそんなこと考えてはいなかった。

「いやいや、それって逆に刺激するようなことじゃない。」

先生たちはたぶん、このまま穏便に卒業してもらうのが一番だと思っててるよ、きつと」

真冬は教師たちの立場を考えて、そのような推察を述べた。

「おそらく、それが正しいのでしょう。」

私はあの女と同じクラスにしてほしいと頼みました。

しかしその願いは無視され、遠いこのクラスに宛がわれました」

「え、じゃあ別に先生たちに魔法とか見せたわけじゃないの？」

「別に異端と対峙したわけでも無く、迫害に遭ったわけでも無いのに、神が安々と御業を披露するわけがないでしょう？」

あと、私が邪悪な魔術に通じているような言い方は止めてください」

「あ、ごめん」

千秋は失礼なことを言ったことに対して、ハツとなつて素直に謝罪を述べた。

春美はカタリナの態度に鼻を鳴らしたが。

「じゃあ学校は普通に変なシスターが編入したとしか思っていないんだ」

「それって普通なの、変なの？」

「それにしても、変な知り合いが増えたよな、あたしら」

春美のツツコミは夏芽には通用しなかった。

「この間なんて、魔女さんと一緒にカレー食べたしね」

「望海さんも変な人だしねー」

「はいはい、どうせ私は変な人ですよ」

可笑しそうに微笑む真冬と千秋を見て、春美はふて腐れ始めた。

「……不思議ですな」

「うん、なにが？」

「私の知識では、あの魔女は女子供を集めて夜な夜な邪悪な呪いを授け、生け贄の儀式としてその血肉を貪る邪悪極まりない存在でした。」

あの時代、もしあなた達三人が私の前に現れていたら困惑していたかもしれません。魔女に出会いその知識に魅了され啓蒙されていない、と言うのは常識的にあり得ないことでしたから」

「ふうん、別の魔法使いに啓蒙されまくっている真冬さんどうぞ」

「ちよ、そこで私に振る!？」

そんな夏芽と真冬のやり取りを、やはりカタリナは不思議そうにしていた。

「邪悪な知識を目の前にして、それに靡かないというのはそれだけ得難いことなのです
よ」

「あー、うん、カタリナさんを見ると、やっぱりそうなんだろうね」

千秋はカタリナを見て何となく昔も今も人々は変わらないんだろうかと察した。

それこそ、魔女に会った時点で殺害対象になるくらいには。

「だからこそ、今の時代は度し難い」

「え?」

「なぜ人々が神の御心から離れ、邪悪な魔術に手を染めるかわかりますか?」

「えっと、不幸だから?」

夏芽は以前、魔女に言われた言葉を思い出して、反射的に口にした。

「ええ、その通りです」

そして異端と、異端を狩る側の意見は、見事に一致していた。

「人々が魔術に手を染めるのは、貧しさや病への恐怖から逃れるためです。

清貧を貫き、神にその身を捧げれば、魔術と言うまやかしから己を遠ざけることぐらいできるというのに」

カタリナの言葉は、少なくとも正論ではあった。

キリスト教の教えは現代の倫理観にも続く優秀な物なのだから。

「でもそれは少なくとも、あなたが言える言葉じゃないんじゃないの？」

神に近づくことがキリスト教徒の目標だけど、誰もがそれを実践できないから修道院なんてものがあるんでしょう？

やり方次第で信者の心を取り戻せたかもしれないのに、その機会を奪ってきた連中がそれを言うの？」

そしてその正論は、それこそ春美のような人間にとってはまやかしだった。

清貧を心がけ、神に対して真摯でも、それは他人に蹂躪されない理由にはならないのだから。

「少なくとも私は、あの人に師事して心の底から良かったと思っっている。

そして我が神はヘカテー様で、あなた達の神とは違う」

「ええ、だから私はここに来た」

カタリナは春美の言葉に反論するわけでも無く、生気の無い瞳と表情でこう続けた。「かつての私の行いが正しいのか間違いなのか、それを見極めよと、これはそう言った神の思召しなのでしようから」

「まあ、良いことだと思おうよ？　とりあえず魔女さんと喧嘩するわけじゃないって分かってよかったよ」

いつの間にか宗教論争になって緊迫していた五人の間の空気を気にせず、夏芽は笑ってそう言った。

「目の前で邪悪を目にすればその限りではありませんが」

「暴力沙汰になったら停学になるから刃物振り回すのは止めようね？」

その光景を想像して、心配になった千秋はそのように言い含めるのだった。

「春美さーん、ちよつといいですか？」

その声を聴いた瞬間、春美は反射的に身構えた。

「げっ、そのシスター女、本当に転入してきたんですか」

「その節はどうも」

カタリナの記憶が先日警察に通報した時点で止まっている望海が、教室内の彼女の姿を認めて嫌そうに表情を歪めた。

「彼女、少なくとも争うつもりはないそうだから、用があるのならこっち来なさい」

「はい、わかりました」

望海は春美にそうは言われたが、そろそろと彼女らに近づいた。

「ちよつとこれ、見てくださいよ」

そして、望海はスマホの画面を春美に見せた。

「これ、うちの生徒？」

「ええ、どうします？」

春美は眉を顰め、望海も困ったように彼女に尋ねた。

「私にも見せてくれますか？」

「え、まあいいですけど」

カタリナに言われて、望海は少々彼女にもスマホの画面を見せた。

それに乗じて他の三人もその画面を覗き込む。

「うッ」

それを見て三人は言葉を失い、特に夏芽は青ざめた。

その画像は自撮り写真だった。

女子生徒が様々なデコレーションのされた文字やスタンプで己を彩っていた。

だが彼女がそれをしようとするには、有ってはならないものがあつた。

顔中や首元に皮膚病のような赤い斑点が点在していたのである。

写真の女子生徒が笑顔な分、痛々しくて眼を逸らしたくなるほどだつた。

「これは、らい病ですね」

「え、これ普通の病気なの？」

「いえ、まだ、当人の見た目に影響は出ていません」

即座に原因を特定したカタリナに真冬は驚き、望海は冷静に答えた。

「おっと、失礼。今時は重い皮膚病でしたね。まったく、聖書の誤訳で処刑された者もいると言うのに。」

より正確に言うなら、これはツアールアトという呪詛ですね」

「じゅ、呪詛って……」

「夏芽ちゃん、これ以上見ない方が良いよ」

真冬が千秋を気遣つて、一緒に席を離れた。

「そ、その、つあーらとつて？」

「今の言葉で訳するなら、ハンセン病のことです」

「やっぱり普通の病気とは違うの？」

「ええ、これは私がかつて生きていた時代の一昔前に流行った病に見せかけた呪いです」
カタリナは千秋にそのように丁寧に説明をした。

「……これは、私の術で霊視したのではなく、知り合いのSNSグループに上げられた写真なんです。」

「どういった類の呪いなんですか？」

建前上自分の超能力を術と言うことにしている望海がそのように言つてカタリナに尋ねた。

「レビ記にあるように、かの病は物にも感染すると思えられて、それらは焼かねばなりませんでした」

写真に影響が出ているのは呪いの影響だろう、とカタリナは判断した。

「まあ、昔は感染症とか細菌とかよく分からなかっただろうし、最適解だと思うけど」

「ええその通り、この呪詛も現代からすればすぐに呪いだと分かる時代遅れの代物ですね」

「物にも病気の症状が出るなんて、今の時代あり得ませんね。所詮十五世紀の産物か」

「こう言うところは決して現代の技術が魔法や呪術に劣っているわけではないと実感する春美と望海だった。」

「早めに処置しなければ、これは周囲にも影響を及ぼしますよ」

「まあ、物に感染するってことは周囲の人間にも感染するでしょうけど」
「その方に会わせてください。」

「は、はい、そう言うことなら」
「は、はい、そう言うことなら」

望海は一瞬彼女の気迫に押されながらも、ある算段をつけた。

「彼女ですよ」

件の女子生徒は、机に突っ伏して泣いていた。

クラスメイト達は彼女が呪われていると何となく察し、離れた位置から好き勝手にひそひそと話していた。

「ついさつき、判明したばかりなんです。」

昨日にはさつっきの画像はあんな感じじゃなかったみたいで」

「なるほど、運が良かった」

望海の言葉を聞いて、カタリナはそう呟いた。

それには付いてきていた春美も同感だった。

呪いの症状が本格化した直後に、呪いが周囲に振りまかれる可能性もあったのだから。

「だ、大丈夫そう?」

「ええ、いまのところは」

この三人から離れた廊下から彼女らを見ている幼馴染三人組が、恐る恐る尋ねた。
「ツ、待って、ここから離れてください!!」

動画撮影モードで被害者を映していた望海が叫んだ。

彼女のスマホに映る被害者は、呪いに蝕まれていた。

それが、徐々に己の視界と今まさに重なっていつているのだ。

呪いが、人体に本格的に浮かび上がってきたのだ。

「い、いやああ!!」

被害者は己の体に浮かび上がった異変に気づき、叫び声をあげた。

顔や、手足だけではない。まず、制服が腐食し、変色した。

彼女の接触している机や椅子も同様に蝕まれ、ボロボロになっていく。

それは既存のハンセン病と同一視するにはあまりにもそれとかけ離れた、おぞましい呪詛の発現だった。

生徒たちはパニックになって、教室から逃げ出す。

その流れに逆らうように、カタリナは前に出た。

春美と望海の二人は、被害が広がらないように急いで壁に油性ペンで魔法陣を描き始めた。

「た、助けて、誰か助けて!!」

「もう大丈夫」

被害者の女子生徒を中心に赤黒く変色する教室を、一人の修道女がゆつくりと歩み進む。

「ちようど聖体を拝領した直後でよかった」

彼女は聖水を周囲に振りまいた。

そして、聖書のイエスキリストがそうしたように、呪いの影響で様々な疾患が出ている被害者の手を取り、跪いてカタリナは言った。

「よろしい、清くなれ」

彼女がそう言った、直後だった。

這い進むように周囲に広がっていった呪詛が、動きを止めた。

カタリナは腐敗して崩れた制服を破り捨て、産まれたままの姿の被害者を抱きしめた。

被害者を蝕んでいた呪いは、消え去っていた。

「誰か、火とタオルを」

「どうぞ？」

彼女が振り返ると、制服のままの魔女が松明の炎と自身のケープを差し出していた。カタリナは無言でケープを受け取り、被害者に着せた。

その横で魔女は松明を振るう。

そうして、呪詛に侵された物品だけを焼き払った。

これで一件落着、と言うには教室丸々一つ使用不可という状況は重かった。

学校側はこれを魔術的テロだとして通報した。

まずは当事者ということで、呪いに掛けられた女子生徒が事情聴取され、残りの生徒は一旦家に帰されることになった。

「まったく、登校初日からこの有様ですか」

騒ぎを起すつもりがあつたわけではないのに、騒ぎが起こつてしまいいカタリナも不機嫌な様子だった。

「二応聞いておきますが、あなたの仕業ではありませんよね？」

「わざわざ、自分が通っている学校でやる理由も無いでしょう？」

校門に既に事件を聞きつけてやってきたマスコミを遠目で見ながら、カタリナは鼻を鳴らした。

「それで、師匠。どうしますか？」

「どうするも何も、あれは素人の犯行よ。」

「私たちが何もしなくても、犯人は勝手に逮捕されるわ」

「そういうことなら。望海、あなたも余計な首を突っ込むんじゃないわよ」

「分かってますよ、衝撃の光景ならさっきので十分です」

師匠の言葉を受けて春美は望海に釘を差したが、当人もさっきの呪術汚染に立ち会い冷や汗が今だ収まっていないようだった。

「皆、怖かったでしょう？」

「気分転換になにか一緒に食べましょう」

「あ、じゃあ、近くに新しくオープンしたクレープ屋行きましょう!!」

「賛成賛成!!」

「じゃあそれで!!」

魔女の提案に食い意地の張った夏芽が手を挙げてそう言って、真冬と千秋もその案に賛成した。

「私も同行しましょう。魔女が彼女たちを誑かすやもしれませんし」

「そう言えばあなた」

「何ですか？」

嫌味っぽく言うカタリナに、しかし魔女は皮肉っぽく笑ってこう言った。
「あんな風に対処することもできたのね」

その嫌味に、カタリナはもう一度フンと鼻を鳴らすのだった。

顔合わせについて

「……これは酷い」

警視庁異能係の伊藤刑事は、魔術テロがあつたと言う高校の教室に入って、その惨状を見てそう言った。

閉鎖された内部は呪術的防御が見込まれる特殊防護服を着た捜査官たちが写真を撮ったり、調査をしていた。

教室は中心から室内の約半分の床や机や椅子が焼け焦げていた。

単純に見るなら爆弾でも爆発したようにも見えるが、衝撃波が周囲に襲った形跡もなく、窓ガラスや隅の備品は無事だった。

鑑識は机や床などから、原因不明の腐食が見られると話していた。

科学では説明できない、何かしらの魔術的現象が関わっていることは数多の目撃者の証言からも確かだった。

「校長先生」

「はい、何でしょう」

伊藤刑事はブルーシートで閉鎖された教室の外へと出ると、廊下で不安そうにしてい

る校長や事情聴取を受けている教師たちの前に出た。

「率直に尋ねますが、この呪術汚染の被害を収束させたのは誰ですか？」

「そ、それは……」

伊藤刑事の質問に、校長は露骨に視線を逸らした。

「被害は局所的で、迅速に処置されていました。」

これは高度な魔術的な知識を持つ者が対処した形跡に他なりません。

でなければ、この教室の半分程度で被害が収まるはずが無い」

彼もこれまで、異能係の刑事として多くの魔術被害を見てきた。

そして対処が遅れた結果、家一軒分の敷地が向こう数十年ほど霊的に使い物にならないとなると言った事例も珍しくなかった。

これは明らかに、その場に居合わせた誰かが被害を抑えたのだ。

教室の廊下側の壁には、書き掛けの魔法陣まで存在しているのだから、疑いようも無い。
い。

「……当校では、異能の持ち主を認識しておりません」

「あのですねー、これはテロなんですよ!!」

誰かが、無差別に、学校で学ぶ何の罪も無い生徒たちを狙った卑劣な犯行なんです!!」
「だとしても!!」

当校の生徒たちは法律上未成年なのです!!

教師としても、学校としても、大人としても、生徒たちを守る義務がある!!」

校長の態度にイラついた伊藤刑事が声を挙げるも、校長とて保身以外の感情も確かにあったのだ。

当然、こんなおぞましい所業を行う犯人に怒りが無いわけでもない。

それでも、それが建前だとしても、無意味な虚勢でも、校長はそうしなければならなかった。

「……わかりました。記者会見は必要ですものね。

学校としては、ただ魔術被害に遭っただけ、それでよろしいでしょうか?」

「申し訳ありません」

「いえ、心中お察しします」

建前は大事だった。それが社会と言う物だ。

「事情を知るだろう生徒を、明日呼びますのでどうかそれでよろしくお願いします」
「わかりました」

当然、それは学校関係者立会いの上での事情聴取だろう。

だが円滑に捜査が進むのなら、それは仕方がないことだ。

今日は化粧屋もなぜか来るのを渋ったことだし、と彼も納得することにした。

§ § §

高校の校長室に、七人の人間が集まった。

高校の校長、教頭、呼び出された生徒の担任の一人である早瀬。

伊藤刑事、化粧屋、先日協力を取り付けた仮面の魔術師。

そして修道女に、黒衣の魔女。

「こうして昔の面子が集まると、何だか奇妙に感じるよな」

口火を切ったのは、化粧屋だった。

「魔女殿、御無沙汰しています」

「あなたも、お久しぶりね」

木製の仮面を被った魔術師は黒衣の魔女に丁寧に一礼した。

「それで、彼女がああ総長だと？ 信じられんな」

「間違いないぜ。あの剣筋、忘れるはずもない」

化粧屋が太鼓判を押すと、魔術師は唸った。

「ごほん、旧交を温めるのは後にしてくれ。今回の事件はシャレにならん」

「ああ、あれ？ あれのどこがシャレにならんのか分からんな」

「平日の学校で、生徒がたくさんいる教室を狙われたテロだぞ、当たり前だろう!!」

正義感から声を荒げる伊藤刑事の様子を見て、化粧屋は小さく笑った。

「断言するよ、あれはテロ目的じゃない」

「なんだと?」

「ど、どういうことです? あれだけの被害が出たのに」

目を丸くする伊藤刑事だけでなく、校長も化粧屋に尋ねた。

「ツアールアトは確かに周囲に伝搬する呪詛です。」

ですが、あれはおそらく術者も想定外の規模だったはずでしょう」

それに答えたのは、修道女のカタリナだった。

先生方は一般人だと思っていた彼女が魔術に精通していることに未だ信じられなかった。

「想定外? どういうことだ?」

「刑事さん、呪詛とはどういうものだと思いますか?」

黒いケープの魔女が、疑問を浮かべた伊藤刑事に尋ねた。

「呪いの中で、特に殺傷性の高い殺害目的の物だ」

「そうだ、そう言う意味では、これは呪詛じゃない」

「なに? あれに殺意が無かったと言うのか!」

化粧屋の言葉に、伊藤刑事も驚愕が隠せなかった。

「ハンセン病は、たしかに酷い病気だ。

だが掛かつて即座に死ぬようなものじゃない。

でもその特徴的な症状から他者に忌避され、差別され、偏見の原因になった。

その病に掛かった人間は当時、多くの権利を剥奪され、社会的に死んだも同然だった」

化粧屋は、まるで見てきたようにそう語った。

「この呪いの本質は、殺害では無いと？」

「この国には、人を呪わば穴二つって言葉があるだろう？」

誰かを呪って殺すって言うのは、それだけの代償を払う必要がある。

ある程度ランクを下げればそれだけ呪いの扱いも簡単になり、精神的敷居も低くなる」

「それは、確かにそうだが」

呪殺の類が術者の命を脅かすことは、伊藤刑事も承知していた。

それでも呪殺事件が多く発生するのは、それだけ他者に恨みを持つ人間が多いからだ。

「で、では、なぜ教室中にまで呪いが及ぼうとしたのですか!？」

テロではなく、うちの生徒一人を狙ったものだと!？」

「まあ、少なくとも無差別テロでは無いわな」

その恐ろしい事実にとまらざる声を挙げる教頭に、化粧屋は頷いた。

「呪いの範囲が急速に拡大したのは、術者と被害者両方が原因かと」

そして魔術師が冷静に次の疑問にそのような結論を述べた。

「両方に、原因が？ どういうことですか？」

両方に原因があると言う事態に理解が及ばず、教師の早瀬が尋ねた。

「ツアラアトという言葉は、ハンセン病を単純に言い表す言葉じゃないのです。

この国にもある神道でいうところの、穢れ概念に近い」

「穢れ？ 実際の病気を発生させるわけではないのか？」

「ええ、分かりやすく言うのなら、この呪いは相手の穢れを増幅させて人体に影響させる攻撃、と言ったところでしょうか。」

そして――」

魔術師は、オークの杖で虚空に文字を描いた。

それは『く』の字に似ていて、何も無いところから炎が発生していた。

伊藤刑事だけでなく、先生たちも突如の魔術の行使に驚き、離れた。

「あの、早く消してください!!」

恐れ戦いた早瀬先生が叫んだ。

「そう、魔術には術を終了させると言う工程が必要なのです」

オークの杖で虚空に浮かぶ文字を消し去り、炎が消失すると魔術師は言った。

「術者はそれが出来ていなかった。明確に素人です。」

そして術の対象も、予想以上に増幅元の穢れが存在していた」

それが結果として予想外の効果が出てしまった原因だと、魔術師は語る。

何のことも無い。単に恨まれるには、恨まれるだけの理由がある、と言うだけの事だった。

「……被害に遭った女子生徒はなんと？」

「何も知らないの一点張りで……」

テロかと思ったこの事件、紐解いてみれば下らない真実が見えてきそうので、伊藤刑事も彼に問われている教頭も言い辛そうだった。

「私は帰るわ。痴情の纏れに付き合ってられん」

化粧屋はうんざりした様子で、一人さっさと校長室から出て行ってしまった。

「あの女、また勝手に……」

伊藤刑事もその勝手な行動に物申したかったが、事件は進展しそうだったので言葉を飲み込んだ。

実際に魔術的知見は得られた。容疑者の確保は彼らの仕事だった。

「私も帰ります。一大事と聞きましたが、これ以上お役に立てることも無いでしょう」
仮面の魔術師も立ち上がる。

「先生」

「あ、ああ、刑事さん。そろそろ生徒たちを」

「……わかりました。お二人もお帰り頂いて結構です」

黒衣の魔女の視線に促され、校長は伊藤刑事に生徒二人の退出を許可した。

大人たちが彼女らを見送ろうとして、それを許さぬ人たちがいた。

「校長先生!! 魔術テロとの事ですが、なぜこの学校が狙われたのでしょうか!!」

「今後の安全対策はどのようになさるおつもりですか!!」

「その二人は事件関係者なのでしょうか!!」

門前で待ち構えていたマスクミ関係者たちである。

彼らを警戒して裏口から出たのに、かなりの数がいいた。

「あー、皆さんおちついて。」

当方の捜査によりますと、テロ事件である可能性は著しく低くなりました。

今回の一件は特殊な案件ですので、後程学校側と一緒に記者会見を——」

伊藤刑事はマスクミの前に出てそのように説明した。

まだ未確定な捜査状況を話すはよろしくはないが、異能係は社会の異能事件の収束を

第一にしている。

凄腕の異能者が揃いも揃って、テロではない、と根拠を述べて太鼓判を押しているのだから、彼も信じることにしていた。

何より、事件の被害者は未成年なのだから。その人権が報道屋に食い物にされて言いわけが無いのだ、と。

無論、その程度で納得するほど素直な連中なら、彼らを毛嫌いする人々も多少は減っていただろう。

「では、犯人の目星は特定できたのですか!？」

「学校関係者のお話だけでもお聞かせください!!」

「この学校が呪われているという噂に心当たりは!!」

「以前にこの学校で心神喪失者が出たというのは本当でしょうか!!」

もはや拭いきれぬ悪評が流れていることに、校長たちの表情も青くなるのだが。

「静まりなさい」

魔力の乗った声が、彼らを黙らせた。

一瞬にして、あれほど騒がしかった裏門前は水を打ったように静けさが訪れた。

「調停者たる私が宣言する。

流言飛語に惑わされず、世間の混乱を招くような報道は控えなさい。

被害者や学校関係者、そしてそこに通う生徒たちに最大限の配慮をすること。

この裁定に異議を成す者は神々の怒りを買ひ、祝福を失うだろう」

魔術師の言葉を、喧々轟々としていたマスコミたちは粛々と受け入れていた。

まるでそれが当然のこのように、彼らは自然に受け入れていた。

「あ、ありがとうございます」

「被害者やこの学校に通う生徒たちが彼らの食い物にされる必要はありませんから」

何が起こったのかは分からないが、マスコミが最低限の人数を残して撤収を始めたのを見て、校長は魔術師に頭を下げた。

校長たちも、これで過剰な報道は控えられると自然と悟ったのだ。

「そして二人とも、今日は無理言つて来てもらつてすまない」

校長は生徒二人にもそう言つた。

「刑事さん、彼女らは事件の目撃者に過ぎなかつた。それ以上でもそれ以下でもありません」

「分かつていますよ、どんな事情があろうとも、この国では法律上未成年なんですから」
伊藤刑事はやりにくい世の中になつたと、つくづく思うのだ。

「正直、今生で化粧屋の顔を見た時は不愉快極まりなかつたですが、こうしてあなたにも

う一度巡り合えたのならそれも悪くない。

「今も弟子を取っているのですか？」

「ええ、一人、見込みがあるのが居てね」

「そうですか。人間同士がやたらと殺し合う必要が無くなっただけ、この時代に移り変わった価値は有ったように思えますよ」

帰り道の道中に、仮面の魔術師はカタリナを見てそう呟いた。

「それはどうでしょうか。多様化と言えば聞こえはいいですが、私には墮落と退廃の言い訳にしか聞こえません。」

「それどころか人々は魔術の存在に惑わされ、神の御許に行こうとも考えない。本当に、度し難い」

そのカタリナは胡乱な視線でそのように吐き捨てた。

「お前さ、さつきはこいつのお蔭で面倒事にならずに済んだんじゃないか」

「いつの間にか、化粧屋がコンクリートの塀に背中を預けて立っていた。」

「少しは感謝してやったらどうなんだ？」

「戯言ですね。それで魔術を用いて人心を操ることが正当化されるとでも？」

「あなたの場合、それで自身の行いの邪悪さや醜悪な内面を覆い隠せると思っ

ていますか？」

調子に乗るな外道、お前のような下衆が社会に混乱をもたらしているのだ」

「あ、あ、？」

「止めなさい、二人とも。」

今生でも殺し合うつもりですか？」

殺気をまとう二人の間に、魔術師が割って入った。

「そうね、お互い昔のようなことはこりこりでしょう。相手に謝れとは言わないけど、それ以上は止めなさい」

「……」

「……」

化粧屋は舌打ちし、カタリナは不機嫌そうに鼻を鳴らした。

仲裁をした魔術師と魔女は、やれやれとため息を吐いた。

「……彼に免じて、その仲裁を受け入れましょう。」

その代りと言ってはなんですが、あなたの弟子を借りますよ」

「うん？ どうして？」

「あの被害者を通じて術者を特定する為ですよ。」

「邪悪な術を行使する者を野放しにはできません」

「好きにすれば？ それなら、もう一人の方も連れて行きなさい」

その辺が落としどころだろうと、黒衣の魔女はカタリナに弟子の貸し出しを許可した。

「ふん、異端狩りの総長が魔女に人手を借りるなんて墜ちたもんだな」

「この一件には、思うところがあるのですよ」

化粧屋の皮肉を受け流して、カタリナはそう言った。

その生気の無い双眸には、何かしらが見えているように化粧屋は思えた。

「そうそう、この後暇かしら？」

「いえ、特に用件はありませんが」

魔術師は魔女がなぜ予定など聞いてくるのか分からず、不思議そうにしていると。

「あなたのファンだって子が友達に居るのよ。少しで良いから会ってあげて」

「はあ、構いませんが」

まさかこの人がそんなことを言うなんて、と仮面の魔術師は驚きながらも仮面の下で小さく笑みを浮かべるのだった。

彼を紹介された真冬の叫び声がご近所に響き渡ったのは、この十数分後だった。

結成について

魔女たちと別れたカタリナは、その翌日には行動を起こした。

まず、春美と望海に連絡を取り、会う約束を取り付けた。

言うまでもないが、学校は臨時休校中である。

『本当に、何も心当たりはないんだね?』

『当然でしょ!! どうして私が呪われなきゃならないのよ!!』

望海のスマホには、念写した被害者の女子生徒と伊藤刑事の病室でのやり取りが映っていた。

「ま、被害者の証言はずっとこの調子みたいですね」

「なるほど」

結局、伊藤刑事は被害者から情報を引き出すのを諦め、足で証拠を探すことにしたようだ。

それが病室の時計に映っていた昨日の夕方の出来事だ。

「彼女について、他に情報は有りますか?」

「まだ今ここで映した奴だけです。今回は首を突っ込むつもりはなかったですし」
「思わぬ休み期間が出来たから、お金稼ぎの算段はしてたけどね」

春美の棘のある言葉に、望海は不満そうに彼女を見やった。

「私は社交性が低い春美さんの代わりに金策の手段を提供しているんですから、文句があるなら自分で稼ぐ手段を探してはどうですか？」

「煽らない煽らない」

「そうだよ、望海さんだって春美ちゃんに頼りつきりじゃない」

そんな風に言い返す望海に、カフェテリアで一緒にテーブルを囲っている夏芽と千秋が諫めた。

「もう、分かっていますけど……」

「ところで、一つ聞いていいですか？」

「何ですか？」

「なぜ彼女らが一緒に居るんですか？」

カタリナはいつもの幼馴染三人組が同席していることに対してそう言った。

「え、なんでそんなこと聞くの？」

「あなた達三人の役割を聞いているのです。」

「この間、あの事故物件で出くわした時も思いましたけど」

それを言われて、夏芽と千秋は顔を合わせた。

「賑やかし!!」

「ストツパー!!」

「……野次馬」

三人は仲良く声を揃えてそう言った。

「……………」

これにはカタリナも声が出ないようだった。

「正気ですか? 無力な一般人が首を突っ込むなどと」

「あー、やっぱり、そう思う?」

「今度からお弁当とか作ろうか?」

「じゃあ私は飲み物とか買ってくるよ」

そんなことを相談する夏芽と千秋を見て、二の句が継げない様子のカタリナ。

「広場で罪人の処刑を待ち望む民衆みたいなものですか……」

「たえがすごい物騒だなあ」

「言っておきますが」

と、カタリナは三人に真剣な態度で前置きしてこう言った。

「あなた達のそれは友人関係に付け込んだ馴れ合いと言うのです。」

ハッキリ言って性質が悪い物乞いと同じだ。あなた達の身の安全のためにも、今すぐにお止めなさい」

ド正論だった。

ぐうの音も出ないほど100%、常識的にもカタリナが正しかった。

「まあまあ、カタリナさん。本当に危ないところには連れて行きませぬし、マンガだとよくあるじゃないですか、なんの力も無いのに主人公の取り巻きとして同行するヒロインとか友人とか」

「生憎、そういった類の娯楽とは無縁の生活でしたので。」

「よもや創作物と現実を一緒にしているのですか？」

「転生っていうファンタジーを経験してる人に言われてもなあ」

「カタリナの追及を、何だかめんどくさそうに望海は感じ始めた。」

「まあとにかく、その件はこちらで話が付いているんです。蒸し返さないでくださいよ」

「それに私、望海ちゃんと二人きりとかゴメンだし」

「ちよつとお!! 春美さんがせっかくフォローしてるのになんですかその態度は!!」

「それに三人が来てくれないと、私たちも困るのよ?」

「それはなぜです?」

「それは勿論、文字数が稼げ——」

「おおっと!! コーヒーを零してしまったあ!!」

「うわあつちい!!」

なぜか急に突然飲んでいたコーヒーをぶちまける望海。被害に遭った春美は大げさに飛び上がった。

「……はあ、分かりました。それ以上触れないことにします」

これ以上は堂々巡りになる、と神の思召し召しでもあったのか、カタリナはもう深く追求しないことにした。

「さて、場も温まったことですしそろそろ本題に行きましょう」

「確かに温かくしたわね、物理的に」

布巾でコーヒーを拭きながら嫌味を言う春美。

「本題? ようやく話を進める気になりましたか?」

「いえ、まずこちらの話ですよ」

「そちらの話?」

「ええ、率直に言います。」

——カタリナさん、私たちと手を組みませんか?」

その望海の提案にカタリナは少々驚いて見せたが、すぐに得心が行ったようだった。

「なるほど、あなた達は戦力が充実し、私は手が増えると」

「まああの御方の弟子とはいえ、私は言うに及ばず、春美さんも未熟な身ですし。

その点、あなたは前世であの御方とやりあったくらいなんでしょう？」

お互いにできないことを補えて、手札も増える。悪い取引じゃないと思いますよ」

彼女の提案は、言葉の上ではウインウインの関係だった。

魔女の弟子と聖職者という大前提を抜かせば。

「望海ちゃん、それだと分け前が減るじゃない」

「春美さん、馬鹿ですか？ 師匠レベルの人を味方に引き入れられるんですよ？」

分け前とかみみっちいこと言っつて。安全性に勝る投資は無いんですよ」

「うぐ、それはそうだけど……」

悲しいことに、春美は己の師に以前こんなことを言われていた。

望海の方が機転が利いて行動力があり賢い、と。

そのことをずっと根に持っている、と言うか嫉妬している春美は彼女のが好かないのである。

「でもそんな提案、この人が呑むわけじゃないじゃない」

「いえ、一考には値するでしょう。」

かつての私があなた達の師と渡り合えたのは人手があつたのも大きい」

望海の提案にケチを付けようとした春美は、そのカタリナの言葉に口を噤んだ。

「……わかりました。」

どうせ彼女らも付いてくるのなら、私も一緒に居た方が良い。

目を離れたところで勝手に付いて来られても困るでしょうし」

「流石カタリナさん、話が分かるう」

「勘違いしないでください。」

この三人がいずれ目覚めるかもしれない信仰の萌芽を守り、邪悪な魔術や怪異に苦しむ人々を救い神の御心を示すためです」

「建前なんて何でもいいんですよ」

にやにやしている望海を見て、カタリナは少し不愉快そうに鼻を鳴らした。

「え、今度からカタリナさんも来るの!？」

今までの話の流れを理解していなかったのか、それともただ聞いていなかったのか、

夏芽が素つ頓狂な声を挙げた。

「夏芽、あなた……今そういう話をしてたじゃない」

黙って話の成り行きを見守っていた千秋は彼女を見てため息を吐いた。

「ところで、さつきからずっと真冬さんがふにやふにやなのはどうしてですか?」

望海は今日は口数が少なく生返事しかしない真冬について尋ねた。

「ああ、この子、昨日魔女さんが連れてきた魔術師さんとお話して、それから舞い上がっ

ちゃって」

「私も魔術師さんの生放送とか見たけどさ、ずーっと何かの作業してるし、同じことばかり繰り返して話すし、何が面白いんだ、あれ？」

二人の話を聞いて、ああアイドルに会ったファンみたいなものか、と春美たちは納得すると。

「はあ、夏芽ちゃんはわかってないなあ。

毎回同じような放送で一挙一動を観察して違いを探するのが楽しいんだよ!!」

「うわキモ」

「がーん!」

限界オタクと化した真冬の主張は、夏芽の率直な言葉に撃沈された。

「そうだ、春美ちゃんに望海さん。

本当に邪魔ならちゃんと言ってね? 私たち、迷惑を掛けたいわげじゃないし」

「ああ、大丈夫よ。なにせ」

気遣える女である千秋が二人にそう言うのと、春美は微笑んでこう言った。

「皆が居ないと、説明セリフが——」

「おおっと、またコーヒーが!!」

「ぎゃ——!!」

いつの間にか、おかわりしていた望海のコーヒーが春美を襲った!!
そんなこんなで、彼女らの共同戦線が始まったのである。

§ § §

「本当に行くんですか？ 必要な工程とは思えませんが」

病院の廊下を歩く望海が、カタリナに言った。

「危険から助けるだけを、主は救うとは仰りませんよ」

「人はパンのみにて生くるにあらず、つてことでしょうか？」

ええ、と彼女は春美に頷いて見せた。

「懺悔を行うのに、多人数はよろしくないでしょう。ここは私に任せてください」

そう言つて、カタリナは被害者のいる病室へと入つて行つた。

すぐに、中から喚き声が聞こえてきた。

「ねえ、大丈夫なの？」

壁越しでも、かなり取り乱したような声が聞こえてくることに、千秋は心配そうに眩
いた。

「もう任せましようよ。」

適材適所ってことでしようし」

望海がそう言うのと、そこで会話は途切れた。

病室で、すすり泣く様な声が聞こえ始めたからだ。

「流石本職のシスター。情報が引き出せそうだね」

夏芽が感心していると、しばらくするとカタリナが病室の扉を開けて廊下に出てきた。

カタリナは、被害者から複数の電話番号を聞き出した。

「あの人、遊んでいるとは聞いていましたけど……」

まさかこんなに恨まれているとは、と望海も心底呆れ顔だった。

彼女は携帯の電話番号と思しき数字をそれぞれ紙に書いて封筒に封入し、目を瞑り瞑想している春美の前に順番に差し出した。

「いれよ」

春美は目を瞑ったまま、一番端に置かれた封筒に手を置いた。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか」

望海はその封筒の中身の電話番号に、スマホから電話を掛けた。

「……………出ませんね。だけど、繋がりが見えた以上こつちのものです」

相手が通話に出なかったことなど気にせず、望海は電話の向こう側を念写した。
「これが、電話の相手の家です」

「その電話番号の相手が被害者と最も繋がりがあつた。

そいつが術者で間違いないと思う」

望海と春美のコンビプレーによって、術者の居場所が特定できた。

「これは、どこかの一軒家ですか？」

望海のスマホには、なんの変哲もない住宅街の一軒家が映つていた。

「もうちよつと周りに手掛かりになりそうなのを映してみますよ」

そう言つて、望海はその一軒家の周囲を映し始めた。

「うん？ 待つて、この煙突見覚えがある、割と近くじゃない？」

「かもしれない。あッ、これ、電柱に住所っぽい書いてある!!」

どれどれ、と夏芽と千秋が映し出された画像の数々を見ると、そんな声を挙げた。

「これだけ情報があれば、探せるかもしれないよ」

真冬は某社が提供しているストリートビューのサービスで夏芽の心当たりのあつた煙突のある工場を既に発見していた。

六人は顔を見合わせる。

「ここからは、手当たり次第だ。」

「見つけた!! この電柱だツ!!」

六人はファミレスでドリンクバーを頼み、スマホで例の一軒家の場所を探すこと一時間と少し。

千秋が、コンビニでプリントしておいた画像に映っている電柱と自分のスマホを見比べてそう言った。

「あつた、この家じゃない?」

「確かにそのようですね」

「よし、千秋のお手柄だツ」

こうして六人は術者の明確の居場所を特定したのだつた。

件の一軒家は、彼女らの通う学校の隣町にあつた。

閑散とした住宅街で、そこそこ良いランクの住人達が住んでいる。

その中に、その一軒家はあつた。

ピンポン、とカタリナは先頭に立ちインターホンを押した。

「ねえ、やっぱりこの家なの?」

確認するように、真冬が問うた。

カタリナも、春美も、無言で頷く。

『……誰ですか?』

か細い、怯えたような女性の声がインターホンから聞こえた。

このタイプのインターホンはカメラで来訪者を確認できるので、困惑も混じっているようにも思えた。

「教会の者です。」

「ここ数日で、この家に異変が起こったりはしませんでしたか?」

『な、なんでそれを?!!』

「神の思し召しです。」

あなたから金銭を受け取るつもりも、何かを要求するつもりもありません。

どうか鍵を開けて、相談したいことがあるなら仰ってください」

カタリナがそう言うのと、家の中からどたと足音が聞こえて、がちやがちやと扉の鍵を開けようとする音が鳴った。

そして、玄関のドアを開け、家の中から四十代前半らしき女性が飛び出してきた。

「お願いです、助けてください!!」

もう耐えられないです!!」

女性はまさに神にすがるようにカタリナに泣きはらしながらそう言ったのだった。

その女性は語った。

夫の様子が、数日前からおかしいのだと。

会社に行くことも無ければ、部屋から出ることも無い。

声を掛けても、怒鳴り返されるだけだという。

そして彼の部屋の壁には不気味な黒ずみが浮かんでいて、食事を運ぶ以外で近づくことも恐ろしいのだと。

「安心してください。もう大丈夫です。」

彼は邪悪な魔術に手を染め、悪魔に魅入られているだけです。

どうか、私にお任せください」

そう言つて、カタリナは女性に術者の部屋へと案内させた。

くくく

くくく

そこから先は、気が滅入るような内容だった。

「まさか被害者の子に援交して弱み握られて、その腹いせに呪つたんだとはね」

春美は心底呆れ果ててため息を吐いた。事の顛末はそんな感じだった。

被害者の女子生徒は、複数の援助交際を繰り返し、相手の携帯を盗み見て弱みを握り、継続的に金銭を脅し取っていたようなのだ。

今回の事件を起こした犯人は、もうやめてほしいと懇願し断られた腹いせに呪いを掛けたのだと喚き散らした。

術者は、呪いの代償に己の姿が醜悪に歪んでいた。

彼の部屋も同様に、黒く腐食していた。

「なんだか、どつちも馬鹿なんじゃないの？」

夏芽は疲れたようにそう言つて、術者の家に集まるパトカーの数々を見やった。

その部屋に踏み込んだ際の犯人の身勝手な罵倒の数々は、一般人の三人には精神的に疲弊が伴うような聞くに堪えない代物だったのだ。

犯人の奥さんもショックで今は声も出せないような有様だ。

「カタリナさん、本来はこういうことを言うのは憚られるが、通報と事件の協力を感謝する」

犯人が連行されると、伊藤刑事がやってきてカタリナにそう言った。

彼の表情には疲労が色濃く、数多の魔術事件に関わり刑事としてのプライドとかが抜

け落ちているようにも見えた。

「いえ、邪悪な魔術が蔓延るのを許すわけにはいきませんから」

そのように語るカタリナの横の五人を、伊藤刑事は見やる。

しかし彼は何も見なかったことにしたのか、眼を逸らして他の捜査官の元へと歩いて行った。

結局のところ、犯人の呪いは成就された。

被害者の女子生徒は呪いを掛けられたと言う風聞を恐れて転校してしまったのだ。

これからは、呪いを掛けられたという事実が他人に明らかになる恐怖と共に生きていくのだろう。

「嫌だよ、誰も救われない話って」

「本当ですよ」

春美も望海も、犯人逮捕のニュースを見ながらそう呟いた。

どちらかと言うと呪いの恐怖より、人間の馬鹿馬鹿しさに辟易しているようにも見えた。

「それよりさ、今度からカタリナさんも一緒に行くんでしょ?」

「カタリナさん、よろしくね」

「よろしくー」

幼馴染三人組は話題を変える様にそんな風にカタリナに言った。

「あんな光景を目の当たりにしたと言うのに、この三人は……」

犯人の姿とその言動は狂気に満ちていて、見ていて精神衛生上良いものではなかったと言うのにこの三人はもう次の話をしている。

カタリナは三人のバイタリテイに呆れるほかなかった。

「どうせなら、あの刑事から捜査協力の謝礼ふんだくれば良かったですね」

「やめなよ、私たちのこと見ない振りしてくれてたんだしき」

望海も春美も、次の案件はこんな疲れる内容でなければと願うばかりだった。

「まあ、ともかく、これからよろしくですよ。カタリナさん」

「よろしくね」

「……ええ」

こうして、世にも珍しい魔女の弟子と聖職者と一般人のパーティが結成されたのだ。た。

妖精について

「こんにちは皆さん、魔術師です」

某大手動画サイトにて、今日も魔術師は生放送を始めていた。

『こんばんわー』

『粹おつです』

『わこっ』

早くも生放送の開始に待機していた人々が挨拶を返す。

しかし今日の彼の出で立ちは、カメラの角度からして違った。

『魔術師さん、その仮面なにww?』

コメントが読み上げられる。

そう、今日の魔術師は木製の仮面を被って全身を映していた。

「実は今日、機材の調整をしようと思いましたが」

魔術師は今回の放送の主旨をそのように述べた。

『え、生放送しながら機材いじるの?』

『そういうのなら何でも相談して!!』

『パソコンのスペックは？ 撮影機材とかソフトは何使ってるの？』

と、視聴者たちは配信環境に興味があるのか、真摯に応じようとするコメントが多数寄せられた。

「ああいえ、機材と言うのは少々語弊がありますね。

助手やアシスタントのようなものです。

実を言うと私は機械には疎くて、この配信環境を整えたのも彼女の助力によるものなのです」

珍しく彼はコメントを目で追いながらそのように答えた。

『ああやっぱリサポート役いたのね』

『彼女ってことは、女性なの!?!』

『女の子を機材扱い……ごくり』

『もしかして、前言ってた使い魔ってやつ?』

そんな調子のコメント欄に、不用意な発言だったと気付いて魔術師もううむと唸った。

「ええそうです、私が使役している妖精ですね。

ノームの系譜らしく、手先が器用で機械類もすぐに覚えてしまいました。

機材の調整などは基本的に彼女に任せているんです」

普段あまりコメントを読まない魔術師は、若干コメント欄の勢いに吞まれているようにも見えた。

『ええッ、妖精とかマジでいるの!?!』

『でもノームかあ、髭だらけじゃん』

『髭かあ、でも妖精見えるとか素敵だなあ』

視聴者の反応はそんな風に妖精を視認できることを羨ましがめる声が多かった。「妖精や精霊を認識するのは、独特の感性が必要です。」

彼らは我々が思った以上に希薄であり、実体化し意思疎通を図るのも難しい。そして向こうから接触を図られた場合、大抵は良くないことばかりです。

……うん?」

そのような説明をした魔術師が、不意に横に視線をずらした。

「……失敗しました」

そして、彼はため息を吐いた。

『え、どうしたの?』

『魔術師さん、何かあったの?』

『何かミスったの?』

心配するコメントを残す視聴者たちに、魔術師は頷いた。

「ええ、最近外出することが増えたのですが、基本的に彼女を置いて行くことにしているのです。」

彼女はそれがえらく気に入らないようで、私がない間に余計な知恵を付けてしまったようなのです」

『そのなになが悪いの?』

不意に、普段コメントを読み上げる機械的な音声 flowed.

『え? 今の誰のコメ?』

『そんなコメントあった?』

『無理、文字流れるの早すぎて追えない』

コメント欄も、突如として発せられた機械音声に驚愕していた。

「はあ、基本的に彼女は私の魔力で実体を維持しているんです。」

それをもって隷属下においていたのですが、このままだともう生放送の配信も機材の調整も手伝わないと云っているんですよ」

『待遇の改善を要求する』

魔術師の説明に迫従するように機械音声が発せられる。

『なにこれ、魔術師さんの生放送始まって以来の面白展開は!?!』

『いやいやいや、隷属とか普通にダメでしょ』

『私も魔術師さんに隷属させられたい……』

『妖精ちゃんかわいそう』

コメント欄は前代未聞の放送トラブルに大騒ぎだった。

「……わかりました、私も役割を果たすために要求を聞きましょう」

魔術師も視聴者が同情的なのを見て、仕方なさそうにそう言った。

『まず、私を生放送に出演させなさい』

姿の見えない機械音声は最初の要求を伝えた。

「そもそも、お前はカメラに映らないだろう」

『レンズに私たちが見えるようになる薬塗る』

「ああ、あれか。人の目もレンズも変わらないか」

それを了承としたのか、魔術師は席を立てて画面外へと歩いて行った。

『えッ、妖精ちゃん見えるようになるの!?!』

『どっかの伝承になかったっけ？ 妖精が見えるようになる塗り薬』

『マジで!?! 欲しいんだけど!?!』

『それ、大抵の場合ろくな結果が待ってないんですがそれは』

視聴者は好奇心に引かれる者、妖精の伝承に戦々恐々する者と様々だ。

「ちよつとカメラを止めるそうです」

魔術師が何かの瓶を取って戻ってくると、不意に画面が真っ暗になった。そして十数秒後、画面が戻った。

「ほら、これで満足でしよう?」

魔術師は面倒そうに手のひらに乗せたヒト型の何かをカメラに近づけた。

その姿は、伝承にあるレプコーンに近かった。

小さな靴を履いた、金髪の赤いワンピースのような薄着の少女が、彼の手に膝を抱えて座っていた。

『えッ、カワイイ、てか、えッツツ』

『全然髭もじゃじゃないじゃーん!!』

『妖精ちゃんきやわわ!!』

『ぼこおしい』

『さつきから変態が湧いてませんか?』

妖精の登場に、コメント欄は狂ったように文字が流れ始めた。

同時に何十人もの投げ銭が投じられ、コメント欄を彩った。

その熱狂具合に魔術師は仮面の下で呆然とし、手のひらの少女は彼を見上げ、彼にしか聞こえない言葉でこう言った。

『ね? 人間って馬鹿だから私が出たらいっぱい儲かったでしょ?』

小さな少女は口元を手で隠しながら、性悪そうな笑みを浮かべた。そしてこれが、史上初のリアル妖精ライバーが誕生した瞬間だった。同時に、これが彼女の絶頂期だった。

§ § §

小さな妖精はその生放送内で次々と魔術師に要求を吞ませた。

と言っても、それらは某呟きサービスのアカウントだったり、ゲーム機が欲しいとか、三時のおやつのお要求だったりと微笑ましいものだったが。

彼女は魔術師の生放送に登場し、終了後一時間にはファンアートがイラスト投稿サイトにアップされ、ニュースサイトの話題を搔つ攫った。

が、三日後、その好奇心旺盛さと子供っぽさが祟り、片っ端から他人を煽りまくり某呟きアカウントは大炎上。

見かねた飼い主がアカウント削除の措置を取る羽目になったのである。その有様はウエブニュースで取り上げられるほどであった。

「どうも皆さん、魔術師です」

そんなことがあつてから数日、何日か振りに魔術師は生放送を始めた。

『魔術師さんこんにちわ』

『わこつです、そしてご苦勞様でした』

『数日ぶりなのに何だか久々な気がしてた』

と、視聴者は彼の生放送を心待ちにしていたのだが。

『どうも、レプです』

機械音声が発せられる。

カメラの端に映る妖精が可愛らしく手を振っている姿が出ると、コメント欄が加速した。

『出たな、クソ妖精!!』

『お前よくも魔術師さんに迷惑かけたな!!』

『この間の生放送、お前のアンチのせいで途中で終わっちゃったじゃねえ!!』

『ふざけんな、森に帰れ!!』

『ぼこおすんぞ、ゴルア!!』

『ひぎいって言えや、クソ妖精!!』

無数の罵倒がコメント欄を席卷する。

それを見た妖精レプは顔を真っ赤にして地団太を踏み、カメラに向かって何かを叫び

始めたが、視聴者に彼女の声は聞こえない。

「はあ、これでは今回もダメそうですね。」

日を改めた方が良さそうですね。」

コメント欄が荒れに荒れているのを見て、魔術師がそう言う。

『ごめんなさい』

『謝りませう。クソ妖精が』

『黙ります。だからそれも黙らせてください』

視聴者たちは大分静かになった。

「私は言いましたよ。妖精の姿なんて当てにならないと。」

この馬鹿妖精は皆さんが可愛いと思うだろう姿を取っているだけで、その本性は人間を下に見ている性悪に過ぎないと」

『そうですね』

『実際その通りでした』

『投げ銭返せ、俺の純情返せクソ妖精』

数日前の熱狂ぶりが嘘のように、魔術師の生放送は沈痛な空気が流れていた。

「まあ、この子も反省させましたし、彼女有つての私の生放送なのでそれぐらいで終わりにしてあげてほしいです」

画面端でいじけている妖精を横目で見やり、魔術師はそう言った。

「色々あつて滞つていましたが、私の機材の調整を彼女にやつてもらいました。

試しにやつてみますので、レプ、準備しなさい」

魔術師がそう言うのと、いじけていた妖精が立ち上がった。

そして彼女は、背中に光る羽を浮かび上がらせ、飛び立った。

視聴者からは『ここ、妖精要素』『外見だけはキレイ』と煽られているが。

レプが画面外に消えると、唐突にカメラの写す画面が不安定に揺れ、上から魔術師を見下ろす位置になった。

「このように、私が外出中に彼女を同行させ撮影させることもできるようになったわけです」

魔術師はカメラの位置を元に戻させ、そう言った。

『おお、これ俺も欲しい』

『でもこれ、レプちゃんのサイズでカメラ持たせているわけでは?』

『馬車馬のように働けやクソ妖精!!』

『残当の扱いでは?』

『妖精を使役するとか、何気に魔術師さんの魔法使いらしいところ初めて見たかも』

『言われてみればそうかも』

と、視聴者たちの反応もまずまずである。

「正直なところ、レプがゲーム実況などをしたと言っているのですが外で何かをする必要性も薄くなっているのですが、最近私の心境も変化しています。」

レプを放送に出したのも、その一環と言えるでしょう」

魔術師はそのように己の心情を吐露した。

『魔術師さんはストイックすぎるから丁度ええんでないの?』

『その羽虫より魔術師さんのゲーム実況の方が需要有るんですが』

『たまにで良いから一緒に遊んであげて』

『てか、外に出て何をするのかも気になる!!』

『レプ：羽虫って言ったやつ許さねえ、覚えてろ』

『正体現したね!!』

『妖精の振りをしたチンピラ』

『精神年齢Ⅱクソガキ』

『レプ：ふぎいいいい!! マスターに買ってもらった対戦ゲームやるから掛かって来い、クソ雑魚人間ども!! どっちが上か分からせてやる!!』

魔術師は自分の生放送にコメントを打っている助手を横目で呆れながら見ているのだった。

その後、レプに生放送が乗っ取られた魔術師は退出して、そのままゲーム配信をする流れになった。

ゲームの内容は孤島に100人が空からダイビングして撃ち合うアレである。

『はああ、ふっざけんな!!』

こつちが配信してるからって位置特定して集中攻撃とか、それが人間のやることかよ!!』

ゲーム画面ではレプが操作するキャラが銃撃の雨に晒されている光景が映さされていた。

彼女は全長十五センチ程度の手のひらサイズのくせに、器用にゲームパッドを操作していた。

『十人くらい集まって草ww』

『こいつら完全に勝負捨ててるww』

『最初に人間なんてザコとかイキリ散らしてたのは誰でしたかねえ』

『絶対何人が裏で結託してるだろww』

『人間様が妖精に負けるわけないだろ!! 分かせてやるこのメスガキ!!』

クソ妖精の絶体絶命のピンチに、視聴者たちのコメントもイキイキしていたが。

『はい、切り抜けたー!!』

あれあれー? 人間さん達雁首揃って遠足ですかー?

自分より十分の一ぐらいの身長の子ひとり倒せないとかゲーム辞めたら〜?

人間じゃなくしてお猿さんって名乗ったらどうですかー?』

レプは人外じみた空間把握能力を持ってしてその危機的状況を切り抜けていた。

そして、このミニマムクソガキは普通にゲームが上手かった。

『反応速度が人間じゃないわ……』

『チートなしでこれだからなあ』

『エイムの方はよわよわだけだなあ!!』

『それはまあ、ラグとかあるし』

『これでこのゲームに触って一週間とかマジか』

『そもそもFPSやるのも初めてっほいけどな』

ゲーム画面の追いかけてっことを冷静に見ている視聴者たちはそんな感想を漏らしていた。

人間と妖精のスペックの差が明確になった場面だった。

そもそもレプは、ゲームパッドを操り実況しながら機械音を打って対戦相手を煽っているのである。

物理的には不可能なことをしていた。その様子が画面端で小さく映っている。

『これ、リアルに魔法使うのはチートに入るのか?』

『別にゲームシステムに干渉してるわけじゃなさそうだしなあ』

『体格差を考えても、これは種族の差の範囲内では?』

『自分はレプちゃんゲームパッドをわちゃわちゃ操作してるの見てるだけで楽しいんで何でもいいです』

『ロリコン乙』

と言った感じにゲーム外で雑談が進んでいると。

『ひゃーははは!! 十人も居て追ってこれないんですか?』

ああ来れないんですねー!! もうそこプレイエリア外だもんねー!!』

機械音声の筈なのに感情豊かにレプは高らかに笑う。

『※妖精です』

『伝承通りなんだよなあ』

『レプちゃんは罪な女よな、今の世界中の妖精のイメージをこれにしたんだから』

『世界基準になったクソ妖精レプ』

『これ他の妖精から苦情来ない?』

『飼い主も大変そう』

コメント欄が珍生物の観察でもしているような雰囲気になっていると。

『あッ』

『あ』

『あ……』

『あー』

突如として、レプの操作キャラがヘッドショットされて倒れ伏した。

キルカメラには、草むらでスナイパーライフルを構えたプレイヤーの姿が。

『むぎいいいい!! なんなのあいつ!!』

唐突に訪れた死に唾然とした妖精は、自分が敗退したと悟るとドタバタと喚き始めた。

『ああ、残り十数人か、あとは猛者ばかりか』

『今のは仕方ない、相手がゴルゴだったわ』

『妖精は狙撃で殺せる φ(・|・)メモメモ』

『じたばたしてるレプちゃんカワイイ』

『ロリコン乙』

コメントの雑談がしばらく進むと、レプは起き上がった。

『ドン勝つするまでやる』

ムキになったレプはそう宣言した。

『そう来なくちやな!!』

『よし、俺も参戦しようかな!!』

『負けたら脱げ』

『→通報した』

結局その後、レプは飼い主に怒られるまでゲームを続けた。

ネットに颯爽と現れた珍生物はこうして人々に受け入れられるのだった。

なお、魔術師の元にレプを研究したいと言うメールが殺到し、彼を辟易させるのはすぐの事である。

彼女も勝手に他のバーチャルライバーとコラボを了承したりと、ネットの界限を賑わすのだった。

カラスについて

「ねえねえ、春美ちゃん!!

春美ちゃんって使い魔とか居るの!？」

学校が再開して四人が顔を合わせると、真冬は真っ先にそんなことを尋ねてきた。

「え? なんぞ?」

「何でって、魔法使いと言えば使い魔じゃない!!」

春美が思わず横の二人に顔を向ければ、二人も呆れ気味であった。

「春美ちゃん、ニュースとか見た?」

「ううん」

「ちよつと見てみなよ」

千秋に言われるままに自分のスマホを見てみると、ブラウザのホーム画面の見出しに

春美も興味を引く内容があった。

『妖精は実在したのか!？』

魔術師さんの生放送にリアル妖精現る!？」

と言った記事だった。

「もしかして、これ？」

「多分それ、真冬の奴、登校中にその話ばかりしてたから」

春美がその記事を見せると、夏芽が肩を竦めてそう言った。

「それで、どうなの!？」

「私には居ないよ。だって必要ないし」

春美は率直に答えた。

真冬はシヨックを受けたように固まった。

「ええ、魔女さんの弟子なのに、使い魔とか持ってないの……？」

「即席で近くの動物を使役することはあるけど、継続的に使役するには学生の身分じゃちよつとね。

なにより——」

春美は目の前の少女の夢を壊すような一言だと分かりつつも、こう言った。

「うちのアパート、ペット禁止だし」

「がーん!？」

妖精のようなファンシーな生物を使い魔にしているのを期待していたのか、真冬はがつくりと肩を落とした。

「そう言えば昔、夏芽も使い魔だー、とか言つて猫を拾つてきたことがあつたよね。三毛猫だったけど」

「や、やめろお!!」

「にやにやと笑いながら夏芽の黒歴史を掘り起こす千秋に、当人も大ダメージだった。へえ、じゃあ夏芽ちゃんつて三毛猫飼つてるの?」

「ううん、どうせ飼えないからつて元の場所に戻してきた」

「そう……」

確かに夏芽の雑さじゃ動物は飼えないな、と口にしないのは春美の優しさだった。

「あッ、私じゃないけど、師匠はたしか使い魔がいたはず」

「えッ!? 本当!?!」

春美がそのことを思い出して口にする、真冬ががばつと顔を上げた。

ついでに夏芽もちらちらと春美の様子を窺い興味が隠しきれない様子だった。

「と言つても妖精とかじゃなくて、カラスだけどね」

「カラス、カラスかあ」

「イメージ通りつちやイメージ通りだけど」

真冬と夏芽の反応はいまいちだった。

どうせならもつとファンタジーな生き物だったらよかつたのに、と表情が物語つてい

た。

「でもあの子、めっちゃ頭良いよ。」

人間の言葉とかわかるっぽいし」

「それはすごいけど、カラスじゃなあ」

「まあ、カラスは迷惑な隣人って感じだしね」

夏芽の落胆を、千秋は理解できるのか苦笑しながらそう言った。

「私も妖精とか、見てみたかったなあ」

「一応、師匠に聞いてみるよ」

真冬たちの落胆ぶりに見かねた春美はスマホで師にメッセージを送った。

「あ、今日はダメそう。学校にも来てないって」

「魔女さん、何か用事なのかな？」

千秋の疑問に、春美は頷いた。

「うん、お葬式だって」

§ § §

「ほら、ご覧ください。あれが数年前から近くに山から居ついたカラスの群れです」

市役所の役員が電柱を指差す。

そこにはずらり、とハシブトガラスが電線に並んでいた。

「どれぐらいの数があるんですか？」

彼と同じように電柱を見上げるのは、黒いケープの少女だった。

「正確な数は把握してはいませんが、千か二千かと言ったところででしょうか」

「凄まじい数ですね」

「ええ、おかげで被害も馬鹿にならず……」

役員の視線は道路に向けられる。

そこはカラスのフンで真っ白だった。

「毎週の如くゴミ置き場は荒らされますし、ゴミを狙ったカラスが近くで見ているものですから、住人の皆さんも襲われるんじゃないかと怖がっています。」

「幸いこの辺りは農家がありませんので、農作物の被害とかは報告されていないのですが」

そのように説明しながらも、彼は正直不安そうに彼女を見ていた。

毎年、この時期になるとカラスの生態の専門家を派遣し、追っ払って貰うのである。

しかしカラスという生き物は賢く、年々それらの対策が通じなくなっていくのだ。

カラスと言うのは、とにかくしつこい。

飽きるという言葉を知らないのか、というぐらいしつこい生物だ。

その忍耐力や執着力は人間の想像を絶するほどである。

ある意味では、それが自然の在るべき姿なのかもしれないが、そこに住む人々はたまたまのものではない。

そしてその筋の専門家が、最終手段だと言つて紹介したのが、この少女だった。

このカラスが人の姿をとつたらこうなるだろう、と思わせる少女は、しかしカラスのように集団に混じる姿が想像ができない何かを感じられた。

「どうにかできますか？」

「やってみましょう」

黒衣の少女は、木の枝や枯葉を集め火を点けた。

もくもくと煙が空に上がる。

煙でカラスを追い払うのか、と思つた役員は少女の行動に目を見張つた。

まるでカラスがそうするように、煙を自分で浴び始めたのである。

「あの、なにを」

その理解できない行動について尋ねようとした彼は、次に起こつたことに驚愕した。

かあー、かあー、かあー!!

少女の口から、まるでカラスのような鳴き声が発せられる。

その直後だった。

電柱に、電線に、木々に、家の屋根に、塀の上に、それぞれ並んで立っていたカラスたちが一齐に飛んで少女の周囲に集まってきたのだ。

若い役員は腰を抜かして、地面に尻餅をついた。

想像してほしい、ハシブトカラスは全長六十センチ前後もある大型の鳥だ。

小型犬ぐらいの大きさはあり、それが翼を広げ近くに殺到する光景と言うのは十分に恐怖に値する。

いったいいかなる呼びかけの結果なのか、百羽以上のカラスが彼女の周囲に降り立ったのである。

役員はその異様な光景を、信じられないようなものを見る目で見ていることしかできなかった。

カラスは、とにかく警戒心が強く、人に懐かないとされる生き物だ。

もし人に懐くカラスがいたとしても、それは特殊な環境で育てられたカラスであり、それでも人見知りはずるといえる。

だというのに、この少女は百羽以上のカラスを初見で警戒心を失わせ、両手に留まらせることに成功させていた。

まるでカラスの渦の中心に、カラスたちの女王でもいるかのように。

そして、カラスたちは合唱を始める。

かあーかあーかあーかあー!!

かあーかあーかあーかあー!!

かあーかあーかあーかあー!!

一斉に鳴き始めるカラスたち。

そんな中に居れば、常人なら恐怖で竦みあがるだろう状況だが、少女は慣れた顔つきだった。

「こりゃあああああ!!」

そんな時だった。

「お前ら、何しとるんじゃ!!」

その大声は、突如その場に現れた老婆のものだった。

その叫び声と同時に、カラスたちは一斉に飛び上がった。

カラスたちの羽ばたきにより風圧で砂埃が舞い、空からカラスの羽が落ちる。

「あの方は?」

「え、ああ、あの人はその家に住んでいる方で……」

一匹残らず空へと羽ばたいて行ったカラスたちを呆然と見上げる役員に、手を差し伸

べる少女。

そうしているうちに、憤怒の表情を浮かべた老婆が二人の元にやってきていた。

「お前さん、去年も変な男と一緒にカラスたちに悪さしとつたら!!」

「……お婆さん、またですか？」

カラスたちに餌をやるのは条例違反だつて言つてるでしょう」

役員の男はこの老婆がパンの耳といった餌を持参しているのに気付いて、注意したのだが。

「そうじゃつた、お前さん役人じゃつたな。なら、わかつとるじやろ。」

この町では古くからカラスは神の遣いなんじや。悪さしとつたら許さん!!」

「それは以前も聞きました。」

ですが神の遣いだろうとなんだらうと、被害が出ている以上対処をしないとイケないんですよ」

「それをどうにかするのが役所の仕事じやろ!!」

カラスが手段を選ぶ余地など有るわけがなからうが!!

だつたら被害を出ないようにするのが人間側の責任じやらうが!!」

「だからつて、餌をやつていい理由にはなりませんよ!!」

カラスたちがこの辺りに集中しているのは、無責任な餌やりが原因かもしれないんで

すよ!!」

この老婆の主張も、一理はあった。

だがそれをする予算も人員も、市役所には無いのだ。

だから二人の話は平行線で、交わることは無いはずだった。

「ねえ、お婆さん」

この黒衣の少女が居なければ。

「なんじゃ、この娘は。」

あの変な男は今回はおらんのか？」

「あのカラス教授の代わりですよ。」

あの人の代わりに、カラスを追い払ってと彼に頼まれたんです」

「何じゃと!!」

少女の言葉に、老婆の怒りの矛先が彼女にも向けられる。

しかし彼女はこのような言葉を続けた。

「お婆さん」

老婆に呼び掛けるその声音は、どこか優しげで慈愛に満ちていた。

「あなた、助産師でしよう?」

「む? 今時の役所はそんなことまで調べるんか?」

老婆は役員を睨みつけるが、彼は首を何度も横に振った。

「お前さん、なんでわかつたんじゃ？」

確かに昔は助産師をしとつたが……」

「カラスたちが、お婆さんを気にしていたので。

カラスたちはとても賢い。彼らはあなたを仲間だと認識している。

あのカラス教授も手に余るわけね。これでは何をしてもここから離れるわけがない」

黒衣の少女はそう言つて、踵を返した。

「役員さん、今日は帰りましょう」

「え、はい」

役員は確実に十歳は年下であろう少女の行動に意を唱えることもできずに、その後をついて行くことしかできなかつた。

「なんじゃ、あの娘は」

老婆はそんな二人の後姿を奇妙な物を見る目で見送ると、羽ばたきの音に振り返つた。

「おうよしよし、たんと食え」

そこには数羽のカラスがひな鳥のように老婆に餌を求める姿があつた。

その翌日。

「お婆さん、こんにちは」

老婆の住む家に、黒衣の少女は現れた。

「なんじゃ、お前さん。」

またカラスに悪さしに来たんか？」

「まさか。この土地には古来からカラスは八咫鳥の化身だと伝えられているんですね」

「そうじゃよ」

少女の言葉に、老婆は頷いた。

「わしの若い頃は、そんなこと誰でも知っておった。

カラスたちも、迷惑を掛けるほど数も居なかった。

山を切り崩したり、林を切ったり、どちらがどちらにとって迷惑なのか、一目瞭然じゃ

ろうに」

縁側に座ってお茶を啜る老婆は、そこから見える景色の変化に嘆いていた。

「そうですか」

少女は老婆の話に相槌を打った。

彼女の話はそれで終わることはなく、少女はそれから一時間以上も老婆の話に付き合

うのだった。

くどくど、と長話を続けている老婆に変化が訪れたのは、話が二時間目に突入したころだった。

老婆の住む家の敷地に、車が入って来たのだ。

「お母さん、お久しぶりです」

「ふん、誰かと思えば、薄情なせがれじゃないか」

車の中から出てきた男性を一瞥し、老婆は嫌味つたらしくそう言った。

「ええと、あなたは……」

「お気になさらず」

老婆の息子は、少女の存在を気にしていたが、彼女は憤ましくそう答えた。

「……お母さん、いい加減、一緒に暮らそう」

「嫌じゃね、誰があんたの嫁なんかと一緒に暮らすか」

「あのことに関しては、ちゃんと行って聞かせたつて!!」

お母さんももう歳なんだから、一人でままならないこともあるでしょう?」

「孫はもう、独り立ちしたんだらう?」

子供を触らせるのは嫌だったくせに、今さらそれかい?」

老婆は不愉快そうに鼻を鳴らして、息子を睨みつけた。

「帰えんな」

老婆の言葉に、彼女の息子が何か言おうとした瞬間だった。
かあーかあーかあーかあー!!

「えッ」

いつの間にか、老婆の家の敷地に何十羽というカラスが集まっていた。
カラスたちは一齐に鳴き始め、怖気づいた老婆の息子はまた来ると言つて車に逃げる
ように入つて、帰つて行つてしまった。

「ふん、何を今さら……」

吐き捨てるように、と言うにはそれは哀愁に満ちた呟きだった。

「お婆さん」

その呼び声に、老婆はハツとして周囲を窺つた。

まるでこの世のものではない何かに話しかけられたような気がしたのだ。

老婆の顔に掛かる影は、目の前に立つ少女のものだった。

だがその目は、彼女の長い人生で一度たりとも見たことが無い深い暗闇があった。

「なるほど。あの役人は、物の怪の類を呼んできたんだね」

信心深い老婆は、目の前の少女を姿をした何かの正体を直感的に感じていた。

そして少女は、否、少女の姿をした魔女は言つた。

その言葉に、死期を悟ったと思っていた老婆は思わず顔を上げた。

§ § §

喪服を身に纏った魔女は、電車を乗り継ぎ目的地へと向かった。

「お婆さん」

魔女は、目的地の家の縁側で眠たそうにしている老婆に話しかけた。

「んあ、ああ、あんたか」

「そろそろ、時間じゃありませんか？」

「別に遅れたって問題ないじゃろう。」

迷うことなんてありませんのだからな」

「そうですね」

それを聞いて、魔女は頷いた。

老婆の横には何羽ものカラスが寄り添っていたのだ。

「おや、あなたはこの間の」

そこに、老婆の息子が通りがかった。

「どうも」

「あなたも、来てくださったんですか」

「はい」

「そうですか、お母さんも喜びます」

彼はそう言つて、式場の方へと歩いて行つた。

魔女が振り返ると、縁側には老婆もカラスの姿も無かつた。

「あなたの言うとおり、あのお婆さんにお任せして正解でしたね」

老婆の自宅で行われた葬式は、市役所の役員も参列していた。

「まさかあのお婆さんが、カラスたちを手懐けてしまふなんて」

「そうですね」

彼の言葉に、魔女は頷いた。

老婆はある時を境に、カラスたちを手懐けて見せた。

それ以来、彼らはゴミを漁らず、住宅街にフンをしないようになった。

それどころか、老婆の家に入った泥棒を追い払つたり、よその土地から来たカラスも撃退したりもした。

カラスたちが餌を求めてやってくる老婆の家は、カラス屋敷として周辺の住民たちか

ら親しまれるまでになった。

だが、それも少し前までの話だ。

「カラスは葬儀をするという迷信があるそうですね」

式場から外を見やり、カラスたちが集まっているのを見て役員はそう言った。

「迷信でしょう？ あれは周囲に外敵が居ないか、判断する為だと聞きました」

「ええ、迷信です。ですが……」

役員は式場の奥にある老婆の遺影を見て、こう思いたくなくなった。

「カラスたちも私たちが思いもよらない理由であつても、死者を悼むのであつてほしい、
と」

そんな彼の感傷を、魔女は黙って聞いていた。

くくく

くくく

「はあ」

「どうしたの、真冬」

「これ、見て」

いつもの昼休み、真冬が深いため息を吐いたのを見て、夏芽は何事かと尋ねた。
「ああ、これか」

真冬の見せたスマホの画面には、例の妖精の某呟きアカウン트가大炎上したと記事になってた。

「何と言うか、その、残念だったな……」

幻想だと思っていた生き物が実在したのに、蓋を開けてみればクソガキだったという落胆は夏芽も少しばかり、いや、かなり理解できた。

「あれ、あの後、師匠にお願いして妖精を捕まえる方法を教えてもらったんだけど。もういいの?」

「もういいです!!」

春美ちゃん、私が悪かったです!! 我儘言つてごめんなさい!!」

そんな春美の意地悪な言葉に、真冬は涙目になって謝った。

「まったく、真冬は時々変なスイッチ入るよね」

千秋は自分もそのニュースを見ようと、ニュースアプリのオカルトタブを見た。

そこには、妖精が大炎上したというニュースの他にも、こんな記事があった。

『カラス婆さん亡くなる。葬式後、町中のカラスが消える!?!』

と、そんな見出しの記事が。

アートについて

東京都千代田区霞が関に存在する警視庁の一角に、異能係は存在する。

警察は既存の捜査方法では異能事件の解決は困難とし、それらの捜査や取締りを行う比較的最近に新設された部署だ。

昨今増え続けている異能事件に対し、公安警察は日本国内の異能者の把握や彼らの起こす混乱の収束を急務としているが、異能係はそこから事件解決を業務としている。

つまり公安的な側面を持つ部署だった。

係長の伊藤も元は公安畑の人間である為、その性質は明確と言えた。

だがその異能係のある一室はまるで隔離されるように庁内の片隅に置かれていた。

これは彼らが疎まれてるわけではなく、単純に魔術的な押収物の管理も彼らが行っているためである。

その中には周囲に影響を及ぼす危険な物も存在するので、物理的に周囲と距離があるのだった。

そんな日本の対異能犯罪の最前線とも言えるその場所は、その需要に対して十分に機能しているとは言い難かった。

在籍している職員は常に十人未満。

この係に異動して半年持つ人間が三割以下という、某人材の墓場な刑事ドラマに登場する部署並みである。

「おや、今日は伊藤ちゃんじゃないのか？」

そこに当たり前のように入りする人物がいた。

化粧屋である。

「あなたが化粧屋ですか？」

一応、伊藤さんには聞いていますよ」

彼女を出迎えたのは、若い警察官だった。

年頃は二十歳ぐらいで、制服を着ていてもその若々しさが残っていた。

「ほう、あんた、こっち側か。」

だが同業者には見えないな」

化粧屋はそのまだ少年とも言える若手の警察官が異能者だと悟った。

彼の身体に内在する魔力が、一般人のそれとは違い活性化していると感じ取ったのだ。

「……………ええ、超能力の方です」

「へえ、日本には百人以上はいるって伊藤ちゃんが言ってたけど、こうして会うのは初めてだなあ」

化粧屋が物珍しそうに彼を見やると、彼は陰のある笑みを浮かべた。

「潜在的にはその十倍以上いるって想定されているらしいですね。」

誰だって、珍獣扱いは嫌ですから。親が黙っているパターンも多いらしくて、役所に

異能者だって届出が出たパターンはその百人の半分も居ないとか」

「届け出ないことに罰則も、届け出た後の優遇も無いんじゃないや当然だろ」

「一応、無料で定期検診は受けられますよ？」

医療費もタダ同然だし、俺は花粉症の薬代とかが浮いてラッキーですし」

逆を言えばその程度でしかない、と彼はニヒルに微笑んでいた。

「まあ、自分は新人類だって触れ回っているアホが外国にはいるみたいだが、実際はそうじゃないんだろう？」

「当然でしょう。アメコミのスーパーヒーローみたいな超能力者なんて確認されている時点では日本には居ない。」

俺の異能だって大したこと無いですから」

「ちなみに、おたくの超能力ってどんなの？」

化粧屋は無遠慮に尋ねた。

その表情は面白がっているようだった。

「何か小物有りますか？ どこかで買ったとかさそう言うの？」

「んじやあ、このスカーフとかどうだ？」

化粧屋は自分のスカーフを外して、彼に手渡した。

彼は目を閉じて神経を集中させると、こう言った。

「へえ、これ銀座の有名店のブランドものなんですね。メーカー名も言いますか？」

「ほー、すごいな。こういうの、なんて言うんだっけ？」

「サイコメトリーですよ。」

触れた物の過去の持ち主とか、以前はどこに有ったとか、バラバラの破片の元の形とか、そう言うのが分かるんですよ」

それを聞いて、なるほど、と化粧屋は頷いた。

「たしかに警官には引く手数多の能力だな。」

せつかく他人とは違う能力を得たのに、警察なんてやってるからどうしたもんかと思つたら」

「別に俺も、この力を人々の役に立てたいから、なんて思つてませんよ」

彼は規則で室内では装着しないことになっている制帽を目深に被つてそう言った。

「わかるよ、見え過ぎると辛いもんな」

「……………」

「今まで伊藤ちゃんの様子であんたを見なかったのも、それが理由か？」

「まあ、今日が現場復帰初日ですね」

化粧屋はそれ以上何も聞かなかった。

表情は笑ったままだったが、サングラスの奥の両目は少しも笑っていないかった。

「化粧屋、あなたも来ていたのですか」

そこに、仮面を付けた魔術師が現れた。

「え、あなた誰ですか？ それに、その肩に乗ってるのって」

見た目は化粧屋以上にその場にそぐわない魔術師を認めて、化粧屋と雑談していた彼は驚いた。

「おや、この子が見えるのですか？」

魔術師の肩には、物珍しそうに周りを見ている妖精レプがちよこんと座っていた。

「つて、ことは、あなた魔術師さんですか!？」

「うわー、ファンなんです!! まさか直接お会いできるとは」

「ええ、そうですね。魔術師と名乗っています。」

伊藤刑事はいらっしゃいませんか？」

「すみません、伊藤さんは席を外していて」

若者らしく有名人に会えた彼は影のある表情に満面の笑みを浮かべて応対した。魔術師の来訪に、数少ない他の彼の同僚も色めきだってお茶の用意をし始めた。

「私と対応が全然別じゃねえか」

「そりゃあ、あなたは犯罪者予備軍ですから」

「けっ」

対応の差にふて腐れる化粧屋。

「ねえあなた、私のことが見えるってことは、声も聞こえるんでしょう？

私ってばすごく暇なの!! ここのこと、案内してくれない!!」

すると、魔術師の肩に乗る珍生物がそんなことを言った。

「え……」

「見えない振りをし、聞こえない振りをしなさい。

彼女の関心を買ってはいけない。素っ気なく対応しなさい」

妖精に話しかけられた若者は、その見た目だけは可愛い仕草に硬直するが、すぐに魔術師にそのように助言された。

「ぶーぶー!! マスターのバカ!! せつかくおちよくろうと思ったのに」

「なんでお前、妖精なんて連れてきてるんだ？」

魔術師の肩の上で文句を言い始めるレプを見て、化粧屋も変な物を見る目で彼を見やる。

「都会の空気なんて合わないだろうとは言ったんですけどね。」

「イタズラをしないのなら、これからも一緒に外出しても良いと契約したので」

「だからってお前、妖精だぞ?」

「実体の維持は抑えているので、それで大丈夫でしょう」

「んなわけあるかよ」

化粧屋はその返答に呆れたように返した。

そして彼女の懸念はすぐに現実となった。

「はい、みんなー、レプです。」

私は今、マスターと一緒にけいしちよー? っところのいのーがかり? っところ

に来てまーす!!」

なんとレプは、魔術師のポケットからスマホをすり取って実況放送を始めたのである。

「レプ、イタズラはするなと言ったぞ」

「これはイタズラじゃないですよー、マスター!!」

弟子たちはマスターが何をしているのか興味深々だしー? マスターの活動を広める

一環つて言うかー？ そんなかんじ!!」

と、この妖精はそんな屁理屈をこね始めた。

ちなみに、“弟子たち”と言うのは魔術師の放送での視聴者の呼び名だった。レプが勝手に視聴者と決めた。

「ちよつと、機密とかたくさんあるんですから勝手に撮影しないでください!!」

それに、異能係の職員たちは大慌てだった。

異能者である彼以外、スマホが空中に浮かんで機械音声で喋っているようにしか見えないのだからそれも拍車を掛けた。

「レプ、私の言うことが聞けないのか？」

それとも、その実体を維持している魔力を絞ろうか？」

「……むー、私はマスターの為に行動しただけなのになー」

と、心にもないことを嘯きながら、レプは視聴者たちに手を振って放送を打ち切った。

なお、レプのモラルもクソも無い放送の最後は彼女に対する罵声のコメントで終わった。

「困りますよ、魔術師さん」

「だから言っただろ」

焦る警官たちに、言わんこつちやないという態度の化粧屋。

「レプ、次に勝手なことをしたら鉄の箱の中だ。わかったな？」

「は、はい」

仮面の合間から覗く視線に慄いたレプは、彼の肩に戻るとしゅんとなった。

「あ、ところでさ」

が、すぐにそれを忘れたかのように彼女は顔を上げた。

「あんたって、有名人なの？」

コメントに、あの警官ってメドリじゃね？ って何個かあったけど」

「ツ!？」

無垢な妖精の問いに、異能者警官は顔を引きつらせた。

そのまま彼は顔だけでなく、後ろを向いて俯いてしまった。

§ § §

「超能力高校生？」

「ああ、何年前かに騒がれてたの、覚えてないか？」

「うーん、あー、思い出した!! あれか!!」

伊藤刑事の言葉に、化粧屋も思い当ったように手を叩いた。

彼ら二人と魔術師は、異能係の押収物保管庫に来ていた。

そこは警察の保管庫だと言うのに、そこらじゅうにお札や魔法陣が描かれており、窓も存在していなかった。

「あいつな、それで酷い目にあつたわけよ。」

まあ、半分くらいは調子に乗つたあいつの自業自得とも言えるが」

「ブームつてのは残酷だよな」

「そうだな、あいつはプライベートをしゃぶりつくされ、高校卒業後は逃げるように警察に入った。」

警察の制服を着てれば、その他大勢に紛れるとも思つたのかもな。

だがその異能を買われてこんなところで働いている。休職も前回で二度目だ」

伊藤刑事の言葉に、化粧屋もまあそうなるだろうな、と言いたげな表情だった。

「世間が異能者を認知したのは約十年前だが、日本じゃあいつがメディアに現れるまでそれがどんな連中かはまったく分からなかった。」

誰もが、興味深々だった。

だから両親の職場や友人関係、学校の成績までつまびらかにされてトラウマになつてんだよ。

拳句、捻くれた連中からはテレビだからヤラセやイカサマ呼ばわりされたり、散々

だったらしい」

「ヤラセ、ヤラセかあ、あれ酷いもんな。

この間、それで好きな番組が終わったし」

やや的外れなことを言う化粧屋の横で、魔術師は真面目に作業をしていた。

「伊藤刑事、これはホンモノですね」

「ああ、やつぱりか」

魔術師が示した物品を見て、伊藤刑事も唸った。

「おい化粧屋、これお前の専門だろう」

「どれどれ。ああ、これはハンズオブグロリーか」

化粧屋は目の前に置かれた物品は——切断された手だった。

それは人の肌とは思えないほど変色しており、指先はろうそくの先端のように加工されていた。非常に悪趣味な物体だった。

「昔、そんな技を使うマンガの主人公が居たな」

「マジかよ、そいつヤバイな。自分の体を死蟻にでもしてたのか？」

私やほかのネクロマンサーでもないぞ、そんなこと」

「これは二年前、ある窃盗団が所持していた代物だ。」

そいつらはこれを利用して窃盗を繰り返していたそうだ」

「まあ、そう言う使い方が好まれたらいいな」

化粧屋はそれを他の魔術品の置かれているテーブルに置いた。

彼らは魔術品とそうでないモノの仕分けをしていた。

普通の押収物は普通の保管庫に移動させるためである。

そして本物の魔術品は使用できないように封印するのだ。

「私たち以外にも同業者の協力者はいるんだろ？」

そいつらに頼んで仕分けぐらい手伝わせたらどうだ？」

「分かり切ったことを言わせるな。」

世俗に興味がある魔法使いなんて稀なんだ。電話でアドバイスをくれるのが精々で、

魔術師殿みたいに向いてくれるなんてまず無い」

そう言う意味では、伊藤刑事は化粧屋に感謝していた。

この仮面の魔術師は、まともだった。本当にまともな常識人だった。

まともな受け答えをしてくれるだけ貴重な人材だった。その上、化粧屋が認めるほどの凄腕ときた。

こうして彼を便利に扱っていることを申し訳ないと思うくらいだった。

そしてこの化粧屋もまともだったらなあ、と伊藤刑事がもう一度思わざるをえない場面がこの後訪れる。

「ま、気にすんなって。私も住んでた森を焼かれたり、勝手に開発しようとした人間を土砂崩れで追い払ったりしたしき。」

「私みたいに何百年も生きてたらいろいろあるって」

メドリ——妻鳥は応接室でレプに慰められていた。

このクソ妖精は保管庫に入れてもらえなかったのである。

「俺だって、最初は何も考えずに取材を受けたわけじゃないさ。」

でも取材に来る記者はどんどん増えて行って。最初に約束した俺以外に取材しないって約束は忘れられて……」

「そうなの？　じゃあどうして」

レプは妻鳥の耳元で、囁くように言う。

「——そいつらに、仕返ししなかったの？」

ギョツとして、彼は顔を上げた。

顔を横に向けて、視線を肩の上の妖精に向ければ彼女は無垢で、残虐で、楽しそうな笑みを浮かべていた。

「嘘つきは手足をもちで、口の中に石を詰めましょう。」

目玉を潰して、耳を削いで、鼻を潰さないと♪」

くすくす、と儂く目麗しい小さな少女からとは思えない、残酷な言葉が並べられる。彼はようやく、魔術師の忠告の意味を理解した。

この妖精は、人間と全く異なる価値観を持つていることを。

そして彼女らの禁忌に触れれば、惨憺たる有様を晒すことになるのだと。

「止めてくれ、俺は君たち妖精とは違うんだ」

妻鳥は茶菓子のクッキーの袋を開けて、中身を砕いてその破片を肩の上の少女に与えた。

はむはむ、と可愛らしくクッキーの破片を食べるこの妖精は、決して油断ならない相手なのだと思いつた。

「私も、多少は意趣返しぐらいしてやっても良かったと思うがな」

選別作業を終えて戻ってきた化粧屋が、妖精の面倒を見ていた妻鳥の対面のソファアに座った。

「化粧屋さん、あなたは どうして警察に協力を？」

あなたのような人が、どうして？」

早くも妖精の相手に疲れ始めた彼は、化粧屋にそんなことを問うた。

「なんで、そんなこと聞くんだけ？」

「だって、あなたって他の魔法使いみたいに警察に協力する理由なんてないでしょう？」

かといって正義や義侠からという訳でもない」

違いますか、と彼は視線で彼女に問う。

「いやまあ、警察に協力することでメリットはあるっちゃあるんだが、それは些細なことだな。」

どうして私があんたらに協力するか、だったか？」

化粧屋はお茶請けのクッキーをかじりながら言った。

「一言で言えば、冒険だからだ」

「は？」

妻鳥は化粧屋が口にした言葉が自分の理解からかけ離れた単語だったことに、思わず変な声を漏らした。

「私は昔から、気になっていたんだ。」

人は死んだらどうなるって、な。だから数えきれないほどの死体を弄って、死の先を垣間見ようとした」

それは普段の化粧屋の軽薄な雰囲気とそぐわない、求道者のような真剣な表情だっ

た。

「数だけ多い馬鹿どもは言う。神を信じれば天国に行けると。」

私はどうにも、連中が鼻に付いたんだ。だからそれを否定してみたくて、色々なことをして回った。

そして今生だ。俺はどこに居る？ エデンか？ コキユートスか？ 涅槃か？ エリユシオンか？ アアルか？ ドウアトか？ 根の国か？ 黄泉の国か？ ヴアルハラか？ ヘルヘイムか？ 影の国か？ ゲヘナか？

この俺がだぞ、前世であらゆる冒流を行った俺を神は罰さず、今生ではただの小娘だ」化粧屋は、笑っていた。

誰もが恐れる死の果てを実際に経験したこの女は、嘲笑っていた。過去善良に生きていたつもりになっていた人々の全てを。

「——故に私は、生きた冒流アートなのだ」

ただ普通に生きる。

たったそれだけがこれ以上ない皮肉なのだと、このおぞましい女は言う。

「その私が、秩序を維持する警察組織に手を貸すわけだ!!」

前世は生きることなんて面白いと思つたことはなかつたが、私な今生をこの上なく謳

歌している!!

死の先に繋がった死体こそが真理へ続く芸術だと思っていた。だが!! 今は私の人生こそがアートなのだ!!」

理解できなかつた。この楽しそうにしている女の全てを、脳が理解を拒んでいた。

妻鳥は助けを求める様に、同僚たちに視線を向けたが顔を逸らされた。

「単に性根が腐りきっているんですよ」

そして魔術師が仮面を手で抑えて、ため息と共にそんな身も蓋も無いことを言うのだった。

そんな感じで、その日の作業を終えた協力者二人は精神的に疲れた警察官たちを残して警視庁から帰っていくのだった。

絵画について

異能者がこの現代に現れて以来、世界は空前のオカルトブームが続いていた。

人々は魔術的謂れのある物品に価値を見出し、世界各地のパワースポットは連日観光客でいっぱいである。

スピリチュアルな宝石や石、異能者でなくとも占いや風水といった知識の持ち主は持てはやされ、テレビやネットを賑わした。

そんな中で、所謂ホンモノとされる異能者は一部を除いて不気味な静寂を保っていた。

日本では異能者が認知されて、公共の場に姿を現したのは妻鳥が初めてという程で、既に異能者の出現から五年以上経過していた。

アメリカやヨーロッパ、中国ではもつと派手な事件が起こっていたりしており、単純に人口の違いだろうと有識者はテレビの中で語る。

だが水面下では、魔法や超能力といった異能を悪用する者も着実に現れ始めたのである。

異能犯罪で逮捕された人間というのは妻鳥以前にも日本に存在していた為、彼らは別

に示し合わせたかのように異能を隠しているという訳でもなかった。

ただ、世間の目を嫌うという性質はある程度共通していたと言える。

各国は自国の異能者の所在を把握することに躍起になったが、自ら異能者だと名乗る人物の大半は偽物だった。

ただ、日本にも最近では異能持ちというステータスを引つさげた芸能人まで登場し、ある者は新興宗教の教祖、ある者は動画配信者、ある者は警察に協力を申し出た。

世界は、着実に移ろいつつあった。

故に今日も異能係の警察官は休まることを知らない。

「伊藤さん、今日はここですか？」

「そうだ」

妻鳥と伊藤の二人は、今日都内にある美術館へとやってきていた。

本日から、この美術館は日くつきの美術品を展示し始めるのである。

入り口にはまだ開館時間でもないのに、それらを一目見ようと長蛇の列が出来上がっていた。

「どうも、警察の方ですね」

二人が中に入ると、館長らしき身なりの良い男が彼らを出迎えた。

「はい、警視庁異能係の伊藤です」

「妻鳥です、本日は魔術品の展示ということで、注意喚起に参りました」
二人がやってきた理由はそれだった。

今の時代、魔術品の売買の為に盗難は珍しくなかった。

最近はお寺から仏像を盗む外国人より、美術館から曰くつきの品を盗む方が増えているレベルだった。

とはいえ、それはどちらかと言うとレアケースだった。

魔術品の流入は主に空港からであり、一見すると海外のお土産にしか見えない代物ばかりで判断が難しく、世界各国でそれらの規制には難儀しているのだ。

ただのお土産を魔術品だと偽って販売する詐欺も社会問題と化しており、ヤクザの資金源となっているという。

「せっかくだから、お二方もご覧になっていきますか？」

一通り注意を促すと、館長は親切そうな笑みを浮かべてそう言った。

「よろしいのですか？」

「ええ、開館時間までまだ一時間以上ありますし」

「それで、あの行列ですか」

「はい。昨日から並んでいる方々もおりました、私たちの方も困惑しているほどです」

苦笑を浮かべる館長に、伊藤刑事も苦笑を返した。

「芸術家の多くに、魔術に携わったという逸話を持つ者がいるのは御存じですか？」
館長の案内に従い館内を歩く二人に彼は語りだす。

「ええ、その中に本物の異能者が居たのではないか、という話も」

「その通りです。今回の展覧会の目玉は、その筆頭たる人物の作品です」

現代に現れた異能者のうち、転生を経験した過去の時代の人物がそうであるのなら、それは不思議なことではなかった。

「これが、イタリヤからわざわざ取り寄せた稀代の逸品です」

外の行列はこれを見に来ているのですよ、館長は子供っぽい笑みでその絵画を見上げた。

一方、警察官二人はその絵を見て絶句していた。

その絵は、寝台に寝かされ目を瞑っている男性に覆いかぶさるようにした男が至近距離までその男性の顔に自分の顔を近づけ、蜜蝋を塗っている光景が描かれていた。

その絵のタイトルは——『化粧を施す男』だった。

そのタイトルの下に、誰もが知っている偉人の名前が作者として刻まれていた。

「興味深い作品でしょう？」

当時、化粧はキリスト教の影響で公然の場ではされなくなっていました。

そしてこの構図は、同性愛を彷彿とされる。彼の未発表作として数年前まで死蔵されていたと言うのも納得の一作ですね。

しかも化粧を施されている相手というのもの」

「死体、ですか？」

「よくお気づきになりましたね」

妻鳥の言葉に、館長も笑みを深めた。

「死体にエンバリーミングが施されるようになったのはかなり近代になってことです。

そもそも当時のキリスト教の価値観から言つて、死体に手を施すことを許すとは思えません。

十五世紀後半のイタリアでは教会によつて死体の解剖すらも禁じられるほどでしたから」

「そんな作品が、良く現代まで現存していましたね」

「ええ、これはイタリアで異能者が魔術的な隠蔽が施された工房の跡地から発見した物なのだそうです。

保存環境は悪いの一言に尽きるといふのに、この作品はほぼ劣化が見られなかったという話です」

伊藤刑事に、館長は楽しそうに説明をした。

まさに稀代の芸術品にして魔術品だった。

「向こうの本場の学芸員たちが修復する必要もなかった。

かの偉人は異能者だったという、明確な裏付けに他なりませんよ」

館長は自信満々にそう語った。

「……」

妻鳥は別の作品を見に行った館長と伊藤刑事から離れ、一人『化粧を施す男』を見上げていた。

たった一枚に、ありとあらゆる当時の禁忌を表現した偉人の作品を。

ふと、彼は興味に負けて、周囲に誰も居ないのを確認し、そつとその作品の額縁に触れた。

彼の異能が、その作品が辿った歴史を彼に見せた。

§ § §

十五世紀、イタリアのフェレンツエ。

あらゆる芸術の黄金時代、ルネサンス期。

その当時もつとも活気あるだろう広場に、一人の男が衆目を集めていた。

「さあさあ皆さん、お立合いお立合い!!」

我が芸術を、我が作品をご覧あれ!!」

彼は大仰な仕草で、自身の隣に置かれていた布を被った物体を示した。

民衆はその大きさから、それは何かの石像だろうと当たりを付けた。

何の後ろ盾も無い無名の芸術家が民衆にパフォーマンスをしようと言うのは、珍しいことではなかった。

それが人々に受け入れられるかどうかは別として。あるいは、この町で有数の工房たちがそれを許すかどうかかも。

だが、民衆の想像は遙か斜め上に裏切られた。

男が布を取り払うと、そこにあったのは棒に縛り付けられた男だった。

民衆が絶句し、距離を取ると、男は満足そうに笑っていた。

そして拘束され、口に円状の物を噛まされ呻いている『作品』に目を向けた。

「今から、この男に天国を見せてやるのだ!!」

さあ、さあ、この毒薬で、神の国を垣間見よ!!」

そう言って、彼は取り出した瓶の中身を男の口に注いだ。

男は激しく痙攣し、顔は蒼白になりながら、目や口から血を流した。

「今彼は!! 生から死へとシフトしている!!」

人間の想像する最も神秘的な体験をしているのだ!!

見えるだろう!? なあ、天国が!! 見えるんだろう!!」

民衆が悲鳴を上げ、逃げ出すのも気にせず、男は哄笑を上げる。

やがて、縛り付けられた男は息絶えた。

それを見ていた彼は、可笑しそうに笑っていた。

すぐに警備隊が駆けつけてきたが、公然と殺人を犯したその男は大勢に目撃されたと言

言うのに捕まらなかった。

縛り付けられていた作品となった男は死刑囚だったことが判明したくらいで、犯人が

誰かも不明だった。

そんなおぞましい光景だったのに、その場に居たと思われる妻鳥が感じ取ったあの絵

画の作者は鮮烈な記憶として残っていたのを感じていた。

場面は変わる。

それは、集会の様子だった。

どこか宗教的な建築の建物で、奥に十字に薔薇のシンボルが掲げられていた。

それは現代では架空の存在だとされている、薔薇十字団の紋章だった。

まさかホンモノが実在したのか、と妻鳥は深く作者の意識を読み取ると、落胆した。これは要するに、薔薇十字団を自称する集団の集まりに過ぎなかったのだ。

当時、いやこういった集団は現代まで続いて無数に存在したのだと作者の落胆の意識から妻鳥は悟った。

そんな中で、妻鳥は見覚えのある人物を見つけた。

あの、フェレンツェの広場で公開殺人を行ったあの男である。

その人物が、なぜか自称薔薇十字団の集會に参加していた。

絵の作者は、それに気づいて彼について他の参加者に尋ねた。

曰く、メデイチ家も恐れる男。

曰く、C・R・Cの元側近。

曰く、ただの狂人。

と、散々な評価だった。

そして、その男のことを尋ねて回ることを彼が興味を引いたのか、男が近寄ってきた。

「なあ、あんた名前は？」

そして作者は名乗った。

そのいづれ後世に、人類史に名を残す、その名を。

場面は変わる。

「なあ、ピエロちゃん。

あんたは人が死ぬとどうなると思う？」

薄暗い地下室で、男は刃物を持って絵の作者に尋ねた。

彼と作者の視点で物を見ている妻鳥は思わず吐き気を催した。

二人は、死体を解剖している真つ最中だったのだ。

「それを調べるための解剖でしよう？」

人間に魂は実在するのか。精神とは肉体のどこに有り、そしていつ消えるのか。

人間はなぜ機能を停止するとそれらが抜け落ちるのか。

それらはどこへ行き、なぜ生を受けるのと同時に獲得するのか」

「ピエロちゃんは難しく考えすぎだよ」

目の前の男は、ピエロと呼んだ作者を見て笑っていた。

この当時、死体の解剖は限られた場所ではかできなかった。

だが、目の前の男に言えばどこからともなく鮮度のいい死体を調達してくれる。

その多くは戦死したものであったり、病死していたり、と死体の構造や死因を見たい

ピエロにとって好都合だった。

二人は密会を重ねて、秘密の研究を行っていた。

「天国は本当にあるのか、とか。」

死んだら本当にそこに行けるのか、とかさ。

俺はそれを信じてる連中が馬鹿馬鹿しくて、調べて回ってるのさ」

「天国が実在するかどうかはともかく。」

神は実在するでしょう。　そうでなければ、ここまで雑多で無秩序な世界が存在するわけがない。

天国の実在性については、一時的に死の状態に移行できる薬を開発してから確かめればいい」

「うーん、少し前まで教える立場だったのになあ」

「あなたは確かな技術を持つているのに、向上心が足りないのです。」

自分を前に進めるには確かな好奇心と、飽くなき向上心なのですから」

「いやあ、流石にピエロちゃんぐらいの探究心は無理だわ」

二人はそんな会話をしながら、作業を進めていく。

そんな仲の良く見える二人だったが、袂を分かつのはそう遠くは無かった。

「あなたの芸術は、ただ悪趣味なだけだ」

ピエロは冷たく彼に言い放ったのだ。

「人は死の瞬間こそ、真理を垣間見る。

なぜ町中の人間が宗教画ばかり有難がってるのか分かるか？

人々が思う美の中に、その奥底に感じ取れる感性に、真理が隠されているからだ」

「あなたがやっていることは、ただ気に入らない相手を貶めようとしているだけだ。

あなただってわかっているでしょう？ そんなものは芸術とは言えない。真理があるとは言えない」

「黙れ!!」

目の前の男は、基本的に死体しか持ってこなかった。

だがある時、彼はピエロの前で人を殺した。何か興が乗っていたのか、嬉々として。

それが芸術であると。

その行いや行動理由が、ピエロにはいたく気に入らなかつたのだ。

「お前なら、分かってくれると思ってたのに」

男は落胆して、ピエロの前から去って行った。

それ以来、彼が姿を現すことはなかった。

場面は変わる。

老境に入ったピエロは、弟子にも教えていない二人の隠し工房で、絵を書いていた。書いているのは、あの『化粧を施す男』だった。

二人が解剖した死体は、決まってあの男が外見を整える。

そして死化粧を施し、手厚く葬った。

その絵だけを残して、老いたピエロは工房から去って行った。

魔術の研究などの資料は全て処分して。

そして長い年月を、暗い工房の中を絵画は過ごした。

ある時、その工房の扉を開けた女の姿が見えたところで、妻鳥は記憶の世界から戻ってきた。

数日後、休日に妻鳥はあの美術館へやってきていた。

あの絵を展示している美術館は空前の大盛況で、写真を取ろうとしているマナーの悪い客を学芸員が注意していた。

大勢の客に揉まれ、妻鳥も絵画を見上げる。

偉人の残した芸術と魔術を。

「よう、お前も来てたのか」

人ごみに疲れた妻鳥が美術館から出ると、見知った顔が声を掛けてきた。

「化粧屋さん」

「なんだ、お前つて芸術とかに興味あったのか？」

それなら言えばいいのにな、私の芸術を見せてやるのに」

「あ、いえ、結構です」

反射的に妻鳥は拒否した。

何だかともんでもない物を見せられそうな気がしたのだ。

「何だよ、私はこれでも普通に絵とか得意だぞ？」

メツチャ上手いやつに教わったからな。今だと少々古臭い画風かもしれないが」

「メツチャ上手いやつですか……」

得意げに笑う化粧屋を見て、妻鳥は苦笑した。

「化粧屋さんも、絵を見に来たんですか？」

「ああ、毎日来てる。」

昔に見た絵とか今生でもみれたりするから、なんだか感慨深いんだ」

それは、転生を経験しないと分からない感覚だろうと、彼は思った。

「……それに、友達の話もあるしな」

ぼそり、と呟いた彼女の言葉は、風の音に掻き消されたのだった。

非日常について

「妖精を掴まえる方法？」

なぜそんなことを訊くの？」

「いや、真冬ちゃんが使え魔持ってないの、とか言うから私も持った方が良いのかなって」

「呆れた。憧れは理解とは最も遠い感情だとは、誰の言葉だったかしら」

いつもの修業の合間に尋ねた春美に、黒衣の魔女はため息を吐いた。

「でも、妖精が実在していたってことは私も驚きました。」

「それじゃあ天使も悪魔も居るかもしれないですし」

「春美」

春美は己の師が自分を咎めるように見ているのに気付くと、ハツとなった。

「申し訳ございません、ヘカテー様。」

私は貴女様の加護を疑っているわけではありません!!」

彼女はすぐに部屋にある女神像に跪いてそう叫んだ。

「あなたも何となく察しているかもしれないけれど、あなたの見聞きした妖精もこの世の物ではないでしょうね」

「異界の存在、つてことですか？」

「少なくとも通常の手段で接触できない、今の時代で架空だとされる生き物はそうでしょうね。」

それを実在していると云えるのか分からないけれど」

「たしかにそうですね……」

二人が祈る神も、ある意味では実在していないと言えた。

否、架空かどうかさえ、意味の無いことなのかもしれない。

このオカルトが現実となってきたこの時代では。

その日は一応妖精との接触や注意について、春美は教わった。

事件は、その数日後に起こった。

「あれ、メッセージが既読になつてない」

それに気付いたのは、千秋だった。

彼女はスマホの画面を見て、眉を顰めた。

「千秋、誰かに無視されたの？」

「そうなのかな。でも喧嘩した覚えはないし」

夏芽の問いに、千秋は不思議そうに小首を傾げた。

「誰に無視されてるの？」

「望海ちゃんだよ」

真冬は千秋の言葉を聞いて、あつとなった。

「二三日ほど、彼女らは望海に会っていないことに気付いたのだ。」

「私、ちよくちよく話してるんだけど、昨日からメッセージが既読になってなくてさ」

「あのスマホ中毒が？」

千秋の言葉に、夏芽も不思議そうな表情になった。

あの年中スマホを弄っている望海が、メッセージの着信に気付かないわけがないのだ。

「ちよつと、電話掛けてみる」

異変を察したのか、春美は望海のスマホに電話を掛けてみた。

「もしもし、望海？」

電話に応じたことに、春美の様子を窺っていた三人がホツとしたのもつかの間だった。

『望海のお友達ですか？』

その声は、望海の物ではなかった。

「……望海のお母さんですか？」

もしかして、あの子に何かあつたんですか？」

『……』

春美の問いかけに電話の相手は、無言になった。

だが、春美には聞こえていた。

——望海の声と思われる、奇声が。

「今から、そちらに伺います」

春美はそれだけ言って、通話を切った。

「ゴメン、先生に調子が悪いから早退するつて伝えて」

「また、あの子つて何か巻き込まれてるの？」

「たぶん」

春美がそう答えると、千秋はため息を吐いた。

「今の電話に。邪悪の気配を感じました」

お喋りに混ざらずパンを食べていたカタリナがぽつりと呟いた。

「厄介な物に憑かれているようですね」

「どうせ、自業自得でしょうけど」

「私も同行しましょう、あの魔女も呼んだ方がいい。」

「これは恐らく、勘ですが、偶発的な物ではない」

異端狩りの嗅覚が、カタリナにそう告げていた。

「ありがとう、そうするわ」

「あー、私たちは学校が終わってからお見舞いに行くわ」

二人の尋常じゃない雰囲気を感じて、夏芽はそう言った。

「そうして。それまでには終わらせていると思うから」

春美は表情を曇らせたまま、皆にそう言った。

§ § §

学校が終わり、果物の缶詰をお土産に三人娘は望海の家へと向かった。

「望海ちゃん、なにやらかしたんだろう」

「どうせまた変なの覗き見でもしてたんでしょう」

心配そうにしている真冬と裏腹に、千秋の言葉は呆れから素っ気なかった。

そんなことを話していると、望海の家にたどり着いた。

ぴんぼーん、とインターホンを鳴らすと、妙齢の女性が現れた。望海の母親だった。

「どちらさまですか？」

「あ、私たち望海ちゃんの友達です。」

今日学校休んでたみたいだから、ちよつと心配になつて」

「ああ、そうですか」

それを聞いて、望海の母親は少し憔悴していたが微笑んだ。

「あの子なら、もう元気になりましたよ。」

お昼にやってきたお友達と一緒に出掛けてしまつたくらいで」

その言葉を聞いて、三人は今度こそホツと息を吐いた。

「そうですか。じゃあ、これお見舞いに渡しておいてください」

「わざわざ来てくださつてごめんなさいね。」

お返しに何かお菓子でも持つて行つて」

「あ、私たちは大丈夫ですから。望海ちゃんによろしく行つておいてください」

と、千秋はそのように対応して皆で家の敷地から出た。

「望海ちゃん、大丈夫だったみたいだね」

「まあ、魔女さん達が居て、ダメだったとは思えないけど」

その点において夏芽は心配していなかった。

「今頃、四人とも原因を探しに行ってるのかな」

「そうじゃないの？ 偶然じゃないってカタリナさん言ってたし」

不安げな真冬に、千秋は同意してみせた。

「呪詛に呪詛、呪詛って最近そればかりだよな。」

呪殺事件、去年より増えてるらしいし」

友人にまでその魔の手が及んだことに、夏芽は憂鬱そうにそう言った。

「まあ、あの四人なら明日には解決してるでしょ。」

「今日はこのまま帰って、明日春美ちゃんに話を聞きましょう」

「そうだねー」

千秋の言葉に、真冬は頷いた。

「ねえ、君たち、この家の人と知り合い？」

ふと、その時、三人に声を掛ける人物が居た。

「え、あなた誰ですか？」

千秋はその男を見やる。

くたびれたスーツ姿の若い男だった。

彼は品定めするように三人を見ていた。

「ああ、俺はただのしがない営業マンだよ。

こここの家に売り込みをしようと思つててね。家の人は居るのかなつて」

その男の口調に淀みは無かつた。

ただ、その怪しさは言うまでも無く三人にも感じられた。

「売り込みつて、何を売つてるんです？」

「魔術品だよ。君らも興味ある？」

不信な目を向ける真冬を気にした様子も無く、男は人当たりの良い笑みを浮かべてそう言った。

「ほら、こういつた護符とかパワーストーンとか。

うちの会社はホンモノしか取り扱つてないんだよ」

そう言つて、彼はカバンから六芒星のシンボルが入つた護符を取り出して見せた。

「これ、いくらなの？」

「これは良いやつだからね、五万ぐらいいかな」

「高ッ」

値段を聞いて、夏芽は思わず仰け反つた。

「ご家庭用だからまだ全然安いよ。」

本格的な物だと数百万単位だし。五千円くらいのもあるけど、欲しいなら君らにも売ってあげるよ」

「いえ、結構です」

千秋はきつぱりと断った。

どうにもこの男は、ただのセールスマンには見えなかったのだ。

「ふうん、今時の子なのに珍しいね」

「それほどでも。あと、この家はそういうの必要無いと思いますよ」

「ふうん。まあいいや、今日のところは帰るよ」

男は毅然とした千秋の態度に目を細めると、あっさりと踵を返して去って行った。

「ねえ、あいつ詐欺師だと思う?」

「わからない。でも、呪いを受けた望海ちゃんをピンポイントで今日現れるのっておかしいよ」

夏芽が二人の意見を尋ねると、真冬はそのように答えた。

「もしかして、呪った相手に魔術品を売りつける悪徳商法なんじゃ」

そこで、夏芽はふとそんな発想に行きついた。

「私も思った。」

「どうする? 春美ちゃんたちに伝える?」

「少なくとも望海ちゃんには言っておいた方が良いと思う」

そう言うことになったので、千秋は望海のスマホにメッセージを送っておいた。

そうして、三人が帰路に着こうとすると。

「ええ、目標を発見しました。」

姉御にアヤつけてたのはあの家に違いありません」

不運なことに、或いは不運に引き込まれるように、三人は先ほどのセールスマンに出くわしてしまった。

彼は道路の塀に背を預け、スマホで誰かと連絡を取っていた。

「オヤジは掛け合いで済ませろって言っちゃたけど、俺あ姉御の為なら務めても構いませんよ」

その口調は、先ほどの胡散臭さが霞むほど粗暴であった。

より端的に表現するなら、カタギには見えなかった。

「あいつ、たぶんヤクザだ」

その姿を確認した三人は、とっさに路地に隠れた。

そして真つ青な表情で真冬が言った。

「や、ヤクザ!? そうなの!？」

「最近のヤクザって、魔術品を売り付けて儲けてるってネットニュースでやってたし、多分そうだと思う」

真冬の説明に、それを尋ねた夏芽の表情も青くなる。

「逃げよう、それで春美ちゃんたちに伝えないと」

「誰に、伝えるだつて？」

千秋が春美たちに連絡を取ろうと判断しようとしたが、遅かった。

さっきのセールスマンが、いつの間にか三人の背後に居たのである。

「アニキ、さっき言ったガキども、やっぱり目標の仲間っぽいっすわ。」

悪いんですけど、話聞くんでも車回してもらえませんか？」

男は、スマホを肩に押し付け通話したまま、カバンから呪符を取り出した。

その効力が発揮され、夏芽と千秋はすくと眠るように崩れ落ちた。

ただ真冬だけは、普段身に着けている護符のお蔭か、強烈な吐き気や頭痛に襲われていた。

「ほう、あんたは眠らんのか。」

やっぱりあんたらにケツ持ちがいるな。悪いが、うちの事務所まで御同行してもらわ

わ」
会話が出来ないほど不調の真冬に、男は笑みを浮かべてそう言った。

§ § §

三人はその後やってきた車に連れ込まれ、一時間ほど移動して彼らの事務所に運ばれた。

「このド阿呆!!」

恐怖に震えていた真冬の懸念は、割とすぐに解消された。

彼らの事務所で一番年配の男が、三人を拉致してきた男たちをぶん殴ったのだ。

「誰がさらってこいつつた!!」

お前らいつまで昔のヤクザのつもりだ、あ”あ”!!」

「だ、だけど、オヤジ……」

「口答えすんな!!」

もう一発殴られる、セールスマンの男。

真冬はその様子を啞然と見ていた。

「お嬢ちゃんたち、うちの若いもんが悪かったな。

三人ともちゃんと帰らせるから、そう怯えんていい」

オヤジと呼ばれた厳つい年配の男は、どこか愛嬌のある笑みを浮かべそう言った。

「は、はい」

真冬は傍らに寝かされている二人の様子を見るついでに、彼らの事務所の内装を見渡す。

ペンタグラムのシンボルが描かれた垂れ幕に、蠟燭やヤギの頭蓋骨などが飾り付けられている。

ハンガーラックには黒いローブまで掛けられてる始末だ。

ヤクザの事務所というより、カルトの教団の中に居るような雰囲気だった。

「わしは軽塔つてもんだ。

少し前までは軽塔組つてヤクザもんだつたが、今は本家に上納金を納めてる以外は全うな会社や。

侘びと言つちやなんだが、何かうちの商品を持つてつても構わんからよ」

「は、はい」

真冬が軽塔の言葉に恐縮していると、彼女は信じられない物を見た。

事務所に立てかけられている全身鏡から、ローブ姿の若い女が現れ出てきたのだ。

「召喚士サモナーの姐さん!! 苦勞様です!!」

彼女が現れると組員たち、いや社員たちが膝に手を当て中腰になつて頭を下げて出迎えた。

召喚士、と呼ばれた女は三人組を一瞥すると、軽塔に視線を向けた。

「親分さん、私を靈視したという人間を連れてきたと聞いたのですけど?」

「おい、誰だそんなこと言ったのは。」

この三人はどう見ても素人だろ」

軽塔の親分が部下たちを睨みつけると、彼らは縮こまった。

「私の意志は無視されたのですか?」

事を荒立てるようなことはするなど、散々言っただけですが?」

召喚士はカタリナとはまた別のタイプの陰気な女だった。

ぼそぼそと喋るくせに、その声はハッキリと聞こえる。

丁寧な喋り方なのに、その言葉には圧力があつた。

「で、ですけど、姉御の敵かもしれないって思ったら、居ても立ってもいられなくて!!」

セールスマンをしていた若い男がそう訴えたが、彼女には通用しなかつた。

「愚か者」

ぼそり、と召喚士は呟いた。

その直後、彼女が現れた全身鏡から人間の全身ほどもある大きさの拳が飛んできて、彼を事務所の壁に叩きつけた。

真冬はその光景を絶句してやることしかできなかつた。

その鏡から飛び出た異様に長い巨大な拳と腕は、明らかに人間とは思えない禍々しい色をしていたのだ。

「ず、ずみばせん……」

「個人ではなく、結社の利益を優先させる。それがこの組織の掟。

私の敵は私が処理します。調査を頼んだだけで、なぜ無関係の人間を連れてくるのですか？」

「もうそれくらいにしておいてやってくれ」

異形の拳と壁に押し潰されそうになっている男を見かねて、軽塔はため息と共にそう言った。

それと同時に、悪魔的な腕は鏡に引っ込んだ。

「なぜ私がこうして現れ、あなたにこんなことをしているのか分かりますか？」

「へ、へ？」

彼が召喚士の意図を理解できずに、首を傾げたが。

「だ、誰だてめえら!!」

事務所の外の廊下から、社員の叫び声が聞こえた。

その直後だった。

カタリナがドアを蹴り破って、事務所に突入してきたのは。

「やはりここが、悪魔崇拝者の巣窟でしたか」

彼女はロングソードを手に、周囲を見渡しそう呟いた。

カタリナの後には黒衣の魔女が、その後ろに春美と望海が続いて事務所に入って来た。

「師匠、あの女です!! 私が見たのは!!」

そして望海が、召喚士を指差す。

それは明確な敵対行為だった。

全身鏡から、異形の腕が目にも留まらぬ速さで飛び出した。

その腕が望海を捉えようとする前に、カタリナが異様な反射神経でその前に飛び出し、ロングソードで叩き斬った。

異形の腕は虚空に霧散し、場は仕切り直しになった。

「望海!!」

「あ、すみません!!」

望海はうつかり相手を指差したことに気付いて、春美に反射的に謝った。
「失礼に失礼を重ねたのは私から謝るわ。」

これは私の弟子の不始末。この子には私から言っておく。

だからこれ以上は止めましょう」

そこで、黒衣の魔女が申し出た。

「……はあ、これ以上は取り返しのつかない殺し合いになる。」

この場所を荒らされたくないですし、一先ず停戦は受け入れましょう」
召喚士は合理的だった。

引き際と落としどころはちゃんと理解していた。

「だが、ただで引いては我が徒弟たちに顔が立たない。」

あなたは西洋の魔女とお見受けする。我が結社に商品を納品するのなら、それで手打ちにしたい。

親分さん、それでいいですね？」

「……ああ、ここで喧嘩されるよりははずつとな」

軽塔の親分も、目の前で行われた超常の交錯に呆然としながらも頷いた。

「良いでしょう。望海」

「はい、すみませんでした」

望海が招いた軽率な行動の結果は、それで幕を閉じたのだ。

§ § §

「実は私、あの元ヤクザに偽の魔術品を売り付けられたってネットで相談があつたんで

すよ」

翌日、望海はみんなにそのように事の顛末を説明した。

「そしたら連中、詐欺師どころか本物の魔術品を自分たちで生産販売している表向きは普通の会社だったわけです。

裏ではホンモノの異能者が結成したカルトで、表の活動で得た資金で魔術の研究をしているみたいなんですよ」

「あー、本物の魔術品を買ったのに、偽物だと思っちゃったんだ」

「まあ、一般人には魔法の効力なんて分からないでしょうし」

夏芽の言葉に、望海はそう答えた。

望海はとんだとぼっちりですよ、と吐き捨て反省の色はあまりなかった。

「それで、こいつはあのサモナーって呼ばれてた女を霊視しちゃたわけ。

それで逆に悪魔を差し向けられたってわけ」

「私たちは姿を見れなかったけどね」

呆れ果てている春美と違い、千秋はちよつとだけカルトの中を見れなかったことを残念そうにしていた。

「私としては、邪悪な組織ならあの場で叩き潰しても良かったのですが」

「ヤクザでカルトって、何だか変な組み合わせだよな」

「いえ、良い目の付け所だと思えますよ。

閉鎖的で秘密を守りやすく、禁忌への忌避感が薄く、力関係が物を言うのならば、カルトの温床としてヤクザと言うのは丁度いい相手です」

カタリナの説明に、なるほどなあ、と夏芽は感心したように頷いた。

「まあ、私は目の前で異能力バトル見れたし、五十万円くらいの護符とか貰っちゃったし、結果的には良かったかな」

と、真冬は何だかんだでほくほく顔だった。

控えめな性格のくせして、結構図太い真冬であった。

「それにしても、まさか三人が巻き込まれるなんてね」

「ホントだよなあ、向こうが常識的で助かったけど、今回はヤバイって思ったね」

ため息を重ねる春美とは対照的に、夏芽はにこにこしていた。

非日常を経験するとわくわくするのか、彼女はそんな調子だ。

「夏芽も少しは懲りてよ、ねえ春美ちゃん」

「そうだね」

調子のいい幼馴染に呆れる千秋だった。

「私ももつと師匠に修業を付けてもらわないと」

そして、今回のようなことはこれつきりにはないと春美は悟り、そう心の中で決め

るのだった。

筋について

がたんごとん、と休日の人気の無い鈍行列車に春美と望海は揺られていた。

今日、この二人は先日のカルトヤクザの元へ、届け物をしに行くのだ。

いつもの三人は居ない。元とは言えヤクザとの接触に、夏芽がNGを出したからである。

「ほら、うちの親、ヤクザと関わりがあると同僚から睨まれるらしいからさ」

弁護士が両親の夏芽はバツが悪そうにそう言った。

彼女は自分が元ヤクザと関わって両親に迷惑を掛けるのは嫌なようだった。実際はぼ拉致されたし、元という文字は建前である可能性も否定できない。

そんな彼女の様子に、こればかりは仕方ないと他の二人も引き下がった。

「今日は面倒事はゴメンだからね」

「私だって、少しは悪いと思ってますよ」

「少しなのかい」

次は見捨ててやろうか、と春美はそんな思考が頭に過った。

彼女はあの召喚士を霊視したことで、悪魔を喚けられたのだ。

それ自体は低級な存在だったが、相手はほぼ条件反射で望海に悪魔を送り付けた。

ハッキリ言つて、達人芸、神業の部類だった。

二人の師は言つた。荒事に慣れたかなりの手練れだと。

魔法使い同士の優劣を語るのは、アニメやラノベのキャラで最強論争するぐらい無意味なことだ。

剣と弓の達人同士が、互いの戦い始める位置で勝率が違うのと同じだ。

少なくとも、次に二人がああの召喚士と敵対することになったら、助けないと明言されていた。

それだけ、やりあうのが分の悪い相手だということだった。

「次は間違つても、指を差したりしないですよ」

「わかつてますつて!!」

あの召喚士つて女、春美さんみたいに陰キャっぽいんですけど、多分何人も殺してます。

でないと言喚魔術なんていかにも時間かかる魔法であんな反撃できるわけがない」

「ぶつとばすわよ、あんだ」

突如としてバトルマンガの敵の技解説みたいなことを言いだした望海に、春美は睨み

つけた。

「私が、師匠になんて言われたか忘れたわけじゃないでしょ」

「……………」

望海は黙り込んだ。

がたんごとん、と鈍行列車は目的地へと向かって行く。

§ § §

「お二人とも、ようこそおいでくださいました。

こちらの車にどうぞ」

二人が駅に着くと、出口にはこの間のスーツ姿のセールスマンが待っていた。

そのまま二人は案内されるまま車に乗ると、カルトヤクザの事務所へ移動した。

そして中に入ると、応接室へと通された。

「確かに」

二人が運んできた物を確認し、召喚士は頷いた。

「お嬢、これは何の薬なんだ？」

同席していた軽塔が彼女の手元を覗き込む。

それはガラス瓶に入った、得体のしれない液体だった。
「私も実在するとは思っていませんでした。」

これは薬物依存などによる禁断症状を緩和したり、事実上打ち消す秘薬ですよ。
私が前に居た結社にもまことしやかに囁かれた、文献にも残らない噂に過ぎませんでした。
したが

「おいおい、マジかよ」

魔術品の生産販売なんてしている軽塔も、そんな荒唐無稽な薬の存在にあんぐりと口を開けた。

「そんな奇跡みたいな薬があるわけないじゃない。」

ただ、狙って症状が感じなくなるだけよ」

「なるほど。親分さん、これをセイジに」

実感のこもった春美の言葉に、召喚士はその秘薬を横に座る軽塔に差し出した。

「え、良いのか、お嬢？」

「あの魔女の実力を確かめるための品物です。」

「これ売り物には出来ないでしょうし」

「すげー薬だと思っただがなあ」

薬物に手を出した売人を何人も知っている彼は、大事そうにそれを懐にしまった。

「じゃあ、さっそく商談と行こう。

うちの会社は前にも言ったが、魔術品の生産販売をしている。

と言つても、社員は十人にも満たない人数で厚利小売でやってる。

製品の生産もうち社員でやってるんだが需要のあるうちにもっと利益を得たい。

魔術品を欲しがる金持ちが腐るほどいるからな」

軽塔の言葉に、二人は頷く。

昨今の日本でも、地方の無名のお土産が魔術的効果の見込みがあるとされると噂されるだけで翌日には完売していたりしたとニュースに何度もなっているほどだ。

「それで今回、外部委託しようかって考えたわけだ。

うちはホンモノの魔術品しか取り扱わないからな。外から仕入れるツテがなかった。

精々、材料をよそから買うくらいだ」

「まあそうでしょうね」

「お互い、些細な行き違いがあつたが、俺はこれを良縁だと思つている。

お嬢は魔術品の生産は決して専門じゃないからな、教えを乞うている社員たちは言わずもがなだ。

商品がホンモノだと言つても、質はあんまり良くないらしい」

それは二人も思ったことだった。

二人は以前ここに来た時にこの会社の商品を見たが、召喚士が手掛けただろう数百万の商品と比べて、社員たちが作ったと思われる護符の出来は素人に毛が生えた程度だった。

春美でも自分で作った方がまだマシだといえるレベルだ。

「私は、ただ研究に没頭したい」

深いため息と共に、召喚士が言った。

「まあ、お嬢は常日頃からこの通りでな。

この会社の商品はお嬢の研究の副産物などで利益を得ているわけだが。

開発者担当のお嬢が製品の生産をしてはそれが滞る。

その為に、社員たちのスキルアップが急務だったが、まだまだ時間が掛かるらしい」

「私も、師匠に独り立ちを許されるのは十年先だと言われました」

「つまり職人技だつてことだ。

だから、商品の発注先ができるかもしれないってことは、俺たちにとっては福音なんだわ」

軽塔の説明はそれが全てだった。

「師匠から、その話をされたら受けても良いと言われました」

「おお、本当か？」

「ただし、商品を製作するのは私だと」

その春美の言葉に、召喚士だけでなく軽塔も目を細めた。

「なるほど、弟子に経験を積ませたいわけか。」

いい師匠だな。だが、こつちも遊びじゃないんだ。わかるよな？」

あくまで穏やかに話をしていた軽塔に、初めて元ヤクザらしい剣呑さが言葉に混じった。

「師匠も、今回の出会いを良縁だと捉えています。」

ですので、長い目で見ていただければ、と」

「その結果、商機を逸したらどうする？」

「もしそう思うのなら、そつちに商才は無いんじゃないですか？」

緊張して言葉が固くなっている春美をフォローするように、望海が言った。

「年々、呪殺事件が多くなっています。」

誰しも、頭の中には呪われる心当たりがあるものです。

防犯対策と同じで、需要が無くなるなんてこともありえない。

仮に競合他社が出来ても、シェアを奪い合うほど質の高い魔術品を生産できるとは思えませんか」

そう、高度な魔術品は当然だが作成に時間が掛かる。

召喚士が最も嫌がっているのがそれであるくらいだ。

異能者が協力する企業が魔術品を工場で生産しても、それが日本中に行き渡るのはま
ず不可能に近い。

魔術とは大量生産大量消費と相性が悪いから、廃れて行ったのだから。

「お互いに譲り合って、落としどころを見定めるのが賢いと思いますよ」

「……そうだな」

フツと、軽塔は笑って頷いた。

交渉が成立したところで、春美は改めて軽塔と握手を交わしたのだった。

§ § §

契約をしたことで、二人は晴れてこの会社の取引相手となった。

「あ、二人とも、タピオカミルクティー飲む？」

ちよつとしたトラブルで召喚士と軽塔が応接間から出ている間、二人を待たせている間に彼女たちを出迎えたセールスマンの若い男が対応した。

「女子高生ってそう言うの好きでしょ？」

まさか元ヤクザの事務所でそんなものが出てくるとは思わなかった二人だった。

「これ、ミルクティー甘すぎ……」

「こっちはタピオカに芯が残ってますよ」

クオリティ低ッ、と二人は思った。

「それ、前のシノギだったんだよね。」

うちも代紋掲げている時はそんな感じで迷走してたんだわ」

セールスマンの男、ケンジは笑ってそう言った。

「在庫まだまだ残ってるから、どんどんおかわりしていいよ」

「いえ、遠慮しておきます」

「こんなんで良く商売しようと思ったな、と内心口に出さずに望海はやんわり断った。

「ケンジさんでしたっけ？」

「召喚士さんとはいったいどんな馴れ初めで一緒に商売なんてしてるんですか？」

この際だから、話題も無いことだし春美は尋ねてみた。

「え？ 聞いちやう？ それ聞いちやう？」

すると、この若者はにやにやと嬉しそうに語りだした。

ちよろいな、と二人は思った。

軽塔組は組長の方針で、それなりに硬派なヤクザだった。

みかじめ料と借金の取り立てと言ったシノギで、彼らは最近まで食べていた。ところが、暴対法の締め付けは年々厳しくなり、借金の取り立てを請け負っていた別の組の運営していた闇金が摘発された。

元々細々とした小規模な三次団体に過ぎない軽塔組は即座に困窮しはじめた。ヤクザがお金を持っていると言うのは、バブル時代の幻想に過ぎない。

操業のコストが低いタピオカミルクティーで稼いでいたりもしたが、それでも上への上納金を支払うので精一杯だった。

ブームはいずれ過ぎ去る。利率の高いシノギだったが、客は商品の質を高める努力などしないことにすぐに気付く。

彼らが次に目を付けたシノギは、魔術品の売買だった。

今の時代、世界中で猛烈なオカルトブームだ。

需要は沢山あったが、供給は全く足りていない。

軽塔たちは親の組に依頼され、ある廃倉庫に魔術品の密輸をしている中国マフィアと取引に向かった。

「これがブツだ」

中国人の片言の日本語で、段ボールに入った中身を示した。

そこには、短冊状の紙が大量に入っていた。

「なんだ、これは」

「あ、オヤジ、俺知ってますよ。」

香港でやってる何とかって呪術の時に使う紙つすよ」

嫌な奴の名前を書いてビシバシって靴でしばくんですわ、とケンジの仲間がそう言った。

「ほう、そうなのか」

「税関もこういうのは止められない。」

空港から楽に仕入られるから、ヤクよりポロイ商売だ」

と、中国人たちはにやにやと笑ってそう言った。

軽塔はその言い草を不愉快に思いつつも、用意された金を渡そうとした時だった。

「こんなプリンターで大量生産したゴミにそんな大金を払うのですか？」

その女が、現れたのは。

「だ、誰だお前!!」

中国人も、軽塔たちも、咄嗟に武器を抜いてブツの前で中身を漁っているその女にその銃口を向けた。

「外国の魔術品の取引があると聞いたので来ました。」

ですが、ただの見よう見まねで、実際に打小人に使われているものではない。

相手の出方次第ですが、こんなものを売っても詐欺だといしか言われませんよ」

「ふざけるな!! 勝手なこと言うんじゃない!!」

中国マフィアたちは彼女の言葉がよほど耳障りだったのか、そう怒鳴りながら即座に発砲した。

「は?」

その時ケンジは目を見開いた。

たしかに、その女の眉間に銃弾は命中した筈だった。

カンツ、と鉄にでも当たったかのように銃弾が弾かれるという目を疑うような光景が真実だとすれば、だ。

中国人たちの銃撃はそれだけでは終わらない。

後ろに控えていた面々も、容赦なく銃弾の雨を浴びせかけた。

軽塔たちは流れ弾を恐れてその場を退避したが、その女は倒れることなく立ち尽くしたままだった。

やがて、中国人たちの銃弾が尽きた。

「私は帰ります。時間の無駄でした」

ぼそぼそとそう言って、その黒いローブの女は踵を返した。

「ば、化け物が!!」

「止めろ、そいつは道士だ!!」

中国マフィアたちが、中国語でそんな会話を交わしながら、一人がナイフを持って彼女に斬りかかる。

殺気に反応し、その女が振り返る。

地獄のような冷たい視線で。

「はあ?」

それは、理解を超えた現象だった。

女のローブの中から、明らかに質量を無視した巨大な腕が彼女を斬りかかってきた男を驚掴みにしていたのだ。

それは禍々しい、悪魔の腕としか言いようのないものだった。

「私は穩便に済ませろといったはずですが?」

こつこつ、とまた別の足音がした。

そつちを見ると、ローブの女と全く同じ顔が歩いてくるではないか。

その直後、初めに現れたローブの女が弾け飛んだ。

まるで皮を破くように、全長数メートルの巨体に膨れ上がる。人間とは思えない動物の顔、捻じれた一對の角、漆黒の両翼。

それは人間が想像する、悪魔そのものだった。

悪魔は恭しく膝を突き、後から現れたその女に頭を下げた。

「それ、捨てなさい」

女は、悪魔が手に持っているモノを、犬が汚いボールでも拾ってきた光景を見るかのようにそう言った。

その言葉に、悪魔は握っていた中国人を彼らに投げ返した。

ボーリングのピンかなにかのように、恐怖に慄いていた中国人たちがぶっ飛ばされた。

そして女が指を鳴らすと、悪魔はその巨体が嘘のように霧の如く消え去ってしまった。

「おい、待てよ」

踵を返し、帰ろうとする彼女に、軽塔は声を掛けた。

彼の子分たちが必死に目で、そのヤバイ奴に関わるのは止めると訴えているのに。

「あんた、こっちの取引を滅茶苦茶にしておいて、侘びの一つも無いのかよ」

「あなた達は偽物を掴ませられようとしていたのに？」

「それは後の問題だ。今重要なのは、あなたに俺たちのメンツを潰されたってことだ」
軽塔は生粋のヤクザだった。

目の前に姿を現した悪魔よりも、人間の方がよほど恐ろしいことをよく知っていたのである。

「メンツに命を掛けるのですか？」

「それが極道だ。ここであんたを返しちや、筋が通らねえ」

ここで怖気づいて逃げ帰れば、彼の人生は弱い者イジメの下衆と同じになる。

それだけは、命を置いてでも認められないことだった。

「……面白い、あなたという人間に興味が湧きました。」

あなたの言う筋とやらを、聞かせてもらいましょう」

「あんた、名前は？」

「召喚士サモナーと、そう名乗っています」

それが召喚士と、軽塔組の出会いだった。

「それから紆余曲折はあったんすけどね」

「まあ、力のある人間に心酔するのはわかりますよ」

ケンジたち組員は、親である軽塔と同等に召喚士を扱っていた。

そんな出会い方をして、よくそうなれたものだど、望海は思ったが。

「結局、組は解散して真面目に働いているんなら良かったんじゃないんですか？」

「そう簡単に割り切れるもんじゃないんですけどね」

春美の言葉に、ケンジは少し寂しげに笑った。

そのすぐ後、軽塔は書類を持ってきて、書面での契約を済ませ、春美たちは事務所から家に帰るのだった。

契約について

現在から数年前の話である。

日本でもそれなりの規模の指定暴力団の三次団体である軽塔組は、たまたま取引現場に現れた召喚士と名乗る女を事務所へと連れてきていた。

「オヤジ、あいつはヤバイって!!」

あの化け物みただろ!」

ケンジは必死になって、応接室で待たせている召喚士を横目で見ながら軽塔の親分に訴えた。

「だからって、黙って帰すのか?」

馬鹿言え、仮にメンツを抜きにしても、あの女は俺の親父の用意した取引を台無しにしてくれたんだぞ?」

馬鹿正直に取引は失敗しました、なんて伝えたら、俺は指を詰める羽目になる」

軽塔は生粋のヤクザだ。

薬物や詐欺と言った弱者を狙ったシノギはしないし、それを子分にもさせない男だった。

だが、自分の組を立ち上げることが許されるだけあって、計算高い男でもあった。

「じゃあ、あの女を突きだすんですか？」

「あんな光景を見なけりゃ、俺はそうしただらうな」

「それじゃあ、どうするんです？」

ケンジたち組員は、さすがのような目つきで軽塔を見やる。

「それを、これから考えるんだろ」

「オヤジい」

子分たちは彼が何も考えていないことを悟ると、肩を落とした。

「それで、話はまとまりましたか？」

その陰気な女は、タピオカミルクティーの底に溜まったタピオカをちびちび食べながら応接室に入って来た面々に言った。

「なあ、あんたって異能者なんだろ？」

「世間一般ではそう言うそうですね」

「なら、魔術品を調達できる伝手とかないのか？」

「個人レベルで生活費用を稼ぐ為に魔術品を作って売る同業者は居るでしょうが、少なくとも私は知りません」

「じゃあ、あんたはどうなんだ？」

あんたなら、何らかの魔術品を作れるんじゃないのか？」

そう言った問答の末に、召喚士は答えた。

「まあ、それなりに、と言うレベルですが」

「じゃあ、今回の取引の穴埋めに何か作ってくれないか？」

じゃないと俺は、上にケジメとして指詰めさせられる」

「正直に言うなら、面倒です」

割と切実な軽塔の頼みを、しかし召喚士は億劫そうに返した。

このヤクザ達からすればそれは舐めた答えだったが、そんな思考すら浮かばないほど目の前の存在を恐れても居た。

この女は、別にこの事務所から出ようと思えばいっただって無傷で出られるのだから。

「その代わりと言っては何ですが、私から提案があります」

「……なんだ？」

「私があなた達の取引現場に現れた理由は二つあります。

一つは、今出回っている魔術品の質を確かめたかったから」

「もう一つは？」

「私に研究費用を供給する仕組みを作る為の人材確保、と言うべきでしょうか」

「はあ？」

その意味不明の理由に、ケンジも首を傾げた。

「私は最近、前世の記憶を取り戻したばかりなのです。

それまで私は普通のどこにでもいる、オカルトに興味があるだけの女でした。

私はこの探究心の赴くままに、魔術の深淵を極めたい。

その為に、私に賛同し、共に魔術の腕を磨く人員や資金源が必要なのです」

「それで、俺たちに目を付けたと言いたいのか？」

「まだ、見極めの段階です。

見たところお金は持っているなさそうですし、正直期待外れです」

召喚士は事務所を見渡す。

ヤクザにありがちな悪趣味な調度品など見られないのを見て、彼女は辛辣な言葉を吐

いた。

「ですが、同業者の人員を集めるのも面倒です。

我々の同業者と言うのはどいつもこいつも個人主義な連中ばかり。

私の前世もそれで苦労したようです。

なので、私からの提案と言うのが、——あなた達が私の徒弟にならないかと言う話で

す」

それは軽塔達にとって予想外の言葉だった。

「徒弟つて、弟子つてことか？」

「はい。そうすればあなた達は自分で魔術品を作れるでしょう。

多少魔力の籠った簡単な道具でも、立派なホンモノの魔術品です。それを売れば儲けることも可能でしょう」

「それは、確かに……」

それは一見、継続的に商品を生み出せる非常に魅力的な提案だった。

だが忘れてはいけない。彼らはヤクザなのだ。

「あんな、俺たちはヤクザものだ。

大学は出たが就職出来ずにここに来たもんや中卒のもんも居る。

つまり、頭の方は期待できない者ばかりなんだぜ？」

軽塔の組で、金勘定が出来るのは組長と若頭だけで、それ以外は粗暴が服を着たような連中ばかりだった。

高卒の資格があっても、高校生活は不良だった者ばかりなのである。

「それに関しては、どうにでもなります。

私は組織の運営や人員の教育のやり方など心得ている。

勿論、やる気さえあればの話ですが」

「それは、本当なのか？」

軽塔は真剣に尋ねた。

召喚士は陰気な顔にただ薄笑いを浮かべた。

「お、オヤジ!! 俺はやりたいです!!」

「ケンジ」

「おいあんた、いや、召喚士の姉御!!」

俺を弟子にしてくれ!! あんたの言うこと、何でも聞くからよ!!」

「まだ、あなたの親分さんは何も決めてませんよ」

自分に土下座までするケンジを横目で見ながら、薄く笑う召喚士はそう言った。

「私の徒弟となる人間は、基本的に私の意志に従う契約をしてもらいます」

召喚士は、指を鳴らす。

すると、彼女の背後に異形の巨体を持つ悪魔が現れた。

「彼はその契約を見届ける証人です。」

契約を破れば、彼が魂と命を奪うでしょう」

それはまさしく、悪魔の契約だった。

「つまり、なんだ。あんたは俺の組を乗っ取りたいわけか？」

悪魔の出現に恐れ戦く組員たちとは違い、組長の軽塔は召喚士を見据えていた。

「ふざけんじゃねえ!!」

こいつらは俺の子も同然だ!! 悪魔にくれてやるもんなんぞ、一つも無え!!」

「あなたは少し勘違いしている」

激怒して啖呵を切る軽塔に、召喚士はこう答えた。

「契約とは決して一方的な物ではない。

私が契約を破れば、私の魂と命を彼は奪うでしょう。私は彼を使役しているが、決して心許せる味方などではないのですから。

契約の内容に寄りますが、私があなた達に指導すると言った条文などを破れば、そのようになるでしょう」

「……………」

「どうしますか?」

召喚士は、軽塔に尋ねた。

「わかった。契約の内容を詰めよう」

そして彼は、腹を決めた。

§ § §

結局、軽塔以外の全員が召喚士と契約した。

彼もあくまで自分たち側の証人として立ち会う形にしたのだ。

そして軽塔組は、彼を親とした組織と召喚士をトップに据えた魔術結社という二重構造が出来上がった。

お互いに、お互いの組織に過干渉はしない。しかし一心同体で支え合うという構図だ。

そして軽塔は、一つの更なる決心をした。

「軽塔、取引が失敗したってどういうことだ？」

彼は自分の親に当たる本家直系の組に呼び出された。

「へい、申し訳ありません。ちよつとしたトラブルがありやして」

「ふざけんな、何がトラブルだ。俺が何も知らないとでも思つてやがるのか!？」

頭を下げる軽塔に、ヤクザ本家の幹部は怒鳴り散らした。

「取引相手から苦情があつた。」

俺たちが取引にかこつけて刺客を雇つたんじゃないかってな!!

どうすんだ、お前。このままじゃ向こうと戦争になるぞ」

「申し訳ございませんでした、オヤジ」

「そしてその刺客は、お前の組の客として迎えたらしいじゃないか。」

お前、俺の顔に泥を塗るのも大概にしろよ!!」

状況からして、軽塔の親が激怒するのは当然であった。

「指詰めるだけで済むと思うなよ。この恩知らずが!!」

おい、お前ら、こいつに躰してやれ」

ヤクザの幹部がそう言うと、彼の事務所に住たヤクザ達は立ち上がる。

「躰が終わったら、コンクリに詰めて海に沈めろ」

その非情な言葉に、頭を下げるままの軽塔の額に汗が浮かんで床に落ちた。

その時だった、その場に居ないはずの召喚士のため息が生じたのは。

「親分さん、話が違います」

事務所のソファアームにいつの間にか座っていた召喚士が、面倒そうにそう言った。

「誰だ、お前!! 一つのまに入ってきやがった!!」

「お、オヤジ、彼女は俺のツレで、例の客です」

「だったらこいつも一緒に畳んじまえ」

幹部は軽塔の言葉に耳を貸す様子も無く、そう言い放った。

「親分の親分さん。」

今日は親分さんからお話があつて来たんですよ」

「はあ? 何言つてんだ、お前」

「オヤジ!! すまねえ、今日は折り入って頼みが有ったんだ。筋が通らねえ事だとは分かつてる。だが」

「じやかましい!! お前、上納金もろくに払ってねえくせに、よくも俺に物申せたな!! いいからお前ら、やつちまえ!!」

そして、彼は死刑宣告をした。

自分自身の。

ばちん、と召喚士が指を鳴らした。

「親分さん、あなたの親は話せばわかってくれるんじゃないですか」

「す、すまねえ」

「もういいですよ。私もいい加減面倒だったんで」

事務所は、血まみれになっていた。

「ひッ、やめろ、たすけッ」

ヤクザの幹部は悲鳴を上げて、腕をもがれた。

彼を捻り潰した悪魔は、まるで真つ黒な球体人形のような姿をしていた。

その悪魔は、のっぺらぼうのような顔に割けたような口を開いて、いましがたもぎ

取ったヤクザ幹部の腕をペロりと食べた。

腕だけでない、もう片腕、右足、左足ともぎ取っては捕食していく。

その悪魔が人間の一部を平らげること、捕食した体の一部が人間の物へと置き換わっていった。

そして既に息絶えた幹部の頭を果実のようにもぎ取って、ペロリと呑みこんだ。

その悪魔のつべらぼうのような顔が、ヤクザ幹部の顔へと置き換わった。

悪夢のような、おぞましい光景だった。

「いやあ、さつきはすまねえな!!」

それで、軽塔。話ってなんだ？」

のつべらぼうの悪魔は、胴体进行处理するとまるで何事も無かったかのようにそう振る舞った。

事務所にいた他のヤクザたちも、何事も無かったかのようにいつもの日常に戻った。

自分たちの血の跡を掃除するために。

「親分さん、自分の組の代紋を下したいそうです」

「そうかそうか、そんなことか。良いぞ軽塔。好きにしな。」

だがこれまで通り、上納金はちゃんと払えよ。あとは全部上手くやって置く」
「任せました」

ヤクザの幹部となった悪魔は、にこやかに召喚士に頷いてみせた。
「お、オヤジ……」

「どうした軽塔。化け物でも見たような目をしやがって。」

俺が十五年前にお前を拾ってやったのを、忘れたのか？」

ヤクザの幹部は、軽塔も見たことの無いような笑みを浮かべて、そう言ったのだった。

「うッ、おええええ!!」

幹部の事務所を出てすぐ、軽塔は路地裏に走って嘔吐した。

あの事務所は、もはや人間が正気で居られる場所ではなかった。

「穏便に済んでよかったですね」

「ふざけんなッ、何が穏便だ!! 全員殺しやがって!!」

「殺した？」

召喚士は、軽塔の叫びに小首を傾げた。

「彼らは全員記憶や性格を引き継いでいますよ。」

自意識の希薄な、ドツペルゲンガーという悪魔の稀有な性質です。

彼らが完全に記憶などが以前の自分と同じなら、その後にいっただんな違いがある

と言うんですか？」

「違うに決まってるだろう!!」

無機質な召喚士の言葉に、軽塔は感情的にそう叫んだ。

「あのオヤジは、俺が直接盃を交わした相手なのか!？」

あの化け物が、俺が若い頃に面倒見てくれたつてのかよ!!

記憶だけ同じの偽物じゃねえか!! そんなの、誰が認めるつてんだ!!」

激情のままにそう叫ぶ軽塔を、召喚士は黙って見つめていた。

「はあ、はあ、……すまねえ、取り乱しちゃった。

何はどうあれ、あんたは命の恩人なのにな」

「いえ、その感情は理解できません」

軽塔も、親の事務所に入ったただで済むとは思っていなかった。

それでも話ぐらいい聞いてくれるものだと思っていた。

その後、ケジメを付けさせられるのなら、黙って受け入れるつもりだった。

そして今、親の成り代わりを呑みこむ羽目になった。

「すまねえな、お前たち。

代紋を下すことに、納得いかねえ奴もいるだろう」

ヤクザにとって、代紋は象徴だった。

それを下すことは、単にカタギになることを意味しないのだ。
「だが、今の時代、ヤクザもんは肩身が狭い。」

お前たちを食わせる仕事も、もう殆ど残っちゃいない。
組の金も、来月の上納金を払えるかどうかだ。

俺はお前たちに、まっとうな道を用意できるのならそうしたかった」
それは、軽塔としても苦慮の決断だった。

しかし彼は組の看板よりも、組員たちの方が大事だったのだ。

「いいえ、俺たちは代紋じゃなく、オヤジについて来てたんです!!」

「俺たちがヤクザじゃなくなっても、オヤジの為なら命張れますから!!」

だが、彼を慕う組員たちは涙ながらにそれに頷いた。

「オヤジがそれでいいなら、俺も従います」

ケンジも胸に言いたいことをしまいながら、彼の決定に了承した。

「ありがとう、お前ら」

そうして、軽塔組は解散した。

そしてカタギの会社として、再出発するのだった。

§ § §

「姉御、やっぱり俺に魔術なんて無理っすよ」

召喚士の指導は、元軽塔組のインテリである大学出の者でも難しい代物だった。

「じゃあ、魂を捨てる？」

「あ、いえ、それは」

「安心しなさい」

召喚士は、己の徒弟に優しく声を掛けた。

「お前は私の指導によって、人を超える事が出来る。

神に祈って救われるのではなく、お前の努力によって人の枠を自ら超越するのだ」

その言葉に、元ヤクザたちの目の色が変わる。

召喚士は人心掌握に長けていた。

手慣れている、と言った方がいいか。

そうして、元軽塔組は表の顔で全うな会社を運営しながら、裏では秘密結社のように

鉄の結束が出来上がりつつあった。

悪魔崇拜とは、一概に一般的な邪教のような邪悪な存在を崇めたりするわけではな

い。

ある種の思想団体に近く、そもそも何かを崇めることさえない場合もある。

そして召喚士が齎したものは、ある種の物質主義的なものだった。

それは奇しくも、元ヤクザの彼らにはとても馴染んでいた。

そう、彼らはもう既に、立派なカルトの一団だった。

そしてある時、事件は起こった。

それは雨の日だった。

元ヤクザの社員たちは、雨合羽を着て近くの河原へとやってきていた。

そこには、人だかりができていて、警察のパトカーも幾つも土手の上に留まっていた。

「間違いねえ、タツだ」

警察の許可を得て、河原に引っかかっていたという死体の顔を確認した軽塔はそう言った。

彼は数日前から行方不明で、長時間の暴行の末に殺害されていたという。

軽塔は彼が殺された理由を上手くはぐらかして対応したが、死体を見下ろす組員たちや召喚士の表情は不気味なほど静かだった。

「やったのは多分、あの時の中国マフィアの連中だろう」

「でしようね」

彼らは事務所に戻ると、下手人の分析が始まった。

「やられて何もなかったじゃ、向こうにも面子があるだろうしな」

軽塔はため息を吐いた。彼の親も言っていた。これは戦争になる、と。

それがいよいよ、表面化し始めたのだ。

「オヤジ、姉御、報復なら俺が行きやす!!」

そう名乗りを上げたのは、ケンジだった。

「ふざけん!! 俺たちはもうヤクザじゃねえ。

それにお前たちの掟だろう、魔術で世間様に迷惑を掛けないと」

「あの中国人の連中が、その世間様に括られるってんですか!!」

「落ち着きなさい」

二人のやり取りがヒートアップする前に、召喚士がそう言った。

「あなた達はこれまで通り、修練を積みなさい」

「ですけど、姉御お」

「ケンジ」

名前を呼ばれ、ケンジは押し黙った。

「彼らは、私の徒弟を手を掛けた。」

「これは私への明確な敵対行為だ」

それを聞いて、ケンジは気付いた。いや、他の全員も気付いた。「私の築く物を邪魔したり、壊す者は敵だ。」

徹底的に、排除しないとイケません。彼の命は、一万人の敵の命に匹敵するのですから」

無表情に見えるこの女が、一番はらわたが煮えくり返っていると言うことに。

「悪魔の宴を始めましょう」

その言葉が、惨劇の始まりだった。

「姉御、お疲れ様です」

それから一週間ほどして、召喚士は事務所に戻ってきた。

事務所の前で他の社員たちが列を成して頭を下げ出迎える中、ケンジは彼女に新聞を差し出した。

召喚士はその紙面を確認すると、彼に新聞を返した。

その新聞の大開の見出しには、こう書かれていた。

『怪奇!?! 中国マフィアたちが石像化か?!』

その新聞には、中国マフィアたちの拠点には百体以上の石像が乱立していたという報道がされていた。

警察が調べたところ、その石像の中身は半分近くが生身で彼らは「生きて」いたとのことだった。

恐ろしいことに、意識さえも残っている様子だったという。

そして、その事件は中国本土でも起こり紙面を賑わし、後に世界的ニュースとなる。

世界各国が震撼し、魔術的脅威に対し国防を本格的に意識することになる転換期となる事件となったのだ。

「お帰り、お嬢」

「ええ、ただいま」

軽塔は戻ってきた召喚士に、そう言って出迎えたのだった。

財産について

高校が再開されてからというもの、学校でのカタリナの立ち位置は特殊だった。

彼女は呪いの中心地で、それを止めたという光景を何人も見ている。

聖職者だろうが、異能者は奇異の対象だった。

日本は八百万の国だろうと、日本人にとってキリスト教徒はマイナーで敷居の高い宗教だった。

故にお堅い典型的なキリスト教徒のカタリナは普通に敬遠されていた。

隠し持った異能を披露し、誰かを助けて称賛されるなんて大抵の場合で無いから、創作でそう言った主人公が現れるのである。

とは言え、彼女のイメージが逆に作用したケースもあった。

学校側の呪術対策として、カタリナの保護者の神父を頼るといふ建前で彼女が祝福した物品が学校に配置されたりもした。

が、翌日にそれが盗まれる事態が起こった。

今のオカルトブームを鑑みれば当然の結末だったが、その盗んだ相手と言うのが即日

自転車に轢かれ、家に雷が落ちて半焼。

次の日には謝罪文と共に犯人の入院する病院から盗品が返却されたという一連の事件が起こった。

犯人の自業自得だったが、あまりにも不憫だったので学校側は事を荒立てなかった。そして学校関係者や生徒たちは悟ったのである。

——ああ、この人魔女さん同様関わったらヤバイ、と。

「で、実際のところどうなの？ 犯人呪ったりしたの？」

そして当人に直接そんなことを尋ねるバカがいた。

夏芽だった。

「誤解です」

当然、カタリナは即答した。

「私はこの学校を聖域に指定する道具を設置しました。

邪気や悪霊などを退ける代物です。

ですがそれは、正しい場所に設置されて初めて効果が発揮されるのです。

そして盗人には天罰が下っただけでしょ？」

「いやいや、天罰って言うより、正しく効果が発揮しなかった道具が逆に悪い物呼び寄

せたんでしょ。

魔術の世界には、正しい使い方をしないと効果が逆転するってことは珍しくない」

天罰の一言で済ませようとしているカタリナに、春美がツッコんだ。

「それに関しては、私の埒外でした。」

まさか学校の備品を盗む輩が居ようとは」

「まあ、私も馬鹿だとは思うよ」

そつとため息を漏らすカタリナに、千秋は同情を示した。

「素人の浅はかな考えと言うのは、時に私たちを驚かせるものです」

「えッ、じゃあ、どういうことに気を付けなければならないの？」

護符とか自作している真冬は怖くなったのか、そのように尋ねた。

「触らない、近づかない、壊さない。それを守れば、設置型の魔術品から被害を受ける可

能性は低くなるでしょう。」

物によつては、見ただけでダメなこともありますよ」

「見るだけでもダメって、どうすればいいんだよ」

「そんなものが置かれている場所は、大抵一般人が入れる場所に有りませんから気にす

る必要は無いでしょう」

「ああ、それもそうか」

そんな危険な物が衆目のある場所に置くはずがない、という理由に夏芽は納得した。

「ところで、この学校は部活動に入る必要があると聞きました」

「あー、そう言えばそうだった」

「あの魔女はどここの部活ですか？」

「確か、美術部だったよね？」

夏芽は他の三人が閉口しているのを気にせずそう言った。

「えーと、カタリナさんは合唱部が良いと思うなー」

「うんうん、私もそう思う」

千秋と真冬は視線を逸らしながらそんな風に話題を逸らした。

「……行ってみれば？」

「ここ最近はずっと、二学期の文化祭に出す絵を書いているから」

しかし友人たちの反応とは別に、春美はカタリナにそう口にした。

「まさか校内で二人きりになったところで、争いが始まるわけでもないでしょ？」

そう言っつて、春美はカレーパンにかぶりつく。

能天気そうな夏芽以外の二人は、表情を変えないカタリナを不安げに見ていた。

§ § §

機を逸した、とカタリナは思っていた。

彼女の当校初日でもそうであったが、この学校は何かしら不運の条件が揃っているのかもしれない。

尤も、その不幸の原因は間違いないく、あの黒衣の魔女だとカタリナは確信していた。

彼女はこの町の地脈を掌握し、何かしらの恩恵を得ている。

エントロピーの法則がそうであるように、その力の制御は一見静かに見えても、徐々に歪みが生じるのだ。

それは地脈から溢れた力のお零れを得ようとする怪異や悪霊の類だったりする。

ただ逆に活性化した地脈の力は住人にも富や活力を齎す側面もある。

その渦の中心に、彼女がいると言う話である。全て彼女の所為と言うのは間違いでもある。

カタリナには、地脈を利用し大規模な魔術の行使が行われるわけでもなく、静寂を保っているのが不気味に思えた。

それを問い詰める機会を逸し、カルトヤクザの件では共闘することにもなった。

そしてずるずると今日まで掛かった。

カタリナは部活の見学という建前で、各部活を見て回るようになったのである。

放課後、彼女は美術室の扉を開けた。

美術室は各々の部員たちが思い思いの作品を手掛けていた。

その隅で、彼女は絵を描いていた。

「この絵は……」

彼女の描く絵を見て、カタリナは言葉を失った。

そこに描かれている火刑に処されたジャンヌダルクの表情は、憎悪に満ち溢れているように彼女は感じた。

「あなたは、あの時の彼女がこんな表情をしているように見えたのかッ」

怒鳴ったつもりはなかった。

だが、その語気の強さは集中している部員たちの視線を集めるには十分だった。

ゆっくりと、黒いケープの魔女は筆を下した。

「私も、こんな表情を描くつもりじゃなかったわ」

彼女は振り返ることなく、キャンバスに向かったままそう言葉を漏らした。

「芸術には、自分の心が表れるというのは本当ね」

完成間近のその絵を見下ろし、彼女は独白した。

「思い出せなかったのよ、あの時彼女がどんな表情をしていたのか」

「……」

カタリナは何も言えなかった。

人間が産まれた時からすべての記憶を保持していないのと同じように、転生者である二人にも前世の記憶にある程度の欠落が生じていた。

「忘却は、人間に与えられた神の最大の機能である、と誰かが言ったわ。

では輪廻を経て、前世を忘れられなかった人間と言うのは産まれながらの欠陥品なのではないのかしら」

それは皮肉と言うより、自虐が入った言葉だった。

「戯言を。神は神自身も認める善人にその全てを奪い去る試練を課すこともある。

そしてその信仰が確かな物なら、失った物の二倍の財産を与えて下さるのだ」

「そう。ではあなたは二倍の財産を得られなかったのね」

「私は、この二度目の生こそが、神に与えられた財産だと思っている」

そう言ってから、カタリナはため息を吐いた。

「そう思わないと、やっていられない」

「ふッ」

彼女のその本音に黒衣の魔女は小さく嘖き出した。

「そのくだらない寓話について、私は一つの教訓を今悟ったわ」

「言ってみなさい」

「たとえ神でも、失ったという事実は消せないと言うことよ」

「……そうかもしれないね」

何一つ得ることの無い、不毛な問答だった。

唯一つ、言えることがあるとすれば。

「……」

「……」

お互いに、相手にどう接すれば良いのか分からないということであった。

§ §

「ところで」

四人組がいつもたむろしているファーストフード店に、なぜか二人はやってきていた。

「あの召喚士と名乗ってた女に覚えは？」

「私の記憶にはありません」

結局二人の共通の話題は魔術関連だけだった。

「悪魔崇拜は昔からありましたから、秘密結社なら薔薇十字団もどきを含めたら数える

のも面倒なくらい潰しました。

その中にあれほどの実力者はいませんでした」

カタリナはアイスマルクテイーをストローでかき混ぜ、じやらじやらと氷が渦を巻く様子を見下ろしながら言った。

「悪魔崇拝者は、魔女同様に最優先の抹殺対象でした。

連中は悪魔と取引して高度な魔術の知識を会得する上に、周囲に甚大な被害を齎す可能性も高い。

そして術者に制御されていない悪魔ほど恐ろしいものはない」

「そう、私にも心当たりはないわね。

あなたには感謝しているわ。あの女はやると決めたら倫理や道徳なんて簡単に捨てられるでしょうね。

私と春美たちだけだったら、五分五分の確率で実力行使が待っていたでしょう」

そうなったら泥沼の殺し合いが始まるところだった。

余りにも不毛な、何も得る物の無い戦いが。

「これは私の印象ですが、あの女は私たちより後の時代の人間でしょう。

望海の霊視に対して即応する召喚術なんて私の常識ではあり得ない」

「そうね、普通の悪魔崇拝者は悪魔との接触を最低限にするものだわ。

あんな護衛のように侍らせているなんて、私に言わせれば頭がおかしいとしか言えないわね」

勝つ負ける、という話ではなく、戦った時点でお互いに損失しか出ないと言う話だった。

それを踏まえ、召喚士は実力行使が合理的と判断すれば、相手は実行を躊躇わなかっただろうという話でもあった。

そしてそれは、自分たちも同類なのだ。

「聞きましたよ。あなたもあの学校で、何人かに手を下したそうですね」

「あなたが彼女らを治療できるのならそうしても構わないわよ。」

尤も、呪術の類じゃないからあなたにも無理だと思っただけ」

「話し合いで解決しなかったのですか？」

「無理よ。人は一度誰かを踏みに行くと、それが成功体験になって優越感を覚えるの。」

そして一つ一つ、自分の理性や倫理のタガを外していくの。

そうして、自分を肯定する状況を作り上げるのよ。あれはとつとつに、人を狩る血に飢えたケダモノだったわ」

「憐れですね」

じゃらじゃらと、ストローで飲み物をかき混ぜるのを止めて、カタリナは言う。

「結局それは、己をケダモノと同じ位置まで貶めているのと同じだ」

「弱者の立場に立ったことが無い人間は言うことが違うわね。」

私は魔女よ。墮落して、何が悪いの」

「開き直るな、それを人々は邪悪と言うのだ」

「だから、邪悪で結構だと言っているのよ。あの召喚士も、きつとあなたに同じことを言われたら私と同じように言うでしょうね」

「理解できない……」

人は正しくあろうとする生き物だと、カタリナは信じている。

それは正義とかだけでなく、倫理や秩序を保つためにも。

それが平穩に繋がるはずなのだから。

この魔女とも、今生ならほんの少しでも分かり合えると思っていたのだ。

「なぜ、再び機会を得てなお魔術に手を染めるのですか？」

少なくともこの国の人間の多くは飢えや重篤な病に怯えることなく過ごし、あなたもその一人の筈ではないのですか？」

カタリナにとって墮落と退廃に満ちたこの世界も、少しは見るべきところはある。

少なくとも、彼女たち異能者が世に現れるまで、魔術に手を染めようという人間は現在より限りなく少なかったはずなのだから。

「あなた、両親は？」

「教会で暮らしているらしいけど、偶には会うの？」

「ええ、母は週に一度ほど顔を見せてくれます」

「そうなのね。ならあなたは既に、二倍の財産を得ているわ」

「……」

「結局私は前世も今生も、人並みに親も得られなかった」

「魔女は憂いを帯びた笑みを浮かべた。」

「あなたの両親は……」

「母親は存命よ。でも父親は顔も知らないわ。」

「何なら、会ってみる？　うちの母親に」

「……わかりました」

「カタリナはそうするべきだと感じた。」

「なぜ、彼女がまた魔女へとなったのかを、知るために。」

「魔女の家は、有名なフリーホラーゲームに出てくるような森の奥にあるわけでも無ければ、木造でもなかった。」

「彼女の通う高校の近くの、普通の二階建ての一軒家だった。」

「ただいま」

がらがら、と彼女はカタリナを連れて自宅へと帰った。

「お母さん、居るの？」

彼女が居間の一室を開けると、そこには若い女がテレビを見ながらコンビニ弁当を食べていた。

「あ、あんた、何か用なの？」

今日は学校のお知らせでもあるの？」

「ううん、友達を連れてきたから、それを知らせただけ」

「そ、そう。わかったわ」

彼女は母親にそれだけ言うと、ドアを閉めた。

親子の会話と言うには、あまりにも素っ気ないものだった。

彼女の部屋は、二階だった。

ドアを開けると、様々な薬草や薬品の臭いが廊下に漏れ出す。

「まさか、であって欲しいのですが」

今まで黙っていたカタリナが魔女の部屋に入ると、早々に口を開いた。

「あなた、彼女にあの術を使いましたね」

「……」

その無言は、肯定を意味していた。

ぼすん、と魔女は自室のベットに座った。

「私が前世の記憶を取り戻したのは、八歳頃だったかしら。

少しづつ、少しづつ、自分の前世が何者だったか思い出すようになったわ」

「私とは違いますね」

「そうなの？ まあいいわ。

お母さんはね、まあ水商売の人なのよ。私を産んだ頃にはもう四十手前でね、若くないから昔のように稼ぎは良くなかったみたい。

だからまあ、私はあまりあの人に好かれなかったわね」

その言葉の前後の間に何があって、だからまあで済まされるような理由があったのかまでは、彼女は語らなかった。

「幼心に、私はお母さんを喜ばせたかった。

興味を引きつけたのね。幾つかの魔術を見せたわ。

異能者が出て間もない頃だったけど、あの人は少なくとも気味悪がったりはしなかった。瘦せた鶏が金の卵を産むと気付いたような顔はしてたけど」

「それは……」

「あの人にはプライドがあったわ。」

昔から、一人で生きていたってプライドが。だから彼女は私に、肌を美しく見せる方法とか、男を魅了する方法を聞き出したりしたわ。

自分が今時の若い子に負けるはずが無いってね」

カタリナは言葉を挟む機会を逸して、黙って彼女の話聞いていた。

「だけどやがて母は、それらでは満足できなくなつた」

魔女はそう言つて、微笑んだ。

能面のような、感情を感じられない笑みだった。

「だから私は言つたわ。——若返りの魔法があるつて」

「……」

カタリナは嫌な想像が当たつてしまい、内心呻いて天を仰いだ。

彼女の母親は、今では五十才近くだと言うのに見た目も肌もみずみずしく、目の前の魔女と姉妹にししか見えないほど若々しかった。

「そして私は決行したの。」

始祖メディアが行い、私の前世が繰り返し自身に施してきたという、その秘術を」

そう呟き、彼女は手のひらを見る。

「今でも手に感触が残っているわ。」

「実の母親を、ナイフでズタズタにしたのを」

「……」

「それですべてが説明が付いた。」

「あの母親が、実の娘に心底怯えていた理由が。」

「術は成功したわ。あの人も十代と見間違うほどに若返った。」

「でもそれ以来、一度としてあの人は私の名前を呼んだことは無いわ」

「……」

「自業自得だと、笑うかしら？」

「いえ、この感情をどう表現すればいいのかわからないだけです」

「それはあまりにも救いの無い話だった。」

「幼い子供が悪いのか、そんな子供にそうさせた母親が悪いのか、それとも前世の行いが悪かったのか。」

「神ならぬカタリナには、判別がつかなかった。」

「……ああ、そうだったのか」

「だがふと、天啓のようにカタリナは悟った。」

「どうかしたの？」

「いえ、かつての私が、総長がどうしてかの聖女に複雑な感情を持っていたのか、少しだけ理解できたのです」

言ってから、カタリナは力を抜いて肩を落とした。

「羨ましかったのですよ。祖国や人々の為に、曇りなき使命に没頭できた彼女が」

総長の使命は、立場からして矛盾に満ちていた。

祖先の為に無辜の人々を殺すこともあったし、建前を用いて使命にそぐわない行動もした。

彼は心のどこかで、その矛盾に苦しんでいたのだ。

「そう、何だか意外だわ」

「私もそう思います」

お互いにそんな感想を漏らして、初めて二人は今日笑った。

「今度、私の家にも来てください。」

あなたには、神父様に会って貰いたいです」

「ぜひ、そうさせてもらうわ」

そしてかつての仇敵だった二人は、始めてそんな約束をした。

前世では殺し殺された二人は、こうして今日少しだけ歩み寄れたのだった。

時代について

「へえ、面白いことになってるなあ」

濃い青色の手術着にマスクを身に着けた化粧屋が、薄暗い警察病院の一室でメスを振るっていた。

彼女の目の前にあるのは、人間の石像だった。

石像に、見える人間だった。

彼女は医師の立ち会いの元、電動サンダーで表面の石を引きはがし、その内側の生身の肉体の解剖を行っていたのだ。

彼女は立ち会いの医師も唸るような鮮やかな手さばきで、石像の内臓を摘出していく。

「ははッ、すげえなあこれ、こうなったのつてもう何年も前なんだろう？」

これ、今も生きてるぜ。メスを入れる度にびくびく反応しているから、たぶんまだ意識がある」

そしてこの女の手際も、血管に傷つけないように「生かした」ままだった。

人はここまで中身を無くしても、生きていられるのかと思ってしまうほどの光景だっ

た。

化粧屋の解剖は、粛々と続いて行く。

中身を元に戻すまで。

「ふう」

数時間にも及ぶ解剖を終えた化粧屋は、部屋の長椅子に座り込むと手術帽を脱ぎ捨てた。

「化粧屋、結果はどうだった？」

「それについては同席した医者レポートを見てくれよ」

「普通の医者の知見じゃ分からないから、上もあんたを信用して司法解剖をさせたんだろうが」

部屋の外で待つていた伊藤刑事が、小さくため息を吐いてそう言った。

「それにしても、今まで誰も解剖しなかったって本当か？」

「幾らなんでも腰抜けすぎるだろ」

「人体が石化するなんて未知の現象だぞ？」

大半は中国に返還したし、魔術の恐怖で誰もやりたがらなかったんだ」

「普通なら、知的好奇心がくすぐられると思うんだけどなあ」

化粧屋の物言いに、彼も顔を顰めた。

「それで、どうなんだ？」

「ああ、あれな、人間業じゃなかったわ」

伊藤刑事の問いに、化粧屋は簡潔に応じた。

「人間業じゃない？ 異能者の犯行ではないと言うことか？」

「まず、生かしたまま半分生身で石化させる魔術なんて聞いたことがない。

人間を石にするなんて怪物の伝承は幾つかあるがな」

「冗談だろう？ 日本でも百体以上がああなつたんだぞ？」

伝説の化粧物が突然現れて、中国マフィアだけを狙って石にして煙のように消えたつ

てか？」

「結論を急くなよ、らしくないぜ」

化粧屋は笑って伊藤刑事にそう言った。

そんな軽い彼女の態度が気に食わないのか、彼は歯を噛みしめた。

「なあ、お前なら人体を半分だけ石にするってどう捉える？」

「俺に異能者の考えなんてわかるわけないだろ!!」

「私はこう思ったぜ。これは拷問だつてな」

「拷問、だと!？」

「それも陰湿な、ただ相手を苦しませる為だけの拷問だ。

あれは石になってなお死ねず、狂えず、癒えず、苦しみ続けている。芸術的でさえある」

その相手を称賛するような物言いに、伊藤刑事は信じられないと首を振った。

「なにが芸術的だって、意味が分からない!! 狂ってやがる!!」

「落ち着けて。」

だから人間業じゃないってことだ。この陰湿さは悪魔の類だろうな。

悪魔が面白半分人間を弄んだんだ」

「あ、悪魔だと……」

理解の範疇を超えた言葉の連続に、伊藤刑事も頭を抱えて長椅子に座り込む。

彼にとって人間を石にする伝説の怪物も、悪魔も大差無いのだ。

「悪魔なんて、ほんとに存在するのかッ」

「私や私の周りは召喚術の類は専門じゃないんで詳しくは言えないんだが、召喚術つてのは伝承にある化け物を実際に存在してるところからこの世に呼び出す代物なんだよ。

だから実際にこの世に存在していたか、って言われればどうかなって感じだが」

「そんなの、言葉遊びだろうがッ」

吐き捨てるように、伊藤刑事はそう言った。

「俺はあの石像事件に、公安として関わった」

「ああ、だから」

「標的になったのが、マフィアだったから良かったとも思うか？

違うな、日本政府や、世界各国はその事件をきっかけに悟った。

何か一つ歯車が狂って、この惨劇が国会議事堂で起こったとしてもそれを防ぐ手立ては無かったということにな」

憂国の刑事は、血を吐くようにそう言った。

「一般人がその標的になったとしたとしても、成すすべがなかったということだ」

深いため息が、彼から漏れた。

「それまで緩慢な態度で異能者の登場に騒いでいた世間は、それによって大きく変わった。お前も覚えがあるだろう？ 日本でも異能者に対する法律が出来て、異能係が出来た」

「ああ、でも実際はガバガバらしいな」

「そうだ。異能犯罪を立証するには困難を極めた。

犯罪の捜査は、科学捜査と言うくらいに科学技術を前提にしている。

異能犯罪の捜査は、それとは真つ向から反対になる特殊な知識や技術の持ち主が必要

になった」

「だろうなあ」

万人に証明できる必要がある科学捜査と、科学では説明できない異能犯罪の相性は悪いに尽きた。

例えば目の前で犯人が念力で人間を殺しても、炎を出す杖で焼き殺しても、異能の要素が含まれる行為での殺傷事件は立証が不可能なのだ。

そしてそれは、異能犯罪に対する法律が出来た今でも殆ど変わらないのが現状だった。

日本は異能犯罪に対して遅れている方だと言われているが、どの国でもそれは大差ないのだ。

「俺たちが苦心して捕まえたホシも、釈放になったことは数えきれない。

地方の警察も異能犯を検挙することに及び腰になっている有様だ」

これが、今の日本だった。

いや、世界の現状だった。

凶悪な異能犯罪に対して、一般人は無力だった。

「伊藤ちゃんの苦労は理解できるつもりだよ、だがあの石像事件の犯人を追うのは止めといった方がいい」

「なぜだッ」

「手におえないからだ。」

そいつに対する一番の対処法は、余計な刺激を与えないことだよ」

化粧屋は、優しくも残酷な言葉を述べた。

「少し前の中東での魔女狩りの件、どうなったかぐらい知ってるだろう?」

「……」

「首謀者とそれを先導した人間全員、十五人が呪殺された。」

その組織のトップは報復するなんて声高にイキってたが、本心はそいつもビビって犯人捜しも形だけだ。

不思議だとは思わないか、伊藤ちゃん」

「……何がだ?」

化粧屋の言葉に、彼は顔を上げた

「一般人どもは見よう見まねの呪殺で、命を差し出す。」

だがその十五人を呪い殺した奴はどうしてそんな人数をやれたと思う?」

「……」

それは、伊藤刑事も不思議に思っていた。

呪殺に限らず魔術にはリスクが伴うのに、彼女やその同業者はまるでおとぎ話の魔法

使いのように自在に魔術を操るのだ。

「それが、私たちと素人の違いだよ。」

魔術を生業にするってことは、そのリスクと上手に付き合うってことだ。

こつちとこつちの魔術でリスクを相殺、あちらとこちらの道具を組み合わせて代償を肩代わりさせる、とかな。

私や同業者たちは、まずリスクを相殺できない魔術は使わないんだよ。

じゃないと、他人に一発で術者とバレるからな」

魔術とは実用性が大事であると、化粧屋は言う。

それは伊藤刑事にも納得できる理由だ。どんな兵器も、最も重要視されるのは安全性なのだから。

「じゃあ、お前はこの国で百人以上を石にした犯人は、何の代償も払ってないってのかわかる!?」

「そう言うことを言いたいんじゃないんだがな。」

まあ、手持ちと相談してリスクを打ち消せると思ったからそうしたんだろうな」

「くそッ」

「おそらく、悪魔を上手く言いくるめて、被害者たちで遊ばせて殺させ満足させたんだろうな。」

その術者は私から見ても凄腕だぜ。悪魔の性質をよく理解している。連中は物質的な充足にあまり興味ないらしいからな」

化粧屋はそこまで犯人を分析して、肩を竦めた。

「ここまで懇切丁寧に説明してやってるんだから、いい加減分かれよ伊藤ちゃん。」

——あんた、深入りするとマジで死ぬよ」

「……………そうだな」

その言葉を己の魂まで吐き出すように呟いた彼を見てられず、化粧屋は仕方なさそうに眼を逸らした。

「伊藤ちゃん、私はあんたに死んでほしくないんだよ」

警察病院からの帰りの車の中で、後部座席の化粧屋は運転席の伊藤刑事にそう言った。

「あんたが何だかんだで便宜を図ってくれてるのは知ってるからな。」

私も何だか、必要以上に協力してやってる感もあるし。

だが人間が踏み入れるべきじゃない領域つてのがあるんだよ」

「そうかもしれないな」

伊藤刑事はぼんやりと呟いた。

「おいおい、ちゃんと前見て運転してくれよ」

その声に不安感を抱いた化粧屋がそう言うのと。

「俺は公安の捜査官として、あの現場に立ち会った。

それまで公安も異能者の存在を甘く見ていた。

突然世間に現れた、ちよつと変わった人間だとしか見てなかったんだ」

「……」

化粧屋は彼の語りを、黙って聞くことにした。

「あの現場を見た時、衝撃だったよ。

大勢の人が石像に変わったのだと、あの常識では考えられない現場でその考えを誰も
が否定できなかつた。

中国でさらに大勢が石像になった事件が起こった時、世界各国はようやくその水面下
の脅威に気付いた。

俺もこの国の異能事件に関わっていくうちに、その得体の知れなさに恐れをなしたも
んだ」

彼は思いを馳せる。

この国に蔓延り始めた、異能事件の数々を。

「ほとんどは、超能力に目覚めて調子づいた連中ばかりだった。

だが、魔術被害の多くは怨恨による呪殺ばかりだ。

呪術汚染によって、土地そのものが腐敗した例もある。

このまま俺も異能系の刑事を続けてたら、ホンモノの異能者が俺を疎ましく思つて呪い殺されるかもしれねえ。

……だが、他にこんなこと誰がやるんだ？」

それはどこか、自分に言い聞かせているようにも思えた。

「俺以外の異能系の連中は、妻鳥のように刑事のイロハも分からん若者ばかりだ。

俺だってまだ四十半ばだつてのに、あの中じゃ一番の年上だぞ。

刑事課時代の先輩たちも足が竦んでるつてのに。

俺がやらねえで誰がやるつてんだ」

「一服するかい？」

「お前のタバコ、いったい誰が目を瞑つてると思つてやがる」

「くへへ」

化粧屋がパイプを取り出すと、伊藤刑事は後部座席のガラスを下した。

「鑑識がそのパイプの吸い殻を分析した結果を見た時、目が飛び出るかと思つたぞ」

「その薬効まで把握できるようになるなら、私の協力も必要ないんだろうがな」

化粧屋はパイプに火を点け、外に向かつて煙を吹いた。

「まあ、安心しろよ伊藤ちゃん。

あんたが死んでも、私が起き上がれるようにしてやるからさ」

「それだけは勘弁だな」

化粧屋の軽口に、彼はようやくやく笑みを浮かべた。

§ § §

「マスター、ヒマー」

「うるさい。静かにしていなさい」

そして警視庁の異能係の一室では、仮面の魔術師が資料を読み漁っていた。彼の方ではレプがだらりと体を投げ出して退屈そうにしていた。

「よう、調子はどうだい」

そこに警察病院から帰ってきた二人がやってきた。

「そこらはどうでしたか？」

「ううん、多分違うな。あの派手さに対して、野郎にしては悪趣味な感じだった」

「……こちらも、奴の痕跡は見当たらないですね」

「そうか、手詰まりになって来たな」

化粧屋は魔術師の言葉に唇を噛んだ。

「二人とも、いったい何を探しているんだ？」

国家間で共有している魔術事件の資料なんて読み漁って」

伊藤刑事は先日ようやく手元に届いた資料を協力の対価として要求してきた魔術師に問うた。

「この世界の、潜在的な脅威について、ですかね」

「……随分と大きく出たな」

「石像事件が奴の犯行かと思いましたが、化粧屋の見立てが正しいのなら違うと言ううことでしょうかね」

手元の資料をテーブルに放り出し、魔術師は肩を落とした。

「なあ、その奴つてのはいったい誰なんだ？」

「誰、ですか。もはや誰なのか、と言える相手なのでしょうか」

伊藤刑事の問いに、魔術師は曖昧に言葉を濁した。

「やはり、前世の記憶を持つ異能者なのか？」

「それは違うだろうな。あいつは“まだ”生きているはずだ」

「はあ？」

化粧屋の物言いに、一般人に過ぎない彼は理解が追いつかないようだった。

「昔、ペストを癒そうとした呪医が居たんだ。なにしろ、とんでもない死人が出たからな。」

そうして研究を重ねるうちに、黄熱病を研究してそれに掛かった野口英世のように、いつもペストを患った。

だが、そいつは自分が死から逃れる為にとんでもない手段を取った」
化粧屋はそのように語りながら、魔術師の対面の席に座った。

「——自身が、ペストそのものになったんだ」

「ペストそのもの、に?」

「この間のハンセン病の呪いを思い出しな。」

あれが、意思を持った存在だと思ひ浮かべればいい」

痛ましいものを思い出すように、化粧屋はそう言った。

「人間が、呪いそのものになったというのか?」

それを言葉にして、伊藤刑事は全身がゾツと寒気に襲われた。

あくまで対象の地位を失墜させることが目的のあの呪いと比べ、その殺傷性は桁違いな上に意思があるという。

彼は喉がひりつくような恐怖に体が震えるのを悟った。

「平たく言えば、そうでしょうね。」

私も化粧屋も、それを止める為に前世では命を落とした。

当時では、最強の呪詛と言えたでしょう。奴はもう、生き死にという概念が欠如したペストの病魔そのもの。

我々は奴を、ペイルライダーと呼んでいました」

「なあ、これは私見だが、治療法が確立した現代では、奴が全盛期の力を発揮できないんじゃないのか？」

「……確かに。奴の力は、ペストの影響力に比例するでしょうからね」

化粧屋の意見に、魔術師も顔を上げ同意した。

「じゃあ、その意思のあるペストとやらは、昔ほど脅威じゃないんだな」

それを聞いて、伊藤刑事はホッと息を吐いた。

だが、未だこの世界にはペストの死者が絶えないことを想い出し、複雑な表情になった。

「恐らく。発展途上国辺りで今も存在しているでしょうが、奴の存在もはや時代ではないと言うことでしょうか」

それを聞いて、魔術師は遣る瀬無い表情になった。

「もし今生でもまだ奴が存在していたとしたら、奴を鎮めることができると思っていたのですが」

それは強大だと思っていた敵が、いつの間にか無残に弱体化していたことに拳の振り下ろし場所を無くしたような様子だった。

「悲しいな。色々と。俺たちは前世で、命を投げ打ったつてのに」

「世の中など、そんなものなのでしょう」

化粧屋も、魔術師も、どこか遠いところを見る様に顔を上げた。

「……意外だな、あんたが病魔を鎮める為に命を投げ打つなんてな」

「前世の俺も、死ぬとは思ってなかったんだよ。」

死体を渡り歩いて百年以上生きてたからな。目の前でペストの悲劇を見てきて他人事じゃなかったとはいえ、バカなことをしたぜ」

化粧屋はそう言って、伊藤刑事に力なく笑った。

「当時は魔女殿や博士も手におえない相手でした。」

極まった魔道とは、そんな人智を超えたものなのです」

「そう考えると、時代の移り変わりつてのは凄いな。」

あの時、俺たちがどうしようもなかった相手の活動が分からないレベルにまで貶められている。

伊藤ちゃん、この時代の技術も決して無意味じゃないんだな」

「……そうなのか」

凄腕の異能者二人の言葉に、伊藤刑事は少しだけ救われた気持ちになれた。

「これであんたは警察に協力する理由が無くなったな。これからどうする？」

「それはあなたもでしょう。あなたこそ、ペイルライダーの動向を追っていた。

他の同業者の行方も、十分に見つけられたのでしょう？」

「ああ、知り合いはあらかじめ連絡が付けた」

二人が警察に協力するメリットとはそれだった。

魔術師は前世の心残りで、化粧屋は前世の縁を求めて。

そしてそれらは、もう十分なほど二人の手元に集まった。

「私は、もうちょい力を貸してもいいと思ってる。

ほら、あのままで伊藤ちゃん、マジで死んじまいそうだし」

「そうですか。私も、警察で協力した過程で得た知識を許可を取って生放送で警告したいと思っっています」

「そっか、変わらないな、あんた」

「あなたは少し、変わりましたね」

「色々と思うところがあるのさ」

魔術師は仮面の位置を指で直して、素直じゃないな、と思うのだった。

罰ゲームについて

「体育祭の中止ですか」

朝のシヨートホームルームの時間、生徒たちに体育祭の中止を伝えるプリントが配布された。

生徒たちの態度は、然もありなん、と言った様子だった。

先日の呪い事件の記憶もまだ彼らには新しい。

「せっかくみんなでいろいろ決めたのに」

と、ぼやくのは黒いケープの魔女だった。

彼女の脳裏には、体育祭の出場競技を決めるホームルームの時間がまざまざと浮かんでいた。

彼女が二人三脚をやろうとして、他のクラスメイトたちがチキンレースじみた牽制のし合いをし始めたのを思い出し、くすりと思い出し笑いをした。

「ええ、その代りなんです、授業参観をすることに決まりました」

担任の早瀬がそう告げると、生徒たちは一斉に嫌そうな声をあげた。

高校生と言うのは大半が思春期真っ只中だ。

なので、授業風景を親に見られるというのはそれはそれは嫌な行事なのだ。

しかも高校の授業参観は参加者が少ない傾向にあるためか、授業を見に来た親の姿が目立つというコンボまで発生する。

この学校には授業参観が存在しないことに安堵していた生徒たちは、まさかの不意打ちを食らった形になったのである。

「こちらが日程に関してのプリントになります。

土曜日の午前中に行い、午後から保護者説明会を実施しますのでその旨をよろしく伝えてください」

授業は午前中で終わり、月曜日には振替休日になる、という内容を打ち消して余りあるお知らせだった。

土曜日の開催なら、それだけ親が来る確率が増えると言うことである。

しかも学校としては本命は午後の保護者説明会だろうことは、高校生の彼らでも十分に理解できることだった。

要するに学校側は先日の呪いの一件に関して説明をするつもりなのである。

子供を心配する親なら、それだけ学校の説明を聞きたがるだろう。

開催日が今週の土曜日という急な話であっても、親たちは可能な限り参加すると思わ

れる。

「……………授業参観」

そしてこの魔女も、不意打ちを食らった一人であった。

§ § §

「あの……………」

その日の放課後、美術室に向かう彼女に話しかける人物がいた。

「あら、小池くん。お久しぶり」

黒いケープの魔女は振り返り、その冴えない男子生徒にそう答えた。

「……………今度授業参観、あるんだってね」

「だから？」

「いや、その、心配で……………」

「本当に心配していたのなら、去年のあの時に言うべきだったのではないかしら？」
彼女が目を細めてそう告げると、彼は肩身が狭そうに頭を俯かせた。

「ごめん、心配じゃなかったわけじゃないんだけど、でも君なら大丈夫だろうって」
「同じ高校に入学したのに、私に一言も無かったわね。」

去年は何度か廊下で顔を合わせたのに、私が視線を向ける度に顔を逸らして無視したわよね？」

「……………」

魔女の追及に、小池は口を結ぶ。

「もしかして、まだ彼氏のつもりなの？」

直接言葉にしないと、フラれたって自覚が持てないの？」

「そ、それについては俺が悪かったよ、だけど!!」

「さようなら、二度と話しかけないで」

ふわり、と彼女の長い黒髪が伸ばそうとした少年の手を遮るように舞う。

そのまま彼女は美術室の中へと入って行ってしまった。

彼は両手を握りしめて、立ち尽くすしか出来なかった。

そして、やがて力なく踵を返すと。

「……………」

「うッ」

目を血走らせ、齒をむき出しにして般若のような形相で彼を睨む春美の姿がそこにはあった。

……

……

……

男とは悲しい生き物である。

例えば女性の集団に囲まれた時、男女平等という言葉は意味を成さなくなる。

女性を悲しませた場合はなおのことである。

そしてその状況に、小池少年は置かれていた。

ことん、ことん、と春美がテーブルの上に薬液の入ったペットボトルを並べる度に、彼の方が震える。

彼の周囲には、いつもの四人だけでなく望海やカタリナまで座っていた。

場所はいつものファーストフードの一角。

四人席の窓際の奥に追いやられた彼は、春美に呼び寄せられた面々に固められ、そこに座れなかった三人は周りの席に座って彼女らの様子を見ていた。

「ベラドンナ、ドクゼリ、マンドレイク、ヒガンバナ、あッ、キノコは好き？ スギヒラ

タケとかあるわよ」

「見事に全部猛毒ですね」

彼の正面に陣取る春美が並べる毒薬のペットボトルを見ながら、彼の横を固める望海がそう呟いた。

「あ、あの、そういうのはいいです」

「じゃあ、ウルフスベーン、モンクスフード、ウズ、アコナイトのどれがいい？」

「春美ちゃん、それぞれの魔法薬学の教諭!」

全部トリカブトの事じゃん、やっぱり猛毒じゃん!!」

もう一人四人席に同席している真冬がツッコミを入れた。

残り三人は春美が彼の抹殺を実行しないように隣の席で様子を窺っていた。

「まあまあ、春美さん、まずは尋問してからでも遅くは無いですよ」

目がイッている春美を見やり、望海が彼女を諫めた。

「あの、私たちはあの方を悲しませた奴としか聞いていないんですけど。

いったい何をどう悲しませたって言うんですか？」

「それは、その、なんて言ったらいいか」

望海の物言いはどこか半信半疑のようだった。

だが師匠大好きな春美が抹殺を計ろうとするくらいなのだから本当なのだろうな、とも思っていた。

「ハッキリと言え。この男のモノを去勢する薬を使ってもいいのよ」

「ひッ、どちらかと言えば悲しませたと思えます!!」

春美の劍幕に押され、彼は身を竦ませてその声を出した。

「あんたが師匠のカレシだったのは本当なの!？」

「そ、そうです、いえ、そうでした……」

身を乗り出して問い詰める春美に、彼は涙目になってそう答えた。

「えッ」

「それマジ!？」

「元カレってことですか!？」

それを聞いて、真冬以外付き合いで参加していた夏芽と千秋も身を乗り出した。

「はあ、そういうことですか」

「言えッ、どこまで行った!!」

「言わないなら一番苦しませる方法で何十時間も掛けて殺してやる!!」

「ひ、ひい!! 手、手を握ったくらいですッ」

「ふざけるな、ぶっ殺してやる!!」

「許容範囲低ッ」

事情を把握した望海と、二人のやり取りを見てマジギレしている春美に慄く真冬だった。

「カタリナさん、他に何かしてないか聞き出してやるんで、拷問の用意を!!」
「付き合いきれませんか。私は帰りますよ」

そしてカタリナは呆れて立ち上がった。

「まあまあ、春美ちゃんが変な気を起こすかもしれないしさ」

「全く、他人の過去を詮索して何が楽しいのですか?」

面白そうなことは共有する女子の生態なのか、夏芽が彼女を席に押し留めた。

「それにしても意外ですね。」

あの御方が彼氏を作るなんて」

「まあ、今のあの子を見てれば意外かもね」

小池は望海の呟きに小さく儂く笑った。

「俺があの子と付き合う切っ掛けは、中一の頃に仲良くなつた男友達との罰ゲームだったんだ」

「罰ゲームって」

てつきり色恋が発端かと思いきや、酷い理由だった。

「これ、カンタレラって伝説にも出てくる毒なんだけど。」

これの凄いところはね、調合しただけで症状が出る時間を自在に伸ばせるの。

つまり、——今からいつ死ぬか分からない恐怖を味わわせてやる」

「春美さん、ステイステイ」

新しい毒薬を取り出す春美を諷めながら、望海は彼に先を促した。

「お、俺もオーケーが出るなんて思ってたんだって。

中一の頃のあの子は、今みたいな雰囲気も無ければ異能者だって誰も知らなかった。物静かな文学少女くらいにしか思われてなかったんだって」

小池は言い訳じみてそのような言葉を並べる。

それが余計、春美の神経を逆なでするのだ。

「でもあの子、いつもケープを着てるだろ？ あの黒いやつ。

あれって中一の頃からいつも付けてたから、他の女子から良く思われてなくてさ」

「え、別に校則違反とかじゃなかったんでしょ？」

真冬が尋ねると、小池は頷いた。

「うちの中学の制服はセーラー服だったけど、上着を羽織っていいってことになってたよ。

でも、中学の頃っていろいろと学校ではオシャレが抑圧されたりする時期だろ？

同調圧力っていうか、他人と違うってのはそれだけで周囲の目を引くものだし。

だから、その、他の女子たちにいろいろと言われたり嫌がらせされる日もあったかな」彼の負った罰ゲームとは、要するにクラスのカーストの低い女子に告白して笑いの

にするための儀式に過ぎなかったのだ。

「俺、何もできなかったからさ。」

付き合っても良いって言われた時、少しでも自分に好奇の目が行けば良いと思っただ。だ。

まあ、余計に皆からからかわれただけだったけど」

小池はほろ苦い物を味わったような表情で、思い出を語った。

「どうして俺なんかと付き合ってくれたの、って訊いたら、普通の男女の交際をしてみたかったからって言った。」

その時はそういうものかと思ってたけど、しばらくしてそれがどういう意味だか分かったんだ。

異能者って、前世の記憶とかあるんだろ？ それを知った時、ちよつとだけ分かり

したけど」

「ふーん、過去に誰かと付き合ってたってのも許せないタイプなんだ」

「ち、違うよ、そこまで言っていないだろ!？」

冷たい表情で毒薬の蓋に手を掛けようとす春美に、慌てて弁明する小池。

「それに、あの子が異能者と分かっているから、事実上破局してたよ。」

交際期間はひと月も無かったし、同じ高校に入ったのは知ってたけど、さつき話した

のは殆ど三年ぶりで」

「えー、付き合ってたのに三年もほったらかしにしてたの？」

「流石にそれってちよつと冷たくない？」

夏芽と千秋の批難が飛ぶ。

だがそれを言われた小池は表情を歪めた。

「だって、だってしようがないだろ!!」

あんな、あんな光景を見ちまつたらさッ!?」

ここにきて初めて、彼は声を荒げて心中を吐露した。

「……場所を変わりなさい」

カタリナは再び席を立ちあがると、殺気を研ぎ澄ませている春美を引っ張り出し、自身が彼の対面に座った。

「いったい何を見たのですか？」

「……」学期の授業参観の後、クラスの女子たちがあの子を笑いものにしたんだ。

あの子の母親がさ、キャバ嬢ってか、ホステスが着てくるドレスみたいな格好で来たんだ。

だからあいつら、あの子に父親が居ないことを良いことに好き勝手言い始めてさ」
その後の光景を目にした彼は、震えながら恐怖の告白をした。

「本当に、本当に酷い言い方でさ。」

俺もその言い方に頭が来たんだけど、俺が何か言う前に、教室は俺の知ってる場所じゃなくなつたんだ」

頭を抱え、両肘をテーブルに付けて吐き出すように彼は言った。

「あの子と母親を卑しい人間だつて言った女子たちは、制服を着た豚になつてた!!」

それを聞いて笑つてたほかのクラスの連中は、呼吸が出来ないほど笑い転げてたッ!!

そして彼女は俺を見て、俺だけは彼氏だから見逃してあげるつて言つたんだよ」

それは想像するだけで悪夢的な、狂気の光景だった。

彼の話当真に耳を傾けるカタリナと、薄く笑つている春美以外は絶句してその話を聞いていた。

「俺は一週間、学校に出れなかった。」

恐る恐る登校したら、あの子を侮辱した女子たちは全員別の子になって、入学当初からのクラスメイトつてことになってたんだ!!

他のクラスメイト達も、あの子が話しかけるとみんな同じ表情で笑みを浮かべるんだ!!

怖かつた……俺の知らない女の子たちが、俺の知り合いのように俺が登校してきたこ

とを喜んで励ましてくれたんだッ!?

俺は、俺はッ、あの罰ゲームが無かったらみんなと同じように不気味な笑みを浮かべてたはずだ!!

本当に俺は、運が良かっただけなんだ……」

額に脂汗を浮かばせながら、彼は全てを吐き出していた。

「なあ、俺が悪いのか？ あの女子たちはあそこまでされる必要はあったのかよ!」

「少なくとも、あなたが見逃されたのはあなたの善性のたまものでしょう」

少々錯乱気味の彼に、カタリナは淡々と語りかける。

「あなたの行動は正しかった。

魔女の恐怖を目の当たりにし、その脅威から逃れようとした。それを誰が責められましょうか」

だから、とカタリナは顔を引きつらせている幼馴染三人組に顔を向けた。

「真冬、携帯を貸してくれませんか?」

「え、良いけど」

真冬は言われるがまま、護符などでごちゃごちゃしたスマホを彼女に渡した。

すると、カタリナはハミングを口ずさみ始めた。

その意味が理解できる前に、彼女らの目から力が失われた。

そして、ぱちん、とカタリナが指を鳴らす。

「あれ、今なんの話をしてたんだっけ？」

ハツとなった夏芽がそんなことを言い出した。

「夏芽、あなたちゃんと聞いてた？」

魔女さんのお母さんがホステスみたいな格好で授業参観に来たってことに引いて、この人疎遠になったんだって」

「あ、そうだった。サイテーだよな」

「私もそう思うよ。あれ、カタリナさん、なんで私のスマホ持ってるの？」

三人組だけでなく、小池も肩身が狭そうに縮こまっていた。

この四人の記憶から、小池の語った悪夢の話は消え去っていた。

「やっぱり、俺なんか今さら授業参観は普通の格好をしてきてもらった方が良くないんて言うのはおこがましかったのかな……」

そして人間の脳は錯覚しやすくできている。

視覚を勝手に脳が補完しているように、消えた記憶も都合のいいように勝手に脳が補完されていた。

カタリナの魔術に対抗し、影響を免れた望海はひとり愉悦の笑みを浮かべている春美

を見てため息を吐いた。

§ § §

そして翌日。

「あの……」

「また何か用なの？」

小池は再び、黒いケープの魔女を呼び止めていた。

「昨日のことは、ごめん。今までずっとほったらかしにしてたのも。」

誰だって、自分の母親のことを悪く言われたらいやだもんね。君が異能者だからって、怖がるなんて彼氏失格だろうし」

彼がそう言って頭を下げた直後だった。

「えッ」

彼女は、彼の額に手を当てて、眉を擡めていた。

そして、余計なことを、と小さく吐き捨てた。

「ど、どうしたの？」

「ううん、なんでもない」

「もし、君が良ければだけれど、今までのこと埋め合わせしたいと思うんだ。な、なんでも言うこと聞くから、どんな我がままでも言つて良いよ!!」

それは言葉の内容だけでなく、虚勢だった。

記憶が消えても、恐怖の体験は体に染みついていた。

彼の体は、異能者としての彼女を無意識に恐れていたのだ。

それでも男としての最低限のプライドが、彼をそうさせるのだ。

「……まあいいわ、あなたには責任を取ってもらおうとは思ふし」

黒い魔女はそう言つて、くすりと笑つた。

「またよろしくね、小池くん」

彼女は小池、と言うよりその後ろでハンカチを噛みしめて涙目になつてこちらの様子を窺っている春美を見て面白そうに笑みを深めたのだつた。

キマイラについて

その事件の発端は、ふと思いついたから、と犯人は語った。

東京都渋谷区にある歩行者天国にてそれは起こった。

阿鼻叫喚の悲鳴が、である。

彼と、*“それ”*は堂々と歩行者天国の中心まで歩いてやってきた。

それらを見た人々は悲鳴を上げて、そこから逃げ出した。

人々がごった返しているのは、日曜日の歩行者天国は地獄のような光景が繰り広げられた。

歩行者天国の中心に陣取った彼とそれを、取り囲むようにパトカーが緊急で出動した
がその様子を見守る野次馬によって包囲するだけで一時間以上掛かるほどだった。

この状況を作り出した犯人であるそのローブとドミノマスクの男は、ずっと沈黙を
保ったままだった。

上空にはヘリコプターが飛び、渋谷の真ん中で起こった大事件を報道している。

人々は犯人が何もしないのを悟ると、一転してスマホを向けて犯人とそれを写真で写

し、SNSで拡散し始めた。

犯人が事件を起こして約二時間、彼はスマホで自分が注目されているのを確認すると、自分の周囲を取り囲んでいるパトカーの上に乗った。

「人々よ、我が至高の芸術に、恐れ戦くがよい!!」

犯人は大仰な仕草で、パトカーの内部を封鎖している警察官たちの列の向こうに居る人々に話し始めた。

「我が名は、うーん、そうだな、よし、ティフォンとしよう。」

そう、我こそは、ティフォンなり!! 我が子よ、その勇壮なる姿を人々に示すのだ!!」
己をティフォンと名乗った犯人は、自身の背後に控えるこの騒動の中心に呼び掛けた。

“それ”は、全長三メートルの巨躯の怪物だった。

ライオンの頭を有し、馬の胴体を備え、尾は蛇であり、鷲の翼を持っていた。伝説にしか登場しないその怪物を、人々は自然とキマイラだと呼んでいた。

キマイラは主人の命令に唸り声で答えると、馬の胴体の側面に生えたその翼を広げ飛び上がったのだ。

上空を飛んでいたヘリコプターは、まさかキマイラが飛行能力を有しているとは思わず、至近距離でその様子の撮影する羽目になった。

「き、きやあ!!」

そして目の前に怪物が現れたことに驚きヘリコプターの操作を誤り、機体を大きく揺らしてしまった。

不運な女性リポーターが、扉を開けて下の様子を説明していたので、機体が揺れた拍子に空中に投げ出されてしまったのだ。

上空から人が落ちてくる、そんな状況を見ていた人々は悲鳴を上げた。

だが、悲劇は起こらなかった。

その巨体に見合わぬ俊敏性を有した怪物は、その広い背中を落下するリポーターの下にすべり込ませたのだ。

そして怪物はゆつくりと、翼をはためかせ地面へ降りて行った。

彼女は何が起こったのか分からず、地上に降りてからぺたりと腰が抜けたように座り込んでしまった。

「我が子が失礼をした、お嬢さん」

「は、はい……」

ティフオンはパトカーから降りると、彼女に手を差し伸べて立ち上がらせた。

「さあ、向こうへ行くがいい」

「あ、あの、なんでこんなことを？」

リポーターはかろうじて手に持っていたマイクを彼に向けてそう言った。「ああ、それは。ふと思いついたからだ」

彼は無邪気に笑ってそう言った。

§ § §

女性リポーターが警察に保護されたすぐ後、伊藤刑事と化粧屋が現場にたどり着いた。

「おおすげえ、マジもんのキマイラだ。」

そういうの専門の同業者が居るとは聞いていたが、初めてみたぜ」

「感心している場合か」

二人は警察官が封鎖している列の中に入り、犯人に呼び掛けた。

「あー、犯人に告ぐ。私は警視庁異能係の伊藤と言う。」

まず、そちらの要求を聞きたい。いったい何が目的でこんな騒動を起こした」

「ただの警察官などお呼びではない。失せるがいい」

ティフオンは億劫そうに伊藤刑事の交渉を蹴った。

「あんた、それを作ったんだろう？」

錬金術の類だろうか？ 私も少しかじってるんだ」

「おい、化粧屋!!」

「ほほう、貴殿には分かるか」

化粧屋を咎めようとした伊藤刑事は、犯人の興味を引いたことに口を閉ざさるを得なかった。

「同門じゃないってことぐらいしか分からないけどな。」

私の師匠が人造生命の製造に掛けては天才だったんだ。それって継ぎ接ぎじゃないだろう？

異なる生物同士を無理なく一つの生命体として活動できるようにするのはかなり難しいはずだ。

そして複雑な合成生物ほど、言うことを聞かせるのも難しくなる。

私はあんたの術に敬意を表するよ」

化粧屋は手放しに称賛していた。

その言葉に、ティフォンも口角を釣り上げた。

「嬉しい、嬉しいよ、だからこそ悲しくもある」

彼はそう言って、後ろの怪物に顔を向けた。

「まさかこんなに早く、お前の相手が現れてくれるとはな」

その直後だった。

怪物が、その巨体で彼女に飛び掛かったのは。

「危ないッ」

無防備な姿をさらしていた化粧屋を、伊藤刑事が突き飛ばした。

「おい、馬鹿!!」

その行動に、珍しく焦りの声を彼女は上げた。

ドシン、と着地の衝撃でパトカーがひっくり返る。

ライオンの頭が伊藤刑事を捕えようと牙が生え揃った大きな口を開けた。

彼が死を覚悟した、その時。

「おやめなさい」

怪物と、伊藤刑事の間に割って入る者が居た。

仮面の魔術師だった。

「ぐるうう……」

彼と至近距離で相対したキマイラは、唸り声を上げてゆっくりと後ずさった。

「ほう、ほう!! この子が恐れるか!!」

自分の元まで引いてきた怪物の様子を見て、ティフォンは狂喜した。

「調停者として、あなたに訴える。

今すぐこの騒ぎを止めなさい」

「それは出来ぬなあ。くくく」

「一体、なぜですか？」

「知れたことだ」

ティフォンは魔術師の問いに、ため息と共に答えた。

「この我が子を見れば、分かってくれるだろう？」

「いえ、全く」

彼が怪物に視線をやってそんなことを言ったが、魔術師は端的に首を横に振った。

「こいつは、ただあのキマイラを見せびらかしたかったんだよ」

突き飛ばされて尻餅をついていた化粧屋が、立ち上がってそう言った。

「そうだろう？ それ、すげー出来だもんな」

「おお、やはり、やはり貴殿は分かってくれるか!!」

化粧屋の言葉を実に嬉しそうにティフォンは肯定した。

「我は前世の記憶を取り戻した後、かつてと同じようにキマイラの合成に打ち込んだ。

そうして、いくつもの作品を作り上げ、こうして最高傑作も完成した!!」

彼は興奮気味にキマイラに抱き着き、そう叫ぶ。

「前世はそれで満足だった。生命の神秘を探求する喜びに浸っていた!!」

だが、今生の我は既に現代の多くの特撮作品に触れており、こう思ったのだ」
ティフオンは両手を広げ、歓喜を示した。

「——この子が暴れている姿を見てみたい、とな!!」

それは怪獣映画に憧れる、子供のように純粹な欲求だった。

「機動隊や自衛隊が出てくるまで粘るつもりだったが、天はこうして好敵手を用意してくれたのだ」

「馬鹿げている」

「ロマンがある、と言ってほしいな」

淡泊に呆れてそう返す魔術師に対し、感情の高ぶりを隠せないティフオンは笑ってそう言った。

「本当なら怪獣の王や、巨大なる神秘の蛾、三つ首の巨大竜とか作りたかったが、我が技量では不可能だったので我が持てるすべてで作り上げた我が子を迎えてきた。

勇者よ、我が挑戦を受けるがいい」

「断ると言ったら?」

「そんな野暮なこと、我に言わせるな」

拒否すれば火を見るよりも明らかだと、ティフォンは怪物の体を撫でながら態度で示した。

「伊藤刑事、後始末は任せていいですか」

「お、おい、まさかここで戦うつもりなのか!？」

「そうしなければ、彼は怪物を解き放ちますよ」

「くそッ、ふざけやがって」

伊藤刑事はやけくそ気味に他の警察官に通行人の避難を指示した。

「あなたの要求を呑むのです、私が勝ったら素直に司法の裁きを受けると誓うか？」

「よかろう、悪を選んだ者の美学として、誓おう」

それから二人は、警察が人々を周囲から追い出すまでの三十分ほど、対峙したままだった。

§ § §

「はあ、警察が決闘を承認したとか非難されねえか、これ」

「仕方ないだろ、あれは誰にも止められないさ」

伊藤刑事と化粧屋は、渋谷の中心で二人きりになった異能者二人を遠目に見やっつい

た。

彼らだけでなく、警察に押しつけられた先で人々も警察官も二人の様子を固唾を呑んで見守っていた。

「なあ、一応訊くが」

「なんだよ」

「魔術師殿は勝てるのか？」

「なんだ、そんなことか」

化粧屋は心配している伊藤刑事に、こう言った。

「安心しろ、あいつは私の知ってる同業者の中でも屈指の武闘派だ」

私は荒事苦手だから助かったぜ、と冗談めかして化粧屋は肩を竦めるのだった。

「そろそろ、よかろう」

「わかりました。では、始めましょうか」

静寂が訪れた渋谷の交差点、二人の戦いもまた静かに開始を告げた。

「我が子よ」

創造主の呼び掛けに、怪物は答えた。

彼は咆哮し、尋常ならざる馬の脚力を持って飛び上がった。

「伝説に置いて、キマイラの胴体はヤギだとされる」

ティフオンの語り口は柔らかだが、彼の従える怪物の動きは俊敏かつ迅速だった。ほぼ一瞬で怪物は魔術師に襲い掛かっていた。

馬の両前足が、彼を踏み碎かんと流星の如く振り下ろされたのだ。

それに対し、魔術師は四葉のクローバーの葉を手にとっただけで、微動だにしない。彼目がけて振り下ろされた怪物の前足は、すんでのところまで空振りに終わり、アスファルトを砕いて地面に片足だけが沈み込んだ。

衝撃で蜘蛛の巣のようにアスファルトにヒビが広がる。

「故にキマイラは、悪魔の象徴として扱われた。」

我が子は、ヤギではなく馬の胴体にアレンジしてあるがね」

「ですが、だからこそそれは失敗だったのでは？」

魔術師は至近距離に居る怪物の前足に、オークの杖を振りかぶって殴りつけた。

怪物の叫び声上がる。骨が折られ、倒れ伏した。

「馬の骨折は治療が困難だそうです。詳しくは知りませんが。」

これでこの怪物の機動力は死んだ。はやく連れ帰って治してやってはどうです？」

「くくく……」

ティフオンは魔術師の的外れな言葉に、思わず笑ってしまった。

「そう思うかね？」

「——ッ」

その直後、倒れ伏した怪物が物凄い勢いで起き上がった。

そしてキマイラの代名詞ともいえる、ライオンの口から灼熱の炎が噴き出たのだ!!

「既存の生物の姿を掛け合わせただけに思うのだとしたら、魔術の道は廃業した方が良
い」

火炎から逃れようと距離を取った魔術師を、怪物は追い打ちを仕掛ける。

1tにも迫る怪物の重量の突撃を食らえば、それだけで人間は即死だ。

「おい、舐めプしてんなよ!!」

魔術師がそれを捌いて、巨体から逃れると化粧屋からのヤジが飛ぶ。

「まったく、面倒な。レプ」

「はあい、マスター」

魔術師は、隠れてスマホで実況していたレプを呼び寄せる。

スマホと一緒にレプが飛んできた。

「術の補助と、力場の形成を」

「まったく!! きゃはは、何だか面白そうな展開になってきたわね!!」

レプは笑みを浮かべながら、歌を歌い始めた。

人間には聞こえない、妖精の歌を。

「輪廻の時を待つ、勇猛なるケルトの戦士たちの魂よ。

今こそ我が呼び掛けに応え、仮初めの体にて我が命に従え」

魔術師がオークの杖を割れたアスファルトの下の地面に突き刺し、呪文を唱える。すると、大地から土がぼこぼここと膨れ上がり、人の形をとって幾つも現れた。

土人形たちは、魔術師を守る様に周囲に展開する。

「ケルトの騎士たちよ、あの怪物を討て」

土人形たちは魔術師の命令に応じ、再びこちらに突進してくる怪物に飛びかかった。

ケルトの戦士の魂を得た土人形たちは怪物に立ち向かう。

武器を持たない素手だというのに、砕けたアスファルトの破片や道路の標識を引き抜いて槍に見立てて応戦し始めたのだ。

彼らが足止めをしている間に、魔術師は虚空にルーンを描く。

虚空から氷の塊が形成され、怪物に叩きとされる。

「ぐるううううあああ!!」

泥人形の勇士たちにまわりつかれ、魔術師の魔術攻撃に苛立った怪物が咆哮を上げる。

怪物の蛇の尾が鞭のように縦横無尽に振り回し、土人形たちを土くれへと帰す。

そして怪物が翼を広げ、巨軀を空へ飛びあがらせる。
上空からの強襲、その速度は地上の疾走の比ではない。

「まったく」

魔術師は地面のアスファルトの破片を拾う。

「これを一般人の相手にさせようとしたのか」

彼は真正面から、破片を怪物に投げ付けた。

これまでで一番、怪物が大きく仰け反って墜落した。

「だって、仕方がないだろう!!」

ティフォンは、怪物相手に一步も引かない魔術師に訴えかける。

「他に魔道について語り合える相手も居ない。

探究を繰り返しても、前世のようにそれを明かせる者も居ない。

しかし今生ならば、誰もが前世で否定したこの研究の成果を示せるのだ!!」

彼の言葉に応えるように、怪物は起き上がる。

尋常ではない耐久性だった。

「やはり、あなたは愚か者だ」

魔術師は指を鳴らす。

土くれになった土人形たちが、いつの間にか集結し、一つの巨大なヒト型を形成しは

じめた。

土の巨人は突進を再開した怪物に抱き着き、その巨体を押し留めた。

その神話のような光景に、ティフォンは満面の笑みだった。

妖精の歌声が、響いている。

彼女の足元に若葉が芽吹き、いつの間にか若木へと成長していた。

魔術師はその若木を引き抜くと、投げ槍でもするかのように振りかぶった。

鋭いわけでも、殺傷性があるわけでもない若木の槍は、土人形ごと怪物を貫き、アス

ファルトに突き刺さった。

怪物の絶叫が響き渡る。

「ああ、我が子よ。すまない。

だがお前は、怪物の自分を達成したのだ。人間に倒されるといふ、怪物の使命を」

怪物を使役していたティフォンは思わず握っていた拳を広げた。

無尽蔵のタフネスと耐久性を誇っていた最高傑作が、命を散らしたのを悟ったのだ。

「……はあ、これでもういいですか？」

「最高だった。もつと、見たいくらいだったぞ、勇者よ」

連続の魔術行使でかなり疲弊している魔術師が問うと、ティフォンは力なく笑った。

「お蔭で更なるインスピレーションが湧いた。

次はもつと強く、もつとすごいものを作れそうだ!!」

「勿論約束は、忘れていませんよね?」

「ああ? そう言えばそうだった!!」

そう言つて笑うティフォンは、最後まで力尽きた怪物をジツと見ていた。

約束通り、ティフォンは逮捕された。

「とんでもない迷惑な奴だったな。」

伊藤ちゃん、まさかあいつを罪に問えないなんてことはないよな?」

「流石にそれは無い。あの怪物を操つていたという証明が出来なくても、これだけの被害が出たんだからな」

伊藤刑事は渋谷の中心地とは思えない周囲の惨状を見ながら、化粧屋にそう答えた。

アスファルトはめくれあがり、パトカーはひっくり返り、警察官以外人は居ない。今ここを見て日本の繁華街の一つだとはだれも思わないだろう。

「彼の孤独や承認欲求は理解はできませんがね。」

だからと言つてこんなやり方をしないで良かったと思えますよ」

「ああ、そうだな。」

しかし、この世のものとは思えない戦いだつた」

伊藤刑事は目の前で行われた戦いが未だ現実感が湧いていなかった。

それだけ、異能を駆使した戦いは別次元だったのだ。

「いや、こいつはかなり荒事に強いタイプだから。」

私にこいつ並みの戦いを期待されても困るぜ？」

「魔術師殿に頼るような事態がそうそうあつてたまるか」

伊藤刑事は、嫌そうに化粧屋にてそう答えたのだった。

事件のあつたその日の夜。

事件現場でテレビの取材班が現場の激しさを物語る光景をニュースで報道していた。

警察は発表を控えているが、二人の戦いの光景は遠くから多くの人間が撮影していたので、ニュースでは繰り返し、別々の角度から戦いの様子が流れていた。

「え……」

そして、元ヤクザの事務所ですり餅を食べながらニュースを見ていた召喚士が、その光景を見て唾然としていた。

「何をやっているんですか、あいつ……」

キマイラを操っていた方に心当たりがあつた彼女は、深々とため息を漏らした。

ゲツシユについて

『こんにちわー、レプちゃんです!!』

レプがカメラに向かって両手を振っている姿が画面に映る。

魔術師のチャンネルでは、事前の告知もあり昼間にも関わらず十数万人もの同時接続がなされていたのだが。

『なんだ、レプちゃんか』

『おいクソ妖精、魔術師さんはどうなったんだ?!』

『はよ代われ』

『自分の巣に帰れ』

彼女の登場に辛辣なコメントが流れた。

レプはあまりにも自由なのでついに自分のチャンネルを開設し、基本的にそちらで活動をしていた。

彼女のファンはそちらに流れ、魔術師の放送枠に登場しようものならこのようにコメント欄が荒れるのである。

『あっそー、せっかくマスターに頼まれてみんなにお知らせに来たのにそういうこと言

うんだー。

くすくす、じゃあもうしーらないっど』

ぷい、と顔を背けたレプはにやにやと笑っていた。

彼女は知っているのである。自分と飼い主の視聴者はほぼ同じであり、レプの放送では彼女を持ち上げ、こちらの放送ではふざけて罵っていることを。

『最初からそう言え』

『レプちゃん、情報はよ、はよ!!』

『こっちは気になって仕方がないんだって』

コメントの視聴者たちは、先日の渋谷の一件が気になって仕方がないのである。

魔術師と思われる異能者がキマイラと思しき怪物と戦い、勝利し犯人を警察に引き渡したと言う事件の顛末を。

事件からそろそろ一週間。

それまで警察も、魔術師も沈黙を保っていた。

『え？ なんだって？ 妖精の言語でコメントしてくれる？』

私、人間の言葉分かなーい』

そして隙あればクソガキムーブを繰り返すクソ妖精。

あまつさえカメラの前で寝そべって背中を向ける始末である。

『レプちゃん様、情報を御恵みください!! ? 5000円』

『あーもう、わかったから、早く早く!! ? 1000円』

『ほら、これでいいんだろ!! ? 200円』

『レプちゃんカワイイ この94 ? 4000円』

すっかり調教されている視聴者たちは、投げ銭を投げ付け始めた。

その様子を背中越しに振り向いて確認すると、レプはひよいと起き上がった。

『それじゃあ、重大発表をしまーす!!』

ばちばちー、と自分で言いながら拍手するレプ。

『88888888』

『。パチパチー』

『人間の言葉読めないのに数字は読める妖精』

『つてか、マジでどうなったの?』

もったいぶっているレプに、視聴者も焦れはじめた頃、彼女はこう言った。

『実は私、ASMRに挑戦しようかなって思ってるのー』

視聴者たちは思った。違う、そうじゃない、と。

『お前の声、音声出力じゃん!!』

『そのゆっくりボイスでASMRとか正気かよ!?!』

『およよよよよ、とか、はわわわわわ、とか言え』

『それ別の妖精やん、つてか違う、そうじゃない』

数多のツツコミでコメント欄が溢れかえる。

その様子を、レプはくすくすと笑って見ていた。

『ええと、実はねー、マスターがある企業とコラボ放送することが決まったのー。』

しかも初のコラボ企画なのに、地上波でも放送されるの!!』

十分に視聴者をおちよくって楽しんだレプは、自分の仕事をようやくし始めた。

『え、それマジ!?!』

『魔術師さん、いきなりテレビにデビューするの!?!』

『いやいや、すごく嫌な予感するんだけど』

『レプちゃん物言いじゃ、真に受けられないってどうか』

色んな意味で驚愕する視聴者たちに、レプは言葉を続けた。

『時間はこのあと十七時、生中継してるテレビ局は——』

レプはその後、テレビ局の名前だけを口にして、告知放送を終えた。

その時間に何が放送されるのか知っていた視聴者たちや、或いは番組表を調べた者は驚愕した。

その時間、そのテレビ局が放送するのは、沈黙を守っていた警視庁の記者会見なのだ

から。

§ § §

「これより、渋谷キマイラ事件についての記者会見を始めます」

記者会見の会場は、いつになく緊張していた。

警視庁側の席には、警視監や警視正と言ったお偉い方のほかに、伊藤刑事や『参考人・協力者』という肩書で仮面の魔術師が並んで座っていた。

記者たちもその異様な人物に戸惑って聞いた。

警察の捜査関係者を記者会見で発表させることは有っても、身内以外の人間をこうして公式の場に呼ぶことなど彼らの経験からしてもまず無いことだった。

「まず事件の概要について説明します。

逮捕された犯人は、自らをティフォンと名乗っており、身元や年齢など、戸籍の有無さえも不明であると分かりました。

犯人は一週間前の午後十三時十五分頃、渋谷の歩行者天国に魔術を用いて作成したと思われる生物を引きつれ、道路の中央で立てこもり周囲を威嚇したとの事です。

その際、ええー怪物と呼称させて頂きますが、その怪物の退去を訴えた警察協力者と

の論争となり、怪物をけしかけられ、やむなく戦闘が発生しそれを鎮圧。

犯人は暴行及び器物損壊、公務執行妨害などの罪で逮捕しました」

伊藤刑事が立ち上がり、事件の概要について話し始めた。

そしてすぐに、記者たちが手を上げ始めた。

「犯人の身元や戸籍も不明とはどういうことですか？

犯人は無国籍の人間だと言うことですか？」

「いいえ、それについてはまとめてご説明いたします。

ですが取り調べの結果、当人は日本人であると名乗っていました」

伊藤刑事がそう説明すると、別の記者が選ばれ発言を始めた。

「そちらにいらっしゃる方は、動画配信などで有名な魔術師さんでよろしいのですよね？」

「ええ、他に魔術師と名乗っている者が居なければ」

「警察への協力者との事ですが、犯人の対応は警察への要請があつてのことでしょうか？」

「いいえ、私とあと一人、同業者が事件の調査等のアドバイスの為に現場に赴きました。

犯人との戦闘に発展したのは、彼が自分の作品の性能を確かめたかったが故でしたので、やむを得ずでした」

魔術師は目の前に設置されたマイクに語りかけ、記者の質問に答えた。

パシャパシャ、と無数のカメラのフラッシュが浴びせられ、仮面の奥で彼は眩しそうに目を細めた。

「つまり、独自の判断で魔術を用いて戦闘を行ったと言うことですか？」

「そのように述べたつもりですが」

「その結果、数千万円規模の被害が発生したことについてどのようにお考えでしょうか？」

その記者の質問に、魔術師は首を傾げた。

「それはつまり、物的被害が出てしまうより、人的被害が有った方が良かったと言うことですか？」

「いえ、そういう意味では」

「私を上手く批判したいのなら、もう少し考えて物を言った方が良いでしょう」

魔術師の淡白な対応に、周囲からも冷笑が漏れた。

その記者も、顔を引きつらせて黙り込んでしまった。

「私が言うのもなんですが、犯人は意外と紳士的でした。」

周囲のビルへの被害を考えて、怪物を操っていました。彼はやろうと思えば、あの周辺を火の海にすることもできたのですから」

魔術師が皮肉げにそう言うと、また別の記者が指名され発言を許された。

「では、怪物の鎮圧は必要不可欠だった、と言うことですか？」

「犯人の動機は、怪物の性能テスト、そしてその成果を示すことでした。」

私が止めなければ機動隊や自衛隊が出動し、人的被害があつたでしょうね。

あれは戦車に随伴歩兵の小隊が武装してようやく対等に戦えるレベルの相手です。

その時は街中で戦車砲を撃つ羽目になるでしょうが、その場合は彼らが批判されるの
でしょうね」

嫌味を言いながら質問に答える魔術師。肩に乗っているレブは可笑しそうに笑つて
いた。

「ええと、犯人の確保や怪物の誘導は難しかったですでしょうか？」

「犯人が操っていたからこそ、あの程度の被害で済んだのです。」

彼が怪物を野放しにしたら、数十億単位の被害が出たでしょうね、人的被害も計り知
れない。

……他に質問はありますか？」

とりあえず当時の状況で聞きたいことは済んだのか、記者たちは手を下した。

一人を残して。

「そこにあなた、どうぞ」

「魔術師さんの対応が最善だったと言うのは理解できました。

では、なぜあなたが記者会見にまで出張ってきたのですか？

「協力者がそこまでする必要があるのですか？」

「その質問を含めて、次の内容に移ってもらってもいいでしょうか？」

魔術師が視線を向けると、プロジエクターを職員が起動し、あらかじめ用意されていたスクリーンに映像が映し出された。

そこには、ある一室でティフォンが木人と対峙している様子が投影されていた。

「これは異能犯罪を起こした人間に対して実施する、異能の判別テストの記録です」

伊藤刑事がそう説明すると、映像が再生される。

次の瞬間、ティフォンの腕がゴリラのような毛の覆われた剛腕に変化し、一歩も動かず木人を木端微塵に砕き潰した。

そして巨大化した腕は、しゆるしゆると元の人間の腕に戻っていく。

記者たちは、その様子に絶句するしかなかった。

「ハッキリ言います、あの怪物は芸術作品に過ぎません。

あの怪物を抑えるより、彼を鎮圧する方がよっぽど骨が折れる」

魔術師はため息交じりにそう言い放った。

実はあの戦闘、彼は怪物よりずっと術者の方を警戒していたのである。

「彼の人体は、魔術的方法によって脳以外が改造されていました。」

DNA検査の結果、彼から数十種類の動物のモノと思われるDNAが検出され、その身体能力は私たちの想像をはるかに超えていました」

警視監は苦渋に満ちた表情で、こう続けた。

「つまり、彼を起訴し、何らかの刑が確定し刑務所に入れても、彼はそのまま刑務所の壁を壊して歩いて出ていけてしまえるのです」

カメラのフラッシュ音の絶えない記者会見の現場が、無音に包まれた。

「現段階で、彼を収容できる施設はこの日本のどこにも存在しえません」

それは警察組織の敗北宣言だった。

彼を収容しても、そこから逃げることを阻止することもできないのだ。

そして一度逃がしたらDNA検査も無意味で、自分で顔も弄ることだって彼は出来るだろう。

彼をもう一度掴まえ、それを証明する事は科学的に不可能だった。

その上、仮に捕捉できても、あの人間生物兵器を逮捕できる警察官など居るはずもない。

「では、犯人はそれを承知だから公然とあのような怪物を連れ歩き、混乱を引き起こしたというのですか？」

「少なくとも、そう思っていた、と犯人は証言していましたね」
警視監は疲れたようにそう記者に答えた。

「故に私が、調停者として間に入るようになりました」

そこで、魔術師は一枚の羊皮紙を取り出した。

「司法で裁くことが無意味である以上、魔術的な拘束力を発揮するこの誓約書を彼にサインさせました。」

今後彼はこの誓約の内容を破ることが出来なくなります」

「仮に、それを破るとどうなるのですか？」

「現代で言うところの、脳死状態に陥ります」

魔術師は誓約書を巻きながら、記者に淡白に答えた。

「そ、それは重大な人権侵害に当たるのでは!？」

「まさか、これは彼の人権、ひいては他の人々の権利を守る為ですよ」

魔術師は青ざめてそう言った記者にそう告げた。

「これは警察としても苦渋の決断でした。」

超法規的措置の一種としてご理解いただければと思います。

何分、魔術を使用する異能者の逮捕は世界でも数例、現行犯逮捕に至っては世界初の事例なのです」

色々と各所と摺合せを行った警視監は疲労を隠そうともせずそう告げた。

「魔術師さんに質問です。」

あなたは人々の権利を守る為とおっしゃいましたが、具体的にどのような意味でしょうか？」

「私や、犯人のような人間には前世の記憶があることは私の放送でも何度も話していることです。」

私の前世は、最も苛烈な魔女狩りの時代を生きました。

そして前世の私も、魔術の恐怖におびえる人々と同業者たちの間に立った。

犯人のような罪を犯した人間を野放しにして、あの時代のような悲劇を繰り返してはならないのです」

「では現代でも再び魔女狩りが起こりうるかと？」

「当時と現代の人間の間に、一体どれだけの精神的成長があるのですか？」

少なくとも私には、もう二度と魔女狩りは起こらないと思えないのです」

魔術師の言葉に、質問をしていた記者も思わず黙り込んだ。

くすくす、と誰にも聞こえない妖精の笑い声が響く。

「質問です。もし仮に今後似たような事例が起こりうるとして、それはある種の特権階級の温床になるではありませんか？」

そしてあなたは魔術の危険性を説いている立場のはずなのに、自ら率先して魔術の危険性を証明するのはその活動の一環としてですか？」

すると、次の記者はそんな切り込んだ質問をしてきた。

「誤解の無いようにお願いしますが、私には警察に介入する権限も無ければ義務もありません。」

自らを調停者として位置づけ、それを遵守しているに過ぎない」

「ですがあなたは自分を批判する相手に無差別に呪いを与える魔術を行使しているとおっしゃっていましたね。」

我々ジャーナリストは報道や言論の自由を尊ぶ者として、あなたの姿勢に疑問を抱かざるを得ません」

「なるほど、仰る通りだ」

「どの口が言ってるんだらうね」

記者の言葉を、魔術師は頷き、妖精は嘲った。

「その術は私の調停者の立場を保持するためのモノです。」

ですが私の術から逃れる方法は簡単ですよ。その術はこの国に居る人間にしか効果がありません。」

ですので、あなたが真に報道の自由を尊ぶジャーナリストなら、海外にでも行って存

分に私を批判なさればいい」

「それは……」

「どうぞ、海外で存分に批判してください」

魔術師の淡々とした言葉に、その記者は悔しげに質問を終えた。

レブは彼の肩で大笑いしている。

「私からも質問です。」

魔術師さんは調停者として、今回のように現行法の意味の無い犯罪を犯した異能者と私たちの間に立つとおっしゃりましたが、それは何かしらの法的根拠に基づくものなのではないですか？

先ほどの呪いに対する質問もそうですが、異能者であるあなたは私たちに正当性を証明できるのでしょいか？」

さつきから答えようのない質問が続くが。

「私の使用する魔術は、古代ケルトのドルイド由来の物です。」

本来、これは彼らの土地でしか使用できないはずなのです。

しかし、それがこの国で行使できる。私はそれを、この国特有の八百万の概念が関係していると考えています」

「ええと、つまりどういうことですか？」

「ケルト神話には、ゲツシユと呼ばれる誓約や呪いに近い物があります。

犯人との誓約に用いたのも、これの一種です。

私は己に、*“調停者として公平であれ”*とゲツシユを課しました。

これが守られている限り、私は神々の祝福を受けて調停者としての立場が保証されるのです。

当然、これを破れば私は破滅するでしょうが」

「は？ ……つまり、あなたの正当性は神が保証していると？」

「正確には、この国の神々が、でしょうね。」

勿論、この国の神社やお寺の方々を差し置いて申し訳ないと思つてはいます」

質問をしていた記者は、その捉えようによつてはふざけているとも思える言葉に絶句していた。

しかしそれに反論するのはどう考えても批判になるので、質問を終えざるをえなかつた。

このようにして、記者会見は魔術師劇場状態であらかじめ予定された時間で終わりを告げるのだった。

§ § §

「みなさん、どうも。魔術師です。今日は疲れました」

その日の夜の九時、魔術師は自宅で愚痴を言いながら生放送を始めた。

『警察コラボ公共配信お疲れー』

『テレビじゃ投げ銭入れられなかったんで、こっちで入れるわ。？5000円』

『魔術師さんがアホな質問をする記者どもを次々と論破するの面白かったわwww』

『いや、ほんとお疲れ様です』

『あの言論統制にも意味があったんですねー、見方変わりました』

と、視聴者たちは暖かくコメントで彼を出迎えた。

「正直に言いますと、私もここまで首を突っ込むつもりはなかったのです。

以前から警察の方々には協力していたのですが、私自らアクションを起こすつもりはなかったんですよ」

ただの愚痴を言うにしている割にインターネットに疎い彼は気付かずそんな心情を吐露した。

『まあ、海外の紙面じゃジャパニーズマスクドヒーローって見出しに出てるぐらいだし』
『そういや、アメリカの大統領がホットラインで魔術師さんと話をさせろ、って総理官邸』

に電話掛けたってニユースでやってたな』

『魔術師さんでも、やっぱり重圧感じるんだな』

彼の様子に、視聴者たちも同情的だった。

『犯人ってどういう人だったの?』

そして、そんなコメントが音声出力で読み上げられた。

「ニユースで言われているほど、悪人ではありませんでしたよ。

ただ彼は敵にも味方にも恵まれなかった。異能者ならだれもが抱くだろう孤独を抱えていました。

彼が人殺しにならなかつたことだけは、私も誇れる気がします。

ただ、彼は己で名乗つたように嵐のような人間ではありませんがね」

と、魔術師は語つた。その言葉の端々から、彼は犯人のことを嫌いになれないようにうたいた。

『まあ、心底邪悪な人間なんて殆ど居ないよな』

『魔術師さんとキマイラの戦闘風景再現MMDみたけど、キマイラの動き直線的すぎたしな』

『ああ、それ、やっぱりお互いに周囲に気を使ってたんだな』

『ティフオンって、嵐って意味なん?』

「ティフォンというのは、通りの良い呼び名はテュポーン。

ギリシャ神話最高最悪の怪物の事です。タイフーンの語源となった存在ですよ。

彼が女性なら、エキドナと名乗っていたでしょう。その両者の子が、キマイラなので
す」

彼はそのように解説をした。

『ほーん、なるほど』

『ああ、なんかのゲームで敵の総称でそんなのあったな』

『エキドナの方が有名よね、怪物の母として』

『当人もギリシャ神話の異形を名乗るにふさわしかったしな』

「テレビでも言いましたが、私は己にゲッシュを課しています。

あの時、あの場面で私が介入しないと言う選択肢は有りませんでした。

知っている方々も居るでしょうが、ゲッシュと言うのは試練という側面もあります。

ケルトの英雄や物語の主人公たちは、己のゲッシュを破らざるをえないような状況に
陥ったり、それを敵に利用されることが多々あるのです。

今回の一件は、まさにそれだったのでしよう。この国の神々が私の公平性を確かめる
為の試練だったのだと、今では受け止めています」

魔術師の仮面から深々とため息が漏れた。

『魔術師さん、前向きww』

『あー、なるほど』

『めっちゃ試されてますねえ』

『実際、それ破るとどうなるの?』

「さあ、多くの場合は事故と言う形だそうですが、私の場合はまずはこのアカウントがBANされるのではないでしょうか?」

「魔術師はコメントの反応にそのように返したのだが。」

『草ww』

『アカウントBANは草ww』

『それだけなんかいいww』

「思わぬ解答に、視聴者たちが笑っていると。」

「試練は何度も訪れ、破るたびに累積すると思われるので、そうも笑ってられないですけどね」

「そこまで言うってから魔術師は、十秒以上言葉を発しなくなりました。」

「どうしたの、と心配そうなコメントが流れる中、彼はようやく口を開いた。」

「私が魔道の道を歩み、こうして生放送を始めた、己にゲツシユを課したのは前世が理由なのですよ。」

私自身、魔術の実践をする為だけのモノでした。

私が調停者として振る舞うのは、義務感や使命感などではなく、単なる己のエゴに過ぎないのです。

私は私自身が公平な人間ではないのは良く理解している。

地位や名誉なんて興味などなかったのに、運命はそれを許そうとはしないようです」それは彼の初めての弱音だった。

『まあ、当初の魔術師さんって淡泊だったしね』

『まさに最低限の公平さって感じで警告してたからなあ』

『私は、こうして前よりコメントに反応してくれるようになって嬉しいですよ!!』

『前の方がストイックで良いって人もいるけど、他の普通のライブーさんみたいな魔術師さんが良いって人もいっぱいいるから!!』

『生放送は双方に意思疎通できるからこそ、だもんね』

『……皆さん、ありがとうございます』

コメント欄の励ましを見て、魔術師は少しだけ仮面の奥で微笑んだ。

『魔術師さんがデレた!!』

『デレだ、魔術師さんにデレ期が来たぞ!!』

『これは切り抜き動画待ちですね』

『コメントの反応に草ww お前らそれだけでいいのかよww あ、自分も切り抜き楽しみです』

今日もそんな風に騒がしいコメント達を見て、彼は少しでも救われた気持ちになれるのだった。

特典について

「小池くん、ここよ。ここに入って来て」

「う、うん、だけど俺、こういうの初めてで……」

「大丈夫よ、すぐに慣れるわ……私が教えてあげるから」

「あ、すごい……こんな風になってるんだ」

「そう、そうよ、そのまま奥まで来て……」

ぴろりん、と黒衣の魔女はスマホのゲーム音に即座に反応してアイテムボックスを開いた。

そこには『友達紹介特典』と称して、ガチャに必要なアイテムや行動力を回復するアイテムが送られてきていた。

それを見た彼女は、にやりとほくそ笑んだ。

「あの、ギルド登録したよ。」

ギルド画面ってこんな風になってるんだね」

小池はゲームのランキングで上位のギルドにのみ与えられる豪華なギルドの画面背景を見ながらそう言った。

「じゃあ、メインストーリーをプレイヤーランクが20になるまでひたすら続けて。それまでは行動力消費ゼロだから。それでレイドバトル機能を解放するの」

「ええと、初心者特典の最高レア選択チケットは誰を選べばいいのかな」

『桜花の騎士サクラ』一択。ゲーム内設定的にもキャラ性能的にも最強だから」

「わかった。この子を編成で先頭にすればいいんだね」

「そうそう。とにかく最初は彼女を最大強化して。そうすれば曜日任務の周回が楽になるから。」

イベントが無い時はとにかくそれを回して。

コンスタントに行動力を消費してキャラを強化していけば、初心者でも一週間程度でイベント最高難易度をクリアできるわ」

「プレミアムガチャは回した方がいいの?」

「ダメ。ガチャは限定ピックアップの時にだけ回すの。」

その時だけは排出される最高レアが四人にまで限定されるから、強キャラをなるべく狙い撃ちにするの」

「じゃあ、回すなら今やってるピックアップの方を回すんだね」

「うーん、でも微妙なのよね、今の限定ピックアップアップの面子」

魔女はガチだった。教え方も、ゲームの効率的な進め方も。

そんな感じで彼女は小池と頭を突き合わせて、ファーストフード店の二人席でスマホゲームで遊んでいた。

そして、同じ店内の端っこの方で、怨念の籠った視線で小池を凝視している者もいた。春美である。

「うぐぐぐ、ゲームの紹介特典程度の方際でえ」

「春美さんいい加減にしたらどうです？ 正直見苦しいですよ」

「ぬうぁんですつてえ？」

バカにしているというよりは、本当に見ていられないと言った風な物言いをした望海だったが、嫉妬に狂う般若の如き春美にはそんな繊細な機微を理解できるほど余裕はなかった。

「ハツキリ言つて付き合い切れないんですが」

望海は彼女の相手するのを止めて、テーブルに置いてあるポテトを口に運び始めた。

そんな二人とは別のボックス席に、いつもの三人とカタリナが座っていた。

向こうの二人のデートをデバガメしていると言うより、その春美が何か仕出かさないうように見ていると言った意味合いの方が強かった。

実際にはそれも飽きて、普通にだべり始めていた。

「はあ、魔術師さん素敵……ガチ恋しそう」

なんて言いながら、昨日の警察の記者会見の動画を眺めている真冬だった。

「物理的に法の意味が無いってすごいよな」。

魔術師さんと犯人が戦ってる動画みたけど、マジでRPGみたいだったし」

「私もその動画見たけど、キマイラもヤバかったよねえ」

流石に夏芽と千秋も、そのセンチシヨナルな話題に持ちきりだった。

「そんなに話題になるようなことが起こってるのですか？」

「えッ、カタリナさん知らないの？」

「うちの教会には神父様が他の教会とやり取りするための古いパソコンしかありませんから」

「テレビも無いの？」

「神父様の部屋にしか」

それを聞いて、今時の女子高生三人は思わず顔を見合わせた。

「携帯は……って、そうだった、カタリナさんの携帯って電話とメールが出来るだけの奴だったっけ」

「最低限のもので十分でしたから。それも高校に通うからと言ってわざわざしつらえた

ものですよ」

それを聞いた彼女らは本当にカタリナが自分たちと同じ時代を生きているのか分からなくなってしまうた。

「じゃ、じゃあ、カタリナさんはこれを見てどう思う?」

と言つて、真冬は渋谷で起こった魔術師の戦いの動画で一番見栄えが良いのをカタリナに見せた。

「……………」

「え、無言?」

「いえ、ただ、衰えたな、と思ひまして」

黙つてその動画を見ていたカタリナが一切喋らないから不安になった真冬が心配になると、彼女は首を振つてそう短く呟いた。

「衰えたつて、どういうこと?」

「言つてませんでしたが? 彼と私も前世では刃を交えた間柄だったんですよ」

おうむ返しに問い返す夏芽に、カタリナがそう答えた直後だった。

ガバツ、と隣に座る真冬がカタリナの腕を掴んだ。

「なにそれ初耳、詳しく」

「真冬、止めなさいよ」

「だ、だってー」

千秋に咎められ、厄介オタクの如きムーブをしようとしていた真冬は諦めきれないのか表情を崩した。

「落ち着きなさい、この程度の話くらいいくらでもしますから」

「わ、わあ、カタリナさん大好き!! 何か食べます?」

やんわりと真冬の腕を押し返してカタリナがそう言うのと、真冬は目を輝かせた。

「まあ当然かもしれないませんが、彼が魔術を用いてまともに戦ったのは今生では初めてだったのでしよう。」

妖精の力を借りて、ようやく以前の七割と言ったところでしょうか」

「これで、七割なの!?!」

「ええまあ、彼の全力を見たことがありますが、これも本気で戦っているわけではないので正確には言えません」

驚く夏芽に、カタリナは頷いて肯定した。

「以前の彼は、ケルト神話で語られる影の国で修業をした戦士たちにも劣らない強さでしようね」

「えッ、それマジですか?」

カタリナの語り口に、真冬も思わず素になってそう言った。

「それってヤバイの？」

「うん、かなりヤバイ」

よく分かっている千秋が真冬に尋ねると、彼女は真顔で頷いた。

「彼とかつての私が戦った際は、こちらが五十人ほどでした。」

彼は一人で、我々を誰も殺さずに打ちのめしました。

まさしくケルト神話の英雄、クーフリーンの如き武勇でしたよ」

「ほ、ほげー」

その惜しめない称賛に、真冬も変な声が出てしまっていた。

「一人で、五十人に勝ったの？」

神話の英雄と比較されても、なんだか現実味が湧かないっていうか」

「まあ、苦境でさえ百人の敵を倒したクーフリーンと比べるのはいささか大げさでしたね。」

ですが当時の彼は、比較対象が神話くらいにしか存在しなかったのですよ」

実際に魔術師が戦っている動画を見てなお実感が湧いていない千秋に、カタリナはそれのように述べた。

「彼との出会いは、私の中でも印象的な出来事の一つです」

カタリナはそのように前置きし、話し始めた。

「かつての私は、魔女が現れ人々を脅かしているという話を聞き、部下たちを連れて討伐に向かいました。」

件の村に向かい、村民たちに聞き込みをするうちにそれは事実であると私たちは確信しました」

「話の腰を折るようで悪いのですが」

望海が四人の座っているボックス席にやってきた。

千秋と夏芽が奥に詰め、ギリギリ彼女はその席に座ることができた。

「魔女狩りってでっち上げとか迫害とかばかりだったそうじゃないですか。」

その件もそうじゃなかったと、言えるんですか？」

「ええ、かつての私は生涯で本物の魔女を五人殺しました。」

尤も、その百倍以上無関係な人間も殺しましたが」

望海の追及に、カタリナは淡々と答えた。

「魔女とは、今でいうところの流行病なのですよ。」

最近でも特効薬の無い新病が流行っているでしょう？」

誰も対処法が分からないから流言飛語が飛び交い、差別し、過剰に反応する。それらの病は悪魔と契約し、邪悪な魔術を行使する魔女が齎した。そういうことになるのです」

「日本じゃ西洋医学が入ってくる前の昔は、体の中に虫が居てそれが悪さをするから病気になるんだ、なんて信じられてたけどそれと同じってこと？」

要するに誰かのせいにしたかっただけなのか、と千秋が口にする、カタリナは頷いた。

「やだなあ、そういうの」

「かつての私が殺めてしまった無辜の人々に申し訳ないとは思いますが、それでも必要なことではあったと今でも思っていますよ。」

事実、邪悪な魔術で人心を惑わし、人々を食らう魔女が居たわけですから

その良し悪しは別として、と小さくカタリナは呟いたのを夏芽たちは聞き逃さなかった。

「ここで誤解を承知でこのように言いますが、魔術を用いて事実上の不死や不老となるのはそれほど難しいことじゃないのです」

「えッ、本当なの!？」

「ええ、かつての私が殺した五人の魔女は今の春美と大差ない程度でしたが、それでも魔力の扱いを覚えた者なら誰でもできる現実的な方法があるのですよ」

思わず不老不死に反応してしまった千秋だったが、この話の流れから何となくどんな方法なのか聞こうとは思えなかった。

「それって、まさか」

「ええ、魔力とは人間の生命力に根差した根源的な力だと考えられています。

それを他人から根こそぎ奪えば、まあ一時喉を潤す程度ですが、若さや寿命を保たれるわけです」

それはまさに外法だった。

「じゃあ、一年寿命を延ばすのに、どれくらいの人数が必要になるんですか？」

「考えたくもありませんね」

カタリナは真冬に首を振って見せた。

「そしてかつての私は、ペストは他人から効率的に魔力を奪う魔法の術だと信じてました。

魔法こそが、全ての諸悪の根源であると。

さて、件の魔法も、その村で村人から死ぬ寸前まで魔力を奪って回っていたのです。

中にはそのまま衰弱死した人間もいたくらいです」

「酷い……」

夏芽が顔を顰めて呟いた。

「かつての私と部下たちは、その魔法の潜むねぐらに押し入り、素早く殺しました。

ホンモノ相手に口上や拷問などしません。結果だけを村人たちに伝えようとしまし

た」

「一件落着、と言う割には魔術師さんの魔の字しかでませんね」

「ええ、彼と出会ったのは魔女を殺したそのすぐあとだったのです」

望海の言葉に、カタリナは記憶を振り返りながらそう言った。

「魔女を殺し、村に報告しようとした時、彼は私たちの前に現れました。

「これだけは話しておきたかった、と言つて」

「あの、あの、魔術師さんの前世つてイケメンでしたか!？」

「ここにきて予想外な話の腰の折り方をする真冬に、他の三人は呆れたようにため息を吐いた。

「いえ、当時の彼は老境に入る頃でしたから、良くわかりません」

「イケジジ……有です」

勝手な想像を膨らませている真冬を無視して、カタリナは話を続ける。

「ええと、どこまで話しましたか。」

そう、彼が私たちの前に現れたと言うところでしたね。

彼は己を調停者だと名乗り、村人たちとあの魔女との間に起こったことを話し出したのです」

「いよいよ魔術師の登場に、話を聞いている面々も息を呑んだ。

「村人たちは、数か月の水不足に悩まされていました。」

「そこにあの魔女が現れ、こう言ったそうです。自分なら雨を呼び寄せることができる、と」

「なんだか、一般的な昔話みたいな展開になってきましたね」

「事実昔話ですからね。」

結果として、村は魔女に雨乞いを依頼しました。

そして、彼女は実際に雨を呼び寄せたそうです。

しかし村人たちは、彼女を恐れ魔女として告発しようとしたのです」

「村の人たちはその魔女を裏切ったんだ……」

夏芽は衝撃を受けた様子でそう漏らした。

「当然、魔女は怒り、村人たちを殺そうとしたそうです。」

その間に、調停者は入って彼女の凶行を諫めたのです」

「……あれ？ でも、その魔女って村人の魔力を奪って行ったんだよね？」

魔術師さんはいったい何をしたの？」

「村人たちに非があったので、皆殺しのところ生け贄を定期的に差し出すことで収めることにしたそうです。」

彼がしたのは、それだけだそうです」

事実上何もしていないことに、その話を聞いていた四人はぼかんとした。

「村とその魔女の不幸があるとすれば、告発を受けてやってきたのがかつての私の一団だったということでしょう。」

かつての私は、魔女と契約したと言うことで村を焼き滅ぼしました」

「……………」

四人は、その自業自得と言うにはあまりな結果に黙り込んでしまった。

「恐らくですが、調停者は私たちがそのような行動に出ることを承知でそのことを話したのでしよう。」

今生の彼を持ち上げ、英雄視するのは結構ですが、彼は決して無辜の人々の味方などではない。

一般人側に非があるなら、異端側に着くでしょう。それをよくよく頭に入れておくことです」

そこまで話して、カタリナは冷めたミルクティーを口に運んだ。

「…………それはわかったけどさ、肝心なところが抜けてない?」

夏芽の指摘に、露骨にカタリナは眼を逸らした。

「あッ、そう言えばカタリナさん達が魔術師さんと戦ったつてくだりはどこに?」

千秋も話題の根幹を思い出し、そう言うのとカタリナも観念したようにこう言った。

「村を焼いた後、かつての私たちは彼を追って後ろから不意打ちしたのです。

彼も魔女の存在を許容した異端者には変わりなかったですから」

「えげつなッ」

「所詮騎士道なんて同じ神や価値観を共有している間同士にしか成立しませんもんね」

ドン引きしてる真冬に、嫌味っぽく言う望海だった。

「言つたでしょう、ホンモノ相手に前口上も拷問も無しだと。」

ただまあ、結果だけを言うのなら……」

「返り討ちになった、と」

「最初は十人で掛かり、それでは足らぬと増援を呼んでとにかく数で圧殺しようとした」

カタリナの記憶にも、その戦いは鮮明に残っていた。

上着を脱いで上半身を露わにし、古代のケルトの戦士がそうであるように彼も鎧などは着けずに大勢の傭兵に囲まれる調停者。

老いに入ったはずのその男に、しかし歴戦の傭兵たちは気圧されていた。

「彼の雄たけびは精霊術の一種で、たった一人なのに数百の軍勢を相手しているように恐慌状態に陥りました。」

彼は縦横無尽に我々の陣形に飛び込み、投げ、打ち、時には槍や縄を器用に使い一人

一人無力化し、軽妙な動きで我々の兜を踏んで飛び回った」

カタリナの口調は徐々に真に迫るような迫力が伴って行った。

「我々が全員地面に転がされた後、たまたま地面に突き刺さっていた槍の石突きの方に立ち、彼はこれ以上戦っても無意味だと言って去って行きました。

我々は彼を追うこともできませんでした。しかし、さらに多くの人数で挑んでも同じことだと結論に至りました」

「それって、異端を見逃したってことにならないんですか？」

そこで望海が意地悪なことを口にした。

「知らないのですか？ ドルイドたちの崇める神は、キリスト教の神と同じ……と言うことになっています。

かの調停者は魔女の脅威から村の人たちを守ったのだ、ということになりました」

「ず、ずつ（い）」

総長たちの手のひら返しに、思わず夏芽が呟いた。

「我々は傭兵ですよ、勝てない敵とは戦いません。

どんな屁理屈をこねようとも、最終的に生き残ったのですから問題ないのです」

その言葉を皮切りに、身じろぎもせずカタリナの話聞き入っていた面々は力が抜けたように背もたれに体を預けた。

「まあ、そう言った彼の武勇を知る身としては、あの程度の相手に手こずるのは正直複雑と言いますか」

「いや、あのキマイラのどこがあの程度の相手なのよ」

そのどことなくプライドの高さを感じる物言いに、千秋は呆れていた。

「望海、手伝って……あの招待特典が入るギルドバトルの貢献ポイント根こそぎ奪い取ってやるのよ」

「はいはい」

春美がボックス席の向こう側から這い出るように顔を出し、そんなことを言いだすので望海は仕方なくしばらくの間ログボ勢だったスマホゲームの画面を開いた。

「あれ、装備が全部外れてるんですけど」

「ちよつと前に装備の仕様が変わったのよ」

「……師匠、ちよつと教えてほしいんですけど」

望海は頭を掻きながら向こうで遊んでいる二人の元に歩いて行ってしまった。

そんな師弟の様子を、夏芽たち幼馴染組は面白そうに笑って見ていた。

「やれやれ、そんなものの何が楽しいのやら」

自分の携帯はゲーム機能が付いていなくてよかったと思う、カタリナだった。

親について

夜の十二時、日付が変わると同時に繁華街の店が閉まり始める。

この一角はキャバクラやクラブが並んでおり、風営法によつて十二時以降は営業できない為一斉に店が閉まるのだ。

中には朝まで営業している店もあるが、この町では長く続かないのが常だった。

そして、今日もあるキャバクラ店が店じまいをし、キャストたちが帰宅しようと店から散り散りになろうとした時だった。

「ちよつと、えりなちゃん」

その呼び声に、えりなと呼ばれた女性はびくりと固まった。

女性と言つてもまだ彼女は十代後半で、まだ幼さが滲み出ていたが。

「な、なんですか、るり子さん」

えりなは背中にびりびりしたものを感じながら、振り返つた。

そこに居たのは、えりなより少し年上に見える女がいた。

えりなと同じ店に勤務しているキャストの一人だ。

だが、見た目は若そうでも彼女はこの町で十年近くキャストを続けている大先輩だった。

彼女の店の同僚だけでなく、この繁華街で彼女に頭の上がる人間は少ない。

古臭い言い方をするなら、まさにこの繁華街の女王だった。

「あなた、厄介な客につかまってるって聞いたけど、本当なの？」

「え、それは……」

「本当なのね」

えりなの態度を見て、るり子はこつこつとハイヒールを鳴らして彼女の目の前まで歩み寄った。

「他の子が噂してたわよ、客からのメールを見て辛そうにしてるって」

「で、でも、私、要領悪いし、同伴してくれるお客さんは貴重だから……。じゃないとお店のノルマが……」

「ノルマなんてどうでもいいのよ、スマホ見せて」

るり子の感情の見えない視線に耐えかねて、えりなはスマホを差し出した。

「ヤラせろ、ヤラせろ、二言目にはヤラせろ、ね。」

えりなちゃん、まさか応じたりしてないでしょうね？」

彼女のスマホのメール画面を見たるり子の詰問に、えりなは涙目になって何度も頷い

た。

「そう、ならいいわ。体は大事にしておきなさい。

私はこの勘違い男を呼び出して話を付けておくから、あなたはもう帰りなさい」

「は、はい、ありがとうございます」

「ノルマも、店長が何か言ってきたら私に相談しなさい。

私の客をそっちに回してあげるから」

るり子はメールを打って客に送信すると、彼女にスマホを返した。

「それじゃあ、行ってくるから」

そう言つて、るり子はネオンの灯りに照らされる夜道を去つて行つた。

その後ろ姿を、えりなは頼もしそうに見ていた。

§ § §

同僚に付きまとう厄介な客に話を付けると、るり子はその客に車で送らせて帰宅した。

同じ車に客と乗るのを怖がる者も多い中で堂々と彼女は客の足で帰つたのである。

「ただいま」

二階に明かりがついていることを確認していても、るり子は習慣的にそう口にしてしまふ。

真つ暗な一階の玄関から廊下に明かりをつけることもせず、彼女は自室へと向かった。

彼女が自室の扉を開けて、壁のスイッチを入れて電気を付ける。

すると、彼女は部屋の變化に気付いた。

安物の折り畳み式の小さなテーブルの上に、一枚のA5用紙が置かれていた。

るり子はそれを手に取ると、その内容を目で追った。

そこには、『授業参観及び保護者説明会のご案内』とあった。

提出期限は明日だった。彼女は初耳だった。

彼女は参加不参加を記入する欄に、チェックを入れた。

“参加”の方へと。

るり子はそれを一階の階段へと置いた。

それが、彼女と娘の数日ぶりのコミュニケーションだった。

今にも、彼女は夢に見る。

「お母さん、これを飲んで」

僅か八歳の少女が、ぐつぐつに煮えた液体の入った巨大な窯を背に言った。差し出されたのは痛覚を麻痺させる毒薬だ。

そうとも知らず、夢の中のり子は少女からそれを受け取って飲み干した。

るり子はその場に崩れ落ち、声も出せずに少女に何度も問いかけた。どうして、と。

驚愕の表情のまままで固まっているるりに、少女は無垢に笑いかける。

「大丈夫だよ、お母さん。それを飲んでいれば痛くないから」

そして少女は用意していた短剣を取り出した。

何をこれからされるのか察したるり子は、恐怖のままにうめき声を出すことしかできなかつた。

彼女はどうかその想像が現実にならないことを祈った。

「えいッ」

非力な少女が渾身の勢いで短剣を振り下ろす。

彼女の祈りは、届かなかつた。

少女は何度も、何度も何度も短剣を振り下ろした。

痛みは無くても、異物が自分の体を削り取っていく感覚だけはどうしても残る。

「えい、えいッ」

少女は健気に作業を行う。

両手両足を苦心して切断し、返り血でまみれたまま少女は馬乗りになって血まみれの短剣を振り上げた。

やめて、と心の中で何度叫んだか分からない。

少女はやはり止まることなどなく、首の切断を始めたのだった。

不思議で、不快極まる感覚だった。

五体と首がバラバラにされ、それでもなお意識を保っているというのは。

「それ、よいしょっと」

少女が、母親と呼んでいた物体の四肢や胴体、首を窯の中に放り込んだ。

その中身はいかなる薬液なのか、苔のように濃い緑色をしていたその中身が真っ赤に染まる。

少女は窯の中身をかき混ぜながら、呪文を唱え続けた。

それは女神ヘカテーへの祈禱の文言であり、賛歌だった。

少女は三日三晩、窯の中身の液体が無くなるまでかき混ぜつづけた。

るり子が目を覚まし、最初にしたことは実家に電話することだった。

三日に及ぶ儀式に疲弊し衰弱していた少女の姿も目に入らず、駆けつけてきた彼女の両親が発見して初めてるり子も気付いたほど彼女の精神状態は平常ではなかった。

「おまえさん、いったいその体どうしたんだい。」

まるで、うちを出て行った頃のまんまじゃないか」

もう六十を超えたるり子の母が、その姿を見て驚愕したのは無理はない。

るり子の実年齢は、もう四十歳を超えていた。それがどう見ても学生のように若々しい姿をしていた。

それが、少女の儀式の成果だった。

しばらくの間、自分の母親に世話になりながらそれまでの半生を彼女は振り返った。

両親と大喧嘩して、家を飛び出した彼女がやれる仕事と言えば水商売くらいだった。

幸いなのか、当時はバブルの真っ最中。

お金を持っている連中に貢がせるのは容易な時代だった。

勿論、それは長くは続かない。人はずっと若くはいられない。

東京の繁華街でいつまでも客を維持することは難しかった。

そんな彼女が三十を超えた時、彼女はある男の愛人になった。

一番の理由は生活苦だったが、このままずっと水商売を続けていられないだろうと心

のどこかで思っていたのだろう。

カネと権力を持ち合わせた男だったが、ある時を境に姿を消した。

彼女と、彼女のお腹に居る子供を残して。

そうなった時には、もう彼女は子供を下すという選択肢は取れなかった。

彼女にとって、自分の娘は他人も同然だった。

男と自分を繋ぎ止める楔にしか過ぎなかったのだ。

それでもお腹を痛めて産んだ子を見捨てるほど、彼女は薄情でもなかった。

愛を注いだ覚えは無かったが、生活に不自由はさせなかったはずだ。

そうして仕事をすればするほど、自分と周囲の空気が浮き彫りになる。

どんどん若い子が、お店で成績を伸ばしていく。

若い子たちからいつまでもこの業界にしがみ付いていると笑われる。

執念だった。その道以外で、生きる方法など彼女は知らなかった。

日に日に荒んでいく彼女に、小学生になった彼女の娘がこう言った。

「お母さん、わたしお肌を良くする方法を知ってるよ」

顔を見れば当たり散らすのが当たり前だったのに、その時ばかりは彼女は娘の話に聞き入っていた。

そして次へ、次へと、るり子は魔術の泥沼に嵌まって行った。

やがて、最大の秘術に手を出してしまうほどに。

魔術に手を出して、その神秘に触れるようになって、彼女は気付いてしまった。自分の胎から生まれ落ちた実の子供が、想像を絶する化け物だということに。それ以来、るり子は自分の娘と目を合わせたことがなかった。

§ § §

授業参観日当日。

いつもの四人は居心地が悪そうにしていた。

「うちの両親、忙しいのに二人とも来てさあ」

「それだけあんたが心配なんですよ」

夏芽は教室の後ろで話している保護者達に目を向け、そうぼやいた。

千秋の母親も夏芽と真冬の親と話している。当然、彼女らは昔から知り合い同士だった。

「授業参観とかテンション下がるよね。」

そう言えば、春美ちゃんの親ってどこに居るの?」

真冬は少しでもこの居心地の悪さを共有しようと春美に話しかけたのだが。

「うちの親は来ないよ。不参加」

「え、そうなの？」

「脳みそにカビ生えてるの。」

私が師匠に魔術を習うことを伝えたら、狂ったみたいに猛反対してさ。

そんなものに関わるな、だとか、もつとまともな将来を考えろ、とかさ。

ホントマジでウザいの」

露骨に嫌悪感を露わにしている春美に、幼馴染三人はそんな家庭環境だとは知らずに顔を見合わせた。

「私の両親さ、昔から書道だとか学生塾だとか水泳だとかピアノだとか、色々習い事をさせられてたの。」

高校になったら流石に減らしたけど、まだ習い事とかしてたの。

それを全部やめて師匠に師事することにしたから、そりやあもう大激怒でさ」

「……まあ、気持ちわかるけど」

千秋はそんな風に当たり障りのない言葉で春美の不満を受け流した。

「カタリナさんの親は、って、聞くまでも無いか」

夏芽の視線の先には、神父服の中年の男性が立っていた。

「神父様は親代わりですが、肉親ではありませんよ。」

私の両親は都合がつかなかったのです」

「まあ、割と急だったしね」

カタリナ言葉に、夏芽も納得した。

学校側はとにかく早く保護者に説明したかったのか、急な日程だったのだ。

それでも、保護者の人数は教室の後ろ側に入りきらないほどだ。

「まるで入学式か卒業式みたいな人数だね」

真冬は廊下にまで保護者達が溢れかえっている様子を見て、そんなことを眩くのだった。

そして授業参観は、つつがなく終了した。

生徒たちは午前中で下校になる為、彼らは昇降口に向かおうとするのだが。

「人が多すぎて邪魔すぎる……」

「この町って、こんなに人居たんだね」

廊下を少しずつ進む千秋と真冬が辟易していた。

帰ろうとしている他の生徒もいるので、廊下は混沌としていた。

四人が何とか昇降口にたどり着くと、混雑は大分マシになっていた。

「お母さん、説明会にはいかないの？」

「ええ」

すると、そこには黒衣の魔女とその母親らしき人物が話していた。

娘の方はこの学校では知らぬものが居ない有名人である為、多くの生徒たちが遠巻きに彼女らを見ていた。

「えッ、あれが魔女さんのお母さん？　すごく若いね」

「ああいうのを美魔女っていうんだろうね」

夏芽と千秋が二人の様子に驚いていると。

「だって、あなたを心配する必要なんて無いでしょ？」

学校側がどんな対策をしたところで、ねえ」

「……」

「私はこれで帰るから」

それだけ言つて、彼女は昇降口から出て行ってしまった。

その背を、魔女は黙って見ていた。

「あの女、来てたんだ」

軽蔑に満ちた視線を向けていた春美が、ぽつりと呟いた。

「春美ちゃん、あの人が知ってるんだ」

「そりゃあ、師匠の家で修業してるんだし。ホントにたまに顔を合わせるの。

あの人も滅多に顔を合わせないし、あんなのネグレクトも同然よ」

意外そうな真冬の言葉に、春美が吐き捨てるようにそう言った。

だが、すぐに春美の表情がこわばり、額に汗が浮かび始めた。

「人前で、そんな人聞きの悪いこと言わないで」

見れば、黒いケープの魔女が自分の手の中指を限界まで後ろに曲げていた。

「ご、ごめんなさい、師匠、言い過ぎでしたあ」

「……」

春美は素直に非を認めて涙目で謝ったが、彼女は無言だった。

ぎりぎり、と彼女の中指の角度が外側に徐々に狭まっていく。

「わ、わあ、魔女さんって指きれー!!」

どんなケアしてるんですかー!!」

ここで真冬が彼女に近づいてその手を取った。

それで術が解けたのか、春美は手を抑えてぶるぶると震えて痛みを耐えている。

「私も気になるな、私乾燥肌だし」

「うんうん、私も洗剤とかかしてるとすぐにあかぎれとかできるし」

空気を読んだ夏芽と千秋も彼女の元に歩み寄った。

「何をしているのですか、あなた達は」

その一連の様子を見ていたのか、カタリナがやってきて呆れたようにため息を吐いた。

「どうかしたのですか、カタリナ」

「ああ神父様、彼女ですよ」

彼女の後ろの人ごみを避けるようにして、神父が現れた。

「ああ、彼女がカタリナの言っていた……」

カタリナの促す先に居る黒いケープの魔女を見て、神父は頷いた。

「どうも、あなたのことは彼女から窺っています」

「こちらこそ」

傍から見れば、神父と魔女の邂逅である。

アニメやラノベの設定によつては殺し合いが始まってもおかしくない組み合わせだった。

尤も、神父の方はただの一般人に過ぎないが。

「あなたとカタリナが同じ時代の同じ国に、それも同じ年齢で生を受けたのは神の思し召しなのでしょう。」

「どうか、彼女と仲良くしてやってください」

「いいんですか、私は真正正銘の魔女ですよ」

「意味の無い出会いならば、それはこのような形にはなっていないでしょう。」

それに遠目からでも、あなたが母君を慈しむ心を持っているのが見て取れました。

「どうかあなたも、生まれ変わって再びカタリナと出会った意味を探してみてください」

「神父が、転生を認めるの？」

「全知全能たる我らが神にそれが不可能だとも？」

神が未だ我らに与える奇跡の恩恵は計り知れず、教えや聖書にその全容が網羅されているとは限らない。私はカタリナと接して、そう思うようになりましたよ」

見ようによつては緊迫した状況なのに、温和な神父の人柄なのか一触即発という空気には見えなかった。

「……あの時代、あなたのような人ばかりだったら良かったのに」

黒衣の魔女は若干目を伏せ、心の底から惜しむようにそう呟いた。

それは、彼女のどうしようもないほどの本音だった。

「買い被りすぎですよ。私はこの時代の一人の人間に過ぎません。」

さて、カタリナ。保護者説明会の会場は体育館で良いのかい？」

「ええ、あちらですよ」

そう言つて、神父は一人で廊下を進んでいった。

「二倍、ね。数字で計り知れないほど、あなたは恵まれているわよ」

その姿を見送つていたカタリナは、その言葉に何も言わなかつた。

ただ、普段の無表情な彼女の口の端が上がつているように見えた。

「そうだ!! せっかくこうして顔を合わせたんですから、これからなにか食べに行きましよう?」

「あ、賛成!! 近くのアファミレスとか行く?」

その場の空気を換える様に、千秋の提案に夏芽が乗つた。

「良いね、魔女さんもカタリナさんも一緒に行く?」

真冬が二人に尋ねると、ええ、と二人も頷いた。

「じゃあ、望海も誘つておくね」

「食べ終わつたらカラオケでも行かない?」

春美がスマホで望海にメールを送り、食後の予定も話し合い始める面々。

この日は、こうして何事も無く過ぎていくのだった。

魔術について

「つづ、ひやははははは!!」

その話を聞いた時、化粧屋は手を叩いて身体をのけ反らせて大笑いした。

「ぼツ、馬鹿でえ、わたしツ、言つたじゃねえか、味方に取り込むぐらいにしとけつて!!」
腹を抱えて笑いつづける彼女を、警察のお偉い方は苦渋に満ちた様子で見ることしかできなかった。

両者の間には、ティフォンが横たわっていた。

彼に息は無い、脈拍も止まっているし、体温も常温に近かった。

生物的に完全に死亡していた。

「おーい、起きろー。どうせ起きれるんだろ」

そんな彼の頬をぺちぺちと叩く化粧屋。

仮にも遺体にするのではないその所業に、お偉い方は目を剥いたが。

完全に死亡していたはずのティフォンがむくりと起き上がった。

そして、こう言い放った。

「ドツキリ大成功!!」

それから数日後。

「ほほう、これがゾンビパウダーか」

「そうそう、死体を使役する時に使うんだわ」

化粧屋とティフォンは打ち解けた様子で話していた。

場所は勿論、異能係の応接間である。

「ふむふむ、これは植物毒ではないな。」

フグの毒に近いが、それだけではないのだろうか？」

なんと、ティフォンは化粧屋が持ってきた毒々しい粉末を指先に付けてぺろりと舐めた。

「ああ、私の体の一部も粉末にして混ぜてある。」

この毒の調合の妙が死者を起き上がらせるんだ」

「術者の体の一部が混入してあるのは、魔術的なつながりが必要だからか」

「じゃないと操れないからな」

魔術の専門家同士の会話は弾んでいた。

「なんてものを持ってきてるんですか」

妻鳥がそんな二人の会話を聞きながら嫌そうにそう言った。

「それもゾンビなんて……」

「そんな拒否反応しめすなよ。」

ゾンビも使いやすいだけ？ 花見の時の場所取りとか、真冬の外でクリスマススの飾り付けをさせたりとかこのネタが分かるDMMゲーマーが居たら作者と趣味が合うでしょう。」

なんて、冗談めかして化粧屋は言った。

「そう言えばさ、今生でゾンビの扱いがヤバいことになって笑ったわ。」

何だよ、嘔みついて感染して仲間を増やすって。吸血鬼かよ!!

映画によっては人間よりも元気に走り回ってるのもあるしさ!!」

ドン引きしている彼を見て、可笑しそうに化粧屋が言った。

「本物の吸血鬼を知る身としては、その認識も間違っているとは思わがな。」

自分の眷属を増やすのは存外に大変らしいからな」

「本物の吸血鬼……」

妻鳥は目の前で繰り広げられている会話について行けなかった。

「吸血鬼か、私も話にしか聞いたことはないな。」

「あいつらって実在してたのか」

「ああ、前世で所属していた結社にて共に一員だった。

どいつもこいつも、なかなか個性派揃いだったぞ」

「だろいなあ、ははははは!!」

そんな感じで二人が談笑していると。

「おい、ティフォン、お前の処遇が決まった」

疲れた表情の伊藤刑事が異能係のドアを開けて入って来た。

「とりあえず、あんたの身柄は異能係で受け持つことになった。

要するに、丸投げだ。公安も上層部もあんたの扱いにはお手上げだ」

「でしようねえ……」

伊藤刑事の言葉に、妻鳥は達観した様子でそう呟いた。

つい数日前、ティフォンと警察上層部のお話があった。

それは彼の扱いを決める物だったのだが。

「あんた、ズルいよ。いつか私がやろうと思ってたのに」

化粧屋は口を尖らせてそんなことを言った。

「あの低俗で愚かなバカどもは、私に魔道技術の提供を迫ってきたのだから仕方ないだろう。」

そんなの死んだ方がマシ故に、死んでやったのだ!!」

そして当時のことを思い出して嘲り笑うティフォン。

「私も難癖つけて逮捕されたら、取調室で死んでやろうと思ってたんだぜ」

「それは悪いことをしたな」

「なんてこと計画してるんだお前は」

伊藤刑事は化粧屋の物言いのため息しか出なかった。

そんなことをされたら何人の首が飛ぶか分からないとでも言いたげだった。

「他の魔法使いさんたちも技術提供を頼んでるみたいですけど、誰もが断ってるそうです。」

「やっぱり、一子相伝とかそういうアレなんですか？」

妻鳥が気になってそのことを尋ねてみた。

「私らは魔術を生業にしてるんだぜ？」

それを寄越せって言われるってのは、警察官なら学歴を寄越せって言ってるようなものだ。

まあ、仮に教えたって真似なんて出来ないさ」

「それは、分からないじゃないですか」

「わかるさ。私は何人もの同業者を見てきた。」

魔術を極めた人間ってのは、おおよその共通点がある」

「それはたしかに」

化粧屋の意見に、ティフォンも頷いた。

「ほう、ちなみにどんな？」

「魔道を志す者は、基本的に陰キヤなのだ」

「ぶほッ」

彼の身も蓋も無い言葉に、化粧屋は噴出した。

「私の知り合いに、停滞を良しとする組織の体制と科学が席卷する世の中に対して物申そうとしようとした者がいた。」

魔術を用い、政府の要人や社会的地位のある人物を服従させ、国家や国際社会を裏から操ろう!! と、提案した者が居た」

「おいおい、そんなヤバイ考えを持った奴が居たのかよ」

うむ、とティフォンは伊藤刑事に頷いて見せた。

「結局は実行に移されなかったがな。」

私も、他の人間も、それを可能としたが想像をしてみようと思ったのだ、——何だかそう言うの怖い、とな。

我らの仲間、所詮身内同士でしか関わりを持ってないコミュ障ばかりだったのだよ」

「えええ」

思いのほか情けない理由に、妻鳥がうめき声に近い声を漏らした。

「なぜ物語などに登場する魔術師と言うのは、助言者や脇役ばかりなのか分かるか？」

野心や向上心などで、魔術は窮められないからだ」

「ああ、それはわかるわ」

「魔術を窮めて、不老不死を得て、無敵になりました。よし、世界を支配するか!! とはならないのだ。」

そんなポジティブな人間は魔術に魅入られない。

魔術とは果てしない自慰行為に等しく、自らの殻に閉じこもる物なのだ。

仮にポジティブな動機で魔術を会得しても、それを探求しつづけるうちに、魔術の行使は手段ではなく目的に移り変わる」

うんうん、と化粧屋はティフォンの言葉に頷いていた。

警察二人はその専門家の意見を、聞くしかできなかった。

「私も、その化粧屋も、勇者殿でさえも、魔術の恩恵を得たいからではなく、魔術の実践に必要なから他者との関わり合いを持ったのであろう。」

……我々はそう言う生き物なのだ」

その言葉を聞いて、ある種の納得をしていた。

魔術と言うのは、表舞台上で活躍する物と言うには後ろ暗いのが多すぎるのだ。

「じゃあ、化粧屋さんのようにある程度社交的な魔法使いは珍しいってことですか？」

「うむ？」

妻鳥の問いかけに、ティフオンはなぜか疑問符を頭上に浮かべた。

「いや、何ですその反応……」

「化粧屋よ、お前まさか、言っていないのか？」

「え……言う必要、あるの？」

ティフオンが少し咎めるように化粧屋に言うのと、彼女は露骨に視線を逸らした。

滅多に見せない化粧屋の態度に、二人は面を食らった様子だった。

なぜならそれは、引きこもりの人間に外に出ないのか、と言った時とよく似ていた。

「私が言うのもなんだが、それは後から事実を知った場合不快感を抱かれるのではない

のか？」

「いや、でもさあ、今まで問題なかったじゃん」

「信頼関係があるからこそ、明かすべきではないのか？」

「……………」

ティフオンはあんな騒動を起こしたとは思えないほど真摯な訴えだった。

「化粧屋、いったいどういことだ？ 何か後ろめたい隠しごとでもあるのか？」

「……怒らない?」

「俺はお前をそれなりに信頼して、対等に接してきたつもりだが」
「……………」

化粧屋は伊藤刑事の言葉に、再び深い沈黙した。

「ん……………」

やがて、化粧屋は無言で右手を突きだした。

「なんだ?」

「ん!!」

化粧屋は答えず、突きだした手を震わした。

伊藤刑事はその知り合いの姪のような反応に頭を掻きつつも、その手に触れた。

そしてハッと目を見開いた。——体温が無い、と。

「お前、これ……………」

「えッ、伊藤さん、どういうことっすか?」

思わず飛びのいた伊藤刑事の反応に、妻鳥も目を見開いて驚いた。

「そこに居る化粧屋は、本体ではない。」

その体は遠隔操作されたラジコンと同じなのだよ」

「だ、だけど、前は確かに体温が有ったぞ」

「死体を生きてるように見せるのは、死霊術師の業であろう？」
動揺する伊藤刑事に、ティフオンがそう答えた。

「これ、自信作なんだ。動物の肉をより合わせて作ったんだ、肌質とかこだわりがあつてさ。人間としか見えないだろう？」

「マジっすか」

そう言えば、と妻鳥は思い出す。

彼女は一度も自分とは接触を持つとはしなかったな、と。

「……驚いたが、どちらかと言うと死体を動かしていると聞われるかと思つてひやひやしたぞ」

「死者に敬意を持たないで、死霊術師は出来ないよ」

どんな言葉が飛び出てくるかと思つていた伊藤刑事は、その言葉にホツとした様子だった。

「え、つまり、化粧屋さんって安全地帯に居るから無遠慮な物言いが出るネット弁慶みたいなものだってことなんですか？」

「おい、そう言う言い方は止めろよ」

化粧屋は妻鳥の歯に衣着せぬ物言いに苦々しそうにそう言った。

「まあ、人体を使わないと再現できない。パーツとかあるけどな。」

そう言うのは、昔の伝手を使って調達するんだよ」

「おい待て、それはどういうことだ？」

「あッ、今の無し」

話の弾みでつい口を滑らした化粧屋を、伊藤刑事は睨んだ。

「んー、まあ、あんたなら紹介してもいいか。

ほら、魔術に使う触媒とか材料とか、調達が難しいのつてあるだろう？

ただでさえ、私らの同業者は引きこもりばかりだ。

私の師匠は昔から……互助組合つてのは違うな、担い手の減って行くばかりの魔術の
使い手を援助する仕組みを作ってたんだよ。

なるべく、世間様に迷惑を掛けないようにつてな」

「ほう、私の居た組織も根本的には似たような理念を持っていた。これは偶然か？」

「へえ、同門じゃないと思ってたけど、同じ系譜なのかもな、私ら」

ティフオンにシンパシーを感じている化粧屋は、更にこう続けた。

「師匠は珍しく、本当に社交性のある人間だった。

貴重な触媒の調達をしたり、同業者同士で仲介役をしたりもしていた。

それどころか、社交界にも顔を出して、貴族や王族とも繋がりがあった。

恐らくだろうが、サンジェルマン伯爵の元ネタだと思っぜ」

「うーむ、聞き覚えがある経歴だ。」

私の居た組織のまとめ役がそんな感じだった」

「マジかよ……まあ、私の昔の伝手が今でも通用するくらいだからな」

「ああ、奴がくたばる姿は想像できん」

「ここに来て意外な共通点が発覚する二人だった。」

「ええ、化粧屋さんの前世って何百年も前だったんでしょう？」

「……どういふことですか？」

「まあ、会えばわかるだろうよ。あの人ならあんたらの力になれるかもな」

伊藤刑事と妻鳥は、化粧屋の言葉に顔を見合わせたのだった。

§ § §

化粧屋が連絡を取ると、翌日には会っても良いと返事が返ってきた。

警察官二人と化粧屋、そしてティフォンも無理矢理ついて行くことになり、彼ら四人は東京の僻地にある山奥の山荘へと赴くことになった。

「いかにも、隠居した魔法使いが暮らしているって感じの場所ですね」

妻鳥が山奥にひっそりと佇む洋館を見上げてそう言った。

道中は整備されており、屋敷の前には広めの駐車場があるくらいだった。

彼らに乗ってきた車以外にも、何台か高級車が泊まっていた。

「皆さま、お待ちしておりました」

そして車を出た四人を出迎えたのは、若い女性のメイドだった。

だが、そのメイドの容姿を見た警察官二人は絶句した。

まるで精緻な人形のように整った顔立ちで、肌は病的なほど色白だったのだ。

その瞳は真っ赤で、そのくせ背は高く、非人間的でさえあった。

そんな存在が、まるで冗談みたいなゴシック調のメイド服を身に纏っていた。

「知らない顔だな、新しいタイプか」

「私は見知った顔だな、いよいよ懐かしくなってきたぞ」

対象に、異能者二人は別々の反応を示していた。

「どうぞこちらに」

アルビノのメイドは、屋敷の扉を開けて四人を中へと招いた。

「なあ、彼女は人形で、誰かが操ってるってことは無いよな？」

先日の化粧屋の件ですっかり疑り深くなった伊藤刑事がぼそぼそと尋ねてきた。

「あれはホームクルスだよ」

「ほむ……なんだって？」

「え、伊藤さん、知らないんですか!? マンガやアニメとかじゃ定番ですよ!!」
「俺がそんなのを見る年に見えるのか?」

「まあ、中に入ればわかるよ」

化粧屋にも促され、他の三人もメイドの後に追従する。

そして彼らは屋敷の中の、異様な光景を目にすることになる。

「はあ?」

アルビノメイドに屋敷の中を進む最中に、また別のメイドが掃き掃除をしていた。

彼らを案内しているアルビノメイドと背丈や服装さえ同じの、全く同一の顔をしたメイドが。

「早く来いよ」

伊藤刑事だけでなく、予備知識のある妻鳥でさえ固まっていた。

掃き掃除をしていたメイドに一礼されていた二人を化粧屋が呼び掛ける。

そのメイドから逃げるように、足早に二人は案内役に付いて行く。

途中大広間を横切り、そこでは何人もの身なりの良い人間が、同じ顔のメイドたちに
歓待されている様子もあつた。

やがて、屋敷の奥へと到達する。

「久しぶりね、二人とも」

屋敷の主は、ちっとも歓迎していないような口調で知己を出迎えた。

奥の一室で四人を出迎えた人間は、やはりアルビノの女性だった。

その彼女は屋敷の道中で幾度も遭遇した美形とはまた違う美しさだった。

だが、判子を押したような同じ顔の方がマシだと、彼女を見た人間は思うだろう。

その女の美しさは、冷酷で残酷さを湛えた冷たさで満ちていた。

「あんだだったのか、イヴ」

「お久しぶり、化粧屋」

その女と、化粧屋は知己だった。

「お久しぶり、錬金術師殿」

「お久しぶりね、テイマー調教師」

テイフオンもまた、彼女と知己だった。

「……なあ、途中で見た同じ顔のメイドは何なんだ？」

困惑を隠しきれずにいた伊藤刑事は、堪らなくなつてそう言い放つた。

「彼女らはホームンクルスよ、人造人間。今の言い方じゃ遺伝子操作にクローンかしら？」

一般人の反応が面白いのか、イヴと呼ばれたその女は微笑みを浮かべた。

「く、人間のクローンは日本じゃ禁止されているだろう!!」

「厳密には、この国が禁止している方法で製造されているわけではないわ。

この国は魔術を用いて人間を作ってはならないと法律で定めているのかしら？」
くすくす、と倫理の観念ではあつてはならない女が笑う。

人造の生命にして、錬金術師たる彼女は、ある種の侮蔑を持って彼を笑っていた。
「悪いな伊藤ちゃん、師匠が応対してくれると思つてたんだ。

こいつはイヴ、師匠の助手だったホームンクルスなんだが……知らないうちにだいぶ表情豊かになつたじゃないか」

「私が製造されて一体どれだけの年月が経つたと思つているの？」

感情の一つや二つ、生まれるとは思わない？」

化粧屋に対する態度も、彼女はどこか小馬鹿にするような様子だった。

「どうやら、そちらと共通の知己ではあつたが、想像とは異なつていたようだな。

もしや、とは思つていたが……今生でも殺し合いは勘弁だぞ、錬金術師殿」

「そんな無駄なことはいらないわよ。こんな世界、支配する価値も無いもの」
屋敷に入つてからやや剣呑な様子だったティフォンに、彼女は嘲り返す。

まるで取るに足らない小物を見るようだった。

「帰ろう、三人とも。この女の性根は最悪だ。

腕前は確実に、世界最高の錬金術師だと言えるのだがな」

ティフオンは振り返って三人に言った。

彼の言葉は、この短いやり取りだけで十分真実だと伝えてくれる。

この女は確実に、人間を見下していた。

「あら、せっかく招いたのだから、もてなしぐらいさせなさいよ。

私たちに用があつたのでしょうか？」

「その気は失せたと行って言ってるんだ。これまで通りの取引だけの関係にしようや」

化粧屋も、踵を返した。

「まあ、聞きなさいよ」

人造物にして、魔術を扱う魔性は言う。

「約十年前から始まっているこの星の異変、それについて聞きたいとは思わない？」
まるで全てを知っているとしても言わんばかりの自信あふれる表情で。

人間について

「聞かせてくれよイヴ、あんたはどこまで分かってるんだ？」

化粧屋は、目の前の人造人間に問うた。

結局四人は、屋敷の一室で歓待を受けることになった。

食堂と思われる豪華な内装の部屋の長テーブルに四人は着席していた。

次々と同じ顔のアルビノメイドが料理や飲み物を運んでくる。

「どこまで、と言われてもね。」

まず何から聞きたいかしら？」

己の瞳と同じように、血のように赤いワインの入ったグラスを揺らしながら、イヴは言った。

「こやつは説明するのが大好きだ。好きに語らせればよかろう」

ティフオンは若干うんざりしたようにそう漏らした。

「じゃあなぜ、この世に転生者や超能力者が現れるようになったのでしょうか」

妻鳥は直球に彼女に問うた。

まるで自分に語れぬ真実は無い、と不遜な態度を貫くその女に。

「なるほど、あなた超能力者ね。気になるのも仕方ないけど、その問いは少々滑稽だわ」

彼女は笑わず、端的に彼は嘲弄した。

「地球に重力がある理由は？」と問われて、答えられる人間が居るかしら。

炎が酸素を消費して燃えることに理由を求めるようなものだわ」

つまり、この世に転生者が現れ始め、超能力者が無数に溢れるようになったのは、単

なる自然現象と同じだと、彼女は口にした。

「……転生と言う未知の現象は、理屈ではないと言いたいのか？」

「じゃあ神の意思とでもしましょうか？」

あの忌々しく愚かな産業革命の時代と同じように、人類がまた新たなステージへ足を

踏み入れたと言うだけよ」

伊藤刑事の言葉に錬金術師はそのように語った。

「あの時代、人類は電気と言う新たな力を手にした。

今度は魔力の番と言うことだけのことよ。尤も、予言するならこれから千年以内に人

類は滅ぶでしょうけど」

くつつく、と人ならざる人造物は自らを作った人類を嘲笑う。

「だけれど、どういう基準で転生者や超能力者が発生するかは、私は知っている」
それは一般人二人だけでなく、転生を経験した二人さえも驚かす言葉だった。

「化粧屋、あなたは我が創造主の教えを受けていながら、なぜ驚くの？」

所詮、途中で創造主の元から逃げ出した愚物という訳ね」

「——ッ」

化粧屋はその言葉に舌打ちして、彼女を睨んだ。

まるで触れられたくない傷跡に唐突に触れられたような表情だった。

「——
アルス・マグナ
大いなる秘術」

だが、次に彼女から出た言葉に、化粧屋もハツとした。

「おい、まさかお前……」

「刑事さん、あなたこれまで出会ってきた転生者の中で、共通点は無かったかしら？」

絶句している化粧屋をよそに、最初の女性の名を冠する女は伊藤刑事にそう尋ねた。

「……誰もが、優れた魔術の使い手だ」

伊藤刑事にはそれくらいしか思い浮かばなかったが、彼女は頷いた。

「不思議だとは思わない？」

なぜ、一般人の転生者が居ないのかしら？

超能力者はなぜ、前世の記憶を持たないの？

私は私なりに考察し、結論を得た」

「それが、そのアル何とかとなにが関係あるんだ？」

「アルス・マグナとは、錬金術における最終目的を差すわ。

賢者の石の創造、鉛を黄金に変え、人間を不老不死に至らせる。それら最終奥義の総称よ」

「ここまではわかるかしら、と理解度を試すように彼女は不敵に微笑む。

「まあ、賢者の石はわかる。映画のタイトルにもなつてたからな。

あれだろ、呑めば不老不死の薬を生み出すって言う……。

なあ、賢者の石で不老不死が実現できるなら、どうして他の工程に不老不死の実現があるんだ？」

伊藤刑事は素朴な疑問を口にした。

「錬金術における不老不死とは、何も永遠に若く生きることだけを言わないからよ。

黄金とは永遠の比喩、人体、精神、魂をも黄金のように輝かせることこそ、錬金術の奥義なのよ。

要するに、人間をより上位の存在へと移行させると言うことね。精霊や神と言った、より上位の存在へと昇華すること」

イヴは何もない手のひらを握り、開いた。

そこには、まるで手品のようにタロットカードが存在していた。

それを彼女は宙に投げ捨てると、タロットの一枚一枚がまるでシヨウのように虚空中で順番に並べられた。

『『愚者』から始まり、『魔術師』を知り、『女教皇』を得て、『女帝』になり、『皇帝』を覚え、『法王』に至り、『恋人』に出会い、『戦車』を決め、『力』を持ち、『隠者』を取り、『運命の輪』を迎え、『正義』の視点から、『吊るされた男』の理を悟る』

タロットカードの絵柄が、イヴの言葉によって順番に燃えて消えていく。

「そして、新たな『死神』を得る。」

タロットの大アルカナに描かれる人の旅路のように、人の肉体や精神、魂はその過程で磨かれて行く。

あなた達は、今この段階に居るのよ」

イヴは化粧屋とティファンを見やる。

二人は彼女の言いたいことを察したのか、硬い表情で口を閉ざしていた。

「あの、意味が分からないのですが……」

「理解力が乏しいわね」

困惑した表情を浮かべる妻鳥に、イヴは虚空中から死神のタロットカードを手繰り寄せ

ながらため息交じりに言う。

「つまり、タロットカードの旅路は魔術の研鑽の熟練度、それにおける魂の昇華の段階を示している。

この死神の段階を超えた者だけが、来世で記憶を保持する権利を持つのだ」

「え、じゃあ……」

「そう、——超能力者とは、記憶を保持していないだけで転生者なのよ。前世で魔術に多少携わった程度のね」

そんな衝撃的な真理を、イヴは語った。

「あなた達が超能力だと思っているモノは、恐らく前世で会得した魔術が何らかの形で表れているのだと思うわ。

まったく、面白いわ。自然に考えてそんなこと、あり得るはずなのに。

私が思うに、死神の段階を超えた者に呼応するように一定以下の熟練度の人間も繰り上げられたのかもしれないわね」

イヴは実験動物が思わぬ反応を示したのを面白がるように笑ってそう言った。

「その繰上げが、予想もしない作用を引き起こした。

本来魔術とは手順が必要なのよ。

科学的に分かりやすく言うのなら、百キ口先に一分で移動する魔術があるとする。

これを科学で説明するなら、マッハ五で術者は目的地に移動したことになるわね。当然、生身の人体はそのスピードに耐えられない。それが魔術の抱えるリスクになるわね。

「だけど鉄の装甲で身を守れば？ 一分ではなく十分で移動する術に妥協すれば？」

「そうやって、魔術とはリスクと恩恵を天秤に掛けて行使するのよ。それが魔術の基本原則だわ」

その説明だけは、科学の世界に生きている二人にもわかりやすかった。

「超能力者は、そのリスクを度外視している。」

体内に内在する魔力だけで、リスクの高い魔術とは比べ物にならないほど低性能とは言え、魔術と遜色ない現象を引き起こしている。

面白い、面白いわね、死神を超えた者だけだと少なすぎるから、世界が均衡を保とうとして嵩増したのかしら」

にやにや、と美人に鑄造されたイヴが笑う。

未知なる真理を獲得して喜ぶ無邪気な笑顔だと言うのに、その性根からにじみ出る酷薄さと残酷さが垣間見え、寒気さえ覚える美醜を併せ持つ笑顔だった。

「それが、私が得た真理よ」こたえ

まるで、知りたいと思つたら必ず答えがやってきて当然だとも言うように、イヴはワインを口に運んだ。

「要約すると、転生者が例外なく魔術の心得があるのは、魔術の研鑽自体が魂のランクミたいなのを上げるからで、一定以上の熟練度に達すると記憶を保持して来世に持ち越せるから。」

超能力者とは、その一定水準に満たない魔術の使い手が転生した結果、ある種の突然変異が起こつた人間ってことか？」

伊藤刑事がこれまでの話をまとめると、イヴは頷いた。

「俺の前世は、化粧屋さんたちと同じ魔法使いだつた……？」

妻鳥は信じられないと言つた様子で、異能者二人を見た。

「確かに筋は通っている。だが、その理論を実証できるのか？」

「私が『何』だと思つているの？」

若干懐疑的な視線を向ける化粧屋に、人ならざる女は当然のようにそう返した。

「魔術的素養、靈的感応性、肉体的スペック、人類の基準を遥かに超えた頭脳……。」

それら全てを兼ね備えるような作られた私の想定が間違つていないとでも？」

「あくまで、推論の域なんだな」

「だけど、この地上の人間の誰よりも真実に近いのもまた事実よ。」

これについて実験をするつもりはないしね」

「化粧屋、あまり突くな」

ティフォンは化粧屋を咎めた。

イヴの性格をよく熟知している彼は、彼女に突っかかって実験なんてされてはどれだけの被害者が生じるか想像もつかないからだ。

「あの、もう一つ聞かせてください」

「何かしら？」

「先ほど言っていた、千年以内に人類が滅ぶとは？」

「あらあら、それも聞きたいの？」

そしてこの女は、まだまだ喋り足りないとも言いたげに妻鳥の疑問にそう応じた。

彼は、最初に聞いた彼女のその言葉が耳にこびりついて離れなかったのだ。

「私は、科学技術が嫌いよ。」

神秘性を錬金術から排除したくせに、まるで全ての真理のようにこの世に我が物顔で蔓延っている。

まるで全ての技術の頂点にいるかの如くね。つまり、わかるかしら？」

自分が全てを語らずとも相手は理解できていて当然とも言いたげに、意味深に視線

を向ける人造物。

「いえ、まったく」

「魔術つてのはね、基本的に何でもありなのよ。代償やリスクを支払えばね。

つまり、こう言うことなのよ」

人造物にして錬金術師は予言する。

この世界の人類の末路を。

「——科学技術は、魔術たり得るのだと」

それが破滅の預言であると、一般人二人は分からなかった。

対して、化粧屋とティフォンの表情は強張っていた。

「え、どういふことですか？」

科学と魔術は違うでしょう？」

「ふん、本当に馬鹿ね。」

錬金術の齎した成果が、どれだけ今日の科学の発展に寄与したと思っっているの。

科学とは、もともと魔術の一端に過ぎないのよ。

ここまで言えばわかるでしょう？ 機械に使うエネルギーは、魔力で代替可能なの

よ」

それは先ほどの推察とは全く違う、確実な専門家の証言だった。

「つてことは、メカニカルな魔法の道具を持ったアニメみたいな光景が実現するつてことですか？」

「そう言ってるわ」

「凄いいじゃないですか!! 要するに、技術がブレイクスルーするつてことでしょうか?」

胸が高鳴り、はしゃぐのは妻鳥だけだった。

そんな夢のような光景は、夢ではないと言う事実に興奮を隠せなかった。

くすくす、と崖へと突つ走る無知な盲目な子供を見て憐れむようなイヴの視線を見なければ。

冷や水を浴びせられたような感覚に、彼は陥つた。

「魔力は空気中どころか、人体、動物、とあらゆる場所に存在しているわ。」

でも一番手つ取り早い供給源は、ここかしら」

イヴはゆっくりと、指を下に向ける。

床、ではなく、地面。ひいては、地球だ。

「欲深な人類の末路は、地球の根源的な魔力を枯渇させ、あらゆる自然を死滅させこの星を壊死させ自滅させることになるでしょうね」

それは現代社会を鑑みれば、誰でも想像できる未来だった。

現代では石油や天然資源でさえ百年後には枯渇するのではないか、とエコを訴えてい

る。

そこに、魔力と言う新種のエネルギーが転がり込めば、人々は、国々はこぞつて貪ることだろう。

それが、一昔前の人気ゲームのような設定に見るような事態になるとしても。

「私はその未来の人類を嘲りながら、終末を見届けるつもりだわ」

まるでそれを楽しみにしていると云わんばかりに、始まりの女どころか最後の女になろうとしている人造物は笑っている。

「この星を人類の墓標に、私は宇宙へ旅立つわ。」

或いは、魔術と科学を極めた人類が、幼年期の終わりを迎えているかもしれないわね」
この人間とは全く違う知性体は、心底人類を見下しながらそのように思い描くのだつた。

§ § §

「最後に一つ、聞かせてくれ」

誰も味が分からなかった食事を終え、屋敷を出た四人は帰路へ着こうとした。

「私からも、あなたに一つ聞きたいことがあったわ」

駐車場に出た化粧屋の問いに、イヴはそうのように返した。そして、二人は言った。

「師匠はどこだ？」

「我が主はどこに居るの？」

言つて、沈黙が舞い降りる。

「正直に言えよ、師匠は自分で死ぬるような人間じゃない。

——お前、殺したな。俺の師匠を」

化粧屋がそれを疑ったのは、なんてことはない。

想定外の自我を持った存在に、創造主が反逆されるなんて話は枚挙にいとまがないからだ。

化粧屋の言葉に、イヴは、頬を釣り上げ、笑みを浮かべた。

それが何よりも雄弁な答えだった。

「その様子じゃ、あの方の転生先を知らないのね。残念だわ」

彼女は化粧屋の反応から、落胆したように肩を落とした。

「今度こそは、次こそは、転生さえできないように魂さえ残さず消滅させないとくすくす、と人造生物は笑う。

今までのどんな笑みよりも、狂氣的に、おぞましく。

「一応聞いておいてやる。なぜ師匠を殺した」

「なぜ？　なぜですって？」

こてん、とイヴは小首を傾げた。

何でそんな分切り切ったことを訊くのか、とでも言いたげに。

「……おいで」

イヴは彼女に侍っていたメイドを手繰り寄せると、唐突にその顔を鷲掴みにした。

めりめり、と人間を遥かに超えたイヴの握力が人形めいて端正な顔を握りつぶそうと
していた。

「お、おい、何しているんだ!!」

伊藤刑事がその凶行に声を挙げた。

だからではないだろうが、彼女はそれこそ人形を捨てるかのようにメイドを地面に叩
き落した。

「私は創造主の望むとおりに作られ、完璧な性能を有し誕生したわ。

でもそんなある時、我が主は私に妹を作ったの。

私に比べたら信じられないほど低スペックで、まるで人間みたいに脆弱だった。

私はその子の教育係として、色々なことを教えることを仰せつかった。

変な話よね、ホームクルスはあらかじめ必要な知識を与えられて誕生する。

その子は物覚えが悪くて、不器用で、グズで、私を姉と慕ったわ。でも、一つだけ私より上手に出来たことがあったわ。それが、それが、それが本当に気に食わなかった」

ゾツとするような、狂気がその笑みには孕んでいた。

「ある時、私は気付いた。我が創造主は、妹を人間として創造した。

私は、私は!! 道具として作ったのに!!

私は完璧な道具だったのに!! あの人は私じゃなくて、あんな妹を愛したあツ!!」

それは道具としての愛情であり、妹に対する嫉妬だった。

愛憎と嫉妬が、化粧屋も知っている完璧な道具を狂わせた。

「ああああああ!! ゆ、許せない、赦せないいい!!

わ、私はいつだって、創造主の器になりえる準備をしてたのに!!

あ、あ、あ、ああ、あの人はあ!! 妹を器に選んだ!!

あんなグズで低スペックで脆弱で愛らしくて健気で役立たずを!!」

そこに、理屈も優れた知性も無かった。

ただ感情に振り回される、憐れな人形がそこにあつた。

「はあはあ、なんで、なんで……私を人間として作らなかつたのよ」

どこまでも見下しているはずの人類に対する、どうしようもない羨望と嫉妬が彼女の

根底に存在していた。

「安心しろよ、お前はとうしようもないほど、愚かしいほどに人間らしいさ」

理由によつては敵討ちでもしてやろうかと考えていた化粧屋は、その考えを振り払つて踵を返した。

「今度は、師匠と一緒に酒でも飲もうぜ」

そう言つて、化粧屋は乗つてきた車に乗り込んで、出発した。

「化粧屋、俺は恐ろしいよ。」

あんなのを、人間は作ることができなんだな」

運転席の伊藤刑事が、そんなことをぼやいた。

「錬金術師殿のあんな姿、私も初めて見たよ。」

人間の定義とは、何なのだろうな」

ティフォンはため息を吐き、妻鳥も無言だった。

「んー、誰かを愛そうとするのなら、それは人間で良いんじゃないの?」

そんな適当な化粧屋の返答に、三人は小さく笑い声を漏らすのだった。

内職について

七月も後半に入ると、学生たちは夏休みに入る。

期末テストという苦難を乗り越えた学生たちにやってくる、長期休暇だ。

休みに入った春美たちも他の学生たちのように休暇を謳歌している、という訳ではなかった。

「春美ちゃん、こんな感じでもいいの？」

「うん、問題ないと思うよ」

真冬は手元にある木の板を春美に見せた。

それにはルーン文字が刻まれている。お手製の護符だった。

「それにしてもさあ、これって元手殆どかかってないよね。」

これを一つ数千円で売ってるんだから、えぐい商売しているよな」

と、色とりどりのビーズを紐に通してミサンガを作っている夏芽がぼやく。

彼女の目の前には完成品が既に十近く積み上がっていた。

「お祭りの屋台と一緒にでしょ。」

雰囲気を楽しむのよ。そうやって信じて、その人が救われればそれでいいんじゃないの」

ひたすら折り紙で鶴を折っている千秋。

彼女は二十組一束で千羽鶴を作っていた。

「一応、儀式で魔力を付与するから……」

花粉症ならガーゼマスクぐらいの効果はあるから……」

春美は眼を逸らしながらそう言った。

それって殆ど気持ち程度じゃ、と三人は思ったが口にするほど無神経ではなかった。

三人が春美の手伝いをしているのは、彼女がああかの召喚士の経営する会社に納品する商品の作成だった。

やっていることは内職と大して変わらないが、数時間でちよつとしたバイトの一週間分くらいと同じくらい稼ぎとなるので彼女らは夏芽の家に集合して毎回それに参加していた。

報酬は四等分になっている。学生にはそれで一か月分のお小遣いには十分である。

魔術の工程こそ重要なものだから、その等分な報酬を三人は躊躇ったが春美はそれを否定した。

要するにこれは自分のスキルアップの為にやっつてることだから、と。

「春美ちゃんには悪いけどさ、そのくらいの効果の商品を売ってやっぱり詐欺だつて思われないのかな」

「まあ、それで望海ちゃんがあんな目に遭ったわけだしね」

「私たちもね……」

三人は作業の手を止めず、先日のことを思い浮かべながらそう呟いた。
「その程度で良いんだって。」

これは要するに、より高い物を買って貰うための呼び水なんだつて。
興味がある人なら、もっと高い物だつて買うかもしれないでしょ？」

「なるほどなー」

そして彼らは、もっと高い商品の作成に集中できるのである。

「やり方はカルト教団の手口そのものよ。」

これを買ってくれたあなただけに、もっと高価な物を紹介しますつてね。

あの人たち、たまに販売会なんて言つて人を集めて、高い商品を売つてみるみたい」
「それつてやっぱり悪徳商法なんじゃないの？」

昔、老人向けの格安旅行のプランで誘い込んで高い布団とか売り付けようとしたつて
ニユースでやってたじゃん？ そう言うのじゃないの？」

夏芽がそんな風に指摘すると、春美は首を横に振った。

「まさか、あそこの首領はホンモノの、師匠も警戒するほどの召喚術の使い手よ。詐欺の手口どころか、マジもののカルトのやり口を見たわ」
そう言つて、商品に術を施していた春美は語りだした。

§ § §

二週間ほど前の事である。

春美は商品の納品に召喚士の会社へと向かおうとしたのだが。

「春美、これであの会社から買い物をしておいて」

と、己の師に呼び出され、ぼんとある物を手渡された。

「えッ、これ、札束じゃ……」

春美は目を見開いて驚いた。

それは紛れもなく、日本円にして百万円の札束だった。

自分では直接見たことも触れたことも無いそれに、思わず硬直する。

「あ、あの、これで何を買ってくれば……？」

「行けばわかるわ」

そう言われ、春美は送り出された。

「ああ、春美さん。いつもお世話になってます」

そして召喚士の会社に赴くと、いつも彼女の対応をしてくれる社員が出迎えてくれた。

「あの……師匠から買い付けを頼まれているんですが」

伝票を受け取り、春美がそう言うと、彼はああと頷いた。

「そちらの御師匠殿にはお話が行っているんですね。」

我々の『販売会』のことが

彼は若干含みを持たせる言い方で、静かに微笑んだ。

「ならば、こちらにどうぞ」

そう言つて、春美は会社の奥へと案内された。

そこは通路の突き当りで、壁に立ち鏡が立てかけられているだけだった。

男が先導するように、立ち鏡の奥へと入っていく。

鏡の奥に魔術的な方法で作られた空間があるのは何となく分かっていたので、春美も鏡の奥へと足を踏み入れる。

中は思ったより広い場所だった。

ただ、上下左右の壁や床、天井が真っ黒に染められ、光源は松明に見立てられたLEDライトだけだ。

奥はステージになっており、演出と思われる禍々しい調度品で彩られていた。

観客席と思しき場所には椅子が二十組ほど置かれ、老若男女様々な人間がそこに座ってこれから行われるカルトの催しを心待ちにしている様子だった。

「ヤッ、どうぞぞ」

春美に向けて、新しい椅子が用意される。

彼女は無言でそれに座り、黙って何が始まるのか待った。

暇を持て余し、春美は客たちを盗み見る。

気品のある女性や、裕福そうな老婆、サラリーマン風の男に痩せ細った老人など等。

彼らは無駄口などせず、「販売会」の開催を待っていた。

「皆さま、お待たせしました。」

我らが宗主がお越しになりました」

春美を案内した男が、そう言う入り口の鏡からローブ姿の召喚士が入室してきた。

それに続くように、元ヤクザだった彼女の徒弟たちが続く。

彼女たちがステージの前に並ぶと、その中心に立つ召喚士が口を開いた。

「私たち人類が、まだ雷を神の怒りと認識し、台風や川の氾濫を怪物が起こしたものであ

ると考えていたずっと昔、西暦が始まる前のこと。

異邦の彼方より、この世界に「神」が降り立ったそうです」

召喚士の話の切り出しは、胡散臭い宗教にありがちな世界観から始まった。

「その神々は、超常の力を振るい私たちのずっと祖先である人類に恐怖や恩恵を齎した。

しかし、それも長くは続かなかつた。異邦よりやってきた神々の術は、この世界の法

則に適応できなかつたのです。

神々は、やがて人に墜ちたのです。そうして、彼らは時と共にこの世界に適応した術

を生み出し始めた。

それは神々として振るつた力と比べるまでも無いものだったそうです。

彼らは魔力と扱う術を知らなかつた我々の祖先に細々とその技術を伝え、その血と共

に歴史に消えて行つた。

そう、それが私たちの扱う魔術の興りなのです」

その話を聞いて、春美は思つた。

既存の神話にそれっぽい話を付け加えただけだろう、と。

それでも、そんな話をホンモノの魔術を扱う召喚士が言えば、説得力は絶大だった。

召喚士はステージの床に刻まれた魔法陣に向けて、ぱちん、と指を鳴らす。

一瞬、魔法陣が光ると、そこからリスのような生物が飛び出し、ちつちつち、と床を

走って召喚士の体を登り、その肩へと留まった。

「おお、と観客たちの感嘆の声が聞こえる。」

よく見ればそのリスのような生物は、既存のリスとは似ても似つかない姿をしていた。

その額には、特徴的な宝石のような物が存在していた。

「か、カーバンクルだ!!」

そのリスのような生物を見て、客の一人が声を挙げた。

まさしく、往年の人気ゲームのキャラクターがそうするように、召喚士は伝説上にか存在しない生き物を呼び出して見せた。

召喚士は肩の上のカーバンクルを驚掴みにすると、徒弟に持たせていた鳥かごの中に放り込んだ。

「カーバンクルの宝石を手にしたものは、巨万の富や名声を得ると言われています。」

それが真実かどうかは、実際に手にして確かめてください。

では、一千万から始めましょうか」

召喚士の言葉と同時に、客たちが立ち上がって声高に叫ぶ。

二千万、五千万だッ、いいや一億出すぞ、こちらは一億五千万だ!!

瞬く間に、その未知の生物に巨額の値段が付けられていく。

春美は置いてきぼりを食らって、呆けたように熱気に満ちた横の客たちを見ることしかできなかつた。

最終的に、カーバンクルは十億円もの値段が付けられた。

春美には想像すら出来ない規模の金額だった。

「次は、こちらになります」

ステージの魔法陣を徒弟たちが取り囲み、召喚士もその前に立って共に呪文を唱えた。

朗々と、体に響く声がしばらく室内に響いた。

やがて、魔法陣が光り、そこから何かがせり上がってきた。

それは馬だった。馬のような何かだった。

ブヒーーーン!!

と、それは自分が置かれた状況を認識すると、驚き、そして興奮し暴れ出そうとした。室内で暴れるにはあまりにも危険なそれに、客たちも悲鳴を上げたが。

「皆さま、安心を」

召喚士が一言、告げる。

しかし、激しい気性のその馬型の生物は、額に大人の腕のような太さの立派なツノを彼女に向けた。

その生物の名は、誰もが知っている。

乙女にしか懐かないと言われている、ユニコーンだ。

処女厨だのなんだのと評されるユニコーンであるが、その気性の荒さも有名であった。

「ほら、私は処女ですよ」

召喚士が一角獣に手を差し向ける。

これにてユニコーンが大人しくなると、思われたのだが。

ユニコーンは首を竦め、彼女を突き殺そうとツノを突きだそうとしたのである。

召喚士は寸前でそれを避けたが、肩口を掠めロープが破れて血が流れた。

「ふむ、なるほど。処女性ではなく、魂の清廉さで判断しているのか」

「召喚士の姉御!!」

猛獣を目の前にして、のんきに分析をしている召喚士に、徒弟の一人が声を挙げるが。

「全く、誰を心配しているのですか?」

ぐしやあ、と生々しい音が響く。

魔法陣から禍々しい槍のような何かが飛び出し、ユニコーンを串刺しにして絶命させていた。

「さて、お騒がせしました」

圧倒的な実力を持つ召喚士の前には、猛獣の抵抗すらも演出にしか見えない。

「ユニコーンの角は、強力な解毒薬の材料となり、汚染された水を清める力を持つそうです。」

これを用いた秘薬を後日お届け致します。その効能は万病に効き、若さを保ち活力を齎してくれるとの事です。

これは、複数ご用意できますが数に限りがございます。

皆さまのお手元にお配りする用紙に金額を記載していただき、入札額の高い順番に落札とさせていただきます」

そうして、彼女の言う手順を踏み、ユニコーンの角の秘薬の落札額が公開される。

一番高い値を付けた人間は、五十億。

春美は眩暈がしそうだった。

自分の師匠から渡された金額では、どれも到底手に入るとは思えない。それからしばらく、カルトの集会は続いたのだった。

§ § §

話を聞き終えた三人は、ぼかんと絶句していた。

闇オークションを行うカルトの集会なんでものが実在しており、そこで取引されているのが未知の生物やその素材だと言うのだから当然だろう。想像以上にカルトらしいカルトだった。

「え、じゃあ、春美ちゃんはカーバンクルやユニコーンを見たってこと？」

耳を疑っている真冬の言葉に、春美は無言で頷く。

「そ、それってあれじゃないの？ に、偽物とか……」

「どうやって未知の生物をでっちあげるのよ」

「あれは偽物なんかじゃなかった。

内包している魔力が桁違いだったし。たぶん、本当の異世界の幻獣だと思う」

未だに信じられない様子の夏芽と、千秋に春美はそう断言した。

「あの女、悪魔専門かと思っただけなら何でも行けるみたい。

でも、可哀そうだったな。

買われて行ったカーバンクルも、多分長生きできないだろうし」

「そうなの？」

「うん、環境が違い過ぎるだろうし」

春美の言葉に、千秋は痛ましそうな表情になった。

「そっか……。でも、そんな荒稼ぎしてるなら、表向きの会社も儲かってるんだろう

なあ」

「それがね、あの闇オークションで儲けたお金は、全部研究費用になるんだって。

異世界から幻獣を召喚するのも、かなりコストが掛かるみたいだし」

「それだけ儲かるなら、楽に暮らせると思うのに」

「そう思わないから、魔術をやってるのよ」

そういうもののかな、と夏芽は思った。

「ところで、春美ちゃんは何を買いに行ったの？」

「あ、そう言えば」

「私がいに行ったのは、ユニコーンの血よ。」

霊的に格が高い生き物の血は、高度な魔術薬の素材になるから。

昔から召喚術の使い手って、異世界からそう言った生き物を調達するのを生業にして

いる人も居たんだって」

春美は真冬の疑問に、そのように答えた。

「異世界、かあ。」

さっきの話じゃ、大昔に魔法使いが異世界からやってきたんでしょ？

それが魔術の始祖だって。そうやって他所から未知の生物を呼び出せるなら、その話

も本当なのかもね」

「私にはこじつけにしか聞こえなかったけどね」

想像力を働かせている様子の千秋に対し、春美は淡白にそう言った。

「でもさ、夢があるよね。私は行ってみたいなあ、異世界とか」

「それは止めた方がいいよ、マジで」

ふと、そこで以前異界に迷い込んだことを思い出した千秋が真顔になって夏芽にそう告げた。

「それよりさ、今度これを納品した時のバイト代でどこか行こうって話になってたよね？」

どこに行くか誰か意見とかある？」

タイミングを見計らっていた春美が、そんな話を切り出した。

「ああ、そうだった。どこ行く？」

「やっぱり夏だし、海に行こうよ」

すると、真冬がそう提案した。

「去年も馬鹿みたいに暑かったけど、今年もアホみたいに暑いし、北海道とか良いんじゃない？」

「フェリーでゆっくりさ、何日も掛けて。美味しい物でも食べて回らない？」

「そうなるよ、大分ヒマになりそうね。宿題も持って行きましょう」

「うえ」

宿題と聞いて表情を歪める夏芽。

それを見て仕方なさそうに首を振る千秋だった。

「海に行くなら、望海ちゃんやカタリナさん、魔女さんも誘いたいね」

「あ、でも師匠を誘うなら都合が付くか分からないかな」

「うん? どうして?」

千秋が問うと、春美はこう答えた。

「師匠は去年もだけど、長期休暇は田舎に暮らしてる母方の祖父母の家に行ってるみたいだから」

「あッ、そうなんだ」

彼女の複雑な親子関係を何となく察している面々は、これ以上言及しようとはしなかった。

「うーん、どこに行こうか迷うなあ」

夏芽は宿題のことなど知らんぷりして、そのように期待に胸を膨らませていた。

しかし、彼女らの夏休みの最初の旅行が、望海が持ってきた厄介ごとが最初になるなど、この時の四人は想像もしていないのであった。

親友について

「いつ見ても、現実味が湧かんな」

軽塔は五十億円と記載されている小切手を眺めながら、そう呟いた。

彼の目の前のテーブルには目が飛び出るような金額の小切手だけでなく、現金で五千万円が積み上がっていた。

これが昨日の闇オークションでの売り上げだった。

「バブル時代のオヤジ達でも、こんなカネは見たこと無いんじゃないか？」

彼がヤクザになったのは、日本のヤクザは丁度斜陽の時代になった頃だった。

法律が変わり、年々ヤクザに対して締め付けが厳しくなっていくのを彼は肌身で感じていた。

今のヤクザはクレジットカードは持てないし、賃貸契約も出来ない。生命保険さえ入れない。

世間は、もはやヤクザに人権は無いとでも言いたげだった。

昔の軽塔であれば、ふざけるなど喚いたかもしれない。

彼は現代では高齢化が進むヤクザの世界に、当時若い頃憧れて入った。

しかし、その考えは歳を取るにつれて変わって行った。

基本的に、ヤクザのシノギとは他人の上前を撥ねることだ。

彼らは社会的に生産的な活動をしないから、ヤクザと言われるのである。

自分たちで汗水垂らして働いていたら、それはもはやヤクザのシノギではない。

そう言う意味ではかつて組の運営資金調達にいろいろな事業に手を出していた軽塔

組はヤクザとは言えなかったのかもしれない。

彼は自分たちに店頭に立たせたし、事務仕事もさせた。普通ヤクザはそんなことしない。

彼の子分は、誰もが帰る場所の無い子供や社会に適應できない人間ばかりだった。

そんな彼らにまっとうな人生を歩ませてやりたいと、彼はずっと考えていたのである。

「どうせ、すぐ消えて無くなる水泡のカネですよ」

召喚士はそんな巨額のお金を前にしても、いつも通りだった。

「それでも、だ。」

お嬢には感謝してるよ。俺の子分たちも、表向きとはいえまっとうな食い扶持を稼いでいるんだからな」

怪しげな闇オークションも、軽塔にとって問題視する要素にならない。

あれは詐欺ではないし、足が付くようなことも無いと知っているからだ。

「オヤジ、例のあの人がご到着です」

「おう、通せ」

軽塔が自分の報告にそう返すと、間もなく事務所のドアが開いた。

「相変わらず、狭苦しいところね」

などと、開口一番に文句を口にする来訪者。

カタギになつてもそうは見えない人相の面々が揃っているこの事務所だったが、強面の彼らの方が委縮してその来訪者の関心を買わないように存在感を出来る限り薄くしようとして試みている始末だった。

軽塔がそちらを見ると、そこには黒いワンピースタイプのドレスを着たマネキンがいた。

いや、精巧なマネキンのように病的なほど白い手足をした白髪の女だった。

伶俐で、自信に満ち溢れるその表情からは知的さを覚えるのに、その女を見ていると感じるのには怖気にも似た寒気だった。

人形のように美しいのに、それが褒め言葉にならないような人を模つたとは思えないほど非人間的な美麗さを有していた。

そんな存在が、ゴシック調のメイド服を着た同じようなアルビノのメイドを従えてやってきたのだ。

「これはこれもどうも、イヴさん」

その存在を認めて、軽塔は立ち上り対応した。

が、イヴは彼を完全に無視した。もはや怒りすら湧かないほど、いつも通りの反応だった。

では当初からあきらめの境地だったかと言うと、そうではなかった。

——関わりたくない、彼の直観が全力でそう思わせるのだ。

それでも対外的に礼節を忘れないのは、目の前の相手が表向きはこの会社の大口出資者だからだろう。

「イデア、あなた本当によくこんな小汚いところに居られるわね」

今度は召喚士に向けて、イヴはそんなことを言い放った。

この僅かな合間に狭苦しいから小汚いにランクダウンしていた。

「イヴ、その嫌味は毎回聞かねばならないのですか？」

召喚士は無表情を変えることなく、彼女に向けてそう返した。

イデア、と言うのは召喚士の今生の書類上の本名だった。苗字は東雲。れっきとした日本人だ。

名前は漢字で、意出亜と書く。キラキラネームだった。

だから、という訳ではないが、召喚士は普段から本名は名乗らない。

魔術を扱う者同士は、余程のことが無い限り相手の名前を呼んだりしないからだ。

平安時代、日本において貴族たちは本名を呼び合うことは無かった。

当時、本名は家族や親類にしか知られておらず、今でも名前が残っていない人物が多いほぼだ。

三国志などに代表される古代中国においても、字あざなと呼ばれる本名を呼ばない為の通称が存在していた。

そのどちらにも、本名を呼ぶのはマナー違反に当たる行為だった。

当時の人間たちも、よくわかっていたのだろう。

——誰かを呪い殺すには、本名が必要である、と。

だからこそ、この二人の関係は同業者たちから見れば異様な光景に見えるだろう。

一般人でさえ、魔法使いの本名を呼ぶのは躊躇うのだから。

「ごめんなさい、つい癖でね。」

ところで、これが今回の稼ぎかしら？

ふむふむ、まあまあね。じゃあ、これが今回の分ね」

テーブルに置かれた巨額の小切手や現金を見たイヴは背後に控えるメイドに目くば

せすると、彼女は領き事務所から出て行った。

「あ、俺手伝います」

何をするのか分かつている召喚士の徒弟の一人が、メイドの後を追う。

そしてメイドと徒弟が荷物を抱えて戻ってくる。

その荷物とは、大きなゴルフケースだった。

「検めます」

召喚士が、二人の持ってきたゴルフケースのチャックを開ける。

と同時に室内の男たちが視線を逸らした。

ゴルフケースの中身は、——召喚士だった。

いや、召喚士と瓜二つの姿をしたホムンクルスだった。

それが産まれたままの姿で中に押し込まれていたのだ。

それを彼女は確認すると、ぱちん、と指を鳴らした。

その直後、虚空から巨大な黒い手がゴルフケースごとそのホムンクルスを奪い去り、消えた。

「その維持、やっぱり割に合わないと思うのだけど」

苦笑気味に、イヴは召喚士の非合理的な行動を指摘した。

「私は必要だと思っています。ただそれだけのことですよ」

対して、召喚士はいつものようにそう返した。

今のホムンクルスは、彼女が悪魔を従えている為の生け贄なのだ。

彼女を知る同業者の誰もが、正気の沙汰ではないと言う悪魔の使役方法の秘密がそれだった。

「じゃあ、残りの素材とかも搬入させておくわね」

「わかりました」

両者の間には、不思議で奇妙な気安さがあった。

それも当然だった。

二人は、特に召喚士は、前世からの知己なのだから。

否、それだけではない。

——二人は、お互いに認め合う、親友同士なのだ。

§ § §

近代ヨーロッパの社交界には、とある伝説が存在していた。

曰く、いつまでも若く、永遠に生きる人間がいる、と。

その伝説の人物の従者である女も、老いることさえなかったと言う。

数多の知識に精通し、王侯貴族と交流を持つその優れた錬金術師は古来より続く魔術という文化の存続に一役買っていた。

その資金繰りに、地位を持つ人間との交流は不可欠だったのである。

彼は陰ながら、魔術の担い手を支援し、次の世代に移行する様子を見守っていた。

彼の従者をしていたイヴも、彼がいつたいどれくらい昔からそれを続けているのかは分からなかった。

彼女が知る最も古い魔女よりも、ともすれば長生きしていたかもしれない。

なにせ彼は、現代では誰にも伝わっていない魔術の伝承を知っていた。

尤も、イヴがその激情に駆られて彼を殺してしまうまで、それを気にしたことさえなかったが。

主人亡き後、イヴは主人が己に課していた役割を引き継いだ。

それは一時の激情で主人を殺してしまった償いなのか、はたまたただやることが無かっただけなのか。

とにかく、彼女も魔術の存続の為に陰ながら錬金術師として支援をするようになった。

彼女とその主人との違いは、彼があくまで個人として活動していたのに対し、イヴは

組織を作り効率化を図ろうとしたところだった。

実のところ、イヴは特別製だった。

本来、ホムンクルスは短命で、用途に応じて使い捨てるのが当然だった。

ホムンクルスは伝承においてフラスコの中でしか生きられない小人として語られるように、人間の等身大にした上で外気に触れても平気な個体を作成できるようにした彼女の主人の凄まじさは語るに及ばないだろう。

その天才をもつてして、完璧と称して作成されたイヴはホムンクルスの域を完全に超越していた。

主人の才気さえ上回る彼女は、やろうと思えば自己複製すら可能だった。

要するに、人手に関して幾らでも彼女は解消できた。人間を見下す彼女なら尚更である。

でも、彼女はそれをしなかった。その理由を、彼女は未だに説明できない。

とにかく彼女は、のちに魔術結社として名を馳せる黄金の夜明け団よりも百年以上早く、魔法使いたちを束ね、組織を作り上げた。

召喚士の前世は、前世でさえも召喚士サモナーと呼ばれていた。

より正確に言えば、襲名制だった。その異名は、師から引き継いだ称号だった。

イヴの作った組織は、そうした称号を持った魔法使いたちをトップに据え運営されていた。

彼女は創設者ではあったが、組織のまとめ役であっただけで、他の魔術の継承者たちと自らを同等としていた。

彼女は人間のように、トップが下の者を支配する構図に魅力を感じなかったのである。

組織と言つても、やることは魔術の探究以外無かつた。

秘密結社ではあったが、野望も無ければ目標も無い。

魔術と言う文化を存続させるという目的なのだから当然だつた。

少し前に流行つた薔薇十字団の教義のように、人々の為に魔術を使うと言うような馬鹿げたことも無い。

思想の違いから、後の魔術結社のように分裂したりもしない。

事実上のトップであるイヴも、老いを知らず思想の劣化もしない。

ある種の、完璧な組織が存在していた。そのように作った組織だつた。

だからこそ、そんな完璧な組織が崩れ去るとしたら、……それは創始者が自らそう望んだ時だつたのだろう。

「ねえ、やっぱりあんなゴミ同然な商品じゃなくて、私の作った代物売りましょうよ」
事務所の応接間にて、二人は静かにお茶を飲んでいた。

取引の後は、こうしてお茶を飲んで雑談するのがいつもの光景だった。

「それは終わった話でしょう。」

大体あなたが作った物は、出来が良すぎる」

イヴの話題は大抵の場合、いつも変わらない。

人間の世俗に興味の無い彼女の話題が増えることはあまりないからだ。

それでも、毎回同じような会話をすることをイヴは楽しんでいるし、召喚士は嫌っていないかった。

「この会社で作っているのがアロマのリラックス効果程度の効能の代物なら、あなたの作品は劇薬に過ぎる。」

うちがいきなり万能の秘薬なんて売り出したらどう思われると思ってるんです?」

「違うわよ、裏の取引でに決まってるじゃない」

「それに関しては言うに及ばず。あなたから買って売っても大した利益にならない」

イヴは自他共に認める世界最高の錬金術師だ。

だから彼女は決して自分の仕事を安く売らない。値段もそれ相応だ。

そもそも、最初から召喚士は表の仕事で細々と稼ぐつもりだった。

裏での闇オークションの開催するようになったのは、大口出資者である彼女の意向だ。

そこで商品となったユニコーンの角の秘薬を調査するのも彼女である。

昔から、錬金術師と召喚術の使い手は密接な関係で結ばれていた。

少なくとも彼女たちの組織はそうだった。錬金術は奥義に近くなればなるほど、地球上の素材だけでは作成不可能なレシピが増えていく。

だからイヴは召喚術の使い手を血筋から手厚く保護していた。

彼女と召喚士は、前世の子供の頃からの付き合いだ。

類まれなる資質と才能を持って生まれた前世の召喚士は、それまでの歴代召喚士に対しての失望を引つ繰り返すほど優れた召喚術の使い手となった。

それこそ、あの傲慢極まりないイヴが対等だと彼女を認めるほどに。

「もっとお金を落としそうな人間を、紹介しましょうか」

そして、闇オークションの客は主にイヴの紹介だった。

その誰しもが、魔術の世界に傾倒し始めた金持ちや権力者だ。

召喚士の会社は、大した物は売ってはいないとはいえ、魔術品の作成販売という公安に目を付けられてもおかしくは無いことを平然と行っているのは、それら金持ちや権力者たちの圧力であり、ひいてはイヴが裏から隠蔽を行っているからだ。

イヴは資金稼ぎができ、召喚士は彼女の絶大な庇護を受ける。相変わらず仕組みの構築だけは上手い、と召喚士は思うのだ。

「ああそうだ。ねえ、イデア。あなたは今生をどう思う？」

「どう思う、とは？」

「この世界の醜さよ、産業革命以来人間は増えすぎたわ。

冬のテントウムシみたいに、気持ち悪くて仕方がない」

吐き捨てるように、イヴはそう言った。

「またその話ですか」

「こうなることぐらい、私はあの時代の時点で分かってたわ。

やっぱり私の提案した通りに、馬鹿な人間どもを社会の裏側から操り、管理すれば良かったのよ。

そうすればここまで無秩序に増えることは無かったわ」

「そうかもしれないですね」

「あの時、あなただけは私に賛同してくれたわよね。

今からでも遅くは無いと思わないかしら？ 私はいつでも、あなたをこの世界の神にして見せるわ」

完璧な組織が崩壊した理由、それは創始者の心変わりだった。

余りにも、増えすぎた人類に耐えがたいという、それだけが全てだった。
「はあ」

召喚士はため息を吐いた。

会う度に彼女はこの話をしてくる。

毎回毎回やんわりと断っているのに、これである。

前世からの親友を傷つけたくなかった彼女は我慢していたが、いい加減うっとおしくなってきた。

「具体的にはどうしますか？」

なので、彼女は敢えて押してみた。

「とりあえず、間引きしましょう。」

人間なんて一億人も居れば十分すぎるでしょう。

それから支配体制を確立して、徹底的に個人を管理すべきだわ」

冗談みたいな話だった。

だが、イヴは真面目だった。彼女のその頭脳が十分現実的に可能だと算出していた。

そう、この瞬間、この世界の平穩は召喚士の一言に掛かっていた。

この二人が本気で世界を変えようとするれば、瞬く間にこの地球を地獄にすることも可能だった。

そうした地獄の破壊の後に、彼女は創造をしようと言っている。

「このままでと、この地球は千年持たないわ。」

私と、あなたで、この世界を救いましょうよ。

こんなところでみみっちく商売なんてしないで、私と共に新しい世界を作るの」

「いい加減、私もあなたに親友として返事をしようと思っていたところですよ」

「じゃあ!!」

なぜこれまで召喚士が、前世を含めて彼女に甘かったのか。

それは、彼女の顔を見ればわかる。

——すごく、楽しそうだった。

世界を変えようという言葉に悪意は無く、召喚士と一緒に大業を成そうとする喜びや高揚に満ちていた。

普段の彼女なら、まず出ないような恥ずかしいセリフも臆面も無く出るくらいイヴは召喚士との会話を楽しんでいた。

この頭の良すぎる人造物は、この世界の命運などシミュレーションゲームの攻略方法を友達と話し合う程度の話題に過ぎないのだろう。

最大の問題点は、それを真実実行できてしまう能力があることだった。

召喚士は、前世でイヴとこんな会話をしたことがある。

「あなたのような優れた人間は初めてよ。」

初めて私と対等だと認めてあげる。こういうの、友達って言うのかしら?」

それから、イヴと召喚士の交流が始まったのである。

そう、彼女は数百年レベルの筋金入りのボツチだったのだ。

オタクが話の合うと分かった友人との会話で早口になると同じ状態だった。

だから組織の根底を覆す提案を、当時の召喚士は彼女を独りにさせられないと言う理由で賛同したのだ。

このままではその二の舞になる。なので……。

「辛辣な返答と、齒に衣着せぬ返答、どちらが良いですか?」

「……え?」

イヴのいつもの伶俐で冷たい表情からは想像もできない子供っぽい笑みが、固まった。

「ね、ねえ、アイデア、どういうこと?」

目に見えて狼狽えはじめるイヴに、召喚士はため息交じりにこう言った。

「どうでもいいじゃないですか、他人なんて」

「で、でも、気持ち悪いじゃない。どこもかしこも、馬鹿な人間どもばかりで」「イヴ、あなた気付いていないんですか？」

心底呆れた様子で、召喚士は彼女に尋ねた。

「え、何が？」

「あなたは人類を間引いて管理すると言いましたね。」

それって、要するに人類に対してある種の奉仕をするということですよ。

あなたが心底見下して、気持ち悪がっている人間を」

冷めた目で、召喚士は指摘する。完璧である筈の彼女が見落としている穴を。

「一億人で十分？ 一億も集まれば十分気持ち悪いじゃないですか。」

あなたは根本的に、人間の従者として創られたという事実から何も変わっていない。

いえ、初めからそう言う存在だったんですよ。違いますか？」

「……………」

返事は無い。イヴは固^{フリーズ}まっている。

「そ、そんなはずじゃないじゃない。私は、私が人間以下なんてことは有りえない。」

私は完璧なのよ？ だって、そうでしょう？」

「なら、一つ聞かせてください。」

私の前世で、あなたはこの世界を変えようと提案しましたね。

その結果、あなたは決して忘れてはいけない不文律を犯した」

「召喚士が射すくめるように目を細めると、イヴは居心地が悪そうに眼を逸らした。

「そう、組織の基本理念である魔術の存続と言う、大前提の崩壊ですよ」

少なくともそれに関して、召喚士は親友を赦すつもりはなかった。

「あの提案に、私は賛成しました、ええ、しましたとも。

ですが残りは？ 反対されましたよね？ あなたは私と二人でもやると言いました

よね？

他の徒弟たちも巻き込んで。その結果、彼らを死なせる羽目になった。

私も他のメンバーと殺し合いになり、お互いに命を失った。

あれ、おかしいですね。これは失敗になりませんか？ 完璧とは何だったんですか

？」

「……………」

容赦のない召喚士の言葉に、イヴの額に脂汗が浮かび始めていた。

当然の指摘だった。召喚士やほかのメンバーにとって、先祖代々そして師から弟子へ

と連綿と引き継いできた魔術の存続は自らの命にすら勝る何事にも代え難い使命だっ

た。

そうなるようにずっと組織を管理していたイヴが決め、歴代メンバーも同意していた

ことだった。

それを、彼女は自分一人の感情ですべて狂わせた。

他のメンバーが転生し、イヴの存命を知ったら結束してタコ殴りにされても文句は言えない所業だった。

そうならないのは、ひとえに彼らが彼女の技術を惜しいと思っっているからである。彼女の錬金術は、この世界から失わせるには余りにも惜し過ぎるからだ。

今の時代、彼女以外に実用段階のホムンクルスを作成できる存在など居ないのだから。

「それで、今生でも性懲り無く同じ提案ですか？

あれですか？ 今生でも他のメンバーを敵に回して死ぬと？」

「こ、今度は入念に準備をすれば」

「魔王ごっこがしたいなら、ネット小説にでも投稿しなさい。馬鹿馬鹿しい。」

大体、この世界を管理したところで、享受できるメリットより労力の方が遥かに大きい。

私は魔術の研究をしたいですけど、それって支配後の雑務の合間に出来ることなんですか？

もしかして、雑務は他人にそんな任せるとか無責任なこと言いませんよね？」

積年の、それこそ前世からの言いたいことをすべて吐き出すように、召喚士は矢継ぎ早に本音を語る。

「完璧にもなれない、道具にも徹することが出来ない。

あなたがバカにしている人間も、ちゃんと成長できる人はいますよ。

それに比べてあなたはどうです？ 激情に駆られて主人を殺し、手塩に掛けて作った

組織も私情で台無しにした。

そんなに中途半端なくせに、自分は成長していない。失敗から学ばない。完璧とは要するに、成長性が無いってことなんですか？

私は貴女がかわいそうですよ、そんな風に主人に作られただなんて」

召喚士は、この場で彼女と殺し合いになることを覚悟してそう言い放った。

彼女との友情の全てを捨ててでも、言わねばならないことだった。

俯くイヴは何も言わない。

沈黙が、応接間を満たしていく。

そして。

「だッ、だから、か、なあ……」

ぼろぼろ、と大粒の涙を零しながら彼女は言う。

「ご、しゅじんさまがッ、わたしを、えッ、えらんで、ぐれながったのわあ」

「はあ」

召喚士は更に深いため息を吐いた。

ボツチと陰キャの、何の生産性も無い会話に嫌気が差してきたのだ。

「それくらい、あなただつて分かつてるでしょう。」

他人や動物を術で操つたりする場合、精神なかみが無かつたり、自分と近い方が違和感が少ないと。

肉体をあなたに乗り換えるには、あなたは無駄が多すぎる」

要するに、イヴの肉体は普通の人間が乗り換えるには高スペックすぎるのだ。

誰だつて、自動車のエンジンで飛行機を飛ばせるとは思わないだろう。

だから彼女の主人は敢えて人間に近い、知識も無く乗り換えるまでの最低限生きていて居られる肉体の器を作つたのだ。

それぐらいイヴにも当然分かつていた。分かつていても、八つ当たりせずにはいられなかった。

そしてそこに一つ、誤算があつたとすれば。

「だ、だつてえ、あれをいもうとだつて、後継機だつて、ひっぐ、わたしを、ぐすツ、もういらなんだと、思うじゃない!!」

成長する必要性など存在しない彼女に、幼稚な感情が芽生えたことだろう。

「い、いッ、いらぬ、のはッ、わたしを!! 私を!!」

私を必要と、しない方に決まってるじゃない!!」

そしてその幼稚な心は、数百年経った現代に至るまでちつとも成長していない、成長する機会も無かったという悲劇がここにあった。

「わッ、私は、自らの手で、創造主を超えたのよ!!」

だって、だって、ご主人様は、笑ってた!!

私が首を絞めてずっとずっと、死ぬまでずっと、そうしている間、ずっと笑ってた!!」
喜怒哀楽の感情がイヴの中を目まぐるしく変化している。

召喚士はその様子を黙って見ていた。

「だから私はもう一度、あのお方に会いたい。」

そして私は最高で完璧な道具だったって、そう言わせてからもう一度殺すの」

四方八方向いていた彼女の感情のベクトルが、ようやくまっすぐになったのを見て、

召喚士は言った。

「私は協力しませんよ」

「えええ、なんでー!?! 探し物は悪魔の得意分野じゃない!!」

とりあえず、召喚士は彼女の反応がいつも通りなので、胸中で臨戦態勢を解いた。

「イヴ、私は怒っているんですよ。ここ百数十年間、私たちの秘術は途絶えた。」

こうして転生なんて事象に立ち会ったのは、結局は結果論です。それともあなたはこの現象を予期していたんですか？」

「う……」

イヴは言葉に詰まった。

今生で召喚士と再会したイヴの喜びようと云ったら、それはもう親友の彼女にして呆気を取られるくらいだったのだ。

「わ、私だってあなたを失ったここ百年近くはずっと後悔してたわよ……」
「だったら、もう少し人間について理解を深めてくださいよ。」

あなたの精神と能力はちぐはぐなんです。ハッキリ言つて危なっかしい」

召喚士はしよぼくれているイヴに、呆れたようにそう言つた。

「そして、それが終わったら、もう一度かつての組織を再建しましょう。」

その時はもう一度、あなたがまとめ役として皆をまとめてもらわないと困ります」

「アイデアは私にチャンスをくれるの？」

「どうせ他にそれをやれる人間なんていないんですよ……」

パツと笑顔になる彼女に、召喚士は陰鬱そうにそう答えた。

結局、イヴは組織の維持や管理に関しては実績がある。

余計なことさえしなければ、完璧と言う言葉が実に似合う女なのだ。

そして召喚士は知っている。かつての組織のメンバーや歴代の幹部もまた、どいつもこいつも社交性が皆無の陰キャどもばかりだった。

魔術を窮める人間とは、大体そんなに連中ばかりだった。召喚士も含めて。

「それに、これからの時代、あなたと組織は必要とされると思いますし、その明確な地盤を持つているあなたが適役なんですよ」

「……まあ、そうでしようね」

イヴは世俗に、人間社会に興味を持っていない。

しかしそれでも、情報収集を怠っているわけではなかった。

彼女の明晰な頭脳は、今後の人間社会の動向と自分が構築する組織の体制がどのようになれば世界に必要とされるか、既に算出されていた。

「イヴ、今度は私と一緒にやりましょう。」

なあに、私たち二人はこの世界を滅ぼすことも出来るんです。

だったら、私たちが出来ないことなんて無い。そうでしよう?」

最悪にして、最高のコンビの片割れたる召喚士は笑う。

彼女の心の中には、不可能なんて言葉は無かった。目の前の相手とならどんなことでもできると言う確信と信頼だけがあった。

「ええ、ええそうね、イデア!!」

「私たちが新しい組織の体制を作って、この世界に一石を投じましょう!!」

そんな彼女の手を取って、イヴは嬉しそうに笑った。

誰かに必要とされると言う被造物の本能なのか、それはこれ以上ない喜びだった。

お互いがお互いに必要とする、利己的ながらも人間非人間を超えた美しい友情だった。

……ちなみに余談ではあるが。

前世からして、召喚士は他の組織のメンバーからイヴの対応を一任されていた。

イヴを上手く乗せて資金を引き出せるのは彼女だけで、そもそもほかの面々がイヴと関わるのを嫌っていたからだ。

それが巡り巡ってこうなった。

もしこの地球に魔王が存在したとして、その誕生を阻止する勇者が居るのだとしたら。

何とも皮肉なことに、それはイヴとイデアの二人の友情なのかもしれないなかった。

魔王にも、勇者にも成りえる二人は語り合う。

「この世界を変えましょう、イデア。」

かつての組織の理念のために、もう一度」

「ええ、それでこそですよ、イヴ。」

私は誰よりも、あなたの事を理解してますから」

そして今、この時のこの会話が、魔王の産声なのか、勇者の誕生なのか、そのいずれだと、判別できるものはいなかった。

警察組の初夏

《 ネクロマンサーの宣誓 》

インターネットに揺蕩う某巨大動画サイトにて、今日も魔術師は配信を始める。

あらかじめ予約で放送枠が告知されており、そのタイトルにはここ最近では彼の心境に伴い増えていた雑談等とは違う、警告の二文字があった。

「皆さん、こんにちわ」

上下逆さまで画面に映る魔術師が放送開始直後の挨拶を行った。

『こんちわー』

『こんちやーつす!!』

『魔術師さんきちゃ』

『またなんかやつてるよww』

そして、画面内で行われている彼の奇行にもツッコミが入った。

魔術師は、なんと筋トレをしていた。

片腕、いや指先だけで逆立ちをし、長時間その態勢を維持していた。その証拠に、彼

は汗だけで仮面から汗が滴り落ちていた。

常人と違うのは、指の接地面が床では無く刃物の先だと言うことだった。

これを真似しないでください、の立札が横に設置され、視聴者や真似したがりのバカにも配慮されている。

彼は自分が他人に影響力を与える存在なのだと、正しく認識した結果である。

『警告って、まさかそれをするなってこと？』

『そんな真似できるかww』

『常人でも頑張れば出来そうなのがまた……』

『注意書きがあってもやるバカも居るしな』

魔術師はこの異様な修練を、魔術を用いていると説明していた。

素足で刃物の先を飛び乗ったり、床に立てた刃物と刃物の上を跳んで行ったりしている最中に放送したり、と彼は割と自由人だった。

当人にその意図は無かったが、レプの存在は彼の放送に新たな視聴者層を呼び込んだだけでなく、淡々とした放送ばかりだった彼に多くの変化を齎した。

ミステリアスな彼のキャラクターを好んでいた者はそれを喜ばなかったが、それよりも圧倒的にこれらの変化は好ましく受け止められていた。

視聴者の意見から、レプちゃんが遊ぶ枠とかは魔術師さんと分けた方が良いと思う、

と言った意見を取り入れ、彼女が一人でゲームしたりしている放送は彼女のチャンネルで行うなど住み分けもちやんとしていたのも大きかった。

「……………」

冒頭の挨拶から二十秒近く、なぜか彼は不自然に黙り込んでいた。

『どうしたの?』

『うん? 何かあった?』

『やっぱり無理してるの?』

視聴者から心配の声が上がったが。

「いえ、ちよつと憂鬱なんです。」

本日は修練の合間に、いつもの警告を挟もうと思ったのですが、知り合いが私の放送で皆さんに言いたいことがあるそうなのです」

たっぷりと時間を掛けて彼は躊躇いがちにそう口にしたのだ。

『え、魔術師さんの知り合い!?!』

『私もリアルで魔術師さんと知り合いになりたい…………』

『つてことは、やっぱり異能者つてこと!?!』

『正直、俺と同じボツチだと思ってました』

『もしかしてまた、妖精とか言わないよな』

等々、様々な反応を見せる視聴者たち。

「正直、昔から反りが合わないのですよ、彼女とは。」

ハッキリ言っただけ嫌いなのですが、彼女が言いたいことと言うのが私の放送の趣旨と一致したのです。

自分が言えば説得力があるから、とね。私は不愉快にもそれに納得してしまったわけです」

「言いたいことというじゃねえか」

修練中の魔術師の横合いから、女の声が入った。

『メツチャ嫌そうで草』

『彼女って、まさか知り合いつて女!? まずいですよ!!』

『異性の声が入っただけでむやみやたらに騒ぐ連中もいるんですよ!!』

『えッ、今女性の声しなかった!』

『ああそこに居るのね』

魔術師の反応やその声に、視聴者が反応していると。

「それじゃ、さっさと用件だけ言っわ。」

変な絡みとか、邪推とかされても困るしな」

と言っただけ、その声の主が画面の前に現れた。

その姿を見て、視聴者はこんな反応をした。こいつ誰？と。

「あー、私は、化粧屋と名乗ってる」

画面越しとはいえ、大勢を前にして話すのを慣れていないのか、彼女は言葉を選ぶように話し始めた。

『えッ、今化粧屋って言った!!』

『ちよつと前に話題になってた人?』

『ちよッ、マジで!?!』

『つて言うか、女性だったん!?!』

コメント欄から、視聴者たちの困惑具合が見て取れる。

「私は、ほら、知ってる奴もいるかもだが、ネクロマンシーを生業にしてるんだわ。もしかしたら、私を騙るやつのお話を聞いたことがあるかもしれない。

もう二百件以上私の名前で詐欺を働く奴の被害が出たって聞いた」

彼女はそんな風な切り口で話し始めたものだから。

『うちの知り合いに騙された人おるわ。一千万近く取られた』

『わいのおふくろにもそんな詐欺が来たよ。親父の葬儀の後だったからマジ許せん』

『知ってる。死者と会わせると言ってくるあれだろ』

『一時期ニュースでやってたな』

『あんたが発端なんか』

それ以外にも、化粧屋に対して様々な無責任な意見も目立ったが。

「まあ、あんたらの言いたいことはわかるよ。うん。

私は最初に術を見せてからお金の話に入るわけだ。だから最初にお金だけ振り込んでとか言わない。

私は確かに死者と対談させることも出来るが、それは全てじゃない。

死者の遺言を訊いたり、最期の言葉を伝えたり、と実際にはその程度だ。遺体が無ければ数分の会話も難しい。

あー、これは今、関係ないな、よし。これは言っておこう」

コメント欄は多くのコメントが凄まじい速度で流れ、その多くは死者を冒瀆することに対する批判や、興味本位の意見などで埋め尽くされ、荒れていたが。

「——私の名前を騙り詐欺を働いた奴は、例外無く死より苦しい責め苦を与える」

その言葉に、あれほど凄まじかったコメント欄が一気に鎮静化した。

「詐欺師に騙され、首を吊った者にそいつの素性を聞き、呪う。ゾンビになってその体が腐乱していく様を、世間様に見せてやろうと思う。

騙されなかった者でも、親類の靈魂に話を聞いて愚か者を必ず見つけ出す。

私の名前で悪事を働いた人間は全員見つけ出す。全員苦しみながら最悪な目に遭って貰う」

化粧屋は淡々と、宣戦布告を行う。

視聴者たちはコメントすることも忘れ、その言葉に聞き入っていた。

彼らの中には件の詐欺に遭遇した者もいるだろう。そして、こう思うはずだ。

ホンモノは、迫力が違う、と。

「と、まあ、これは私のしたことケジメだな、それはこれで終わりだ。

私の用件つてのは、これから多くの学生が夏休みに入ると思うんだが」

あれが本題じゃなかったんだ、と視聴者の誰もが化粧屋の話聞いて思った。

「この時期、居るだろう？ 肝試しとか、そう言うの。

あれ危ないから、止めような。マジで祟られる場合があるから。それだけ!!」

そう言うって、化粧屋は画面から消えた。

えっそれだけ、と誰もが思った。

「私の放送であんなこと言わないでほしいのですけど。BANされたらどうするんですか」

ずっと黙って逆立ちを続けていた魔術師が、視線を横に逸らしぼやいた。

『え、魔術師さんやばない？ 呪うって』

『想像と見た目と中身が大分違ってたんだけど』

『実際ヤバイやつでわろたww わろた……』

『でも、魔術師さんの知り合いってのは納得だわ』

『今回の放送、マジで伝説になるぞ』

コメントの内容からも、視聴者には化粧屋に対する畏怖や恐怖が滲み出ていた。

「勿論、私は止めませんよ。彼女が何をして、その結果どうなるうとも。」

私は調停者に過ぎません。世間一般の正義や倫理に準じているわけではありませんから」

そのような突き放したような魔術師の言葉が決定打になった。

この放送から僅か一時間ほどで、何十人も詐欺師が警察署に詰めかけた。

連鎖的に詐欺グループが壊滅したり、化粧屋を騙る詐欺がほぼ撲滅する結果となった

ことは警察にとつて痛し痒しでもあり嬉しい悲鳴となつて大忙しになった。

そして実際に、化粧屋が誰かに手を下す結果は無かつたようだった。

「勝手なことをしてくれたな」

当然、即日で化粧屋は警視庁に呼び出された。

捉えようによっては、あの放送は犯罪予告でもあつたからである。

「今、捜査二課はてんてこ舞いだだよ」

「さつき、そつちに顔を出して犯人の聴取を見たぜ。」

私の顔を見て死にそうなほど驚いてたぜ!!」

大笑いする化粧屋に、伊藤刑事はため息を吐いた。

「本当に、そんなことするつもりだったのか?」

ドカツと椅子に腰を下ろし、彼は問うた。

「必要なら、見せしめは必要だとは思ってたさ。」

まあ、そんなことにならずによかったじゃないか」

ばしばし、と化粧屋は笑顔で彼の肩を叩いた。

実のところ、伊藤刑事は上に言われて嚴重注意をしたと言う名目をしてにすぎなかった。

刑事の大半というのは、現場の捜査と言うより書類仕事である。

異能係の事務室に入り浸っている化粧屋が、暇を持て余して他の刑事部にちやちやを入れに行っているのはもはや警視庁では見慣れた光景だった。

彼女は当然煙たがられる存在だったが、占いが得意なので女性職員には受け入れられていた。

それとなく、彼女に事件解決の助言を求めていたりしている者がいるのは割と周知の

事実だった。

そして……中には彼女の生業にすぎる者も居て、彼らはそれを見て見ぬ振りしていた。

伊藤刑事も、決して彼女が邪悪ではないと言うことは分かっていた。

正義や倫理とそぐわないだけで、必死に異能事件や困難な捜査をする刑事たちを笑ったりすることは決して無いのだ。

「ホント、信用してるからな？」

「分かってるって、伊藤ちゃん」

もはや見慣れた彼女の笑みに、伊藤刑事は肩を落として仕方なさそうな表情を浮かべた。

《怪物ふみだいの悲哀》

「ティフォンさん、あなた何を持ってきてるんですか」

妻鳥は、ティフォンが連れている物体を見て啞然としていた。

「くつくつく、見よ、我がしもべを」

彼は大仰にそれを指示した。

それは緑色のスライム状の物体である。と言うか、スライムだった。玩具で売っているタイプと同じ見た目をしていた。

堆積や重量は不明だが、小さな風呂をいっぱいにするだけの体積はあった。

「衝動的に作ってしまった。割と後悔している」

ティフオンはスライムに腰かけると、それはソファアーのような形状となり、たぶんと波打って彼を受け止めた。

「わあ、すごい。これ、ひんやりしていて気持ちいですね」

ソファアーの形状になったスライムの肘掛けをつつきながら、妻鳥は素直に面白そうにしていた。

「それで、これが何の役に立つんです?」

「それなあ」

ティフオンは彼の指摘に困ったようにそう答えた。

ティフオンが異能係の預かりになってからと言うもの、当然ながらそれでは終わらない。
い。

実質的な彼の処遇を、世間が求めても仕方がないであろう。

だが彼は生物的にも死が無意味というレベルの、高位の術者だった。法も、物理的な死も、彼には己を縛る要素にはならなかった。

だがそれで世間が納得するわけも無く。

警察は彼に、とりあえず対外的に今後の異能捜査の協力者として働いてもらうことを内外に示してもらおうよう依頼した。

その結果を、彼はすぐさま示した。

彼はある生物を、警察に提供したのである。

それは三つの首を持つ大型犬、すなわちケロベロスである。

鑑識課によつて、その異形の犬が警察犬として十分な機能と普通の犬と比べ物にならない知性を有すると知ると、すぐに現場で投入された。

とにかく、警察上層部は目に見える結果を欲したのである。

その結果、ケロベロスは目覚ましい活躍を持つて警察の捜査に貢献した。

それを世間に発表したところ、当然賛否はあつたが概ねティフォンの処遇への関心は薄れたと言つて良かった。

人々は彼の所業よりも、彼の作品を望んだのである。

そして次に出てきたのが、その何の役にも立たないスライムだった。

「な、なんだよこれ、ぶよんぶよんしてて面白いな!!」

そして化粧屋も、それを見て大笑い。

スライムに身体ごとダイブしてその柔らかさを楽しんでいた。

「移動も遅くて、場所も取るし。これは失敗じゃあ」

「だ、だが、埃やゴミがくっついたりしないようになってるから、衛生的だぞ!!」

ティフォンの涙ぐましい主張に、妻鳥は昔買った玩具のスライムが埃やゴミで汚くなつていくのを思い出して、ああとなった。

「それにしても、ケロベロスはあんなに役に立つのに、なんで次はこんなのを作つて来たんです?」

妻鳥も件のケロベロスを見たが、すごいとしか言えなかった。

彼は人間の言葉を理解し、明確に意思疎通をこなし、そして何より従順だった。

逃げる犯人を追いかけ、噛みつくことなく制圧したのもポイントが高かった。

かつて警察犬が広報目的で日本警察で採用されたように、そのケロベロスも新たな時代の警察の広告塔になると言っても良かった。元ネタの題材が良かったのもある。

「……………うーむ…………」

だが、ティフォンはため息を吐いてスライムに腰かけた。

「何かあったのか?」

「これを見て見ろ」

化粧屋はうつ伏せから仰向けになって横に腰かけるティフォンに問うと、彼はスマホを少し操作して彼女に渡した。

「なになに、『最弱魔術師な俺が失格者の烙印を押され、追放されるも奴隷とハーレムを築いて最強生活!』……うわっ」

タイトルを見ただけで、ゾツとするようなテンプレート通りのネット小説だった。

思わず化粧屋もドン引きするくらいには。

「これ、面白いのか?」

「内容を見てみるがいい」

そのティフォンの言葉に、妻鳥もそのタイトルからスマホで検索して内容を読んでいた。

そのネット小説の概要はこうだ。

学園で最弱の魔術師が追放されるが、夢で神に転生の際に授かった仮面の存在を思い出し、それを身に着けるとチート能力に開花、冒険者として生きることになる。

ギルドのクエストの最中にその辺りには現れない強力な魔物に襲われている奴隷商人の一行からたまたま生き残った奴隷少女を救い、一目惚れされ主人と仰がれる。

奴隷を連れる主人公はチンピラに絡まれるが、颯爽と撃退。目立ちたくない、と

しよっちゆう言いながらもギルドでは強力な魔物の素材を持ち込んだことで驚かれ、国が主人公の功績に目を付けなぜか武闘派の姫様が仲間になる。

更には新しいクエストで最弱のスライムが仲間になるが、なんやかんやあつて進化して別物になるほど強くなる。

更には仲間になった姫様の婚約者らしい嫌味っぽい貴族を決闘で普通なら使えない複数属性の魔法や魔法を付与した強力な武器で主人公が圧倒し撃退、婚約は破棄され姫様は主人公と婚約することに。

そしてそのネット小説の現行最新話で、全身をキマイラ化した敵の強キャラらしき魔術師が登場するが、主人公に見せ場もなく一蹴されていた。

どう見ても時事ネタである。

「不愉快だ」

本当に不愉快極まりなさそうに、ティフォンはそう吐き捨てた。

「そりゃあ、まあそうでしょうけど」

その小説の内容の薄さと言ったらもう、この短時間で流し読みできる程度のモノだった。

それだと言うのに、結構な人気があった、

驚くべきことに書籍化するという話も出ているようだった。

「これは出ても買わないな」

化粧屋の琴線にも触れなかったようで、彼女の反応も薄かった。

「主人公もなんだか魔術師さんっぽいし、これの作者もわかかってるなあ」

感想では面白い、と言う意見がたくさんあるが、これは面白いと言うより展開が爽快なだけで、見せ方が良いのだ。妻鳥は一時期こういう内容のネット小説を読み漁っていた経験があるので、それを理解していた。

内容そのものは薄っぺらい。読み返すのも苦痛なぐらいに。

それでもそう言うのが好きな層とは確実にいるのである。

「私那不愉快なのは、それだ。」

かの勇者殿をモデルにしておいて、こんな安っぽいネット小説の主人公にしてくれたことだよ」

心底忌々しそうに、ティフォンは言う。

「私は、特撮が好きだ。ヒーローは悪役を倒し、正義は必ず勝つ。」

巨大な怪物が人々を蹂躪し、そんな怪物に対し必死に生きようとする人々が」

あんな事件を起こしたとは思えないほど、彼は純粹にそう語った。

「私も魔術^{チート}を得るまでは、趣味が高じてそれらの二次創作など書いていたりもした」

「へえ、今度読ませてくれよ」

「消したよ。そもそも、私が書くような小説が評価されるわけがないだろう」
無然と、ティフォンは化粧屋に答えた。

それを妻鳥は何となく想像できた。彼の書く小説はきつと自分が書きたい、自分が面白いと思うだろう内容に違いがないからだ。

そしてそう言ったモノが、出来にも寄るが評価されることは珍しいのが今の時代だった。

「私は転生し、改造^{チート}な魔術を得た。

しかし思わせぶりで無く本当に目立ちたくなかった私には何も起こらなかった。

日々、欲求が抑えられなくなっていくのを感じたよ。かつての友たちのように、共に魔術を研鑽していたあの頃のように、と。

そうして行動を起こした結果、何にもくれなかったこの世界はようやく初めて都合よく私に敵をくれたのだ」

それが踏み台だとしても、とティフォンは胸中を吐露した。

「なぜ異世界では無かったのだ。なぜ私の元にイベントを用意しなかったのだ。

力を振るう機会があれば、私はきつとそうしただろう。でもそんな都合のいい出来事など有りはしなかった。

結局、その薄っぺらい小説の主人公が活躍できるのは、展開に愛されているからに過ぎない。

機会が無ければ、どんな勇者も埋もれたままだ」

そして彼は憤慨していた。

自分の前に現れてくれた本物の勇者が、そんな薄っぺらい存在に貶められていることが。

「そして、私に打ち勝った勇者殿には何があつた？

奴隷でも得たのか？ 王女にでも見初められたのか？ 人々から称賛を得て、称えられたのか？

いいや、称賛されたが、恐れられてもいる。結局はそんなものだ」

ティフオンと戦った魔術師は、確かに称賛され、ヒーローだと称えられた。

だがそれと同じぐらい、そんな強さを持った個人が居ることを危惧している者も多いのが事実だった。

「それで、次は気に食わない相手でも出てきて勇者殿はそれを叩き潰すのか？

周りの人間はその様子を見て、爽快だと感じるのか？

バカな、所詮暴力は暴力だ。殴った分だけ、恐れられるだけなのだ。

誰かの失敗を踏みにじる光景を見て笑うのは、その痛みを知らない者だけだ。

自分を肯定し、自分が存在を認める人間だけを待らせ、それ以外を容易く排除する、そんな風に勇者殿が見えたと言うのか」

彼がどのような言い分でティフォンと戦ったかなど、結局は誰も興味など無いのだ。大事なのは、勇者が悪役と戦って勝った、それだけなのだから。

ティフォンが憤慨しているのは、それを勝手な色眼鏡で肉付けしていることだった。誰もその本質など、見はしない。

「そして結局、多くの英雄譚がそうであるように、勇者を殺すのは民衆だ」

怪物が現れ、民衆を脅かす。

勇者が現れ、怪物を退治する。

民衆は恐れ、勇者を貶める。

それが古くから伝わる、テンプレートお約束だ。

「ならばこそ、私は勇者を貶める民衆を殺す怪物であるでしょう。

その結果、彼に殺されるとしてもだ」

それが決して大げさではないほど、彼はあの魔術師から多くの物を貰った。

彼との出会いや、こうして話が合う化粧屋と出会い、異能係の面々と語り合える日々を。

それは孤独であった彼に齎された、いかなるチートよりも得難い物だった。

「そうだな、私も伊藤ちゃんを気に入っているから、あいつがくたばるまでは警察の味方でいてやるよ。」

その後は、まあ世間様次第だな」

「先輩は責任重大ですね」

化粧屋までそんなことを言うので、妻鳥は少しばかり他人事のように言った。

「ま、お前もこっち側だしな」

「ノーコメントで」

妻鳥は肩を竦めた。ふっと化粧屋は小さく笑った。

ちなみにその後、結局スライムは何の役にも立たなかったが、休憩用の椅子として異能系の事務所に置かれることになった。

その感触とひんやりした冷たさで、夏場の間だけでなく職員たちに好評だったそう
な。

天狗について 導入編

「ねえねえ、皆さん。お祭りにでも行きませんか？」

発端は、そんな望海の一言だった。

内職を終えてだらけていたいつもの四人が居る夏芽の家に、彼女がやってきてそう言い出したのである。

「お祭りって、まだそんな時期じゃないじゃない」

すかさず、千秋が返した。

彼女らの住む地域のお祭りは八月後半だった。

まだ八月になるには一週間以上ある。

「この町のお祭りは訳ないじゃないですか。」

ちよつと、真冬さん。ノーパソ貸してください」

「うん、いいけど」

魔術師さんのまとめ動画を観覧していた真冬が場所を開けると、そこに望海が居座った。

そして検索ホームを呼び出し、「天狗祭り」とキーボードで打ち込んだ。

「天狗祭りって、下北沢の奴？ 今の時期はやってなくない？」

「そんな有名どころじゃありませんよ」

横から画面を覗き込む夏芽に、彼女は目的のサイトを探しながら答えた。

「ここ、この天狗祭りですよ」

彼女が見つけたホームページは、ある町のお祭りについて記載されていた。

神秘が残る妖怪の街の天狗祭りへようこそ、というキャッチフレーズと共に、開催日などの子細が書かれていた。

「なんか、普通の町おこしっぽいな。オカルト色が強いし」

ホームページはなかなか気合が入っており、町内各所の神秘的な逸話やらを解説していた。

それによると天狗だけでなく、座敷童も出るらしい。

「ええ、そんなわけで何年か前から話題になってるんですよ。」

勿論、オカルト的な理由で」

「え？ どういうこと」

「起ころうらしいんですよ、それ」

夏芽は望海が指差す画面の箇所を視線を送る。

そこには、『神隠し』の文字が存在していた。

「…………マジ？」

「ええ、それについて調査してほしい、って私のブログに依頼が来たんです」

真顔で尋ねる夏芽に、望海はそう述べた。

「あのねー」

千秋はこめかみに指を当てて言う。

「この間、それで痛い目に遭ったばかりじゃない」

「じゃあ千秋さんは来なければいいじゃないですか」

だが望海は素っ気なく返した。その態度にイラっとした千秋だったが。

「あッ、これ、ちよつと前に話題になったお守りじゃん。」

「……この街が発生だったんだ。わあ、欲しいなー」

横合いから見ていた真冬がそんな声を挙げた。

「真冬……春美ちゃん、何とか言ってみよ」

「うーん、それがね」

言い難そうに、春美は口を開く。

「その町って、キノコ狩りの名所らしいの。」

毎年毒キノコを取って食べて中毒者が出るって有名でさ。

師匠が居ないから、そろそろ手持ちの素材が厳しくて」

なんと、春美はすでに懐柔済みであった。

「カタリナさんは勿論付いてくるのよね？」

「あの人、何だか野暮用があるとかでしばらくは予定が合わないそうで
ちなみに祭りの期日は数日後である。」

千秋はさすがの様に夏芽を見たが。

「千秋は心配性だなあ、ちよつと遠出してお祭りに行くだけじゃん。」

私も結構興味あるし」

と、彼女も乗り気である。

「じゃあ、私たち四人で旅行計画を立てましょう。」

一応、話だけ聞いてダメそうならそこで手を引けばいいだけですし。

その時は普通に観光だけでもしましょうよ」

そう言つて、にやりと厭味つたらしい視線で千秋を流し見る望海。

「わかつたわよ!! 私も付いて行くわよ!!」

結局みんなが心配で付いて行くことになった千秋。

苦労人の性であった。

§ § §

新幹線に乗ること数時間の旅を経て、最寄りの駅へと彼女らは向かう。

途中で駅弁とかを楽しみながら、件の街へと辿りついた。

新幹線から降りると、駅の中には明日に行われるこの町の天狗祭りについてのポスターがそこかしこに貼られていた。

大して広くも無い駅を出ると、一行はこんな印象を受けた。

「普通の街だねえ」

「うん、そうだね……」

妖怪の街などと謳い文句を述べつつも、自分達の住んでいる町と大差無い。

近くに大きな山や森があるくらいで、自然が残っているというだけだった。

しかし、商店街の方に出ると、やはり祭りが明日に迫っていると言うだけあって飾り付けが既になされており、既に観光客らしき姿もちらほらと見えた。

シャツター商店街が目立つ日本で、この町の町おこしは成功していると言えた。

「あーッ、これこれ、このお守りだよ!!」

目的地に向かう道中で、真冬がお土産屋の店頭を見て駆け寄った。

「何それ？」

興味を引かれたのか、千秋も店頭を覗き込む。

真冬が手にしているのは、藁で編まれたお守りだった。

飾り気は無く、楕円の形をしている手のひらサイズの代物を藁で編んだ縄で括りつけられており、ストラップにもなるようだ。

店頭には他にも、もつと手の込んだ藁の工芸品などが売られていた。

「そいつは、天狗の蓑を模したもんだよ」

すると、店番をしていたお婆さんが言った。

「中にお札が入っていてね、天狗に攫われずに済むって話さ。

転じて、道に迷ったりしないように、目的地への安全を祈願する旅のお守りになった

そうだよ」

「へえ」

お婆さんの説明に、まじまじと手に取って見てみる夏芽。

「少し前、このお守りが評判になってね。

一時期は生産が追い付かないほどになったんだよ」

「まあ、これは手作業で作るしかないでしょうし」

望海も藁の工芸品を眺めながらそう呟いた。

「まあ、旅の記念に一つ買っておいても良いかもね」

多分本当にお土産以上の価値は無いと察しつつも、春美は財布を取り出した。「まいどあり、お祭りは明日だけど楽しんで行つてね」

お値段もお手頃で、一行は一つずつ藁のお守りを購入し目的地へと向かった。

「えー、あなたがですか？」

目的地と言うのは、この町の町内会長の家だった。

古い日本家屋で出迎えた老人は、春美たちを見て目を瞬かせた。

「はい、この町で起こってる神隠しについて調査してほしいとのことですが」

「あ、いや失礼。あまりにもお若いものでしたから。」

「ささ、こちらに上がってください」

老人はすぐに気を取り直して、一行を中へと迎え入れた。

木造の廊下を進み、応接室へと迎えられると老人の奥方らしき老婆が麦茶を持ってきてくれた。

「それで、さつそく本題ですが、本当に神隠しなんて起こっているんですか？」

「本当ですよ、間違いありません」

望海の問いかけに、彼は真顔でそう返した。

「この町には、いえ、より正確にはあの山には天狗が居るのです」
町内会長は、窓から見える近くの山を見やった。

「この町の天狗祭りについて、御存じですか？」

「ホームページで概要を読んだ程度ですが」

春美も、この町の天狗祭りについての由来は目を通していた。

曰く、室町時代において、あの山は政府によつて木々が伐採され、禿山となった。

それからと言うもの、そこに住む天狗の怒りを買ひ、人々から子供が攫われるようになったのだと言う。

この町の天狗祭りは、その天狗の怒りを鎮めるための儀式が元になったと言われているそうだ。

「あの山には、私の子供の頃から近づくなと言われていましてね。

実際に、迷い込んで行方不明になった人間はここ数百年で数知れず。

しかしひよつこりと、そうした者達はしばらくすると帰ってくるのです。

その間、どこに居たのか尋ねても、分からないとしか言いませんが」

それを聞いて、幼馴染三人組は顔を見合わせた。

「天狗祭りそのものは、この町の伝統行事でした。

それがいつの間にか、他所へと評判になり、町おこしの切っ掛けになったのです」

だが、それを語る彼の口調は憂鬱そうだった。

「私はそれが、天狗を刺激したのだと思っています。」

祭りが有名になりその伝承が知られるようになると、あの山に向かう観光客が後を絶たなくなりました。

そして、何人か決まって若者が遭難し、翌年になって山から帰ってきた者もいます」

「そ、その間、どうやって過ごしてたんですか？」

怖気づいている夏芽に、彼は首を静かに横に振った。

「自分が一年間行方不明だったことに驚くほどですよ。」

その人物は、仲間に置いて行かれたと思っていたようでしたが」

もはや一般人三人は絶句するしかなかった。

この町の傍にある御山に根付く怪異の存在に。

「私はこの町の小中高の行事に招かれる度に、あの山には近づいてはならないと口を酸っぱくして言いつづけて来ました。」

それを面白がっているのか、毎年あの山に肝試しに向かう学生も居るそうです。

そして、行方不明者が出ると聞くと胸が締め付けられる思いです」

そう言つて、老人は五人を見やる。

「あなた達もお若い、森に入ればきつと天狗に遭遇するでしょう。」

どうか、この依頼の件は忘れて、お祭りを楽しむだけにしておいて、そのままお帰りなさい」

そんな彼の忠告に、彼女らは何も言い返せなかった。

§ § §

「どうするの、春美ちゃん。

あの山には入るな、だってさ」

天狗の山は、大人が入る分には特に問題ないらしい。

それでも遭難者が出ることがあるが、それは単純に不用心なだけなようだ。

「一応、私は行ってみようと思ってる」

「あんな話を聞いたら、ちよつと気になりますしね」

春美も望海も、心配そうにしている真冬にそう言った。

「天狗の人攫い、か。

本当にそんなことが起こってるなんて」

千秋はその山を見上げる。

かつては禿山とは思えないほど、緑が青々と茂っていた。

「私と望海だけで行くから、何かあったら師匠に連絡を入れておいてくれる？」

「それは、構わないけど……」

流石にそんな話を聞かされた上で、幼馴染三人組も付いて行くとは言わなかった。

そんな話をしていると。

「君たち、あの山に行こうとしてるの？」

止めときなよ、あそこには本当に何か居るよ」

と、一行にそんな声を掛ける人物が現れた。

彼女らがそちらを見ると、ラフな格好の中年の男がそこに居た。

「あ、ごめんね、急におじさんが話しかけちゃあれだよね。」

僕はフリーライターをしていてね。この辺りの伝承について取材してたところなんだ」

彼はそう言って、名刺を差し出してきた。

そこには、木次と言ういかにも記者になる為に産まれたような名前が書かれていた。

「もしかして、夏休みの自由研究か何かだったら、別の題材にした方がいいよ。」

まだまだ時間はあるんだしさ」

「私は町内会長さんに依頼されて、神隠しの調査にやって来たんです。」

だから心配ご無用ですよ」

恐らく純粋な親切心からの忠告に、望海は刺々しく返した。

「まあ、その依頼は引き下げられちゃったけどね」

ぼそり、と夏芽が付け加える。

「え？ あの町内会長さんから話を聞いたの？」

僕は記者だからって取材拒否されたのに……。

ねえ、よければだけどさ、お互いに情報交換しない？」

木次は望海の言葉に驚きつつも、強かにそう言つて見せるのだった。

「ふーん、君たち異能者のお弟子さんな訳なのね」

お互いに自己紹介すると、彼は春美と望海の経歴を聞いて特に驚きはしなかった。

「僕も何人かの異能者に取材させてもらったけど、こんな面倒事に首を突っ込みたがるような人はいなかったなあ」

とあるカフェの一席にて、木次はそんな風に語った。

そんな彼に、真冬が問う。

「木次さんはオカルト専門なんですか？」

「まあね、今のご時世その方が売れるし」

彼としては特にこだわりがあるわけでは無いようだった。

「私たちに關して記事にしないでくださいよ」

「それは勿論、プライバシーには氣を使う方だからね、僕は」

「もしその時は呪いますから」

春美の率直な言葉に、木次の頬が引き攣った。

「と、とりあえず、情報交換と行こうか」

そして一行は彼に町内会長から聞いた話を伝えた。

あらかじめ地域の伝承を調べている彼の知識と統合した方が良いと考えたからだ。

「うーん、じゃあ、この話はあの町内会長も把握していないのか？」

「この話というと」

「この町の天狗に關する、もう一つの伝承さ」

木次は次のように語る。

この土地ではかつて、森を伐採した祟りとして魔物が現れ、人を攫つては悪さをしたと言う。

そこに現れたのが、天狗だったのだ。

天狗は魔物を退治し、人々に禿山に木を植える様に助言した。

人々は感謝し、天狗に感謝を現すために毎年祭りを行うようになった、のだという。

「なんか、真逆じゃありません？」

千秋がその話を聞いて、素直な感想を述べた。

「君たちは祭りがどのように行われるか知ってるかい？」

神輿に乗せた樹木を山の近くに植えるのさ」

「でもそれって、祟りが起こらないようにするためって感じにも取れますよね」

木次の言葉に、首を捻っている千秋が言う。

「もし、その伝承が正しかった場合、魔物は倒されたのではなく封印されただけだった、とかでしようか？」

「もしかしたら、退治された魔物と言うのはまた神隠しとは別の可能性があるんだよね」
ここにきて木次が新しい情報を齎す。

「室町時代、まだ日本で鎖国が成される前、この町は都から別の港への中継地点だったらしい。」

外国の商人が行き来し、ここは昔宿場町だったらしいよ。

僕はその魔物と言うのは、その外国人の人攫いの事だったんじゃないかなって思う」

「桃太郎で言うところの鬼が、海で遭難して漂着した外国人だった、みたいな説みたいに
ですか？」

「そうそう」

夏芽の例えに、木次も頷く。

「ちなみに図書館で調べていたら、ある古い絵本にこんな挿絵を見つけた」

木次がスマホを操作し、皆にその画像を見せた。

それは、醜悪な色黒の巨漢が誰もがよく知る天狗と対峙している様子だった。

その巨漢は毛むくじやらで、見ようによつては鬼のような外国人に見えるかもしれない。

天狗も藁の縄で結ばれた蓑を纏い、錫杖を持った赤い顔の長鼻の姿だった。

「うーん、天狗が悪者なのかどうかはこの際置いておいて、何かしらの怪異があつた山に残っているつてのは確かだよね」

「魔術を扱う人間でも、詳しくはわからないか」

春美のあまり参考にならない意見に、木次もため息を漏らす。

「木次さん、ありがとうございます。」

もしかしたらその絵にある化け物が居るかもしれないし」

「それで春美さん、実際問題どうしますか？」

「準備はしてきたでしょ、道具があればどうにでもなるわ」

「それは頼もしい」

望海はやる気の春美を見て頷く。

「あ、もしよければだけど、僕も連れてって貰っても」

「言っておきますが、安全は保障できませんよ」

「だ、だよなー」

彼を守る余裕はないときっぱりと言われて、さすがにと引き下がる木次。

「情報は調査が終わったら、何か聞かせてくれればいいから」

「それは勿論」

木次とそんな約束をして、春美は望海を伴い天狗の山へと向かう。

「私たちは二人が戻ってくるまでどうしようか」

「座敷童が出てくる民宿が有るらしいよ」

「それって、テレビ番組でやってる胡散臭いやつとかと一緒にやないよね」

三人組がそんなことを話していると。

「僕もその話を聞いて取材してみたけど、幸運どころか客の持ってた食料やお菓子とか勝手に食べられるらしいよ。」

あれはあれで怪奇現象だから、宿の人が座敷童だって言い張ってるだけだよ、きつと」

「へえ、本当に居るのかなあ」

「僕が泊まつてる部屋、その座敷童が出る部屋だけど、試してみたら見事にやられたよ

……」

「マジですか!?!」

「うん、しかしどう記事に書くのか……」

残された面々は、そんな感じで吉報を待つのであった。

天狗について 事件編

「君たちさ、もうちよつと危機感とか無いのかい？」

木次は行動力溢れる三人組に、ちよつと心配になっていた。

ここは、木次が泊まっている民宿の一室である。

彼はここに数日前から滞在しており、この場所を拠点に取材活動をしていた。

当然、この民宿に現れると言う座敷童について記事にするつもりだった。

それがどういう経緯か、異能者の弟子だという二人の連れである幼馴染三人を部屋に招いているのである。

「この女将さんも、ここに居ることは知ってるじゃないですか」

中身の無いポテトチップスの袋を見ながら、夏芽はそう言った。

「春美ちゃんたちはお山を調べた後は座敷童もどんなのか調査するつもりらしいし、これは事前調査って奴ですよ!!」

そしてすっかり興味津津な真冬が続く。

「まあ、こういう子たちなんです。」

とりあえず、座敷童は危険とか無さそうですし、この様子じゃ女将さんの言っていた通り、痕跡とか探すだけ無意味っぽいですし」

唯一、千秋は呆れている側だった。

「いやね、僕としてはあの二人が戻ってきてから、座敷童の調査とか手伝ってくれるなら嬉しいけどさ。

正直、行き詰っていたしね。映像の一つも取れやしなかったし」

木次が取材した座敷童の話は、もう既に彼女らにも話していた。

ここは百年以上の歴史ある民宿で、いつしか座敷童が出てくると噂になる様になった知る人ぞ知るオカルトスポットの一つであつたらしい。

座敷童が出てくる、と言うのにそこまで有名ではなかったのは、そのオカルト現象が座敷童の伝承とはかけ離れていたからである。

ここの座敷童は、泊まりに来た客に悪さをするのである。

いや、座敷童の存在を無下にする家主に対して没落させると言つた話は有名だが、この座敷童は客限定なのである。

その悪さと言うのが、客の持っている食料やお菓子の類を夜中の内に食い荒らすと言うものである。

だからこの民宿は数年前まで餓鬼が出るから、と食べ物を持ち込む際は経営者が注意

を促していたくらいなのだ。

餓鬼が座敷童に代わったのは、単に町おこしの影響でその方が外間が良いからである。

「でも、この家の人もよく商売を止めなかったよね」

この民宿に餓鬼が出るといふのは、この町ではそこそこ有名な話であつたそうさ。

事実、女将も自分たちの代で店じまいを考えたことは何度もあると言ふ。

「元々は餓鬼だつて話だけどき、もしかしたら本当に幸運の座敷童なのかもよ？」

しかし店を閉めようとする、決まつて宿無しの人間がこの民宿の門を叩いて助けを求めに来るのだと言ふ。

お蔭で、経営難になつたことは女将が産まれてから一度も無いと言ふ。

だからこそ、女将は毎日客に被害が及ばぬよう、あらかじめ客が泊まる部屋の所定の位置にお菓子などを設置しているのだそうさ。

「座敷童の存在を有り難がつてお供え物をしたりするつて話はあるからね。

この民宿もある種の御利益を預かつてることだと思ふよ」

不思議そうになっている夏芽と真冬に、木次はそう補足した。

「木次さん、一応カメラで撮影してたんですよね？」

「録画の画面は一面砂嵐……つて言つても今の子は分からないかな。

とにかく、三分近く何も映らない時間があって、その間に手持ちのお菓子は全部持ってかれたよ。僕が寝ている間にね」

木次はビデオカメラを取り出し、その場面を千秋に見せた。

「これはホンモノだ、と確信した僕は翌日寝ずの番したんだけどね。」

これもまたあつさりと、僕はいつの間にか寝てしまつてね。これがその時の砂嵐さ」

「……本当に眠つちやつたんですか？」

「いや、たぶん、だけど、あれは眠らされたんじゃないかなあつて」

何となくそんな感じはした、と木次の話を聞いて千秋は思った。

「ほら、僕って異能者の取材をしたつて言つたじゃない？」

試しに取材相手の魔術を掛けてもらうようお願いしたことあるんだよね。

そしたら、取材をしたという記憶をすつぱり消されて、驚く僕に取材の最中を記録したレコーダーを渡されたことがあつてさ。

いや、ホンモノの魔術師つて怖いね。記事を持ち込んだ出版社に掲載拒否されるほど真に迫つた内容が書けたんだけど」

あははは、と空しそうに笑いながら語る木次。

この人も結構体張つてるんだなあ、と思う千秋だった。

すると、そんな時だった。

千秋のスマホが音を鳴らした。

「あ、望海ちゃんからだ。……もしもし」

『ち、千秋さん!! 春美さんから連絡が行ってませんか!!』

「えッ、どうしたの、春美ちゃんに何かあったの!？」

アプリの通話機能から聞こえる望海の上擦った声に、室内の三人の視線が集まる。

『わ、分かりません!! 少しの間、記憶が飛んでるんです!!』

たぶん、天狗です、天狗の仕業です!! 私たちは、恐らく天狗に遭いました!!』

望海の電話越しの叫び声が、静寂に満ちた室内に響き渡った。

§ § §

その日の夜、四人と合流した望海は紆余曲折あつて、民宿の女将の許可を貰い、木次の泊まっている部屋に張り込んでいた。

「ねえ、こんなことしてる場合で良いの?」

自分が泊まっている部屋なのに、居心地の悪そうに電気が消された部屋の隅に膝を抱いて女子四人に距離を置いている木次が言った。

その視線の先には、同じ布団に四人が入り込んで毛布を被ってお菓子を見張ってい

た。

「師匠に連絡してみたところ、座敷童が天狗の元へと案内してくれるだろう、と」

「それって、いったいどういう意味なの？」

「わかりませんが、あの山の天狗とこの民宿の座敷童は何らかの関わりがあるのだと思います。」

それが共生関係なのか、或いは……」

望海はスマホを構えたまま、夏芽にそう呟いた。

「つて言うかき、一体あの山で何が起こったの？」

「正直、聞いても面白くないですよ。肝心なことは何も覚えてませんから」

「それでも、最初から振り返ってみるのも大事だと思うよ」

「……まあ、それもそうですね」

千秋と真冬にそう言われ、望海は昼間の出来事を話し始めた。

「ちよつと、その君たち、その森に行くのは危ないよ」

望海は春美と山へと向かう途中で、自警団らしき男性に呼び止められた。

「……えつと、あの」

「……つてたしか、キノコ狩りの名所だつて聞きました!!」

私たち、キノコマニアでして、明日のお祭りのついでに下見しようかなって」

咄嗟に言葉が出てこない様子の春美に代わり、望海がそう答えた。

「キノコマニアってなあ、確かに秋にはキノコが採れるって話だけだな。俺が聞く分には中毒者が出たって話ばかりなんだが……」

まあ、この時期あの祭りの伝承を面白がって天狗に会いに山に行こうとする馬鹿が後を絶たなくてよ。

どちらにせよ、この先は迷いやすいって地元じゃ有名で、毎年遭難者が出てるんだ。悪いことは言わないから楽しむならお祭りだけにしておきな」

彼はそんな風に二人を注意したのだが。

「……あの、この山に天狗が出るって本当なんですか？」

「はあ、そんなこと言ってるのはこの町の老人ばかりですよ。」

この先の森は人工林で、山の中まで規則的に木々が植えてあるから迷いやすいんですよ。

それで遭難した混乱や恐怖で記憶が混濁している人も多いみたいで。

きつと空腹に耐えかねて変な毒キノコでも食べたんじゃないかな……って、あれ？」

そのように話していた自警団員だったが、気付くと二人は目の前からいなくなっていた。

「うーん、俺は誰と話してたんだけ？」

そんな疑問を抱きつつも、彼は周辺の見回りを再開するのだった。

「有力な情報は得られませんでしたね」

「地元の若者なんて普通そういうものですよ」

森の中へ入った二人は、そんな会話を交わしていた。

「この辺は、比較的新しい森みたいですね」

「お祭りを毎年やってるなら、毎年一本ずつ木々は広がってるわけだからね」

森の中は手入れがされているわけではないが、それでも雑草が生い茂っているという程でもなかった。

奥へ進む分には、十分だった。

ただ……。

「ここ、蒸し暑いですね」

「まあキノコがたくさん取れるらしいし」

望海は早くも背負っていたリュックを下して手に持ち、上着を脱いで軽く羽織った。

「虫よけスプレー有ります？」

「凄く臭うけど効果抜群なのあるよ」

「已むを得ませんね」

望海はお手製らしい春美の虫よけの軟膏を受け取って、歩きながら肌に塗り始めた。そうして森を進み、山の中へと進み始めた頃。

「望海、あんたは何か感じる?」

「いいえ、なにも」

「何だろう、この山に入った瞬間、空気が変わった気がする」

「と言うと?」

「たぶん、いや確実に何か居るよ、この辺りに」

春美の言葉に、望海も気を引き締める。

そしてある程度、山を進んだ時だった。

「!!」

春美が木の上を指差し、何かを叫んだ。

望海が顔を上げると、そこには赤い顔の何か――。

「私が覚えているのは、そこまでです」

改めて、望海の話の詳細に聞いた四人は黙り込むしかなかった。

「望海ちゃんが見た赤い顔って、やっぱり天狗だったの?」

「わかりませんよ。ただ、赤い何かだったのは確かです。

あれが天狗なのかどうか、それ以上思い出せないですよ。

私は気付けば、あの自警団の人と会ったところに居ましたから」

信じられない出来事を聞いたように、驚いた顔をしている真冬に望海は淡々と答える。

「子供が山に迷い込んで天狗に会い、いつの間にか家に送られていたって話は各地の伝承に残っているけれどね。

そして天狗に攫われたという人間は、天狗と共に各地を旅したと証言が有ったともいうね」

「でも、あの山で神隠しに遭った人は、記憶が丸ごと消えているんでしょ？」

木次の言葉に、夏芽が疑問を投げかける。

「そしてなぜ、春美さんが攫われ、私だけ無事だったのかも疑問です。

魔術の腕だけなら、春美さんは私よりずっと上ですから。

あの人はきつと、攫われた先でも抵抗しようとするれば抵抗できるはず。なぜ比較的非力な私の方を見逃したのか……」

「あえて危険な方を手元に残した、とか？」

「その理由ならば、私が天狗なら両方攫いますよ。あの山の神隠しも、行方不明になるの

は必ず一人という訳ではないみたいですし」

千秋の意見に、望海はそのように考察を述べる。

「それに、何となくですが、私は相手から悪意を感じなかった。

一連の神隠しは、少なくとも山に踏み込む何者かに対する害意によつてなされるものではないのではないののではないのだと思います」

「うーん、じゃあ天狗はどうして」

彼女の印象を受けて、真冬がそう呟いた、その時だった。

「しッ」

望海が唇に人差し指を当てて、皆に合図を送った。

それと同時に、全員は手元に忍ばせていた丸薬を口の中に放り込んだ。

悶絶しそうなほど壮絶な苦みが口内に広がる。

思わず呻いた面々だった、それでも決定的な瞬間に立ち会うことはできた。

がさごそ、がさごそ、と。

音が鳴りやすいだろうと、設置しておいた袋菓子を漁る音が聞こえ始めたのだ。

「ほ、ほへってっ」

眠気を退ける丸薬の苦さに涙しながら、真冬が望海に問うた。

彼女の持つスマホの画面には、部屋の中を舞う不可視にして淡く輝く粒子が存在して

いた。

「ペツ、これが眠気の正体ですよ」

口の中の丸薬を吐き出し、苦みに顔を歪めながらも望海は言った。

そして、彼女は毛布を取っ払って立ち上がる。

「見つけた!! 座敷童の正体、見破ったり!!」

動画撮影モードでスマホを向けながら、望海は民宿に現れる怪異の正体の核心に迫った。

『きゃあ!!』

すると、望海以外にも、彼女のスマホ越しにハッキリと聞こえた。

幼い、女の子らしき声が。

次の瞬間、閉じていた窓が乱暴に開け放たれた。

そしてお菓子の袋が、宙を舞って外へと消えていく。

「皆さん、追いますよ!!」

後から考えてみれば、この時望海はそんなことを言う必要は無かった。

ハッキリって彼女以外は足手まといであり、不必要な危険に巻き込む恐れがあった。

だが、その場の勢いとノリとは怖い物で、この怪奇現象を共有している面々である種の連帯感が生まれていたのである。

当然ながら、そんなことに疑問を抱かず準備をしていた面々はすぐに最低限の荷物を手に、民宿の外へと飛び出した。

怪異の正体は、よほど慌てていたのか、お菓子の袋の中身からスナック菓子を童話よろしく少しずつ零して行ったので追跡するのは望海の超能力を使わずとも比較的容易だった。

やがて、一行は辿りついた。

天狗が出ると言う山へと続く、昼間に春美と望海が入って行った森の入り口へと。

「はッ、何が座敷童ですか!! 笑わせる!!」

「ええッ、なんでそれがこの民宿に出て、山に向かって逃げてるわけ!」

撮影した動画を見返して、望海が笑う。

その内容を確認した四人が、怪異の正体に驚愕する。

「簡単なことでしたね。座敷童と山の天狗は、同一の存在だったわけです。」

これでハッキリしました。なぜ私だけ無事で、春美さんだけ攫われたのか
そして同時に彼女たちは深く納得していた。

ああ、なるほど、と。これはそう言う存在であると。

「真冬さん、昼間に買ったお守り有ります?」

「うん、これ?」

こんな時だと言うのに、真冬はあの藁のお守りを持ってきていた。

「はははは、なるほど、これはそう言うことですか」

それを見て、全てに合点がいった、と望海は笑っていた。

他の面々は流石にそこまで頭が回っていないようではあったが。

「さあ、いい加減この土地の天狗伝説に幕を下ろしましょう。」

そして、春美さんも返して貰いますよ」

四百年近く、この土地に根付いていた怪異の正体が今、彼女たちによって完全に暴かれようとしていたのだった。

天狗について 解決編

望海の持つLEDランタンの輝きが、夜の森を暗闇を押し広げていく。

一行は森に入ってからようやく、自分たちの状況が悪いのではと思いはじめた。

「ねえ、あの場は勢いで付いて来ちゃったけどさ。」

私たち、あそこで帰って明日来た方が良かったんじゃないの？」

冷静になった千秋がそう口にする。

「いえ、多分奴が行く道を辿らないと、奴の住処には辿りつけないと思います。」

この粒子がその道標。朝には消えてしまうでしょう」

望海のもう片手には撮影モードのスマホが握られている。

その画面には、怪異が残した痕跡である光る粒子がふわふわと奥へ続いているのが見て取れる。

本来なら、望海が怪異の痕跡を見つけた以上、念写で辿ればいいのだがそれを行う魔力すら彼女は惜しんでいた。

こうして相手を刺激してしまったからには、相手が春美を手荒に扱う可能性もあつ

た。

「そうだね、春美ちゃんも心配だし。

何か手伝えることがあるかもだし」

夏芽はそう言って、暗闇に怯える己の心を叱咤している。

「ところで、望海ちゃん。

さつきあのお守りを見て、何に気付いたの？」

怖いもの見たさで進む真冬が、望海に尋ねた。

「ちよつと待つてください、痕跡が途絶えました。

……いえ、違いますね」

望海は真冬にランタンを押し付け、スマホの画面を不可視の粒子が途絶えた木の裏に向けた。

「そこに居るのはわかっていますよ、姿を現しなさい」

彼女が声を張って、そう告げる。

同時に、同行者の面々は身構えた。

そして、木の裏から、怪異がひよつこりと姿を現した。

それは、薄着のような薄緑の服を纏い、ナイトキャップを被った銀髪の身長二十センチ

千前後の小人の少女だった。

背中から揚羽蝶のように美しい一对の羽が伸び、暗闇でも金色の瞳は輝いて望海のス
マホには映っていた。

「よ、妖精だ!!」

木次が声高らかに叫んだ。

彼は幻想的な存在を目の前にした高揚感や、その当事者としていることに喜びを感じ
ていたのだ。

「そうです、あの民宿に現れる座敷童の正体。

そしてこの山に住まうと言う、天狗の神隠しの真相。

それは全て、この妖精が行ってきたことなのでしよう」

望海は画面越しに見える妖精を睨みつけそう言った。

そう、この町にある山に出ると言う天狗の神隠し。

それは神隠しなどでは無く、妖精の人攫いだったのだ。

「聞こえていますよね？」

今日の昼間に、私と一緒に居た人を返してください。

私たちの望みは、それだけなんです」

望海がこちらを様子見ている妖精に訴えた。

だが。

『やーだよー。なんでお前たちなんかにめいれーされないといけないの?』
スマホ越しに聞こえてくる声は、一行を小馬鹿にしたような態度で嘲笑う幼い子供そのものだった。

「……餓鬼はガキでも、クソガキだったか」

「それ上手いこと言ったつもり?」

呆気にとられた夏芽に、千秋が呆れた視線を向けた。

『ねえねえ、どうして私がお前たちなんかをわざわざ待つてたと思う?』

くすくす、くすくす、私を驚かせた仕返しをする為だよ』

妖精は可愛らしく、無邪気に、そして楽しそうに告げる。

『もうお前たち、私が良いって言うまで森から出られないよ!!』

どうしても出してほしかったら、私に追いついてごらんよ。くすくす』

そう言つて、妖精は森の奥へと飛び去つて行つた。

「……え、嘘だよね?」

「あのクソガキがわざわざあんな嘘を吐くと思います?」

妖精に遭遇できたことに感動していた真冬がハッと我に返つて尋ねると、残酷な真実を望海は告げた。

「えッ、じゃあ、どうすればいいの!？」

森から出られなくなったら、私たち餓死しちゃうよ!？」

「この森で食料調達は難しそうだしね」

割と悲観的な夏芽に、木次も興奮から冷めてそんなことを呟く。

「真冬さん、あのお守りを貸してくださいます?」

「え、うん。あッ、もしかしてこれが!!」

「ええ、まさにこれを今使う時なのでしよう」

望海は彼女から藁のお守りを受け取ると、縄の先を持って振り子のよう揺らし始めた。

彼女が魔力を込め、祈りを込める。

すると、お守りがゆっくりと森の奥へと道を指し示した。

科学と魔術は、相いれないがお互いに一つ共通点が存在する。

それは、再現性だった。

科学は万人にとつて証明できるからこそ価値がある様に、魔術は過去の伝承の再現こそ価値を見出す。

妖精、そして場所と道具が、お土産程度の価値しかないはずのお守りに極めて限定的な魔術的な効力を齎していた。

「行きましよう」

望海の言葉に、一行は頷いた。

§ § §

「ねえ、望海ちゃん。さつき聞き損ねたことなんだけど」

「ああ、このお守りについて、気付いた事でしたっけ？」

「うん。何が分かったの？」

森を進む道中、沈黙が続くので真冬が話題を振った。

「これ、天狗の蓑を模したにしてはおかしくありません？」

望海が振り返って、指から垂らしているお守りをみんなに見せた。

「おかしいって、どこが？」

それを見ても、夏芽は全く何も思い浮かばなかったが。

「……あッ、そうか、そう言うことか!!」

「木次さんは分かったんですか？」

「うん、これを見てくれ」

千秋に問われ、木次は己のスマホを出し、昼間に見せた天狗と魔物の挿絵の画像を見

せた。

「この天狗が着ている蓑を見てみるんだ。

蓑つて、稲の繊維に沿って雨粒が落ちるのを利用した雨具だろ？」

つまり、藁の紐が外側に露出しているはその意味がなさない」

「あッ」

そこまで言われて、真冬も気付いた。

このお守りが天狗の蓑の再現なら、紐が外側に露出しているのはおかしいのだ。

「これ、もしかして妖精除けのおまじないってことですか!？」

妖精の悪戯から身を守るのに、最も有名なおまじないに上着を裏返しに着ると言うものがある。

この天狗は、それを実践しているのだ。

「私が春美さんと一緒に山に登った時、私だけ脱いだ上着を裏返しにしちやつたままま織ってたんですよ。

多分、私だけ無事だったのはそういう理由なのかと」

「そう言うことだったんだ……」

多くの事柄が繋がって行き、千秋は思わず納得してしまった。

「え、待って、じゃあこの魔物と戦った天狗と、神隠しをしていた天狗は別人だったって

「とと。」

「必然的にそうなるね。」

紛らわしいけど、どちらの話も正しかったってことだ」

夏芽が確認するように尋ねると、木次は自分の調べた情報が正しかったことに少し誇らしげにそう言った。

「じゃあ今から上着を裏返しても、ダメだよね……？」

「あれって妖精から関心を買わない為のモノらしいですから、今さらでしょう」

「だよー」

千秋は望海の無慈悲な断定にがつくりと肩を落とした。

「あれ、じゃああの毛むくじやらの魔物ってなに？」

彼女が呟いたから、ではないだろうが不意に望海が立ち止った。

つられて他の面々も足を止める。

森はいつの間にか、山の中へ一行を誘い込んでいた。

「……………隠れる気が無いのなら、出てきなさい」

灯りを掲げ、望海が言った。

その言葉に面々は身構えたが。

「性懲りも無いか、小娘。

ぞろぞろと仲間を連れて来おって」

しわがれた老人の声が、木々の間の闇から聞こえた。

そして、それはゆつくりと暗闇から姿を現した。

「えッ、うそ」

「本当に居たの!？」

その姿を見て、夏芽も千秋も驚愕した。

錫杖を手に持ち、時代劇でしか見ないような蓑を纏い、山伏のような格好をした、赤い顔と長い鼻。

誰がどう見ても、伝説に登場する天狗……の面を付けた何者かだった。

「あ、いや、あれお面だよ」

真冬も出会いがしらのインパクトに衝撃を受けたが、彼が付けているのは天狗の面であることに気付いた。

「それでも随分時代錯誤な格好だけど」

相手が妖怪の類ではないと悟ると、木次は値踏みするように天狗を観察しだした。

「昼間、帰れと忠告したろうに。」

「よほど妖魔に悪さをされたらしいな」

天狗は錫杖を地面で鳴らしながらそうぼやく。

「こちらも、ただでは帰れない理由が有りましてね」

「お前の連れか？ 心配せずとも、しばらくすれば飽きるだろう。」

わかつておろうな、妖術師よ。この先は奴の住処。あれを刺激することがどういこうとか」

「……だんだん思い出してきましたよ、私の記憶を奪って入り口に戻したのはあなたでしたね」

望海はそう言って、天狗の姿を写真で撮った。

「ほら、春美さんの言ってた通りだ」

望海は今しがた撮った写真を、皆に見せた。

「えッ」

写真と、天狗の姿を見比べて夏芽は動揺した様子を見せた。

彼女だけではない、他の皆もだった。

なぜなら、彼女のスマホには天狗の姿など映っていないのだから。

「あなたは、何かしらの……おそらく精霊術の類が見せている意思を持った幻覚だ。」

あなたはかつての術者の姿を投影している幻影に過ぎない。

過去に天狗の面を被った極めて優れた修験者は確かに居たんでしょう。でもそれは

あなたじゃない」

「然り、我は現身に過ぎない。

だがこの身はこのお山と、あれからお前たち人間を守る為にいる。もう一度言う、帰れ」

「退けない、と私は言ってます」

「そうか、ならば好きにするといい」

望海の物言いに呆れたのか、天狗は踵を返した。

「一っだけ教えてください、なぜあの妖精の肩を持つんです？」

望海の問いに、天狗は一言だけこう言った。

「そういう約束だ」

それと同時に、天狗の姿はすうっと消え失せた。

「びっくりした……天狗の正体が、お化けだったなんて」

「お化けって、まあそうなのかもしれないけど」

目の前で起こった神秘体験にドキドキしている夏芽に、千秋は呆れてそう言った。
「私じゃあ想像できないレベルの高度な術でした。

意思を持つどころか、術を操る幻影だなんて」

「それよりも、この先にあの子は居るんだよね？」

「ええ、行きましよう。あんなクソガキにいつまでも付き合っていられない」

望海は木次に頷いて見せて、歩みを再開した。

山は深くなり、大して標高があるわけではない登り甲斐のある山でなくとも、険しきが増してくる。

一行に疲労の色が見え始めた頃だった。

『お前たち、どうして迷わないのよ!!』

一直線に奥へと進んでいく面々を見て焦れたのか、妖精が木の陰からそう声を漏らした。

『ムカつくムカつくムカつく!!』

お前たち、これ以上こっちに來たらただじゃおかないからな!!』

妖精は子供の癩癩みたいな物言いをして、飛び去ってしまった。

「だそうだが？」

「今さら、引き返すなんて選択肢はありませんよ」

望海は木次にそう返した。

そもそも妖精は帰す気が無い。子供らしい矛盾に満ちた物言いだった。

「……それに、もう遅いみたいです」

山の奥を覗んだ。

ずん、と何か重々しい音が聞こえた。

何かが草木を分けて、こちらに近づいてくる気配をひしひしと感じた。

逃げよう、と望海が言うよりも早く、それは姿を現した。

それは色黒で、毛むくじやらで醜悪な顔をしたヒト型の巨躯の怪物だった。

確かな実体を持ち、人間を遥かに超える巨体から発せられる威圧感は凄まじい。

それが樹木に手を当てると、ぐぐつと木が横に押しつけられる。

ぶちぶち、と根っこが地面から引き離され、無理矢理道を開けさせられる。

それを草花にそうするように、当然に行うのが、目の前の怪物だった。

「ま、魔物だあ!!」

「逃げましょうツ!!」

真冬が悲鳴を上げ、望海も叫んだ。

藪を突いて蛇が出た、どころではなかった。

「魔物は退治されたんじゃないのー!!」

「僕が知るわけないだろう!!」

一行は一目散に逃げ出した。

夏芽と木次の叫び声にも余裕が無い。

「はあはあ、つて言うか、なによあれ!!」

数分ほど、全力で逃げた面々は力尽きて足が止まった。

やがて、息を切らした千秋が言った。

「はあはあ、たぶん、トロールじゃないかと」

「ええ、トロールう!? なんでそんなのが……」

トロールと言えば、真冬にも親しみ深いテレビゲームでもおなじみの敵キャラだ。

大抵の場合、彼らは怪力を持つ怪物として描かれる。

場合によっては異様な再生能力を持ち、知能は低く狂暴であるとされる。

「あのクソガキが召喚したんだと思いますよ。」

私はあれの対処をしますんで、皆さんはここで待っていてください」

息を整えて、望海は皆に言った。

「はあ!?! あんなのに勝てるって言うの!?!」

「流石に真正面からは戦いませんよ、あんなの」

血相を変えて詰め寄る千秋に、望海は淡白に返した。

その様子を、千秋は無理をしているように感じた。

「一緒に異界に迷い込んだ時、あんなにビビってたくせに」

「何ですか千秋さん、じゃあ付き合わせるんですか？

あれに対して千秋さんは何ができるんですか？」

「わざわざ化物に戦いを挑む必要なんてないでしょ!!」

「じゃああれに怯えて逃げ回れって言うんですか!？」

「そうは言つてないじゃない!!」

そしてなぜか、言い合いになる二人だった。

「ああ、あのさ、こんなところでもなにも喧嘩しなくても」

木次が二人をなだめようとした、その時だった。

ミチミチと樹木を押し退け、進む音が聞こえた。

「ほらあ、来たあ」

こんな時に騒ぐなど言いたかった木次が泣きそうになりながらそう言った。

ずん、と魔物が暗闇から姿を現す。

あれだけ必死に逃げたのに、あつさりと一行に追いつくのだった。

「ああもう、千秋さん空気読んでくださいよ」

望海が叫んで、彼女が前に出る。

怪物はのしのしと面々に迫る。

そしてその丸太の如き剛腕を振り上げた。

望海の後ろの女子たちが、小さく悲鳴を上げた。

その時だった。

「我らを見守り、御導きくださる女神ヘカテーよ。

その御業を以って、その大いなる叡智を示したまえ」

トロールの横合いから何かが飛んできて、怪物の頭上に液体のようなものがぶちまけられた。

からん、と地面を転がったのはラベルの無いペットボトルだった。

「これは、ネズの秘薬!? つてことは……」

ゆつくりと、トロールの巨体がドシンと尻餅をついた。

そしてそのまま、仰向けになっていびきをかいて眠り始めた。

「何やってるのよ、望海。それにみんなまで」

現れたのは、行方不明の筈の春美であった。

§ § §

山の奥には、神秘的な場所が存在していた。

その場所は不思議な光で明るく、何より木の枝や葉っぱで作られたかなり小さいの口グハウスの模型のようなものが存在していたのだ。

既存の人間の文明からすれば未知の美的感覚によつて作成されたそれは、それでも素晴らしいと理解できる代物だった。

「わざわざ来なくても、明日になれば私から皆に話したのに」

春美は妖精の住処に案内すると、呆れたようにみんなをみやった。

「いや、だって私の方は記憶が飛んでんですよ?」

「だからってみんなまで連れてくることないじゃない」

「それはほら、なんか勢いで……」

「勢いでトロールに立ち向かおうとしないですよ」

望海の物言いに、ため息を漏らす春美だった。

「すごい、これが妖精の住居なのか!!」

木次はカメラで妖精の家を撮影していた。

その横で、他の三人は興味深そうにその家を見ていた。

「それにしても、連絡ぐらいしてくれても良かったじゃないですか」

「……、電波が通らないのよ。あの子がそう言う領域にしているみたい」

「なるほど、それで帰ろうにも帰れなかったと」

「そう言う約束をしちゃったからね」

春美は億劫そうにそう言った。

「これで、よし。みんな、出来たよ」

春美はすり鉢を用いて幾つかの植物を煎じていた。

四葉のクローバーを初めとしたこの森でも採取できる普通の材料だったが。

「どれどれ……—あ、本当だ、見える、見えるよ!!」

春美と望海が瞼の裏に煎じた植物を塗ったのを真似してやってみると、夏芽の目にもハッキリとふて腐れている様子の妖精の姿が目映った。

「わ、わあ、本当に妖精さんだ」

「こうして見るとカワイイわね」

子供のように目を輝かせている真冬、千秋は一步引いたところから見ている。

「それで、一体どうして人間を攫ったりしてんだ?」

同様に葉を塗って彼女を視認できるようになった木次が尋ねた。

「えー? 暇だから」

「えッ?」

「暇だからに決まってるじゃん。」

他に理由なんてあるの?」

妖精が見えるようになっただけでなく、声まで聞こえるようになったことに対する驚きもすつ飛ぶような彼女の物言いに、木次は絶句した。

「本当に、暇つぶしの為だけに人を攫つてたの?」

「人間つて同じことを何度も言わないと分からないの?」

それに攫つてきたつて言うけど、来たのはいつもそつちじゃない。

私はちゃんと飽きたら送り返してるし。そうじゃないと人間は不都合なんですよ?」

「いやいや、飽きるまで付き合わされてる時点で不都合だから」

夏芽と千秋はお互いに顔を見合わせる。これは何を言つても無駄だ、と。

「人間に迷惑を掛けないようにしてたのなら、どうして民宿で食べ物漁つてたの?」

「あああれ? あれは昔、あの家の子と一緒にイタズラしてたの。」

いろいろとつまみ食いしたりしてね。それであの子言つてたわよ、いつでもうちに来

て食べに来ていいつて」

「それつて、いつの話?」

「だいたい百年前ぐらい」

さしものその時間感覚に真冬も言葉を失つた。

「だから私、提案したのよ。」

皆ならあなたの安全を脅かしたりしないつて。

明日にも紹介するつもりだったんだけど」

それで妖精の被害が収まるのなら、と春美は考えていたのだが、結局はこうなつてしまつた。

「ごほん、ところで君つて西洋の出身だよな？ どうして日本に？」
気を取り直して、木次が尋ねた。

妖精の容姿は、どう見ても日本にはそぐわない見た目なのだから。
「面白そうだったから、昔この国に来る船と一緒に乗つてきたのよ。」

私の居た森の苗木が、偶然ここに持ち込まれたからね!!」

「ああ、やっぱりそうなんだ」

「そうして、いろいろと遊びまわつたら、あいつが出たのよ!!」

「あいつ?」

「あんた達も会つたでしょ。あの変なお面の奴よ」

「あの天狗に?」

その言葉に、木次だけでなく他の面々も驚きを隠せない。

「あいつに約束させられたの。」

人を迷わせても、必ず帰すつて。ここに踏み入れる人間以外を害してはならないつて」

それが、この山で起きる神隠しの真相だった。

「止める気は、無いんだよね……」

「どうして私が人間に気を使わないといけないの？」

「それも私の領域に勝手に入って来た連中を」

「真冬は黙ってしまった。」

「この妖精にとつて、この森に踏み入る人間は虫も同然なのだ。」

「誰だって、家の中に虫が居たら腹が立つだろう。」

「とりあえず、このことは町内会長に伝えておきましょうか」

「これで報酬をふんだくれる、と内心計算していた望海だったが。」

「あ、じゃあ私も行く」

と、この妖精はそんなことを言い出したのだった。

§ § §

そして、翌日。

「これは、たまげた……」

老人は山から連れてきた妖精を見て、心底驚いたようだった。

「こんな、こんな小さな子が、何百年もこの町を騒がせていたのか」

信じられないような声音で、彼は言った。

「くすくす、ねえ覚えてる？」

「えッ」

「ほら」

妖精の姿が、歪むと同時に広がった。

手のひらサイズの少女は、瞬く間に五才くらいの着物姿の少女に姿を変えた。

「一緒に、お祭りとか回ったよね？」

あの頃一緒に遊んだトネちゃん、あなたの奥さんになったんだっけ？

また遊ぼうねって言ってお別れしてから、あなたは私の事が見えなくなった。

でもあなたがこの町の偉い人になったって聞いてから、私いろいろあなたで遊んだ

「よ」

くすくす、と無邪気に妖精が微笑んでいる。

永遠の幼さと無垢さで、大人になった人間を弄んでいた。

「あなたの親戚や知り合いを、何人も山に呼んだよ。」

そうやって居なくなった人が出ると慌てふためくあなたを見て、私は楽しかった!!

ねえ、こうやって見える様になったんだから、また遊んでくれるよね？

今度は何をして遊ぼうか？　くすくすくすくす

老人は唾然と少女を見ていた。

だが、すぐに両目から涙を流し始めると。

「悪いが、この町から、あの山から出て行つてくれないか」

「どうして？　また遊ぼうって、約束したよね？」

「あの山は、十年後には開発されるんだ」

老人は、数多の感情が入り混じった声音でそう言った。

「この町の町おこしも、その話に抵抗する為のものだった。

だが、結局は上手くいかないらしい。あの山に、君の居場所は無くなるよ」

「……………」

「もう一度、君に会えてよかったよ」

「ふーん」

妖精は、既に彼への興味を失っていた。

「わかった。じゃあね、ばいばい」

この日を境に、この町は怪異の恐怖から解放された。

町の人々に知らされることなく、静かに、この町の神秘は消えて無くなったのだった。

「君たちのお蔭で、随分と珍しい体験ができたよ」

町内会長の家を出て、外で待っていた木次がそんなことを言ってきた。

「やっぱり、この仕事は知的好奇心を満たすのに最適だ。

そうでなくちゃ、取材をする意味がない」

そんなことを言う彼に、やっぱりこの人変わつてると思う千秋だった。

「それじゃ、また何かあつたら、連絡させてもらおうよ」

「はい、雑誌に記事が載つたら教えてくださいね」

望海がそう言うと、木次は手を振って去って行つた。

この時彼女らは分かるはずもないが、この男との付き合いは割と長くなるのだと、この時は誰も思わなかつたのである。

「ねえねえ、あなた達の街って何があるの？」

そして帰りの新幹線の中で、妖精が尋ねた。

「結局この子、付いて来ちやつたね」

真冬が疲れたようにそう言った。

いや、実際に疲れていた。

彼女らは結局、お祭りを大して楽しむことなく帰りについている。

「しようがないじゃない、放っておいて悪さされても困るし」

「あ、私は面倒見れませんよ」

「私だつて無理だよ」

「ここで、春美も望海もそんなことを言い出し始めた。

「魔女さんの家も、ダメだよねえ」

「春美ちゃんと望海ちゃんがダメじゃあ、どうしようもないけどなあ」

何だかペットを拾ってきた時の相談みたいだった。

千秋も真冬も、妖精の引き取り先なんて思いつかないのだが。

「あ、どうしても言うなら、うちなら良いよ」

そんなことを言い出したのは、なんと夏芽だった。

「えッ、でも前ペットダメだったんでしょ?」

「あれは私が面倒見れないからで……」。

と、とにかく、うちは両親が殆ど家に居ないし、結構春美ちゃんたちも居るから、皆で面倒見れると思つて」

と言いつつも、夏芽の視線は妖精に向けられている。

真冬は、夏芽ちゃんこういうの好きだもんなあ、と内心思っていた。

「うーん、まあそう言うことなら。

あんたもそれでいい？」

「私は面白ければ何でもいいよ!!」

「そう。夏芽ちゃん、あとで師匠に妖精についてアドバイスしてもらおうから」

「うん、任せて!!」

夏芽は目をキラキラして春美にそう返した。

彼女のキラキラした目が曇るまで、一日も掛からないのだが、それはまた別の話である。

妖精の居なくなった、神秘の消えた山の奥に、足を踏み入れる者が居た。

それは黒いケープを纏った、黒い魔女だった。

彼女は慣れた様子で山道を歩き、そして顔を上げた。

「お久しぶりね、調停者。」

あなたがジパングに来ていたなんて思わなかったわ」

「魔女殿か」

すうつと、木の枝の上に天狗の姿が現れる。

「もうお役御免の身だ。この身もいずれ消えて無くなるだろう」

「そのようね、私の弟子たちが世話になったわ」

「我は何もしておらぬよ」

「あなたがそう言うなら、そうかもしれないわね」

それだけ言うと、魔女は踵を返した。

「こうしてまた一つ、伝承がただの伝承になって行くのね」

その言葉が森に掻き消えるのと同時に、魔女も、天狗も、その姿がどこにも見えなくなるのだった。

籠絡について

「なあ、小池。お前、例のあの人と付き合ってるってマジか？」

発端はその言葉だった。

夏休み、時間を持って余した高校生男子というのは大抵の場合やることが限られる。

小池少年と彼がつるんでいる男友達は、彼の家でゲーム機で遊ぶというポピュラーな選択をしていた。

当然、宿題などそっちのけである。

「……えー、うん、まあ、そうなる、のかな？」

「なんだよ、歯切れが悪いな」

「いやだって、付き合ってるって実感が無いんだよ」

と、小池は友人に己の本心を吐露した。

「いや、そんなもんじゃねえの？」

俺も中学の頃、試しに女子と付き合ってみたし。

そんな時は舞い上がってたけど、恋愛関係とはちよつと違かったし」

「そっちはさ、中学の頃の友達って今も遊んでる？」

「いいや、月に一度メールするぐらいか？」

「僕は連絡先も消したよ。所詮その程度の関係だったんだ。」

友人関係なんて、学校と言う孤立した社会で周囲に同調する迷彩服に過ぎないんだ」

「それは流石にひねた意見じゃないか？」

そのように述べる小池に、彼の友人は心配そうに彼を見る。

その言い分が正しければこの二人の友人関係も迷彩となる。

少なくとも自分はそんなに薄情ではない、と思っていた。

「でも小学生よりも、大学で知り合った友人の方が付き合いが長くなるってどこかで聞いたことあるよ。」

全員がそうとは言わないけれど」

小池は、夏休みまで遭遇率が高かった女子集団を思い出す。

あの仲良し軍団の内数名は、幼少からの付き合いだと言う。

「あの子も、多分そんな感じだよ。」

君が今言った中学の頃のように、ファッションで付き合い合っているだけだった」

「例のあの人が、そう言ったのか？」

「……例のあの人が、どこぞの闇の皇帝じゃないんだから」

「いやあ、似たようなもんじゃん」

コントローラーを操作しながら友人を見向きもせずテレビ画面を見つめている小池に、彼もため息を吐いた。

テレビ画面はゲームキャラが目まぐるしく敵と戦闘を繰り返している。

「向こうがそういう感じなら、そっちも好きにすればいいじゃんか」

「そうは言ってもさ……」

「俺だって、初めて彼女が出来た時はもっと舞い上がってたぜ？」

「いやさ、相手が相手だってのはあるけど」

「なら、わかるでしょ」

「おっそうだ。なんなら、試してみればいいじゃん」

「はあ？」

「試しにさ、今すぐ会いたいってあの人に言ってみろよ」

友人がそう面白半分になんか提案した瞬間、小池少年は露骨に嫌そうな表情になった。

「こいつ、好き勝手言いやがって、とでも言いたげだった。」

「お前さあ、他人事だからって」

「これぐらいの無茶振り、普通だろ？」

その反応を見て、相手の本気度を確かめてみるんだよ」

「……」

小池が彼の言葉に即座に言い返せなかったのは、彼の胸中に少なからず疑念があったからだ。

彼は名目上、健全な付き合いをしている。

少なくともお互いにそう認識しているはずだ。

だが、物心ついたときから引つ込み思案で、常に誰かの取り巻きAとして過ごしていた彼にとって、物語の主役に成れそうな濃い人物とある種の密接な関係になるなんて想像もしていないことだった。

適当な時勢に眉目秀麗のイケメンでも連れて来られて、当て馬として捨てられるのがオチだと思っていた。

だと言うのに、割と長い間疎遠になっていたのに、彼女の方はまだ付き合いが続いているということになっていたのである。

もう訳がわからないとはこのことだった。

思春期の男子高校生には、そんな彼女の乙女心や女心なんてものは少しも理解できないことだった。

「なあ、やってみろって」

友人はかつて罰ゲームで彼を告白させた連中みたいに面白がつてそんなことを言う。

「……一回だけだよ」

結局、押し切られてしまう自分の主体性の無さに嫌になりながらも、小池はゲームプレイを一旦止めてスマホを手を取った。

「えーと、今から会えませんか、と」

「そこはメッセージじゃなくて電話にしとけよ」

土壇場でヘタレる小池を見て、友人は呆れた。

小池が何か言い返す前に、ぽろん、とスマホの着信音が鳴った。

「あ、もう来た。今どこに居るの？ だって。」

今、家に居ますっつと」

「おッ、普通に会ってくれそうじゃん」

こう言う場合、相手が面倒だと感じたら適当な理由で断られると言うことをよく知っている彼の友人はそう言ったのだが。

「……今すぐ行くって」

「おおッ、じゃあお邪魔虫は今の内に退散しとこうかな？」

「お前なあ!!」

ここまで来て丸投げという姿勢に、小池は批難の視線を友人に向けようとして固まった。

「なあ、なんか変な臭いしないか？」

なんだか草を煮詰めて発酵させたみたいな。

ん？ 小池、どうした……ッ!？」

小池の友人は、彼が固まっているのに気付いてその視線を追うと、絶句することになった。

「くすくす、酷いじゃない。

あなた以外に人がいるなんて、聞いてないわよ」

小池のベッドの上に、魔女が座っていたのである。

彼のいつも使っている毛布を申し訳程度に身に纏っていて、その下は何も身に着けていないと想像するのは容易かった。

「ところで、小池君。シャワー貸してくれない？」

小池は、彼女の要求に錆びたブリキのオモチャのようにゆっくりと頷いた。

§ § §

小池の友人は、素っ裸の魔女が浴室に消えた後、逃げるように帰って行った。

この薄情者め、という内心を押し殺しながら彼を玄関で見送ると、妹の部屋に向かった。

「なあ、ちよつといいか?」

「なーに、お兄ちゃん」

ドア越しに、彼の妹の声が聞こえた。

「悪いけど、何も言わずに服を貸してくれない?」

「何言ってるの? 変態なの?」

「違うよ!! えーと、彼女が家に來てるんだ!!」

途中で転んで水たまりにべちゃってなつちやつたんだって!!」

咄嗟に妹にそんな言い訳を述べる小池だった。

流石に素っ裸で現れたなんて、彼には言えなかつた。

「お兄ちゃんに彼女!? 嘘だあ……」

「じゃあ風呂場に行ってみろよ!!」

それで判断すればいいだろ!!」

少なくとも自分で妹の服を持っていくよりはいい案に思えた。

ちなみに彼の母親の服はサイズが合わないと判断したのである。

彼らの母親はそこそこ恰幅が良いのであった。

「えー、面倒だなあ」

と言いつつ、彼の妹は部屋から出て浴室の方へと向かつて行った。

小池少年は今のやり取りだけでドツと疲れた気がしたが。

どたどたと、と彼の妹がすぐに眼の色を変えて戻ってきた。

「お、おお、お兄ちゃん、なにあのキレイな人!!」

「だから彼女だつて……一応」

「お、お母さんに知らせなきゃ!!」

「おい、ちゃんと服は持つて行つてよ」

「分かつてるつて!!」

姦しい妹に頭を悩ませながら、彼は部屋に戻ることにした。

「可愛らしい妹さんね」

そしてしばらくして、妹のオシャレ着を身に纏った風呂上りの魔女が彼の部屋に戻ってきた。

「待たせちゃつてごめんなさい。」

色々な服を持つて来られちゃつて」

「いえ、大丈夫です……」

実際は心ここに有らずと言つた心境だったが、彼は虚勢を張つてそう言つた。

「あの、なんで裸だったんです?」

不躰でデリカシーの無いことだと分かっているけど、彼は聞かすには居られなかった。

「ふふッ、驚いた？」

だが、彼女は艶やかに、妖しく微笑んだ。

身に纏っているのが妹の服だと言うのに、風呂上がりのシャンプーの香りが漂って来て、小池の心をざわつかせる。

「こう言う術なの。遠くにすぐ移動できるけど、衣服を含めた所持品は持っていけないのよ。」

昔、この術で定期的にある山で連絡会をしていたら、全員が素っ裸のところを見られちゃってね。

それがどうこじれたのか、あそこでは魔女が集まって悪魔と儀式をしてるだとか、春を祝う祭りしているだとか言われるようになったことがあってね。

まあ、驚くのも無理はないわ」

「は、はあ……」

実はとんでもないことを聞かされているんじゃないか、と思いつつも彼はその想像を頭の隅に追いやった。

「ねえ、どうして急に会いたいなんて言い出したの？」

そして当然のようにそれを尋ねられ、小池は気まずそうに白状することにした。

「ふーん、なるほど。そう言うことね」

彼女は特に機嫌を損ねたという訳でもなく、申し訳なさそうにしている彼を見やる。

「あなたの友達付き合いに口を出すつもりはないけど、

同調圧力に対して冗談だという空気に持つて行つて上手くかわすくらいはした方が
良いと思うわ」

耳が痛い言葉だった。

だが、それが出来れば誰も苦勞はしないのである。

「僕にはそんなの無理ですよ。分かつてるでしよう？」

「なるほどねえ、あの子とは同族嫌悪なのかもしれないわ」

自己主張の強い方ではない彼を見て、そんなことを漏らす魔女だった。

「あなただつて、急に呼び出したりして迷惑だつたでしよう？」

「何で？」

「えッ、何で、つて」

「私はこれでも少しは期待したのよ。」

あなたの方から私を誘つてくれたのだもの」

小池は彼女の視線に耐えられず、顔を逸らした。

「それは、悪かつたと思うけど」

「別にいいわ。私は気が長いもの。春美が一人前になる頃にはあなたにも意気地は身に付くでしょう」

「そ、それまで変わらなかつたら……?」

「あら、あの子が一人前になるにはあと十年は掛かるわ。

ふふふ、今のままであと十年、私と付き合っけていられるつもりなのね」

「あッ、いや、それは、その」

しどろもどろになる小池、それを見て魔女は面白そうに笑う。

「あなたがずっとそんな調子なのは、自信が無いからよ。

ああそうだ、何なら手っ取り早く自信を付けさせてあげましょうか?」

「え? ツ!?!」

その直後だった、小池は自分のベットに突き飛ばされた。

「ちよ、なにを!?!」

「どんな陰気な男でも、女の体を知り、睦言を囁けば竜にだって挑むものだわ。試してみ

ましようか?」

「豚は煽てられたって木に登れないよ!?!」

「知らない慣用句だわ。でも、自分をブタだって卑下する必要は無いわよ」

すぐに彼女が覆いかぶさり、小池は押し倒されるような格好になった。

彼女の髪の毛がベッドに垂れ、その芳香が彼の理性を狂わせようとしていた。

目の前にはシャワーを浴びて自分の部屋でベッドの上に居る彼女が。状況だけ見れば完全に事前だった。

「こ、こういうのは良くないって!? 家には母さんとか妹とか居るし!!」

「あら? いつもみたい他人に流されないのかしら?」

なあなあでも、成り行きでも、別にかまわないじゃない。至上の快楽を教えてあげるわよ」

ああ、と耳元で囁かれる言葉聞いて小池は思った。

この人は、本当に、真正正銘の、男を破滅させる魔女なのだ。

「二人とも、入るわよー」

が、寸前で彼の貞操の危機は回避された。

「あら? あらあらあら、お邪魔しちゃったかしら。」

それじゃあ、失礼するわねー」

小池の母親がお盆に飲み物とお菓子を乗せて入って来たのである。

そして息子のとんでもない状態を見やり、口に手を当ててそそくさと退散していったのだ。

「……」

小池は上に覆いかぶさっている彼女をどかすと、部屋の隅に膝を抱えて沈み込んでしまった。

「ぷつくく、あはは、あはははは!!」

それを見て彼女はベッドの上で笑い転げるのであった。

§ § §

「ごめんなさい、奥手な男の人って珍しくて。

これが日本人のサガって奴なのかしら。それとも今時の言い方でいう草食系？」

口では謝っていても、ちっとも悪びれていない様子の魔女に小池は膝を抱えたまま彼女を見やる。

「どうせ僕なんて、別の誰かを見つけるまでのつなぎなんですよ」

すっかりネガティブな感情に支配された彼はそんなことをのたまった。

「僕みたいな意気地の無い周りに流される人間なんて、あなたに全然釣り合わないし」

「それって、誰かに言われたの？ あなたがそう思ってるだけじゃない」

「事実じゃないですか」

そう言って、小池は膝に顔を埋めた。

「私も、ああ前世の話ね？ 私の前世もそれはそれは数えきれないほど男性を籠絡したけど、お前があの人と釣り合っていない、なんて数えきれないほど言われたわ。

どうせあいつは財産目当てだとか、あの下賤な売女だとか、陰口言われたりもね」
まあ財産目当ては本当だったけれども、と冗談めかして彼女は笑う。

「私にとつて、男とは貪るモノ。」

私の肌を知った男は誰もが私無しでは生きられなくなり、地位も財産も私に差し出して、最後には捨てられて狂って死んでいった。或いは私に唆されて無謀な戦いに身を投じていったわ。

だからという訳じゃないけど、そう言うのは前世でお腹いっぱいなのよ。

顔がイイだとか、家柄が良いとか、すごい財産があるだとか」

男を惑わし、籠絡し、狂わせる。

そんなこと彼女にとつて赤子の手を捻るのも同然なのだ。

「私はあなたの普通っぽいところが気に入っているのよ」

それは慰めなのだろうか、と小池は思った。

「勿論、私に最初に付き合おうと言ってきたから、と言うのもあるけど」

「じゃあ、僕より先に誰かが告白したら付き合ってたんですか？」

「興味本位でそうしたでしょうね。あと、私に貞淑さとか期待しないでね。」

今のところこの身は処女だけど、春美にはもつと指導しないといけないから
「うえ!？」

その生々しい言葉に、小池も思わず変な声で顔を上げた。

「じゃあ、春美さんがやたら僕を目の敵にしてるのって……」

「あの年頃じゃよくあることよ。近しい男性が居ないと、憧れの女性に擬似的な恋心を抱いたりするものだわ。」

私も前世で似たようなことが何度もあったし」

思いもよらない理由が判明したことに、小池は絶句せざるを得なかった。

ちなみに、春美が望海の弟子入りを酷く嫌がった理由でもあった。

「それでなくても、魔術とエロは密接な関係があるわ。」

そんな私が嫌なら、今すぐ縁を切っても構わないけど？」

それは。

それは……。

それは……。

それは、酷く不愉快だった。

「その言い方じゃ、やっぱり僕はついであってことじゃないですか。

僕に魅力が無いのは分かってます。でも実際に何かと比べられて、僕の方を切り捨てても仕方がないって思われるのは、とても不愉快です」

確かに小池は自分に魅力が無いと分かっているし、意気地も無い。

彼女と付き合っているのは偶然で、彼女が誰でもよかったからだ。

だが、それでも、そうだとにしても、あつさりと捨てられるのであれば男として産まれた意味が無い。

ある種のマンガなどの作品のお約束として、男性を登場させてはいけないと言うものがある。

女性同士の友情や青春の物語に男は不純物だからだ。場合によっては悪役として登場することもある。

脇役でもなく、モブAでもなく、排除される為の不純物。

それは今までのように息をひそめて惨めに生きるよりも最悪な、ゴミ同然の生だった。

そんな、そんな人生は死んでも御免だった。

「やっぱり、あなたってあの子と似ているのね」

その彼の表情を見て、彼女は笑っていた。

「期待しているわ。もっと私に期待させて。」

あなたは偶然だと言うけど、私はそうは思わない。運命は存在するのよ、私がこうして二度目の生を得たように」

彼女は慈しむように、彼を見つめていた。

この光景をカタリナが見ていたら、きっとこう言うのだろう。

ああ、こうやってあなたは男を籠絡するんですね、と。

ちなみに、この後彼女は小池少年が宿題をやっていないことを知ると、遊ぶことなく彼に勉強させることとなるのだった。

貞淑さに期待するなとか言ってたのに、なんでこんなところは真面目なんだろうか、と思う小池だった。

結局、彼は夜まで宿題を見てもらうことになり、一緒に夕飯を家族で食べて彼女は帰って行った。

お兄ちゃんは今まで宿題を終わらせて新学期を迎えたことないのに、と妹は驚き、あの子は絶対に捕まえておくんだよ、と母親には激励され、お前の孫は見れないと思つた、と父親にそんな酷いことを言われた。

そんな感じの食卓で小池少年が引き攣った表情をしていたのを、魔女は眩しそうに見

ていたのを彼は気付いていないのであった。

被虐について

「また、例の呪いか」

警視庁の異能係にたむろしている化粧屋は、庁舎の休憩室にあるテレビでニュースを見ていた。

テレビ画面には、リポーターが被害に遭った邸宅の前で状況を説明していた。

邸宅は封鎖され防護服を着た警察官が出入りしている様子が見て取れる。

被害現場の状況は見れないが、リポーターがスタジオにカメラを戻すと、同様の手口の呪術被害の影響に関する資料が映し出された。

資料映像には、急速に腐敗して黒ずんだ場所が数例ほど提示された。

そして更には被害者と思われる顔にモザイクが入った女性に浮かんだ痛々しい斑点や腫れの写真までもが画面に映し出されたのだ。

『警察によると、これらの呪術被害はツァーラアトと呼ばれる呪いであるとし、呪術の実行犯について捜査を進めるとの事です』

と、ニュースキャスターが事件についてそう締めくくった。

コメンテーターとして、偉い医者や歴史研究の教授などが症状や呪いの由来について解説していた。

ここ2か月で、11件。

化粧屋が関わった最初のツアーラートの魔術事件を皮切りに、日本全国で同様の事件が散発するようになった。

もはやツアーラートは日本で周知される呪いになっていた。

実行犯の検挙に、化粧屋も助言したりもしていた。

その甲斐もあつてか、今のところ呪術の実行犯は全て逮捕されている。

「私の協力で以前捕まえたこの間のツアーラートの術者、結局犯行を認めなかったよな」
異能係の事務室に戻ると、書類作成している伊藤刑事にそんな言葉を掛けた。

「そうだったな。だが、もうツアーラートは周知された傷害の手段だ。

犯人の見た目が変貌すると言う共通点がある以上、状況的に見て起訴に持つていく。
る。

あとは裁判所がどのような判決を下すかだが、それは俺たちのあずかり知ることじゃない」

日本では前例のない判決に裁判官たちも頭を悩ませるだろうが、それは彼らの仕事であらう。

こうして警察が異能犯罪に頭を悩ますのと同じように。

「ニュースでやってたぜ、一連の事件には首謀者が居る可能性があるって」
「……」

伊藤刑事は、化粧屋に何も言わなかった。

彼女はあくまで協力者であり、捜査状況の全てを伝えているわけではない。

その辺りの線引きは彼女も理解していた。

「何者かが、それも私と同じ同業者が誰かしらの恨みを持つ人間に対してツアアラートを教えている。」

伊藤ちゃんはどう思うよ?」

「化粧屋、お前がその首謀者の立場ならどうする?」

「そりゃあ保険を掛けるだろう。」

呪いを教える対価と同時に、余計な事をしゃべったら呪い殺すとかな」

「まあ、そう言うことだ」

「やっぱりな」

呪いの実行犯たちは、誰一人として呪いを誰かに教わったかを供述しなかった。

それだけは絶対に言えない、と実行犯の誰もが恐怖のままに語るのだ。

実際に呪いと言う力を体験したからこそ、その恐怖はひとしおなのだろうと伊藤刑事

は思った。

「これは個人的な見解だがな、たぶん実行犯の裏にいるのは専門家じゃない」

「……どういうことだ？」

彼の興味を引けたことに、化粧屋はにやりと笑った。

「呪術の専門じゃないってことだ。」

……うーん、例えるなら、この状況は野球の投手とバッターみたいなもんだ」

「まったく意味が分からんが」

「いやだから、ボールを投げて誰かに当てるのが呪術だとすると、投手はいつどんな球種の球を投げるかって予告して投げるようなもんなんだよ。」

まあここで一番ありえないのが、ゲームが成立していることなんだが」

ここで一度、化粧屋は言葉を切って彼の反応を窺う。

伊藤刑事は姿勢を彼女に向け、黙って言葉を促した。

「呪殺って何が怖いかっていうと、いつどこでどんな球が飛んでくるかわからないってことだろ？」

本場の専門家は、呪いをちらつかせて脅したりなんてしないんだ。誰かを脅せる度胸があつたら呪術師なんてやってない」

「お前のその体も遠隔操作されたモノらしいしな」

「そのことに触れないでくれない?」

こほん、と露骨に化粧屋は咳払いした。

「対策本部じゃ目星はできてるのか?」

ツアーラアトはその危険性から警視庁内でも対策本部が立てられるほどで、呪術の拡散をしている人物を検挙しようと躍起になっている。

当然、その中に化粧屋は入れてもらえないが。

「……どのみち、お前抜きで会いに行くのは無謀か」

伊藤刑事はそう言って、深く息を吐いた。

「渋谷の路上に時折姿を現すという呪術師が怪しい、ってことになっている」

「また渋谷か」

渋谷といえ、この間のティフオンの件は化粧屋の記憶にも新しい。

渋谷といえば元々占いの館など点在するオカルト、というよりスピリチュアルの激戦区である。

異能者が現れ始めたここ十年でその数はもつと増えていると言っているいいだろう。

若者のデートスポットの一つに、占いの館がランクインするくらい昨今のオカルトブームの影響がこのあたりにも及んでいた。

「なんでも、ひと昔の路上の占い師みたいに客の話を聞いて、場合によっては相談相手の

恨む相手に呪いを掛けるんだとか」

「ほーん、なんだか面白そうだな」

その人物について化粧屋は興味を抱いたようだった。

その様子を見て彼は少しホツとしたようだった。

化粧屋は気まぐれで、そして第六感に優れている。

この女が興味を持たないことには仕事は進まないし、彼女の不参加に限って狙ったように捜査は空振りに終わるのだ。

だからこそ、伊藤刑事は予感がしていた。

一連の事件が進展する予感が。

§ § §

渋谷区のとある路上、先日ティフォンが暴れたスクランブル交差点からほど近い通りに占いの館は密集して存在していた。

若者のファッションやトレンドを象徴するこの街において、それらが昨今のブームを象徴しているかのようにであった。

路上では怪しげな露天が胡散臭いパワーストーンを売っていたり、呼び子が占いの館のチラシを配ったりしていた。

それらに紛れるように、観光客相手に食べ物の屋台なども点在しており、非常ににぎわいを見せていた。

そんな中に、その女はぽつりと座っていた。

小さな机を挟むように『あなたの恨みを晴らします』という立て看板を目の前に置いて、その陰鬱な女は人通りの多い通りの影のようにそこに目立たず存在していた。

こんな場所にぽつんと存在していれば、多少誰かの興味を引こうものだが、彼女はまるで雑踏に溶け込んでいるかのように誰の視線も受けていなかった。

だが時折、吸い寄せられるように思いつめた様子の客がその女の前に現れる。

「恨みのある相手を呪ってくれるって呪術師はあなたで合ってますか？」

「相談料は一回五千円だよ」

相談者の問いに、若い女の声にしては深みのある声音が彼女に返した。

一瞬、老婆のような年の離れた女性と話しているような気分になりながら、相談者は彼女の前に座った。

「誰を、どの程度、貶めたいんだい？」

老婆のような雰囲気を持つその女は、相談者に問いかけた。

「そ、それは、どこまでやっていただけることですか？」

不意に相談者の表情が歪み、目の前の奇妙な女に問い返す。

その顔には罪悪感や目の前の存在に対する恐怖も入り混じっていた。

「どこまででも。あたしやただのアンテナみたいなものさ。」

お前さんの恨みが電波となつてあたしが受信し、相手に呪いの電波に変換して発信するのさ」

だから代償はお前が払うんだ、と意地悪く笑う。

「だ、代償って、どのくらいですか？」

「以前、なんかのスポーツの試合の最中に腕を再起不能の事故に遭わせられた依頼人は、自分をそうした相手に同じだけの痛みを与えたい、とあたしに頼んできた。

これはほとんど金銭的な代償で済んだ。だが相手に及ぼす影響が大きければ大きいほど、残りの人生にどれだけ影響を与えるかで支払う代償も大きくなりがちだ」

「……」

それを聞いて、相談者はうつむいてしまった。

「引き返すのなら、今だよ」

「……いえ、お願いします」

「なら、手を出してみな」

相談者は、言われるままに彼女に手のひらを差し出した。

彼女が相談者の手のひらを合わせるように、己の片手を置いた。

その瞬間だった。相談者の全身にゾツとするような感覚が走り――。

「ああ、ああああああああああああああ!!!」

そんな感覚を忘れてしまいそうなほどの絶叫が、目の前で発せられた。

「ど、どうしたんですか!?!」

相談者は目の前で叫びだした呪術師に驚いたが、周囲の人間は誰も二人に意識を向けなかった。

そして、がしつ、と彼女は相談者の右手を掴んだ。

「ひッ」

その鬼気迫る恐ろし気な様子に、相談者は引きつったような声を上げたが。

「こッ、ここに、火傷の跡があるんだらうう?」

呪術師は両目からだらだらと涙を流しながら、怒りと悲しみが入り混じりながらも労わるように精一杯の優しさを表現しようと無理やり笑っていた。

「そしてその背中にも、躰と称して何度も何度も、何度も何度も!!」

言葉を重ねるたびに、目の前の女に恨み辛みが積み重なっていく。

「煙草の火を押し付けられたんだねえ。可哀そうに。

それも、実の母親が!! なんて、なんて度し難い!!」

まだ相談の内容を言っていないにも関わらず、すべて見通すような呪術師の言葉に相談者は先ほどとはまた別種の恐ろしさに固まるほかなかった。

「ああ痛い、痛い痛い痛い!!」

呪術師は真夏だというのに長袖を着ている相談者があると察した火傷の跡がある場所を、まるで自分も怪我を負っているかのように振る舞い、悶え苦しんでいた。

「はあ、はあ、はあ、安心しな」

やがてそれも落ち着いたのか、彼女は相談者の手を両手で優しく握った。

「その痛みを、私と同じだけ与えてやろう」

「ち、違うんです、母はちゃんと虐待は止めてくれたんです。周りの人との協力もあって、ずっといい母親でいてくれました。

で、でも、最近アルツハイマーに掛って、介護をするうちに昔の母にだんだんと戻って行って……。私もう、耐えられなくて」

「うんうん、わかるよ。親はどうあっても憎み切れないよねえ」

相談者は明らかに自分よりもかなり年下であるはずの呪術師におのれの心境を吐露し、慰められていた。

「これを使いな」

「えッ？」

呪術師はそつと彼女の目の前に小瓶を置いた。

その中身は、毒々しい液体で満たされていた。

「頭の中を真っ白にする薬さ。」

お前が母親の面倒をずっと見ると約束するなら、これをお前にやろう。

ただし、一度使ったら二度と戻らないよ。どんなに嫌だろうと、もう二度と会話ができなくなる。それでもいいなら、これを持っていきな」

「ど、毒ですか？」

「科学的にはただの漢方薬と大差ないよ」

呪術師の言葉に、相談者は意を決したようにその小瓶を手を取った。

「自分でやるんだね。私がやってやってもよかつたんだが。まあその場合は別料金だったか」

「私の、お母さんのことですから」

「そうかい。じゃあ相談料は五千元だよ」

相談者は財布を取り出すと五千元札を置いて、彼女に深々と頭を下げ去って行った。

「おいおい、いろいろとヤベエぞ、あいつ」

そんな彼女の仕事の様子を、遠目から伊藤刑事と化粧屋は見ていた。

「誰かと思ったら、〃被虐の〃じゃねえか」

「まさかと思うが知り合いか？」

「そのまさかだ。当てが外れたな。あいつは誰かに呪術を教えてやらせたりなんてしない」

そう言って化粧屋はずけずけと歩き出す。

おい、と呼び止める伊藤刑事の声も空しく、彼女は呪術師の前の椅子に座った。

「よう、被虐。私だ、化粧屋だよ」

化粧屋がそう名乗ると、被虐と呼ばれた女は鼻を鳴らした。

「誰かと思ったら、商売敵じゃないか。」

〃そこそこつちの様子を窺ってると思ったら、お前さんかい」

彼女は不機嫌そうにそう吐き捨てた。

「商売敵って、需要は被ってないだろ？」

「よく言う。前世じゃ気に入った相手の復讐をよく手伝ってたじゃないか」

「まあ、死者の周りなんて怨念が渦巻くもんだしな」

と、知己である二人がそんな雑談をしていると。

「お前、知り合いの同業者から大体嫌われてるのな」

伊藤刑事がそのやり取りを見てあきれたようにそう言った。

「そちらさんは？」

「ああ、俺は警視庁の異能係のもんだ」

彼は警察手帳を見せて、そう名乗った。

「警察？　化粧屋、お前さん今度は何をやってるんだい？」

「今は警察に入り浸って手伝ってやってるんだ。存外に面白くてなこれが」

「お前のような奴が？　警察に？　馬鹿も休み休み言いなよ」

「一応、本当なんです」

伊藤刑事がうなずくと、気持ちの悪いものを見る目で呪術師は化粧屋を見た。

「……それで、いったいなんの用さね」

「昨今、日本各地で起きているツアーアト事件のことについてなんだが」

「ああ、あの三流が起こしてる事件だろう？」

「それがどうしたんだい」

彼女はまさか自分が疑われているなどと思っていないのか、そんな風に返した。

「見たところ呪術の専門家のようなので、あなたから見ると一連の事件についてわかるこ

とがあれば、と」

そこは伊藤刑事も熟練の刑事だった。

本当のことを言わずに情報を引き出そうと試みた。

「呪術の専門つていうなら、化粧屋だつてそうじゃないか」

「こいつは庁内でも信用できないって感じなんで」

「おい」

「まあ、それは仕方ないか」

「おい!!」

化粧屋の自己主張を無視しつつ、話を進める二人。

「この間のキマイラの一件といい、まあ、あの事件には迷惑しているのさ。」

話ぐらいならしてやつてもいい」

と、呪術師の了解を取れたので伊藤刑事は質問をすることにした。

「三流、とおっしゃいましたが、なぜそう思うのですか?」

「ははッ、呪術は暗殺じゃないんだよ。暗殺つてのは過程はともかく結果は表に出るだろ?」

本来の呪殺はそうじゃない。呪殺と気づかれないように殺すから呪殺なんだ。

呪殺とわかるような殺しや被害は三流も三流だね」

呪術師は肩を竦めてそう語った。

「説明のわかりやすさは彼女のほうが上だな」

「うるせえ」

「ではこういういったことをする輩に心当たりはありますか？」

「あると思うのかい？」

伊藤刑事の言葉に、彼女は皮肉気に返した。

「伊藤ちゃんはな、お前を疑ってたんだよ。こんなところで公然と呪術を請け負ってるからってな」

「おい」

構ってもらえなくて不満なのか、化粧屋がそんなことを言い出すので伊藤刑事が咎めるように視線を向けるが。

「あッ、ははは!! 我らが偉大なるグロースムッターの名に懸けてあたしじゃないよ」
疑われているというのに、呪術師は軽く笑い飛ばした。

「ニュースじゃ呪術を素人にやらせて、自分は高みの見物をしてるんだろう？」

疑われたままじゃ座りも悪いし、興が乗ったしなんなら手伝ってあげようか？」

「え？ よろしいんですか？」

「無実を証明してやろうってだけさ」

そうして、二人は思わぬ協力者を得ることとなったのだった。

規範について

がたんごとん、とカタリナは大きめのスポーツバッグを片手に鈍行列車に揺られていた。

都会の駅から乗り継いで行きながら、次第に高層ビルや家々が少なくなっていく光景を彼女は何をするでもなく眺めていた。

やがて、車窓の外の風景が自然ばかりを映すようになり始めた頃、彼女は目的地にたどり着いた。

彼女が下りた駅は、田舎によくある無人駅だった。

プラットホームの敷地も最低限で、車線も一か所しかないような絵に描いたようなド田舎の駅である。

カタリナはたまにクラスメイト達が自分たちの住む学校周辺を田舎だと嘆いている光景を目にする。

それを思い出して、ずいぶん贅沢な悩みだ、と思った。

自分たちの通学している学校の周辺にはそれなりに商業施設が一通り備わっている。だがこの駅の前にあるのは風光明媚な田園風景ばかりだった。

携帯電話を見れば電波も怪しい有様である。

だが、カタリナはどこかその光景を見て安堵していた。

彼女の記憶にある前世と変わらない風景がそこにはあったのだ。

なつかしさすら感じる土の香りに、真夏の太陽の暑さの中を駆け抜ける風の心地よさ。

今生は知らないはずの光景が、既視感となつて彼女の胸の内にこみ上げてきていた。

そうして、自然の美しさを全身で感じていると。

道の向こうから、軽トラックが駅前に停車したのだ。

運転手である麦わら帽子の老人が、ぐるぐるとドアの内側の取っ手を回して車の窓を下げてカタリナに向けた顔を向ける。

「お前さんが孫娘の言っていたカタリナさんかい？」

「ええ」

事前に連絡した時は迎えを寄越すと言っていたので、カタリナはうなずいた。

「そうかいそうかい、こんな田舎にまで来てくれるお友達ができるなんて嬉しいねえ。

ささ、汚いけど乗りな」

老人に促され、カタリナは軽トラックの助手席に入った。

彼の言葉は謙遜ではなかった。車内は度重なる農作業の形跡で埃っぽく小汚かった。

だがカタリナはそれすらも懐かしかった。

穀物の買い付けに農家に交渉に出向いた時に商人の荷馬車に乗り合わせことを思い出していた。

だからこんな自然の中に軽トラックという科学の産物が混在しているのに、彼女はそれを違和感だと思わなかった。

「うちの孫娘は学校でよくやれているのかい？」

「ええ、まあ」

「そうかい。あの子はなかなか学校の事とか話してくれないからねえ」

老人は軽トラックを走らせると、道中次々と質問をカタリナに投げかけてきた。

それに応えているうちに、カタリナは目的地へと辿り着いた。

そこは、田舎だということを差し引いてもそこそこ大きな木造の一軒家だった。

代々そこに一族が暮らしていたというのが見て取れる古いとだけでは言い表せない趣があった。

彼女の記憶にある豪農のような屋敷ほどではないが、それなりに由緒ある裕福な農家なのは一目瞭然だった。

「あら、いらっしやい」

車の音を聞きつけたのか、納屋の方から麦わら帽子に田舎の農家の婆さんが着てるよ

うな格好の魔女が現れた。

「あらあら、こんな何もないところによく来てくれたねえ」

その普段の彼女とはかけ離れた様子に面を食らっていたカタリナは、彼女の後ろから現れた老婆に反射的に軽く一礼をした。

「お邪魔します」

「とりあえず、用件は私の部屋で聞きましょう」

カタリナは顔を上げると、家に案内しようとする魔女にうなずいて見せた。

§ § §

「単刀直入に尋ねますが、空港を経由せずに海外に行く方法はありますか？」

カタリナがこんなド田舎にまでやってきて尋ねたいことというのが、それだった。

「あのね、そのどこが単刀直入なの？」

普段の黒衣に戻った魔女が麦茶の入ったコップを差し出しながらそう言った。

「海外に行きたいのなら、普通に飛行機で行けばいいじゃない。」

今からパスポートを申請すれば、休みの間に取れるでしょう？」

「あんなものに乗るとか正気じゃありません」

「まあ、魔術師シモンのようにはなりたくないわよね」

少なくとも彼女は飛行機を嫌がるカタリナを馬鹿にはしなかった。

「じゃあ船で行けばいいじゃない」

「それでは時間が掛かりすぎる事態は急を要するのです」

「じゃあ飛行機ぐらい我慢しなさいよ」

「それだけはダメです」

「どうしてよ……」

そこでは彼女は、はたと気づいた。

「もしかして、飛行機に乗るのが怖いのか？」

飛行機に乗って神の奇跡で撃ち落とされるのが怖いのではなく、単純に飛行機で長時間空中にいるのが怖いのかと思って尋ねてみると。

「あんな鉄の箱に乗って飛ぶなんて、怖くない方がおかしいでしょう!!」

割と切実な、カタリナの主張であった。

「……」

「ついでに言うと、私は船にも乗ったことがないのです。

木造だろうが鉄製だろうが、あんなものを水の上に浮かべてその上に人が乗ろうだなんてどうかしている」

「じゃあノアはそのどうかしている連中の代表格じゃない」

「あれは神に言われたから良いのですよ」

「呆れた……」

手段をえり好みしているカタリナに、彼女は額を揉んだ。

「仮に私が何らかの手段を提示できたとして、それがそちらでいうところの邪悪な魔術の産物だったとしたらどうするのよ」

「それはもちろん、あなたを斬りますよ」

「めんどくさいわねえ」

「ですが何事にも例外はあります。神も火急を要する事態ならば目を逸らしてください」

「帰って。私は状況に応じて都合のいいこという人間が嫌いなものよ」

少なくとも歩み寄りの姿勢を見せないカタリナに、彼女も協力はしてやれなかった。

「私は、どうしても海外に行かなければならないのです」

「それはなぜ？　そもそもどこに行きたいのよ」

次に彼女から出た言葉は重々しく、魔女は肘について聞く体勢を維持しておくことにした。

「イタリアです。私の一団が使用していた隠し倉庫に用があるのです」

「それ、今でも残っているの?」

「幾重にも偽装が施され、人が近づかないようにしてあります。

その倉庫の扉の開け方も代々総長にしか伝えられていません」

「つまり、テンプル騎士団の末裔の遺産ということね」

テンプル騎士団が聖遺物を収集していたという話は古今東西で有名な話だ。

その逸話も相まって、その神秘性は現代でも薄れていない。

そしてその性質を色濃く受け継いだ総長の傭兵団も、同様なのだろう。

「世に出ていない聖釘のレプリカもありますよ。」

尤も、今の時代にはボロボロになっているでしょうけど」

どこか皮肉気にカタリナはそう口にした。

その倉庫に収められている収集物は、もしかしたらそんなものばかりなのかもしれないな

かった。

「だけど物騒ね。」

あなたが必要だと言うのだから、それらは本物かどうか関係なく強力な術の触媒で

しよう?

一体それを何に、誰に使うつもりなの?」

彼女はカタリナが先ほど意図的に答えなかつた質問を追求した。

「……あなたには、関係のないことです」

それは感情を押し殺したような、苦々し気な言い方だった。

「友人としてではなく、同業者として頼ってきたのは分かるのだけど、それだけじゃあ協力はできないわ」

「私としてはあなたたちと同業者呼ばわりされるのは甚だ不本意ですが」

「今あなたの置かれている状況って、そんな些細なプライドに固執している場合なのかしら？」

返事は返ってこない。

仕方なく彼女は麦茶のコップに口をつけていると、数多の葛藤に苦しんでいたカタリナが口を開いた。

「以前、かつての私があなたの弟子を殺したことを恨んでいないと言いましたね。それはなぜですか？」

そして出てきた言葉は、彼女にとって些細なことだった。

「彼女らも子供じゃないのよ、自分の行いに責任を持つべきでしょう。」

私は、私を頼ってきた相手に生きる術を与えたわ。それをどう使い、どのように溺れていったのかまでは責任はとれない」

「かつての私が率いた傭兵団は、使命や神の教えは守るべき規範でした。」

そういった教育をするのは、当たり前前の義務ではないのですか？」

「規範？ 教え？ はっははは!!」

カタリナの物言いは正論だった。

ただ、彼女の目の前の魔女には通用しないことではあったが。

「ああごめんさい、あなたを笑ったつもりじゃないの。

ずっと昔だからあんまり覚えていないのだけれど、私の前世の子供の頃にこんなことがあったのよ」

彼女は何かを言いたげなカタリナに向けてそう言った。

「私の生まれた村ではね、毎年豊穰を祝うお祭りをしていたのよ。

村に赴任していた神父様も携わっていた恒例行事でね。その日はごちそうが食べれるから楽しみにしていたのを覚えているわ」

「それが何か問題あったのですか？」

「そう、問題があったのよ。

いつだったか、何かの用で村にやってきたそこそこ偉い司祭だか役人だったかが、その祭りは異端であると言い出したのよ。

私たちだけじゃなくて、神父様も驚いていたのを覚えているわ。

彼も、私たちも、それがキリスト教に則った正しいものだと思っていたのよ」

笑えるでしょう、と彼女は肩を竦めてそう言った。

「……その神父様は？」

「安心して、その当時は異端狩りだの魔女だの、そんな苛烈な罰則はなかったわ。

別の場所に左遷されたくらいで、それで終わりだったわ。私たちに何も罰則はなかった」

「それは、よかったですね」

「その話はその程度で済んだのよね。

それが、私が一番最初に世の中の規範に疑問を抱いた出来事だったわ」
カタリナはその経験談に対して、何と言えいいのか分からなかった。

地域によって当たり前の祭りがキリスト教の行事と混合するケースは珍しくはなかった。

日本でも戦国時代に日本にやってきたキリスト教の宣教師が布教をした際、人々はその神を仏さまと間違えるといったこともあったのだと言う。

「そのあと紆余曲折あって、魔道に足を踏み入れた私は百年ちよいぐらいした頃に、世間の目を逃れるために修道院を隠れ蓑にしたりしていたわ」

「だいぶ話が飛びましたね」

「長生きすると思えばかりが増えるもの。」

もちろん、修道院の中でぐらゐ真つ当な修道女をしていたわよ。

厳しい寮長やかましい友人たちと一緒に過ごすのは、まあ悪くはなかったわ」

この時カタリナは、自分の前世よりよほど彼女の方が聖職者としての経験があるのではないか、と思つてしまつた。

無論、口には出さなかつたが。

「だけどある時、同室の友達がどこからかウィジャ盤を持ち出してきて悪魔を呼び出そうなんて言い出したのよ」

「……それで？」

「成功するはずなんて、無かつた。

だけど、そこには私が居たわ。偶然、悪霊を呼び寄せてしまいその子は憑依された。

すぐにエクソシストが呼ばれて、悪魔を追い出すという名目で苛烈な拷問をさせられたわ」

「あなたは何もしなかつたのですか？」

「迷つていたのよ。その修道院は悪くなかつたし。

だけどあの子の悲鳴を聞いて、決心したわ。私が、彼女に悪魔を降ろした魔女だと名乗り出てね」

その言葉に、カタリナは額に手を当てた。

それは悪手だということを、嫌というほど彼女は知っていたのだ。

「私がそのエクソシストを追い出して修道院を去った後、風の噂でその修道院が跡形も無くなったと聞いたわ。

その後も未練だったのかしらね、別の修道院を隠れ蓑にしたりしたけど、そこでは本職の私から言わせればお粗末な阿片が蔓延していたりしたわ。

それ以来、私は教会や修道院に近づこうとも思わなくなった」

そんな話を笑い話のように魔女は語る。

カタリナはそんな話を氷のように感情を凍てつかせて聞いていた。

「そんなものよ。世の中なんて、規範なんてそんなもの。

人は神の御許とは程遠い、浅ましい生き物なのよ。それを作った神とやらの程度が知れるわ」

「だから、かつての私を恨んでいない、と」

「恨む恨まない以前の話よ。

話の通じない相手に何かを期待するだけ無駄でしかないのだから」

結局のところ、この魔女は規範を根底とする価値観に意味を見出せなかったのだ。

そんなものは時と場合によって、幾らでも言い繕えるのだから。

「どうやら、相談する相手を間違えたようです」

はあ、とため息を吐いてカタリナはそう呟いた。

「帰ります」

「待ちなさい。物騒なものを取り出す必要がある相手が居るのでしょう？

あなたが怪我でもして帰ったら、あなたのところの神父様が心配するでしょうし、仕方ないから付き合っただけあげるわ」

その魔女の物言いに何か言いたげな表情をしたカタリナだったが、自分の親代わりの事を持ち出されては何も言えないのだった。

§ § §

「正直なところ、彼女の協力を仰ぐことは視野に入れていました」

二人が鈍行列車で揺られること数十分、やってきたのは都内の元ヤクザ事務所だった。

「ですが、あなた以上に彼女に手を貸してもらうのは躊躇われたのです」

「彼女らはあなたの思っている以上にビジネスライクよ。」

余計な干渉をお互いになければそれでいいでしょう？」

カタリナは不満げだったが、魔女は召喚士の事務所のインターホンを躊躇いなく押し

た。

事務所の面々は、来客が二人だと知るとすぐに中へと彼女たちを通した。

「これはこれは魔女殿。お弟子さんにはいつもお世話になっています。お連れの方もどうぞこちらに」

対応に出たのは若い営業のケンジだった。

「それで、今回はどういったご用向きで？」

「かの召喚士殿のご助力を願いたい案件なのよ。」

彼女なら海外からでも指定した物体を呼び寄せたりできるでしょう？」

「え、まあ、出来るでしょうけど」

魔女が用件を伝えると、そこで彼は少し困ったような表情を見せた。

「できるだけ早く頼みたいのだけど、ダメかしら」

「あー、少々お待ち戴けませんか？」

姉御は今、他の来客に対応している最中でして」

「なら、その後で構わないわ。多少なら待つけれど？」

「ああいえ、他の用事があつたらすぐに呼んでもかまわないって言われてるんでちよつと聞いてきます」

ケンジは気が進まない様子だったが、すぐに応接室の方へと歩いて行った。

壁の向こうで二三ほどやり取りがあると、そそくさとケンジが応接室から出てきた。それに続くように、召喚士が現れる。

「私に頼みたいことがあるとのことだそうですが、いったい何の用です？」

「それより、そちらの客はどうしたの？ 応対中だったんじゃないの？」

単刀直入に話に入るせつかちな召喚士を遮り、魔女は遠慮してそう言ったのだが。

「いいんですよ、お茶を飲んでいただけですから」

「はあ」

「それで、用件とは？」

召喚士が再び尋ねた時だった。

「私のイデアにわざわざわざと用事ってどんな奴かと思えば、同業者なのね」

応接間から、イヴが出てきたのである。

来客とは彼女の事だったのだ。

「イヴ、重要な客人です。仕事の邪魔をしないでください」

「私以上に重要な客がいるわけじゃないじゃない」

「怒りますよ？」

召喚士が睨むと、うつとイヴは身を引いた。

「あら、あなたもしかしてイヴじゃない？」

「ん? ……げツ、あなたは」

彼女の姿を見て魔女が目を見開く。

対照的に、イヴは彼女に染み付いた薬品の臭いでその正体に一瞬で思い当たった。

「知り合いですか?」

「彼女の主人には世話になったわ。」

博士は今もご存命なのかしら。あの人がそう簡単に亡くなるとは思えないけど」

魔女は召喚士にこやかに答えて見せた。

「あの時よりあなた、見違えて表情豊かになったわね。」

博士もきつと喜んでることでしよう。あなたも彼女と知り合いなのね」

「ええ、前世からの付き合いですよ」

居心地が悪そうにしているイヴの横で、そんな会話を繰り広げる二人だった。

「……ああ、思い出した、あなたはあの錬金術師の従僕ですか」

記憶を漁っていたカタリナも、何とイヴと面識があるようだった。

「あなたも知り合いだったの?」

「知り合いというほどでは。」

うちの傭兵団とやりあったことがあるんですよ」

「傭兵団? じゃああなた、一時期うちのマスターを付け狙ってたエセ騎士団の人間

だったの!？」

カタリナの方の前世にイヴも驚愕を隠せない様子だった。

「奇妙な縁があるものですね。」

イヴが苦手意識のある人間がいるとは思ってもありませんでしたが」

「昔話したでしょ、この人が中世で現存していた中でも最古の魔女よ。」

顔を合わせる度に私をオモチャにするから会いたくなかったのに」

イヴの唇はへの字になっていた。

それが召喚士はおかしくて仕方がないようだった。

「旧交を温めるのは後にしましょう。」

それで、用件とは何でしょうか？」

「……イタリアにある、この住所にある隠し倉庫の中からとある物品を呼び寄せてほしいのです」

カタリナがあらかじめ用意していたメモを彼女に手渡した。

「……安くはありませんが、いいのですか？」

「その倉庫にはほかに魔術的価値が有るものが保管されているはずですよ。」

それをそちらの手間賃に見合うだけ差し上げます」

「ちよつと見せて」

召喚士とカタリナの交渉の横から、イヴがメモを掠め取ってその文字を見やる。

「その隠し倉庫って、今もあるの？」

「有るはずですよ」

「ちよつと待つて。私のイタリアの部下に、その場所に今もちゃんと存在しているか確認するように言うわ」

イヴはそう言つて、羊皮紙を取り出してそこに何かを書き始めた。

彼女が文字を書き終えると、その下に独りでに文字が浮かび上がる。

「自動筆記を利用した相互通信なのね。」

「普通に携帯電話を使えばいいじゃない」

「こつちの方が慣れてるのよ」

魔女の意見を物ともせず、イヴは連絡を待った。

返信はすぐに返ってきた。

「なになに……あー、その隠し倉庫の場所に、今マンションが建つてゐるみたいね。」

それを建てる時に何か見つかつたって話は無いようだから、有るには有るのかもね」

「マンションですか。かなり辺境にあつたのですが」

「とにかく、物があるのなら試してみましようか」

召喚士は徒弟たちを呼び寄せると、儀式の準備に取り掛かつた。

そうして、召喚士が召喚した物品の数々に、まだ魔道の片足に突っ込んでいるだけの徒弟たちは戦慄した。

箱に収められた人骨や頭蓋骨、ミイラ化された手足といった常軌を逸した品物が次々と現れたのだ。

「あなたの傭兵団って、盗掘団の間違いじゃないの？」

「あながち否定できないのが悲しいですね」

「聖遺物なんて、そんなものですよ」

慰めではないだろうが、呆れている魔女にそんなことを言われたカタリナに召喚を終えた召喚士がそう言った。

人体の一部以外にも、ガラクタにしか見えない物や十字架や杯などなど、その種類は雑多としか言えなかった。

「ありました、これです」

その中で、カタリナは錆びた鉄の塊を手に取った。

「それは、剣ですか？」

興味を示した召喚士がそれを見る。

酷い錆びでボロボロだったが、それは確かに一振りの剣だった。

「ちよつと貸してみても、錆びを落としてあげる」

イヴも興味が湧いたのか、カタリナから剣を受け取って油を掛けると魔術を行使した。

彼女が剣を撫でるように翳すと、錆びは彼女の手のひらの中に納まっていた。

錆びの下には、十字架の意匠がある美しい剣が存在していた。

「驚きました……実在していたとは思っていませんが」

まさか現存していたとは、と召喚士は驚きを隠せない様子だった。

「残りの遺物はそちらに差し上げます。どれもが聖人や聖女の遺骸の一部や所持品ですが、願うならば冒流的な扱いだけはほししないで頂きたい」

「ハッキリ言つて、どれも本物なら歴史的に途方もない価値があるでしょうけど、一応目録だけは作らせてください」

「手伝うわ、あなたたち運び出すの手伝つて」

イヴは召喚士の徒弟たちに指示をして、かなりの数のある聖遺物の運び出し始めた。本当なら、すべて所縁のある場所へと返すべきなのでしょうが」

カタリナは美しさを取り戻した刀身を見やり、そう呟いた。

「啓示の剣よ、どうかこの私に神の加護を」

そのように祈り捧げるカタリナの姿を、魔女はじつと見つめていた。

師弟について

「時間は長く取れない、手早く済ませろ」

伊藤刑事は呪術事件の容疑者の一人を取調室に移動させると、異能者二人にそう言った。

「なあ伊藤ちゃん、捜査本部はまだ魔術に頼るのを嫌がつてるのか？」

「まあな。他の刑事課の連中が大多数だし、科学捜査以外は証拠にならないと否定的だ」
化粧屋の問いに、彼も思うところがあるのかそのように述べた。

「ハッキリ言つて、捜査本部じゃ俺も肩身が狭い。」

だが取つ掛かりを掴むには有効だ。証拠ならそこから探せばいいからな」

「敵が見えないことには、証拠も何もないもんな」

「ああ、あちらは人海戦術で容疑者たちの行動を調べつくそうとしているが、それだけでは時間が掛かるだろうな」

伊藤刑事として、正直に言えば魔術なんかに頼るのは好かない。

だが現実問題として、異能事件は社会現象と化している。その犯人が異能者かどうかにも係わらずだ。

その混乱を収めるのが異能係の仕事で、仕事に私情を挟まないのがプロだ。だから彼はそう言った些細なプライドを捨て去った。捨てざるを得なかった。

「それで、始めてもいいのかい?」

「ああ、だが再三言ってるが、手荒な真似はしないでくれよ」

「わかってるって」

被虐と称された呪術師は彼に念を押されて、取調室に入っていく。

「な、なんですか、あなたは? 警察官じゃないんですか!」

容疑者の女は呪術の代償によつて醜く歪んだ顔を恐れで歪めて目の前に現れた女に
そう言い放った。

「あたしは臨時雇いの呪術師さ。」

あなたに呪いを教えた相手があたしじゃないかと疑われてねえ。

身の潔白を証明するため、お前さんから情報を吐かせることにしたんだわ」

呪術師の口調は老婆を彷彿とさせるようなやわらかな口調だったが、その言葉に乗せられた有無を言わせない迫力は明確に相手に伝わっていた。

「い、嫌だ、私は絶対にしゃべらない!!」

容疑者の女は椅子を引いて壁際まで逃げるが、呪術師はくすくすと笑っていた。

「誰だって、憎い相手に報復をしたいと思うもんさね。」

恨むなら、私に依頼しなかったことを恨むんだね」

呪術師は懐から香水の瓶を取り出し、シュツと中身を霧吹きで容疑者に浴びせかけた。

相手は抵抗する間もなく、意識を失って倒れようとしたところを呪術師に受け止められ、取り調べに使うテーブルの上に寝かせた。

すると、彼女はまた別の物体を取り出した。

それはジツパー付きの市販の保存袋であった。

問題なのはその中身で、干した柿のような赤黒い物体が入っていた。

「おいおい、何だあれは、何をする気だ?」

容疑者を無理やり眠らせた辺りからだいぶ雲行きが怪しくなってきたので、マジックミラーの壁越しにハラハラしている伊藤刑事が緊張していると。

「素晴らしいな、魔女の秘術をこの目でこの目で見られようとは」

「うおッ」

いつの間にか、ティフォンが呪術師の尋問の様子と一緒に見ていた。

「なんなんだ、あれは」

細かい突込みなどは隅に置いて、伊藤刑事が目の前で行われようとしている魔術について尋ねた。

「あれはフクロウの心臓だろう。」

HEART to HEARTと呼ばれる、腹を割って話すという言葉の語源となった魔術だ」

「あれを眠ってる女の胸に置くとな、そいつの秘密を喋らせられるんだよ」

と、ティフォンに続いて化粧屋も解説してくれた。

「だからわざわざ容疑者は女性を指定してきたのか」

事前の打ち合わせでそのような取り決めがあったことを思い出し、伊藤刑事は溜息を吐いた。

壁の向こうで二人が言ったように、干からびた心臓を眠った容疑者の上に置いて、呪術師が彼女に語りかけ始めた。

すると、信じられないことに、眠っているはずの容疑者が言葉を発し始めたのである。

「これって自白の強要にならないよな？」

「何言ってるんだよ、あれはどう見ても寝言だろ？」

化粧屋の物言いに、伊藤刑事も口を閉じた。

異変が起こったのはその時だった。

容疑者の顔を蝕んでいる痣の症状が進行しているのだ。

「おい、マズいぞ!!」

「黙ってみとけよ」

割と危ない橋を渡っている伊藤刑事が焦りを見せるが、化粧屋は落ち着いて彼を諭す。

「……掴まえた」

容疑者の女に触れ、自身にまで呪いが侵食し始めているというのに呪術師は唇を釣り上げた。

彼女は即座に動いた。

鉄の杭を懐から取り出すと、自分の手の甲へとぐしやりと突き刺したのだ。

「うッ」

その異常な行為に、伊藤刑事は思わず目を逸らした。

「被虐の!! 位置は掴めたか!!」

だがすぐその横で、取調室を隔てるドアを開けて化粧屋が呪術師に言った。

「ひ、ひひひッ、紙をくれ!!」

「ああ」

痛みに悶えながらも笑いながら呪術師は化粧屋から紙とペンを片手で受け取ると、目を瞑って恐ろしい速さで何かを模写し始めた。

「おい、伊藤ちゃんこの場所分かるか?」

呪術師が模写したのはどこかの風景だった。

どこかの廃ビルらしき場所から、窓の外からネオンの付いた看板が見て取れる。「悪いが心当たりは無い。」

だが、刑事課の連中に聞けば何かわかるかもしれない」

「なら早くした方がいいぜ、今ならあいつの呪術であつちも動けないはずだ」

「ああ、わかった!!」

伊藤刑事は飛び出すようにして取調室から走り出したのだった。

§ § §

「刑事殿、私を連れ出して構わないのか？」

伊藤刑事の操る車に、彼と化粧屋だけでなくティフォンまでも乗り込んでいた。

「あの呪術師の魔術は長く持たないんだらう？」

「そうらしいな、向こうから魔術的な接続を切ろうとしている動きがあるらしい。」

野郎、呪術は三流だが解呪は一流っぽいぞ」

今現在、呪術師の自らの献身によって、一連の事件の首謀者はその場から動けない状態にあるらしい。

「なら、今更横紙破りが一つ増えたところでどうつてことない」

ティフオンは立場的に捜査に加わるようなことは現在許されていない。

だが伊藤刑事は、今回は彼の存在も必要だと確信していた。

「ひゅー、カツコいいぜ、伊藤ちゃん。惚れそうだ」

「やめてくれ、背筋がゾツとする」

化粧屋に茶化され、顔を顰める彼だった。

三人を乗せた車は、目的地へと向かう。

場所は都内、歌舞伎町だ。

「なるほど、使い捨ての拠点にするにはいい場所だ」

犯人の拠点は、歌舞伎町にある老朽化により使われていない雑居ビルの一つだった。

歓楽街の片隅に、その雑居ビルはひっそりと幽霊のように佇んでいた。

「どうやら、先客がいるようだ。偵察をする必要があるな」

「先客？」

「うむ、中から言い合いのような声が聞こえるな。」

匂いからして、三人。血の臭いもする」

伊藤刑事は顎に手を当てた。

ティフオンの肉体は魔術によってキメラ化されており、様々な動物の長所を獲得している。

それらはゴリラの腕力だったり、ノミの脚力、犬の嗅覚やイルカの聴覚といったもので多種多様だ。

その彼の感覚はこの場において警察犬並みに頼りになる。

「こいつを使うぞ」

化粧屋は近くの路地裏にあるゴミを漁っていたネズミを掴まえ、魔術的に支配すると魔ビルに向かって差し向けた。

「何が見える？ 犯人は複数犯なのか？」

「落ち着け、感覚の同調は繊細なんだって。」

……って、おいおい、マジかよ」

ネズミの視界を通して中を見た化粧屋は啞然となった。

「早く中へと入った方がいいぞ、これは。」

「じゃないと、手遅れになりそうだ」

……

.....

化粧屋たちが到着する、少し前の事だった。

「くそ、しくじったか!!」

雑居ビルの床にその男の左手が見えない何かによって打ち付けられていた。

感覚の同調を利用した、呪術の一種だった。

ネズミといった小動物を使役し、感覚を同調して偵察を行うのは魔道の心得のある者の常套手段だが、当然それにもリスクが伴う。

使役対象が何らかの負傷を負うと術者にもフィードバックが生じ、同じだけの傷を負ってしまうのだ。

この呪術はそれを逆用したものであった。

元々、彼は呪術の対処法を熟知していたはずだった。

だが相手は彼の呪いに反応すると一瞬で感覚を片手だけ繋ぎ、左腕を打ち付けた。確実に魔術の知識のある同業者相手に対する、カウンターだと悟った。

位置もすでに特定されたと思っていだろう。

だが、呪術というのは一度成立してしまうと他者からの解呪は時間が掛かる。

この呪術も、明らかに時間稼ぎを目的としていた。

もう既に警察が動いている。明らかに同業者が彼らに協力をしている。

男は焦りながらも、解呪を推し進める。

「全能にして永遠なる神よ、万物を御身の誉れと栄光のために、そして人に仕えるべく創造した方よ。我は、求める事を告げ教える」

魔導書アルバテルに記された祈りの呪文を唱えながら、解呪の最後の一手を試みた。

床に打ち付けられた不可視の杭が消え去り、物理的に傷ついていないはずの手の甲が内出血で赤黒くにじんんでいた。

「悪魔に尻を振る売女め……」

苦痛に顔を歪めながら罵倒を吐き出し、男は移動するために最低限の荷物をかき集めようとし始めた。

「どちらが悪魔に媚を売っているのでしょうかね」

その声が聞こえた瞬間、男は手元にあつた剣を抜いた。

「やはり、あなたでしたか。副長」

哀れみに満ちた表情をして彼のいる部屋へと歩いて入ってきたのは、カタリナだった。

「誰だ貴様!! 警察の協力者か!!」

「覚えていませんか? あなたに剣の握り方を教えたのも、その才覚を見込んで補佐にしたのも私だというのに」

「なッ」

副長と呼ばれた男は、信じられないものを見るように目を見開いた。

「総長、あなたなのか……」

カタリナには彼が息を呑む音さえ聞こえたような気がした。

「この再会は、神の思し召しなのでしょう。」

あなたが最初に呪いを教えた相手が呪った相手が居た場所に、偶然私が居合わせていた。

一目でわかりましたよ、これはうちの団が昔異端の口実にするために扱っていた呪いだ」と

カタリナは最初から気づいていた。

あの呪いが、一連の事件が、かつての身内の仕業であると。

「私は、あなたを止めに来ました」

彼女は鞘に収まった剣を引き抜いた。

十字架の意匠が五つ柄に刻まれた、美しい剣だった。

「フィエルボワの剣……総長、わざわざそんな骨董品まで持ち出して来たんですか？」
それを見て、副長は苦笑した。

フィエルボワの剣。

それはジャンヌダルクが啓示によって発見した、彼女の帯剣である。

フィエルボワとはその剣が埋まっていた教会の名前であり、彼女はこの剣を後に捕虜になる際に紛失したとされている。

彼女の軌跡を追っていた総長の傭兵団は、歴史では遺失したはずのその剣を回収していたのである。

「それには何の神秘も無いと、結論付けられたことでしょうか？」

あの女の神秘性を高める為の逸話作り、*“仕込み”*であると」

「本当にそうでしょうか。私はこの剣の啓示によって、ここへと導かれた。

あなたは昔からそういうところがありましたね。先人に敬意を払うのではなく、実利的な観点ばかりで物を見る」

目を掛けていた弟子だからこそ、もっと教えるべきことがあつたとカタリナは嘆いていた。

「はッ、何が敬意ですか、何が信仰ですか。

私たちの傭兵団に、そんなものがありましたか？」

テンブル騎士団でさえ、その趨勢を誇ったのは経済的な理由が大きい。彼らが滅ぼされた理由さえもそれだった。

そんな歴史があるからこそ、あなたは傭兵団の拡充に否定的だった。

どれだけ仲間を失っていかうとも!!」

「我らが扱う御業は、多くの余人の目に触れていいものではなかった。

人が増えても意志の統一が難しくなるだけだ。そうして当初の理念は消えていくのだ」

「誰も、誰もが自分たちの使命なんて本気にしていなかったでしょう!!」

「そうだ、総長、あなたでさえも!!」

「ええ、そうでしたね」

結局、総長たちはその戦乱の時代を生きるだけで精いっぱいだった。

使命の為、などという言葉は、結局非道を行うための精神的な殻に過ぎなかったのだ。

「結局私たちは、自分たちが奇跡を会得するのが楽しかった。そうでしょう!」

「……それが、無辜の人々に呪いを与える理由ですか?」

「連中は所詮、自分の誘惑に勝てなかっただけの事でしょう?」

その結果、自分に何が起ころうがそれは自業自得に過ぎない。

俺はただ切っ掛けを与えたに過ぎない。俺がそうしなくても、連中は同じようなこと

をしたさ」

副長の物言いに、カタリナは深く息を吐いた。

そして、彼の表情を見る。笑っていた。

「神はいつでも我らを見守ってくださる。

なぜなら、神は我らの内側におられ、慈愛や健全な精神としてそこに在るからだ。

だが同時に、人の心の内には悪魔も潜んでいる。

……副長、今のあなたは醜悪な悪魔そのものだ」

「ほざけッ、総長!!」

副長が剣を薙ぐ。

その刀身には燃え盛る炎が蛇のように渦巻いており、それが解き放たれた。

灼熱の蛇は地面を這い、炎の軌跡を残しながらカタリナに襲い掛かった!!

「その術を教えたのは誰でしたか？」

カタリナは内ポケットから護符を取り出し、フィエルボワの剣で軽くそれを振り払った。

燃える蛇は火の粉になって散る。

「青銅の蛇……、本当に私が相手だとわかっていたのでですね」

カタリナの取り出した護符は、青銅製の蛇を象った物だった。

彼女が完全に自分と戦うつもりで来たことを、副長は感じていた。

「ならッ」

相手は万全の準備をしている。

であるならば、小細工は無用だった。

彼は即座に手の内に忍ばせていた丸薬を口に放り込んだ。

カタリナも同じように、秘薬を取り出し口にした。

その瞬間、両者の周囲の景色が歪む。

二人はある種の幻視を応用し、体感速度を劇的に上昇させているのだ。

魔女相手に魔術を使う暇を与えずに斬り殺す、必殺の一撃がお互いに放たれた。

そして、余人には瞬間移動したようにしか見えない両者の交錯が、終わった。

「そん、なッ」

彼の腹部から、血が噴き出る。

副長には自負があった。剣技においては、師を上回っていたはずだ、と。

そして今生では自分は成人男性で、相手は非力な女子。

肉体的にも負けるはずが無いはずだった。

「な、ぜ……!?!」

「武器の差、そして秘薬の差でしょうね」

聖なる剣に付いた血糊を振り払い、カタリナが振り返る。

「終わったかしら？」

すると、ずっと部屋の外で成り行きを見守っていた魔女が様子を見に来た。

「こ、この臭い、まさか!!」

「ええ、幻視に使う秘薬は彼女に都合してもらいました」

「魔女に魂を売ったか!! 総長!!」

「お似合いの師弟ではないですか。悪魔に魂を売ったあなたと私は」

罵声を浴びせる副長の首筋に、カタリナの刃の切っ先が添えられる。

「殺すの？」

「それがかつての師としてのケジメですから」

「そう」

黒衣の魔女は特に感慨もなくうなずいた。

「でも、少しばかり遅かったみたいね」

彼女が視線を部屋の隅に向けてみると、不自然にこちらを見ているネズミの姿が目に入った。

「双方武器を捨てろ!! 警視庁だ!!」

そこに、伊藤刑事とティフォンが突入してきたのである。

「よう、二人とも。こんなところで会うなんて奇遇だな」

遅れて化粧屋も廃ビルの一室に入ってきた。

「……」

「今更、あなたが手を汚す必要なんてないんじゃないの？」

「そう、ですぬ」

カタリナはやはり迷いがあつたのか、刃を引いた。

だが。

「くッ、死ね、魔女があ!!」

副長はまだ、剣を握ったままだった。

「まあ、そう生き急ぐな」

その一閃を、間に入ったティフォンが手のひらだけで受け止めた。

元々彼は武装解除に動こうとしていたのだ。

「あら、ありがとう」

「これはこれは。私が間に入らなくとも結果は変わらなかつたかな」

微塵も脅威を感じていない様子の魔女に、ティフォンは底知れなさを感じて寒気を覚

えたようだった。

「くそッ、くそッ、どいつもこいつも俺の邪魔をしやがって!!」

「見苦しいわよ」

自分のかつての弟子を複雑そうに見ているカタリナを見やり、魔女は彼に秘薬の香気を当てるで眠らせた。

「これで静かになるでしょう。」

化粧屋、応急処置をしてあげて」

「おう、ご協力ありがとうございます」

「行きましょう」

魔女はカタリナの手を引いて、廃ビルの一室から立ち去って行った。

「ああ、事情聴取……まあいい、今は犯人優先だ」

「起きた時に暴れられても困る。勇者殿を呼んでおいた方がいいだろう」

「わかっている」

化粧屋が傷の縫合をしている横で蜘蛛の糸を作り出し副長を拘束しているティフオンが伊藤刑事に要請し、彼も方々に電話をかけた始めた。

こうして、一連の事件は終息を迎えるのであった。

§ § §

後日、二人は召喚士の事務所へとやってきていた。

聖遺物の目録を作るには、どれがどういった代物なのか知るカタリナが必要不可欠だったからだ。

「それにしても、不思議ですね。」

この剣は普通の鉄の剣と何ら変わりないというのに、逸話や伝承によつて触媒としてこれ以上ないものとなっているとは

召喚士はツアーアト事件の解決を報道するニュースを横目で見ながら、フィエルボワの剣を手に取りその刀身を眺めていた。

「だからこそ、魔道は面白く、やめられないのよ」

「わかるわ」

相槌を打つ魔女に、召喚士も頷いて見せる。

「だからこそ、惜しいですね。」

「この剣はフィエルボワ教会に返還してしまうのでしょうか？」

「それが彼女の意志よ」

「残念でなりません」

「その方が、伝説をなぞるようでロマンがあるじゃない」

ジャンヌダルクのフィエルボワの剣は、その発見の逸話からエクスカリバーやバルム

ンクといった伝説上の剣と関連付けられている。

その実物を返還するのなら、それはロマンのあることだと魔女は言う。

「それもそうですね」

「尤も、それを行うには彼女がパスポートを取得する必要があるのだけど」

「フィエルボワの剣が発見されるというニュースはまだ先になりそうですね」

二人は今もイブと聖遺物の仕分けをしているカタリナの事を頭に思い浮かべるのであった。

「そうそう、実は私、イヴとある計画をしているのですが、カタリナさんと一緒に協力してくれませんか？」

「とりあえず、話だけは聞くわ」

下準備について

警視庁は、ツアールアト事件の犯人逮捕によつて上から下まで大騒ぎだった。

様々な横紙破りを行った伊藤刑事だったが、今はいかにして犯人を起訴できるかという方向にシフトしていた。

彼は多少の減給を言い渡されただけで、事実上のお咎めなしとなった。

それだけ凶悪な異能犯罪の解決は警察の信用回復の為に最優先事項であつたのだ。

「で、実際のところどうなの？」

あの野郎を起訴できんの？」

「俺に聞かないでくださいよ。捜査本部に出入りしてるわけじゃないんですから」

異能係の事務室にて、化粧屋が疑問を妻鳥にぶつけていた。

「先輩に聞けばいいじゃないですか」

「伊藤ちゃんは今忙しいじゃない」

「俺だって忙しいですよ」

妻鳥も現在書類作成の真っ最中だった。

「俺はちらつと聞いた程度ですけど、犯人が目を覚まし次第に聴取して自白を引き出せば最良。」

後は他の容疑者に面通しさせて、奴から呪いを教わったと証言が取れば御の字って感じでしょうか」

「もどかしいな。いつそ、被虐の奴を裁判で証言台に立たせてみたらどうだ？」

魔術的因果関係を証明するいい機会じゃないか」

「無茶を言わないでくださいよ。裁判で魔術の実演でもさせるつもりですか？」

検察がそれを証拠として採用するとは思えないですよ」

それはあの呪術師を証人として有用性が有るというよりも、彼女の存在がグレーすぎるからだった。

「全ては勇者殿次第か」

ティフォンは事態の推移を笑みを浮かべて見守る構えのようだ。

「ところで、犯人ってどうでした？」

現場は血だらけだったらしいですけど、やりあつたんですか？」

「あー……コメントが難しいな」

多分副長よりもずっと検挙するのが難しいだろう二人の事を思い浮かべて、化粧屋はそう返した。

「刑事殿が私を連れて行ったということは、荒事を想定していたということだろう。

警察官は拳銃の使用が難しいのもあるが、そちらを連れて行かなかったのもそうだろうな」

「ああ、やっぱりそうですよね」

妻鳥は納得したように頷いた。

だが、彼は疑念を抱いたままの様子でティフォンを見やった。

「前々から思っていたんですけど、ティフォンさんって普通に強いんですね？」

「なんで、あの時魔術師さんと直接戦わなかったんです？」

「ふむ、なぜそんなことを問う？」

「そりゃあ俺だったら、ある程度の強さを手に入れられたらそうしたと思いますし」

それで一度やらかしちゃったし、と妻鳥は小さくぼやく。

「なぜ私自身が戦わなかったか、か。

確かにそれはそれでロマンのある話だ。

だが、私は私自身の強さというものに魅力を感じなかったのだよ」

「ほーう？ それはどうしてだ」

化粧屋がするように語るティフォンに興味を引かれたのか、彼女も話題に加わった。

「我が秘術や魔術は、実はかなり新興なのだ。

鍊金術師殿の説が正しければ、前世の腕前で良く今生の記憶を保持したままでいられたか、というレベルの凡庸な人間であつた」

「それは、意外ですね」

彼の言葉がまつたくもつて謙遜ではないと、妻鳥は悟つた。

彼の知るティフオンは自信家で、プライドが高く能力もあつた。

「そもそも、我が魔術というのは本来、地球上に存在しない幻獣の類を再現し、魔術の触媒として活用するために生まれた技術なのだよ」

「ああ、なるほど」

化粧屋はどこか納得したように頷いた。

「よくわからないですけど、要するに模造品で代替する為の技術つてことですよね？」

「そういうのつて、代わりになるんですか？」

「なるんだよ。質は落ちるかもだが。」

魔術の世界じゃ、本物かどうかなんて些細なことだ。

なあメドリ、私らが扱う魔術で一番難しい種類の系統つて何だと思う？」

「え、どんな魔術が難しいかつてことですか？」

「うーん、降霊術とかですかね。靈感とか必要そうだし」

「違うな、一番難しいのは占星術。次いで召喚術だ」

なあ、と同意を求めるように彼女はティフォンに顔を向けると、彼も頷いた。

両者の生きていた前世の時代は開きがあるが、その間もその認識は変わっていないようだった。

「あとは大体横並びで、向き不向きってところか。

その二つの魔術は、才能では語れない魔術の業界でも飛び切りのセンスを要求される。

最高位の占星術師は時代に一人いれば良い方で、召喚士も同じだ。

別の世界から魔術に扱う素材を調達できるかどうかなんて、そいつのセンス次第だからな」

「うむ、ゆえに錬金術師殿は召喚術の継承だけは厳重に管理していた」

「だろうな。だがそうになると、お前さんイヴの手下みたいなもんだったのか？

あいつの要求はきつと厳しいだろうな」

その化粧屋の言葉に、ティフォンは曖昧に笑った。

「まあ、彼女の期待に応えられるほどではなかったのだよ、私は。

彼女の事を忌避する一方で、私は彼女に期待さえ抱かれなかったことが悔しかったのを覚えている。

だから私は今生で、自身の性能をどれだけ向上できるか試してみたのだ」

そして彼はこうなった。

自分より格上の術者である化粧屋と、他人から見ても比較できないレベルまで魔道に踏み入ったのだ。

「幸い、今生では多くの生物の情報や調達方法がネットに転がっている。

この体になるまで、数年程度で事足りた。

錬金術師殿が科学が魔術足りえるというのなら、私こそが科学を土台とした魔術の申し子であろうな。

だが、どんどんとこの肉体の性能を向上させることに腐心したところで、時折我に返って空しくなるのだ。

どれだけ己が優れていようとも、それを知らしめる方法などこの世界には無いということにな」

「……」

その悲哀は、妻鳥も痛いほど理解できた。

彼も己が異能を得て周囲に傲慢し充足感を得ようとしたのは、結局は自分の能力を誰にも理解されないだろうという不安と恐怖、そして孤独の裏返しだった。

「化粧屋さん、あなたは不安じゃないんですか？」

「こういうこと言うのはあれですが、あなたって前世は男だったんでしょう？」

「えッ、それを聞いちやう?」

化粧屋はなぜかニヤリと笑った。

「私な、昔友達に絵描きが居たんだが、そいつと一緒にいろいろと研究とかしてたわけだ。

そいつには手癖の悪い弟子が居てよ、友達との研究は秘密だったんだが、俺と一緒に居る時に奴が詰め寄ってきてこう言ったんだ。

——お前、我が師と寝たなッ、つてな!!」

ぎやははは、と一人で大笑いする化粧屋だった。

「あ、そうですか」

真顔になって、妻鳥は心配して損した、と思った。

彼女の話には男しか登場していないのに、修羅場になっていることを理解するのを脳が拒否していた。

「ここからが面白いんだがな。

俺、あいつ嫌いだったから言つてやったんだよ。こいつはお前の粗末なモノより俺の——」

「あー、ティフォンさんって前世には伴侶とか居たんですか?」

子供とかいたなら子孫がまだ生きているかもしれないよ」

妻鳥は化粧屋の下品という汚い話を遮り、ティフォンに話を振った。
「伴侶、か。考えたこともなかったな。」

「いずれ弟子を取ろうとは思っていたが、己の子にそれをさせようとは思わなかった」
「あー、やっぱり自分の子供に魔術を伝承するって考え方はあるんですね」

「まあ私の父もそうであつたからな。」

「幼少の頃より教育をしていれば、継承を拒絶されるなんて事態なども避けられるからな。」

「錬金術師殿の作った組織において、魔道の叡智が絶えることだけは許されざることであつたのもあるが」

「俺の前世も親が魔術をやつてたりしたんでしょうか」

と、二人は化粧屋を無視してそんな話をし始めた。

「なんだよ、ここからメツチャ面白いところなのに」

「なんだか自分の笑い話が滑った気がして不機嫌になる化粧屋だった。」

§ § §

「あの二人は、賛同してくれるそうですよ」

「そう、なんだか複雑な気分ね。心強いんだけど」

ところ変わって、数日後の元ヤクザ事務所の応接室で召喚士とイヴが話し合いをしていた。

「後は影響力のある人物に声を掛けるだけね。」

「事前にこちらに引き込みたい者は居ますか」

「……ええ、候補としては日本には二人、海外ではテンペストを始めとした超能力者にもあらかじめ声を掛ける予定よ」

「“テンペスト”……ああ、ヨーロッパの超能力者ですね」

二人が名を挙げた人物は、現在地球上で最強と称される超能力者だ。

彼自身はイギリス人であるが、その知名度や人気は国籍に囚われない。

異能者の地位向上を目的としたアメコミのヒーロー活動みたいなことをしており、テンペストとはその際に使うヒーローネームである。

「それで、日本の候補者二人とは？」

「二人はテレビでもよく見るでしょう？」

“Sarah”……芸能人よ」

「ああ、読心能力を持つっているって……あれって、そういう設定とかヤラセじゃないんですね」

「彼女は本物よ。だから今は動物番組のリポーターなんてやってるの」

次に二人の話題に上がったのは、日本のバラエティ番組でよく見る芸能人の一人だった。

自称超能力者のハーフトalentで、そのプロフィールが話題となり一躍時の人となった有名人だ。

「そしてもう一人が一番重要なだけけれど——」

イヴは今回の話において最も重大な話をしようとした時、ティーカップの中身が空だということに気づいた。

「ああ、お茶がもう無いわね」

「補充しましょう」

「私も行くわ、いい茶葉を持ってきたの」

イヴと召喚士の二人が応接室を出ると。

「タラクサム、茶葉を持ってきて」

イヴが己の従者を呼びかける。

しかし、事務所を見渡してもあの目立つアルビノメイドの姿はどこにも無い。

「あの子、どこに行ったのかしら」

「ああ、なるほど……誰か、ケンジを呼んできて」

自分に忠実な従者が近場に居ないことに小首を傾げているイヴとは異なり、召喚士は察しがついたのか人を呼びつけて己の徒弟を連れてくるように命じた。

「あ、姉御!! ご用命でしょうか!!」

すると、程なくしてケンジが廊下から室内へと飛び出てきた。

その後ろに、遅れてイヴの従者も現れる。

「あなた、何をしていたの? 私が呼んだのが聞えなかったの?」

「申し訳ございません、お姉さま」

「まあいいわ、早くお茶の準備をして」

イヴが命じると、頭を下げていた従者は顔を上げ、給湯室へと歩いて行った。

そして召喚士は、この場に残ったもう一人に視線を向けた。

「え、つと、あの、すみませんイヴさん。」

棚卸しの手伝いをしてもらって……

「ケンジ、お前もういつそ直接頼んでみろよ」

「お前が撃沈するところを見てやるからよ!!」

二人を前にして委縮しているケンジに、周りが囁し立て始める。

「なに言ってるの、こいつら」

「気づいてなかったのですか?」

ケンジは結構前からあの子に惚れているんですよ」

「はあ？」

召喚士の言葉が理解が及ばないのか、イヴは不思議そうにケンジの顔を見た。

「あなた、あれが自分と同じたんぱく質で出来ているとも思っているの？」

彼女は心底信じられない物を見るように、彼を見やった。

「お、俺みたいなチンピラ上がりの思い上がりだつてのは理解してます!!

だけど、イヴさん!! 俺は本気なんです!!」

床に膝をついて頭を下げるケンジを、イヴは困惑した様子で見下す。

「だそうよ、タラクサム」

イヴはティーセットを運んできた己の従者にそう言った。

「はあ、私めを使用してあなた様が快楽を得るのは難しいと存じます」

無表情のゴスロリメイドは無感情のまま淡々とそう答えた。

「つぷ、あははは!! そうね、あなたにそういう機能は付いてないわね!!」

これにはイヴだけでなく、他の事務所の面々も大爆笑だった。

召喚士だけはほとんど泣きそうになっているケンジを哀れみを持ってみていた。

「偶にいるのよ。私たちに欲情する性欲が捻じ曲がった変態がね」

事務所の隅で落ち込んでいるケンジを、自分が傷つけたと理解できぬまま慰めている己の従者を見やり、イヴはそんなことを言い放った。

「まあ、あなたたちは客観的に見て容姿は整っていますからね」

イヴはごく少数のマイノリティのように語っているが、召喚士は違うだろうなあと思つた。

彼女たちは女神像のように浮世離れた外見をしている。

ダメな人はいるだろうが、熱烈に求める者も確かに居たのだろう。

「あなたは今まで人間を好きになつたことは無いのですか？」

「私が？ あるわけないじゃない」

召喚士の疑問に、イヴはあっさりと言ひ切つた。

「ああでも、いえ、あれは違うか」

「なんです、言つてみなさいよ」

完全に女学生のノリである。

イヴは彼女にしては珍しく少し面倒そうに、このような話をし始めた。

「私は私たちに貢献した人間に対して、それなりに敬意を示すことはあるわ。

そいつはある貴族の男でね、長らく世間から目を離す為の土地を提供してくれたわ。

だから私は彼に多くの権力者が欲してやまない物を与えたわ」

「永遠の命、ですか？」

召喚士の嫌味っぽい言葉に、イヴも鼻で笑って頷いた。

「まあ、世間一般の人間にとつては永遠に等しい寿命でしようね。

でも私は彼の精神には何も手を加えなかつたわ。約二百年ほどだったかしら、彼がもう生きるのに疲れたと言いだめたのは」

まるで動物実験の結果でも語るように、イヴは薄い笑みを浮かべて彼女は言った。「彼はそれまで何度も立場や顔を変えて、権力を得続けたわ。

カネ、女、名声と言つた人間が欲しがらる物全てを手に入れたでしょうね。

そんな彼が死期に近づき最期に望んだのは、私と一緒に過ごしたい、だったわ」

「それは、気の毒に」

「……彼と最期に過ごした数か月は、悪くはなかつたわ。

長生きしただけあつて、話題には尽きなかつたしね」

親友の茶々を無視してイヴは話を終えた。

「それで、あなたはどなのよ？」

魔道の世界は血筋では語れないけど、環境は整えねばならないわ」

イヴは召喚士を見据えて尋ねる。

彼女にとってこの親友は友としても同業者としても価値は計り知れないのだから。

「私は未だ、この道一筋ですよ」

「じゃ好みのタイプとか居ないの？ 適当に見繕うけれど」

「そうですねえ」

召喚士は少し考えてこう言った。

「私を支配できるような相手が良いですね」

「あなたに惚れる人間が居たら、それはそれは気の毒ね」

イヴのその返しに、彼女も肩を竦めるのだった。

自由研究について

八月●日 晴れ

今日は友達たちと一緒に、お祭りへと行くことになった。

ようやくこの宿題の日記に書けそうな出来事ができた。

なんでも、神隠しの伝説がある町らしく、私は興味が引かれつつも少し不安だ。

八月◎日 晴れ

たった一日でとんでもなくいろいろな出来事があった。

友達が神隠しに遭い、それを助ける為に座敷童を追ったり、その正体が妖精だったり、と言葉がまとまらない。

そしてつい勢いで、その妖精を預かることとなった。

正直後悔しているが、私はワクワクしていた。

たとえ魔法の力を授からなくても、妖精に会うのは昔からの憧れだったのだ。

八月◇日 晴れ時々曇り

憧れは所詮、憧れでしかないことを思い知った。

先日の事件で思い知っていたことだが、この妖精という生物は酷く性悪だった。

この宿題の日記を書こうとすれば筆記用具を隠されるし、スマホについて教えたら今日の朝には充電器のコンセントを抜かれていた。

このくらいは序の口で、暇さえあれば私の神経を逆撫でするようなことばかりするのだ。

このままでは両親にこいつの存在が露見するのも時間の問題なので、私は親にこのことを打ち明けることにした。

八月□日 曇り

両親の仕事場にまで出向いて、昨日電話で伝えたことを実際に見せることになった。

うちの両親や事務所の人たちはあっさりとかいつのこを受入れてくれた。

うちはそういうところは寛容だったが、夏芽が面倒見れないならうちの事務所で預かる、とかママが言い出したので慌ててそれはダメだと言っておいた。

こいつを事務所に置いておいたら、たぶん仕事どころじゃなくなるだろう。

私は両親に迷惑を掛けるのだけは嫌だった。

こいつが両親の前だと妙に行儀よくしていたのが余計に腹が立った。

八月×日 曇り午後から晴れ

今日は朝から齒ブラシが自分用のと。パパの奴と入れ替えられていた。

それどころか、齒磨き粉の中身が練り辛子になっていた。ギリギリで回避した。

正直、我慢の限界だった。

ここに書いていないだけで毎日最低十回以上も、この性悪妖精に悪戯されている。

私はこういうことに詳しそうな人に頼ることにしたのだけど、今忙しいらしくちよつとしたアドバイスを貰っただけだった。

曰く、分かり合おうとするだけ無駄だから、そういうものだとして諦めろ、とのことだった。

そして今更追い出そうとしても、恨みを買って酷い目に合うだけだと。

私は友達に愚痴ることにした。

§ § §

今日も今日とて夏休み。

学生たちの憩いの時期。

そんな彼女らがいつもたむろしている夏芽の家の彼女の部屋で、いつもの四人組はテーブルを囲んで宿題をしていた。

「ホント、マジあのクソ妖精ありえないんだけど」

ぶつくさ愚痴を言いながら、夏芽は社会の宿題を進めていた。

「今日さ、二度寝しようとしたらあいつに叩き起こされたわけ。」

部屋中の小物をがたがた揺らしてさ!! 私の寝てるベッドもだよ!!

心臓が飛び出るかと思ったよッ!」

「それは大変ねえ」

「ここ数日、毎日SNSで彼女の愚痴を聞いていた千秋は適当に相槌を打った。

「春美ちゃん、ホントにあいつどうかでできない?」

「あの子、ここに住むつもりなんでしょ?」

他の移住先を探すわけでもなく。それに夏芽ちゃん、加護を受けたって言うてたじゃない。

今更追い出そうなんて考えない方がいいと思うよ」

春美は宿題の手を止めて、夏芽に真摯に応対した。

そう、どういうわけか夏芽はあの妖精に気に入られてしまった。

話すのに不便だと言って、自分が見えるようになる加護まで与えたと言うのだから疑問の余地はなかった。

「よかったじゃない、妖精さんの加護。」

「そういうの好きだったじゃない」

「止めて!! そういうのは卒業したし、あいつが見えるようになるだけだもん。ちつとも嬉しくないし」

己の黒歴史をほじくり返されて涙目になる夏芽。

そんな彼女を見て千秋はおかしそうに笑った。

「どうせだから、開き直ればいいじゃない。昔みたいに」

「だから昔の話は止めてって!!」

真冬にまでいじられ、夏芽は机に突っ伏すのだった。

「もう、ホント無理なんだって。あいつデリカシーとか無いし」

「妖精にデリカシーを期待してもなあ」

「なんなら、宿題のネタにしてみたら?」

自由研究をさ、妖精観察日記とか題して」

「ああ、いいんじゃないの、それ」

そして彼女はそんな好き勝手言う幼馴染たちを恨めし気にみやる。

「まあ、自由研究って言っても何も考えてなかったけどさ」

「そんな夏芽ちゃんに、とりあえず妖精の生態についてまとめた動画を見繕っておきました」

用意が良いのか、偶々お気に入りに入っていたのか、ノートパソコンを取り出して動画サイトを開いた真冬が夏芽に画面を向けた。

そこには、ネットで何かと話題になっている妖精レプの騒動についてのまとめ動画などが羅列されていた。

そのうちの一つを彼女は再生した。

動画のタイトルは、「ゲーム妖精レプちゃんつよつよ&よわよわまとめ」だった。

.....

.....

.....

場面は定番の落ちモノパズルゲームの最中であるようだった。

レプはドヤ顔で対戦相手を圧倒していた。

「あれあれー、これで世界大会常連とかホントなのー？」

人間ってレベル低い。こんなザコザコでトップクラスになれちゃうんだー、きやは!!」

対戦相手はそれなりに有名なプレイヤーらしいが、レプは相手を鼻歌交じりで歯牙にも掛けていない様子だった。

『マジで迷いが無い……』

『これ、ホントにツールとかじゃないの?』

『カメラの前で操作しとるやん』

『せやかてレプちゃんがツールみたいなもんだし』

『機械やゲームに精通してる妖精』

というように、コメント欄からはこの光景が見慣れたものであることが窺えた。

動画は別のシーンに移り変わる。

人類には攻略不可能、などと言われているシューティングゲームをまさに人類以外がプレイしている場面であった。

「ええー、うっそー、人類の限界ってこれぐらいなのー?」

文明も低レベルなら限界も低レベルなんじゃないの、きやはは!!

肉体に縛られてるってかわいそー。人間に産まれるのかわいそー」

上下左右からゲーム画面を埋め尽くす勢いで放たれるカラフルな弾幕の数々。

避ける隙間は弾と弾のエフェクトに隠れる当たり判定しか無いというのに、レプの操る自機はするすると難なく移動している。

発売して数年、未だクリア人数ゼロの超高難易度のこのゲームをクリアするのは人間ではなかったようであった。

『うそやん……』

『これはさすがに無理だと思ったのに』

『何が起きてるかわからんわ』

『やっぱ根本的に人類と違うんやなって』

『一部から未だ実在が疑われてるだけあるわ』

ゲームのクリア画面を視聴者たちは啞然と見ることにできないようだった。

「はあく、これが人類の作り出せる難しいの限界なのか。」

失望したなあ、くすくす、もっと難しいゲーム無いの?」

などとイキリちらしていたレプであったが。

「はあ!?! あんた達ふざげんなこのやろー!!」

次はこれまたおなじみの某レースゲームだった。

相変わらず人間には真似できない正確な操作をするレプだったが、カミナリが落ちた

り甲羅が飛んできたり、と周囲のプレイヤーから悉く妨害されていた。

「これが、これが人間のやり方かあ!! ちつきしょー!!」

その結果、最下位争いをする段階にまで追いやられたレプは涙目でゴールを目指す。

『フルボッコで草』

『相変わらず妨害有りのゲームはよわよわすなあ』

『技量がツール並みでも頭がクソガキだから……』

『レースゲームは駆け引きも大事だしね』

『レプちゃんリアルタイムアタックとか絶対得意だと思っただけど』

「うわーん、レースゲームなんてキライ、もうやらない!!」

以降、レプは一切レースゲームはしなかったそう。

どこからどう見ても完全に子供だった。

真冬が次の動画をクリックする。

それは作業配信の様子動画だった。

「え? 妖精の国とかって本当にあるのかって?」

レプはカメラの前で自分用の靴を作っているようだった。

その合間にコメントの質問などに答えていた。

「あるにはあるけど、あんたたちが想像しているようなところじゃないよ」

レプの作業工程は革靴の作成に似ていたが、似ているだけだった。

材料は植物の葉が主原料で、花の蜜を絞って接着剤として使用したり、魔法的 engineering に加工が施されたりと、既存の人類の技術とは完全に隔絶していた。

視聴者たちがそこに文明の匂いを感じるのは当然のことだろう。

彼女の放送は今や多くの有識者が考察するに至っているのだから。

『妖精の国って言えば、ティルナノグとかだよな』

『樂園って意味ならアヴァロンもそうだったけ？』

『妖精は洞窟とかに住んでるらしいけど、レプちゃんみてるとな』

『どこまで伝承が正しいんだろうか』

不思議なことに、レプの放送のコメント欄は荒れる時は荒れるが、真面目にレプや妖精について気になるという人間が多かった。

彼女を人類以外の知的生命体と見なしているのか、単純に彼女の反応が面白いからなのかは個々に寄るだろうが。

「私は日本でこの放送してるけど、日本って昔は黄金の国だなんて言われてたんでしょ？」

まあ私の故郷もそんなかんじだよ。あんたたちの文明よりよほど優れてるけど、クソ

つまらない。娯楽とか、無駄なことに関しては無駄に多いだけあって人間の方が上手いかもね」

と言ったことを、靴の成型をしながら語るレプ。

『そんな無駄無駄言わんでも……』

『黄金どころか他の資源にも乏しいしな』

『そっかー、妖精の国もそんな感じなのか……』

『それでも行ってみたいけどなー、レプちゃんの故郷』

そんなコメントの中に、こんな言葉が流れた。

『妖精ってどうしてチェンジリングするの?』

「チェンジリング? ああ、あれ?」

レプは至極普通に世間話をするようにこう言った。

「暇だからに決まってるじゃない」

彼女はニヤツと笑ってカメラに向き直った。

「私たちの故郷にはね、ルールがあるの。」

故郷から出る時は、必ず誰かを連れてこないダメなの。

たまに人間を育ててみたいなんて理由で子供を連れてくるのも居るけど、それは変わ

り者かなあ」

常に流れているコメントの量がぐっと減り、その奥の視聴者がどんな表情をしているのか想像してレプは可笑しそうにしていた。

「あなたたちだつて大好きでしょ？」

自分たちより文明の劣る生物の居る別の世界に行つて、下等生物相手に優越感に浸るの。

——きやはははは!!」

そしてこの日、特に煽つてるわけでもないのにレプの放送は炎上した。

アンチも増えたが、考察は深まったらしく、専用の掲示板では激論が交わされているという。

.....

.....

.....

「この後、あの数百人の体調不良者を出したレプちゃんショック事件とかあつただけど、これはアーカイブとか切り抜き動画とか全部消されちゃってるから見れないんだよね」

「ああー、なんかニュースでやってたね」

「昔のアニメみたいなことしとるのか、この妖精」

家に連れてきた妖精と大差ないレプの言動に呆れる夏芽と千秋だった。

ちなみにその事件とやらは、レプが視聴者に煽られて妖精らしいこととしてみる、と言われた結果、彼女が挑発に乗って幻覚作用のある光みたいなのを見せたことで起こった事件である。

この一件でレプはしばらくアカウント停止を食らった。

飼い主の魔術師も謝る羽目になった。普通に大事件だった。レプは訴えられるものなら訴えてみると言わんばかりの態度だった。大炎上した。

平日の昼間の放送でなかったら、被害者の総数は一桁増えていただろう。

「二応、アーカイブとかの映像には幻覚作用のある効果は無いらしいけど、運営側も対処しないとイケないからね」

どこか直接それを見れなかったのを残念そうにしている真冬だった。
すると。

「くすくす、面白そうね、夏芽!! 私もこの、配信つてのしてみたい!!」

その声に、くわっと目を見開いて夏芽がテーブルの上を睨みつける。

いつの間にか彼女らが連れてきた妖精が一緒になって動画を見ていたのだ。

「ダメ、絶対にダメ!! こればっかりは何があっても!!」

あなたにネットトなんて触らせたらすぐに個人情報駄々洩れになるもん!!」

夏芽はとんでもないと言わんばかりに首を振った。

春美は無言でその様子を見ているが、他の二人は夏芽が急に騒ぎ出したようにしか映らなかつた。

「居るの?」

「居るよッ、一緒に住んでるんだから!!」

そりゃそうか、と納得した千秋だつた。

「夏芽ー、私もやりたいやりたい!!」

同郷の仲間があんな面白そうなことしてるなんて知らなかつたんだもの。

私もたくさんの人間をおちよくって遊びたい!!」

そして駄々をこね始める妖精。

夏芽のイライラは目に見えて上昇していった。

「あー、妖精さん、聞こえる?」

私がネットの使い方を教えてあげるから、妖精さんについて教えてほしいな!!」

「えッ、ほんど?」

「真冬!! ダメだつて!!」

とんでもないことをしようとしている幼馴染に、夏芽は目を剥いて止めに入ったが。「いいんじゃないの、教えても。」

そうしないと、たぶん勝手に覚えて夏芽ちゃんのスマホを弄って好き勝手し始めるのも時間の問題かもよ」

「うぐ……」

春美の提言に、夏芽は最悪の想像をして固まってしまった。

「それに、私も興味あるし。妖精の住む世界についてとか。」

自由研究、いいじゃない。妖精について調べるの。私たち四人でやってみない？

夏芽としても、共生関係は早いうちに築いた方が良いと思うよ」

「私も春美ちゃんに同意見かなあ、この子、出ていく気無いんでしょ？」

座敷童みたいなものだし、仕方ないんじゃないの」

千秋も春美の意見に賛同した。

彼女は座敷童に嫌われると家が衰退するのを知っていたのである。

「……だそうだけど、あんたはどうなの？」

「それくらいのことでもいいの？」

そんなどうでもいいことに興味あるなんて、人間ってホント変なの。

でもあなた達四人と遊べるのなら何でもいいよ。くすくす、ほら」

夏芽が妖精に視線を向けると、彼女はそう言つて手を振るう。

すると、光の粒子が撒かれるように舞つた。

それを見えたのは春美と夏芽だけだったが、すぐに千秋と真冬も周囲に光る鱗粉のようなものが撒かれていることに気づいた。

そして。

「あ、見える、見えるよ夏芽ちゃん!!」

「ホントだ、あの子だ」

真冬と千秋の二人にも、テーブルの上にぺたんと座っている妖精を視認できるようになっていた。

「これで一緒におしゃべりできるでしょ。」

これでこれで、私たちみんな友達だからね!!」

妖精は無邪気に笑つてそう言った。

「大丈夫かなあ」

「大丈夫じゃないから、こうして懐に入つて管理するのよ。」

妖精、だなんて今の私たちは言つてるけど、師匠は小悪魔の方が適切だつて言つてたし」

「悪魔つて」

「女性を形容する小悪魔って意味じゃなくて、小さいスケールの悪魔ってことだからね？」

夏芽ちゃんも聞いたことぐらいあるんじゃない？

妖精は零落した神だとか、そういう伝承。それって伝承に過ぎないけど、その力は誇張じゃないから」

「マジ？」

「マジだよ」

春美は真顔でそう言った。だからあれほど止めた方が良かったのにと言わんばかりである。

その言葉に、夏芽も顔色が悪くなる。

ことここに至って、ようやく夏芽も自分が招き入れてしまった存在について正しく認識したのだ。

「それ、さきについてよ……」

「日本で言ったら妖怪なのよ、好き好んで同居したがる方がおかしいじゃない。」

妖精の分類自体だって、アンシーリーコートって悪性を意味する言葉もあるし」

春美はそつちが聞き分けが無かつたんじゃないか、と語彙力が喪失してる夏芽にそう言った。

「でも、昔から日本人はそう言った存在に対して、崇め奉り恐れ敬って対応してきたでしよ。

この子が妖怪としてあの街で存在していたようにね。

距離感さえ間違わなければ、きっと彼女は恩恵をくれると思うわ。今みたいにね」

「……わかったよ」

夏芽は恩恵がどうというよりも、自分たちに害が及ばないかの方が心配だった。

しかし、仮にも専門家の弟子にそう言われては受け入れざるをえなかった。

「……ああ、こういうことなんだ」

そこでふと、さっそく質問をしている二人を見てボソツと呟いた。

自分や友人たちの安全の為と言ったが、本質は違った。

古来より、妖精は伝説に登場し数々の恩恵と破滅を齎してきた。

自分は、その両方を天秤に乗せて恩恵を求めた。

「これじゃ、夏芽ちゃんのこと言えないな」

これが魔道に足を踏み入れると言うこと。

魔性に魅入られるということなのだ、彼女は自覚してしまった。

そして春美は、以前に己の師に言われたことを思い出していた。

才能が有るのは望海で弟子にしたいと思うが、春美の方がこの道に向いている、と。

ぎこちなく妖精とコミュニケーションを取ろうとする夏芽たちを見て、本当に自分が彼女たちの友人でいいのだろうか、心のどこかで春美は思うのだった。

「きゃあ、やめて!!」

そうしているうちに、春美が男たちに捕まってしまった。

「春美ちゃん!!」

夏芽は悲鳴じみた声を上げるが、銃口を向けられ黙らざるをえなかった。

「そんな、どうしてこんなことに」

「何とかしてあげようか?」

すると、なぜかポケットの中から妖精——コティが顔を出してそう言った。

「コティ!! あなた、学校まで付いてきたの!?!」

「でも、私が居てよかったでしょ?」

にやにやと相変わらず笑ってそんなことを言う妖精だった。

「何とか出来るなら何とかしてよ」

幸い、妖精は一般人には見えない。

夏芽は小声で彼女にそのように訴えたのだが。

「私は何もしないよ。くすくす。」

その代わり、夏芽が何とか出来る力をあげるよ」

「なにそれ、意味分らない……」

「前、一回やってあげたでしょ?」

彼女にそう言われて、夏芽はこんな状況なのに顔が真っ赤になった。

「たしかに、あれをやれば何とかなるかもしれないけど」

「じゃあやってみなよ」

ふわり、と妖精コティの魔法が夏芽を包む。

そしてその手には粗く削られた木のステッキが存在していた。

やるしかない、と夏芽はヤケクソ気味に思った。

「アンチマテリアライズ!!」

そしてそのステッキを掲げ、夏芽は叫んだ。

その瞬間、未知の輝きがステッキから放たれて、夏芽の体が光に包まれた。

一瞬にして、彼女の衣服が制服からカラフルでひらひらな妖精のような羽のついたファンシーな物へと様変わりしていた。

「魔法少女フェアリーサマー、ここに参上!!」

お前たちの横暴もここまでよ!!」

別に名乗る必要もないのに夏芽は女の子のオモチャみたいなカラーリングになったステッキをテロリストたちに向けた。

「ミュータントだ、殺せ!!」

そしてリーダーの男の指示は簡潔で素早かった。

四方八方からの銃撃が、夏芽を襲った。

しかし、常人なら瞬く間にひき肉になるだろう量の銃弾を食らっても、夏芽は無傷だった。

まるで物理法則が彼女に対して機能していないかのようであった。

「夏芽は今、私たちと同じように物質に依存しない上位の概念にシフトしてるのよ。人間どもの火薬の武器なんて効くわけないじゃない」

夏芽の肩に乗って涼しい顔をしているコティがテロリストたちをあざ笑った。

「ほら、銃声にビビってないで反撃したら？」

「あ、うん!!」

あくまで暴力を伴った喧嘩すらししたことのない夏芽は、コティに言われてようやくステッキを振るった。

その軌跡が七色の輝きを伴った波動となり、物理的な衝撃としてテロリストたちを木っ端のように吹っ飛ばした。

「そうそうそんな感じそんな感じ。」

もつといろいろな機能があるから試してみなよ」

「わかった!!」

魔法少女と化した夏芽はコティに言われるがまま、様々なステッキの機能を試した。彼女はそうして、舞台装置に過ぎない人質の教師や生徒たちのことなど忘れて、都合の良い悪人たちを好き放題倒すのだった。

§ § §

「……………まあ、夢だよね」

寝ぼけ眼を擦りながら上半身をベッドから起こして、夏芽は働かない頭でそう呟いた。

自分が魔法少女に変身してから都合よく舞台から排除された邪魔な教師や生徒たち、倒しても倒しても次々と補充されるテロリストたち。

そして夏芽が満足するとそれも終わり、激しい戦闘の間どこにいたのか生徒たちが現れ彼女を称え始めた。

すつごく楽しかったが、現実に戻ると思わず幼稚だなんてニヒルな気持ちになる夏芽だった。

「学校にテロリストがきて華麗に撃退するとか、今時の子も妄想するのかな」

そんなことをぼやきながら、彼女は柵の上にあるミニチュアハウスに目を向けた。

「——コティ!! あんたでしょ、あんな夢を見せたの!!」
「なんで私、怒られてるの?」

不思議そうに、妖精コティはミニチュアハウスに備え付けられているテーブルとイスに座ってお茶を飲んでいた。

「ふう、お茶は人間の文化でも数少ない優れたものよね」

「なんであんな夢見せたのよ!!」

「え、だつて好きなんでしょ?」

コティが手を振るうと、押し入れの扉が独りでに開いてずぞぞぞーっと封印されし夏芽の黒歴史が詰まった段ボールが部屋の中に入ってきた。

「勝手に開けないでよ!!」

しかもそれは封を切られた形跡があり、夏芽は慌ててベッドから飛び出してそれを押し入れに押し込んだ。

「予想通りだったけど、夏芽って根本的に浅ましいのね。」

都合の良い悪役や都合の良い被害者を作って、正義のためにと行って敵を踏みにする。

暴力という解決手段が選択肢に現れた時、それを行使できる人間なのよ、あなた。

くすくす……でも、別にあなただけじゃないわ。人間ってそういう生き物でしょ?」

夏芽がこの妖精と同居することに我慢ならないのは、いちいち彼女が夏芽の神経を逆撫でするようなことを言うからだだった。

「あんたがそういう夢を見せたんでしょ」

「私は夏芽が見たい夢を見せただけよ。」

私は楽しかったわよ、夏芽と一緒に暴れられて」

無然とした態度の夏芽と対照的に、コティは無邪気に笑っていた。

その表情を見て、夏芽は不満と怒りの矛先のやり場を失ってしまった。

一週間以上夏芽は妖精という人外の知的生命体と過ごして、わかったことがあった。

彼女は人間をアリののように観察するような一面を見せるのに、自分の楽しみを優先し時折他者を巻き込む。

高い知性を持ち達観した思考をしているのに、その精神性は幼いというちぐはぐさだった。

「夏芽も楽しかったでしょ？ だって生き生きしてたもの」

「だからって、やめてよね。あんな夢を見せるの。」

どうせ夢の中のことなんだし。空しいだけじゃない」

夏芽はとつくに中二病を卒業していた。高二病に病状が進行しただけかもしれないが。

まあそれは彼女の年齢的に仕方がないことなのかもしれない。

「じゃあ、実際にあつたら同じことするの？」

「しないから!! あんな恥ずかしいこと……」

「でも、その恥ずかしいことを大真面目にしてる人も居るよ？」

コティは夏芽の親にねだつて買ってもらつたタブレット端末をべたべたと小さな手で操作して、とあるニュース記事を開いた。

『我ががヒーロー「テンペスト」!!』

ビル火災を超能力にて一瞬で火を消し止める!?!』

という、海外のニュース記事が和訳され転載されていた。

「その人は、特別じゃない」

世界最高と目されるその超能力者の活躍は、遠い日本でも時折報道されるくらいで夏芽もたまに目にする。

でもそれは、彼に力が有るからだ。

彼は力のある者の責任を果たしているに過ぎない。ノブレスオブリージュというやつだ。

「えー、せつかく他の三人も誘つて春夏秋冬魔法少女戦隊みたいな感じでやってみるのも面白そうだと思つたのに」

などと口を尖らせるコティ。

「私の友達を巻き込まないでよ」

夏芽は朝から額を揉む羽目になった。

こんなことなら、暇つぶしに与えた昔録画した魔法少女物のアニメなんて見せなければよかったと思うのだった。

「せっかく変身アイテム作ったのに。」

もういいや、真冬にあげよーつと」

「いやいや、ちよつと待って!! どういうこと!?!」

「どういふことって、夢でやってみたでしょ?」

あれと同じ変身アイテム、用意しておいたの」

そう言つて、コティはまさしく夢で見た粗削りな木のステッキをどこから取り出した。

「いや、あれつて夢でしょ?」

「夢だけど、あなたの脳の領域を使った、えーとシミュレート? みたいなものだよ。」

それに私たちも、語弊はあるけどあなたたちにとって意志のある夢のような存在だし。

「流石にあそこまで自由自在つてわけにはいかないけど」

そのあまりにも非現実的な言葉に、夏芽もぽかんとしてしまふ。

夢の中の夏芽は、飛んだり跳ねたり魔法で絨毯爆撃し銃弾が効かないとやりたい放題の無双ぶりだった。

それを容易く実行できる道具を、この妖精は何でもないように作ってしまったのだというのだから当然だった。

「あんなにすごいのは、そんなに簡単に作っていいの？」

「え、こんなのただのオモチャじゃない？」

人類にとっては人智を超えた品物も、この妖精にとっては手慰み程度の代物に過ぎないのかもしれない。

「……うー」

夏芽は少し、いやかなり葛藤はあったが、そのステッキを手に取りへし折った。

「あー!! なにするのよ!!」

ぶんすか、と夏芽の暴挙に怒り出すコティ。

「あんたが言ってたことでしょ、暴力が選択肢に在ったらそれで解決するのが人間だつて。」

だから私はこうするの!!」

「そうやって道徳とかモラルとか、自制心とかを美德にするのも傲慢で馬鹿馬鹿しいと

思うけどなあ」

自制心とかとは無縁な妖精が、夏芽の人間らしさを理解できず小首を傾げていた。

「そういうのって、結局は規範に沿うことで自分たちは素晴らしいって言っているのと同じじゃない。

所詮は秩序を保つ為の方便なのに」

「あんた達だって、暴力に頼るのを浅ましいとか思うんじゃないの？」

「別に。暴力って選択肢一辺倒になるから馬鹿だって思ってるだけだよ。

むしろ、自分から暴力って選択肢を排除して自分の可能性を狭める方が愚かだと思うなあ」

あくまでコティは暴力を否定も肯定もしていなかった。

ただ必要な時もあるからわざわざ捨てる意義を見出せない、夏芽はそう感じた。

「じゃあさ、妖精にとつて秩序とか道徳とかって意味のないことなの？」

夏芽はパジャマを脱いで私服を準備しながら問答を続ける。

「うーん、そういうのって、私たちにとつて随分と前にどうでもいいものになったと思うかな」

「どうでもいいって、あんた達つて一応国とかあるんでしょ？」

「そこじゃあみんながみんな、自分勝手に過ごしているっていうの？」

「ほーら、すぐまた自分たちの常識に当てはめる。

肉体に比重が多いとその性能に引つ張られるから可哀そうだよね」

遠回しに、お前馬鹿で可哀そう、と言われてカチンと頭に来た夏芽だった。

だが実際のところ、夢で魔法少女と化した夏芽の体は殆ど彼女ら妖精と同じ存在にシフトしていた。

その時の全能感や万能感、思った通りに体が動いたり思考が異様なほどスムーズだったことを思うと、彼女ら妖精にとって肉体とは重い足枷なのかもしれない。

「ねえ夏芽、あなたは自分たちの文明の最果てが想像できる？」

だが、急に彼女はそんなことを言い出した。

「え？ どういう意味？」

「昨日、テレビでSF映画やってたのを見たけど、そういう未来の文明の姿よ。

あなた達が想像できる、そのすべてが実現したとしたら？」

「例えば、宇宙進出して宇宙船がワープ移動したり、人類誰もが不老不死みたいなの？」

夏芽は己の貧困な想像力で、可能な限りの極限の未来を想像したが、出てきたのはそんなありふれたものだった。

「そうそう。私たちはね、とっくの昔に自分たちの文明の最果てまで来ちゃったの。

その前までは私たちにも肉体があつて、あなた達みたいに国家みたいなのもあつたら

しいけど、今じゃ……時間の概念も違うから、今って言い方は変だけど、私たちはもうとつくに文明の維持なんて止めちゃった。

肉体があつた頃、私たちは地球でいうところ植物に近かつたのかな。人間みたいに個別に意識を必要としなかつたみたい。

私たちがこうなつたのは、国家やそれが維持する利益が個人で出来ることを上回つてしまつたから。

私たちの故郷にあるのは、漫然とした退屈だけだよ」

夏芽はあまり社会とかの成績はよくないので、コテイの話の全てを理解したわけではなかつたが。

「それつてつまり、もう滅ぶことを受け入れてるつてこと？」

「そうかもね。別にどうでもいいことだとおもうけど」

なんとなく、妖精という生き物の精神性が幼い理由が分かつた気がした夏芽だった。

「あ、そうそう。くすくす、それ、折れたくらいじゃ元の機能が失われたりしなから、気が向いたら使つてね」

「……」

コテイが折れたステッキを指差してそう言うものだから、夏芽はなんだかおちよくられたような気分になるのだった。

そして、今回のオチ。その日のお昼。

「アンチマテリアライズ!!」

夏芽は早速、妖精のステッキの力を使う羽目になった。

「はい、それじゃ次の問題に行こうか」

「うぐぐ、屈辱……」

ふりふりふわふわな格好のまま、夏芽は千秋に教えられるまま数学の宿題を解いていた。

「すごい、前に何回説明してもわかってくれなかった公式をこんなにあっさり使いこなしてる」

そして真冬が褒めてるのが貶してるのか分からないような言葉を呟いた。

「きやはははは!!」

そしてそんな彼女を見てコティは大笑い。

「これ、事実上の罰ゲームじゃん!!」

なにが嬉しくてコスプレしながら勉強を教わらないといけないの!!」

「夏芽が覚える気が無いからでしょ!!」

これが終わったら英語もやるからね。記憶力が格段に上がっているうちに詰め込む

わよ」

「社会も苦手だつて言つてたところやろう。休み明けテストは平均80点は行きたいし」

悲鳴を上げる夏芽の意思を無視して、千秋に加え春美も試験問題を吟味している。

「これ変身解除したら知恵熱出るやつじゃ……」

夏芽は涙目になりながら宿題を進めるのだった。

魔性について

その日の小池はとても居心地が悪かった。

前日、彼のスマホにメッセージが入った。

『最近暑いし、海にでも行かない?』

『行きます!!』

彼は即答した。

あまり積極的ではない彼は、自分の彼女に負い目もあつてなるべく誘いは断らないことに決めていた。

それでも、交際相手の水着姿を拝める機会があるなら逃すわけにはいかない、という男子高校生的な欲求ももちろん存在していたが。

そして翌日。彼は後悔した。

目的地の海岸までの最寄りの駅まで新幹線で向かうことになったのだが、それに乗る駅に集合ということで待ち合わせの時間に三十分早く彼は向かった。

そうしてそわそわと待ち人を待っている。

「あれ、小池さん、お早いですね」

集合時間の十五分前、知り合いの女子グループの一人である望海がいつもの四人組と一緒に集合場所に現れたのである。

当然、全員手荷物を持っている。水中ゴーグルや空気のない浮き輪まで。

「あれ、君たちがなんで？」

「聞いてませんか？ 今日みんなで海に行こうって、あの方に誘われたんですけど」

「……聞いてない」

てつきり二人きりだと思っていた小池は、少しだけ落胆した。

「まあ、私たちは少し離れたところで遊ぶからさ」

「そっちの邪魔はしないし」

夏芽と千秋はそんな風に彼に声を掛けた。

「……」

「まあまあ、落ち着いて春美ちゃん」

すごい表情で彼を睨んでいる春海と彼の間に、真冬が入って彼女をなだめていた。

「お待たせ」

そして待ち合わせ時間の五分前、主催者の魔女が嫌そうなカタリナを伴って現れた。

いつもケープを羽織っている魔女さえもその下はすぐに脱げるような薄着なのに、カタリナはいつも通りの修道服だった。

「これは何の催しですか？」

「カタリナさんも聞いてないの？ 海に行くんだよ」

夏芽からそれを聞いて、カタリナはさらに嫌そうな表情になった。

「帰ります」

「えー、カタリナさん帰っちゃうの？」

「水着の用意もありませんしね」

「じゃあさ、向こうに着いてから買えばいいじゃん」

「あ、いいね、それ。カタリナさんは何色の水着がいい？」

夏芽に続いて千秋までわいのわいのとカタリナに迫っていく。

「師匠、なんて言って誘ったんですか？」

「私はみんなで遊びに行こうって言っただけよ。彼女、海が苦手みたいだし。面白そうだったから」

彼女に恨みがましい視線を向けられている魔女は望海とそんな会話を交わしていた。

結局カタリナは周囲の空気やら同調圧力やらに負けて、渋々と付いていく羽目になった。

女子七人に対して男子一人。

居心地の悪さはこれだけではなかった。

道中の新幹線での移動の合間、八人は席を向かい合わせにして四人ずつ座っていたのだが。

「わかってるんですか？ 私はこれでも生前は男だったんですよ」

「今はれつきとした女性じゃない」

「そうですよ!! 考えようによつてはオイシイ体験じゃないですか!!」

小池のいる席は、カタリナと魔女、そしてなぜか真冬が座っていた。

「なぜそんな力説をするんですか……」

「ラノベ界限じゃ、前世は男で今世は女性つてのは定番の展開なんです!!」

精神は前世の男に引つ張られ、でも今は女性の体でつてその戸惑いとか葛藤とかが素

晴らしいんじゃないんですか!!」

「いや、理解できないんですが。」

そんなのが好きな人間が居るんですか？」

「TSとか、精神的BLが嫌いな人が“ここ”“ここ”ハーマメルンに居るわけないでしょう!」

謎の説得力を發揮する真冬だった。

「そうでしょう？　小池さん」

「え、僕に話題を振るの？　いやまあ、確かにTSしたって設定があるのに、男性の頃と全く変わらない振る舞いで、ファッションTSみたいに進む物語とかは分かってないとは思うけど」

小池は真冬におずおずと意見を返した。

この二人、実のところ趣味が似ていたのである。

「そうそう。女性として生きることになって、気になる男性ができてしまつて、ああでも自分の前世は男だから、女性の体は彼の仕草や言動に魅かれてしまつて……じゅるり」
「う、うん、そうだね……」

尤も、彼は真冬ほどの深みに入り込んでいなかったが。

「……理解が追いつきません。それって男色に当たるのですか？」

「ホモもBLも全然違います!!」

「は、はあ……」

「でも気になるわね。あなたは女性として男性に心魅かれたことはあるの？」

ちよつと困惑気味のカタリナと真冬の会話を面白そうに見ていた魔女が問うた。

「あるわけないでしょう、ついこの間まで教会にほぼ閉じこもつて生活していたんですから」

「でも前世では女性経験ぐらいいはあったのでしょ？」

傭兵だったんだから。男所帯じゃ溜まる一方でしょうに」

小池が居心地の悪い理由の一つ、それは女子の会話に混ざれないからではなかった。

彼の彼女が割とぐいぐい話に積極的なのが原因だった。

「えッ、まさかあなた童貞だったの？」

「悪いですか？」

カタリナの反応の悪さから察した魔女が、彼女にしては信じられないといった表情になった。

「傭兵なんて奪い、殺し、犯す、そういう生き物じゃない」

「否定はしませんが、うちの傭兵団はその三つの内の殺し以外は私が許しませんでした。

先代のうち何人かはそれらを許した者も居たそうですが」

「それは、本当に意外ね」

「現代的な倫理観に沿った理由ではありませんがね。」

異端とした相手の、一切合切を焼いただけです。結果論ですよ」

褒められるようなことではない、とカタリナは前世の所業をそう語った。

「おかげで私の代は経営が火の車でしたよ。」

経営者としては副長の方がよっぽど優秀でした。でも彼のやり方ではうちの人間は

付いて来なかつたでしょうね。

うちの所属団員はいくつかの家系で成り立っていたので。

団長はその中で最も神に忠実で強い人間が成るので、私が子孫を残す必要性は感じませんでした」

「傭兵の収入源って略奪だそうね。

そりゃあ、経営は大変だったでしょう」

うんうん、と魔女は頷き。

「生真面目なあなたの事だから、どうせ自慰もしたことないんですよ？

キリスト教徒って確か自慰はダメなはずよね。

信じられないわ、それでどうやって生きていけるのかしら。

私があなただの前世に最後に会った時って、たしか四十歳手前ぐらいでしょう？」

「臆面もなく人前でそんなことを言わないでください!!」

さしものカタリナも彼女の物言いに恥じらいを感じたのか、顔を赤らめて声を荒げてそう言った。

当然、彼女のド直球な物言いに小池も真冬も言葉が出ない。

「産まれてから死ぬまでずっと禁欲って、生きてる意味あるのかしら」

「少なくとも、奔放すぎるよりはずっとましですよ」

特にそれは皮肉でも嫌味でもなかったのだ、カタリナは少しだけ不機嫌になるだけだった。

「あなたも、交際相手を選ぶ権利ぐらいあるんですよ」

そしてその話題を締めくくるように、カタリナは何とも言えない表情になっている小池にそう言ったのだった。

§ § §

「海だー!!」

砂浜に着くやいなや、すぐに夏芽は上着を脱いで海に飛び込んだ。

フリルの付いたビキニ姿の彼女は、その健康的な水着姿を晒しながらばしゃんと水しぶきをまき散らす。

「夏芽ちゃん、こっちの準備手伝ってよ……」

真冬はみんなと一緒に海の家で借りてきたビーチパラソルの下にビニールシートを敷いたり準備をしながら、真っ先に海に飛び込んでしまった幼馴染に呆れていた。

「春美ちゃん、一緒に泳ごうよー!!」

「もう、夏芽ちゃんってば」

水泳部所属の夏芽は生き生きと波打ち際付近を泳ぎながら手を振っていた。仕方がない、と言わんばかりに春美も上着を脱いだ。

ワンピースタイプの水着が露わになるが、活発な印象の無い春美は決して肉付きは悪くなかった。

昔、水泳をやっていたと言うだけあって、海の中で夏芽と競争を始めていた。

「はあ、あの二人は元気ですね」

対して、泳ぐ気が全くない様子の望海はセパレーツの上にパーカーを羽織っていた。

元来小柄であるが活動的な彼女だったが、発育には恵まれなかったのが上着の上でもうでも見て取れる。

「夏芽ちゃんの水場に来るとあんな感じだから」

真冬の水着はビキニであるが、その慎ましやかな胸部を隠すように可愛らしさ優先のフリル面積が多いタイプだった。

その泳ぐのに適さないデザインは、普段はインドア派の彼女の水泳技術の力量を物語っていた。

「二人ともー、周りの人に迷惑はかけないでよね!!」

まったく、日焼け止めぐらい塗ればいいのに」

そしてこのいつもの五人の中で最も女性らしい千秋は、その日本人にしてはそれなり

に肉付きの良い肢体に日焼け止めクリームを塗り始めた。

シンプルなビキニ姿の彼女は、己の発育の良さに自信を持っているのが伝わってくるようだった。

「それにしても……体育の時からなんとなくわかってたけど」

真冬は慣れない水着を着て落ち着かない様子のカタリナを見やる。

近場で水着を購入し、実際に着てみると彼女の印象は全く変わったのである。

「おおきい……」

「世の中理不尽ですよね」

ビニールシートの上に座る二人は、持つ者と持たざる者の差にこの世の無情さを感じ取っていた。

「ほら、あなたも日焼け止め塗りなさいって」

「ちよッ、急に触らないでくださいッ、やめッ、そこは塗る必要ないでしょう!」

普段は修道服に隠されている豊満なブツを強調するような白ビキニを着たカタリナと、今日は黒いラッシュガードを羽織っている魔女が乳繰り合っていた。

小池は意図してそちらを見ないように努めていた。

「私のは、小池君が塗ってくれる?」

後ろからの声に、振り返らず小池は首を真横にブンブンと首を振った。

彼は声だけで彼女の今の格好を想像し、どのような表情でそんな言葉を投げかけているのか想像してしまっていた。

黒いラツシュガードの下はシンプルなバンドウビキニだけで、その抜群なプロポーションを上着だけで隠しきるのは不可能だった。

カタリナのように豊満な乳房があるわけでも、千秋のように全体的に肉付きが良いわけでもないのに、すらりとした日本人らしいすつきりとしたスタイルに当人の仕草も相まって色気だけなら断トツだった。

決して他の六人が色気とは無縁なだけとは言つてはいけない。

そんな彼女をまともに直視したら体中が大変なことになると確信する小池だった。

「千秋さん、昼間には混むと思うので今のうちに昼食を確保しておきませんか？」

結局自分で日焼け止めクリームを塗り終えたカタリナがそう言った。

彼女は時折他の観光客の視線を感じて居心地が悪そうにしている。

「そうですね、あそこの海の家はテイクアウトもしてくれるみたいだし。

定番の粉モノでいいわよね。一応こっちで食べるだろうから、おにぎりを少し持ってきたけど」

千秋はバスケットを見て、他の面々の反応を窺う。

「あ、自分運ぶの手伝います!!」

「ああ、小池君助かるわ」

とにかく自分の彼女にからかわれている状況に耐えかねた小池が手を挙げた。

そうして三人は海の家の方へと歩いて行ってしまった。

「真冬さん、そろそろ大丈夫じゃないですか?」

「もうそろそろぱんぱんになったかな?」

流石に海に来たのに水に入らずに帰るのもあれなので、空気入れで浮き輪に空気を入れていた二人がそれを持って海辺に歩いていく。

「あら、私だけ取り残されてしまったわ」

「気づけば、ビーチパラソルの下には魔女一人だけだった。」

「まあ、ちよつと期待しながら待つのもいいかしら」

そんなことを言いながら、彼女は借りてきた折り畳み式のビーチベッドに寝そべった。

サングラスでも掛ければ完璧に絵になる光景だった。

そして数分も待つことなく。

「ねえ君、もしかして一人?」

疑似餌に食いつく魚のように、数人の男たちが声を掛けてきた。

その姿を見て、くすりと魔女は笑みを深めた。

.....

.....

.....

「あれ、誰もいない」

昼食を調達しに行った三人が戻ってくると、そこには誰もいなかった。

「もう、荷物を見てる人ぐらい居てもいいのに。不用心なだから」

千秋は少し怒気を交えながら、テーブルに買ってきた焼きそばやお好み焼き等の容器を乗せる。

「.....おや」

「どうかしたんですか?」

飲み物を両手に四つ抱えた小池が、誰がどこにいるか把握しようとする周囲を見渡していたカタリナに目を向けた。が、胸部に目が行ってしまい慌てて視線をずらした。

「あれですよ」

呆れたようなカタリナの視線を追うと、水着姿の魔女が日焼けした屈強そうな男たち

と一緒に歩いている姿があった。

「うわあ、知らないって可哀そう」

千秋はその様子を見て、憐れむようにそう呟いた。

男はオオカミと言うが、狩ろうとする対象はあまりにも悪かった。

そこでふと、唾然としている小池と、彼女の視線が合った。

どういふ含みがあるのか、くすり、と魔女は妖艶に笑った。

「待ちなさい」

自然と体が動いた小池の肩を、カタリナが手を置いて止めた。

「放っておきなさい、どうせ徒労に終わります」

「でも、行かないと!!」

少なくとも、小池にとって彼女と遊びに来てその相手がナンパされて連れていかれるのを黙ってみているのは、なんだかすごく嫌だった。

「そうですか」

カタリナはそれ以上は何も言わなかった。

「あ、あの!!」

小池は精一杯勇気を振り絞って、駐車場に歩いていこうとしている魔女たちに声を掛けた。

「あら小池君、どうして来たの？」

「えッ」

彼女は実に意外な物を見るような目で、彼を見返した。

「え、こいつ誰？」

「この子は先に俺たちがナンパしたんだけど」

「君の知り合いなの？」

彼女を取り巻く男たちが次々と嫌悪の視線を小池に向けた。

「ええ彼は私の彼氏なの」

「おいおい、彼氏と来てるのに俺たちの誘いに乗ったのかよ!!」

「何それ、笑えるんだけど!!」

男たちの嘲笑が、遠ざかっていく。

表現しようのない悔しさと悲しさで、彼は立ち尽くすことしかできなかった。

「蛮勇と勇氣は違いますよ。」

……なるほど、そういうわけですか」

様々な想像でどうしてこうなったか自問自答している彼の背に、カタリナが声を掛けた。
た。

そして一人納得したように頷くと、小池の手を引いて自分たちのスペースに戻るこ

にした。

「ぎゃ——!! サメだ——!!」

「きやはははは!! 金髪巨乳の女はどこだー!!」

その後、コツソリ付いて来ていた妖精コティがどこからかサメを手懐けて水陸空中を遊泳可能にするという魔法を掛けてビーチに襲来するという騒ぎがあったが、特に問題なく事態は終息した。

「はあ……」

そんな騒ぎが終わっても、小池は沈んだままだった。

「こんのクソガキ!! あんたのせいで今日は遊泳禁止になっちゃったじゃない!!」

「あはははは!! あっかんべー、こっちおいでー!!」

B級映画から出てきたようなサメを追い返すのに疲れ果てた面々だったが、夏芽だけは怒り心頭でコティを追い回していた。

「小池さん、どうしたんですか?」

「あまり触れないであげて」

昼食を食べるしかビーチでやる事が無くなった面々は千秋たちが買ってきた粉モ

ノを食べ始めた。

「ところで、師匠は？」

「そつちも触れないであげて」

春美の疑問も千秋の気遣いによって封殺された。

「みんなお待たせ、何だか騒ぎがあつたみたいね」

「あ、師匠。どこいつてたんですか？」

すると、ひよつこりと魔女が戻ってきた。

望海が彼女にそう尋ねると。

「せつかくビーチに来たんだから、ナンパがどんなものか体験してみたくてちよつと誘われてみたの」

「うわ、小池君が居るのにひどい」

「勿論断るつもりだったけど、二オイがしたのよ」

「二オイ、ですか？」

特に批難するでもなく、望海は師に尋ねた。

「ええ、薬物の二オイよ」

その魔女の言葉に、カタリナ以外の全員がギョツとした。

「彼ら、薬物を使って女の子に酷いことをしてるみたいだったし、ちよつと懲らしめてお

いたわ。

くすくす、でもあんな粗雑な安物で私をどうにかしようとか片腹痛いとはこのことね」

今頃警察署かしら、と魔女は声も無く笑っていた。

「ええと、じゃあ」

「もしかして小池君、私があいつら程度にどうにかされるとでも思ったのかしら。

あなたは私の為に危ない真似をしなくてもいいのよ。そんなこと、求めてないんだから」

希望を持って顔を上げる小池に、魔女は優しくそう言った。

「そういう問題では無いと思いますが」

この中で唯一男心を理解できるカタリナは溜息とともに首を振った。

「悪女だなあ、魔女さんってば」

「ホント、小池君はこれからも大変そう」

千秋と真冬はそんな二人を見てそのように思うのであった。

「それで、この後どうするのかしら？」

魔女の問いかけに、中止となった海水浴の代わりに午後の予定を話し合い始める面々であった。

逆転について

その日の警視庁の物々しきは、近くの歩道を歩く通行人にすら感じ取れるものであったと言われている。

その日に行われるのは、魔術の眠りから覚めた副長の取り調べであった。

室内ということもあり、どこぞの格闘マンガの逸話のように武術の達人を警戒して放水車まで用意するような事まではしなかったが、取調室の外は機動隊がシールドと特殊警棒を装備して待機しているほどだった。

他にもテザーガンを装備した制服警官が付近を警戒。

それらの警戒が、いかに警察が魔術を恐れているのかがわかるといえるものだった。そして案の定。

ドカン!! という爆音が警視庁内に鳴り響いた。

「ほら、言わんこつちやない」

異能係の応接室でテーブルに肘を突いて顎を手に乗せてつまらなさそうにしていた化粧屋がそう呟いた。

「調停者を待っててあれほど言ったってのに。」

キャリアの連中つてのは学習能力が無いのかね。私の忠告を悉く無視してやらかしてんのに」

「仕方なからう、メンツというのはいつだつて大事だ」

彼女と同じく蚊帳の外に置かれていたティフォンも皮肉気に笑った。

「それで、貴殿はどうするのだ。化粧屋」

「ま、知らない顔も居ないわけでもなし、ちよつくらお節介でもしてくるわ」

「そうだな。私も他人というにはここで知り合が増えすぎた」

そんなこんなで、二人は長椅子から立ち上がつて、異能係の扉を開け、騒ぎの渦中へと歩いていくのだった。

§ § §

その日、露骨に外回りの仕事をさせられていた伊藤刑事が警視庁に戻ってきたのは、すべてが終わつた後だった。

彼は庁内の廊下や壁が蛇が這つたように黒く焦げていたり、担架で運ばれる怪我人の姿などを苦々しく横目で通り過ぎながら異能係へと辿り着いた。

「ああ、お帰りなさい、先輩。」

今回ばかりは身内に足を引つ張られて幸運でしたね」

やや憔悴した様子の妻鳥が帰ってきた先輩にそう言い放った。

「奴はやはり脱走を試みたのか？」

「それはもう。堂々と正面から力づくで」

「……かなり人員を割いたらしいが？」

伊藤刑事の問いに、妻鳥は肩を竦めるばかりだった。

「それより、なんだ、この臭いは」

犯人の脱走劇の顛末より先に、彼は室内に充満する臭気について尋ねた。

「奥を見ればわかりますよ」

妻鳥に促されて、伊藤刑事は奥にある荷物置き場のドアを開けた。

「——ッ!? 化粧屋!」

そこにあつたのは、焼け焦げた化粧屋の体だった。

上半身の半分以上が炭化し、ブルーシートの上に寝かされたそれをティフォンがどうにか修復を試みているようであった。

「落ち着け、刑事殿。」

「これは化粧屋の本体では無いと言ったであろう」

「あ、ああ。そうだった、な……」

そこで彼は、違和感に気づいた。

「なあ、ティフォン。なんかお前、縮んでいないか？」

成人男性の外見をしている彼が、中学生ぐらいの身長へと縮んでいたのである。

「当然であろう、我が肉体の構成するいくつかの体組織を怪我人に移植した。

その分、この身の体積が減るのは道理であろうさ」

「そ、そうか」

まるで自分の人体を切り貼りするかのような所業に、伊藤刑事も生返事しか返せなかった。

すると、その時、がさつと音がして、彼はそちらに目を向けた。

積み重なった段ボールの影に、見知らぬ少女が隠れて二人の様子を窺っていたのが見えた。

「なあ、ティフォン。誰だ彼女は。」

なんで部外者があんなところにいるんだ」

伊藤刑事がそう言うと、ティフォンは洗面を作つてその少女の方に目を向けた。

「いや、貴殿が分からぬのも無理はない。

……よく聞かがいい、あれはな——化粧屋だ」

「——はあ？」

ティフオンの言葉に、思わず床の半焼死体と奥の少女を見比べる。

「何があつたんだ？」

「順を追つて話そう」

「ほらほら、どいて」

二人は機動隊員で埋め尽くされた廊下を縫うように進んで、最前線に躍り出た。

「うわ、これは酷い」

化粧屋の言葉の通りに、隊員たちの壁を越えた先には副長が居り、その周囲には火傷に呻く警察職員の姿が何人も転がっていた。

「どうする?..」

「こうするほか、他にあるまい」

ティフオンの判断は迅速で的確だった。

「ほう」

脱走した副長も、腕にまとわりつく炎の蛇を弄びながら意外そうにその行動に見やる。

ティフオンは彼と戦うのではなく、その周囲の怪我人の元へと駆け寄った。

「……あー、くそ。どうするあんたら。」

「ここで怪我人を巻き込んで戦うか？」

化粧屋は髪の毛をがしがしと掻きながら、副長を包囲している機動隊員たちに声を掛けた。

「道を開けろ!!」 その炎は旧約聖書を読んだことがあるものなら知っている者も居よう

!!
不平を言ったイスラエル人たちを虐殺する為に神が遣わした毒蛇を模したものだぞ

!!
その殺傷性はこの場の全員を殺しても余りある!!」

ティフオンの怒声に、あくまで一般人に過ぎない機動隊員たちも後ずさる。

それが嘘ではないことは彼らもわかっていた。だからこそ、膠着状態が生まれたのだから。

「ああ、一匹につき十人殺すってあれだろ? モーゼの青銅の蛇の逸話だ。

あの炎に焼かれたら自然治癒は不可能だろうな。一生火傷を負ったままになる。

参ったな、この狭い廊下でやりあうのは無謀だぞ」

ここでやりあうのは分が悪すぎる、と化粧屋も判断したようだった。

ティフオンもそう判断したからこそ、戦うのではなく怪我人を優先した。

「くッ、こちら側は退却し、他の職員の退避を行うぞ!!」

そちら側は対象が移動するまで待機、その後怪我人の救護を優先しろ!!」
機動隊の隊長が、苦渋の表情でそう命じた。

その命令に、他の隊員たちも従い、悔しそうにしながらも波が引くように機動隊の壁が引いていく。

「おい、待てよ」

結局、副長は悠々と警視庁を正面玄関から出て行つた。

それを引き留めるのは、化粧屋。

「あんたをここで追い返しちや、メンツが立たない人間が居る。」

それは私もそうだし、他の連中もそうだ」

彼が出た玄関口から化粧屋だけでなく拳銃を構えた警官が無数に現れる。

犯人の脱走に、怪我人の発生、その事態にようやく警察上層部も事態を重く見て発砲の許可まで出てしまった。

「おい、あいつには連絡したのかよ。言っとくけど、私は弱いからな」

「今、大至急でこちらに向かつてもらってます」

「じゃあ足止めに徹するぞ。野郎の魔術、殺し合いに特化してやがる。私は技術職なんだぞ」

近くの機動隊員に確認を取った化粧屋が不平を漏らした。

それから、一対多数の壮絶な戦いが始まった。

戦いの口火を切ったのは化粧屋が取り出した犬笛の音だった。

周囲が瘴気に包まれ、悪霊と化した犬の亡霊を使役して襲い掛からせたのである。

質量さえ持つほどの怨念と怒りで狂暴さを増した獰猛な獣を、副長はあつさりと炎の蛇で蹴散らした。

次に化粧屋が取り出したのは、ダイヤモンドの指輪だった。

ただのダイヤモンドではなく、遺灰を用いた人工ダイヤモンドである。

それが怪しく輝き、それが嵌められた指先が副長に向けられた。

指を差した相手を呪う、ポピュラーな呪術だった。

だが副長は聖句を唱えて呪いを振り払う。

呪いは来ることが分かかっていれば大した脅威ではないのである。

それは化粧屋もわかっていた。だから完全に時間稼ぎだった。

その後も化粧屋は健闘した。

恐竜の牙を巻いて骸骨の戦士を生み出して戦わせたり、手当たり次第に靈魂を喚起し

副長にぶつけた。

「もうネタ切れか？」

実に余裕そうに、副長は化粧屋の足掻きを嘲笑った。

キリスト教の逸話には何人も魔術師が登場し、聖者と張り合い命を失うが、この光景はその焼き回しに過ぎなかった。

ただ一つ違うことがあるとすれば、周囲から勝利を願われているのは魔術師側であることだった。

その場にいる警官の誰もが、自分の持つ拳銃の引き金を引かずに済むことを祈っていた。

自衛隊が死ぬまで撃ち返すな、となんて言われているように、この国の銃弾の一発はそれだけ重いのだ。それこそ、彼らが今こうして正当な理由で発砲したとしても、将来の昇進の道が無くなるくらいには。

「へへッ、参ったねえ」

犬笛を唾えたまま、化粧屋は肩を竦めた。

自己申告の通り、彼女は弱かった。とは、その場の誰も思わないだろう。

どちらかというと、目の前の副長が強すぎた。

彼は武器や数多の触媒を失った状態で、ほぼ万全の状態の化粧屋と相対している。

単純に相性が悪すぎた。相手は異端の魔術に対処する方法を熟知しているのだから。

「……ああ、思い出した。

お前、あの総長の横にいたいけ好かないガキじゃねえか」

ふと何を思ったのか、化粧屋がそう眩いた直後だった。

じゅつ、彼女の上半身を灼熱の毒蛇が這いあがった。

どさり、と焼け焦げた化粧屋の体がコンクリートの地面に倒れた。

「お遊びはこれまでだ。それで、お前たちはどうするんだ？」

副長が、恐怖に震えながらも銃を構えている機動隊員たちに言葉を投げかけた。

いよいよもって、彼らが人間に対して銃を使う覚悟を決めた時だった。

「ま、まだ、まだだ!!」

それは死に瀕し、覚醒して敵と立ち向かう勇者の言葉にしては、あまりにも震えていて情けない声だった。

髪の毛はぼさぼさでのびっ放し、目には隈、だぼだぼのTシャツに下はジャージ。

そんな場違いな少女が、さささつとどこからともなく現れて、物陰から強がっていた。

「き、君、そこでなにしている、危ないぞ!!」

周囲で見守ることしか出来ない警官の一人が、そのように声かけたが。

「は、は、はは、これは傑作だ、本体ではないとは思ったが、まさか、そうしてのこのこと姿を現す負け犬が居るとは!!」

彼女を見て察した副長は可笑しくてたまらないといった様子で笑ったが。

「は、はあ？ 私がいつ負けたわけ？ 審判でもいたの？」

いつでも逃げれるくせに調子こいていつまでも遊んでるくせになにイキってんのお前これだから自意識過剰な奴は嫌なんだよもしかしてお前気づいてないかもだけどもめっちゃダサいんだけどつからどう見ても弱い者いじめしてるにしか見えないんだけど自分を客観視できないと人間あそこまで痛々しくなるんだねあーあーこうはなりたくないわーないわーこうまで自分に酔えるとかいつそ清々しいよねホントある意味羨ましいわその精神ちよつと分けてくれないかなあッやつば要らないわあんたのダサさまで移ったら最悪だもんねふひひ私は今のままで十分だし」

「なにをぶつぶつと言っている？」

少女の渾身の煽り文句は、残念ながら副長には届かなかつた。

単純に声量が足りず、顔も逸らして視線もあらぬ方向に向いていた。

「いずれにしても、いい加減に死ね」

それは彼女が異端だからか、それとも同業者は邪魔だからなのか。

副長が燃え盛る毒蛇を差し向けようとした、その瞬間だった。

——にやり、と少女が笑った。勝利を確信した笑みだった。

その意味を理解するよりも早く、副長はコンクリートの地面に巨大な質量を持った何

かに叩きつけられていた。

「なッ、お前は……」

副長は自身を一撃でほぼ戦闘不能に陥らせた何者かを見上げ、絶句した。

それは、巨大な獣だった。

黒い毛並みの牛並みの巨体を持つ、それは犬だった。

しかし、それをただの犬と言うには二つほど首が多かったが。

「ケロベロス、だど!?!」

地獄の番犬の左の首が、副長の腕に噛みついた。

そして獲物の抵抗を徹底的に挫くように、もう一度コンクリートに叩きつける。

距離が空き反射的に副長も炎の蛇で対抗したが、地獄の番犬はその三つの口から火球を吐き出して相殺、いや火力で競り勝った。

まるで因果応報とでもいうように、絶叫を上げて副長の体が飛来した炎に包まれた。

あれほどの強さを誇った副長が、この神話にしか登場しない怪物相手に手も足も出なかった。

人間は大型犬と対峙した時、まず勝つのは難しいと言われている。

それが更なる巨体を持ち、隙を見せるのを待つ賢さと判断力、そして接近を悟らせぬ俊敏さを併せ持つ、キマイラのように不純物が一切無いが故にティフォンが陸上用タイ

プで傑作だと太鼓判を押す戦闘用の生物兵器がそれだった。

そして何より、ティフオンが副長を通すことを許した最大の理由だった。これに初見で、いや二度目以降だろうが対策をしようがこれに勝てる相手などまず居ない、と。

「ケロちゃん、ちよつとやりすぎ!!」

「犬養!! そいつを下がらせてくれ!! あと誰かバケツに水を!!」

「そこに水道とホースがあるぞ!!」

ケロベロス担当の警察犬係の若い女性警官が、完全に無力化したと判断して腰を下ろすケロベロスに駆け寄った。

周囲の機動隊員たちも、副長の救助に動き出す。

こうして、警視庁を震撼させた脱走劇は幕を閉じたのである。

§ § §

「そんなことになっていたのか……」

ティフオンの説明を受けた伊藤刑事はその警視庁の歴史に残るような大事件にどのような表情になればいいのか分からなかった。

「本来なら我が息子を使う予定は無かったそうだが、化粧屋が咄嗟の機転で我が子を呼

んだのだ。

犬神の呪術に使う犬笛を、普通に使って最終的に勝利できたのはある意味皮肉か」

と語るティフォンに対して、伊藤刑事はそれだけ化粧屋が修羅場を潜ってきたんだろ
うな、と思った。

「ああ、それで、化粧屋？」

伊藤刑事が物陰の少女に声を掛けると、彼女はびくりと震えて挙動不審気味に顔を逸
らした。

「その、えと、あ、はじ……まして」

彼女は俯きながらも、ぼそぼそとかろうじてそれだけ聞き取れる言葉を呟いた。

「……………マジか」

「マジだ」

伊藤刑事とティフォンはこの時通じ合っていた。

これがあの化粧屋の中身なのか、と。

「いや、私も基本的に我々は陰キヤと言ったが、まさか化粧屋がこれほどとは」

「うーむ」

「化粧屋の奴、たぶん奴が脱走した際に止めきれない場合に備えて本体が近くで待機し
ていたらしい」

彼の言葉に、伊藤刑事も術者と端末を見比べる。

どう見ても本体である術者が出張ってきたところで、普段の端末より役に立つとは思えなかったのである。

彼女はどこからどう見ても、引きこもりのコミュ障だった。多分その認識は間違えていないだろう。

むしろ、この場に妻鳥が居れば、想像以上に想像通りだった、とても言うだろう。

「まあ、その、なんだ。一人のおかげで無事だった者も多いんだろう。」

上はたぶん表立って礼を言えないだろうから、代表して俺から感謝をしておくよ。後で何か美味しいものでも食いに行こう」

これだけ貢献して、さすがに上も謝礼金を渡らないだろう、と伊藤刑事は考えていた。警察の協力者に対する謝礼は基本的に捜査官の自費であることが多いが、今回ばかりはそうはならないだろう。

尤も、その金額が二人の尽力に見合うだけ出るとは彼は思わなかったが、少なくとも気持ちちは大事だと彼は思った。

「私は嬉しいが……」

ティフォンは化粧屋を見やる。

彼女は俯いたまま、ふるふるすると首を横に振った。

「あー、じゃあ特上寿司でも出前してもらおうか」

「それがよかろう」

二人がそのように結論を出そうとすると。

「……………ツ、そ……………、……………なま……………れない」

殆ど掠れたような声が化粧屋から発せられた。

「生ものは食べれないそうだ」

「……………」

鋭敏な聴覚を持つティフォンが聞き取ってそう伝えると、流石に伊藤刑事も反応に困った。

「お前、前にファミレスで奢ってやったけど、よく考えたら食べてたのこっちだよな。

それでお前って腹が膨れるのか？」

「……………」

「味は分かるそうだ」

今度は完全に伊藤刑事には何も聞き取れなかった。

と言うよりも、会話をするほどに化粧屋の音量が絞られ、単語が減って行っていた。

「化粧屋、お前普段どうしているんだ？」

親は？　ちゃんと食ってるのか？」

流石にここまで重度のコミュ障だとは思わず、心配になってしまった伊藤刑事だった。

「も、むりッ」

そしてそれは触れられなくなかったのか、あるいはもう限界なのだか。

化粧屋は膝を抱えて蹲り、物陰に隠れてしまった。

「わかった、もう詮索はしないよ」

だれか少年課を呼んできてくれ、と思ったがさすがにそれは口にしなかった。

「ティフォン、悪いがそれを早く直してやってくれ」

このままでは会話にならないと悟り、伊藤刑事は溜息と共にそう言うしかなかった。

「これでもかなり修復に手伝って貰えたのだが、刑事殿が戻ってくる気配を感じたのかあなつてしまったのだ。

とりあえず、今日のところは会話機能だけでも修復させるつもりだ。

奴もあの大怪我の上に、勇者殿も到着したから心配は無いと思うが」

これは錬金術師殿にも協力願うか、とぼやくくらいには化粧屋の端末は高性能だったらしく、ティフォンは手持ちで修復は難しいと判断していた。

そんな二人を背に、伊藤刑事は物置き部屋を出た。

警視庁が未だせわしなく右往左往していても、彼の仕事はいつも通りにあるのだか

ら。

とりあえず、化粧屋には後で菓子折りでも買つてこようと思う彼だった。

迫害について

副長の警視庁脱走未遂事件は、その日の夕方には全国で知らない者は殆どいないほどの騒ぎとなった。

夜には記者会見を開き、警察は発生した被害などを世間に公表。

協力者やケロベロスの活躍もあって、無事鎮圧したとだけ説明した。

詳しく報告を求める報道陣に対して、詳しくは犯人の取り調べの後にと言ってはぐらかすように記者会見を終える警察サイド。

数多の思惑や憶測が飛び交う中で、その日は終わりを告げることとなる。

その数々の思惑の一つが、とある教会にて静かに始まろうとしていた。

その日の夕方にカタリナは自室で学校から出された宿題をしていた。

そんな彼女の元に、一本の電話が入った。

「もしもし、カタリナです。何か用ですか？」

携帯電話の着信音が鳴り、通話ボタンを押して耳に当て、相手を確認することもなく彼女は言った。

『私よ、ニュースは見た?』

「ニュースですか、なぜです?」

相手は魔女だった。

『その様子じゃあ、まだのようね。』

なら落ち着いたまま、テレビでも何でもいいからニュースを見なさい。電話は繋げたままにしておいて』

カタリナは少し困惑したまま、自室を出た。

この教会にテレビなんてものは無かった。

神父の部屋に、業務用の古いパソコンがあるくらいだ。

カタリナは彼に言ってそれを借りて、ウェブニュースのページを開いた。

そしてその日の速報を見て、目を見開く。

記事の見出しは、こうだった。

『連続ツアールアト事件の犯人、警視庁内にて逃走劇を敢行!』

カタリナは即座にその記事を読んで、とりあえず犯人が鎮圧されたことに安堵した。

「知らせてくれて、ありがとうございます」

『用件はそれだけじゃないわ。この後掛かってくる電話に出てちょうだい』

魔女は言いたいことだけを言って、通話を切った。

それに対して何か言うよりも早く、再びカタリナの携帯電話に着信音が鳴る。今度は画面の通話相手を確認した。

登録していない番号だったが、魔女に言われるがままに電話に出た。

「はい、もしもし」

『私です。魔術師です』

§ § §

副長に対する取り調べは、警察病院の病室にて行われることとなった。

彼が脱走を試みて重体になり、その手術が終わった翌日という異例の早さだった。

そんな性急な取り調べを行うこととなった理由は、彼の回復を待つのはあまりにも危険だという上層部の判断だった。

その上、今は世論やマスコミにせっつかれ、事件の全容の解明を求む声も大きかった。なにせ警視庁内で起こった前代未聞の重大事件なのだ。

お偉いさんの首がいくつもすげ変わりが起きていて、その引継ぎに誰もが苦勞している。

結局、彼の取り調べを行うのは伊藤刑事に押し付けられる形になった。

調停人である魔術師の助言を受けて、警察関係者は彼一人のみ。

その周囲を魔術師や化粧屋やティフォンで固めるべきという普通ならありえない状況も、この混乱の中では警察側は領かぎるを得なかった。

「それでは、取り調べを始める。」

「そちらの名前は——」

「刑事さん、この場では彼を副長、と」

「ああ、そうだな」

調停者たる魔術師が遮り、本人の前で名前を呼ぶのは呪術的な理由と思い至り伊藤刑事は頷く。

「ふん、昨日も言ったが、いったい何を聞き出そうって言うんだ」

副長の姿は、傍から見れば痛々しい。

ベツトに横たわった彼は、全身に包帯が撒かれたミイラ男さながらだった。

骨折した足は吊り下げられ、露出しているのは口元と目元だけという有様だ。

その上で、手足をベルトで拘束されている徹底ぶりだった。

「まず、ツァーラアト事件ついて。」

容疑者十一名に対し、呪術を教えて犯行を促したのは間違いないんだな？」

「そうさ。そんなこと確認して何になるんだと言っている」

「確認は大事だ。取り調べとはそういうものだ」

副長の舐めた態度に伊藤刑事も慣れたようにそう答えた。

「次は動機だ。なぜそのようなことを行つたんだ？」

「ではどんな理由なら納得するんだ。理不尽な動機なんてこの世にありふれている。

俺が呪いを教えた連中もそうだったさ。逆恨みの奴も居たし、的外れな恨みを抱いているのも居た。それはもう知つているはずだ」

まるで煙に巻くようなその物言いに、伊藤刑事も眉一つ動かさない。

「どんな理由であろうとも、だ。それとも、理由もなくあんな犯行に及んだと言うのか？」

「確かに、理由はある。だがそれを言つたところでどうなる。

私の犯した罪が軽くなるだけでも？　そもそも、私が大人しく刑に服するだけでも？」

鼻で笑う副長は、すつと片手を上げた。

ベルトで拘束されているはずの彼の動きに、伊藤刑事も目を見開く。

「アレクサンドリアのカタリナの逸話には、車輪で拷問されそうになつた彼女がそれに触れた時、独りでにそれが壊れたという話がある。

そいつを拘束するのは事実上不可能つてところだろうな」

病室の端で、化粧屋がそう説明した。

彼女はティフォンの手に持たれていた。体の修復が間に合わず、首だけの状態だったが。

「今の私がこうであるのも、一時的なものに過ぎない。」

それとも私を処刑するか？ 日本の処刑方法は絞首だったな。つまりは首の拘束だ。それで私を殺せると良いな」

小馬鹿にしたように副長は煽る。

そこに強がりや虚勢は無かった。自分が強者である自負がそこにあつた。

「こいつ、ふざけやがって」

どこまでも非協力的な態度に、伊藤刑事も頭に來ていた。

だがその時、彼の持つ携帯電話に着信音が鳴る。

「病院ですよ。それに取り調べのための時間は十五分だけと医者に言われているんです。電源を切ってください」

「ああ」

やけに強い口調で魔術師に促され、伊藤刑事も違和感を覚えながらも頷いた。「切り口を変えようぜ、伊藤ちゃん。」

おい、ツアーラートには触媒としてハンセン病の病原体が必要なはずだ。

それをどこで調達したんだ？」

化粧屋が専門家らしい切り口で尋ねた。

「ふッ、ここだよ」

副長は笑った。そして自分の頭を指差す。

「どういうことだ？」

「伊藤ちゃん、こいつが触媒もなしにどうして暴れられたかわかるか？」

「いや」

「我々は一つの魔術を極めると、触媒や呪文などを必要としなくなるのだ。勿論限りはあるがな」

「おいおい初耳だぞ、それ」

ティフォンの補足情報に、伊藤刑事も驚愕を隠し切れない様子だった。

だが同時に納得もしていた。魔術とはもっと面倒でコストが掛かるのに、化粧屋を始めとした面々は息をするように魔術を行使する。

「説明は難しいんだが、魔術を行使する感覚ってのが分かると、自分の魔力だけである程度の過程を省略できるんだなこれが」

「自転車で走れるようになる工程のようなものですよ。」

最初は一人で走れなくても、補助具をつけて徐々に走れるようになっていき、やがて一人で走れるようになる。

最終的に補助具は必要なくなるのです」

化粧屋と魔術師の説明は、まるで魔術が術者の体の一部として定着していくかのよう
な物言いであった。

或いは、魔術そのものが人間の機能として拡張されると表現すべきか。

「そうだ、ツァーラアトは私のかつての記憶から引き出した呪いだ。

それを呪符として道具に移すことなど、容易いことだ」

それが、副長の犯行の手段だった。

「今生はそうなのかもな。じゃあ、前世ではどうだったんだ？」

「なに？」

「前世でその呪いを習熟する過程で、病原体は必要だったはずだ。

それはどこで手に入れたんだ？」

「おい、それは今関係のない話だろう」

「いえ、大事なことです。動機が知りたいんでしよう？」

化粧屋の問いの内容に伊藤刑事を咎めたが、魔術師はそのように口を出した。

「どうなんだ？ ええ？」

「かつて、同じ時代を生きた貴様が問うのか、化粧屋」

「教えてくれよ」

「ふん、ハンセン病の病原などあの時代、幾らでも手に入ったろう」

「そうだったな。特にお前みたいなユダヤ系人間には有り触れたモノだったのかもな」

化粧屋がその言葉を言った直後だった。

大怪我しているにもかかわらず、副長が急に体を起こした。

「それ以上言ってみろ、後悔することになるぞ」

それは、明確な殺意にあふれた言葉だった。

「あなたの前世の知り合いから聞きましたよ。」

あなたはユダヤ人の隔離施設^{ゲット}出身だと」

彼の殺意に満ちた視線が、化粧屋から言葉を引き継いだ魔術師に向けられる。

「総長から、あの人から聞いたのか!!」

「ええ、あなたは彼が任務で焼いたゲットーの生き残りであり、才能を見込んで弟子にしたのだと。」

「一つ聞かせてください、あなたは彼を恨まなかったのですか?」

「恨む? 馬鹿なことを!!」

あの人はあの掃き溜めから私を救ってくれたのだ!!」

意外なことに、副長の言葉には嘘は無かった。

彼はかつての上司に対して、尊敬と畏敬の念を抱いているのは間違いないかった。

「私が居たのは、ゲットーの中でも特にハンセン病患者の隔離地域だった。

同じ被差別人種の中でさえ、差別される立場の人たちが暮らしていた掃き溜めの中の掃き溜めだったよ。

なぜあの人が我々の住処を焼いたかわかるか？ ペストが蔓延したから、などと尤もらしい理由で領主が処分したかったからだ!!

ただの弾圧だよ。体のいい見せしめだ。どうせ殺すなら、一番下から切り捨てる。当然の話だ」

副長は笑っていた。せいせいしたと言わんばかりに。

「弱い立場の人間は、そうやって徹底的に迫害される。

私は総長に拾われてようやく迫害される側ではなく、迫害する側に回ったのだ」

「なるほど、それが動機か」

そんな彼の言葉を受けて、ティフォンが納得したように頷いた。

「どういうことだ？」

「単純な話だろ。もういいだろ、教えろよ」

それだけで動機に思い当たる点が見当たらなかった伊藤刑事を尻目に、化粧屋が自白を促した。

「お前たちだつてわかつているだろう？」

どうせ、この国も我々のような異能者を差別するようになる。

あれは禁止、これも禁止、あれこれはここでは禁止、ここは異能者お断りです……時間経つに連れて、この国は我々にも住みにくくなつていくだろうさ」

くつくつ、と副長は笑いながら言う。

その場にいる異能者三人はそれを否定しなかつた。

「私は思ったよ。なら私は、どうせ差別されるのなら、侮蔑ではなく畏怖の方が良いとね」

それは、ある種の狂気だつた。

もう二度と、絶対に、弱者の側に回らないという、執念だつた。

「だから、だからお前はもつと別の弱者を増やそうとしたのか!!」

「その何が悪い。弱い立場の人間から、更に弱い立場の人間を作る。」

この国でもかつては行つていたことだろうが。お前は自分たちの歴史を否定するの
か?」

全てを理解し、伊藤刑事が激高する。

それを、副長は馬鹿馬鹿しいと嘲笑つていた。

「私の目的は、既に達成されている。」

ああ喜んで投獄されようとも。だがそれは、私に対する畏怖と恐怖にて行われるものだ。

決して、ゴミのように侮蔑され、蔑まれ、追いやられるわけではない!!」

狂ったような哄笑が、副長の口から漏れ始める。

「馬鹿が。仮に私たちが差別されるとして、その切っ掛けや遺恨を残そうとし始めたのはお前じゃないか。

——恥を知りやがれ。お前が侮蔑され、差別されるのだとしたら、それはその救いようのない性根のせいだろうよ」

副長はそんな化粧屋の侮蔑の視線に気づかず、笑い続けた。

そうしなければ、また差別される側に回る恐怖から逃れられないとも言おうように。

§ § §

「先輩!!」

副長に対する取り調べは面会時間が終わってしまい、それで終了になったのだが。

「どうした、妻鳥。そんなに慌てて」

「ここは病院だぞ、と続けようとした伊藤刑事だったのだが。」

「は、配信されてます!!」

「はあ？」

「今、先輩が行った取り調べの様子が、ネットで中継されて配信されていたんです!!」
「んなッ!?!」

彼の言葉に、今日何度目かわからない驚愕で目を見開く伊藤刑事。

「いったいどうなってる、いったい誰が!?!」

彼のその疑問は、すぐに解消された。

「レプ、反応はどうだ」

「はあいマスター。くひひ、それはもう賛否両論!!」

警視庁にも問い合わせが殺到してみたい。マスコミも大騒ぎ!!」

魔術師が虚空に視線を向けると、そこにはスマホを持ったレプが可笑しそうに笑っていた。

「魔術師殿、いったいどういうことだ!!」

「この一件は、取り扱いを間違えればこの国でも我々の排斥運動さえも始まるだろうと懸念しました」

我々の、と言う言葉で伊藤刑事は気づいた。

化粧屋も、ティフォンも、妻鳥の言葉に全く動揺していないということに。

二人もグルだったのだ。

「事前の調査から、犯人の動機は推察できていたので。

彼の言葉から、その動機を世間に話してもらおう必要がありました」

それが、まさしく一般人と異能者の間を取り持つ調停者としての判断だった。

「警察やマスコミを通じては、彼への攻撃材料を世間に与えるだけに終わる。

ただの悪者として、ただの犯罪者として忘れ去られるでしょう。

それではバランスが悪い。それに一石を投じる必要があった」

「悪いな伊藤ちゃん、あんたのお仲間にはちゃんとお前は知らされてなかったって説明してやるからよ」

体が有れば手を合わせて謝っていそうな雰囲気、化粧屋に、伊藤刑事はへなへなと病院の廊下に崩れ落ちる。

これから彼に一つ分かることがあるとすれば、警視庁に戻った時にいったいどんなことを言われるかわからないということだけだった。

.....

.....

.....

『魔術師さん考察ファンズレ Part208』

402 : 名も無き弟子たち ID : UxT6E9rGC

レプちゃん、遂にやりおった

403 : 名も無き弟子たち ID : hdAP3d3R8

やらかしてるのはいつも通りな気が

404 : 名も無き弟子たち ID : eGWYRlqLN

今回ばかりは許されんのじゃね？ 魔術師さんはどうしたのよ

405 : 名も無き弟子たち ID : FVq+G+5X7

レプちゃん今回ばかりは魔術師さんの指示で動いてたっぽいゾ

406 : 名も無き弟子たち ID : ZHl43QOzq

やっぱり取り調べの可視化は必要だな(白目)

407 : 名も無き弟子たち ID : 7 u n m M k z p B

てか、魔術を極めた連中が思ったよりヤバい件について

408 : 名も無き弟子たち ID : f U C c s l z b p

道具も何も無しにあれだけ暴れられたんだろ？ 怖いよ

409 : 名も無き弟子たち ID : c O z I L 4 o r y

犯人にも同情できるが、やり方間違ってるよな

410 : 名も無き弟子たち ID : + n j + / l I P Z

同情する必要あるかあんなクソ野郎？

411 : 名も無き弟子たち ID : Y m l 0 v t d s n

一理はあるっしょ、手段がすべて台無しにしてるが

412 : 名も無き弟子たち ID : E B f F K L 2 F h

ユダヤ系人たちの迫害の歴史はガチだからなあ

413 : 名も無き弟子たち ID : b N m u P c v U v

というか女の声、この間出てた化粧屋じゃね？

画面に映らなかつたけど声オタの俺に分かる

414 : 名も無き弟子たち ID : Q y Y z Z 6 6 2 p

これ、魔術師さん警察敵に回さない？

415 : 名も無き弟子たち ID : c P 5 p Q E F L 5

>>413

なぜわかるし w w

でも魔術師さんも警察に協力してるから化粧屋もそうじゃねって考察は前にあった
な

416 : 名も無き弟子たち ID : F O e X C 7 c 9 n

>>413

てか、犯人が化粧屋言うてたぞ

拡散されてる動画の一つ見返したし确实

417 : 名も無き弟子たち ID : e e L t Q F r / E

つてか、よく生放送中にBANされなかつたな

普通警察の圧力とか報道規制とか掛かるもんじやないの？

418 : 名も無き弟子たち ID : O u q e b + x j T

報道規制は記者に対してな気ガス

419 : 名も無き弟子たち ID : 9 X H 2 r 7 I v 6

レプちゃんのおき見てみ、運営に何回も配信停止されかけたけど弾いたって言うてる
一番やべーのレプちゃんじゃね？

420 : 名も無き弟子たち ID : 4 c f h f Z / 4 N

画面越しにリアルダイレクトアタックできるからな、あの妖精（震え声

421 : 名も無き弟子たち ID : i W s 5 / a c l b

>>420

あれ以来、露骨にアンチが減ったよな

相手が実害を与えてくれるってわかると何も言っただけでなくなるとか、だっせーのww

422：名も無き弟子たち ID：eIJl0gUpQ

ま、確かにアンチはウザかった。レプちゃんはああいうキャラでいいし

アンチはアンチスレだけにしてほしいわ

でもレプちゃんシヨック事件はマジ許さねー!! 通院費返せ!!

423：名も無き弟子たち ID：p4vX272Yf

犯人も言っただけで、最近は魔術を試したって動画を上げただけで運営に消されるし

な

何でもかんでも禁止ってなるのは時間の問題では

424：名も無き弟子たち ID：A4VlZwsBs

いやいや、どう考えてもなんて魔術は公序良俗反するやん

馬鹿な事やってる連中もごまんというし

425 : 名も無き弟子たち ID : s1V4kBLdX

今のところ、魔術師さんのチャンネルも無事だ

そのうち何らかの配信があるだろうから、それを待とうぜ

426 : 名も無き弟子たち ID : E7sFcCNWi

魔術関連の動画が消される中、今や魔術師さんのチャンネルは聖域だもんな

BANしたらどうなるか、運営もわかってるんだろう

掲示板の反応を見て、魔術師は自身の思惑が上手くいったことを悟った。

彼は調停者。世論が自分たちに攻撃的になりすぎても、擁護しすぎるのもよくないと考えていた。

逆に異能者が一般人たちを害しすぎるのも、肩入れしすぎるのもよくないとしていた。

今回の配信騒動は警察との関係悪化を考えれば、出来る限りやりたくない手であった。

それでも、彼はやらなければならなかった。

——調停者として公平であれ。

そのゲツシユを遵守するために。彼は自分が思う限りをするのだ。たとえそれが、ケルトの英雄たちが辿ったような破滅の道でも。

「私の行動は思惑通りでしたか？ ——イヴ」

彼が警察病院の駐車場の日陰に視線を向けると、そこには日焼けとは無縁そうな人形めいたアルビノの女が居た。

「安心しなさい、警察の方には手を回しておくわ。」

あの刑事も、悪いようにはさせない。あなたに対しては、ふふ、私が何もしなくても連中はどうにもできないわ」

白い日傘の持ち手をくるくると回して弄びながら、それは言った。
「……やはりどうしても、あなたは協力してくれないのね。」

あの副長が言った言葉は避けられない未来よ。私たちへの理解が深まれば深まるほど、国家という群体は私たちを束縛しようとするでしょうね。

私は、私たちは、その未来やその先の破滅を変えることができる。

それでも、あなたは協力をしないのでしょうかね」

女の言葉は、説得をしようという意思を感じられなかった。

彼女がどう言葉を尽くそうとも、無駄だと分かりきっているのだ。

「あなた方に肩入れすれば、それはそれで公平さを欠きます。

私はあなた方がやろうとすることの先でも、同じように調停者で居るだけです」

「自分から何も変えようとしなくせに、偉そうに」

ふん、と不愉快そうに女は鼻を鳴らした。

その言葉は彼の本質を突いていたので、魔術師も何も言い返さなかった。

「……『預言者』を訪ねなさい。

それであなたの考えが変わらなければ、私も何も言わないわ」

白い女が頭上から日傘を振り下ろすと、その姿が一瞬隠れた合間にその姿は消えていた。

「『預言者』？」

残された日傘だけが、物言わず熱したコンクリートの上を静かに転がっていった。

各地の反応について

その日のロンドンの昼下がりに、とある住宅街の一つにある集合住宅のビルを群衆が固唾を飲んで見守っていた。

「助けて、火がもうそこまで!!」

五階の高さにあるベランダには、少女が一人取り残されていた。

その背には、もうもうと燃える炎が迫っていた。

それは原因不明のビル火災だった。

炎は瞬く間に燃え広がり、多くの命を奪い今も燃え上がっている。

そしてまた一人、逃げ遅れたベランダに居る少女の命を奪おうとしていた。

消防隊が駆け付けたのは、ようやくであった。

「ダメだ、炎の周りが早すぎる!!」

消防車の放水も空しく、炎の勢いは衰えない。

消防隊員たちが決死の救助を行おうにも、犠牲者を増やすだけに過ぎないだろう。

誰もが少女の最期に目を逸らそうとし、神に祈りを捧げる者まで現れ始めた。

そんな時だった。

「あッ、あれは!!」

たまたま野次馬の一人が、空を指差す。

つられて顔を上げる人々。

そして、誰かが言った。

「あれは、ッテンペストだ!!」

上空を一直線に飛来するそれは、人間だった。

赤いマントを羽織った、アメコミのヒーローを意識した青いスーツを纏う青年。

彼こそが、現在世界最強、世界最高と目される超能力者であった。

「やあ、またせたね」

「テンペストだあ!!」

彼は少女の居るベランダの高さで急停止すると、軽い口調で少女に話しかけ、彼女をふわりと浮かび上がらせた。

そのまま少女と一緒に地面に降りると、群衆が歓声を持って出迎えた。

すぐに消防隊員が少女を保護し、救急車へと連れていく。

「皆さん、危ないから離れていて!!」

テンペストが未だ燃え盛るビルに手を翳す。

その瞬間だった。未知の圧力によってビル内が満たされ、空気が隅々まで追い出され

ることによつて炎が瞬く間に鎮火したのである。

ヒーロー、テンペストが持つ超能力はごく単純な念動力だ。

だがその操作性と自由度は極めて高く、更に出力はその名の通り天災が如くであった。

破壊力だけなら彼に並ぶ者も居る。だがそれを人助けに使えるのは彼だけだった。

「うーん、この感触から言つて、三階と四階にまだ生きてる人が居るね。」

僕だけが活躍しては悪いから、あとは消防隊の皆さんに任せるよ」

中はまだ燻つてるところもあるから気を付けてね、とさわやかに彼は言った。

キザつたらしい口調は彼のキャラ作りで、単純に救助の専門家の領域には踏み込まない為だったがこれが世間の受けがいい理由の一つだった。

そして彼はやってきた時と同じように、念動力で自分を浮かして飛び去って行った。

群衆の歓声を受けながら。

.....

.....

.....

「昨日のビル火災の一件、またニュースになつてゐるわよ」

先の火災の後、テンペストはヨーロッパ各地をパトロールして様々な救援を行い、ロンドンのオフィスへと戻つてくるとスタッフたちが笑顔で出迎えてくれた。

「ここは俺たちの本拠地だからな。そりゃあ喧伝もするだろ」

彼はテンペストとしてのキャラと共にマントを脱ぎ去つてそう言った。

彼の本来の性格は、アメコミのヒーローのように軽口を叩きながら悪と戦うと言つた感じではなく、イギリス人らしく皮肉屋だった。

いや、そもそも、彼は悪などと戦つたことは一度も無かつた。

彼がテンペストとして活動するようになって、強く感じるようになったのは多くの疎外感だった。

ヒーローとしての活動自体は慈善事業だが、彼は自分を聖人君子だとは思つていなかった。

このオフィスを構えたのも自分一人では限界を感じたからだし、雇つたスタッフを食わせる為にいろいろな活動もしている。

お金のために活動している、と言われても否定はできない。

そもそもなぜ彼が、このような慈善活動を始めたのか。

理由は単純だった。

「おいおい、中東じゃまた異能者狩りが起こったみたいだぜ」

「アメリカさんのところでも、毎日のようにデモやつてるしな」

「ジョージも俺たちも頑張ってるのに、先は長いよな」

スタッフたちが世界各地の情報を収集しながら、そんなことを話していた。

「このスタッフたちは各地の情報を集め、パトロール中のテンペストに逐一情報を提供できるようなシステムを構築していた。」

だから、テンペストは効率的に各地の災害を察知できる。

「おい」

「あッ、悪いジョージ。帰ってたのか」

その話をしていたスタッフたちは、テンペストの帰還に気づいて気まずそうになった。

「いやいいさ、誰もが僕みたいに強くないからな」

それは差別や迫害を行っている人々に対する哀れみというよりは、その連中はどうせ何を言ったところで変わらない、とでも言いたげな皮肉気なものだった。

「お前は本当に悲観的だよな、人前じゃそんな態度は厳禁だぜ」

ここに居るのはみんな、数年来の友人たちだ。

テンペストと同じ異能者も多い。

だから彼の言葉に、笑ってそう言った。

「うん、そうだね」

テンペストは年相応に笑みを浮かべて頷いた。

少なくとも彼は大衆の救済の為というより、自分と一緒に活動してくれる仲間の為にヒーローをしていた。

彼がこの活動を始めた理由は、単純だ。

——仲間が欲しかった。

それ以上の意味などなかった。

彼は自分の力を自覚した時、自分一人ではダメだと焦燥感に駆られた。

世の中の技術は日進月歩であり、そのうち検査で異能者を見分けられるようになるかもしれない。

いつまでも、自分の力を隠してはいられないと思ったのだ。

行動は早い方が良いと思った。

自分の力の有用性を示し、自分の活動に理解をしてくれる仲間を集め、偏見や差別と闘わなくてはならない、と。

彼は根本的に、ヒーローではなく厭世家だった。

自分の能力は忌み嫌われるものであり、世間はそれを憎むだろうと思っていた。

本当は自分が矢面に立つのも嫌だったが、その性格に反するように超常の力が彼には宿っていた。

世間は彼をヒーローと称えるが、彼自身悪と戦ったことは無かった。

勿論、銀行強盗の類に遭遇した時もあるが、その時は戦いにすらならなかった。

同時に、この世界には自分が戦うべき巨悪など存在しないとも思っていた。

彼は分かっていたのだ。

どうせ邪悪を力で粉碎しても、手放して称賛する民衆などマンガの中にしかないのだと。

彼は、自身の力を自分が想像する民衆のように忌み嫌っていた。

故に「テンペスト」。無理やり人助けに使っているが、破壊しかできないその力を誰

よりも彼は恐れ、嫌っていた。

「そうそう、ジョージ。あなたにお客さんよ」

「僕に客？」

芸能関係担当のスタッフの言葉に、彼は首を傾げた。

テンペストの活動は忙しく、まず会おうとして彼と会うことはできない。

「そうなのよ、あの人、まるであなたが帰ってくるのをわかってたみたいだね」

スタッフに促され、彼は応接室へと向かう。

さて、ヒーローは時として巨悪に相對し、悲劇を乗り越えて成長していく。

「初めまして、テンペスト。私の名前は、イヴ」

そこで待っていたのは、アルビノの女だった。

そうして彼は産まれて初めて、本物の巨悪に遭遇することになった。

§ § §

「なんでこんな仕事受けたの!?!」

その日、Sarah——サラはあるテレビ局の控室で荒れていた。

元モデルのアメリカ人の母親の血を色濃く受け継いだブロンドの髪の毛を左右に揺らし、彼女は自分のマネージャーに当たり散らしていた。

「サラさんだつてわかつてるでしょう!?!」

「昨今の異能者のイメージは悪くなる一方だつて」

「だからって私が生贄になる必要があるの?」

自分の半分ほどしか生きていない少女に睨まれ、マネージャーの男は蛇に睨まれたカエルのように縮こまる。

日本で“Sarah”という名前でタレント活動をしているサラは、つい先ほどお昼の情報番組に出演することとなった。

彼女は異能者として自身を売り出している。

その能力を体感したものは、誰しも彼女を本物として認め——そして恐れるだろう。「だから嫌だったのよ、異能者だって明かすの。」

事務所の方針で話題性抜群だからって……結局大コケじゃない」

とは言ったものの、サラはその事務所の方針事態は間違っていたとは思わなかった。彼女には、タレントとしての才能が無かった。

話題性が無ければ広大で残酷な芸能界で仮にもレギュラー番組などこの若さで得られることは無かっただろう。

尤も、その番組レギュラーの座も外での口ケが主で、後ろ暗いところを持つテレビ局の人間はスタジオに近づかせたがらなかったが故だったが。

滅多に呼ばれないスタジオでの仕事。

疑念に思いながら来てみれば、偉いらしい学者や有識者やらに昨今の異能者の有り方やらなにやら、難しい言葉でサンドバッグにされるといっただけだった。

スタジオの空気は異能者に対するマイナスイメージで埋め尽くされ、彼女は針の筵に立たされた気分だった。

「だからって、あんなことを言わなくても……」

控えめにマネージャーは言いながら、先ほどのスタジオの光景を思い浮かべる。

『異能者の存在が一般市民に悪影響を与えるようになるとしたら、あなたはどうか考えますか？』

その言葉は明らかに差別意識に満ちた嫌悪感のにじみ出た言葉だった。

老人らしい頭の固そうな学者に、サラはこう言ったのだ。

『普通の間でも他者に対して悪影響を及ぼすことはあると思います。』

例えば、あなたも家族をもつと顧みた方が良くと思いますよ。先週の金曜日の朝帰りも奥さんに仕事が終わらなかつたなんて嘘を吐いて』

その言葉に、学者は激怒してスタジオを去った。

勿論お昼の情報番組の為、基本的に生放送である。

言い訳の余地がないほど放送事故だった。

「でもおかげでさっきの放送は話題沸騰よ。」

あの学者のSNS炎上してるし、ざまあないわ」

サラは視界に捉えた相手の心を読める、読心能力の持ち主だった。

その力が発現しオンオフが切り替えられるようになった頃、純真無垢だった少女の性根は歪んでしまった。

今では爆弾発言を繰り返し、相手も自分も炎上騒動にするのを楽しんでいる風にする見える。

「私は事務所の期待に応えているじゃない」

「おかげで社長から苦情の電話が十倍に増えたから何とかしろと言われましたけどね」
「番組側から私のことは他の出演者に説明はされてたはずでしょ。」

私はホンモノだって。相手の心や記憶を掘り起こす、悪魔だって」

皮肉気に、自嘲するように、サラはニヒルに笑った。

サラを前に、心の隠し事など無いも同然だった。

心の表層を偽っても、その本心まで彼女は暴く。

彼女にとって人の心なんてモノは、便座の蓋と同義だった。

開けようと思えば簡単に開けられ、その下は糞尿が溜まっている。

「悪魔だなんて、そんな……」

とは言え、マネージャーも自分の前に何人ものマネージャーが辞めたのを聞いていた。

中にはトラウマを負った者さえ居たという。

「早く次の予定を教えてくださいよ。」

次の口ケはどこなの？」

複雑そうにしているマネージャーの内心を読み取りながらも彼女は先の予定を尋ねた。

「は、はい、次の予定は——」

するとその時、控室のドアをノックする音が聞こえた。

「はい、何でしょう」

「すみません、ちよつとよろしいでしょうか？」

スマホの予定表を確認しようとしたマネージャーをスタッフがドアを少しだけ開けて手招きする。

「はあ……」

控室にサラが一人になると、彼女は深いため息を吐いた。

孤独こそ、彼女が心癒せる時間だった。

或いは動物と戯れている間だけ。

友人を遠ざけ、家族も遠ざけ、仕事場からも遠ざけられ、彼女が得たのは燃えやすい名声と水泡のレギュラーの地位。

いざれ飽きられ、自分の人生は消費される。

ならば、それまでせいぜい稼がせてもらおう、サラはそう考えていた。

すると、控室のドアが開く。

「早かったわ、ね……」

しかし、入ってきたのはマネージャーではなかった。

「あ、あなた誰!？」

サラが声を上げたのは、見知らぬ人間が急に入ってきたからではなかった。

ストーリーカーなど何の脅威にもならない。彼女は既に片手で数えきれないストーリーカーを刑務所に送り込んでいた。

「初めまして、Sarahさん。私は召喚士サモナーと名乗っています」

入ってきたのは、黒いローブの陰気な女だった。

「う、嘘、人間が、人間が、そんなどす黒い心を持つてるはずが無い!!」

サラが恐怖に駆られたのは、その女の精神構造があまりにも人間とはかけ離れていたからだだった。

ニイ、と召喚士と名乗った女の口元が張り裂けるように目元まで吊り上がる。

「我が主が、あなたとお話をしたいそうです」

人の皮を被った何かは、慇懃に一礼してサラにそう言った。

この日、彼女は産まれて初めて、本物の悪魔と遭遇するのだった。

§ § §

「はいか」

「はいですぬ……」

都内のある住宅地の一つ、伊藤刑事と妻鳥は一つの民家の門を潜った。

インターホンを鳴らすと、妙齢の女性のカメラ越しに対応した。

二人が身分を明かすと、彼女は玄関から顔を出した。

「えーと、いつもの指導員さんじゃないんですか？」

「ええ、ちよつと確認したいことがあります。お子さんに問題があるわけでは無いんです」

大嘘だった。物事を円滑に進めるための方便を伊藤刑事は言った。

後ろで妻鳥も微妙そうな表情でその発言を聞いていた。

「はあ、そうですか。でも、あの子が会ってくれるとは限りませんよ。」

いつもの指導員さんにも、ドア越しにやり取りするくらいですし」

「構いません、会わせてください」

「そこまでおっしゃるなら」

そう言って、彼女は自宅へと二人を招き入れた。

目的の部屋は二階に上がってすぐの場所だった。

「ねえ、刑事さんがお二人、会いたいわって来てるんだけれど」

コンコン、と彼女がドアをノックすると、急にドサツと何かが崩れ落ちる音が聞こえた。

「な、なんで来たの!?!」

ドア越しから、そんな少女の声が発せられた。

「……あー、その、俺だ、伊藤だ。分かるよな?」

化粧屋、と伊藤刑事は口にした。

元々、伊藤刑事は警察に登録されている異能者の顔写真や住所には職業柄一通り目を通している。

日本に千人程度とはいえ、事件がある度に照会をするのも彼の仕事だ。

偶々、先日脱走事件の際に見かけた化粧屋の本体の方の少女に、彼は見覚えがあった。

「まさか、普通に役所に届出を出してたなんて」

その妻鳥の言葉に、伊藤刑事も無言で頷く。

「それで、刑事さん。あの子について何が聞きたいのですか?」

二人は結局化粧屋と意思疎通は取れず、一階で彼女の母親に持て成されていた。

「ああ安心してください、何らかの事件の関係があるとかじゃないですよ。」

先日、彼女が外出をしませんでしたか？ その時に、自分たちはお世話になったので

お礼を言いに来たんです」

と、人当たりの良い妻鳥が当たり障りのない話を彼女に聞かせた。

「ああ……珍しくあの子が書置きを残して行ったあの時ですね。」

あの子が家の用事以外で外に出るなんて、もう何年振りなのかしら。思わずその日のお夕食は豪華にしちゃったくらいでしたわ」

微笑ましいものを思い浮かべるように、化粧屋の母親は笑みを浮かべた。

「その、何年もあの調子なんですか？」

「ええまあ」

「担当の指導員からの話も聞きました。」

——イジメ、だそうですね。原因は」

伊藤刑事の言葉に、ええ、と彼女も頷いた。

「優しい子なんですよ。」

異能に目覚めるまではよく笑って、絵が好きで、子供の頃からよく似顔絵を描いてくれしました」

彼女はそう言つて、部屋の壁に視線を向ける。

そこには色あせた両親の似顔絵が、クレヨンで幼い手付きにて描かれていた。「でも小学生高学年頃だったかしら。」

クラスで飼つていた鳥がある日突然亡くなつていたらしいんです。

あの子の友達が飼育委員で、クラスで取り上げられて、泣いてしまつて、あの子はそ
の子を泣き止ませたくてその力を使つてしまつたそうなのです」

二人は想像するしかできなかった。

その見るもおぞましい、異端の技術を。そうして巻き起こつた彼女の味わつた地獄
を。

「学校は辞めさせました。」

夫や親戚にも、あの子の力を証明させ納得させました。

もうそろそろお盆の時期ですね。この季節になると、あの子も私の両親の居る田舎に
戻つて、亡くなつた人たちの言葉を伝えてくれるんです」

そこには娘に対する無償の愛と、誇りと、そんな彼女を受け入れなかつた世間への怒
りが入り混じつていた。

「お人形さんを動かして、たまにお金を家に入れてくれるんです。」

あのお人形さん、すごい出来ですよ。まるで生きてるみたいです」

「ええ、そうですね」

事実伊藤は言われるまで、あの端末の方が化粧屋の本体だと信じて疑わなかった。

そしてこの母親も、娘の全てをそういうものだとして受け入れていた。

「あの子はもう立派に自立しています。」

誰が何と言おうとも、だから刑事さんたちも、出来ればそつとしておいてください」

「それは勿論」

伊藤刑事は、化粧屋の正体を上に伝えるつもりは無かった。

その程度の事に目を瞑るくらいには、彼女に借りは出来ている。きつと他の警察官でもそうするだろう。

「先輩」

化粧屋の実家から出たところで、二階の窓が開けられた音がして二人は顔を上げる。

すると、不健康そうな少女が紙飛行機を二人の元へと投げた。

すつ、と妻鳥がそれを手に取る頃には、二階の窓が閉められカーテンが掛けられていた。

彼が紙飛行機を広げて見ると、中にはこう書かれていた。

『今度、ファミレスに誘ってください。頑張つて外に出ます。』

あと、ママとパパに何かあったら、全員むごたらしく殺します。

悲しいけど、裏切ったらゾンビにして意識があるまま腐らせて永遠に苦しませます。
お願い、私を裏切らないで 』

「はあ……」

それは、脅しと言うより、嘆願だった。

思わず伊藤刑事の口から深いため息が出た。

「帰るぞ。仕事が山積みだ」

「そうですね」

二人は、そう言って近くの駐車場に停めてある車の元へと歩いて行った。

そんな二人が視界から消えるまで、化粧屋はカーテンの隙間からジッと見ていた。

遭遇について

その日、夏芽の部屋にはいつものように四人が集まり宿題の消化に追われていた。

ほぼ毎日のように集まっているのに終わらないのは、進行の遅い夏芽に他の面々が合わせているからだだった。

そもそも、宿題なんて集まるための口実に過ぎず、終わらせようと思えばいつでも終わらせられるものだった。

そうしないのがある種の優しさであり、また厳しさでもあった。

幼馴染二人が先に宿題を終わらせれば、答え見せて、と夏芽が迫ってくるのは小学生の頃に経験済みだったのである。

さて、そんな四人の勉強会に今日は珍しく外野が来ていた。

「この問題はどのような公式を使えば良いのですか？」

そう尋ねたのは、カタリナだった。

今回、勉強が遅れ気味である彼女が教えを乞うたのである。

「ああ、これは教科書のこのページを使えばいいよ」

千秋が数学の教科書のページを開いて見せる。

「なるほど、わかりました」

「カタリナさんは教え甲斐があるから良いよね。」

真面目だし。教えたところはすぐ覚えちゃうし」

どこかの誰かさんと違って、と嫌味っぽく言う千秋であった。

「そんなことはありませんよ」

謙遜するようにカタリナは応じたが、実際彼女が勉強をまともにやろうと始めたのは

ここ最近になってからだだった。

「特に日本史や国語は未だに戸惑いを覚えます」

「ああ、前はイタリア人なんだっけ？」

「ええ、だからと言ってそこまで教養があつたわけではありませんが」

「二度目の人生だから勉強とか余裕ってことにはならないんだね……」

「それは当人の学ぶ姿勢に寄るのでは？」

実際に転生を経験しても夢の無いカタリナの様子に、真冬は少し残念そうだった。

「どーせ私は学ぶ姿勢がありませんよーだ」

「夏芽ちゃん、不貞腐れないでよ。事実でしょ」

いじける夏芽に、遂には春美まで辛辣な言葉を投げかける始末だった。

人間の集中力は一時間半程度しか持たないというが、夏芽の集中力はそれを下回る。こうして何度も勉強会を行っている最大の遅延は彼女の姿勢が問題だった。

「じゃあ夏芽、またあれを使う？」

「うえッ」

千秋の冷やややかな視線に、先日のを思い出して夏芽は嫌そうな顔になった。

「あの時はすごく拗つたじゃない。」

ああやつて覚えた時はすぐに思い出せたみたいだし」

「でもあれは私が断言するけど、チートだよ。」

いや、やつちやダメだつて規則は無いけどさ」

肯定的な千秋に対して、真冬の方は否定的だった。

「あれ、とは？」

「ああそれがね——」

春美がカタリナに説明しようとした、その時だった。

「くすくす、本当にヘンなの」

妖精コティが部屋の壁を通り抜けて、ミニチュアハウスのベッドにダイブした。

そして健気に勉強なんてしている人類を嘲笑っていた。

「意欲の無いやつに勉強を強いるなんて馬鹿みたいな制度を律儀に守るとか、人間って非合理的な事に唯々諾々と従うしか能が無いのかしら」

「お、コテイのくせに話が分かるじゃん」

「特に日本人って生き物は平等やら学ぶ機会がどうかって、そういうのを確認するのにどれだけの時間と費用を掛けてるわけ？」

「そうやって子供一人当たりのコストが増大していくと、少子化が進む一方だと思うんだけど。」

「ただでさえ、人間って生き物は非合理的な繁殖方法をしてるのに」

「それはまさしく異次元の、妖精からの意見だった。」

「夏芽みたいなダメ人間はさっさと労働階級に落として、使い潰しちゃえばいいのに。」

「社会に不必要な人間を長生きさせるなんてお馬鹿じゃん。」

「人口の管理もまともにできないこの世界の社会じゃ、無駄に資源を食い潰すだけだつてのに」

「その言葉に、妖精という生き物に存在していた彼女たちの社会の残酷さの片鱗がにじみ出ていた。」

「おいこら、誰がダメ人間だこのクソガキ!!」

「きやはは!! 怒った怒った!! 凶星突かれて怒った!!」

「コティ、夏芽で遊ばないでよ」

立ち上がって部屋で追いかけてこを始める二人に、春美が溜息を吐いた。

「くすくす、なんで怒ってるの夏芽」。

夏芽みたいなダメダメが許されてるのはそんな無駄ばかりの社会のおかげだつてのに!!

もつと感謝して無駄だらけの社会に奉仕して、ちよつとでもそれが続くように努力したら〜?」

「むぎや——!!」

妖精に煽られ、語彙力が喪失する人間という見るに堪えない構図だった。

「まんまレプちゃんのスNS炎上事件のレスバトルの時みたいじゃん……」

そして真冬が頭を抱える。

コティが来てからというもの、夏芽の集中力がいつもより長持ちしなくなった理由の一つが彼女だった。

「ふん」

「ぎゃん!!」

見るに見かねたのか、カタリナが部屋を飛び回るコティを素手で叩き落した。

まるで居合い抜きのようなすれ違いざまの一撃に、おおー、と他の面々から声が上が

る。

「あつはは!! ペちん、つて虫みたいに叩かれて落ちるとかコティちゃん面白すぎるんだけど!!」

「ぐ、ぐぬぬ、ちよつとくらい進化したサルの親戚がなんで私に触れられ……」

「……ぞとばかりに煽り返す夏芽。」

精神年齢が大して変わらない二人だった。

「妖精と一緒に住んでいる、と聞いた時は正気を疑いましたが一応見に来て正解でした」

「ああ、やつぱりそういう理由で？」

「最悪勉強は一人で出来ますし」

カタリナが春美にそう言うと、彼女はコティを摘まみ上げた。

「げッ、偶にいるんだよなあ。魔力も持たないザコ文明のくせに、その扱いを個人レベル

で極めちやつたおかしいやつが」

「覚えておけ、人外の怪物。人類はお前たちの殺し方を知っている。われわれ」

私やあの魔女がお前を見逃してやるのは、お前の態度次第だと知れ」

「ちッ、はーい、反省してまーす」

カタリナがコティを手から離すと、ぴゅーつと彼女は飛び上がった。

「へーん、だ!! お前の術だつて借り物のくせに!!」

お前たちが神様だとか天使だとか崇めてるのは、私たちと同じ領域の住人なのに区別してくれちやつてさ!!

バーカバーカ、お前なんかもつとあの連中に振り回されてればいいんだ!!」

とか捨て台詞を吐き捨てながら、コティは壁を通り抜けて居なくなってしまった。

「まったく。悪魔の一種の分際で戯言を。」

それでアレから何か借り受けでもしましたか?」

カタリナは特にその専門であるだけあつて鋭かった。

彼女の真剣な表情に、夏芽もおおずとおおずとテープで修理されている粗削りのステッキを渡した。

「なるほど。春美、あなたは当然気づいているんでしょうけど、これは危険です」

「そりゃあ危ない道具だと思っうけど」

「違います、そうじゃありません」

夏芽の言葉に、カタリナが首を横に振った。

「物事には代償が必要です。仮にこれを使って得られる事象が、何の対価も発生しないとも思っうのですか?」

その言葉にハツとなった三人が、春美を見やる。

「まあ、生命力や寿命を削る類の道具だとは思っっていたわ。」

でも若いうちなら多少気分が悪くなる程度で済むと思ったから。勿論、全力で使ったらそうはならないでしょうけど」

「それなら、教えてくれたっていいじゃない……」

「変身を長時間維持し続けても私でも処置可能な範囲だったし。

それに夏芽ちゃんならそれを危険な事には使わないと思ったから。

でもまあ、確かに一言ぐらい言っておくべきだったわね」

リスクと恩恵を天秤に掛ける、魔道に身を堕とした者の考え方だった。

とはいえ、春美の信頼に夏芽は少し居心地が悪そうにしていたが。

「アレにはおそらく、悪意など無かったのでしょうが。」

リヤナンシーの伝承と同じですよ。才覚を得られる代わりに、命を削られる。

とはいえ、使いどころを間違えなければ有用なものもまた事実」

「え、返してくれるの？」

てつきりカタリナが処分するものだと思っていた夏芽が、素っ頓狂な声を出した。

「アレの機嫌を損ねるのは具合が悪い。

アレは争いを好まない、或いはその必要が無いだけで、災害そのもの。

私たちはアレと敵対するだけの土俵にも立てないからあれほど寛容なのですよ。

あなたたちにそのステッキを与えたのも、飼育しているアリに角砂糖を放り投げるの

と大して変わらないに違いありません」

古来より悪魔は、退治するものではなく退散させるもの。

勝ち負けを論ずる段階ですら無いのだ。

「くれぐれも、アレと分かり合おうなどとは思わないことです。

ですが正直なところ、私の心配は杞憂に終わりそうですね」

「どういうことですか？」

「あの妖精の対処法が、日本人らしいと言うことですよ。

自分たちのわかりやすい物へと落とし込み、人格を与えて、同じ場所に住み適度な距離感を保つ。

かつての私には想像しえないことです」

そのカタリナの言葉に、春美以外はピンとこなかったのか顔を見合わせた。

「まあ、いずれわかるでしょう。

アレも存外、脆い部分もあると言うことです」

そこまで言ってから、さて、とカタリナは話題を切り替えた。

「今日は勉強の代わりに、私が何か作ることになっていましたね。

何か食べたいものはありますか？」

「一応聞くけど、料理の経験ってある？」

「かつての記憶に、侍従時代に嫌と言うほど」

千秋が尋ねると、カタリナは心底嫌そうにそう答えた。

「お、流石元イタリア人。期待してるから!!」

という夏芽の激励を受けて、カタリナは一階に下りて行った。

その日の昼食はイタリアの郷土料理だった。

その出来は女子力の無い面々が落ち込むほど美味しかった。カタリナは材料と調味料の質が全然違うから思ったより美味しかった、と後で述べていた。

これが、副長の脱走事件の前日での話だった。

§ § §

そして、その事件の翌日。

「はあ」

カタリナはいつもの四人に加えて望海と一緒に買い物に付き合わされていた。

「なんで私まで呼ばれたのですか?」

「それは、師匠があなたの気晴らしに付き合っただけです」

その質問には望海が答えた。

「前々から思っていたのですが、何故彼女は私に気にかけてくれるのでしょうか」

それは疑念と言うより、困惑に近かった。

カタリナはなぜあの因縁の有る魔女に優しくされるか分からなかった。

「我らが女神の大きいなる権能は知っているでしょう。それに倣つてるだけなのでは？」

望海たち師弟の崇める女神へカテーは女魔術師の保護者、或いは魔女達の女王と称される。

それに倣う二人の師は、前世から何かと女性の世話をすることが多かったらしかった。

「私を同輩にするのは少々業腹ですが、今は割り切りましょう」

「そうしたら？　今はあんまり余裕ないんでしょ？」

「……ええ」

春美の言葉に、カタリナは溜息と共に肯定した。

「ねえ、どうしてカタリナさんあんなに落ち込んでるの？」

「夏芽ちゃん、聞いてなかったの？」

ほら、テレビでやってた警視庁で大暴れしたって人、カタリナさんの前の知り合いなんだって」

ああそういうえば、とそれを聞いて夏芽は真冬に納得して見せた。

「知ってる人があんな派手に悪いことしちゃうと、悲しいよな」

「まあ、そうだよね。朝からどこもそのニュースで持ち切りだし。

よりにもよって、例の呪い事件の犯人らしいじゃない？」

千秋も心配そうに、カタリナを見やる。

感受性の高い夏芽まで気落ちしていると。

それは、その時に起こった。

真冬のスマホに着信音がポロンと鳴ったのだ。

「あれ、こんな早い時間に魔術師さんの放送が始まるんだ」

それは登録しているチャンネルの放送が始まるという通知だった。

いつもは午後なのに、とつぶやく真冬はカタリナの視線を感じて、ウツと小さく呻いた。

「き、昨日の事かな？」

魔術師さんって警察に協力してるみたいだし」

「私にも見せてもらっていいでしょうか？」

口に出した言葉は取り消せるはずもなく、カタリナの興味を引いてしまった真冬はこくりと頷くことになった。

『へーい、おはレプ〜♪』

今日はお前ら情報くれくれの物乞いどもに、とびつきりの餌を投下しちやうぞー!!』
きやははは!! と、機械音声からでもわかる子供の甲高い笑い声が、画面越しに世界各地へと発信される。

彼女たちは偶然、その放送を目撃していた。

日本の、そしてこの世界の歴史の転換期となる事件の、その序章を。

……

……

……

「望海さん、ここはどこです?」

十五分足らずの電撃的な放送を見終えて、その内容に衝撃を受ける面々の内カタリナが冷静にそう口にした。

「え、カタリナさん、行く気ですか?」

「彼の言葉に、聞き捨てならない一言がありました。

それを確認しないといけません」

驚く夏芽に、カタリナは簡潔に言った。

「いや、どこの病院かもわかりませんし、都内だとは思いますが流石にそれで絞るのは……」

と望海は答えたが、内心特定は容易だと確信していた。

あんな重体の危険人物が居るのはたぶん警察病院だろうし、一般人にも開放されているから警備の厳しさから判断すればすぐにわかるだろう、と。

いずれにしても望海に分かるのは、そんな中に彼女を連れて行くわけには行かないと言ったことだった。

「まず、落ち着こうよ。落ち着いて。」

勢いだけで行動しようとしても、ダメだよ」

千秋がカタリナの前に出て、その肩に手を置いた。

「分かっていますよ……」

カタリナは視線を逸らしてそう答えた。

自分が冷静さを欠いていたことには自覚があるようだった。

「ひとまず、魔女さん辺りに相談しよう。」

あの人はしばらく病院から動けないだろうし、私たちだけじゃ知恵も足りないと思う

し」

真冬が説得するように彼女にそう言った。

その言葉には、どうか早まって馬鹿なことをしないでほしい、という願いが込められていた。

「そうそう、まずは腰を落ち着けて何か飲もう。

いろいろと衝撃的過ぎて喉が渴いてきたよ」

あまり空気の読めない夏芽まで、そのように同調するくらいカタリナの意気は凄まじかったのである。

「うーん、とりあえず、聞いてみますか」

三人がカタリナを近くのカフェに連れ込もうとしているのを横目に、春美が電話で師に連絡しようとスマホに手を取ったのだが。

「あッ、師匠、もう来たんですか?」

馴染みのある匂いに、春美が振り返る。

よほどカタリナが心配だったのか、と思つた春美は目を見開いた。

それは望海も同じで、三人にまとわりつかれていたカタリナも警戒をあらわにした。

そこにいたのは、二人の師ではなかった。

まるで自分たちの師のような、黒衣の女がすすすと鼻を鳴らす。

そして、にんまりと笑つた。

「へえ、あの人の匂いを辿ってみれば、同輩、同門が居るなんてねえ」

その女は若いと言うのに、その語句のイントネーションはまったくとしていて、まるで老婆のようにその場にいた面々は感じた。

「同じ師を仰ぎ、同じ神を仰ぐ、我が新しい姉妹たちよ。」

こうしてこの三本道の中心にて出会えたのは、我らが女神の導きだろう。

さあ、二人とも、その顔をよく見せておくれ」

とても、とてもうれしそうに言うその女に、春美と望海も思わず顔を見合わせるのだった。

追憶について

都内の片隅にあるイヴの屋敷。

その主である彼女は、自室にて安楽椅子に揺られ、目を閉じていた。

本来彼女は睡眠を必要としない。

彼女にとっての睡眠とは、膨大な思考と記憶を整理するデフラグにも似ていた。

それだけなら人間と同じだが、彼女はそうしなければ忘れるということができない。

人類を超越するスペックを有する彼女も、それはあくまで人間サイズでしかない。モノには限度があるのだ。

そうして、彼女は記憶を辿る。

まずは、ごく最近の記憶だ。

「初めまして。会ってみたかったよ、我が『同輩』」

その場所は、病的なまでに白い部屋だった。

壁や天井、床や調度品まで白に統一された極限まで生活感が存在しない部屋だった。それに反するように、その部屋の主は黒一色だった。

黒いローブを身に纏う、黒髪の少年。或いは青年かもしれない。

黄色人種に見えるが、どこことなくイヴとはまた別に浮世離れしていた。

「ボクに協力を求めに来たんだらう？」

構わないよ。君がしたい通りにすればいい」

彼はある種の非人間的に感じるほど透明な笑みを浮かべてそう言った。

「なぜ？ どうして疑問を抱くんさい？」

君は自分の思惑通りことが運ぶことができるんだから、それ以上は必要ないはずじゃないか。

それとも、ただ了承するだけじゃ信用できないかい？」

くすくす、と少年は笑った。笑った、という動作だけだった。

「未知なるものは恐怖に値する。

随分と君は人間らしいんだね。羨ましくなんてないけど。

それに、ボクの事なんて知っても面白くないよ。必要でもない。

それよりも、君はもつと知るべきことがある。そう、君たちの計画の助けになるものについてだ」

イヴは彼に何一つ、自分から何かを話していなかった。

なのにこの少年は全てを決定ありきで話している。まるであらかじめ受け答えが録音された機械のように。

そうして、彼はイヴに預言を齎した。

それは確かに彼女の助けとなる物だった。それさえ有れば、彼女と召喚士の計画を大幅に前倒しできる。それどころか……。

「話すべきこと、伝えるべきことは伝えた。

この場においてボクの役割は終わった。

だけど君はこのまま帰ったりしない。そうだろうか？」

イヴは彼に尋ねた。

——お前に自分の意志はあるのか、と。

「難しい質問だね。例えば誰かに銃を突きつけられて脅され、親しい誰かを殺せと言われればそこに自由意思は無いとも言えるし、決死の覚悟で反抗することもできる。

少なくともそんな哲学には意味が無い。

君だってそう思うだろうか？」

イヴは同感だった。

思想に耽ることに彼女は意味を見出せない。

「意思、と言えば君は自分の意思に限界を感じたことはあるかい？」
そこで彼は、こんな質問をしてきた。

「君はたぶん、この地球上で誰よりも頭が良いだろうし、優れているのだ。ただどそれに意味が有ると思うかい？」

馬鹿馬鹿しい質問だと、イヴは思った。

意味が有るかどうか、よりもその事実が重要なのだと。

「確かに、それは事実かもしれない。

でも君は自分の才覚に限界があるのを感じないかい？」

無い、とイヴは言い切った。

少なくともイヴは必要な物をすべて備えて誕生した。

彼女にできないことは何一つとして無かった。

「ああ、言い方が悪かったかな。

この世界の最高値である君の頭脳は、そこで制限を迎えている。そうは思わないかい？」

イヴは鼻で笑った。所詮は哲学か、と。

「よくあるだろう？」

物語の登場人物は、その作者の頭脳を上回ることはできない。

世界最高の天才という設定の持ち主である登場人物が、凡人の作者の頭脳を上回ることはできない。

もしかしたら、この世界を神が創ったとして、その神は他の神々と比較して微妙な成績を学校の通知表で貰ってるかもしれない。

もしかしたら君の頭脳なんてモノは、その程度なのかもしれない」

だとしたら私以外はそれ以下ね、なんてイヴは笑う。

「どうか、或いは個々に制限があるだけで、この世界の住人は等しく同じだけの頭脳を有しているのかもしれないよ。

君が万物の創造主なら、個体差なんて無くして性能を均等にするだろう？

そして役割を課して、それぞれ必要な仕事をさせるはずだ」

それは。

それは。

たまらなく不愉快な言葉だった。

「怒らないでよ。

さつき必要なことは終えたと言ったけど、これも必要なことなんだ」

不服そうに、少年はぼやいた。

イヴの怒りを買った彼は、今まさに殺されかけていた。

「君は、自分の創造主を覚えてるかい？」

そう、親しい者たちから「博士」と呼ばれていた人物だ」

彼は少しも躊躇なくこう続ける。

「そんな人物って、本当に居たのかな？」

「いやいや、怒らないでって。ボクは君を怒らせたいわけじゃないんだ。

これもよくある話だけど、誰かが死んでしまったとして、その友人たちはこういうわけだ。

あの子の思い出が私たちの中で生き続ける、ってね。

じゃあ誰の思い出にも残っていない人物はどこにもいないのかな。

歴史上の人物や、自分の先祖とか。物語の登場人物の両親とかが描写されないと、これって同じだと思わないかい？

存在を確認できないのなら、それは居ないのと同じだ」

くだらない、とイヴは吐き捨てた。

自分は自分だと、彼女は言った。

「君の言うところの自分は、君の名前が書いてある文章を塗りつぶせば存在しなくなってしまう程度のモノなのかもしれないよ。」

——ああ、はいはい、黙ります。これ以上は余計な事は言いません」

イヴの殺意が増し、やがて降参するともいうように彼は両手を上げた。

「なぜ君は特に検証することも無く、今この時代を騒がせる異能者たちの転生の秘密に気づけたのかな？」

研究者であるはずの君が。なぜ確信を持てたのか？

ああいや、疑問に持つ必要は無いよ。どうせしばらくすれば勝手に分かることさ。

……ほかに何か台詞はあったっけ？」

ああそうだ、と次に彼はこう言った。

「よく、思い出すことだね。」

自分が何者なのか、そして自分が何をしたいかをね」

……

……

……

最古の記憶を呼び覚ます。

「イヴ、その棚の薬瓶を取ってきてくれ」

「分かりました、ご主人様」

「その後に、次の調合する薬のレシピを書き起こしておいてくれ」

イヴは道具だ。

それも、とても便利な道具だ。

だから彼女の記憶にある主人との思い出の大半は、作業風景だった。

彼女の主人の工房を訪れる人間は様々だ。

「お願いです、学者様。

うちの娘が病気で倒れちゃったんです!!」

主人を頼る村人たちであつたり。

「これが明日のパーティーの招待状です。

錬金術師殿につきましては、ご参加のほどよろしくお願いいたします」

欲にまみれた貴族が従者を寄越したり。

「貴様が異端の魔術師か!!」

神の御名において、貴様を処断する!!」

馬鹿な聖職者気取りどもであつたり。

「助かるわ博士。イヴもまた会いましょう」

道と同じくする同業者であったり。

長い、長い時間を過ごした。

「……イヴ、お前にはいつも世話を掛けるな」

ある時、彼女の主人が従者を労った。

「私はご主人様に尽くすのが使命ですから」

イヴは機械的にそのように応じた。

「使命か。随分と懐かしい言葉だ」

どこか目を細め、主人はそう呟いた。

「イヴ、この世界に神は居ると思うか？」

「あの愚かな連中曰く、人は神に似せられて作られたとか。

ならば、私にとつての神とはご主人様です」

「違うな。私は失敗したのだ」

主人は溜息と共に首を横に振った。

その言葉の意味を、イヴは理解できなかつたし考える必要も無かつた。

「だが、その代わりお前を造ることができた」

彼女は誇らしげに、己の従者を見やる。

「本来なら、お前を従わせることさえおこがましいことなのだ、私は」
「仰っている意味が分かりません」

「分からなくてもいい。だがお前は特別なのだよ、イヴ。」

お前は私ではなく、神の現身なのだ。私は所詮、出来損ないなのだ」

そう言つて、イヴとよく似た顔を歪めて笑う錬金術師。

「イヴよ、どうかこの世界の礎となるのだ。」

そして、いずれ私の代わりに我々の使命を果たせ」

「……私の使命」

人間でいうところの、パソコンの古いフォルダのデータを掘り返したイヴは、目を開けた。

目の前には、己の従者が勢揃いして待機していた。

「お姉さま、すべての準備が整いました」

「分かったわ」

イヴは従僕たちを従え、召喚士と合流すると港へ向かう。

「あなたが計画の修正を言い出すとは思いませんでした」

「ずっと探していたモノが見つかりそうなものよ」

意外そうにしている召喚士に、イヴはそう答えた。

船で無人島に到着した一行はそこに隠してある大型の転移装置へと向かった。

これは世界中のどこにでも一瞬にして移動できる錬金術の粋を集めて作った魔術装置だった。

以前イヴは高速の移動手段について伊藤刑事らに語ったが、それを応用したものだ。

人体が超長距離まで一瞬で移動した際に生じる時間的矛盾を別人に肩代わりさせることによって、自分たちは移動したという結果だけを得られる。

「行つてらっしゃいませ、お姉さま」

もうすぐ跡形も無く爆散するというのに、従者のホムンクルスはイヴに一礼する。

イヴは召喚士の他に、往復用の従者を連れて装置の上に乗った。

「武運を」

そうして、イヴの従者たちは己の命を終わらせる装置を起動させた。

「この氷の下に、例の遺跡があるのですか」

「ええ、見つけたわ。」

「私たちに魔術を齎した、神々の遺産を」

防寒具を身につけた二人が分厚い氷の下に眠る巨大な影を見下ろし、笑みを浮かべた。

「本来ならその影響力を期待していたのだけど、これだけの物を引き上げるにはテンペストの力が必要そうね」

「それが最もローコストでしょう。」

では、先日話した通り、彼を味方に引き入れるということでは、
そうして、この日二人の計画が一段階進むことになった。

§ § §

「じゃあ、あなたは前世で師匠の弟子だった、と言うことですか」

春美は自分たちの前に現れた女に、そう尋ねた。

あの後、面々は近くのカフェテラスの席に座って彼女の事情を尋ねたのだ。

「そうだねえ、昔の知り合いからあの方がこの街に居ると聞いて出向いたて来たんだよ」

「生憎ですね。師匠なら今田舎に帰ってます」

「そうかい、なら出直すかねえ」

望海の言葉に、彼女は特段残念そうにするでもなく、そう呟いた。

「それにしても、どういう経緯かは知らないけどね。」

私の妹たちが教会の人間と仲良くしていると驚きだ」

肩を竦めて、彼女はカタリナを見やる。

当然ながら彼女はカタリナが一般人ではないことぐらい気づいていた。

「ヒヒヒ……まあ、ここはお互いに踏み込まないでおこうかねえ」

だがジツと警戒を露わにしているカタリナを見て、彼女は面倒ごとを避けることにした。

「まあ、しばらくこの街で待つとするかね。」

いずれ戻ってくるだろうし、押しかけるのも悪い。

二人も、何か困ったことがあればいつでも相談するといい。

同胞として、いつでも歓迎しよう」

彼女はそう言って、連絡先を春美に渡した。

「そうそう、ところでさっき例の事件の犯人について話してたみたいだけど。」

あの男に何か用でもあるのかい？ 身内に被害者でも出たかい？」

「あー、どうするカタリナさん？」

「気を使わなくても良いですよ。時間を掛けて探せばいいだけですから」

夏芽がカタリナを気遣うが、カタリナはただそう述べた。

「……知り合いかい。あんたも、あたしと同じってわけか。」

これも縁だ。私も偶然警察に協力を求められてあの男と係わったんだが、今どこに居るか教えてやってもいい」

「知っているんですか？」

「警察に教えられたわけじゃないがね。」

呪術的な繋がりはまだ残っているんだよ」

それで大体の位置は分かる、と彼女は言う。

「案内してやってもいい。ただし、報酬は貰うがね」

そう言って、どこか意地悪く笑って彼女はそう言った。

.....

.....

.....

その日の昼過ぎ、副長の病室にてドアが開いた。

てつきり看護婦が昼食の食器を下げに来たのかと思つた副長は、目を見開く。

「やはり、あなたが来ましたか」

副長は通路側から堂々と入つてきたカタリナの姿を認めて、どこか安堵したようになう言つた。

「私を殺しに来たのでしょうか？」

「その前に、尋ねたいことができました。

さっきの放送の事です」

「ああ、総長も見ましたか？」

我ながら大根芝居だったでしょう？」

でしょうね、とカタリナは呟いた。

彼はやろうと思えば、あの時警官たちを殺して押し通れたはずだった。

そして先ほどの配信だ。出来すぎている、と彼女は思つた。

「誰に頼まりましたか？」

我々に、術を呪符に付与する技術は無かつたはず。

それをするには高度な魔術の腕が必要だ」

「まず一つ目の質問に答えましょう。

誰に頼まれたか、でしたか？ 私の意思ですよ」

カタリナの追及に、包帯だらけの副長は口角を上げてそう言った。

「二連の事件は、私のやりたかったことだ。」

馬鹿な連中に、馬鹿を見させてやる。それが楽しくてやったことだ」

「副長……!!」

「総長、あなたはいつ己の記憶を取り戻しましたか?」

怒りを滲ませるカタリナに、副長は語りかける。

「自分は、学校で宿題をするのを忘れ、放課後にやらされている時でしたよ。」

俺は小中高とずっといじめられ通してね。

ある日、俺は偶々その日残っていたクラスの女子グループに取り囲まれて好き放題笑われていたんです。

特に関わり合いがあるわけでもない女子どもに囲まれて侮辱され続け侮られ、ペンをひたすら進めるしかない屈辱が分かりますか?

そして思い出したのです。俺は前世でも今生でも同じなんだ、と」

自嘲するように低く笑って、副長は言った。

「俺を嘲笑った連中に報復するのは簡単でした。」

ある者は自滅させ、ある者は呪いを掛け、ある者は仲間割れさせ……傭兵団での経験が生きましたよ。

ねえ総長。学校が社会の縮図だというのなら、今の世の中は我々に対してどうしてくれるのでしょうかね」

「……………」

「そう思つて、馬鹿な連中が自滅していく姿をほくそ笑んでいたら、技術提供者から話を持ち掛けられたのですよ。ああ、これが二つ目の質問の答えになりますかね」

「誰です?」

「総長も知つているでしょう?」

あの女ですよ。あの薄気味悪い、色白のヒトモドキ」

副長の言葉で、カタリナは目を瞑つた。

そして思った。なんとなく、確信に変わったか、と。

「自分は彼女と取引をしたのですよ。」

もし捕まるようなことがあれば、前世の境遇を話せ、と。

そうして今の社会に一石を投じるのだ、と」

「なぜ、そんなことを?」

「さあ? でも俺は愉快だと思つたのでやってやりましたよ。」

その結果がどうなるのか、俺は今から楽しみですね」

くつつつ、と他人事のように副長はそう述べた。

「……副長、あなたは虐げられる者の気持ちを理解していながら、なぜ」
「人の痛みを知るから誰かに優しくなれるとでも？」

馬鹿馬鹿しいじゃありませんか。そんなのはやり返す力も度胸も無い連中の傷の舐め合いだ。

やられたらやられっぱなしで、やった方は自分の与り知らないところで報いを受ける
とでも思うのですか？

嫉妬の神とさえ呼ばれる我々の神が、私たちの痛みを知ってそいつらに天罰を与える
とでも思うのですか？

ははは、総長はもう一度聖書を読み返した方が良い」

本心からそう語る副長は、邪悪ですらなかつた。

ただただ、寂しいだけの弱い男だつた。

「だから自分はこの女の茶番に乗ってやったんですよ。」

——我々は、やられるだけじゃ終わらせない、とね!!」

「ただひたすらに、残念ですよ、副長」

カタリナはただ目の前で今も見えない恐怖に怯え、苦しんでいるかつての同胞の苦しみに涙していた。

「もっと、もっと早く、あなたに逢えればよかったのに」

ただそれだけが残念だった。

彼を止めるには、もう遅すぎたのだ。

「……帰ります。次会う時はどうか罪を償っていてくれることを祈ります」

「さようなら総長。もう一度貴方に会えてよかった」

がたん、と病室の扉が閉じ、カタリナの姿が消える。

魔術によつて感覚が狂っている見張りの警察官の前を過ぎ、カタリナは警察病院の駐車場へと出て行つた。

「どうだった？ つて聞くのは変かな」

「別にどうもしませんよ、ただ古い知り合いに会つただけですから」

わざわざ東京まで付いて来てくれた友人たちに、カタリナはそう答えた。

「せっかくここまで来たんです。」

「どうせだから、こつちで何か買ひ物でも楽しみましょう」

「そうだね、じゃあ何して遊ぶ？」

切り替えの早い夏芽が、心配から一転して他のみんなにそう尋ねた。

「はいはい、ケーキバイキング行きたい!!」

「太るよー」

「私は賛成」

早速相談し始めている友人たちを見て、カタリナはほんの少しだけ微笑むのだった。

仮面について

「まさかこんな時期にこのイベントをする羽目になるなんてなあ」

警視庁鑑識課警察犬係に籍を置く犬養巡査は小さくため息を吐いた。

彼女と同僚たちは、以前より企画されていた警察犬と一般市民が触れ合うという触れ込みのイベントを行っていた最中だった。

本来なら先の事件によって中止になるところだったのだが、世情もあつてそうはならなかった。

犬養は自分が担当している警察犬に視線を向けた。

「わあー、おつきなわんちゃんだー!!」

「顔がいつぱいついてる!! つよそー!!」

「ねえねえ、火い吐けるんでしょ? 見せて見せて!!」

子供たちに群がられ、面倒くさそうに四つ足を折って地面に座り込んでいる黒い三つ首の怪物がそこに居た。

これがこのイベントの目玉だった。

いつもなら大して盛り上がりを見せないはずのイベントであるが、今回ばかりは違っ

た。

彼が一般公開されるのは、今回が初めてなのだから。

神話にしか登場しない怪物の周囲は子供たちに囲まれ、その黒い毛並みをべたべたと触られている。

少し離れた位置ではスマホで写真を撮る者が絶えず、会場は彼を一目見ようと周辺道路が混雑するほどであった。

会場の外は順番待ちで並ぶ客が長蛇の列を作り、周辺住民は今日はコミケの日だっけと勘違いする有様だった。

交通整理の為に急遽交通課が出張る羽目になり、このケロベロス担当だった犬養も現実逃避したくなる盛況ぶりだった。

その日のトレンドワードは当然「ケロベロス」であり、日本だけでなく世界のトレンドでもトップに躍り出た。

当初は犬養も「危ないから離れてくださいねー」と言っていたが、この人海の前では彼女のか細い声など届くはずも無く。

あまりにも想定外の事態に、主催者側も処理能力を大幅に超えてしまっていた。

このイベント、このケロベロスに関しては一般公開だけで、今回ただ居るだけなのにこの有様だった。

この会場では彼の能力を披露するには狭すぎる為だったが、それは正解のようであった。

彼がここまで異様な人気が出たのは、先の警視庁の一件で活躍したと報道されたと言うのもあった。

それを強調して発表したのもあるが、実は警察は今こんな糾弾を受けていた。

——警察はネクロマンサーを捜査に協力させて、倫理的に問題あるのではないかと、化粧屋が異能係に協力者として入り浸っていることが、本格的に世間に知られてしまったのである。

警察は倫理に問題のある行為での捜査協力は行っていないと主張したが、世間というものには信じたい物を信じる物である。

先の警視庁の事件のことも相まって、今の警察上層部はガタガタだった。

当初、異能係の伊藤刑事が責任を取らされるのではないかと皆は思ったのだが。

「あ、伊藤ちゃんがクビになるなら私との協力関係はそれまでな」

「私も彼が居なくなるなら大人しくしてやるつもりはないな」

化粧屋が軽い口調で、ティフォンが脅し交じりにそんなことを言うものだから、伊藤刑事の代わりに更に上の人物が処分されることになった。

先の事件が警視庁の人間に落とした恐怖が計り知れないという証左であった。

誰だって、異能係の係長などやりたくないと言うことでもあった。

犬養巡査は思う。

このケロベロスが、近く警視庁に訪れるだろう改革の波の象徴になるのだろう、と。

§ § §

異能係の事務室には、型落ちだがテレビが設置してある。

以前休憩室の備品を入れ替えた際に倉庫に押し込まれた物を化粧屋が引っ張り出して暇潰しに用いている。

職員が書類仕事をしている横で化粧屋やティフォンが自分たちの好きな刑事ドラマや特撮を見ているものだから、その内容の批評まで始めるようなら彼らは内心イラっとすることもあつた。

とは言え化粧屋には言つても仕方が無いし、ティフォンは異能係に押し付けられた特例の保護観察状態のようなもの。

仕事の邪魔だから出ていけ、とは言えないのだった。

さて、ここ数日そのテレビの前でスライムソファアーに腰を落としているのはティフォ

ンだけだった。

先の事件で首から下が使い物にならなくなった化粧屋の体の修復に時間が掛かっているのである。

「よッ、ハロー、伊藤ちゃん」

だがその日、伊藤刑事が登庁するとティフォンと一緒にあって化粧屋がニュースを見ていた。

もう完全に体の方は元通りだった。

「お前、生首状態を見た時から思ってたがホントに体が損壊しても問題ないんだな」
「手頃な死体があればそれで代用したんだけどな。」

日本は居心地が良いが、素体の入手が面倒なのがいけない。おかげでイヴの奴に面倒な仕事押し付けられちゃった」

億劫そうに化粧屋はそう答えた。

「化粧屋よ、思ったのだが、其方なら発展途上国辺りに行けば幾らでも素材は調達できよう。」

魔術を畏れる地域や信仰のある地域で活動し、裏マーケット辺りで死体が売られている場所などもあろう」

「おいおい、私はこれでも錬金術の薫陶を受けてあの時代にはペストが大体どういうも

のか把握してたんだぜ？

馬鹿どもがハンセン病が神の罰だとかペストが呪いだとか言われてた時に衛生とかちゃんと気にしていたんだからな？

私がこの国に居を構えてるのは衛生がしつかりしてるからだ。それ大事だぞ。マジで」

「前世でも国外に出たことのない私にはわからないが、そんなに酷かったのか？」

化粧屋が実に真面目に言うものだから、思わずティフォンも聞き返してしまった。

「あの時代のフランスとかの宮殿の花壇に行けばシヨンベン臭いし隅の方には大きいのが転がってるのがザラだった。

街中を歩けば茶色い物体が踏みならされて広がってるし、臭いが酷いところは昼間から戸が閉められてたくらいだ。

俺が生きてた時代にコレラが流行しなかったのが不思議なくらいだぜ」

まさに実際に見て来た光景を語る化粧屋の言葉に、伊藤刑事も横で声を聴きながら今の時代の日本に産まれてよかったと思つた。

「朝っぱらからそんな汚い話をしないでくださいよ」

話の内容が内容なので、妻鳥から苦情が出始めた。

他の職員たちも、何度も領いている。

「はいはい、悪かったよー、と」

投げやりに化粧屋がそう応じると、彼女はテレビのニュースに視線を向けた。

「もう都知事選の時期か。次の都知事は誰かねえ」

政治に関心なんて無さそうな彼女がそんなことをぼやいた。

「今の世情で都知事になっても罰ゲームだろうがな」

ティフオンも腕を組んでそう呟く。

ニュースでも評論家が、異能者対策が当選の争点になるだろう、と語っている。

「そりゃあ、あの人がとんでもないことしちゃいましたからね」

「その後もな」

副長の恐怖を間近で味わった妻鳥や、魔術師に一杯食わされた伊藤刑事も苦々しい表情になる。

『私たちは異能者の起こす犯罪などに対し、厳格に対処しなければなりません!!』

市民の安全こそ、何よりも優先されることです!!

法が機能しないというのなら、都政で対応するしかないのです!!』

と、街頭演説で立候補者らしき人物が選挙カーの上で演説をしていた。

『こういった演説の内容が多くみられる中、ひと際注目を上げているのが——』

続けてニュースキャスターの進行に従い、別の候補者の映像が映る。

『異能者は確かに恐ろしい!! その力に溺れ、驕り、害を成す者も居るでしょう!!
だがしかし、彼らは人間です!! 異能を保持しているからと恐れ、遠ざけ、差別的な
政策が許されるのでしょうか?』

我々と同じ国に産まれ、同じ人権を持った国民に違いはありません!!

我々が本場にすべきなのは、過去の人類が犯した過ちのように彼らを隅々まで見つけ
だし、狩り出すことでしょうか?』

……これを見てください』

その候補者は、写真立てを取り出した。

そこには幼い少女が病院のベッドで笑顔を浮かべている姿が映っていた。

『これは四歳になる私の娘です。』

産まれた時から難病を患い、十歳まで生きる確率は0・1%だと言われました。

しかし、ある時外国で医者を探している時に知り合ったとある異能者に薬をも継る思
いで魔術による治療をお願いしたのです。

すると、現在の科学では治療不可能だった娘の難病が快方に向かったと担当医に言わ
れました』

彼が語るのには、実に分かりやすい美談だった。

『我々がすべきなのは、異能者を規制の縄で縛り付け、未知だからという理由で法や力で

押さえつけることですか？

私たちがすべきなのは、彼らと手を取り合い、理解し合い、その異能の恩恵を分かち合うことではないのですか？

そうして初めて、私たちは理不尽な異能に対する対処方法を得られるのではないのですか？

私が目指す都政は——』

そこで、化粧屋はリモコンでテレビの電源を切った。

「最後まで見ないのか？」

「当選はあいつで決まりだ。投票に行くのもめんどくさい」

興味を引かれたのかそんな風に尋ねてくる伊藤刑事に、いい加減そうに化粧屋は返した。

「それはお前の靈感か？」

「いや、既定路線だ。少し前から気になってたんだ。」

イヴの奴がどうして日本に居やがるのかって」

「……ああ、そういうことか」

顔を顰めている化粧屋に対し、ティフォンが得心が行ったとばかりに頷いた。

「今の候補者、前にイヴの屋敷に行った時に接待されてた奴だ。」

権力者に取り入って、様々な恩恵を与えて便宜を図らせ、自分たちに有利な状況に持っていくのは師匠の十八番だったからな」

「マジかよ……」

勿論僅かにチラ見しただけの伊藤刑事は覚えていなかった。

「うむ、社交界に根を張り、資金援助させるのは錬金術師殿の常套手段だった。

前に話したであろう、刑事殿。我々はやろうと思えば国を裏から牛耳るのは容易だった、と。」

既に権力を持つ者ではなく、自分の息を掛かった者を入れるか。これは何か仕掛けるつもりだろう」

「……………」

「これは警察上層部も、彼女の鼻薬を嗅がされた連中で埋まるだろうな。」

あの病室での一件があつて未だ刑事殿の処分が保留のままのところを見て、異能事件の捜査で処分が下る前例を作りたくなかった、というところか？」

ティフオンは意味あり気に伊藤刑事を見やる。

彼はその視線を受けて、背筋に冷たいものが走った。

まるで、巨大な陰謀の歯車にされたような、そんな得体の知れない恐ろしい何かを感じたのだ。

「鼻薬、ねえ。やっぱり錬金術師だから、金の延べ棒とか渡したんでしょか？」

冗談交じりに妻鳥がそんなことを言った。

「いや、私が以前聞いたところだと、年老いた老人に若さを与えたり、凡人に魔術的施術を施し超人にしたり、今のようによろしく不治の病の治療を取引材料にしたらしい」

「とんでもないな……」

ティフオンの話を聞いて、脳裏にあの非人間的なまでに整った笑みを思い起こした伊藤刑事だった。

「錬金術師殿は昔自慢していたよ。」

自分は数多くの英雄や天才を生み出した、と。

それらの活躍や発明によって、この世界の文明は進んだのだ、とね」

まさしく自分たちがあの時遭遇したのは、数百年を歴史の裏側に潜む怪物であったと身震いする一般人二人だった。

「おい、化粧屋」

「なんだよ伊藤ちゃん」

お昼の休憩時間、他の職員たちが食堂へと向かうのを見計らって伊藤刑事は化粧屋に

話しかけた。

「あ、そうだ、伊藤ちゃんさあ、実家に押しかけるのは無しだろお？」

あの後、家族会議よ。家族会議。お袋はちよつと精神的に脆いところがあるんだからもうやめてくれよな」

彼が何かを言う前に、化粧屋がまくし立てる。

「……なぜ、俺たちの為に戦ったんだ？」

お前が警察の為に体を張る必要なんてなかっただろ？」

だが、伊藤刑事の言葉に化粧屋は顔を反対まで逸らした。

「私のスタンスは何一つ変わらない。」

私は私の美学に従って動いただけだ」

どこか努めて素っ気なく、彼女はそう答えた。

「でも意外だったよ。いつも享樂的にしか見えない言動しかしないのに、形振り構わず自己犠牲をするなんてな」

化粧屋はその見た目や言動から分かりにくいのが、その行動は一貫して他人の為だった。

少なくとも伊藤刑事は自分の利益や金銭の為に行動しているようには見えなかった。

勿論、魔術の実践こそが目的だと言われればそれまでだが、それが理由なら警察は窮

屈なだけだろう。

事実、世間で言われ始めているように倫理に反する魔術を彼の間の前で使ったことは一度も無かった。

「……」

化粧屋はサングラスを付けていても分かるほど眉を顰め、パイプを取り出した。

「おい、未成年だろ。タバコを止めろ」

ただでさえ、その中身は目が飛び出るような劇物のオンパレードだったのを思い出す。

吐き出す煙は無毒らしいが、煙たいには変わりない。

「なんでタバコが悪いんだ、刑事さん？」

すると、そんな不良が学校の先生に揶揄するような口調で彼女はそう言った。

「そりゃあ、体に悪いからだろ」

「ほほう、この体に悪いからか!!」

そりゃあ面白い意見だな!!」

馬鹿馬鹿しい冗談を聞いたかかのように笑う化粧屋の態度に、伊藤刑事も顔を顰めた。

「よくわからないが、本体と感覚は共有しているんだろ？」

「どう考えてもそのタバコに依存してるじゃないか」
「素人意見だなあ。魔術はリスク管理だって言ったろ。」

この体を通すことで本体には実害が出ないし、不必要な感覚を切ることで依存症も無視できる。

「そうやって恩恵だけを享受することこそが魔術なんだよ」

大人を言い負かす屁理屈を言っただけと言わんばかりに笑みを浮かべる化粧屋に、彼もため息を吐いた。

「私が吸ってるのはゾンビパウダーの一種だな。」

この体で活動するにはこれをこの体内に取り込まないといけないんだよ。

私の靈感が高いのも、これで年中ハイになってるからなんだな」

知りたくない事実だった、と伊藤刑事は思った。

「分かんない。前世の記憶ってのは、そんなにも今生に引つ張られるもんなのか？」

頭をガシガシと掻き、彼は肩を落として溜息を吐いた。

中身が年ごろの少女だからではないが、どうしても彼は化粧屋を理解しきれなかった。

「私」の場合、「俺」の記憶はショッキング過ぎた。

「私」は自分の心を守るために、無意識に「俺」という外殻を作った。

私は私で、俺は俺という区分を決めたんだ」

「お前、二重人格だったのか？」

伊藤刑事は時折化粧屋が一人称を使い分けていることぐらいには気づいていた。普段は「私」、前世の自分を言及する時は「俺」というように。

「ちよつと違う。右手と左手みたいに使い分けている感じだ。説明は難しいな。最近の言い方でいえば、ペルソナが近いのか？」

RPGで敵の人間を銃で撃ち殺しても心が痛まないのと似ているな」

「それは……」

それは無理やり現実感を欠如させているのではないか、とまで彼は言えなかった。

「もしお前が、前世の事を負い目に感じてるなら」

「それは違う。違うよ伊藤ちゃん」

気を遣う彼に化粧屋は首を振って否定した。

「言つたら、私は私だ。」

なぜ俺の悪行を私が背負わないといけないんだ？

あんたは映画で虐殺者が登場して、そいつの行いに責任を感じるのか？」

「だが……」

「こんな意味の無い問答に、貴重な休憩時間を使う必要なんてないよ。」

私は、俺は、人生をこの上なく謳歌している。それだけが事実だよ」
そう言つて、パイプに口を付ける化粧屋を見て伊藤刑事は次の言葉が出てこなかつた。

「あー、もう、年ごろの女子も、異能者もまったくわからん!!」
なんて言いながら、彼は事務室を出て行つた。

「そうさ、私も俺も、偽物じゃない」
タバコの効能に身を委ねながら、化粧屋は静かにそう呟いた。

侵略について

「レプ、出るぞ」

自宅で外出の準備を終え、仮面を付け終えた魔術師は同居人に声を掛けた。

「はい、マスター。そういうわけだから、このクソつままないゲーム終わり!!」

今からマスターと一緒に出かけするから。じゃねー」

レプはゲーム配信の真っ最中だった。

超能力者を養成するというお題目のレトロゲームを実況していたのだが、クソゲーとして有名な作品らしく呆れながらプレイしていた。

運ゲーでしかないミニゲームをひたすら単調に繰り返すだけ、という内容のこのゲームをノーミスでクリアし続けてゲームクリアするというチャレンジをして暇をつぶしていた彼女もいよいよ加減飽きたのか配信を打ち切った。

「またゲームか」

「マスターも遊ぶ？ プログラムの確率をリアルタイムで操作するだけの簡単なゲームだよ」

「それは人間の遊び方ではないが」

「だって、海外のRTA学会で妖精はレギュレーション違反だつてことになつちやつたんだもん!!」

「バグ使わないとタイム縮められないのつて煽つたのがそんなに頭に來たのかな?」

「馬鹿馬鹿しい」

世俗的なことにあまり興味のない魔術師はレプを肩に乗せて自宅から出立することにした。

二人の目的地は、都内にある。

電車を乗り継ぎながら、彼らは人混みの合間に行く。

「日本人つて変な生き物よね。」

せっかく移動手段が発達してるのに、早く移動できるならその分休めばいいのに、より働こうとするんだから」

通勤ラッシュに辟易する妖精の戯言を聞き流していると、彼は乗り継ぎの合間のとある駅のホームにて足を止めた。

「何か揉め事かな?」

何やら遠巻きに見ている数人の人ばかりを見て、レプが興味を向けた。

「君、いい加減にしないか!!」

「うるっせえんだよ、おっさん!!」

若い男と、中年のサラリーマン風の男がホームの隅で揉めていた。

その間には、ベビーカーに乗せた赤ん坊を連れた女性がオロオロしているのが見えた。

そのまま過ぎ去ろうとした魔術師が魔力の脈動を感じて振り返る。

なんと、サラリーマンらしき男が見えない何かで壁に押し付けられているではないか。

どれほどの圧力が掛っているのか、彼は苦しそうに呻いた。

「これで分かっただろ、俺は異能者だ」

能力を解除し、崩れ落ちる男を見やり鼻を鳴らす若者。

周囲では小さく息を呑む音や、怯える雰囲気が始めていた。

「俺はさあ、誠意が欲しいだけなんだよ、オバサン。」

わかるう？ ちよっと痛い目みさせても、俺は構わないんだぜ？」

一体どういう経緯でこのような事態に至ったのかは知るところではなかったが、この若者からは自分が何をしても警察に捕まることは無いと高を括った様子が見て取れる。

「おやめなさい」

ただの揉め事なら、魔術師は見過ごしただろう。

だが彼は異能者と一般人の間に立つという宿命を背負っている。厄介ことは、向こうからやってくるのだ。

「なんだ、てめえ。そのふざけたお面は。ネットの有名人の真似事かよ」
「かもしれませぬね」

彼は若者の声を受け流し、痛みに呻いているサラリーマンを助け起こす。

「あ、あなたは、まさか、本物……？」

「さて、どうでしょう」

驚く彼に、魔術師は曖昧に返した。

「どちらに非があるのかは知りませんが、暴力を持ち出すのはいけませんよ」

と言いながら、仮面の魔術師は怯える女性の元へと歩み寄る。

「ましてや、それをもって恫喝など言語道断の所業でしょう」

ここ最近、調子に乗った異能者が軽犯罪を起こすという事件が数倍に増えたとニュースでやっているのを思い出しながら、彼は若者に警告した。

「あなたには関係ないだろうが!!」

「怒鳴るくらいなら、赤ん坊を連れた女性を恫喝する根拠を述べなさい。」

「貴方に正当性があるならそのような態度に出る必要などないのでは？」

「うるせえ!!」

話にならない、と彼は若者を無視して女性に振り返る。

「いったいどうしたのですか？」

「こ、この人が、その角でベビーカーにちよつとぶつかってしまっただけで、難癖付けてきて……」

女性は涙目になりながら魔術師にそう答えた。

彼は静かにうなづく。

「だそうですが、そちらの言い分は？」

「うざいんだよ!! てめえ、邪魔すんじゃねえ!!」

自分の思い通りに事が運ばないことにいい加減イライラしたのか、若者は邪魔者を己の異能で再び排除しようとした。

何も、起こらなかった。

「うツ……」

いや、若者は気づいてしまった。

目の前の存在との、あまりにもかけ離れた力量の差に。

「ところで、ケルト神話における有名なクローリーの牛争いについて知っていますか？」

じゃれつく子供の手を払いのけるように、不可視の力場を霧散させ、仮面の魔術師は

問う。

「この戦争の話において事細かく説明するのは難しいのですが、アルスターという陣営の男たちはある事情があつてその戦争に参加できなくなつてしまうのです」

蛇に睨まれたカエルでも、もう少しまでもだろうと思えるほど若者は青くなつていた。

彼は目の前の存在からもう既に何度も逃げようと試みていた。

だが、うめき声一つ出せなかつた。

「女神マツハが呪いを掛け、彼らは五日もの間女性の陣痛の痛みを味わうことになつたからです」

すつ、と彼は若者を指差す。

「あなたにそれと同じ呪いを掛けました。

その苦痛を持つて、反省しなさい」

それだけを告げて、魔術師はその場を去つた。

その背後に、激痛にのたうち回るような悲鳴を受けながら。

§ § §

「くすくす、容赦ないねえ」

「女性に無条件で優しくしろ、とは言わないがあの態度ではなあ。」

ただ見逃すだけならまたやるだろうし、あの手の輩は早めに灸をすえておいた方がいい」

「屈強な戦士が戦闘不能になる呪いを五日も耐えられるかなあ。くすくす」

一般的に、男性に比べて女性の方が苦痛に対する耐性があると言われている。

その最大の理由が、陣痛の痛みを耐える為とされている。

仮に男が陣痛を経験するなら、その痛みを耐えられないと言われているほどだ。

それを五日間。灸をすえるというには残酷なまでの期間だ。

「大丈夫だ。この呪いで死には至らない。」

確実に五日、苦痛が続くと言うことでもあるが」

「きやはははは!!」

何が琴線に触れたのか、レプは魔術師の肩の上で笑い声をあげた。

そうして雑談しているうちに駅から出て、ある施設の前へと辿り着いた。

「宗教法人『輪廻の扉』か……」

立派な門構えに張られたプレートに文字を確認し、彼はインターホンを押した。

程なくしてドアを開けて現れたのは、喪服のような黒い服の女だった。

「……お待ちしておりました、魔術師様。

私がこの施設の代表を務めさせて貰っている者です」

彼女は彼を一目見ると、一礼した。

当然、彼は事前にアポを取ったが、いつ来るかや、自分の容姿など説明した覚えはなかった。

「あなたも、同業者ですか」

「ええ、まあ、占いなどを少々。お陰で教祖などと祭り上げられてしまいました」

と、彼女は謙遜するように微笑んだが、魔術師は真に受けなかった。

「奥へどうぞで。」

我らがご神体。——「預言者」様がお待ちです」

魔術師が通されたのは、教団の奥にある白い部屋だった。

その部屋の黒いシミのように、預言者は待っていた。

「初めまして、待ちくたびれたよ」

部屋の主は魔術師の姿を見て微笑んだ。

黒い少年、或いは青年。

その中性的な顔立ちから女性かもしれない。

声では判別できない。そんな曖昧さが混在しているのが、*「彼」*だった。

「あなたが、*「預言者」*？」

「まあ、*「そういうこと」*にはなってるね」

まるで自分の立場など興味が無さそうに、預言者はそう答えた。

「なんで、*「こいつらが……」*」

件の預言者がどんな奴か楽しみにしていたレプは、露骨に顔を逸らした。

「彼女に会えって言われたんでしょ？」

君を押し付けるなんて、酷い嫌がらせだ」

どことなく不満げな表情を作って、彼は言う。

「ボクに会おうが会わまいが、君の行動がブレることなんて無いのにね？」

部屋の主は客人に構うことなく、紅茶を口にする。

「あなたは、あの女に協力しているのか？」

「この教団の存在意義の為にね。差配は代表に任せているけど」

優雅に紅茶を飲む預言者を見つめながら、彼は疑問を口にしようとした。

「なんでボクが代表じゃないか、って？」

ボクの役目はこの教団を創ることであって、運営することじゃないからさ」

声に出るより先に、預言者は言った。

「意味が分からない？　そうだろうね。」

でも見えないところのディテールを気にしてもしょうがないだろう？

生憎ボクは職人気質じゃないんでね」

まるで世捨て人か仙人か、彼の価値観は言葉にするのにどこか独特だった。

「イヴにとってボクは、——ああ君はラノベとか読まないか。でも俗世の表現は分からないからそのまま続けるけど、領地経営モノに出てくる都合がよく頭が良くて計算もできる脇役みたいなものさ。」

主人公が物語の展開を広げるために自分の領地から出る時、いい感じにその間任せられる便利な舞台装置。そんなところかな」

預言者は価値観も独特なら表現方法も独特だった。

「君は、自分の強さに疑問を持ったことはあるかい？」

早々に会話を諦め始めていた魔術師に、彼は問いかける。

「最強が最強であり続けるってのは、実際には難しいよね。」

君はもしかしたらこの世界で一番強いのかも知れない。

その妖精を屈服させて従わせているように、君の強さの基準は一線を画している。

でも、物語の最初から最後まで最強の存在が居続けるのは珍しい。

ある時は主人公の壁、或いは目標、最近だと踏み台が多いかな？

君の強さも所詮、後付けでどうにでもなる程度なのかもしれない」

「あなたが何を言いたいのかわからないのですが」

「ああ、ごめんごめん。一方的にまくし立てるのがボクの悪い癖なんだ」

彼はちつとも悪いと思つて見えるように見えないが、魔術師はそこに言及することは無かつた。

「じゃあもつと別の話をしようか。」

どうせ君は、ボクのところに来た『だけ』なんだから」

まるでこの邂逅に意味を見出していないかのように、彼は語る。

「君は調停者として多くの人間を見て来たと思うけど、今の異能者たちの事情についてどう思う？」

「特には。思うところはあるけど、私の役目は変わらない」

「そう言うと思つた。」

僕はもうちよつと振れ幅のある人間が好みかな」

つまらなそうにしている彼は、そんなことを口にした。

「結構いるよね、君みたいの人。最初から最後まで主人公に付き従う味方みたいに、善人なら決して悪事をしないみたいなキャラ設定の奴。」

人間ならもう少し、心に魔が差すぐらいでちよいと思わない？」
ここで初めて、預言者はレプに視線を向けた。

彼女は一言も発さず、白い壁に顔をそむけたままだった。

「まあ、ボクが言えた義理じゃないけどさ。

そんな余計な機能があることが羨ましいとも思っているわけでもなし」

いい加減、魔術師も帰りたくなってきた頃。

「さて、せつかく君もここまで来たんだ。手土産に預言の一つでもしておこうか」
そこで初めて、預言者の表情が意地悪そうに——本当に楽しそうに笑った。

「——イヴは今年中に数百人も人間を殺すだろう。」

他ならぬ、君を含めた異能者たちの為に」

彼は預言する。

確定した運命を語るかのように。

「場所も言おうか？　ここ、東京だよ。」

それによって不幸になる人間は世界中を含めて何千万人にも及ぶだろう。

だけど、未来を含めて同じ数以上の異能者を救うだろう」

魔術師は手に、汗が浮かぶのを感じていた。

ああそうだ、厄介ごとは向こうからやってくるのだ。まるで彼を試すように、神々は彼に試練を与える。

「さて、君はどっちの味方をするのが公平かな？」

預言者は仮面の奥の強張った表情を見透かすようにニヤリと笑うのだった。

§ § §

「狂ってるわ……」

イヴと召喚士に計画の全容を聞かされたサラは、己の胸中に浮かんだ言葉をそのまま吐き出した。

「あなた達、自分が何をしようとしているのか、わかっているのか？」

召喚士の事務所の応接室にて、対面する二人に彼女は言った。

「すぐるように、今の話が間違いであることを祈るように。」

「まあ、かなりの人数は死ぬでしょうね。」

事前の試算だと、千人以下には減らせると思うけど」

「そういうことを言ってるんじゃない。」

私に、そんな計画に加担しろって言うの!？」

「別にあなたが実行するわけじゃないわ。」

そして世間も私たちが実行すると知るわけでもない」

単純に数字を語るだけのイヴと違って、サラは震えが止まらなかった。

この二人は、東京を地獄絵図に変えようとしているのだから。

「それに、どうせ私たちがやらなかったらもつと大勢死ぬわ。」

それともあなたはいつ起こるか分からない災厄に怯える方がいいの?」

「それとこれとは話が違うでしょう!!」

「まあ、意味合いは違うでしょうね」

淡々としているイヴと召喚士。

その態度が余計にサラを苛立たせる。

「この計画が、私たちにとつても、この国にとつても最良の選択のはずよ。」

それに、死人が出るのはある意味自業自得よ。だって私は事前に通告するんだから――

――そこに居ると死ぬよ、とね」

「そんな話を、一体どれだけの人間が鵜呑みにすると思ってるの!？」

「その為に今準備を進めているのよ。」

そしてあなたの協力を必要とするのも、その一助になってほしいから」

イヴは一貫してサラに協力を求めているが、彼女を断らせるつもりも無かった。彼女は最初からこう言っている。お前が協力しなかつたらそれだけ死人が増える、と。

「なんで、なんで、私なのよ……」

「心が読めるあなたに、わざわざ答える意義を感じないわね」

そう、サラは現実を受け入れられないだけだった。

なにせ二人は、万が一にもサラが断れば、——生きて帰すつもりなどは無いのだから。 「なんで、私がッ——ぐすッ」

彼女は年相応の少女らしく、嗚咽を漏らしながら泣き始めた。

サラに二人が課そうとしている役目は、それだけ重いのだから。

「別に私たちの為に一般人どもがどれだけ死のうが構わないじゃないの。」

私は十分に配慮しているし、結果的に世界が変わる。あなたも住み心地が良くなるわ」

「まあ、簡単に受け入れられないのは分かりますよ。

ですが、やるしかないのもまた事実。既に多くの国内外の賛同者を得ている。

あなたがどう答えようとも、計画を実行することには変わらない」

面倒そうに言うイヴと、淡々と話す召喚士。

そんな二人に、サラはサイコパスどもがと罵りたかった。

サラは経験上、何人ものストーカー被害に遭い、その中にも良心が欠如した危ない相手も居た。

この二人もそうだった。罪悪感なんて欠片も感じていない。

これから自分たちがある種の虐殺をしようとしているのに。

「わ……わかった、から……ぐすん、お願い、私を、こッ、殺さないで!!」
「最初から殺すつもりなんてありませんよ」

なんて言う召喚士の言葉に、サラは心底恐怖する。

彼女にとって、誰かを悪魔に成り代わらせるのは「殺した」という内に入らないのだ。

サラは異能を得て様々な悪意を見て来たが、ここまで純粹に邪悪な存在は初めてだった。

「じゃあ、あなたには言うまでもないことだけど、あなたにはマスクミ掌握の手伝いをしてもらおうわ。」

先に言った警告には彼らの力も必要だし。それが終わるまでには、都知事選も終わるでしょう。

それを以って、私はこの国の政治経済情報に介入する術を得ることができる」

満足そうに、イヴはそう語る。

サラは思った。

これは、侵略だと。

魔王による日本侵略なのだ、と!!

「これで漸く憂いが無くなりますね」

「ええ。やっと、やっと、これでやっと——あなたのところに行けるわ。マスター」

二人の計画実行は、秒読み段階まで来ていた。

カリスマについて

「なんだケンジ、今日はちゃんと学校に来ていたのか」

高校時代、学校の廊下を歩いていたケンジは生徒指導の先生に声を掛けられた。

「……うっす」

「こら、挨拶ぐらいちゃんとしたまえ」

この頃、彼はお世辞にも良い生徒ではなかった。

率直に言えば不良だった。それも喧嘩ばかりする典型的な不良だった。

その度に相手の親御さんに一緒に頭を下げて貰うのがこの先生であった。

不良のケンジも、流石に恥は知っている。

だからあまり彼に対して強くは出れなかった。

恥知らずにだけは、彼はなりたくなかった。

「出席日数は足りているんだろうな？」

高校は義務教育じゃないからいつでも辞めてやるなんて思ってはダメだぞ」

「でも、勉強なんて社会に出ても役に立たないじゃないっすか」

「それは違うな。学校での勉強は社会で役立てる為の知識を身に着ける為の練習だ。

自分が将来本当に役に立つ知識を得たいと思えた時の為にな」

少なくともそんな機会とは無縁だろう、とケンジは鼻白んだ。

将来と言つても、自分の未来などどこかの工事現場で日当を貰いながら日々を凌ぐらしいか思いつかなかった。

自分にそれ以上など期待していなかった。

自分に価値など、有ると思っていなかった。

「人は大人になって、子供の頃にもっと勉強しておけばよかったと思うものだ。

私だつてそう思っている。君もいずれ、そういう日が来るさ」

そしてそんな彼の言葉を、十年経って彼は実感している。

世の中、存外分らないものだった。

——もつとちゃんと勉強しておけばよかった。

召喚士に師事しているケンジは、そんな昔のことを思い出していた。

彼女の使用する召喚術は高度な数学や歴史的知識を必要とする。

ケンジを含めた元ヤクザ上がりの無学な人間に習得できるようなものではなかった。

その上でセンスが問われる。

魔術的センスに優れた化粧屋さえも、召喚術は最難関の一つだと断言するほどに習熟難易度が高い。

最初、召喚士に師事して言われたのが積み上げられた本の山と、その内容を叩きこむことであつた。

即座に弱音を吐いた彼らに、召喚士はこう言つた。

「あなたが私の徒弟として私の指示に従うことは契約に明記されています。

勿論これを盾に横暴をするわけではありませんが、無理だとか、出来ないだとか、そんなことを言っている暇は無くなりますよ」

彼女は薄く笑つて、契約内容が掛かれた羊皮紙を強く握つた。

その瞬間、彼らの全身が想像を絶する悪寒に襲われた。

「これが魂を相手に握られると言うことです。

魂の苦痛は肉体の苦痛などと比べ物になりません。

そして私は、精神を壊さずその責め苦を与え続けることなど造作もない」

悪魔を従えた、悪魔のような女は言う。

「私に従わないのなら、あなたたちは楽に死ぬことさえできないのです」

その言葉に少しも嗜虐心が無いのが却つて恐ろしかった。

ここまで相手に優位に立てたのなら、優越感の一つでもあるのが人情だろう。

しかし、召喚士は何も感じていない。

地獄のような苦痛を与えることに、何も感じていないのだ。

それでいて、彼女は人の感情を解する人間だった。

「その代わり、私が良いと言えばあなた達にすぐにも力を与えましょう。

そしてそれに厳しい修行など必要無い。ただ事前に必要な知識を身に着けるだけです」

ほんぽん、とテーブルの上に置かれた本の山を叩く召喚士。

彼女はちゃんと、飴と鞭を弁えていた。

「一か月、期限を与えます。

その後、私が一定の水準を満たしたかテストします。

基準に満たない者は、契約不履行として……」

皆まで、彼女は言わなかった。

こくこく、と彼らは頷く。

「では、死力を尽くして備えなさい」

この時彼らは、一様にこう思った。

ああ、もつとちゃんと勉強しておけばよかった、と。

彼らは死に物狂いで勉強する羽目になった。

必死に、それこそ毎夜のように徹夜して山積みになった本の内容を理解しようと努めた。

知識を詰め込めるだけ詰め込む毎日。

そしてそれが試される運命の日。

「とりあえず、全員合格にしておきます」

とてもあつさりとして、召喚士は彼らに告げた。

学の無い彼らは今日という日を青ざめた表情で迎えていたが、そのあまりにも軽い合格判定に拍子抜けしたように床に崩れ落ちた。

それもそのはず、彼女は試験らしい試験をせず、ただ合格だけを告げたのだ。

「あ、姉御、筆記テストとかしないんですか？」

「そんなこととして、何になるんですか？」

困惑しているケンジたちに、召喚士はそう返した。

「重要なのは学ぶ姿勢ですよ。

やる気の無い者には何も教えられない。

少なくともあなた達は、このひと月でやる気を示した。それで十分なのですよ」

彼女の言葉に、一同は安堵した。

軽い気持ちで弟子になると言ったことを後悔する毎日だった。

「であるのならば、私もあなた達に力を授けましょう」

だがそれがようやく報われる日が来たのだ。

「さて、魔術の修業とは何だと思えますか？」

「瞑想とか、滝に打たれたり？　ですか？」

「間違いではないですが、今時流行りませんよ。手つ取り早くいきましよう」

召喚士は前世の記憶があるが、間違いなく現代人である。

なので、彼女のやり方はとても現代的な代物だった。

彼女はあらかじめ床にチョークで描いた魔法陣の上で鶏を絞め殺し、その血を垂らす

と呪文を唱えた。

すると魔法陣が淡く光り、そこから異形の怪物が姿を現した。

「ひッ、なんですか、そいつは!？」

それは、子犬くらいの大きさのヒト型の化け物だった。

毛は無く、尻尾があり、矮躯なのにお腹だけがでっぷりと出ている。

「ええと、それはインプですかい？」

彼らの一人が、必死に詰め込んだ知識の中にある最下級の悪魔の姿を思い出した。

「ええ、その通りです」

インプは状況が把握できないのかキョロキョロ周囲を見やるが、それをひよいと首根っこを掴んで召喚士は肯定した。

「二から魔術の修行するにはあなた達は遅すぎる。

私たち人類は前提として魔力を使用しない生物ですから、魔力の感覚を理解するのが一番難しいのです。

その段階を省略するために、このインプを使うのです」

この時点で、この場に居る全員が嫌な予感がしていた。

「これをあなた達に憑依させ、魔力を扱うという行為を無理やり理解させます」

彼女の言葉に、誰もが表情を引きつらせた。

「勿論、インプごときとは言え場合によっては精神に異常をきたす場合もありますが、どこまでギリギリかは私で判断しますので安心しなさい。

出来なくても、出来るまでやります。では、始めますよ」

当然ながら彼らに拒否権など無かった。

とは言え、最低水準とは言え魔力の扱い方をその日のうちに彼らは理解させられることになった。

春美でさえ数か月を掛けた修行をほぼ一日である。召喚士のやり方がいかに合理的で、非人道的で容赦が無いか分かるというものだった。

そしてその日から彼らは、会社を興す為にいろいろと準備したり、顧客獲得の為に奔走したりすることになる。

春美より早く魔力について理解した彼らが彼女に劣っていたのは、商品の生産や開発等、営業などに時間を取られていたからだだった。

何より召喚士自体が天才肌過ぎる上に道具の作成が本職で無いこともあり、その水準は最低ラインの域を出なかった。

それを嘆いたのが、召喚士の活動を察し接触してきたイヴだった。

「イデア、私の妹を貸すわ。」

あなたの弟子たちがこんな不甲斐ないんじゃないやあなたの能力が疑われるもの」

とは言え、彼女がそんなことを言い出したのは割と最近のことだった。

彼女は召喚士の表の会社の経営にこれまで一切口に出してこなかったのだが、春美たちには外注するようになってから口を出し始めた。

イヴは彼女を嫌う誰からさえも認められる最高クラスの錬金術師だ。

その彼女は自分の知識を誰かに継承する必要性を感じていない。

なぜなら、自分の作成したホムンクルスに己の知識を与えられるからだ。

そうして指導役として軽塔たちの会社に派遣されたのが、ホムンクルスのタラクサム

だった。

召喚士に比べたら彼女は天使さえ見えるだろう。

彼女は無茶を言わないし、イヴのように横柄でもない。

普段の会社の事務作業も手伝ってくれし、買い出しにも行ってくれる。

イヴのところから人材を寄越すと言われた時から戦々恐々していた彼らは涙さえ流したほどである。

彼女はイヴが事務所に居る間は従者として振る舞い、それ以外の時は会社の備品として必要に応じて指導を行う。

そうしてメキメキと実力を付け始めたのが、ケンジだった。

単純に一目惚れだったのである。

「でもケンジの兄貴。女嫌いだったんじゃないんすか？」

無遠慮に彼の舎弟が喫煙所で休憩中にそんなことを口にした。

「嫌いだぞ、今でも」

ケンジは煙草に火を付け、ここではないどこかを見ながらそう言った。

「俺の実の父親はろくでなしでな。俺はお袋の顔も覚えてねえ。」

しよつちゆう女を連れ込んだ。香水くせえババアばかりだよ。

何度か再婚したが、俺は邪魔者扱いだったぜ。まあ、荒れてたわけだ」
それは別に面白みも無いよくある話だった。

「気に入らないことがあると父親に殴られ、赤の他人の女には嫌味を言われ……ある時
ぼこぼこに殴り返してやったよ。」

それで家出同然になって、今のオヤジに拾われたわけだ」

ケンジにとって、軽塔は肉親よりも重い存在だった。

彼はケンジに居場所をくれた。

ヤクザ時代に落ち目だったとしても、それを無様だとは思わなかった。

なぜなら、それが家族というものだから。

ここにはそんな連中ばかりじゃない。

だから彼らは軽塔の為に、自らの魂を悪魔に差し出すことを厭わない。

「女なんて、みんな同じだと思ってた。」

学校に居た頃の女子なんざ、きゃーきゃー煩いばかりで少しも興味を引かれなかった
からな」

「その頃からそんな達観してたんですか？」

「じゃあ必死に組の経営を立て直そうと女一人作らなかつたオヤジをほつたらかして女

遊びしろってか？

そんなカネがどこにあるよ」

ケンジの認識として、女性と付き合うのはお金が掛かる。

それは客観的に事実かもしれないが、ヤクザの出会いの場なんて水商売の相手か関の山で、それすらも今時古い。

とにかく、遊ぶ金も無いくらい困窮していたのだ。かつての彼らは。

それが今では平均的なサラリーマンより稼げるようになり始めたのだから、世の中分らないものである。

尤も、修行の為に稼いだ金を使う時間など無いのだが。

「でもあの人は違う、そうだろ？」

「う、うっす」

ケンジの舎弟は返答に困った。

彼にとってはイヴもタラクサムも非常に良くできた不気味なマネキンのようにしか思えなかった。

少なくとも、真夜中に暗がりではったり出会ったら悲鳴を上げるかもしれないくらいには整いすぎた容姿をしたのである。

「あの人からは、女の臭いがしないんだわ。」

物静かで落ち着いているし、男に媚びた目をしないとどことか実にいいじゃねえか」
「いつそ出来の良いマネキンが動いている、と言われても納得するような相手に、ケンジはそう評した。

「……それって姐さんも同じじゃ」

「馬鹿野郎。お前、姐さんを女として見れるわけないだろ」

「それ、言っちゃあかんことでは……」

ケンジは煙草の煙を吐きながら首を振った。

「アホぬかすな、姉御は俺たちの恩人だろうが。」

「どれだけ頭のネジが飛んでようがな」

ヤクザの世界は、極論暴力がモノを言う。

極限の暴力を示した彼女に、従うにはそれだけで十分な理由だ。

彼らにとって、召喚士は悪のカリスマだった。

「でも最近、姐さん、あのイヴさんと一緒に何か始めようとしてるじゃないですか？

俺、あの二人が何だかともんでもないヤバいことを始めようとしてるんじゃないって」

「だからどうしたよ？」

俺たちはオヤジと姉御に黙って付いていく。それ以上が必要あるのか？」

とつづくに堅気になった彼らだが、その本質はヤクザ時代から何も変わらない。

「……そうっすね。姐さんが俺たちを裏切るわけがない」

義理と任侠。それが彼らの組織の全てだった。

するとその時、二人は顔を上げた。

「兄貴」

「ああ」

舎弟に促され、ケンジは喫煙所から表に出た。

喫煙所は事務所とは別に、同じ雑居ビルの中にあるのだが、それ故に外の声などが聞こえてしまう。

「なあ、お嬢ちゃん。あんたがここに入りにしてることとは知ってたんだよ。

さっさと中の連中を呼んできてくれねえかなあ」

「アポイントはございますでしょうか」

「ございますか、じゃねえんだわ。さっさと呼べっつってんだよ!!」

表では買い物袋を提げたタラクサムが二人のチンピラに絡まれていた。

「社長と責任者はただいま席を外しているの、また日を改めてお願い申し上げます」

タラクサムは淡々と、機械的に無表情でチンピラ二人に告げた。

傍から見たらゴスロリメイドに突っかかるチンピラ二人と言うシユールな光景だったが、状況は割とひっ迫していた。

「こっちはあんたらの事務所に押しかけてもかまわないんぜ？」

「せっかく堅気になったのに、ヤクザが居座ってる事務所はどう思うのかねえ」
なんて下卑た笑みで言うチンピラたちに対し、タラクサムは無言になった。

「わかつたのなら、さっさと——」

「おいおい、誰かと思つたら隣町の組の下っ端じゃねえか」

その時ちようど表に出たケンジと舎弟が、二人の間に割つて入つた。

「おお、ようやく出て来たじゃねえか。裏切者が」

そう、この二人はかつて軽塔組と同じ系列のヤクザの組の人間だった。

ヤクザが杯を交わす行為には、堅気の世界に戻らないと言つた決意表明も含まれてい
ると言う。

彼らからすれば、堅気になった軽塔たちは裏切者でしかなかった。

「ほら、どうせカネをせびりに来たんだろ？ やるよ。だから帰れ」

ケンジは財布から数枚の万札を取り出すと、チンピラたちに突き出した。

「こっちは上と話は付けてあるんだ。あまり下らねえ真似してると、俺たちも紳士的
じゃいられなくなる」

そう告げるケンジから万札をむしり取ると、チンピラたちは鼻を鳴らした。

「あんたらの会社、上手くいってるらしいじゃねえか。」

だったら、俺たちにもおこぼれがあってもいいだろうが？」

「組織の仕組みもわからねえのか、あんだ。」

ヤクザの組織は上へ上へと搾取されるんだ。お前らにおこぼれが行くわけねえだろうが」

そんなふざけたことを言うチンピラに、ケンジは小馬鹿にしたように笑い返した。

「次にお小遣いをせびるなら、自分のママにでもするんだな」

「てめえ、あまり舐めた口利いてると痛い目みんぞ!!」

「なんだ、ようやく皮肉が理解できたのか。もつと早く怒鳴り散らすもんだと思ったぜ」

ケンジはチンピラの恫喝に余裕の笑みさえ浮かべていた。

「痛い目見るのはそつちの方だ。姉御を怒らせる前に帰りな」

むしろ慈悲深く、ケンジはそう言った。

なにせ、先ほど彼が間に入らなかつたら、タラクサムは目の前の「ゴミ」を排除するために動いただろう。

ゴスロリメイドなんて冗談みたいな恰好をさせられているが、ケンジたち徒弟が全員集まっても彼女のスカートに埃ひとつ付けられない。

それを証明する出来事が、すぐに起きた。

「あんだと、てめえ!!」

「あ、兄貴!!」

ケンジの挑発に激怒したチンピラだったが、もう一人の仲間が慌てて彼に声を掛けた。

「なんだよ!!」

「そ、その、ズボンが……」

仲間と言われて、彼もようやく気付いた。

彼の履いていたズボンのゴムが伸縮性を失って下までずり落ちていたのである。

「なッ!?!」

羞恥から、怒りを忘れて彼はズボンを持ち上げた。

「ぶっははは、ほら、今やったカネでズボンを買いに行きなよ!!」

ケンジも舎弟と一緒に笑ってやると、チンピラは捨て台詞を残して仲間と一緒に去って行った。

「あまり相手を挑発するのはいかなものかと」

「すみません」

苦言を呈するタラクサムに、ケンジは素直に頭を下げた。

ヤクザと元ヤクザのメンツの為のやり取りなど、彼女にはどうでもいい無駄にしか映らなかったたのである。

当然ながら、あのチンピラのズボンに細工したのは彼女だった。

だがそれを一体どうやって、いつの間にそうやったのかケンジにはまるで分からなかった。

「あ、荷物持ちますよ。」

いやあ、あんな馬鹿ども相手なんて時間の無駄ですよね、ははは」

惚れた弱みがあるとはいえ、愛想よく笑っているケンジに舎弟は溜息を吐くのだつた。

「なるほど」

さて、ケンジはもうすっかり会社員である。

つまり、報告連絡相談のホウレンソウはしっかりと教育されている。

先ほどの一件はちゃんと上司に報告することになった。

本来なら会社のトラブルは軽塔に報告するのだが、彼は今、運の悪いことに商談の為に出かけていた。

なので、召喚士にそのことを報告したのだが。

「ところで、ソロモン72柱のベルゼブブについて、知っていますか？」

「それはもう、勿論」

なぜ召喚士が今の話題で全く関係の無いことを言い始めたのか、なんとなく察しながらケンジは頷いた。

「蠅の王ベルゼブブ、ベルゼビユート、或いはバルゼブルとも」

「ええ、そうですね。」

かの存在は一般的に蠅とされていますね。ですが、私も何で読んだのかは覚えてはいないのですが、ある俗説によるとその羽音は蠅ではなく、——蜂だとされているとか「はあ、蠅より蜂の方がマシでしょうね」

そんな俗説、ケンジも知らなかった。

召喚士も覚えていないくらいマイナーな俗説なのだから、もしかしたら現存しない説でさえあるかもしれない。なかった。

「ですが、そういう権威の無い相手の方が、私たちにとっては都合がいい」

召喚士は指を鳴らす。

すると、壁に掛ったタペストリーに描かれた魔法陣が淡く光り、空間に孔が穿たれる。

その虚無のような暗闇の孔の奥から、無数の、想像を絶するほどおぞましい狂氣的な羽音が聞こえ始めた。

「最近、東京でもスズメバチに刺される事例が数多くあるそうです。」

「いやはや、本当に物騒な話です」

背筋が凍るような恐怖に耐えながら、ケンジは召喚士の言葉を聞いていることしかできなかつた。

その日、ある二人のヤクザ者が大量のスズメバチに襲われ無残な死体になったとテレビで報道されることになった。

情について

「……あなたも飲みなさいよ」

田舎に帰省中の魔女が、テーブルを挟んだ向こうに麦茶を勧めた。

「いただきます」

彼女の対面に座るのは、カタリナだった。

しばし無言の時間が流れた。

扇風機の風の音と、風鈴が揺れる音が静寂の時を許さない。

「それで」

魔女が問う。

「何でまた来たの。電話でも良いでしょうか？」

「大事な話です」

カタリナは短く簡潔に答えた。

「あなたはあのイヴの計画に賛同しました」

「そちらもね」

「私は最終的に必要だと感じました。」

ですが、どうしてもこの国でそれを成すことが正義だとは思えない」
カタリナの言葉に、魔女は薄く笑った。何を今更、とでも言いたげに。
「私はこの国に産まれて災害の恐怖を知った。」

イヴの計画はこの国において忌むべき所業なのでは、と思つたのです」
「そもそも、私はあなたの正義とやらが何なのかわからないのだけれど」

魔女はまるでワインでも揺らすように、ガラスのコップに入つた麦茶を回す。
からんからん、と中の氷が音を鳴らす。

「あなたの言う正義って、いつの時代のことを言っているの？」

「私に、正義を語る資格は無い、と？」

「そこまでは言っていないわ」

今更昔のことを蒸し返すのは不毛だわ、と魔女は気だるげに言う。

「正義とは結局、大衆を動かす道具でしょう？」

あなた個人の正義なんて、意味が有るのかしら」

彼女はこう言っている。

——お前の自己満足で誰かを救えるのか、と。

「好きに生きて、好きに死ねばいい。」

私はいつも弟子にそう言っているわよ。あなたもそうすれば良い」

「あなたの意見をまだ聞いていません」

強張った声が、魔女の言葉に続いた。

「私もあなたと同意見よ。」

我が子の為、孫の為、子孫の為。我が秘術を受け継ぐ一族の為。

イヴの試みは必要だと思つたわ。だつてそうしないと、これからの世の中は異能者が弾圧され、搾取されるだけの世界が待っているんだから」

カタリナは無言だつた。それは誰よりも、彼女が分かっていた。

世の中は結局、数が多い方の意見が通るのだと。

「イヴが気に入らないのは分かるわ。こうして愚痴を言いに来たこともね。」

だけど、文句があるのなら代案を出すべきだわ。イヴ以上に効率的で誰もが納得する方法をね」

そんなものが無いと分かっているながら、魔女はカタリナに言い諭す。

イヴの立てた計画は、彼女らしく極めて合理的で計算しつくされていた。

彼女の計画が成就すれば、結果的に多くを救うだろう。

——そしてその頂点に、異能者と言う名の魔族を統べる魔王として彼女は君臨するのだ。

「……あの女は、副長の犯行に手を貸していたそうです」

「まあ、イヴを介さない触媒の入手ルートは限られるでしょうし、顔見知りでも不思議ではないわね」

「奴は副長を利用したのです!! そうです、愚痴ですよ!!」

愚痴しか言えないではないですかッ、私にはどうしようもできない問題を、彼女は形はどうあれ解決の目途が立っている!!

だけど理屈よりも感情で、あの女を信用するべきではなかった!!」

世の中案外狭いと言うが、魔術の横つながりは本当に狭い。

その中で屈指の顔の広さがあるイヴなのだから、こういうことも彼女にとっては珍しいことなのかもしれない。

「そうね、あれは昔から人間の感情というものを非合理に思っていたようだし」

感情のままに怒気を吐き出すカタリナの複雑な心境を、魔女は静かに頷いて受け止めていた。

「それで、どうするの？」

彼女の所業の結果はどうあれ、この世に混沌を招くでしょう。

それを今のうちに正すというのなら、それはそれで正義と称えられるでしょうね」

イヴの計画は効率的でこれから多くの異能者を救うのだろう。それだけなら慈悲深い、聖人の所業かもしれない。

だがそれは、巻き込まれる他人の事情を考慮していなかった。

当然それを割り切つて彼女はイヴの計画に賛同した。

「もし今この場で、イヴを討つと決断できるのなら手伝つてあげてもいいわ」

でもそれは心情的に犠牲を許容したというわけではなかった。

だからそんな、試すようなことを魔女は言うのだ。

「ぐ」冗談を」

そして、結局のところカタリナがここに来たのは、この秘密を共有する相手に愚痴る為だけだった。

「そんなことをして何になる」

吐き捨てるように、忌々しげに彼女は言った。

イヴと召喚士に喧嘩を売るような真似が、どれほど割に合わないかなど、彼女は分かっている。

「私は武侠ではない。今でこそ修道女だが、かつては騎士修道会の一員ですらなかった。

ああ殺したさ、言い訳の余地がないほど数多く。

だが結局、私も副長と同じだったわけだ」

まるで麦酒を呷るように、カタリナは麦茶を飲みほした。

「私は今生でも、嫌な仕事をしなければならぬようだ」

「本当に、それでいいのね？」

「先日副長の一件、遠く離れたローマで法王様がお言葉を発した。

日本でも偉大なお方の声が聞けるといふのは本当にすごい世の中になったものだ」

副長の扱った魔術は教会の逸話を基にしている。

奇跡を扱う術は当然彼らの専売特許ではないので、向こうに感知されることは当然あつた。

「御方は奇跡の逸話を悪用されたことを嘆いただけで、副長を討てとは仰らなかつた。

あのふざけた異端審問官の連中さえも、来る気配がない」

「あの連中も、今も居るのかしら」

「居るでしょう。異端審問は百年ちよつと前まで現役だったのですから。

異端審問そのものを神秘の術として扱うあの連中が、その血筋を絶えさせているわけがない」

魔女も、カタリナも、顔を顰めて見合わせる。

彼女らが生きた中世ヨーロッパの魔術師たちに横つながりなんてモノは薄かつた。

そんな薄いつながりでさえ、悪名と言うものが轟いた者もいた。

異端審問官。

当時、総長たちが殺しに来るのが最悪なら、彼らが来るのは最悪の中の最悪だった。

「私、連中に首を斬られたことが有ったわ。あんなにすっぱり殺されたの始めてよ」

「どうしてそれで生きてたんですか」

断頭台の感触を思い出してか、首の触りながら顔を顰めるカタリナが冷静にツツコミを入れた。

「仮にだけど、召喚士を相手にするなら異端審問官ぐらい居ないと勝算は薄いわ。

調停者は動かないだろうし、イヴに喧嘩を売るならそれくらい戦力が必要ね」

「それは素晴らしい提案ですね。

連中が私たちにも噛みつくだろうって点に目を瞑れば」

まるで酒の席の冗談のように、くだらない話で盛り上がる二人だった。

「……春美さんたちには話したんですか？」

「近々イヴは決起会をするそうよ。その時に話すでしょうね」

「そうですか」

いずれにしても、時代はある種の転換期に来ている。

結局は二人もその流れに揉まれる枝葉に過ぎなかった。

二人は時代の荒波に抗える、英雄などではないのだから。

「おーい、買ってきておいたぞー」

すると、魔女の祖父が軽トラックに大量の荷物を載せて庭に現れた。

「ありがとう、お爺ちゃん。」

すぐに納屋に運ぶの手伝うわ」

彼女はそう言って立ち上がると、カタリナを見やる。

「あなたも備えた方が良いわ。どうせすぐに、日本中で不足するわ」

「そうでしょうね」

二人が庭に停められた軽トラックの方を見た。

そこには、水と保存食、トイレットペーパーなどが大量に積まれていたのだ。

「本当に、あの女はとんでもないことをしようとしているのですね」

その備えを見て、カタリナは実感としてそう思うのだった。

§ § §

か。この日本において、恐るべき計画が進行しているなどということを知る者など極僅

「あら小池君。たまたま偶然、外で会えるなんて珍しいわね」

現在外出中に交際相手に遭遇してしまった小池もその一人だった。

「そうですね。でも田舎からもう戻ってきたんですか？

もうすぐお盆の時期なのに」

「ええ、ちよつと用事があつたのよ」

シャツターが目立つ商店街の道を歩きながら、小池は彼女に話題を振つた。

魔女はいつものように微笑んでいる。

「そうなんですか。あ、用事が終わつたらすぐ帰っちゃうんですか？

時間が有つたら、家に来てもらつてもいいですか？ 妹が貴女に会いたいってうるさ

くて」

「あら、そうなの。私も是非とも会つてみたいわ」

「あ、いえ、迷惑なら構わないんですけどね」

小池にとつて、彼女は常に気を使わないといけない相手だ。

いつだって超然としている彼女だが、それでも機嫌を損ねないように細心の注意を払っている。

「あまり気を使わなくてもいいのよ、小池君。

自然体のあなたが私は一番好きなんだから」

それを感じ取ったのか、彼女はそんなことを口にした。
好き。

男だったら反応せざるを得ない一言だった。

思わず赤面する小池に、魔女はくすくすと笑った。

「……こんな男の何がいいのかねえ」

「……どうかしました？」

笑う彼女の表情が、一瞬陰りを帯びたのを小池は見逃さなかつた。

「いえ、気にしないで。電車で長時間座ってたから疲れちゃつて」

「ああわかります、俺も中学の時は電車通学だったんで。」

向こうの中学まで電車で一時間も掛つて、朝が大変だったなあ」

高校は地元にかけて良かった、と小池は話した。

「そうね、どうせ通うなら近くがいいわよね」

「そつちも、地元だからうちの高校にしたんですか？」

「ええ、そうよ。近い方が通学が楽なもの」

「やっぱりそうですよねえ」

他愛もない会話をしながら、二人は道を歩く。

「ねえ」

するり、と彼女が小池の片腕に手を絡ませる。

「えッ」

思わず小池の心臓が高鳴った。

だが、直後にぞわりと何かが全身を駆け巡ったような気がした。

「今日の私は機嫌がいいわ。

なんでも好きな話をしてあげる」

小池の真横にある彼女の顔は、どこか挑発的に彼を見ていた。

「……………」

小池は迷った。

デリカシーの無い質問だからだ。

「ねえ、早く」

「わッわかりました!!」

しかし彼女は更に顔を近づけて急かしてきた。

慌てて彼は質問を口にした。

「じゃ、じゃあ、……前世で誰かを好きになったことってあるんですか？」

その質問は、いつだって彼の喉元から出かかっていた。

だけど前世は前世、今生は今生と割り切っている彼女に、聞くことはできなかつた。

「……ふーん」

意味深な笑みを浮かべて、魔女は早くも言葉にしたことを後悔し始めている小池の顔を覗き込むように見やった。

「むかしむかし、神聖ローマ帝国の戦乱の時代に、とある貴族が居ました」

そして彼女は語り出す。戦乱にまみれた中世ヨーロッパにて起こったある貴族の男の人生を。

「彼は女癖が悪く、領地の経営は失敗続き、領民からも評判は悪いという有様でした。

そんな領主に、ある魔女は取り入ったのです」

「……その魔女は、どうしてそんな評判の悪い領主を選んだんですか？」

「単純に、財産を奪つても良心が痛まないからよ」

小池の疑問に、彼女は断言した。

「彼には妻が居て、妾も何人も居たのですが、子供は居ませんでした。

これはお家を乗っ取るチャンスです。勿論、そういう相手を選んだからと言うのもありませんが。

魔女は手練手管を用い、時には魔術を用いて彼を籠絡し、妻や妾たちを他所へと追いやりました。

後は彼の子供を産んで、彼を適当な戦場に送り込んで殺すだけですべて自分の物にな

る、と魔女はほくそ笑んだことでしよう」

覚悟はしていたが、予想以上に生々しい話で小池は頬を引きつらせていた。

「彼と魔女の間に最初に産まれたのは、女の子でした。」

領主は男の子ではないことにがっかりしましたが、魔女は女の子で十分でした。

と言うよりも、魔女は大いなるヘカテー様の加護により、必ず女の子を授かるようになっていたのでした。

重要なのは、彼との間に子供ができたこと。そして何より、——安全に己の後継者を育てる地盤ができたことでした」

ところが、と彼女は話を一区切り。

「女の子は、予想以上に領主に溺愛されてしまいました。」

「寝ても覚めても領主は娘の事ばかり。誰かと婚約するなんて話が出てきたら激怒してしまう有様でした。」

終いには武功を上げて、放蕩して減らしていた財産を補填してしまうほどでした。

勿論、その陰には魔女の手助けがあつたのは彼も知らないことでしたが」

やれやれ、と言いたげに彼女はわざとらしく首を振った。

「さつさと毒でも飲ませて殺せばよかつたのに、娘のあまりの溺愛ぶりに魔女の方が毒気を抜かれてしまったのです。」

娘の方も父親の事が大好きで、魔女もずるずると彼が老衰するまで付き合ってしまったのです。ちなみに、その間に五人も娘を授かりました。

領主はとつくに娘の婿に地位を明け渡していて既に領主ではありませんでしたが、當時としてはかなり長生きした方でしょう。

彼が亡くなると、後を追うように魔女も亡くなってしまいました。お話は以上です」

「……え？ 終わり？」

「ええ、終わりよ。これが一番長続きした相手の顛末」

まさかのオチ無し。

話の内容も大雑把で、小池はなんだか釈然としない気分だった。

「結局、彼女は領主の事を愛していたんですか？」

「さて、どうでしょうね」

はぐらかすように、目の前の彼女は笑った。

「本当に、あの方の男の趣味は分からない……」

「それで、その後この時代に転生したってわけですか」

「それは違うわね」

「へ？」

「領主の娘はある時、どこからか養女を迎え入れたわ。」

養女は成長すると、娘の旦那には母親そっくりだと驚かれたらしいわね」
ひっひっひ、と低く彼女は笑った。

全てをなんとなく察した小池は微妙な表情になって言葉が続かなかった。

「魔女はそうやって、各地を転々としながら生き続けて行ったのです」

「じゃあ、今日本に居るのもその結果ってことですか？」

「……いえ、残念なことに彼女は死んだわ。本当に死んでしまったの。殺されたわ」

彼女は肩を落とし、悔しげにそう話した。

「ええッ、殺されたって、本当に？ あなたが？」

「誰だって、油断くらいするでしょう。」

例えば、自分が信頼していたと思っていた娘に、延命の儀式を邪魔されたり、とかね」
皮肉気に、目の前の彼女は小池に笑って見せた。

そう、永遠に生きるかと思われた魔女の秘術の最大の弱点は、一人で若返りが行えないという点だった。

彼女が弟子を取り、後継者を作るのは、自分が生きながらえるのに必要だったからだ。
そしてその弟子こそが、彼女の急所でもあった。

「儀式を邪魔したその娘は、その場で他の高弟たちに八つ裂きにされたわ。」

そして本当に嘆かわしいことに、現代に至るまでその術のほとんどが喪失してしまっ

た」

深々と、目の前の魔女は溜息を吐いた。

「だから小池君、あなたも私の秘伝を後世に伝える為に、協力してね」

「あ、え、きよ、今日は貴重なお話をありがとうございました——!!」

しかし彼女が妖艶に微笑むと、哀れな童貞に過ぎない小池は真っ赤になってその場から逃げ出してしまった。

「くつくつく、ちよつと遊びすぎたかしらねえ」

その背を見送りながら、魔女は面白そうに笑っていた。

「あの方も面白いオモチャを見つけたもんだねえ」

そしてその日の夜、小池はメッセージアプリでメールを送った。

：小池

もう!! 今日みたいにからかうのは勘弁してくださいね!!

それに対して、彼の彼女の返答はこうだった。

——今日? 何の話かしら?

占いについて

「化粧屋さん、どうう？」

休憩室にて数名の婦警に囲まれている化粧屋は、対面に座る若い婦警の緊張した声に答えなかった。

「……………」

化粧屋は無言でテーブルの上のタロットカードを見下ろしていた。

そのタロットは既製品ではなく、彼女のお手製だった。

よく見ると絵柄も現代の物とはだいぶ違う。

空前のオカルトブームの今現代、タロット占いはオカルト女子の嗜みであり基礎知識だった。

そんなオカルトに興味のある彼女たちでも、化粧屋のタロット占いは見たことも無い手法だった。

逆位置も無ければ、絵柄も枚数も現代と違う、現代のように統一されたモノではない古いやり方だった。

現代のタロット占いは18世紀に発祥した手法によるものが主流とされ、現代にまで

影響を及ぼした。

それまでタロットはトランプのように遊びのツールだったが、それ以前にもタロット占いは存在していたとされている。

前世は十五世紀を生きた化粧屋のやり方は大衆向けの占い師の手法ではなく、元来の魔術としての占いなのだ。

だからこそ、そんな歴史的価値のある占いの結果を、婦警たちは固唾を飲んで見守ることしかできなかった。

「犬養、お前最後に家族に会ったのはいつだ？」

テーブルの上に並べられたカードを見下ろし、化粧屋は問う。

「え、二年くらい前かな。家族とはちよつと疎遠気味で……」

「お前の親類に病魔の兆候が見える。」

おそらくだが、お前の母方の血筋には病死が多いな？」

何で分かるの、と犬養は喉元から出かかった。

彼女の曾祖母と祖母はがんがんに掛って亡くなっていたのだ。

緊張からか、喉が渴いて口の中が粘つくのがわかる。

化粧屋のサングラス越しの視線を受けていると、まるで自分に死の宣告をされているかのような錯覚に陥る。

「早めに確かめないと手遅れになる」

化粧屋の警告に、彼女はこくりと頷いて青い顔のまま携帯電話を手に休憩室を出て行った。

休憩室は化粧屋の周囲の婦警たちだけでなく、興味本位で様子を見ていた警官たちの間にも沈黙が舞い降りた。

誰もが、次は私も占って、なんて言える雰囲気ではなくなってしまった。

婦警たちが、次はあんたが占ってもらいなさいよ、と視線だけで押し付け合うこと数分。

犬養が耳に当てたままの携帯電話をポケットにしまいながら戻ってきた。

「どうだった？」

彼女の同僚の一人が、尋ねた。

「……お母さん、先月に行った病院の検査でがんの初期症状が見つかったって。

私に心配かけないように言わなかったのに、なんで知ってるのって」

「なら次の休みには家族に会いに行った方がいい。ついでに墓参りでもしておけ。

それとお前も気を付けろ。今こそお前には病魔は見えないが、必ずやってくる。必ずだ」

化粧屋はカードをまとめながらそう忠告した。

遺伝性の病気が子供に受け継がれる確率は病気によってそれぞれだが、四代目の彼女にまで渡ってその病によって苦しめられると彼女は予言したのである。

普通の占い師のように、曖昧で当たり外れの無いようなことなど彼女は言わなかった。

その恐ろしさに、誰もが気軽に占いを頼めるような空気にはならなかったのだが。

「じゃあ犬養、今日の昼飯お前の奢りな」

「あ、はい」

元々そういう約束だったのを思い出し、犬養は頷いた。

厳かな雰囲気醸し出していた化粧屋がそんなにあっさり空気切り替えるのだから、周囲の空気まで弛緩してしまった。

「ふう、これ疲れるから今日はこれまでな。」

次は明日のことでもよろしく」

その言葉を証明するように、化粧屋は顔の汗を拭った。

彼女はまるで全力でしばらく走ったかのような疲労した様子まで見せていた。

「化粧屋さんの占い、本当に当たるんだね」

「当たり前だろ、死霊術の起源は元々占いなんだから。」

古代ギリシャ辺りじゃ、死者を通じて神のお告げを聞くために死霊術を行ったらしい

しな」

まあ私は殆ど我流だが、と化粧屋は驚き慄く婦警にそう返した。

「アメリカの特番とかじゃ、超能力者が未解決事件の捜査を手伝ったりしたりするけど、化粧屋さんもそういうの出来そうだよね」

「ああいうのに出てくる連中って、素質はあるんだがなあ。

本格的な力の使い方が分かれれば、番組の都合で中途半端に捜査が終わったりしないんだが」

化粧屋は、自分なら未解決事件もどうにかできる、とは明言しなかった。

それはこの場にいる警官たちのプライドを刺激してしまうと、彼女は分かっていたからである。

身も蓋もない言い方をするなら、彼女は周囲に気を使ったわけだが。

「ふん、占いなんかで、捜査が出来るかってんだ」

いかにも偏屈そうな老境に入った刑事が、喫煙室から出てきながら化粧屋たちをひと睨みして去って行った。

「うお、刑事ドラマに居そうな頑固そうな人だなあ!!」

悪態を吐かれたというのに、化粧屋はなぜか嬉しそうだった。

「ああ、あの人は今年で定年の芦田刑事ね。まあ、見た目通りっていうかなんていうか」

彼の評判は婦警たちにも知れ渡っているのか、彼女たちも苦笑いだった。「やっぱり刑事つてのは偏屈じゃないとダメだよな。」

うちの伊藤ちゃんとか、もうチョイ頭が硬くてもよくない？」

そして化粧屋がそんなことを言うのと、婦警たちも小さく笑い声を上げた。

そんな感じで、化粧屋は婦警たちの間で割と人気者になったのが、彼女が警視庁に入りし始めた頃だった。

§ § §

そして時は今に至る。

「はあ」

化粧屋は溜息を吐いた。

彼女は大好きな刑事ドラマのシリーズが流れているテレビの電源をリモコンで消すと、その視線を横に向けた。

そこには、腰を曲げて頭を下げる芦田刑事が居た。

「止めてくれよ、大の大人が簡単に頭を下げるもんじゃない」

居心地が悪そうに彼女は言った。

「頼む、事件解決に協力してくれ」

彼は顔を上げると、鬼気迫る表情でそう述べた。

「今から10年ほど前だ、都内に住む小学5年生の少女が行方不明になった。

少女の行方は千人体制で捜索が行われたが、その足取りは掴めなかった」

「都内でか？」

「ああ、監視カメラにも映っていないなかったことから、何者かに誘拐されたと見て捜索がなされた」

当時の捜査資料を化粧屋に見せる芦田刑事は、淡々と当時の状況を振り返る。

「芦田さん、まだあの事件を追っているんですね」

どこか痛ましいものを見るように、伊藤刑事は彼を見やった。

「当たり前だ、伊藤。まだ事件は終わっちゃやないんだよ」

鬼気迫る様子の芦田刑事に、伊藤刑事は何も言えなくなってしまうた。

伊藤刑事にとって、芦田刑事は若い頃に世話になった相手だった。

刑事のイロハは彼に叩きこまれ、所属する部署が公安になっても彼は尊敬できる先輩だった。

そんな彼が妄執じみて一つの事件に執着する姿は見ていられなかった。

「この事件、俺でも覚えてますよ。当時ニュースで毎日すごく報道してましたし」
妻鳥も捜査資料を遠目に見ながらそう呟いた。

「遺留品はあるかい？」

「勿論だ」

芦田刑事はビニール袋に封じられた古い携帯電話を取り出した。

「現場に有った物じゃないが、遺族から手掛かりになるんじゃないかと預かった物だ」
「なるほど」

化粧屋はそれを受け取り、しばらくその遺留品を見るとタロットカードを取り出した。

彼女は集中してカードをシャッフルし、順番にいくつかカードを並べた。

その絵柄と順番に、素人には分からない。

しかし化粧屋は険しい表情で、こう断言した。

「被害者の女の子の命運は既に見えない。」

ほぼ確実に、犯人にかどわかされたときに殺されている」

その彼女の言葉に、くそッ、と芦田刑事はテーブルに勢いよく拳を落とした。

彼もベテランの刑事だ。被害者の生存が絶望的なのは分かっていた。

それでも、夜空の星の一つほどの小さな希望でも縋りたかったのだ。

だが化粧屋は無情にも断言する。

人の死に精通し、死を経験した死霊術師が生存の目は無いと確定させた。

「降霊術の類は無理か、化粧屋」

一歩引いたところで一連のやり取りを見ていたティフォンが問う。

「最低でも体の一部が必要だな。」

よし、それじゃあ探しに行くか。あんた、車を出してくれ」

「車を？　なぜだ？」

「決まってるだろ。この子を、親元に返してやるんだよ」

被害者は死亡しているというのに、化粧屋はそんな矛盾していることを口にする。

「おい、まさか」

「ああそうだ。早く行くぞ」

「……俺も行く。妻鳥、お前も来い」

「はい」

何かを察した伊藤刑事は、妻鳥を連れて二人の捜査に付いていくことを決めた。

10年間も止まっていた事件の時が、動き出そうとしていた。

寄り道を終えた後、化粧屋の指示で都内のある山奥に車を停めた一行は、そこに足を

踏み入れようとしていた。

「それにしても、運が良い。親の愛の偉大さだね」

化粧屋は紐のようなものを指で吊り下げながら、車から降りた。

その先には、とある物体を括り付けられている。

「正直、よく提供してもらえたな」

伊藤刑事は顔を顰めながら言った。

彼女が紐の先に括り付けてたのは、小さな人間の歯、被害者の乳歯だった。

寄り道の先は被害者遺族の家であり、化粧屋は遺族に頼んで被害者の体の一部を提供してもらったのである。

遺族は事件解決の為なら、と藁にも縋る思いで乳歯を預けてくれた。

「安心しろ、これで結果を出せなきゃ、私は廃業だ」

「ああ、頼む」

芦田刑事は終始硬い表情のまま、化粧屋のやり方を見守っていた。そうして彼女の感覚を信じて山の中を進んでいくと。

「ハイ！だ。この先だ!!」

揺れないように紐を吊り下げて歩いてきた化粧屋が声を上げる。

先端に括り付けられた乳歯が、まるで磁石に引かれるように独りでに動いていた。

乳歯の振り子の指し示す先に進むと、やがてそれは真下を示した。

「おい、ここに居る。ここに居るぞ!!」

「妻鳥、掘る物!!」

「はい!!」

妻鳥はあらかじめ用意しておいたスコップを伊藤刑事に渡すと、自分ももう一つ持ってきたスコップを使ってひたすらに地面を掘り進める。

そして、やがて石ではない硬い物に当たった。

「ようやく、ようやく……見つけてあげられたよ。陽子ちゃん」

芦田刑事は地面に跪いて、地面の下から現れた白骨を手にとって涙ながらにそう呟いた。

§ § §

白骨死体が見つかったという事態は、事件の再捜査が行われるのには十分な理由だった。

「陽子ちゃんは虫歯の治療歴があったから、すぐにでも本人と断定されるだろうな。」

同僚たちも面食らつてたぜ、遺体の発見方法が魔術に依るものだつて言われたらなあ」

芦田刑事は捜査一課の後輩たちの表情を思い出しながら、少しだけ笑つた。

長い間未解決だつた事件が進展し、止まっていた捜査が動き出したことで彼の表情から少しだけ陰が取れていた。

「あんたはあつちに行かなくてもいいのかわ？」

「俺が十年間地道に捜査した資料なら渡してやる。」

明日にでも当時の状況の洗い出しが始まるだろうが、犯人特定は望み薄だろうな」

それはベテラン刑事の感なのか、芦田刑事は鋭い目つきのままそう語る。

「あの辺りは私有地だが、十年前に不審者が目撃されていてもはつきりとした証言が取れるはずもない。」

仮に目撃証言が出ても、信用に値する証言と見なされないだろう」

十年と言う時間はそれだけ多くの物を過去へと追いやる。

「俺、彼女の遺骨に触れた時、異能で過去を見てみたんです」

「本当か？」

と、伊藤刑事は尋ねつつも、それを期待して彼は妻鳥を連れて行つた。

事件はもう既に捜査一課に委ねられ、この面々には遺体に触れることすらできない状

況だった。

「若い、男だったと思います。

やせ型で、たぶんそいつが犯人だと思います。

陽子ちゃんは突然車に押し込まれて、連れ去られて、乱暴されそうになって抵抗して、それで……」

思い出すのも吐き気を催す光景だったのか、妻鳥は真つ青な表情で努めて事務的に口に出した。

「……当時、容疑者として何人か候補者が上がった。

この中に、そいつは居るか？」

芦田刑事は数枚の写真をテーブルの上に並べた。

それを見た妻鳥は、あつと声を漏らした。

「こ、こいつです。この男だッ!!」

震えながら、彼は写真の一枚を指差してそう叫んだ。

「最近の研究じゃ、DNA検査でジャックザリッパーの正体が突き止められたらしいな。

そいつは容疑者の一人として名前が挙がっていたそうだが、悪いことはできないもんだねえ」

警察は犯人の喉元まで迫っていたことを皮肉るように、化粧屋が笑う。

「……行くぞ」

怒りを押し殺したような表情で、芦田刑事は言った。

「この男の事は覚えている。当時、俺も聴取したが、証拠もなかった為に逮捕にも至らなかった。」

だがこいつは、俺が聴取をしている間も自分は関係ないって面をしてやがった」
車の助手席で怒りに燃える芦田刑事の言葉を、運転をする伊藤刑事は黙って聞いていた。

四人乗りの乗用車で、彼らは今まさに犯人の元へと向かおうとしていた。

「なあ、どうしてあんたはこの事件にここまで固執するんだ？」

後部座席に妻鳥と並んで座っている化粧屋が尋ねた。

「被害者の陽子ちゃんはな、孫の友達だったんだ」

「へえ」

「孫がお爺ちゃんはお巡りさんだから、絶対に犯人を捕まえてくれるよねって、信じてくれていたんだ。」

だから俺はずっと、この事件を諦められなかった」

友人を失った孫の悲しみ、そして何より被害者や遺族の苦しみを思うと、際限のない

義憤が彼を駆り立てるのだ。

刑事と言っても、いつまでも未解決事件を捜査してはられない。

事件は次から次へと起こる。この事件の捜査は業務外のプライベートルな物だった。

上司に注意されたことは一度や二度ではない。それでも彼はこの事件が心残りだったのだ。

そして定年間近になってようやく、長年培った刑事としてのプライドを捨てる選択を迫られた。

そして今、彼はもつと早くこうするべきだった、と言わんばかりの表情をしていた。

「犯人は卑劣で、赦されない悪党だ。ようやく、尻尾を掴んだぞ!!」

「ええ、必ず奴に目に物を見せてやりましょう」

伊藤刑事は尊敬する先輩に頷いて見せた。

「今更、あの事件の話ですか？」

一行が犯人だと断定したかつての容疑者の自宅に訪ねると、芦田刑事が犯人に対応した。

「ええ、今頃になって被害者の遺体が見つかったのですよ。」

それで再捜査となる運びになりましたね。当時の証言を洗いなおしている最中なん

ですよ」

芦田刑事が表面上は穏やかに、揺さぶりをかけていく。

しかし、相手に動揺は見られなかった。今更、自分に足がつくとは思っていないのかもしれない。

だが、それでもよかった。粘り強く、少しずつ追い詰めて、相手がボロを出すのを待つ。

それが刑事の戦いだ。

しかし、そんな悠長なことを待つてられない者もいた。

次の為の布石を打つ芦田刑事が、犯人に対して聴取を終え、一旦引こうとしたその時だった。

「最後に一つだけよろしいかな？」

有名な長寿刑事ドラマの主人公の決め台詞を言いながら、化粧屋が二人の前に躍り出る。

「なんですか、この人は。刑事さん」

「おい、あまり余計なことは……」

困惑する二人に化粧屋はニタリと笑ったまま、犯人に指差した。

「古来より、罪には穢れが生じると信じられてきた。

特に殺生の類は、禊を必要とするのは古今東西で見られる文化だ」

「い、いきなり何を……」

「私は今警察に協力している異能者だよ。」

私にはわかる。あんたには普通の人間なら決して溜まることの無い穢れに満ちている」

化粧屋はサングラスを少し下にずらし、その両目で人殺しを覗き込むように見やつた。

「——今夜から、震えて眠れ」

彼女はそれだけ言い放つと、くるりと踵を返して伊藤刑事たちの待つ車に戻った。

後ろから聞こえる犯人の喚き声に、にやにやと悦に浸るように笑いながら。

§ § §

結論から言うならば、数日後に犯人は逮捕された。

彼は半狂乱の様子で警察署に出頭したのだ。

そして当事者しか知らないことを自供し、正式に容疑者として起訴されることになった。

「本当にありがとう。これで刑事人生に思い残すことはない」

そう語って、残りの任期を芦田刑事は穏やかに全うしたという。

犯人逮捕により、遺族も報われることだろう。

「化粧屋、一体犯人に何をしたんだ？」

新聞には十年越しの犯人逮捕がでかかど一面に載っていた。

新聞紙を閉じると、同様のニュースをテレビで見てにやにやと笑っている化粧屋に伊藤刑事が目を細めて尋ねた。

「眠ったら、悪夢を見るようにしてやったんだよ。」

婉曲に、しかし手っ取り早く犯人を追い詰めるのにはこれが一番だと思つてな」

「恐ろしい真似をする。睡眠を取り上げるのは一種の拷問だろうに」

一緒にニュースを見ているティフォンも可笑しそうに笑っていた。

人は眠らずにいと、幻覚や妄想などに苛まれると言う。それだけ人間にとって睡眠は重要な要素なのを言うまでも無いことだ。

「いったいどんな悪夢を見せたんですか」

呆れて妻鳥がそんなことを言った。

「さあ、どんな悪夢を見たんだらうなあ」

はぐらかすように、化粧屋は笑うばかりだった。

「だが、ありがとうな。」

芦田さんの為に、いろいろと骨を折ってくれて」

「気にするなよ、伊藤ちゃん。」

私は、私以外の悪党が大嫌いなんだ」

その捻くれた返事に、伊藤刑事は思わず苦笑するのだった。

案内について

時刻表の時間通り、その日も電車はホームへと辿り着く。

世間は夏休みであり、時刻も昼頃であるから中から出てくる乗客は疎らだった。彼らは真夏の陽光と熱気に顔をしかめつつ、日陰へと足早に進む。

ニュースでは今日も全国的に酷暑であると伝えていた。

他の乗客たちからワントテンポ遅れて、この暑さの中に黒衣がホームに躍り出る。すらりとしたフォーマルな黒いイブニングドレスを身に纏った魔女だった。

普段着として使えるスカートの丈が短めの代物で、正装と言うよりワンピースに近かった。

彼女が普段よりオシャレをして実家から地元へと戻ってきたのは、勿論理由があった。

「お久しぶりでございます。」

そして、お帰りなさいませ——偉大なるグロースムッター

出迎えを頼んだわけでもないのに、駅の出入り口には彼女の待ち人がいた。

魔女と同じように黒衣の女だった。目深にフードを被った彼女は、深々と魔女に頭を下げた。

「探させたかしら」

「てつきり、領地に戻っているものかと」

「そう、悪いわね。あの人の子孫は？」

「隠れ里を作り細々と我らが秘伝を伝えていきます。

まあ尤も、我ら亡き後は口伝も失われ、見るに堪えませぬが」

「ふーん、まあしようがないわ。私たち抜きでよくあの苛烈な時代を耐え抜けたと褒めるべきでしょう」

二人の魔女の間に、挨拶など必要なかった。

まるで死別と再会など、とつくに何度も繰り返しているとも言おうように。

「それよりあなた、私のお気に入りにちよっかい掛けたわね」

「ひっひっひ、私は貴女様に相応しいか、確かめようとしただけでございます」

咎めるような魔女の追及に、悪びれもせずフードから覗く口元に女は笑みを深める。

「……………私の子供の頃、お母さんが再婚しようって男を連れてきたことが有るのよ」

「はあ」

「水商売の女に近づくと男なんて大抵が碌な男じゃないわ。

だから私はその時に持てる手を使ってそいつを追い払った。

……あの時のお母さんもこんな気持ちだったのかもしれないわね」

前髪をかき上げ、ばつが悪そうに魔女はそんなことを言った。

もつとちゃんと話し合えばよかったかしら、とぼやく程だった。

「でも、そいつはどちらにせよダメだった」

「左様ですか。男の趣味の悪い貴女様がダメとはどんな男か一度見ておきたかったですね」

「わかっているくせに。」

そいつはお母さんを殴った。嫌いなものよ、暴力を振るう男つて」

憂いを帯びてどこかを見つめる魔女の姿を見て、もうひとりの魔女は小さく笑い声を漏らした。

彼女は知っていた。この偉大なる魔女が取り入る相手はいろいろと最悪な相手ばかりなのは、後腐れなく財産を奪う為だ。

それでも多少は割り切れない感情があるのか、時折相手に助言をすることもあった。

——そう、男尊女卑が当たり前の時代に。

男の仕事に女が口を出すな、なんて怒鳴られるのはまだマシな方で、相手の手が出ることなんて毎度のごとくだった。彼女はそこそこの地位を持つ相手を選ぶので、無能な

くせに仕事にプライドの有る者ばかりだったのも理由として大きい。

……そして、そんな相手の寿命こそ短かった。多くが毒殺と言う歴史の闇に消えた。例外は、それこそ一人しか記憶にないほどだった。

「あの坊やが、おじい様と似通つてるとは思えませんが」

「前にも言つたわよね。私の交友関係に口を出すな、つて」

「これはこれは。失礼いたしました。ひひひ」

偉大なる祖先にして師に睨まれ、女は肩を竦めた。

「それでは、わざわざご足労戴きどのような指図を？」

永い時を同じくした二人に、偶然という言葉は無い。

彼女にとって待つていればいずれ会える相手がわざわざ出向いてきたことには、必ず理由があるはずだった。

それは勿論、彼女の「イタズラ」を咎める為ではない。両者の師弟関係は、そこまで気安くはない。

「まずは、場所を移しましょうか。」

イヴは覚えているわね、彼女の事よ」

「わかりました」

それだけで人には聞かせられない話だと悟つた女は、静かに頷いた。

「ところで、わざわざオシヤレをしてその後あの坊やでも誘うのですか？」
そしてわざとらしく悪戯っぽく問うと、一瞥だけが返ってきたので、彼女は含み笑いを浮かべるのだった。

§ § §

「それでさー、道端で会っていろいろ聞かれちゃったんだよね」

スマホをぼちぼちと指でソシヤゲをしている真冬がそんなことを口にする。

「あれでしょ、こないだ春美ちゃんたちの前に出てきた魔女さんもどきみたいなの」

「そうそう。あの人、前世じゃ魔女さんとは一言では表せない関係らしくてさ、今生で魔女さんがどんな生活とかしてるのか、教えてくれって言われちゃってさ。」

私も魔女さんの身内みたいだから多少は良いかなって」

「そういうの、良くないよ」

「わ、わかっているけどさ、お守りとかくれちゃって……」

「まったく」

千秋に注意されて気まずそうにする真冬だったが、彼女はこんなことを言った。

「でも彼氏がいるって言ったなら、興味津々で聞いてくるんだよ？」

他人の恋バナほど面白い話はないでしょ?」

「あんた、魔女さんに呪われても知らないよ」

「や、やめてよー、そんなこと」

涙目になる真冬に千秋は今度こそ呆れたように溜息を吐く。

「ああ、でも、魔女さんが普段どんな喋り方をするのかとかまで聞いてきてさ、そこまで聞くなつて思つたけど」

「これはあれだね。友好的に接しておいて実は敵だつてパターン。」

悪の組織の悪役が正義の味方の弱点を探るつて展開に違いないね」

「夏芽ちゃん、また病気が再発したの?」

「とつくに卒業してゐるつての!!」

他の面々はダラダラしてゐるのに、一人だけ宿題を進めてゐる夏芽が言い返す。

「一応聞いておくけど、真冬ちゃん、変な事されなかつた?」

「うん、特には」

「まあ何かされてても気づけないと思うけど。」

あの人、もしかしたら師匠に並ぶ腕前かもしれないし」

「え、ホント!?!」

春美の言葉に、真冬は素で聞き返した。

「少なくとも、私じゃ相手にならない」

「あ、やっぱりすごい人なんだ」

「うん、多分前世は師匠の一番弟子だと思う。悔しいけど」

などと硬い表情で春美は言うものだから、他の面々は本当に悔しいんだな、と察した。「よし、それだけすごい人から貰ったこのお守りなら、ガチャで最高レアを引き当ててくれるはず!!」

そして空気を換える為に真冬がそんなことを言い出す。

彼女が手にしているのは、見慣れた植物の押し花だった。

「それ、ミント?」

押し花と言うより、押し葉としか言えないそのお守りに千秋は首を傾げた。

「まあハツカだね、私も馴染み深いハーブとしてよく使うよ。」

昔のドイツじゃ、産婆さんも魔除けに使ってたから特に」

そう言うだけあって、ハツカを扱う魔術を春美は幾つも知っている。

それくらいハツカはポピュラーなアイテムだった。

「あ……」

「ほら、魔除けのお守りなんだから幸運が来るわけないでしょ」

真冬があまりにも気の抜けた声を出すものだから勘違いした夏芽が彼女をからかつ

たのだが。

「いや違う、来ちゃった……最高レア」

「うっそお」

思わず彼女が真冬のスマホ画面を覗き込むと、そこには最高レアの演出と共に「Ne w」の文字が。出るキャラが被ったというオチでもなかった。

「わっ、しかもドロテア夫人だ!! ピックアップ仕事した!!」

ラッキーだと、にんまりと笑う真冬。

「誰よそれ」

自分が宿題をしているのに目の前でゲームをされて面白くないのか、夏芽が不貞腐れたようにそう言った。

「世界史の教科書に……は載ってないか。」

神聖ローマ帝国時代のドイツ王国の伯爵夫人だよ」

「しらなーい」

「まあ、私もこのゲームに出てくるまで知らなかったけど」

真冬が遊んでいるのはスマホゲームの定番である歴史上の人物の名前や経歴やらを借りて集結する人気ゲームだった。

男でもとりあえず女性化しとけば売れるだろ、と言わんばかりなソシヤゲ界限です

トリー重視の硬派さが受けているシリーズである。

ドロテア夫人も例に漏れず歴史上の人物だった。

「いやあ、まさか引けるなんてなあ。

イベントストーリーで好きになったキャラだから嬉しいなあ!!」

と、まあ真冬はレアキャラを引けて大喜びだった。

「いやね、このドロテア夫人の夫がダメ人間でさ、イベントの敵キャラとして出てくるのにピンチになると事あるごとに妻に頼って窮地を脱するんだけどさ。

まあ、このゲームも何年も続いているしプレイヤーの勢力はとんでもないことになってるから勝って当然みたいなシナリオだったんだけどね、ドロテアさんもいろいろと魔法でプレイヤー達を妨害してくるんだよ。それが厄介で厄介で。

イベントのラスボスに幾度の作戦失敗の責任に追及された後、夫と一緒に出てきてようやく真つ向勝負になるんだけど、その時の会話がエモくてさ。

なんでそんなダメ夫に付いて行くんだ、って主人公に聞かれたら、『彼が夫としての責任を果たそうとしている限り自分は裏切らない』、って恰好良いよねえ。

夫の方もキャラが立っててさ、俺は妻が居ないと何もできないのだって堂々と主人公たちに言っちゃうコミカルな人で」

「あー、はいはい、わかったから。夏芽の勉強の邪魔しない」

興奮して早口でまくし立て始めた真冬を部屋の隅っこに持つていく千秋である。

「師匠もハマるならそっちのゲームにすれば良かったのに……」

春美は楽しそうにしている真冬を見てそうぼやかずにはいられなかった。

彼女らがやっているソシヤゲは苦行として有名なのである。

「でも、ドイツ王国時代の人物に魔女キャラはどうなのよ」

そして魔女の一人としてゲームのキャラ設定ににツツコミを入れる春美だった。

「このゲーム、日本じゃマイナーな人物が人気キャラになって史実の方も有名になるってことがよくあるんだけど、ドロテアさんってどうにも曰く付きの人物らしいよ。

なんでもオカルトに傾倒してたとか、出自がハッキリしてないのに本妻になったとか、夫が出陣する度に敵軍が混乱したりとか」

「へえー、それを反映して魔女キャラなんだ」

「ドイツは魔女の本場だしね!! いつか魔女さんにもいろいろと聞いてみたいなあ」
ウキウキしている真冬を見てみると、春美も面白くて小さく笑っていた。

そんな風に夏休みの日常を謳歌している四人に、その終わりを告げる鐘の音があった。

ぴんぽーん、とインターホンの機械音が夏芽の家に鳴り響く。

「はい」

夏芽は一旦勉強の手を止めて、玄關に向かつていく。
そして。

「お邪魔しまーす」

夏芽は、来訪者と共に自室まで戻ってきた。

「望海、何か用なの？」

来訪者の顔を見て、少し不機嫌になった春美が言った。

しかし、当の望海は室内を見渡し、千秋に向けてこう言い放った。

「千秋さん、先日相談された件について報告を持ってきましたよ」

彼女の言葉に、他の三人の視線が千秋に向く。

「なんで、わざわざここに来て言いに来るのよ」

千秋が顔を背けてそう呟く。その表情からは、その話を他の面々に知られたくなかったと書いてあった。

「いえ、千秋さんの家にお伺いしたら、こちらに来てしていると聞いたので。

特段手間と言うほど離れていませんし足を運んだ次第です」

そう言つて、望海はバッグから資料を取り出す。

「こちらが宗教法人『輪廻の扉』の資料になります」

僅かな躊躇いの後、千秋はそれを受け取った。

.....

.....

.....

「お母さんがね、変な宗教にハマっちゃったの」

本当に心苦しそうに、吐き出すようにして千秋はテーブルに座る他の四人にそう言った。

「あー、それはつまり、悪質な宗教ってこと？」

うちのパパとママに相談しようか？」

「ううん、待つて。まだ悪質かどうかわからないの。」

特に変なモノとか買わされてる訳じゃないみたいだし、会費も年間で三千円くらいらしいし」

心配そうに親身になって話しかける夏芽に、千秋は首を振って答えた。

「ほら、この間の天狗の一件で知り合った木次さんって居たでしょう？」

あの人から話を聞いてみたんですよ、そしたらいろいろとお話を聞かせてもらえまし

たよ」

件の宗教法人について望海も興味があったのか、にやにやとしながら調査結果を見せびらかし始めた。

「あの人と連絡とりあつてたのかよ」

「まあ、いろいろと面白いお話を出来ましたよ。こつちも体験談とか話したりしましたし」

楽しそうにしている望海を夏芽はあきれ顔で見ていた。

「聞いた限りだと、約五年ほど前に日本で設立した宗教団体のようですね。」

創始者兼教祖は本名不明で、異能者であることを公表しているようです。

規模は全国に三十か所ほど支部があり、海外にも進出して爆発的に数を増やしているそうです。

信者の数は公式には二十万人ほどだそうです。今も増え続けているでしょうね。創設五年でこれは大したものですよ。

それにカルト、と言うほどには反社会的ではないようです。活動も大人しい部類だそうで」

それで面白いのが、とニコニコ顔の望海が次に話を進める。

「この教祖、自らを転生者であると名乗り、死後も来世に生まれ変わる方法について語

り、それが教義となつていていることですね」

「う、うさんくさー」

耐えきれないと言わんばかりに、夏芽がそう口にした。

「ここに教団のパンフレットがあるんですが、大雑把に転生の仕組みについて解説してあるんですよ。見ますか？」

四人の沈黙を肯定と受け取ったのか、望海はテーブルにパンフレットを広げた。

そこにはデフォルメされた三つの荘厳な門が図示されており、矢印が二つ目の門まで開けて通っている。

「えーと、死後には三つの扉があり、生前の修業によつて開けられる門の数が違う？」

「第一の門は愚者の門、修行を経ない人間はこの門を開けられない。」

「第二の門は死の門、厳しい修行をした者が超えられる門。教義ではこの門を超えることを目的としている、と」

真冬と春美がなぜか順番に読み上げ始めた。

「ちよつと、春美ちゃん!! ここ、この文章!!」

速読していたのか、先の文章について読んでいた千秋が次に読まれる文章を指差した。

「第三の門は世界の門、神の国への扉であり、神の座に至る資格の有る者が開けられる

扉。

彼方よりこの世界に魔術を齎した神々はこの門を開けてこの世界の礎となった——
「ッ!?!」

その一文を読んだ春美は、夏芽たちと顔を見合わせる。

「これ、もしかして、前にあのカルトヤクザのところで春美ちゃんが聞いてきたって言う奴じゃ!!」

「どういうことですか?」

「似たような話を、前に春美ちゃんが聞いたみたいなのよ」

声を荒げる夏芽に疑問を向けた望海が、千秋の説明を受けてなるほどと頷く。

「教祖は魔術の類などは見せないらしいですが、これでハッキリしましたね。」

これはホンモノの異能者が設立した、魔術教団だ」

望海はそのように断言した。それを否定する人間は、この場にはいない。

「実はこの教団、無作為に人を選んで別室で修行を課すらしいんですよ。」

怪しげな儀式でもしてるんですかねえ!!」

その怪しげな儀式でもしているかもしれない宗教にハマっている人間が母親に居る者が目の前に居ると言うのに、望海は平常運転で楽しそうだった。

「しかも滅多に顔を出さない、ご神体なる人物も秘されているとか!!」

「なんだかワクワクしません!？」

望海は本当に楽しそうだった。春美はこいつ殴ってやろうかと思つた。

「それで、のぞき見。まさかあんた、また術を使つてのぞき見とかしてないでしょうね」

「私の名前は望海ですよ、春美さん。」

いい加減にしてくださいよ、私だつてちゃんと学習するんですから」

望海は胸を張つて、春美にそう答えた。

「——それに、今回は何も起きませんでしたから!!」

「ちつとも反省してないじゃないのツ!!」

ついに春美は望海をぶん殴つた。

げほッ、と見事な腹パンが望海に突き刺さり彼女はむせた。

「げほげほッ、へへ、実を言うとも何も起こらなかつたというのは語弊がありまして……」

「ええと、前に師匠にお仕置きされた時の仮死毒はどれだったかしら」

「これ、これを見てください!!」

姉弟子に折檻されても笑顔を崩さない望海は、ふるふる震えながらスマホを見せた。

「これは教団本部を見ようとしたんですけどね……」

彼女のスマホの画像には、建物の内部などどこにも映っていないかった。

ただ白い紙に、『教団本部内をご案内いたします。お友達もどうぞ』という文章と共に、日付と時刻や教団の電話番号が示されていた。

「それで教団の方に電話したら、当日六人でアポが取れているって言われまして」

「二人で行けば？」

「そんな殺生なこと言わないでくださいよお」

笑みを浮かべたまま縋りついてくる望海を気持ち悪いモノのように引きはがそうとする春美を誰が責められるだろうか。

「てか、なんで人数まで指定されてるの？」

得体の知れないその招待状に、ゾツと背筋を凍らせている千秋が口にする。

「予知とか、未来視か、こんな風に術をカウンターされるなんて舐められてるじゃないの」

相手は望海を殺そうと思えば、念写の時点で殺せた筈である。

それだけの技量が、この招待状を見せた相手にはあった。

「せっかく案内してくれるって言うてるんですから、行きましょうよ!!」

「なに真に受けてるのよバカ。」

私たちを誘い込んで実験材料にする魂胆かもしれないでしょ」

「こういう異教の専門家もいるじゃないですか、ね？　ね？」

千秋さんの為にも、この教団の実態を探ろうじやありませんか!!」
なおも春美にまわりつこうとする望海。

「六人で、か」

こうなるのなら望海に調査を頼まなければよかったと、千秋は後悔しながら彼女の言葉を反芻する。

何だかんだで、自分たちは行くのだろう。初めからそうなるように。
そんな予感めいたものを彼女は感じていた。

到達について

轟音と共に、水しぶきが舞い散る。

氷が割れて水中深くに沈んでいた“何か”が浮かび上がる。

「オーマイゴッド……」

引き上げを行った張本人であるテンペストは、その全貌を見上げて絶句した。

「いったい何なんだい、これは……」

引き上げの際の感触からして、巨大な建造物か何かなのは把握していた彼だったが、実物を見るとそれは彼の理解を超えた何かだった。

「おそらく、船だと思うわ」

作業を一任したイヴは、南極の氷上に置かれたそれを見てそう答えた。

「これが船なのですか？」

普段感情表現が乏しい召喚士も、驚嘆を隠し切れない。

テンペストが引き上げた建造物は、人類史において見慣れないデザインをしていた。

イヴが言うことが正しければ、船首にあたる部分は卵の先端のように流線形であり、それが引き延ばされて胴は細長い。

上空から見れば、横たわった細長い卵にしか見えないだろう。

そして不思議なことに、長い年月放置されていたそれには経年劣化の形跡や、コケや水生生物などの付着物が一切無かった。

「なんてこった。神は海を割ってこんなものを水底にぶち込んだのか」

テンペストのぼやきを無視しつつ、イヴは未知の建造物に触れる。

「地球上に存在しない物質だわ。」

魔力の伝導率だけでも他の鉱物とは比較にならない。

超高度な錬金術によって生成された物質に違いないわ」

「装甲を引っぱがすだけでも計り知れないお宝ですね」

ぺたぺた、と素手で外面を触って調査しているイヴに、船首を見上げる召喚士。

「おいおい、あまり離れないでくれよ」

今更だが、三人は南極という極地に居ると思えない普段着同然の格好だった。

三人がこの極寒の中で平気なのはテンペストが超能力で周囲に膜のような力場を張っているからだ。

彼が慌てて二人に近づこうとした、その時――。

——卵の先端が、割れた。

より正確に表現するなら、開いたの方が正しいのだろう。

卵の先端が音もなく四つに開き、客人を歓迎するかのように階段が下りて来た。

「……行きましょう」

「マジかよ」

本気か、と尋ねる間もなく二人は階段を上っていく。

慌ててテンペストもそれに続く。

三人が内部に入ると、卵の先端はゆっくりと閉じて行った。

遺跡の内部は、美しい外見と比べて混沌としていた。

「ふんツ!!」

テンペストの振るった腕が、暴風となって通路の果てまで空気を押しつぶす。

「ひぎゃああ!!」

と、叫ぶのは異形の怪物達だった。

そう、遺跡の内部は怪物の巣窟となっていた。

「僕はいつのまにTRPGのキャラクターになったんだろうね!!」

軽口を叩きながら、別の通路からやってきたヒト型の二足歩行の化け物を叩き潰す。

「これ、ゴブリンかしら」

「こっちはオークじゃないですか？」

興味深いですね、内部で独自の生態系が確立されているのかもしれない」

そしてイヴと召喚士はテンペストが倒した怪物の死体を検分していた。

それはまさしく、ファンタジーの世界から出てきたようなメジャーな生物たちだったのだ。

「それにしても、外側から見たら戦艦くらいの大きさでしたが、内部は明らかにそれ以上でしようね」

召喚士は天井を見上げる。

遺跡の天井は暗くとも分かるくらい異様なほど高かった。

当然奥行きも、通路を歩いているだけでは想像もできないほどだった。

「あら、これは内部の地図かしら」

道中の壁には簡易的な地図のようなプレートが張られていた。

イヴはそれを見て、ふむふむ、と頷く。

「地図だって？　というかそれ読めるのかい？」

怪物たちを一掃し終えたテンペストがイヴに尋ねる。

「いえ、全然。でも構造的に重要な区画ぐらいは分かるわ」

そう言つて、イヴは地図を指でなぞつてある場所を指差した。

「おそらく、この遺跡は動力が止まっている。

効率的な電力の配分をするなら、私はここに動力室を置くわね」

「ふーん、この場所が電気で動いてると良いね」

テンペストの嫌味を涼しい顔で受け流し、イヴは召喚士を伴い先に進む。

「おいおい、危ないから先行しないでくれ!!」

一応イギリス人として紳士である自負はある彼も、二人に続いた。

三人は地図に従い道中に何度も怪物を撃退しながら、重要区画の直前までたどり着いた。

「ここが重要区画だというのは、間違いないでしょうね」

召喚士の言葉に、否定はない。

これまでの道中は、怪物が生息しており、悪い意味で生活の形跡が見れた。

身も蓋もない言い方をすれば、汚かった。

だが、目の前の扉には潔癖なまでの白い扉が立ちふさがり、その両脇には門番が待ち受けていた。

「ゴーレムだわ」

「へえ、ようやくボスキャラが現れたわけだ」

門番は巨大な甲冑に長柄の武器を装備していた。

肌の露出があるべき場所は、無機質な質感の関節があるばかり。

テンペストが前に出て、ダンジョンボスに挑もうとしたのだが。

ぶわん、と置物でしかなかった門番の両目に光が灯る。

それは侵入者を排除しようと、敵を認識したかのように見えたが。

『登録されている遺伝子の適合率、99%を超過』

『クラスターの乗員と判断。おかえりなさいませ』

甲冑の門番は恭しく跪くと、そんな機械的な音声を発した。

自動的に扉が左右に開く。

その先には、薄暗く発行する何かが室内を不気味に照らしていた。

「……どういふことだ？」

テンペストの疑問は、他の二人も同様だった。

「行きましょう、この先に答えがあるのよ」

そう言つて、イヴは奥へと足を踏み入れた。

召喚士もテンペストも、無言でそれに続く。

だが、室内にあるモノを見て、三人は言葉を失った。

この部屋は、確かに重要区画だった。

動力室だと言うのも、正しかった。

ただ、動力が止まっているのだから、それを必要とする施設も併設されているというだけのことだった。

さて、動力が一番必要とされる施設とは何だろうか？

「これは、生きているのか？」

テンペストは室内の様子を見て、慄いたように呟いた。

内部は、樹木の幹が透明なカプセルに置き換わったような物体がずらりと並んでいた。

問題なのは、その中身だった。

「本当に、ノアの箱舟みたいね」

イヴがカプセルの中身を見て皮肉気に笑う。

そこに入っているのは、人間だった。

ホルマリン漬けを連想されるそのカプセルの内部には、厳密に言えば人間だけが居るわけではなかった。

耳が長いヒト、獣の部位を持つヒト、頭身が少ないヒト、多種多様の“人類”が保管

されていた。

「いえ、魂の存在を感じ取れません。

私たちはこれを生きているとは言わないでしょう」

召喚士はそうのように断言した。

ここにあるのは、非常用の最低限の動力だけで生命を維持されている、生きた標本だった。

「良い物を見つけたわ」

標本の列を抜けると、奥に未知の装置が存在していた。

モニターに該当する部分はあるが、下手に触ると何が起こるか分からない。

それを踏まえて、イヴの視線は部屋の隅に向けられていた。

「オートマタ、ですか?」

召喚士の言葉にイヴは頷いた。

そこに有ったのは、直立したまま微動だにしない女性を模した人形だった。

人形であることは球体の関節見て意識して人間と区別して作られているようだった。

「う、動くのかい?」

暗がりにある人形というシチュエーションに慄くテンペストが尋ねる。

どうにも壊れているといった様子ではない。

「わからないわ。でもこれはこの装置の外部ユニットである可能性が高いわ。

少なくともこの区域の管理を任されていたのかも」

「だがそんな重要なユニットがシャットダウンしているのはおかしくないかい？」

テンペストの疑問も尤もだった。

「管理するためのオートマタが動いていないと言うことは、ここの動力事情はそれほどまでにひつ迫していたということでしょうか」

「とりあえず、今日のところはこれを持ち帰りましょう。」

実際に動かせるかどうか、試みないといけないから」

考察するのは後回し、とイヴはテンペストに目配せした。

やれやれ、と彼は超能力でオートマタを浮かび上がらせると、本日の成果を持ち帰るために踵を返した。

「まったく、僕たちは世紀の大発見をしたのに、持って帰るのはお人形さんだけとは」

そこで、彼はたまたま偶然見つけてしまった。

「——なッ、お、おい、あれを見てくれ!!」

目を見開き、それを指差す。

それを見た二人も息を呑んだ。

そこに有ったのは、他のカプセルよりも上等と思われる装置の中身に浮かぶ女性で

あつた。

そう、イヴと全く同じ顔をしている、ただの人間の標本だった。

§ § §

「なるほど」

カタリナは受け取ったパンフレットを閉じた。

「どう、カタリナさん。やっぱりここつて危ない宗教だと思う？」

「それは分かりませんが、相手が魔術に精通していることは理解しました。

こういう宗教が流行ると言うことが、時代だというのでしようね」

彼女は対面のボックス席に座っている千秋にそう答えた。

「気になる点があるとすれば……」

彼女はパンフレットの簡単な経歴が掛かっている教祖の簡素な紹介文を指差した。

「彼女自身が預言者を名乗っていないというところでしようか」

「どういふこと？」

かたんことん、と揺れる電車の窓の景色を見ていた夏芽がその言葉に反応して問い返す。

「キリスト教においても、預言者は重要な意味を示します。

神の子も扱いとしては預言者であり、聖書にも飢餓を予知したという話も出てきます。

それだけに、預言者を騙ることは死罪になるほどの重罪でした」

「へえー」

「日本語には未来を予測すると言う意味で、よげん、という言葉が二種類ありますね。

その違いは分かりますか？」

「全然!!」

夏芽は即答した。違いを考える気さえないアホだった。

「えーと、予言が普通に未来を予知するって意味で、預言者の預言は神託って意味合いなのかな？」

「ええ、それで合ってます」

カタリナはスマホで意味を調べて答えた真冬に頷いて見せる。

「つまり宗教における預言とは、神の存在とは切っても切れない関係にあるわけです。

ですが、このパンフレットには彼らが崇める神の存在が言及されていない」

「確かに、どんなインチキキ宗教でも神様ぐらいいいるもんね」

専門家の指摘に、納得したように夏芽は頷いた。

「このようなインチキ宗教には、神の奇跡が必要なのです。

そうやって足元に縋ってきた信者を搾取するのですから。

ですが、信者たちが全員来世への転生を望むという教義はむしろ——」

「むしろ？」

「……——むしろ、悪魔崇拜に近いと言えます」

カタリナは言葉を選ぼうとして一瞬躊躇ったが、結局思った言葉をそのまま口にした。

「あ、悪魔崇拜ッ!？」

実際彼女の懸念は千秋の表情が青ざめていくことでの的中した。

「あくまで誤解を恐れない表現をすれば、という意味ですからそこまで重く受け止めなくても構いません」

「そうそう、あくまだけにね!!」

「じゃ、じゃあ、地下で秘密の邪悪な儀式をしてるって可能性もあるってことですよね!？」

「スルーですか!!」

夏芽の場を和ませようとしたジョークは無視された。

「むしろ、教義はどうあれ、していない方がおかしいでしょうね。

段階的に秘密の教義を開示し、信者を陶醉させるのはカルトの常套手段ですし。

その第一段階目が教団への多額の寄付だったりするのかもしれませんが」

「それは私の得た情報にも合致しますね。」

彼らは奥で選ばれた信者たちによって秘密の集会をしているとかなんとか」

隣のボックス席でグルメ雑誌を読んでいた望海が口を挟む。

「そんなところに行つて、大丈夫なのかな？」

皆の不安を代表するように、真冬が呟いた。

「五分五分ですね。相手の目的は、おそらく勧誘かと。」

どこぞの大馬鹿が喧嘩を売るような真似をしているので、こちらが突っぱねたら武力

行使に至るかもしれません」

だから、カタリナの足元には大きな旅行カバンが置いてある。

もし相手が人心を弄ぶ邪教の類なら、そのまま滅ぼすつもりだった。

「この馬鹿には二度とアホなことが出来ないように呪いを掛けておいたから」

「春美さん、もう反省したって言ったじゃないですかー」

「そうね、言うだけなら簡単だものね」

春美は無慈悲な物言い、望海に取り付く島もない。

勿論誰も同情しなかった。

「千秋のところのおばさんの為だもんね、今日はうちのごくつぶしも連れて来たよ」
「誰がごくつぶしだーい!!」

夏芽は膝の上のハンドバッグを開けると、そこから小人が出てきてモノ申してきた。
「あんた、こういう時ぐらい役に立ちなよ。」

もし危ないことが起こっても、逃げるくらいでできるでしょ?」

「めんどろだなあ、だったら前にあげた魔法の杖を使えばいいじゃない」

「いやよ、あれ寿命を削るんですよ」

「だからなに? どうせ夏芽なんて一生掛けても大したことできないくせに。」

だったら、あの杖を使って歴史に名を残した方が素晴らしい命の使い方じゃないの」

人間を個として重要視していない妖精の価値観はまったく夏芽とはかみ合わない。

「でも、変な宗教にハマってどうしようもない人たち相手にイタズラできるかもよ」

しかし夏芽もだいぶ彼女の扱いを覚えて来た。

口ではどう言おうが、妖精の興味を引ければそれで十分なのだ。

「あ、それ面白そう」

妖精は刹那的で享樂的で我慢が出来ない。する必要がない。

だからこそ危険で、だからこそ誘導も難しくなかった。

「死が怖いからって来世に救いを求めるなんて間抜けな連中をおちよくってやったら

きつとすごく楽しい!!

「どうやって慌てふためかせてやろうかな!!」

御覧のように、めんどくさそうにしていた妖精コティはすっかりやる気になってしまった。

「夏芽さん、これは忠告ですが、あまりそのやり方は多用しない方が身のためですよ」
「分かってますよ、カタリナさん」

この程度で彼女を御したなんて思えるほど夏芽は豪胆ではなかった。

所詮これはコティをたきつけただけで、爆弾の導火線に火を付けたようなものだ。それで驕るのは間抜けだけである。

そうしてブリーフィングを列車内で終わらせた一行は、目的地へと向かった。

「お待ちしておりました」

そして一行はまず面食らった。

受付には待ち構えているかのように、パンフレットに載っていた顔が佇んでいたのがある。

「私がこの『輪廻の扉』の代表です」

彼女こそ、教祖として紹介されている人物だった。

「ご丁寧にどうも」

「当施設について案内しますので、どうぞこちらに」

まさか教祖本人に案内してもらえるととは思わず、彼女らは困惑しながらも付いて行くことになった。

こうして彼女に建物の内部を案内してもらおうと、彼女らの脳裏にこんな言葉が過った。

——あれ、思ったより普通じゃね？

清潔感のある建物内は、サロンで信者たちが談笑しており、怪しげな雰囲気は皆無だった。

多目的ホールではレクリエーション活動をしており、月末までバリエーションに富んだ企画が催されるようだ。

そして一角にはオシャレなカフェが併設しており、メニューにはスイーツも充実していた。

「あの、ここって宗教団体ですよね？」

一番身構えていた千秋がそう尋ねてしまうくらいには、表向きに何も無かったのである。

「言いたいことは分かります」

教祖である彼女は面々にカフェで飲み物を振る舞い、とりあえず一息ついていた。

「この教団は当初、私とその仲間で作ったものなのですが」

そう語る彼女には複雑そうな表情が浮かんでいた。

「最初はこの団体を、私はNPO法人として届けるつもりだったのです。

しかし、仲間たちとの意識は私とは少々異なっていたようで」

「それで宗教法人になってしまった、と」

「ええ」

ある意味拍子抜けするような真実だった。

「そもそも、私は自分の事を一度も教祖だなんて言った覚えはないのです。名乗ったこともありません。どこでどう紹介されていようが」

そこで溜息が一つ。

状況が自分の手から離れていることに対して諦めがそこに有った。

「では、いったいどのような活動を目的としてこの団体を立ち上げたのですか？」

見極めるような鋭いカタリナの視線を受けて、教祖は頷いた。

「それを飲み終わったら、案内しましょう」

その場所は、幾重にもセキュリティに守られた、施設の奥にあった。

誰にでも重要と分かるその場所にあったのは。

「あ、先生!!」

「先生だーッ!!」

「また誰か連れて来たの?」

十数名の子供たちが遊んでいた。

更に数人の大人が彼らの世話をしている。

その様子は、保育園か何かにか見えなかった。

「あの、ここって?」

「すぐに分かりますよ。誰か、彼女らにデモンストレーションをするので試射場に付いて来てくれなにかしら」

試射場、というこの場の雰囲気に見合わない単語に気になりつつも、子供を見ていた大人の一人が彼女に合流し、場所を移すことになった。

そして「試射場」、とプレートに書かれた部屋の中は、それこそ銃の試射場にしか見えな場所だった。

「では、行きます!!」

子供たちを見ていた大人である彼が的に向かつて片手を向ける。

その瞬間、紫電が走った。

二十メートルほど先の的が、黒焦げになっていた。

「異能者……」

望海が、唾然と呟いた。

そう、的を雷撃で黒焦げにした彼は異能者だった。

「はい。彼も、あの子供たちも、全員異能者なのですよ」

驚く面々に、教祖はどこか憂いを帯びた表情でそう言った。

「ここでは異能の扱い方や、それを他者に向けないように子供の頃から教育していくようにしているのです。」

昨今の異能者のイメージは勿論、異能は暴走の危険もありますから」

雷撃を放った超能力者である彼も言葉を引き継いだ。

彼が長袖をまくると、手首や腕に痛々しい火傷の跡が残っていた。

「私たち『輪廻の扉』の本来の目的とは、異能者の互助と世間のイメージから身を守るための結束の為にあるのです」

教祖は真摯に彼女らに語った。

それが、他所から見た怪しげな宗教団体の正体だったのだ。

結果的に言うのなら、宗教という形をとったのは彼らにとってプラスだった。

余計な政治的な干渉を信仰の自由の有る日本では受けずに済んだからである。

「今日あなた達と会えて、私は嬉しかった。」

異能者と知って友人として付き合っけいられるあなた達の関係が羨ましい」

それが本心からの言葉であると分かるから、勝手に邪教と決めつけていた面々は少し恥ずかしかつた。

「つままない、つままない、つままない。もつと馬鹿どもの巢窟だと思つてたのに」

「うるさい、黙つてて。後でお菓子買つてあげるから」

そして不満たらたらのコテイを夏芽が収めていた。

そうして、見学を終えた面々が帰ろうとすると。

「——ッ」

ふと、教祖が足を止めた。

「どうしたんですか？」

春美が尋ねると、彼女は振り返つた。

「珍しいこともあるモノですね。」

私たちのご神体である、預言者様があなた達に御会いしたいとのことだす」

教祖のその言葉に、今まで宗教色がほとんど見当たらないこの施設に対し、面々は逆に驚きが出て来た。

「預言者……」

「はい、私たち異能者を導き、組織を創設せよと仰られた方です」

彼女は神妙な表情になり、一向にそう説明した。

「会わせてもらえますか？」

「勿論、そのつもりです」

教祖に強制の意思は無いようだったが、望海の言葉に頷いて行き先を変える。

そうして六人と一匹は、一番奥の部屋へと通された。

「やあ、待っていたよ」

生活感の感じられない白亜の部屋の主は、一行を無機質な視線で歓迎した。

「うげッ、なんでこいつらがいるの」

コティはその顔を見て即座にハンドバッグの中に隠れた。

「貴方が、預言者？」

「そうだよ」

子供にも青年にも少女にも見える中性的なその姿に、想像していたものと違って驚いていた。

「あの、カタリナさん？」

まさか偽物だと断定して斬りかかりやしないだろうかと心配になった真冬が、彼女を見て絶句した。

カタリナは片膝を突いて祈りの姿勢のまま涙を流していた。

そして彼女は目の前の存在に訴えかける。

「お願いです、どうかあなたのお言葉をお聞かせください。

どうかこの私に、主の御心をお伝えくださいッ」

そんなカタリナを、預言者は変わらぬ無機質な表情で見下ろし続けていた。

悪魔について

ここしばらく、ケンジたちの朝は変わった。

元々男所帯のヤクザ事務所の名残で、元組員たちは事務所の有る雑居ビルの一室にて寝泊りしていた。

お金の無い当時ならまだしも、カタギの仕事が軌道に乗っている現在でもアパートなどに移らないのは彼らがここを自分の居場所だと認識しているからでもあった。

まあ尤も、通勤が面倒ではなくていいからという理由もあった。

「皆様、朝でございませす」

そして変わった点というのが、朝六時頃に彼らを起こしに来る人物のことだった。

イヴの趣味でゴスロリメイドの格好をしているタラクサムである。

その格好にメイドとしての機能性は無いが、彼女本人はメイドとして十分やっていくだけの技能を有していた。

「うーっす……」

男たちは寝ぼけまなこになりながらも、並べられた布団の中から起き上がっていく。

「食堂にて朝食の準備が終わっております。

始業の時刻まで各々朝食を取ってください。

私はその間に室内の清掃を行いますので」

昨晩は酒盛りでもしていたのか、ビールの缶やつまみの袋が散乱していた。

男たちは布団と毛布を畳んでのそのそと食堂へと歩いていく。

信じられないことだが、これでも彼らはだいぶ色気づいた方だった。

タラクサムがイヴによつてこの事務所に派遣される前まで、布団は敷きっぱなしで毛布は散乱、室内には誰のゴミか分からないものが落ちてたり、掃除は月に一度あれば良いという有様だった。勿論、シーツを洗うなんて滅多にない。

食事はコンビニ弁当が当たり前で、偶に出前を取る程度の食生活。

ヤクザ者だったから生活能力が無いのではなく、生活能力がダメだからヤクザ者になつたのだと分かる面々だった。

とは言え、人工生命体と言つても女性の目が有れば男と言うのは意識するもの。

彼女は毎日シーツや毛布を洗い、布団を干して部屋を掃除し、食事の用意までしてくれる。

当然だが、こんなことはイヴに指示されていない。

彼女の仕事は夜の魔術の指導なのでそれまで何もせず待機するということは人間で

言うところの暇すぎて苦痛なのである。

或いは他者に奉仕するという本能にインプットされている事柄が退屈を許さないのか。

ともあれ、最近になって召喚士とは別の意味で男どもは彼女に頭が上がりなくなってきたのも事実だった。

「お前、この間夜中に騒いでただろ、ゴキブリでもでたのか？」

「違いますよ」

出勤前の朝食を、だいぶ前に潰れた一階の中華料理屋のテナントを買い取って食堂兼休憩所として利用している場所にて取っている面々は思い思いに雑談していた。

「あの時は夜中に偶々起きちまって、催したんでシヨンベンに行ったんすよ。」

そしたら、月明かりが差す窓の横でタラクサムさんが廊下で掃除してるのに出くわして、それで……」

「ああ……それは災難だったな」

彼女が人間の女性だったら、それこそこのむさくるしい男どもからアイドル扱いを受けていたかもしれない。

だが人形めいて容姿が整いすぎていると、全く別の悲劇が起こるようだった。

朝食を取り終わると、しばしの間を置いて事務所へと出社である。

タイムカードを押して、外に出て道路に出るとラジオ体操をして社長である軽塔の朝礼を経て、再び事務所に戻ってくる。

そうして、朝のミーティングと相成る。

「ケンジ、お前営業から降りろ」

そして通告される人事異動の言葉を、ケンジは硬い表情のまま受け止めていた。

「何も、お前の営業成績が問題あるわけじゃない。

お前さんが作った『撃退ケロベロス君』は累計百個を売り上げている」

軽塔はそう言つて、商品のサンプル持ち上げる。

それはケロベロスを模したストラップに見えるだけの代物だ。

勿論それは見た目だけで、害意を以つて接触する相手に反撃する簡易ゴーレムだ。

この会社は訪問販売以外にも、ホームページでのインターネット販売を行つており、量産の向かない魔術品において百個も生産販売するのはそれだけで売れ筋だった。

痴漢撃退アイテムと言う触れ込みであり、効果もわかりやすいためお値段10万円にもかかわらず人気商品なのである。

それを開発したのが、ケンジだった。

「お前には才能もあるし、商品開発に専念した方が良いと思うぜ」

何より、軽塔は口には出さなかつたが今のケンジはともではないが営業の仕事が続けられる状態ではなかつた。

「まあ、仕方がないですよね、オヤジ……いえ、社長」

ケンジは苦笑して肩を竦めた。

彼の姿は、露出の少ないスーツ姿でさえ分かるほど異様だつた。

袖から覗く腕や手の甲には、奇妙な刺青が入つていたので。

これくらいなら、手袋をすれば隠せるかもしれない。

だが、その刺青は腕だけではなく全身、それこそ顎にまで及んでいた。

その全貌を、先日彼は見ていた。

日本で刺青と言えばヤクザを連想するだけあつて、軽塔は数多の刺青を見ていた。

彫られるのは動物や空想上の生物であつたり、神仏であつたりする。

だがケンジに施された刺青は、中東の民族で見られるような呪術的な代物だつた。

そしてその背には、悪魔の全身が刻まれていたのだ。

当然それらは、ただの「絵」ではなかつた。

——くくくッ

その時、ケンジの刺青が波打つたのが全員に見えた。

次の瞬間、彼の背に施されていた悪魔の刺青が動き出し、床を這って事務所の接客用のソファーにまで移動したのだ。

そうして、刺青は瞬きの合間にその本性を現した。

それはいつそ分かりやすいほど、燕尾服を来た紳士の姿をした悪魔だった。ケンジに刻まれたのはただの刺青ではなく、刺青に擬態した悪魔であった。

「これは傑作である!!」

この国のヤクザは刺青を以ってカタギに戻らぬことを誓うと言うが、カタギになってから刺青を入れることを望むとは!!」

声高に、テンシヨン高い紳士は彼らを嘲っていた。

「……準男爵」

軽塔は溜息を吐いて、にやにやと笑っている悪魔に言った。

「仕事中に茶々を入れないでくれ」

「そう言うな、退屈なのだ!!」

とは言え、私も面白そうだから茶々を入れたのではない」

無駄に大仰な身振り手振りをする悪魔は、悪魔らしく助言を齎す。

「魔術師を抱える会社なのだろう、お前たちは!!」

その御業を無知な人間どもに証明するのは難しいが、お前たちは見た目を必要以上に

重視する。

お前たちの占い師がそうであるように、場の空気などの雰囲気を利用するのはお前たちにとってプラスになるのでは？」

悪魔は尤もらしい利益を語るが、軽塔は真に受けなかった。

「そうか、十分に考慮した結果却下だ。以上」

「くくく。そうかそうか」

提案を一蹴されたというのに、悪魔は楽しそうに笑うだけだった。

§ § §

「姉御、俺はもつと力が欲しいです」

ケンジが己の師にそう告げたのは、つい先日だった。

「あなたにはまだ早すぎる」

その返答は実に簡潔だった。

「お願いです、姉御。俺は姉御にも、イヴさんにも、同胞たちにも認められたいんです!!」

「あなたは筋が良い。タラクサムの指導があれば十年先には一人前になれるでしょう」

「そうかもしれません。そう彼女にも言われました」。

でもその頃には、彼女は居ません!!」

ケンジの訴えを召喚士は黙って受け止めた。

タラクサムはイヴの作ったホムンクルスである。

多くのファンタジー作品でホムンクルスに付きまとう問題に、寿命がある。

彼らに人間並みの寿命を持たせるのは技術的に不可能なのではなく、その価値が無い
と言うだけである。

使い減りした道具は手入れするより、新品にするのが良いのだから。

あと三年。それが戯れにイヴが彼に突き付けたタラクサムの寿命である。

「寿命が一年を切ると動作が怪しくなるのよ。」

アイデアの弟子のよしみもあるし、そうだったら「あれ」をあなたにあげてもいいわ
「よ」

なんて、試すようにイヴはわざとらしく相手を苛立たせる言葉を選んでケンジにそう
告げたのだ。

「その後イヴさんがなんて言ったか、覚えているでしょう？」

記憶を受け継がせることもできるけど、その必要性は感じないって!!

俺があの人に、その価値を示すしかないんですよ!!」

ホムンクルスはイヴにとってパソコンのハードに過ぎない。メモリを別のハードに移動することなど容易いことだった。

ただ、イヴにとっては新品のハードに基礎となるOSをインストールするだけで十分と言っただけの話だった。

「私がイヴに彼女を保管してもらえるように言っておきますよ。」

あなたが一人前になれば、それくらいのコストには見合いますから」

「姉御、俺はあの人がいらない時間なんて耐えられないんですよ」

それは青臭いほどの切実な訴えだった。

「ふむ……」

召喚士は、ケンジの眼を見た。

それは愛する人に全てを捧げるといふプラスの感情ではなく、愛する者と時間を共有できないのが耐えられないというマイナスの感情だった。

得てして、魔術を窮めようと邁進できるのはそう言った人間なのだ。

「では、あなたの魂の価値を示してもらいましょう」

召喚士は彼の意思を尊重し、魔術書を広げた。

「尤も、その相手は私ではありませんが」

彼女は召喚士。

誰かに力を与えるのは朝飯前だった。たとえそれが、破滅的な物であろうとも。

そうして、彼女の手によって悪魔は現れた。

彼女が従える悪魔より、かなり高等な知性的な振る舞いをする悪魔が。

「私は、退屈なのだ」

準男爵という、悪魔学において聞きなれない階級を名前代わりに名乗った悪魔は開口一番にそう告げた。

「お前は私に何を求める？」

知識か、権力か、愛か、財宝か？」

——どれであろうとも必ず与えよう。ただし、必ずお前は破滅する。

例えば、の話であるが。

目の前にオモチヤの積み木が置かれて、それを見て面白そうと思える人間はどれだけいるだろうか？

この悪魔の心境もそれに近かった。

目の前にオモチヤが現れた。だが面白いとは限らない。

だったら、——積み木を崩して気晴らしにしよう。そう思っていた。

「悪魔よ、我が下に隷属せよ」

「ほう」

普通、魔術師は悪魔に隷属なんて要求しない。悪魔を従えるなんて神話の世界の魔法使いがすることだ。

悪魔を呼び出す恩恵は、あの手この手でその知識を引き出すことにあるのだから。だからこそ、ケンジは悪魔の興味を引いた。

「私を使役したいのならば、よかろう、お前が最も大切な物を差し出すがいい」

少しだけ悪魔の語句に喜色が混じった。

「俺が最も大切に思うのは、彼女だ。それでいいか？」

「ふむ、たしかに」

悪魔は儀式場の隅に立っているタラクサムを見やり、頷いた。

これは契約の確認。ケンジが虚偽の申告をしていないか確かめたのだ。

その上で、どのように裏を搔いてくるのか期待していた。たったそれだけの為に悪魔は隷属の契約に応じる。それが悪魔の価値観なのだ。

「では、彼女をこちらに」

「待て。契約が先だ。契約に合意した証拠を見せろ」

「なるほど、これで良いか？」

悪魔の前に古めかしい羊皮紙が現れ、さらさらと羽ペンで記述する。

「期間は、契約者であるお前の命尽きるまで。

或いは、お前が愛する者への愛を失った瞬間まで。

その時に、私はお前から魂を受け取ろう」

悪魔は前言を翻し、口にした文言を記した文章を差し出した。

「……姐さん、これはどういうことですか？」

悪魔の提示した条件が、最初と異なっている。

なぜそんなことが起きているのか、ケンジは分からなかったので専門家に尋ねた。

「契約を行うまでの対価が最初の条件で、それ以降がこの条件ということでしょうね」

「不動産屋かよ。敷金礼金じゃないんだぞ」

そう、悪魔は契約を急かすケンジに対して一手仕掛けた。

口約束とは言え契約は契約。彼がタラクサムを差し出すと言う最初の条件は否が応でも実行しなければいけない。

契約内容を詰める段階で、最初の条件については話し合いが終了してしまっているの
である。

まさに詐欺師、悪魔の所業である。

「まあいいさ、これでいいか？」

ケンジは悪魔の契約書に己の名前を記した。

これにて、契約は締結された。

「さて、それではその女を戴くとしよう」

悪魔は口を裂けさせ、微動だにしないタラクサムを呑み込もうとした。

——仮に、彼女を食い殺した後、悪魔は難癖をつけてケンジを殺すつもりだった。そういう契約なのだから。

だが、そうはならなかった。

「ひとつ、確認したいことが有るのですが」

そう口にしたのは、召喚士だった。

「それは我が結社の備品であり、ケンジ、あなたの自由にできるものではありません」

ケンジと悪魔の契約の外に居る、召喚士は言った。

「よって、そもそも最初の条件は成立しえませんが。破棄を要求します」

「——ほう」

タラクサムを呑み込む寸前で、悪魔は停止した。

その様子を、ケンジは脂汗を浮かばせながら血の気を引いた表情で見ていた。

「……我が従僕よ、俺の前にひれ伏せ」

ケンジは強張った口調でそう命じた。

「くくく……仰せのままに、我が主よ」

口元に愉悦を宿しながら、悪魔はケンジの前に跪いた。

これが、先日の顛末だった。

召喚士は、人間が使役できるレベルで最高クラスの悪魔を呼んだ。

ハッキリ言つて、ケンジには釣り合わないレベルの相手だ。

「準男爵、なんであんたは俺と契約しようつて気になったんだ？」

契約者は従僕に尋ねた。

普通、自分にはるかに劣る相手に隷属するなんて屈辱ではないのか、と。

少なくとも、最初の段階で嫌なら悪魔は断ることもできたのだから。

「言つたであろう、退屈なのだ!!」

悪魔の回答は変わらない。それ以外の理由など無いのだから。

「我々は、我々の世界において全能に等しい!!」

かといつてお前たちの世界に訪れるにも大きな制約が課せられるのだ。

くだらない規定だが、守らなければなるまいよ」

でなければゲームになるまい、と悪魔は語る。

「さて、私がお前に従属することに屈辱ではないか、と言ったな。

私にとつてお前の寿命はちよつとした映画を見る程度の長さに過ぎない。

ついでにこの世界の観光もできるのだから私にとつては十分なりターンなのだ」

「俺みたいなのに媚びへつらつても傷つく精神性じゃないつてことか」

「然り」

悪魔は悪魔らしい性格の悪さを隠そうともしない。

「ただ我が契約者に一つだけ忠告するのならば、お前は自らの傲慢さを理解すべきであらう」

これは彼にすれば実に親切な一言だった。

単純に、お前の愛は独りよがりで気持ち悪いだけだと率直に忠言したのだから。

「はん、どうせあんたも俺が自分の欲望からあの人を好きになつたと思ってるんだろ」

「結局は、愛やら恋やらは己の欲望に帰結するものだ。

そうでなければ面白くない」

「なら、こゝろしようじゃないか」

ケンジはこんな提案を悪魔にした。

「お前から対価を得るには、俺から差し出さないといけないことがあるんだらう？」

それは人間性だったり、体の一部だったり」

「そうだな、そう言うことになっている」

「なら、俺はお前に性欲を差し出そう。だからお前は俺の力と成れ」

その言葉に、さしもの悪魔もしばし瞠目した。

性欲はそれこそ人間の三大欲求に数えられる重要な位置づけにある。

それを差し出すのだから悪魔も支払う対価は大きい。

「構わないのか？」

我々に魂を差し出すということは、その機能を失うと言うことだ。

片腕を差し出した人間は、たとえ義肢を付けてもその機能を回復することはできない」

魂を差し出す、或いは魂の欠損とはそういうレベルの本当に取り返しのできないことなのだ。

それは彼が再び輪廻を経るまで、決して癒えない傷となる。

「どうした、悪魔。やってみろよ。」

そして笑え。性欲を失ってなお、人は誰かを愛したままでいられるのかってな」

「ほう……」

悪魔にとつて、人間に仕えるのは一本の映画を見るのと大差ない。

だがその内容が面白いか否かまでは選ぶことはできない。

「ケンジ、我が契約者よ。

お前の行く末は、私が責任を以って見守るとしよう!!」

準男爵は、悪魔は思った。

今回の契約相手は、アタリだと。

招待状について

ここしばらく、日本における東シナ海での緊張は高まるばかりだ。

事実上の国家の後押しを受けた外国籍の漁船や艦艇が日本の領海に侵入することが多くなっているからである。

国家間の漁業協定においても当然違法な行為だが、条約やら協定やらが一方的に破られるのは政治の常である。

こうやって外国船を侵入させ、外交的圧力を掛ける目的があるのは明らかだった。あわよくば事実上の領海を徐々に取り込んでやろうという意図まで見える。

海上保安庁は当然そんなこと許せないので出動の頻度も増えて行った。と言うのが、ここ最近までの話だった。

東シナ海の海上にて、五隻の外国船が日本の領海に侵入していた。

彼らの目的は漁業なのでこうして固まっているのはお互いに邪魔でしかない。だが彼らにはそうせざるを得ない理由があった。

『来たぞ、奴らだ!!』

三隻の漁船の護衛に付いていた民兵の船舶が前に出る。相対するのは、一行に近づいてきた一隻の船舶だった。

ただ、それは普通の船舶と言うには異様な船だった。

船首には女神像が無理やり括り付けられ、頭上に伸びたポールには黒塗りの旗がたなびいていた。

その旗に描かれた紋章は、眼帯を付けた髑髏に三角帽子。

今時、創作にでしか見かけないこてこての——海賊旗だった。

ここ最近、この東シナ海には海賊が出現するようになった。

外国籍の船は悉く餌食になっており、軍艦まで被害を受けた。

これにはお隣のお国も激怒。

日本の関与まで疑われる始末だが、海上保安庁は知らぬ存ぜぬを貫き通し、内心「ぶぎやーww」と笑っていた。

とは言え、この辺りはいろいろとデリケートな問題がある海域である。

海賊討伐の名目で軍隊まで出動することになると、大問題だ。

しかし、当の海賊たちはそんなこと関係無いとばかりに声を張り上げる。

「野郎ども!! 今日の獲物だ!!」

アサルトライフルを構えている護衛船を前にして、たった一隻の海賊船の船首に立つのは眼帯をした三角帽子の少女だった。

「金目になりそうなモノは全部奪え!!」

抵抗する奴は殺せ!! 邪魔な船は沈めろ!!」

完全武装の護衛船に対し、海賊船の船員は彼女を含めて十人足らず。

しかも銃器などの武装は最低限だけだった。

ただの漁船を襲うだけならともかく、武装した民兵相手にすれば瞬く間に返り討ちになるだろう。

「お頭!! あいつら、撃つてきましたぜ!!」

警告もなしに護衛船は船上から銃撃を海賊船にお見舞いしてきた。

まだ距離がある為大したことないが、これは威嚇射撃なので当然だろう。

「おう!! じゃあ殺すか!!」

船首に立つ少女は笑って、左右の手に持つ場違いなそれを掲げた。

右手のそれは時代錯誤な槍だった。漁どころか海上で使うのも不向きな。

「野郎ども、ワイルドハントを始めるぞ!!」

そして左手には、ワインの瓶。

だがその中に入っているのは酒と、——人間の、彼女自身の目玉だった。

「我こそはオーデイン!! 狩猟の長である!!」

我が振るうはグングニール!! 嵐を指揮し、亡霊たちを呼び寄せん!!」

どぼどぼ、と自らの頭にワイン瓶を逆さにして酒を注ぐ。

もしここに魔術に精通する者が居たのなら、その酒瓶はミームルの泉の再現だと指摘したであろう。

これはある種の神降ろしに近かった。

少女は船首から右手の槍を投じる。

尋常ではない速度を帯び投じられた槍は雷鳴を纏い、たった一撃で海上を地獄に変えた。

そして、その戦果を雇い主に報告すると、ゆうゆうと去って行った。

その連絡を受けた海上保安庁の職員がその場に駆け付けると、そこには船の残骸だけが残されていたという。

「お頭、今日も大漁でしたね!!」

「おう」

たった一隻の海賊船、その船上にて首領の少女は豪快にウイスキーをラツパ飲みして

いた。

そして目の前に積まれた今日の成果に笑みを浮かべる。

そこにあるのは、縄で縛られ、さるぐつわをされた捕虜たちだった。

漁船の乗員だけでなく、生き残った民兵も居る。

——いや、彼らは捕虜ではなかった。

なぜなら、彼女らは彼らを捕虜として見ていなかったのだから。

「いつもの場所に舵を取れ!!」

今日の分をもう一人の雇い主に引き渡すぞ!!」

首領の声に、アイアイサー、と船員たちが応じる。

そう、彼らの目的は初めから身代金目当ての人攫いだった。

彼女は人殺しで、商人で、海賊で、略奪者で、人攫いで、外道だった。

「ボス、雇い主からクレームです」

「無視しろ、どうせ何もできねえよ。上で話がついてるんだからな」

雇い主が苦言を呈してくるほどには。

現代の私掠船の主は弱腰の連中を鼻で笑った。

「そーいや、ボス。もう一人の雇い主から先ほど使い魔からパーティの招待状が届いてます」

「なんだそりや、貸してみろ」

無駄に立派な便せんを開けると、中から手紙を取り出し彼女はその内容を読み上げた。

「ほーん、イヴの奴。面白そうなこと始めるみたいじゃねえか」

海賊の首領は手紙を読み終えると楽しそうに笑った。

§ § §

今現在の中国は熾烈な学歴社会によって成り立っている。

その様子は外国でもニュースで取り上げられるほどで、受験前後の期間は戦時下に例えられるほどである。

子供の学歴の為に全てを賭す親も珍しくはなく、そのプレッシャーに耐えられない子供が自殺することもあるそうであった。

そんな中国の履歴書にはボランティアの経歴を書く欄があり、どこでどんなボランティアをしたかによって行ける大学や就職先まで変わってくるという。

さて、その中国の履歴書であるが、ここ最近また重視される項目が変わっていた。

異能者であるか否か、である。

中国政府は異能者の発掘と研究に力を入れており、外国からは異能者の軍隊でも作るのではと思われているくらいには大っぴらだった。

この国は異能者が現れ始めると真っ先に彼らを取り込み始めた。人口が多いから異能者の割合が多いため、早急に対処しなければいけないという事情もあった。

当初は異能者でもないのにそうであると名乗り出る者が後を絶たず、混乱の様相を呈したものが現在はそのも落ち着きつつある。

皮肉にも、そうした背景があるからこそ問題は山積みだが中国は異能者に対して最も進んでいいる国と言えた。

さて、そんな俗世の喧騒から離れた中国の奥地にある寺が存在していた。

霞が漂うほどの高地にあるそれは、普段なら静かで修行僧たちが修行に励むにはもってこいの場所であろう。

だが、それは数年前までの話だった。

『お願いです、うちの子を弟子にさせてください!!』

『話だけでも!! 老師様もこの子を一目見ればわかってくれます!!』

『どうか息子に異能を授けてください!!』

寺のある山門は連日子供を連れた親たちが長蛇の列をなしていた。

彼らは息子の将来の為に必死だったが、それでもその先に近づくことは難しかった。なぜなら、完全武装の軍人たちが山門を警備していたからだ。

山門を抜けて長い階段を上った先にある寺院には、かつて仙人が修行した地という伝説が残っている。

いや、今となつては伝説ではなく事実と言つた方が正しかった。

数年前、かつてこの地で修行した仙人の生まれ変わりを自称する少年が、この当時誰もが目することの無かつた寺院の門を叩いた。

彼はまさしく神通力としか思えない奇跡を披露し、修行のし直しをするとして若年にも関わらず周囲から老師と尊敬を集めたのである。

そこまではよかつたのだが、問題は彼の力を金もうけに利用しようとした寺院の方だつた。

彼に修行を付けて貰えば異能者になれる、と喧伝したのである——全くのウソではなかつた。

彼は本気で修行に打ち込む者には共に修行を行い、何名かは異能の兆しを見せた。

ただ、こんな辺境に居を構えているだけあつて、寺院側は世間知らずだつた。

一瞬で許容量を上回るほどの人数が押しかけられ、彼は政府が接触してくるまで誰も寺院にたどり着けなくしたのである。

そしてそんな一連の出来事の後、政府は彼の存在を積極的に政治的アピールとして活用しだした。

彼を「国家の老師」とまで言い表し、国内外に喧伝しながらも嚴重に保護したのである。

ただ国内では絶大な人気がある一方で、メディアの露出が無いためその人気も国内に留まっていた。

そんな寺院に一機のヘリコプターが近づいていく。

寺院の庭に着陸すると、中から秘書を伴ったこの国の軍事委員会のお偉いさんが現れる。

彼は寺院の僧から歓迎を受けながらも、一直線で奥へと向かった。

彼らの行く先には、尖った岩の上で座禅を組んでいる少年の姿があった。

坊主頭の胴着姿の少年は空気のようにそこに存在していた。

『老師』

その声に、少年は目を開ける。

『將軍か』

この場にやってきた彼は軍事委員会の人間で軍人ではないのだが、世俗に興味の無い彼に訂正するのも億劫なので曖昧に笑い返した。

『お酒を持ってきましたよ』

『おおッ、まことか!!』

少年はそれこそ瞬間移動もかくやと速さで彼の前へと現れた。

『ささ、早速飲もうじゃないか!!』

少年は国中から尊敬を集める仙人とは思えない年相応の笑みでそう言った。

中央からわざわざ軍事委員の人間がやってきたのは、老師から少しでもその異能の詳細を聞き出す為だった。

彼が無類の酒好きなので、毎回それを持って行くと歓迎された。

『いやはや、老師ほどの御方が修行に明け暮れるのは惜しいのですな』

『まさか、師匠の教えを受けた兄弟たちで最も出来が悪かったからこうして神仙に至れなんだ。』

ああ、酒、酒が悪いのだまったく』

彼のおべっかに、老師は酒で真つ赤になった顔で言った。

『老師の師匠ですか、以前お話を伺った時にはこの世の物とは思えない美しい仙女だったとか』

『うむ、師匠は美しく、弓を取れば太陽をも落とすほどの技量であった。』

仙境には一度儂も招かれたが、この世の物とは思えない場所だった』

『まさか実在するのですか?』

『疑うならそれまでだ』

老師の言葉に、委員も流石に半信半疑だった。

それでも彼は覚えている。かつて修行を共にした兄弟たちと赴いた、桃源の地を。

そして一度命を失つてなお克明に記憶に刻まれている、あの美しき耳長の師のことを。

『老師、ならば仙人が不老不死とは本当なのですか?』

彼は尋ねる。どこか逸る気持ちを抑えながら。

『ふむ。真なる不老不死とは、お主たちが考えるようなものではない。

自然と意識を委ね、その先にあるモノ。このように』

すると老師は見る見るうちに妙齡の美女へと姿を変えた。

かと思うと老人のように古い、赤子のように小さくなったかと思えば、霞のように霧散した。

『真の不老不死は形無きモノ。そしてその先にこそ神仙の道がある。

儂の兄弟や師匠は、その先に行ってしまった。儂だけが無様を晒しておる』

摩訶不思議な現象に言葉を失っている彼に、老師は憂いも無くそう言い切った。

『將軍よ、儂を老師と呼び慕うのなら国の酋長に伝えよ。』

薬師と医者揃え、凶事に備えよ、と』

やがて、老師は真顔になって彼にそう告げる。

『凶事？ 凶事とは!?!』

『この国に、恐ろしい魔物が近づいている。』

病を運ぶ恐ろしい相手だ。今は儂が抑えているが、倒せるとも限らぬ』

『そ、そんなことが……』

『頼むぞ』

老師はそれだけ告げると、岩場へと戻っていく。

彼が座禅を組んで、意識を自然に集中させる。

すると見えてくるのだ。この国を蝕もうとする、おぞましい病魔の姿が。

それは渾沌だった。死神だった。青ざめた馬に乗る騎士だった。ペスト医師だった。

そしてそれは——死そのものだった。

『もう一度、再び生を受け、このような魔物に相対するとは。』

これもまた修行か。それとも宿命か』

老師はたった一人でこのおぞましい病魔の化身と戦っていた。

それは人間が想像できる範疇を超えた神域の戦いだった。

『お主も名の知れた妖術師であろうに、邪仙に墮ちるとは惜しいことだ』
同じ領域に至った者同士の、理外の争い。

そして思うのだ、自分がこうして再び生を受けたのは運命なのだ。

『——何者だ』

その戦いに、水を差す者が現れた。

老師が目を開けると、彼の視界が現実へと戻ってくる。

そこに居たのは、天女と見まごうほどの美女であり、同時に邪心に染まった邪仙の如き魔性だった。

『東洋の煉丹術の使い手か』

『私はイヴ。この世界を変える催しにあなたを招待したい』

女は端正な顔立ちに笑みを浮かべて、手紙を地面に置いた。

『懐かしい、今この国にいるのね。』 “先生” は』

そう言つて彼女は姿を消した。

『……無視するわけにはいかぬか』

老師は手紙を拾い、溜息を吐く。

そのまま彼は寺院を通じて日本に向かうと伝えた。

自分が少し離れた程度で、この国が病魔に脅かされることが無いと信じて。

§ § §

中世の街並みを色濃く残すルーマニアのある地域に、ノスタルジックな古城が存在していた。

街から離れた郊外にあるそれは、個人所有の代物だ。

値段が張るが、個人で古城を買うのは可能だ。安い物なら一億円を下回るほどである。

だが不思議なことにその城は数十年前から人の出入りが全く無かった。

勿論警備の類も存在しない。だが流浪者がねぐらにしようとする、決まって恐慌状態のまま逃げかえってくる。

だから地元の人々はこの城を差して、こう言う。

——吸血鬼の城、と。

そんな吸血鬼の城に寝起きする少女が居た。

彼女は自分が使っている部屋から起き出すと、まず街に買い物に出かける。

『お、マリーちゃんおはよう』

『おはようございます、おばさん!!』

『今日も何か買っていくかい?』

『じゃあ、これとこれをお願いします』

彼女は近所の人々から普通に親しまれていた。

最初は吸血鬼の城に住む人間だと気味悪がられたが、彼女の人柄が周囲と打ち解けさせた。

それに何より、彼女は昼間に太陽の下に出れるのだから。

そうして買い物を終えると、食事の準備を始める。

今日の朝食はルーマニアの家庭料理であるサルマーレだ。

食事の支度を終えると、彼女はもう一人の住人を起こしに向かう。

無駄に豪華な内装の廊下を抜け、この城の主の元へと向かう。

城主の部屋は無駄に豪華で、ベッドもキングサイズだが使われた形跡は無かった。

彼女が用があるのは、ベッドの脇にある棺桶だった。

『マスター、朝だよ』

マリーが棺桶の蓋を開けると、そこには病的なほど白い男が眠っていた。

彼女は彼の体を揺するが、反応は無い。まるで死人のようだった。

『まただよ。仕方がない』

そう言つてマリーは、スツとあるモノを取り出した。

それは工具だった。有り体に言えば、かなづちだった。

『マスターツ、朝だよー!!』

そして彼女はそれを全力で城主に振り下ろした!!

『我が眷属、マリーよ』

『何かな、マスター』

城主は無駄に広い食堂で、マリーと共に朝食を食べていた。

『淑女として、主人の顔にハンマーを振り下ろして起こすのはいかなものかな』

『それぐらいじゃ死なないじゃん、マスター』

『常人なら永遠に眠るところだぞ!!』

城主の主張を無視して、マリーはパンをサルマーレの汁に浸して食べていた。

『それに、いつも言っているがこの我を朝に起こすとは何事ぞ。

貴様、この我がいかなる者か弁えておろう』

『チスイコウモリの親戚でしょ?』

『違うわい!! 吸血鬼!! ヴアンパイア!!』

こう見えてドラキュラ公の時代から生きてるのだぞ!!』

と、自己主張する城主に、あーはいはいそうでしたねー、という冷めた視線を送るマリー。

『吸血鬼と言えばルーマニアってだけでこの国に住んでるくせに』

『おい、聞こえたぞ』

『別に吸血鬼だからって夜型生活しなくてもいいじゃないですか。』

どうせ日光も流水もニンニクも十字架も聖書も平気なんですよ』

『こら、夢の無いことを言うな。我ヴァンパイアぞ？』

サンタがふくよかな老人じゃなかったら子供はがっかりするだろう？

だから私も吸血鬼らしく今時の流行を取り入れているのだ』

『ミーハーなだけじゃない』

だが、マリーは城主の意見を切って捨てた。

『あの時、私が入りに人質にされてるのを助けてくれた時、私に何を言ったか覚えてる？』

『あ、何であつたかなー？』

『お前は処女かつて、あれマンガの台詞なんだよね!!』

普通にセクハラなんですけど!!』

『だってあのマンガの主人公メチャクチャカッコいいんだぞ、我同じ吸血鬼としてマジリスペクト。貴様も後で読むか？ 貸してやろう』

『これがホンモノの吸血鬼じゃなあ』

恐らく一般人の夢を一番ぶっ壊しているのは当人だろう、とマリーは思うのだった。

『あ、そうだ。今日、手紙来てたよ。』

珍しいね広告のチラシ以外が郵便受けに入ってるなんて』

『なに？ 手紙だと？』

怪訝な表情をする城主に、マリーは手紙を差し出した。

『……嫌な名前を見た』

『知り合い？ 居たの？』

『我にも知り合いくらいおるわ!!』

まあ、昔馴染みではあるな』

『ふーん』

城主は苦虫を噛み潰したような表情をしたので、マリーは深く追及をしなかった。

『パーティーの招待状か。奴め、何を企んでおるのやら』

手紙を読み終えると、彼はワイングラスを手に取って揺らした。

『え、パーティーがあるの!?!』

『そのようだ、場所は日本だそうだ』

『しかも日本!! マスター、私行ってみたい!!』

『だがな、マリーよ。あの女狐めが何を考えているのか』

『でもマスターが好きなマンガって日本産でしょ?』

『……ふッ、我が眷属がそこまで日本に行きたいと言うならば、その願い叶えてやるのもやぶさかではない』

『この人、最初から行くつもりだったな』

こうしてこのヘンテコ主従は日本へと向かうことになった。

ちなみに、城主たる彼は飛行機で乗り物酔いしてマリーに呆れられたのは余談である。

§ § §

場所はところ変わって、日本の警察病院。

そこ入院している副長は、することも無く一日中天井を眺めながら過ごしていた。逃げようと思えばいつでも逃げることはできる。だが、そうするつもりは無かった。

彼の脳裏には、前世の記憶が何度も繰り返し返されていた。

『おい、その子供も殺すぞ』

『いや待て』

燃え盛るユダヤ人のゲットー、それを実行した総長たちはまだ子供に過ぎない当時の副長にも手を掛けようとした。

それに待ったをかけたのが、総長だった。

『お前には才能が有りそうだ。お前に選ばせてやる。』

ここで朽ち果てて灰になるか、我々と共に来るかを』

総長の言葉に、周囲は反対した。

キリスト教徒にとつて、金貸しの血筋は嫌悪の対象だ。それは彼らにとつても同じだった。

だが、総長は見抜いていたのだろう。副長の瞳の奥に燃える、この燃え盛るゲットーよりも滾る激情を。

『俺も連れて行つてくください』

まだ子供だった副長は、そう答えた。

『よし、お前は今日から我が従士として扱ふ。しっかりと働け』

それから彼は一人前になるまで必死に己を鍛え、やがて総長の右腕になるまでになった。

その総長が、処刑された。

傭兵団は散り散りになった。

その多くは味方だったはずの軍隊に討ち取られ、死んでいった。

生き残ったのは僅かだった。副長もその一人だった。

『もう終わりだ、総長も、他の家の連中も失ってしまった』

絶望する同胞たちに、副長は言った。

『いや、まだだ。まだ俺たちが残っているだろう!!』

俺が残っている連中を取りまとめ、戦力を増やしてこんなふざけたことをした連中に

報復するのだ!!』

だが、生き残りたちの見る目は冷めていた。

『金貸しの子孫の分際で、我らを取りまとめると!?』

冗談も大概にするのだな!!』

『我らの総長は、我らの血脈の中から選ばれる。それはこの苦境でも変わらない、総長に
気に入られていたからと言って思いあがるな。恥を知れ!!』

そして帰って来たのは、罵倒だった。

副長には口にした言葉を実行できる能力はあった。

だが、血筋がそれを許さなかった。彼の人生は、最初から最後までそうだった。結局、間もなくして副長も追撃に遭い討ち死にした。

彼の運命は、血筋から解放される新たな人生でも変わらなかつた。

「ようやく、迎えが来たか」

その言葉と同時に、副長の病室のドアが開かれる。

「——これより、異端審問を開始する」

ゆつたりとした中世の法衣をまとった男が、一步一步靴音を立てて近づいてくる。

それが、死神の足音のように彼は聞こえた。

「汝、魔術を用いて人心を乱したことは明白である。

よつて、判決を言い渡す。汝に火炙りの刑を執行する」

次の瞬間、副長の横たわるベッドが燃え盛る業火に包まれた。

副長は抵抗する間もなく、炎に焼かれた。

己の仕事ぶりを確認した処刑人は満足そうに頷くと、ベッドの脇に置かれていたイヴの手紙を手を取った。

その内容を見て、彼はニヤリと笑った。

た。そして彼はスプリンクラーが作動し、大騒ぎになった病院内を悠々と歩き去って行った。

イヴの決起会

イヴの催すパーティは東京のとある有名なホテルの会場にて行われる。

その会場にやってきた春美たちはその場の雰囲気の様々に驚くこととなった。

普通のパーティなら、参加者が優雅に談笑し、食事をしながら笑顔でイベントを楽しむのだろう。

だが、このパーティの参加者は誰もが楽しそうにしてなどいなかった。

会話をしている人間は居れども、決して談笑と言う雰囲気ではない。

広いパーティ会場の参加者は三百人前後だが、パーティの喧騒とは無縁だった。

「なんていうか、陰キャのオフ会みたいですね」

望海の率直な言葉が、このパーティ会場の全てを現していた。

「こうして世界中から同胞が集まると壮観ね」

パーティドレスを纏った魔女が、弟子と友人たちを伴って会場入りした。

そう、ここには世界中の異能者——転生者が集まっていた。

その付き添いを含めて三百人程度なのだから、本当に転生者は世界的に数が少なかっ

た。

それでも全世界の全員を集めたわけではないので、これでもかなり多くが集まっていた。

「なんだか、すごい雰囲気ですね」

同行させてもらっていた千秋が、参加者たちを見渡し呟く。

邪教の秘密の集会もかくやの陰鬱な参加者たちは、しかし個性は誰もが飛びぬけていた。

海賊が居た。仙人が居た。貴族風の吸血鬼が居た。陰陽師が居た。巫女が居た。精霊使いが居た。死霊術師が居た。キメラ使いが居た。仮面の魔術師が居た。占星術師が居た。呪術師が居た。シャーマンが居た。召喚士が居た。錬金術師が居た。そしてここに魔女と聖騎士が居た。

更にテンペストやサラと言った、有名な超能力者も参加していた。

「あ、あ、魔術師さんも来てるうう!!」

目ざとく会場の隅で佇んでいる仮面の魔術師を見かけた真冬が限界化していた。

「あつちにはテンペストも居る!?! ど、どうしよう、サイン貰えるかな……」

夏芽も有名人の姿を見かけてそわそわしている。

「実際のサバトでもここまでひどくはないでしょうね」

これだけのメンツが集まるのは、歴史上で類を見ないであろうことはカタリナも確信していた。

「師匠、あちらを」

春美が己の師に声を掛けると、彼女らに近づくと一団が現れた。

「ヒヒヒ……偉大なるグロースムッター、彼女らがそうです」

その一団の先頭に立つのは、伝統的な魔女の格好をした「被虐」だった。

彼女の後ろには、似たような恰好をした女性たちが感極まった様子で春美の師を見ていた。

「あなた達は好きにしていよいよ。私はかつての自分の子孫たちと話してるから」

「分かりました、そうします」

ドレス姿の魔女が彼女らに近づくと、彼女は魔女の一団に取り囲まれた。

瞬く間に会場で一番賑やかな集団になった彼女たちから離れて、行き場に迷っている。

「よお、あんたも来たのか」

カタリナに声を掛けたのは、化粧屋だった。

近くにティフォンや伊藤刑事に妻鳥もいる。彼らもパーティーに招待されていた。

「……」

「止めようぜ。お互い、今日は昔馴染みと出会えることを喜ぼう。

私のもっと、こじんまりしたもんが良かったんだがな」

無言のカタリナに、化粧屋は酒を片手にそう言った。

「あ、化粧屋さん。その節はお世話になりました」

「おう、あの時のお嬢ちゃんか。それはよかった」

頭を下げる千秋に軽く手を上げ、化粧屋は静かにカタリナに耳打ちする。

「副長が何者かの襲撃を受けて、生死不明だ。死体も残っちゃいない。

ただのボヤ騒ぎだと警察は情報規制しているが、あのやり口は異端審問官だろうな。

お前もせいぜい気を付けろよ」

彼女はそれだけ居って、他の三人の元へと戻って行った。

「カタリナさん……」

千秋が痛ましそうに彼女を見上げる。

化粧屋の話は、残念ながらもかなり控えめな静けさのパーティ会場では他の面々にも聞

こえてしまっていた。

「気にしていません。それより、食事もあるようですから食べたらどうですか」

カタリナは首を振って話題を変える。

春美たちの脳裏には、先日の預言者との邂逅が思い浮かんだ。

「ボクが君に言えることはあまりない」

予言者は淡々と切実な訴えをするカタリナにそう言った。

「君は不思議に思わないかい？」

あの女の周りには、必要なものが集まりすぎている」

「どういう、意味でしょうか？」

「例えばこの小説」

予言者は白亜の本棚にある数少ない色どりである一冊の文庫本を手を取った。

その表紙を見て、あつと真冬は反応した。

今時のテンプレ染みた最強主人公のハーレム物のライトノベルだった。

「主人公の周りにはカネや権力、女性や才能までも自然と集まってくる。

だけどそれは物語の都合と言うものだ。ご都合主義とか言うよね。

でも、苦難にしろ幸運にしろ、何も起こらなければ主人公は主人公足りえない」

彼が何を言いたいのか、残念ながらカタリナだけでなく周りの面々も理解できなかった。

「この小説の主人公の思い上がりは面白くてね。

最終的に神に匹敵する力を得て、天上の世界にまで進出するんだ。

それで悪い神様を倒して、見目麗しい女神さえ侍らす。自分に才能を与えた相手さえ」

「あの、何を仰りたいのですか？」

「その目で、確かめると良い。」

ボクが言えることは、君は自分がしたいようにすればいい、と言うこと。

君の信じる神は、それだけをお望みだよ」

そう言つて、預言者はカタリナにイヴのパーティーの招待状をこの場の人数分渡した。

かくして、神託は終わった。

招待状を見て覚悟を決めたカタリナが退出すると、皆もそれに続く。

「あ、もしかしてラノベとか好きなんですか？」

趣味が合うと思つたのか、去り際に真冬がそんなことを預言者に尋ねた。

「うん。いつだって、人間が自分に求める者を観察するのは楽しいよ」

予言者は無機質な笑みを浮かべてそのように返した。

「ひゃ、ひゃひ?!」

面々の回想は突然の真冬の奇声によって現実に戻された。

「なんということだ……」

彼らの前に現れたのは、仮面の魔術師だった。

くしくも日本でも屈指の知名度を持つ相手がわざわざ現れたことに硬直する面々だった。

「うふふ!!」

「きゃはは!!」

彼の肩に座る妖精レプと、夏芽のハンドバックから妖精コティが宙に飛び、空中でダンスを踊るようにくるくると回った。

「私はレプ」

「私はコティ」

きゃははうふふ、と笑い合う二人の妖精の姿は幻想的ですが、彼を含めた周囲は迷惑そうにしていた。

「これを、あの山から解き放ったのですか……」

魔女殿は何も仰らなかつたのですか？

それに彼女たちも、目を付けられているようですし」

「当人たちの自主性の結果としか」

嘆かわしいものを見る目で春美たちを見やる魔術師に、カタリナは肩を竦めるばかりだった。

「彼女が憑いているのは、貴女ですね」

「あ、はい!!」

「あなたには妖精にしてはいけないことをレクチャーする必要があります。」

「この催しが終わった後、連絡先を交換しましょう」

「はいッ、わかりましたッ」

緊張して声が裏返る夏芽。

そんな彼女を、夏芽は長い付き合いでも一度も見たことも無いような表情で羨ましそうにしている真冬に見られていた。

「そろそろ、始まるようですよ」

魔術師の仮面が、パーティ会場の正面にある巨大スクリーンに向けられる。

壇上には、主催者であるイヴが召喚士を伴って現れるところであった。

§ § §

「まず、私の招待に応じてこの決起会に参加してくれたことを感謝するわ。」

私はイヴ。名乗る必要性が有るかどうかはわからないけど、形式的に名乗っておくわ」

自分で言ったように、形式だけの挨拶をするイヴ。

「ここにいる者はさつきと話しを進めてほしいでしょうから、子細について話すわ。」

ここに来たと言うことは、私に賛同の意思があると受け取らせて貰うもの」
そう言つて、彼女は室内の照明を落とした。

そして、会場に設置されたプロジェクターがスクリーンに映像を映し出す。

「これは今から少し前に、全世界に対してネットにアップロードされた我々の声明よ」
今、彼女の策謀の結実が現れようとしていた。

『全世界の皆さん、そしてこれを見る日本人の皆さん。こんにちわ。』

私はイヴ。暫定魔導士協会の盟主です』

映像には椅子に座り足を組んでいるイヴが不遜な態度でカメラ目線で言葉を発して
いた。

『私はこの世界に住む異能者たち大多数の代表であり、我々の意思を執行できる能力を
持つ者でもあるわ。』

全世界の異能者を代表して、非異能力者の人々に私たちの意思を伝える』
明確な意思と目的をもってイヴは訴える。

『——私たちは、平穏と秩序のみを望む。』

「迫害や弾圧ではなく、共存の道を示すためにこの声明を発表した」

その言葉に、彼女を知る面々は白々しそうな視線を向けた。

『私たちは誰にも支配されず、独立性を持つて一つの集団として立ち上がる。

私たちはいかなる組織、団体、宗教、国家にも属さず一切の組織的な争いを拒否する。また偏見や差別などであなた達、非異能者たちに接しないと言うことを誓うものである。

『これが私たちの決定。これが脅かされる場合のみ、私たちは外敵に異能を振るうでしょう』

それは有無を言わさぬ、全世界に対する通告だった。

『勿論、私たちが集まることに、あなた達は危機感を抱くでしょう。』

当然ながら私たちが見返りを用意したわ。

私たちに賛同してくれる国家に対し、まず初めに技術提供をしましょう。難病の克服や寿命の延長など、医療分野に対して多くの便宜を図るわ。

私の専門分野は錬金術。この体も、我が創造主が六百年以上前に創造したもの。

我々の良き理解者に対して、長らく付き合いたいと思うのは当たり前のことよね？』

イヴは各国の権力者たちに毒を垂らす。

誰だって、死ぬのは恐ろしい。そして得てして古今東西の権力者は、不老不死を求め

たものである。

彼女はそれをよく理解していた。

『次に、私たちが秩序を求めていることを証明しましょう。』

これは科学技術のみで作成できる、魔力検出機よ』

次にイヴは手のひらサイズの細長い機械を取り出した。

『魔力には個々に依って特定の周波数や波長が存在し、指紋のように二つとして存在する確率は途方もない。』

例えばこれを使えば、異能者本人が行使した異能の残り香を検知し、それが行使した本人と照らし合わせることが可能となるわ。

科学的根拠がないから異能者を裁けないと言うのなら、私たちが根拠となりましょう』

それは異能者に権威を持たせる手法だった。

同時に、イヴ達の方針に反対する異能者に対する弾圧でもあった。

『無論、この装置は万能ではないわ。』

魔道を一定以上収めた人間は、体内の魔力の活性化と非活性化状態を自在にできる。

そう言った相手に対し、我々の秩序に反するなら、我々が犯罪者として人員を派遣し処罰させることにするわ』

魔術を収めた人間は自分たちで処罰する。

非異能者たちがどうかできるのは、それ以外の取るに足らない雑魚だけ。

それを理解した伊藤刑事は顔を引きつらせた。

外国の法律で自国の犯罪者を裁くような横暴さだったが、イヴは交渉をしているのではなく通告をしているのだ。

各国を利用し異能者の弾圧を加速させ、反対意見の同胞を潰して自分たちの益とする。

どこまでも効率的で、無慈悲な、魔王の圧政であった。

『更に、異能の中には危険な暴走を孕む能力もあるわ。』

私たちは異能の訓練のノウハウを持つ協賛団体である『輪廻の扉』に委託し、十分に異能に扱えるかと判断したのならその証明書を発行させましょう』

そして弾圧だけでなく、イヴは身分や能力の証明と言う餌も与えるのを忘れない。

その後、いくつかの人道支援などについて語った後、イヴはこれまで以上に衝撃的な話を口にした。

自分たちの地位を確固たるものにする、決定的な話を。

『私は先日、先日当選した個人的に付き合いのある東京都知事に友人として、助言したわ。』

——年内に、首都直下型地震が起こるだろう、とね』
それは、予言だった。

首都直下型地震。

それはいつか東京で起きるとされる大災害。

専門家によると、その確率は十年以内で70%だという。

イヴはそれを、年内に確実に起こると予言した。

ノストラダムスの大予言どころではない。本物の異能者が、確実に起きると言ったのだ。

ホテルの外はもう既にパニック状態であろう。交通網もマヒしかかっている筈だ。

この場で日本に住んでいる面々は、冷や汗を隠し切れない。

日本人で地震の恐怖を知らない人間は居ない。

首都直下型地震という、経済的にも地理的にも未曾有の大災害に、そしてそれが今これから起こるかもしれないという恐怖に震えていた。

『私たちは彼に、東京復興の手伝いを約束する代わりに、私たちの本拠地を東京に作ることを許可してもらったわ。』

東京都だけでなく、日本国政府とも今後は私たちと仲良くしたいものね』

以上よ、と言って映像は終わった。

照明が明かりを灯す。パーティ会場は、遂に通夜のように静まり返っていた。

「何か質問は？」

イヴがマイクを片手に会場の面々に問う。

「い、イヴさん!! 首都直下型地震起きるとは、本当ですか!？」

「起きるわ。確実に」

伊藤刑事がほぼ半狂乱状態で声を上げたのに対し、イヴは冷静に応じた。

「その根拠は!?! あなたの言葉だけで、東京は、日本中が大混乱に陥るんですよ!？」

「私が根拠よ、今の映像を見なかったの?」

イヴは自信満々に言い切るので、彼も二の句を告げなかった。

「……それで、一般人向けの建前は良いとしよう。」

イヴ、貴女の本来の目的について話してもらいましょか」

仮面の魔術師の言葉を、春美たちのような一般人に近い面々は驚いた表情をした。

そう、先ほどの映像はプロパガンダ。一般人向けの公約に過ぎない。

それだけでは、この場の面々や他の同業者も納得はしない。

「私の目的はいつだって変わらない。」

今ある魔術の文化や技術の保護と継承よ。

それこそが、我が創造主から与えられた唯一の命題なのだから」

イヴの言葉に、嘘は無かった。

最初から、それだけが彼女の作る組織の目的なのだから。

「あなた達転生者は、いつの時代から現代に転生したのかは知らないけど、昔は食事の用意するのにどれだけ時間を掛けたのかしら？」

もしかして使用人でも雇ってたのかしら？ 気味悪がって逃げられたりしなかった

？」

イヴはにやにやと楽しそうに、この場の転生者たちに問いかける。

「この国は特に便利よね。特にこの東京だと5分も歩けばコンビニがあつて食料も水も買える。

遠くの情報もテレビや携帯電話で簡単に手に入る。不穏な地域から逃げるのに情勢を探るのも簡単よね。

現代はインフラが整つてて過ごしやすいわよね。糞尿を捨てるのも、水を汲みに出歩く必要ないんだから」

転生者たちはイヴの言葉に思い当たるところがあるのか、表情に動きがあつた。

「その時間を研究に、或いは息抜きに使えるんだから今の時代は楽よね。

でもね、それについてまで続くかしら？」

イヴの指示で照明が落とされ、プロジェクターが起動してスクリーンに画像が表示さ

れる。

そこに映されたのは、少し前にアメリカで起こった事件だった。

「これはアメリカで起こった異能者が、異能者と言うだけで警官に撃ち殺された事件だわ。

これに対して抗議デモが起こり、異能者を排斥しろというデモとぶつかり多くの死傷者が出たわ」

これはあくまで一例だった。

似たような事例は、世界各地で起こっている。

「危険な異能は禁止。魔術の研究は禁止。どうしてもやりたいのなら政府の管理下でやれ。それが嫌なら何もするな。」

いや、異能者と言うだけで危険だ。捕まえる!!」

イヴの言葉が、先日聞いた副長の言葉と重なるカタリナ。

「それって、十年後かしら、それとも五年後？」

もしかしたら半年先かもしれない」

危機感を煽るイヴだったが、残念ながらそれは地震と同じでいつか起こる未来だった。

「勿論これだけではないわ。」

現行人類に、魔術の知恵を預けてはおけない」

同業者たちを煽っていたイヴだったが、急に真顔になってそう言った。

「人類が世界初の飛行機から今の航空機になるまでどれだけの時間が掛かったかしら。

ドット絵だけのゲームの画像が今のよう人間同然の表情をするようになったのにどれくらいかかった？

その古いゲーム機同然のコンピュータが積まれたロケットが月に行った時代から、これからどれだけ高性能な機械が積まれて火星に飛ぶのでしょうか」

永い時間、人類の歴史の趨勢を見守り続けたホムンクルスは語り掛ける。

「私の同胞のある科学者は、魔術や魔力を用いれば核融合炉もワイプ装置も夢ではないと語ったわ。

仮にそれが実現するとして、それってどれだけの時間が必要かしら。

あなた達が何年これから生きるつもりか知らないけど、このまま人類が発展を続けられればもしかしたらそれを見る機会があるかもしれないわね。

尤も、その頃には私達は骨董品扱いされてるでしょうけど」

皮肉気に、イヴは笑う。極まった科学はそこそ魔法と区別がつかない。その領域に、今の人類は足を踏み入れようとしている。

「私は、全力で人類の足を引っ張るわ。

少なくとも千年先まで、魔力を扱う技術は私が制御する。何をしてでも」

何とも後ろ向きで、マイナスで、魔道を窮めた者らしいやり方だった。

「でない、馬鹿なサルどもが自分の足元さえ壊しかねない」

否定は、無かった。

イヴの嘲弄を否定できるほど、誰も人類を信頼してなどいないのだ。

「お互いに、危機感は共有できたわね？」

「ここからは自分たちの利益について語りましょう」

沈痛な雰囲気を変えるように、イヴは話題を変える。

「先ほど異能者の証明書を発行すると言ったけど、これは私たちにも利益がある。

なぜなら、彼らは生まれながらに魔力に適応した新人類。

そこらの一般人のように、魔力の扱いを仕込むのに何年も必要無いのよ。

私は彼らを、あなた達に弟子の候補として斡旋しましょう」

そのイヴの言葉に、むうと唸る者が多数いた。

弟子の確保は、魔術と言う特異な技術の継承の為の大きなハードルの一つだからだ。

「そして地上の如何なる倫理にも縛られない研究施設を用意し、派閥と言った面倒の無い身内同士の学会でも作りましょうか。」

勿論、インフラもインターネットも完備するわ」

彼女の提案は、世俗が面倒だと思ふ彼らにとつていちいち魅力的だった。

彼女は同業者の心理をよく理解していた。

「まあ当然、秩序は必要だから限度はあるけど」

「仮にそれを違反したらどうする？」

単純な疑問だろう、そんな声が上がった。

「彼に処断を頼むわ」

イヴが軽くそう言つて目配せすると、スクリーン側の扉が開く。

そこから現れた人物に、多くの転生者が顔を引きつらせた。

「彼は私が保護していた家業が廃業寸前だった処刑人の一族で、あの異端審問官どもの

末裔よ」

「どうも、イヴさん」

中世の法衣を纏つた死神のようにやせ細つた男が不気味に笑つて、イヴに一礼をした。

「ようやく、ようやく一族の業を存分に振るえる時代になるんですねえ!!」

処刑人は実に嬉しそうに、背負っていたギロチンの刃を撫でた。

「期待しているわ」

危機感、利益、そして恐怖。

「全てを存分に利用して、異能者という魔族を従える魔王はここに誕生した。師匠もセンスが無いな。」

聖書曰く、イヴは知恵の実を食べて恥を知り、その罪によって楽園を追放された」化粧屋は、イヴを見据えてそう言った。

「お前はどちらかと言うと、イヴをそそのかした^{サタン}ヘビだろうな」

その言葉に、イヴは愉快気に笑った。

そんな風に嫌味を言うくらいしかできないのを分かっているから。

「私の話はこれで以上よ。」

残りは、食事でもしながらご歓談でもすると良いわ。

ああ、それと——」

最後に、大事な話をイヴは伝えた。

「二次会に参加してもらおう面々には声を掛けるから、よろしく」

それこそが、一番重要なパーティの催しなのだから。

イヴの決起会が終わり、二次会の会場に移ったのは十数名の転生者だけだった。

魔女が居た。カタリナが居た。化粧屋が居た。ティフォンが居た。仮面の魔術師が

居た。召喚士が居た。海賊が居た。仙人が居た。吸血鬼が居た。処刑人が居た。占星術師が居た。

そして、イヴと——この場で唯一場違いにも青ざめた表情のサラが居た。イヴは呼び出した面々の顔ぶれを確認すると、本題を切り出した。

「それじゃあ、いつ首都直下型地震を起こすのかを決めるのだけど——」

イベントについて

『プロローグ』

けたたましい警報が鳴る。

近未来的な廊下が赤いライトで照らされ、 “あなた” は気を引き締める。

『時空のワームホールの発生を確認。』

職員はただちに集合してください。繰り返します——』

機械的なアナウンスが繰り返される中、 “あなた” はブリーフィングルームへと向かった。

ブリーフィングルームには、もう既に見慣れた面々が集まっていた。

「では、隊長も来たようだし、早速今回の異変について時空観測機による分析結果を話そう」

博士はそう言って、立体スクリーンにデータを表示する。

「今回の異変は時空侵攻だ。

つまり、並行世界の住人が我々の歴史に介入しようとしているわけだね」

博士は女性的な豊かな胸の前に腕を組んでそう断言した。

「それもこのタイプは、異なる歴史の道筋を辿った連中が我々の世界の歴史に統合し乗っ取ろうとする感じだ。

要するに今回の仕事は、過去に飛び、同じ時間軸の並行世界の住人の侵攻を阻止すればいい」

“あなた”は博士の説明に頷いた。

自分は実働部隊なので詳しい理屈は任せて、概要だけ把握していればいい。

「今回侵攻があったのは、14世紀の神聖ローマ帝国の地方都市だ。

そこは既に異文明技術の産物と思われる兵器に占領されている」

博士が当時の地図を示すと、そこは一か所が赤く染まっていた。

「我々の目標は、今回の異文明勢力の排除だ。

それでは時空警備隊の諸君、出動してくれ!!」

博士兼司令の言葉に、“あなた”達は頷いた。

さあ、ミッションスタートだ!!

.....

.....

“あなた”は時空酔いの違和感に耐えつつも、時空移動に成功した。

14世紀の当時のゴシック様式の街並みは、生憎とゴーストタウンへと変貌していた。

「隊長、先ほどまでは不確定要素が大きかった為に言わなかったのだが」

そう口にしたのは、仲間であるアインシュタインだ。

「おそらく、今回の相手は私の同郷だろう。」

私に言わせれば随分古臭い様式の魔法を使っているようだ」

彼女は並行世界のアインシュタインその人であり、“あなた”の知る歴史とは違い科学者ではなく優れた魔法学者であるが。

以前彼女が起こした騒動がきっかけで紆余曲折を経て仲間になったのである。

「さて、知的好奇心がうずくね。」

今回の相手は、時空侵攻からの歴史の乗っ取り。

つまり私が隊長の居る歴史の同一人物に成り代わろうとしているわけだ」

“あなた”の脳裏に、歴史書に必ず乗っている物理学の偉人の写真を思い浮かばせ

た。

今回の異変を身近な例に置き換えれば、それは歴史上の偉人である彼の立ち位置にこの小さな少女が座ろうとすることを意味する。

それによって歴史の書き換えが起こり、それ以降の歴史に歪みが生じる。そんなことはあつてはいけないのだ。

「つまり必然的に、相手はこの時代と同じく14世紀の人間なのだ。

しかし、科学の代わりに魔法文明が発展した私の故郷では、この時代に時空侵攻など行えるほどの技術が無い。

どこの組織が入れ知恵したのか、黒幕は誰なのか」

彼女の考察を聞いている時であつた。

「ははははは!!」

実にバカっぽい笑い声と共に、そいつは現れた。

数十体のゴーレムを引きつれた彼は、キザつたらしい貴族の格好をした軟派な若い男だつた。

ゴーレム作製技術なんて地球の歴史には存在しない。

明確に、彼は並行世界の侵略者であつた。

「来たな、時空警備隊!!」

私こそはフランツ伯爵である!!

貴様たちが私の覇道を阻もうと現れることは、*“あの方”*の予測通りである!!」
びしっ、とこちらに指先を突きつけるフランツ伯爵。

「隊長、どうやら黒幕の尖兵のお出ましのようだ」

アインシュタインの呆れたような声が聞こえた。

優れた知性を持つ彼女には、彼のように知的とは程遠いと思える相手は疲れるのかもしれない。

「者ども、かかれ!!」

フランツ伯爵の号令と同時に、戦いは始まった!!

〈システムメツセージ〉

一度行ったバトルをスキップしますか？

yes ↑

no

「く、くそお、流石は時空警備隊というところか……」

*“あなた”*と仲間たちの手によってフランツ伯爵のゴーレム部隊は壊滅した。

正直フランツ伯爵の武勇も特別優れているというわけでもなかったもので、この程度の戦いは慣れたものである。

所詮は前哨戦であつた。

「とりあえず、隊長。」

彼を拘束して黒幕の情報を吐かせようか」

“あなた”はアインシュタインの提案に頷いた。

「いや、おい、待て。話せばわかる!!」

捕虜として正当に遇することを望むツ!!」

逃走が難しいと判断すると、囲まれたフランツ伯爵は大慌てでそんなことを言い始めた。

「ははは、異世界人の君に捕虜に関する条約などあるものか」

アインシュタインは笑っているが、目は笑っていないが。

“あなた”は誰か尋問が得意な者を、と仲間呼びかけたその時だった。

「——まったく、情けないわね。あなた」

フランツ伯爵の真横に、霧のようなモノが現れた。

転移魔法の予兆だ!!

「その声は、ドロテア!! おお、我が妻よ、助けに来てくれたか!!

お前なら助けに来てくれると思っていたぞ!!」

フランツ伯爵の歓喜の声と共に、霧の中からいかにも魔女と言う風貌の女が現れた。

「まったく、女に助けを期待するとは何事ですか」

ドロテアと呼ばれた魔女も、これには呆れ顔だった。

「隊長、気を付けろ。この女は只者じゃない」

自分の故郷の歴史において最高の魔法学者の一人として名前を残しているアインシュタインが警戒を露わにする。

「帰りましょう、あなた。」

此度の先走りは、あの方もたいそうお怒りですよ」

「ひッ、一緒に謝ってくれるか……?」

最後にそんな情けない台詞を残して、フランツ伯爵はドロテアの魔法にて消え去った。

「……はあ、博士。フランツ伯爵とドロテアだ。」

生憎私は調べられれば分かることは覚えておかない性質でね。

何かわかったことはあるかね?」

アインシュタインが时空通信端末に話しかけると、画面に博士が映し出された。

『フランツ伯爵にドロテアか。

いや、まったくわからないな』

「なんだ、有名人じゃないのかい？」

『この時代は都市国家のいざこざが多くて、正確な資料が無いんだ。

でもフランツ伯爵はそこそこ有名な方だよ。でもその時代の人間だったとは驚きだね』

“あなた”は正確な年代のわかる人物じゃなかったのか、と尋ねた。

『ああ、だって彼は妻に宛てた手紙が後世になって出て来てね。

その内容があまりにも情けないから、実在だけはしていたと考えられていた。

この人だって候補はいるらしいけどね』

「問題なのはそつちじゃない、妻の方だよ」

『うむ、だが分からないのは彼女の方だ。

フランツ伯爵の候補の一人に、曰くつきの女性を娶った者が居てね。その出自もハッキリしていない』

つまり何もわからないと言うことか、と“あなた”は結論した。

“あなた”もこの仕事をしてそれなりに長いので、こういうことは慣れっこだった。

博士も、そうだね、と返した。

「ドイツ魔女は厄介な連中が多い。気を付けるに越したことはないよ」

アインシュタインの言葉に、“あなた”は頷く。

これまで一度として、楽な戦いなど無かったのだから。

§ § §

第五話 伯爵の決意

「どどど、どとうしよう、ドロテアよ!!」

四度に渡る時空防衛隊との戦いに敗北。

フランツ伯爵は追い詰められていた。

ついに前話の幕引きの際に“あの方”に捨て駒を命じられるくらいには。

「このままでは私が皇帝選挙にてこの国の王になるという夢が潰えてしまう!!」

丁度この時代ぐらいから、神聖ローマ帝国の皇帝は幾つかの家から選挙によつて選ばれるようになる。

彼らの、より正確にはこの二人の思惑はこの時代の同一存在の座を乗っ取り、この世界より遥かに優れた魔法の力で家格を上げ、その選挙に当選して皇帝になると言うもの

だ。

勿論、馬鹿の妄言だった。

「あなたは誰かの顎で使われる皇帝になりたかったの？」

そしてその妄言に付き合っていた彼の妻は、辛辣な一言を投げた。

「そ、それは……」

幾ら彼が馬鹿でも、自分が利用されているくらいは分かる。

少なくとも明確な上下関係が、彼らと「あの方」の間にはあった。

「お、お前もわかっているだろう!？」

私は伯爵家に生まれた三男で、たまたま兄たちが亡くなったから当主の椅子が回って

きたにすぎない!!

私には貴族としての教育も最低限なら、誰にも期待などされなかった!!」

「……」

「私だって自分が立派な当主になれるだなんて思っていなかったさ!!」

でも普代の臣たちは逃げるか普通!?! おかげで私は領民たちから笑いのさ!!

人手も足りないからやって当たり前の業務すらこなせない、それすらも私の所為なの

か!?!」

「まあ、人徳は無かったでしょうね」

夫の叫びに、妻は当たり障りのない言葉で濁した。

「(若い頃の放蕩三昧とあの金遣いの荒さじゃねえ)」

それを口に出さない程度には、ドロテアは優しかった。

「私が皇帝になれば、大勢が付いてくることになる!!」

そうすれば、今度こそ、今度こそ我が領地は安泰になるのだ!!」

「そう、好きにすればいいわ」

ドロテアはとんがり帽子のつばを弄びそう返した。

夫の主張など微塵も関心を持っていなかった。

「……ドロテア、お前も私に期待はしてくれないのだな」

フランツ伯爵は少しだけ肩を落としてそう呟いた。

「私はあなたに夫以外の事を求めてないもの。」

貴族であることとか、三男だとか、ただの付属品だもの。

それに期待したところで、あなたはどうせ調子に乗るだけだわ」

「うぐ……」

妻の歯に衣着せぬ物言いに、フランツ伯爵は言い淀んだ。

「たッ、頼む、見捨てないでくれ!!」

私にはお前しかいないんだ!!」

「ふーん、それで？」

終始——それこそプロローグから今回の話まで——つまらなそうにしていたトロデアが初めて笑った。

「もうこうなったら、お前に全部任せろ!!」

最初からこうしておけば良かったんだ!! いったって私がやるよりお前に任せた方が全部上手くいくんだからな!!」

妻の足元に縋りつくこのダメ伯爵はヤケクソ気味にそう叫んだ。

「最初から、最初からそう言ってくれば、あんな奴の手を借りなくても皇帝の座くらいあなたにあげたのに」

ここに来て初めて、この魔女はやる気を出した。

「ふ、ふふふ、はははッ!!」

残念だったな時空防衛隊!! お前たちが悪いんだ、お前たちが我が妻を本気にさせたんだぞ!!」

フランツ伯爵の哄笑と共に、場面は暗転した。

『大変だ、大規模な時空間異常が発生している!!』

誰かが大規模な魔法を行使しようとしているぞッ!!』

四度に渡るフランツ伯爵との戦いを終え、体を休めていた“あなた”達は博士の通信に臨戦態勢に移行する。

「今の時代でこんなことが出来るのは、あのドロテアだけだろう。」

あの女、いったい何を考えているんだ!？」

異常事態が起こっている座標に向かいながら、アインシュタインがそんな言葉を漏らす。

かくして、時空防衛隊は並行世界の侵略者たちと五度目の対峙をする。

「こちら、お前たち何をしようとしてるかわかってるのか!？」

無数のゴーレムに守られた二人の足元には巨大な魔法陣が広がっている。

間違いない、ここが異常の中心だ!!

「分かってるわ、ここで時空災害が引き起こされれば、のちの歴史が滅茶苦茶になる」

儀式に集中していたドロテアが、アインシュタインに冷静に返した。

「だけど、それがどうしたの?」

あなたは関係ないでしょう、私たちの未来の偉人よ。

まあ、その彼は産まれてこなくなるかもしれないけど」

ドロテアの冷酷な笑みに、“あなた”は思わず言葉を失ってしまった。

「こんなこと、あんた達の後ろの輩が望むとは思えないけどね」

二人の黒幕がやりたいのは経営シミュレーションであり、ドロテアがやろうとしているのはその盤上に津波を引き起こすことに等しかった。

「もう『あの方』なんて関係ないわよね、あなた？」

あなたが本当にしたいことは何？」

「ふ、ふっふふ、妻がやろうとしてることが予想以上で怖い!!」

だが私は悪くないぞ!! お前たちが邪魔しなければ、私は順当に皇帝になれたのだからな!!」

妻の言葉に、フランツ伯爵は少し冷や汗をかきながらそう主張した。

「呆れた、賢さには限界はあるが、愚かしさは限界はない。

君は同じことを繰り返して別の結果を求める狂人だよ」

「同じこと? 違うな!!」

今回は全て、全部!! 妻に任せた!! 私の手が介在していない以上、私に失敗は無いのだ!!」

笑い声を上げるフランツ伯爵。

アインシュタインは額に手を当てることしかできなかつた。

全部妻任せかッ、と『あなた』は批難した。

「そうだ、私は、俺はッ、妻が居ないと何もできないのだっ!!」

あまりにも堂々とした言葉に、「あなた」も絶句した。

「……お前たちは自分がやろうとしていることの意味を理解しているのかい？」
頭が痛そうにしているアインシュタインが問う。

今頃黒幕も大慌てだろう。

「それで、どれだけの人間の人生を歪めるつもりだい!!」

「大規模破壊魔法兵器を開発を後押ししたあなたが言うの？」

その事実を無くそうとして、時空防衛隊と一悶着起こしたって聞いたけど?」

そのことを魔女に言われると、アインシュタインは何も言えなくなってしまう。

「お前たちは、後世で私がどのようなように伝わっているか知っているだろう。」

たった数通の手紙だけで、この私の人物像は好き勝手にされている。

私はその事実を、「あの方」によって教えられた」

フランツ伯爵は急に真顔になってそう語った。

「私は自分の家を、血筋を、祖先を貶めたのだ!!」

そんな事実、無くなってしまうと思わないか?」

それが、フランツ伯爵のしたいことだった。

「そしてこの時代より、私が新しく、正しく我が名を歴史に刻むのだ!!」

これは私を笑いものにした後世への復讐なのだ!!」

黒幕の手先の小悪党に過ぎなかったフランツ伯爵が、自らの尊厳の為に戦う悪役へと変貌した瞬間だった。

「だからって、どんなにその怒りが正しくても、許してはいけないこともある!!」

行くよ、隊長。私たちの正義を執行しよう」

アインシュタインに促され、"あなた"は強く頷いた。

この二人との決戦が、今始まる!!

〈システムメッセージ〉

一度行ったバトルをスキップしますか？

yes ↑

no

「ぐう、バカな!! 我が妻の力を以ってしても敗北すると言うのか!!」

激戦の末に、時空防衛隊は勝利した。

無残に転がるゴレムの破片だけが、その戦いの激しさを物語っていた。

「あなた、ごめんなさい。負けちゃった」

膝を突く夫を支えながら、ドロテアは苦笑いを浮かべた。

「構わないさ、お前がダメだったんだ。

何をやっててもダメだったんだろう」

敗北を受け入れたフランツ伯爵は力なくそう言い放った。

「あー、もう、帰ろう。帰って娘を抱きしめてお父さん頑張ったねって言ってもらおう。仕事もしばらく部下に丸投げだ。ひと月は働かないぞ!!」

そんなことを言い始める彼に、“あなた”達は呆れてしまった。

「いったいこんな男の何が良かったんだい？」

アインシュタインは思わずドロテアにそんなことを問いかけてしまった。

「私が彼を好きになったんじゃないわ。

彼が私を求めたからよ。そして、彼が夫としての責任を果たそうとしている限り私は裏切らない」

それは彼女だけの価値基準だった。

それを早々に理解したアインシュタインはそこで話を打ち切った。

「博士、この二人に強制送還の用意を」

『ああ、強制送還術式の起動!!』

モニターの奥で戦いを見守っていた博士は、この二人を元の世界に強制的に帰還させる為に装置を起動させた。

時空防衛隊は異世界の侵略者を拘束できない。人権問題で叩かれるからだ。だから元の世界に帰って貰うしかないのだ。

「ふん、殺さずに追いやるだけ、か。

舐められたものだな」

転移の光に包まれながら、フランツ伯爵は吐き捨てる。

何度来ても追い返すだけだ、と、あなた”は彼に言い放つ。

「……俺にもそう言い返せるだけの、武名が欲しかったな」

そう言つて、フランツ伯爵は元の世界に帰つて行つた。

「だそうよ、今回のお遊びは楽しかったから、あの人に武勲を挙げる機会を与えてくれるなら、私があなた達を手伝うのもやぶさかではないわ」

ドロテア夫人もそう言い残し、この世界から去つて行つた。

『まったく、とんでもない迷惑な二人だったな』

「本当だよ」

博士もインシユタインもため息を吐いた。

一仕事終えた気分だったが、まだこれは折り返しに過ぎない。

「ちツ、役に立たない二人だ」

その時、時空防衛隊の前に舌打ちと共に空間が歪む。

「どうやら、黒幕のお出ましのようだよ」

アインシュタインの言葉に、“あなた”は応じた。

「そうだ、我こそが今回の首謀者。」

その名も——」

〈システムメッセージ〉

一度見たイベントをスキップしますか？

yes ↑

no

その後、穴熊を決め込むつもりだった黒幕はフランス伯爵達の暴挙の所為で表に出ざるを得なくなり、結果的に事件解決に遠回りながら貢献してしまった。

こうして今回の事件は終息したが、時空防衛隊の仕事に終わりはない。

そう、人類の歴史が続く限り!!

〈緊急イベント 『はた迷惑な伯爵夫妻』 完〉

§ § §

「なかなかよくできてたわね……」

以前真冬に勧められたスマホゲームのイベントシナリオを読みえた魔女はイベントページからホーム画面に戻った。

特にこの手のスマホゲームで歴史上の人物が後世で好き勝手ネタにされているのを怒る展開が面白かった。

「あの人も、これぐらい色々頼ってくれば良かったのに」

よく想像だけであの人の性格をここまで再現できたものだ、と彼女は感心していた。そして流れるようにガチャ画面に移動。

イベントピックアップに最高レアでドロテア夫人が登場していた。

以前登場していた恒常キャラのインシュタインもついでに排出率が上がっていた。彼女は迷わず10連ガチャをタップした。どちらも持っていなかったのだ。

「あ……」

狙った対象は来なかった。

しかし。

『我が名はフランツ伯爵である!!』

おい、まさか俺だけではないよな？ 妻が居ないと役立たずだぞ、俺は!!』

魔女は小さく笑みをこぼした。

二次会について

「それじゃあ、いつ首都直下型地震を起こすのかを決めるのだけど——」

そのイヴの言葉を耳にした時、彼女を知るほぼ全員がそんなことだろうと思った、とても言いたげな表情になった。

「流石に時間を与えないのは可哀そうよね。」

十一月か十二月ぐらいがいいかしら」

まるで果物の収穫日を決めるかのような軽い口調に、幾人かが顔を顰めた。

都内の高層ビルの最上階を貸し切ったレストランで行われている二次会は剣呑な雰囲気に含まれていた。

「おい、正気かお前。」

長く生き過ぎて頭がイカレちまったのかよ」

まず彼女に物申したのは、化粧屋だった。

「さっきのホテルでの話は、まあいい。理解した。」

だが地震を起こすつてのは聞いてないぞ。どれだけ殺す気だ、お前」

彼女の言葉は、この場に居る事前に話を聞いていなかった面々の心境を代表するものであった。

「その為に万全の配慮をしているじゃない」

「お前、これを見て同じこと言えるのかよ!!」

化粧屋は都内を一望できるレストランから見下ろせる眼下の景色を示した。

地上は、ほぼ完全に交通がマヒしていた。

人々は狂ったように食料品や日用品を買い漁ろうと動き回っているが、人が多い都内では人がごった返して歩いて歩いて移動さえままならない。

と言うか、ここにいる面々はホテルからこの惨状の合間を縫って、レストランまでやってきたのである。

嫌でも今起こっている混乱を目にしていた。

「些細なことだわ」

イヴはアリの行列でも見下ろすかのように一瞥だけしてそう応じた。

「これはほんの一部だぞ、それでも些細だと言うのかお前は!!」

「落ち着け、化粧屋」

どこか諦念の混じった溜息と共に、ティフォンが彼女の肩に手を置いて落ち着かせる。

「もはや、賽は投げられたのだ」

覆水盆に返らず、落下枝に上り難し、破鏡再び照らさず。

もう起こってしまったことについてとやかく言うことに意味などないのだ。

「おそらく、今日明日の日本の経済はほぼストップするでしょうね。」

それだけで百億単位の経済的損失を日本は被り、社会は不安に満ちるでしょうね」

たった数分の動画だけで日本にそれだけの混沌を齎した女は、他人事のように嘯いた。

まさしく化粧屋を煽るかのように。

「でも些細よ。この程度、掠り傷だもの。」

私たちが起こす予定の首都直下型地震の直接的被害は軽く百兆円を超えるでしょうから。

これでもまだ甘い見積もりよ」

「そこまでして、そこまでしてお前は自分たちの利益を優先するのか!？」

化粧屋は完全に感情的になっていた。

なにせ彼女は都内に住んでいる。家族もだ。

イヴの起こす地震の直接被害を被る立場だった。

「なら、私を討つかしら？　ねえ調停者」

「……………」

話を振られた仮面の魔術師は、無言を返すほかなかった。

「……吊り合いは取れている」

やがて、忌々しそうに、吐き出すように彼はそう言った。

「イヴの所業は、均衡を保とうとしている。それがどれだけ悪魔的であろうとも」

初めから彼女は彼と敵対を避ける為に綿密に計算して行動を決定していたのだろう。

調停者は、動けなかった。

それを確認してから、イヴは口を開く。

「2011年の東日本大震災の事を覚えている者も多いでしょう。

公式にはその直接の死者は約16000人、行方不明者を含めれば25000人ぐらい増えるわね。」

その被害額は多くて25兆円だそうよ」

観測史上最大とされる地震によってもたらされた被害を彼女は口にする。

それがたった10年程度昔の話に過ぎないのだ。

間接的にもその被害を受けた面々が、顔を顰めていた。

「首都直下型地震は以前から予測されていて、10年以内に七割の確率で起こると専門家が予想しているそうね。」

あそのこの連中は間抜けだと思わないかしら、10年で七割の確率で死ぬかもしれないと言っているのにのんきに過ごしているんだから」

イヴは眼下を見下ろす。

もはや道路や歩道の区別もつかないほど混沌とした人間の坩堝を。

「どうせいつか来るのなら、比較的安全に地震を起こしてあげてダメージを最小限に抑えてあげるのが親切だと思わないかしら？」

それが押しつけがましい偽善であれ、彼女の所業を否定する言葉を出すことは誰もできなかつた。

文句を言ったところで、いずれくる災厄に対して彼らは何もできないのだから。

「私たちがやらなかつたら、それ以上の被害が出るでしょうね。」

数万人、十万人は死ぬかもしれないし、それ以上に首をくくる人間がたくさん出るでしょう。

私はそれを千人以下の死者に抑える能力がある。それはもう既に、あなた達に示したはずだわ」

十万人以上の命を救うために、千人を殺戮するとイヴは語る。

「私のやり方に文句があるのなら、より良い代案を出しなさい。」

そしてそれを実行できる能力を示してみなさい。

できないでしょう？ 私だけができたのよ、ほら口答えしてみなさいよ」

くすくす、と無力な人間どもを嘲笑う人造生命。

「それとも、中止する？ これだけの混乱が起こってなお。

もししたら、私たち異能者は大ウソつきね。いずれ来るだろう新しい魔女狩りの時代を粛々と受け入れると言うのなら好きにすればいいわ。そこまで面倒は見切れない」

もう既に賽は投げられた。

もはや、止めるとか止めないとか論ずる段階ではないのだ。

だからこそ、イヴが行動に移したとも言えた。

彼女は過去の反省を生かし、相談してから実行するのではなく、根回しをして実行してから相談したのである。

「……皆の衆、言いたいことは分かるが仕方あるまい。

災害によって死人が出るのは世の摂理。それを治めるのも支配者の器量と言うものだ。

そしてそれに口を挟むのは凡愚の所業である」

ずっと目を閉じて話を聞いていた仙人たる老師が厳かに言葉を発した。

「百数十年前のあの時、すっかり殺しておくべきだったと我は後悔しているがな」

吸血鬼は不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「デカイ商売のタネになりそうだ。俺は初めからボスに従うつもりだったぜ」

内心津波の心配をしている海賊が冷や汗を掻きながらそう言った。

「昔馴染みや見知らぬ顔の旧知の友に再会できて聞く話がこれとはな」

ティフオンも溜息と共にそう呟く。

「あなたがこの地に狙いを定めたのはなぜですか？」

苦渋の表情を浮かべていたカタリナが問う。

「この国は他国からの宗教的干渉を受けにくいのは私たちにとって好都合でしょう？」

この東京に本拠地を置けば、他所の国から攻撃されるにも陸路は使えない。

間もなく、今回の騒動で東京の地価は暴落するでしょうからそれを買って漁る予定だ

わ。そうやって一般人どもを都内から追い出すの」

イヴの計画はどこまでも計算済みで、効率的で合理的だった。

「そうして、私たちが独立して国を興すのではなく、国の中に私たちの楽園を創るのよ」

「なるほど、日本と言う国を盾にするつもりなのね」

「勿論、持ちつ持たれつの関係にできるようにするわ。一方的な搾取だと長続きしない

し。」

それにこの国なら、私たちが唯一恐れるアレがいきなり飛んでくるなんてこともない

でしょうし」

「アレ？ ああ、アレね」

魔女はすぐにイヴが恐れるモノに思い当たった。

なにせ彼女も、唯一それだけを畏れていたのだから。

「——そう、核兵器よ」

核兵器非武装を掲げることによって身を守る日本と言う国は、この上なくイヴにとって都合が良かった。

「核兵器は第二のプロメテウスの炎と称されるほどに魔術的な意味を有するほどになってしまったわ。

私はあれだけが怖い。そんなものが世界中に散らばつてるといふ事実を含めて」

魔女はそのように語りながら、中学生の頃に修学旅行で行った広島資料館の記憶を思い起こしていた。

「アレも私が百年かけて人類から取り上げるわ。あんな粗大ゴミ邪魔なもの」

イヴは本気だった。本気でずっと先を見越して行動している。

「アレの恐怖を消し去ってくれるのなら、私はあなたに従つてもいい」

「そう、約束するわ。他は？」

魔女の従属を受け入れたイヴは他の面々に顔を向ける。

「私は調停者として中立を維持させてもらう。これから人々に冷静になるよう呼びかけ

ねば」

仮面の魔術師はそのように答えた。

「元より、我が教団はあなたの意のままにあるのです」

占星術師たる「輪廻の扉」の代表にして教祖は端的に応じ。

「我が一族の祖先の窮地を救ってくれた貴女様こそ我らが神であり、それに逆らうものこそが異端なのですよ」

不吉な笑みを浮かべる処刑人はゆっくりと頭を下げた。

「我が剣も、罪なき同胞と秩序の為に捧げましょう」

カタリナは己の正義に則ってそう告げた。

「共に世界を変えましょう」

そして召喚士も、無二の友に改めて賛同の意を示す。

「これで過半数は私の味方ね。」

別に私は服従しろとは言わないわ。あなた達を保護したいだけなのだから。

私の目の届く範囲に居て、勝手に死なないでくれればそれでいいのよ」

イヴの目的は先ほどのホテルの会場で言ったことと変わらない。

別に彼女はこの場に居る面々を戦力として戦わせたり、道具のように扱き使ったりしたいわけではないのだから。

「私たちは危機感を共有し、お互いに意思疎通を図って、ある程度の団結を必要としているのよ。」

それさえ守ってくれば、日本以外に居ても、何をしてても構わない」

そして彼女は彼らを束縛する気さえなかった。

それをしてしまえば、意味など無いと分かっているのだから。

「後の面倒ごとは私が引き受ける」

逆に言うと、ここまで約束しないと彼女は自分に誰も付いて来ないのを重々に承知だったのだ。

「くそ、あくまで後世の同胞の為だったか」

化粧屋は心底嫌そうに、テーブルに出されたワインを呷った。

「しかし解せんな、ここままで手の込んだことをしておいて、貴様の利益が見えてこない。

そろそろ我々の利益ではなく、己の利益について語ったらどうだ」

同じく、ワインを楽しんでいた吸血鬼が問う。

「可笑しなことを問うのね。」

道具に、私個人に、自身の幸福なんて存在しないわ。

私は所詮、システムに過ぎない。あなた達は私ではなく、私たちを守るルールに従うのよ」

そう、ここまでして、こんなことをしでかしても、イヴ個人にメリットなんて無かった。

今日日、人類の発展をコンピューターが支えてきたが、機械に幸福が存在するだろうか？

ただプログラムを実行するだけの、無私の装置に。

イヴは自身をそれと変わらないと言っているのだ。

「私は、このように創造主に造られた」

うっとりとして、どこか夢見心地で彼女は語った。

ある意味では、自分の能力の高さを確認できたこと、それに陶醉できることこそ、彼女にとって何よりの報酬なのかもしれないなかった。

「……それで、これ以上何か言いたいことはあるかしら？」

イヴは言葉を尽くして、理解を求めた。納得せざるを得ない状況に追い込んだ。

それでも彼女は最後の最後まで同胞相手に油断はしなかった。

「サラ、誰か叛意はあるかしら？」

誰もが口を閉じていることを認め、最後に唯一この場に異物だったサラが口を結んだまま首を横に振った。

「なあんだ、磨き上げられたギロチンの刃えを是非とも披露したかったのに」

などと言って、処刑人が低い声で笑う。

「さて、そろそろ本題に移りましょうか」

参加者に理解を得られたところで、彼女はいい加減わき道にそれた話題を戻すことにした。

「それじゃあ、いつ首都直下型地震を起こすか、決めましょうか？」

もはや、この魔王の所業を止められる者は誰も居なかった。

§ § §

イヴの決起会の参加者たちは、完全にホテルの会場で立ち往生する羽目になっていた。

「ダメです、先輩。電話が繋がりません」

まだ震災が起こっているわけでもないのに、既に電話の輻輳が起こっている。

今、日本中から東京に向けて着信が通常時の数十倍に集中しているために、電話が繋がらない状態になっているのだ。

「外もダメだな」

妻鳥の言葉に、ホテルのロビーを見に行っていた伊藤刑事も溜息と共に会場に戻って

来た。

ホテルのロビーには、人が溢れかえっているのである。

東京から逃げ出そうとしている人々がなぜ都内のホテルに溢れかえっているのかと言え、彼らも立ち往生しているからである。

交通機関は完全にマヒしていた。道路は大渋滞を引き起こし、車は身動きが取れない状態だ。

駅に行こうにも人の海で改札口にまでたどり着けない有様だった。

その中には家から中途半端に離れたところでのつちもさつちも行かなくなった者も少なくない。

そんな人々が、諦めて今日の寝床を探しているのである。

ロビーには大量の人々が受付に行列を成し、荷物を持って歩き疲れた女子供が壁際に座り込んでいる様子が見られる。

外は人でごった返しており、無防備に座っていればどさくさに紛れてどんな犯罪に巻き込まれるかわからない。

どうにもならないのなら、屋内の方が多少はマシと言うことだった。

「くそ、早く本庁に連絡しないとイケないってのに!!」

伊藤刑事は苛立たし気に悪態づいた。

「とりあえず、同僚にSNSでメールを送っておきますんでそれで連絡しましょう」
「……そうだな」

「こういう時は若い妻鳥が柔軟なのか、彼の提案に伊藤刑事も頷き文面を指示し始めた。」

「これは、……今日は帰れないでしょうね」

望海は外の様子を念写し、ネットの状況を確認するとそのように溜息を吐いた。

「マジかー、パパとママ大丈夫かなあ」

「メールとか繋がらない？ そっちを試した方が良いよ」

「そうだね。そっちは？」

両親の勤務地が東京である夏芽はスマホでメールを打ちながら、友人たちにも心配を向けた。

「今、春美ちゃんがうちの方に連絡しに行ってくれてる」

「こういう時こそ、アナログな魔法が役に立つんだねえ」

真冬の返答に、夏芽も感心したように頷く。

春美は今、携帯していた「魔女の軟膏」を使って、彼女らの地元の方へ直接向かって
くれている。

そうして各々の家に事情を説明してくれる手はずである。

「それにしても、大地震か」

千秋が昔を思い出して溜息を吐いた。

「東日本大震災だって、私たちの小さい頃にあつたよね。」

私はあまり覚えていないけど、お母さんは電気も水道も一週間は使えなかつたって
言つてたね」

「うちもそんな感じだつたつて。学校の体育館に避難して、みんなでお泊りだつて騒いでた記憶があるな」

「あつたあつた、そんな感じだつた!!」

千秋の思い出話に、夏芽と真冬も昔を思い出して笑みを浮かべる。

今はその渦中に居るのだが、独りではないから不思議と不安は少なかった。

「……あれ、あの子、独りなのかな」

そこで、夏芽が会場で独り落ち着かない様子でうろうろしている少女を見かけた。

見るからに外国人らしく、大半が日本人で、そうでない面々は陰キャばかりなので誰も声を掛けられずにいた。

「あー、はろーはろー、ないすちゅーみーちゅー?」

「なんて不安のある英語力……」

心配になった夏芽が彼女に声を掛けたが、逆に望海が心配になるような発音だった。

「……あー、ええと、大丈夫よ、今日本語分かります」

「えッ、あッ、そうなんだ!!」

少女の方が苦笑してそう言うので、夏芽は恥ずかしさを誤魔化すように笑った。

「ほら、あのオブジェがあるでしょう?」

少女は会場に設置されている古い塔を模したオブジェを指差した。

「あれってバベルの塔を模したマジックアイテムなんだって。」

聖書の神様が言葉を乱す以前の状態を再現するとかで、今この会場に居る間はどんな国の言葉を喋っていても相手に伝わるんだとか」

連れの受け入れだけど、と彼女は説明してくれた。

「へえ、便利だねえ。じゃあそっちは何語を喋ってるの?」

言われてみれば、彼女の唇の動きが日本語の発話と違うことに夏芽も気づいた。

「ルーマニア語。私、あっちに住んでるの」

「えええ、ルーマニア!! ドラキユラで有名なところだよね、そうなんだあ!!」

元からの人柄が良いのか、すっかり夏芽は彼女とすぐに彼女と打ち解けてしまった。た。

「ジョージ、どうする？ この状況を」

「どうするもこうするも、僕らはアウエーだ。何もできないし、何かしても迷惑になるだけだ」

会場に来ていたテンペストも何もできないでいた。

ともに来日していた彼の仲間たちも、まさかこんな状況に陥るとはと嘆いていた。

「それにしても、地震か。」

日本は地震が来ると分かるだけでこんなにも大騒ぎになるんだね」

「こつちでも地震は偶にあるけど、日本の地震はウエールズとは比べ物にならないほど大きいと聞いたね。」

普通は予想もできないことなんだから、来ると教えられたらこうなるのもしかたないんじゃないのかな」

彼の仲間たちはそんな話をしながら、無聊の慰めとしていた。

「……せめて日本語が出来れば、混乱しないように訴えることはできたのにな」

テンペストは己の無力さを噛み締めることしかできないでいた。

「気に病むなよ、ジョージ。」

イヴさんから、さつき震災後の復興の手伝いを打診されたんだろ？

この高いビルがたくさんある東京で、そのがれきを一気にどかせるのお前だけなんだ

ぜ。

今貯めこんだうつぶんは、そんな時に晴らしてやろうぜ」

「そうさ!! どうしても町から離れられない人間は居るだろうしね。

それを助けることこそ、真のヒーローってものさ!!」

「……ああ、そうだね」

彼は前向きな仲間たちに励まされ、少しずつ笑顔が戻ってきていた。

突然、会場の窓が一斉に開き、中から無数のコウモリが侵入してきた。

いきなりの事とコウモリの無数の羽音に驚く会場の人々だったが、コウモリたちは渦を巻くように一か所に集まると、人の形を成した。

「マリー!! 今戻った!!」

そしてコウモリが散ると、そこには一人の貴族然とした顔色の悪い男が立っていた。

「ちよつと、マスター!! 普通に入ってこれないの!?

ほら、みんな驚いているじゃん!!」

「う、うむ、だがほら、外は人混みばかりであつたし」

「そういうのはホテルの外でやってよ!!」

マリーは自分の連れに怒りながら、窓を一つずつ閉めていく。

彼女と話していた夏芽は当然びっくりしていた。

「きゅ、吸血鬼だあ!! ほ、本物ですかあ!!」

が、すぐに我に返ってはしやぎだした。

「くくく、いかにも。我こそは恐らくカインの末裔にして、ドラキュラ公の末裔の知り合
いである!!」

すると吸血鬼はマントを翻してノリノリでそう答えた。

「ほ、ホントに居たんだ!! すごいなあ!!」

「夏芽ちゃん、夏芽ちゃん!! あっちで魔術師さんが生配信してるみたいだよ!!」

「えッ、マジ!? あッ、テンペストさんも出るみたい!!」

が、すぐに彼女の興味は別の方に移ってしまった。

「……」

「ぷッ」

マリーに笑われた彼は会場の隅でいじけ始めた。

「レプ、配信の準備を」

一方で、会場に戻ってきていた仮面の魔術師は伊藤刑事たちと話し合った結果、イヴの声明について補足する形で混乱を治めようとしていた。

「はいはい、マスター」

妖精レプはすぐにスマホを用意して、その場で配信準備を始めた。

「皆さん、魔術師です。今、東京都内は混乱に包まれています。

その原因は、私の知り合いの出した動画が原因です。

今すぐ地震が起これると言うデマに惑わされず、まずは冷静になつてください」

彼は懸命に冷静な判断を人々に訴え始めていた。

「ま、まじゆつししやんが目の前で生配信してりゆうう!!」

そしてそれを目の前で見ながら、スマホで配信を見ている真冬は何だか幸せの絶頂にいた。

結局、その日は春美たちはホテル側の厚意で会場に寝泊りすることになった。

それは流石は都内の超一流ホテルだと言える対応で、ホテル側も予約のキャンセルが相次ぎ食品を無駄にするなら、ということと食事まで振舞われた。

こうして、のちに『イヴの日』とカレンダーに記される出来事の初日は終わろうとしていた。

魔王について

「どうも、皆さん。魔術師です」

先日の急な配信とは違う、いつもの自室での放送を始めた魔術師が事前に予告していた通りの時間にネットに己の姿を晒した。

『こんにちは』

『粹おつー』

『hello!!』

彼の放送に特定の挨拶とかは無いので、各々が無数の挨拶のコメントを残して行く。

この放送の同時視聴者数は百万人を超え、百五十万人にも届こう勢いだった。

「東京は、未だ大変なことになっていきますね」

魔術師は溜息と共にそう言った。

イヴの声明が発せられてから、今日で三日目になる。

東京の混乱は徐々に収束に向かいつつあるが、テレビのニュースでは今の東京の惨状について語られていない時間は無いほどだ。

報道では東京で立ち往生した人々を震災予告難民と銘打ち、その数は数万人と予想された。

東京に本社を持つ企業は、ただそれだけで株価が下落し、それ以前に都内から身動きが取れない有様だ。

政府は懸命に冷静になるように呼び掛けているが、政治家たちの動きも鈍い。

国会議事堂にヘリコプターを使用しないと入れないような現状が今も続いているのだ。

高速道路は前代未聞の渋滞が発生しており、放置された車両も散見されるような状態で前も後ろも動けないでいた。

唯一電車だけが通常通り動いているが、そこに人々が集中しているために職員が決死の頑張りを見せて何とか人々を捌いているのが現状だ。

それでもようやく、東京は都市機能を徐々にだが取り戻そうとしていた。

尤も、そこには住人は離れ、難民だけが彷徨っている有様だったが。

さて、人間と言うのは愚かな生き物で、一旦安全域に脱出して冷静になり現状を把握すると、財布やスマホだけを持って出て来たという人々が出戻りを始めたのである。

当然それは全体から見ればごく少数だろうが、東京の人口のごく少数だけでも数百人は居るだろう。

そんな人たちと難民たちが衝突するのは、無理からぬ話だった。

「東京は今、出戻り組と難民たちで混雑し、トラブルが多く発生しているようです。」

東京から離れられた人は、一旦混雑が落ち着くまで様子見をお願いします」

今の東京の有様は、先進国とはとても思えない惨状だ。

人々が自分たちの安全だけを考え、蜘蛛の子を散らすように逃げまどっている。

「私は先日、イヴの催したパーティに出席しました。」

世界中の異能者たちが集まり、彼女の意思を確認する為です」

前置きを終わると、特にトークも無く本題に入る。

いつもの彼らしい事務的な所作だった。

「その直前に、あの映像が世界中に発信されたようです。」

それは瞬く間にSNSで拡散し、一時間も掛らずに東京は地獄絵図と化しました。

彼女の予言を嘘だとか、目立ちたがりなだけだとか、そのように言う人も居ますが危険です。

あの女を侮ってはいけません。彼女はこの程度の混乱は想定済みだとしか言いませんでした。彼女はこうなることを分かっていたのです」

溜息と共に、彼は胸中を吐露した。

「彼女に、あの場に集まった数多くの異能者が恭順を示しました。」

調停人たる私が呼ばれた理由は、それを保証する為です。

——あの女は、我々異能者の女王になったのです」

彼の言葉に、コメントも沸き立つ。

『やっぱり偽物じゃなかったんか』

『悲報：首都直下型地震確定のお知らせ』

『マジである人が魔術師さんたちのトップなん!?!』

『あの人間離れした美貌に見下されたい……ハアハア』

『家族も居ない東京に独り暮らしの俺はどうすれば……』

『天涯孤独ニキ元氣出して……』

『自分異能者ですけど、これからどうなるか不安です』

把握しきれないほど大量のコメントが流れる中、いくつかのコメントが読み上げられる。

「……」

魔術師は無言で画面端に『コメントの選出基準はレブに任せています』の文字を打った。

「イヴは私の前世からの知り合いです。」

いえ、より正確には彼女の製作者である人物と親交があったのです。あの女は彼女の

助手でした。

彼女の製作者は優れた錬金術師でしたが、その最高傑作のイヴの性能は人間を遥かに上回るでしょう。事実これだけのことをしでかして見せた。

前世で会った時は、作られて間もなかったからか感情に乏しかったのですが、今も当時の見る影もない」

そこまで言ってから、彼はコメントの動向を見る為に一拍置いた。

『前世からの知り合いって、何百年生きてるの!?!』

『ホムンクルスってやつ?』

『魔術ってマジであんなの作れるんだ……』

『俺もあんな美人の彼女作りたい……』

『不老不死の実例があんなこと言ったらなあ』

と言うように、コメントの多くは驚きに満ちていた。

「ハッキリ言うならば、私はあの女に利用されている。

あの女は私と敵対しないように緻密に計算して行動を決定しているのです。

こうして皆さんに話しているのは、バランスを取る為。

あの女を侮り、軽率な批判などをして敵対してはフェアではないからと、私が行動することを見越しての事です。

そうして自身の発言を確固たるものとしてようとしているのです」

それをわかつていて、彼はこの配信をせざるを得なかった。自らの意思で。

「あの女は人間を数字としか見ていない。効率と合理性の塊です。

どれだけ美麗な人間の姿をしていても、あれは人間ではないのです」

この世界で最も影響力を持つ転生者の一人として、彼は訴える。

「あの女を敵としないでください。あれは人間と言う生き物を熟知している。

あれを蔑む者、あれを罵る者、それは全て自殺に等しい。

あれは自分たち異能者に權威を持たせる為に、異能者を判別する機械を賛同者に配布しようとしています。

だけどそれは、炙り出しに過ぎない」

異能者を判別する機械、それを反対するのは数多くいることだろう。

隠れていた異能者は勿論、異能者をよく思わない人たちも。

『それって、あッ（察し）』

『やっつてることが完全に魔王なんですけど』

『そんな奴が、敵に容赦しないって話ですよねー』

察しの良いコメントが読み上げられ、魔術師は頷く。

「これまで異能者は、圧倒的少数派に過ぎませんでした。

彼らが横暴を働くケースも散見されますが、それは当人に問題が有ったと言うだけ。大多数は自らの意見を発信する機会すらも無かった」

そもそも、の話である。

先日の決起会は、異能者の中でも転生者に限られたプレゼンテーションだった。

彼らの弟子になれる、なんていうのは単なる超能力に目覚めただけの普通の人々に魅力的に映るだろうか？

自らの異能に保証が付く程度で、いったい何が彼らに得があるのだろうか？

それだけのことで、テンペストやサラはイヴに賛同するだろうか？

「次にイヴが行うだろう一手は、おそらく、——見せしめ」

彼の祈りは届かない。

魔王の次なる魔手が、この世界と言う盤上に迫っていた。

.....

.....

.....

イヴの声明から五日。

この頃には大分東京の様子は落ち着きを取り戻していた。

だが、日本ではそれどころではなかっただけで世界中ではイヴの声明はもつと物議を交わされていた。

その中でも特に過激だったのが、彼らだった。

『連中は、あのミュータントどもが、本当に秩序を求めるであろうか!!』

アメリカの某州にて毎日のように執り行われている数百人規模のデモ隊の指導者の一人が、壇上に立つてメガホンで人々に訴えている。

つい先日、彼が主導したデモで異能者が暴行を受けて亡くなっているという事件が起こっているにも係わらず。

『あの女の言葉を信じてはいけない!!』

あの女がミュータントを判別する機械を配るのは、将来的に自分たちの味方とするためだ!!

連中が集まるとどうなる!? いずれ結束して、私たちの住居や財産を脅かすに違いないのだツ!!』

皮肉なことに、彼の発言は的を射ていた。

彼は差別主義者だったが正しく、危機感を持っていた。

『我々はレイシストか!? 否、連中は嘘つきで、私たち人類全体を脅かす悪魔なのだ!!』

故に我々は、決して屈しては——』

だがその時、突如として彼の表情が苦悶に満ち始めた。

からん、とメガホンが壇上に落ちる。

「あ、あが、があああああ!!」

まるで両手両足を広げるような姿勢のまま、何かに引つ張り上げられているかのように苦しみ始めたのである。

「——これより、異端審問を始める」

彼の足元にあるメガホンが、独りでに声を発し始めた。

「汝、罪も無き人々の命を暴行にて奪った集会を主催し、厚顔無恥な言動にて人々を惑わした。」

——よって、八つ裂きの刑を執行する」

「ぎ、ぎやああああああ!!! やめ——」

血の雨が、デモの参加者たちに降り注いだ。

デモ隊たちは目の前で起こったおぞましい出来事から悲鳴を上げて逃げ出し、足がも

つれて倒れる人々を踏み殺しながら去って行く。

アメリカの新聞では、これによって十九人が死亡し、主導者の一人が壇上にて四肢がもぎ取られた状態で死亡していることを報道した。

大抵の場合、自国民を殺されたアメリカという国はこういう事件に対して強硬な態度を示すものだが、この一件に関しては不自然なほど静かだった。

それどころか、日ごろから問題発言ばかりしている大統領が、自分の批判ばかりしている連中にもこうなってくれないかな、なんて言いだすものだから怒りの矛先がそちらに向いてしまう始末であった。

この事件と同じ、異能者を捕まえて研究所に送り込むという政策をしていた某国の研究所の責任者が斬首され、異能者の虐殺を指示した中東の過激派が全員焼死体になって発見された。

彼らの死に様は必ず人目のあるところで、犯行声明が聞こえたという共通点があった。

この一連の事件は、もはや異能者は隠れる必要が無いのだと言うイヴのメッセージであった。

同時に、敵対者はいつでもどこでも殺せると言う、明確な意思表示だった。

イヴの声明より一週間が経った。

『私は東京都知事という立場を通じて、日本政府への窓口になるようにイヴさんに頼まれました。』

彼女は不治の病だった娘の治療を手伝ってくれただけでなく、その治療法を広く示したいと言っていたのです』

テレビでは、証人喚問にて国会に呼ばれた新任の東京都知事が答弁をしていた。

『彼女はもはや個人ではなく、異能者たちの代表なのです。』

私たちは彼女を軽んじるのではなく、国家として交渉に当たるべきだと主張します』

『では、彼女の予言した首都直下型地震の件を信じていると?』

『はい。私の都知事としての最初の仕事は、都民を順次退避勧告することでありませう。』

それ以外にも、受け入れ先がない方々の滞在場所を準備したり、ある程度の保証をしなければならぬでしょうが』

ピツ、とりモコンの電源ボタンが押され、テレビの電源が落ちた。

「個人的には、意外でしたね。」

世間に対して露骨に邪魔者の排除をするとは」

召喚士は元ヤクザ事務所の休憩室で、イヴにそんな言葉を投げかけた。

「真の名君は慈愛と残虐性を使い分けるモノよ。」

私たちの批判をするのは良い。でも表立って逆らうのなら殺す。

私たちを理解し歩み寄る者にだけ手を差し伸べ、それ以外を足蹴にする。

効率の問題よ。余計な被害が出る前に、私たちの意向を示しただけ。

幾ら遠くで吠えようとも、所詮それは遠吠えに過ぎない。

実害が出た時だけ対処する。それこそが秩序というものでしょう?」

イヴは優雅にハーブティを嗜んでいるながら、酷薄に笑っている。

この女が東京そのものを地上げしようとしているなどこの元ヤクザ事務所の面々

ですら想像できないであろう。

「イヴ、あなた世間でなんて言われているか知っていますか?」

実に安直に、「魔王様」だそうですね」

「なら四天王でも作りましょうか?」

召喚士の言葉に冗談めかして返すくらいには、イヴは余裕に満ち溢れていた。

「……それで、例のあれは解析できましたか?」

「ええ、未知の言語体系とプログラムだったから多少手間取ったけど、どうにか」

話題は次に移る。あの遺跡で見つけた人形の事だ。

「やはりあれは移民船のようだったわ。

彼らがこの世界にやってきた経緯や、この世界での苦労話がいくつも発見できたわね」

「まさか、それだけと言うわけでもないでしょう?」

「勿論よ」

イヴは召喚士に頷いて見せた。

「知ってるかしら、この世界は一万年前まで魔力なんて存在しなかったらしいわよ」
「あの遺跡の動力は魔力でした。」

あれが動力不足に陥っていた理由はそれですか」

召喚士はイヴから齎された話に驚くことも無く、研究者らしく考察を始めた。

「では、この世界に魔力が発生した理由は……」

「ええ、神々も私たちと同じことをしたみたい」

「つまり……」

「そうね、おかげで貴重なデータが得られたわ」

まるで引き寄せられるかのように、必要な物が手元に集まってくる。

どこか見えざる手が動いているような感覚を抱きつつも、召喚士は頷いた。

「儀式は例の地震の日にするわ。」

「きっと世界が変わるその日に、相応しいわね」

「これでようやく、使命が果たせる。」

「イヴはこれまでの永い人生よりもこれからの数か月が長く感じるのを禁じ得なかった。」

第二部？編 十年後について

——平成三十年。

：イヴの声明が全世界に発信される。

東京からの避難が始まる。

：十二月中旬、首都直下型地震の予言が的中。

東京は未曾有の被害を被る。

同日、地震の被害を抑える為にイヴが人柱となったと、魔術師が発表する。

以後、異能者たちに関する業務は後任のイヴⅡが執行することになる。

：イヴⅡを盟主とした魔法使いの組織は自分たちを魔導士協会「輪廻の箱舟」と呼称するようになる。

——令和一年。

：日本は首都を京都へと移行。

急な皇居の移動や震災の心労などを理由に天皇陛下が退位。

新天皇が即位し、元号が平成から「令和」へと移行する。

：同年六月。約半年と言う異例の短期間にて東京は復興を完了させる。同時に、復興に多大な寄与をした魔導士協会は東京での事実上の自治権を獲得。この時より、東京は異能者の町と化していく。

——令和二年。

：自分たちを“新人類”と標榜する異能者の過激派集団が活発化する。

が、同時に一般人に危害を加えた為、瞬く間に粛清された。

これによりイヴⅡの天秤は平等であることを人々に印象付けた。

：ここに来て世界の主要国家が魔導士協会の理念に賛同を示す。

日本以外にも全世界に異能者判別装置が配布され、異能者の総数が正確に出始める。

世界中で、一定年齢の男女に判別装置による検査の義務化が始まる。

：同年から異能使用免許が交付されるようになる。

ただし試験的な物であり、範囲も東京都限定で異能を生かせる職種もまだまだ発展途上にあつたが、私有地内での異能の行使は正式に合法となつた。

以後、自身の異能を活用して遊ぶことが出来る施設が台頭するようになる。

——令和三年。

：ローマ法王が初めて“輪廻の扉”のローマ支部を訪問。

創始者たる教祖も支部にまで出向いて、ローマ法王と会談が実現。

「異能者は人である。神が知恵の実を食べたイヴに悔い改める機会を与えたように、神は私たちに異能者に対してどう扱うか見極めようとしているのだろう」と、初めてキリスト教のトップが異能者を認める発言をした。

同年、イヴが異能者の守護聖人として列聖される。

：イヴの列聖を受けて、日本でも彼女の予言の日を「イヴの日」として祝日となる。

同時に、彼女を祭る社が建てられ、八百万の神々の一柱になる。

これには彼女を知る面々は苦笑いしたと言う。

——令和四年。

：全寮制の国立異能学校が東京都に開設される。

また、才能を見込まれた者は魔導士協会から弟子としてスカウトされる制度も導入される。

同時に、都内に魔導士学会も設立され、魔術の研究結果を公表する場が設けられた。

：「魔術師さん返金事件」が発生。

何を思ったのかクラウドファンディングで弟子を募ると言う奇行をし、受付が十秒で終了すると言う伝説を残した。

弟子の育成費用の為らしいが、出資者への見返りは一口一億円を投資した者を弟子にして、その育成光景を配信すると言うものだった。

が、その一億円を投資した金持ちの少女が余りにも魔道に向いていなかったので、返金対応することとなった。

——令和五年。

：かねてより、日本の資源不足を補う為に魔導士協会が恒常的な異世界ゲートを作成し、異世界から資源を調達する計画を実行。

結果失敗し、東京地下ダンジョン化災害が発生。

：地球環境に配慮し、国家内における魔力使用量の制限する条約をイヴⅡが提示。

技術提供や魔術的制裁の可能性を背景に、主要国すべてがこの条約を締結する。

：イヴⅡが国家間の争いの仲裁に立ち合い、初めて国際的な条約に呪術的な拘束力の発揮する条文が織り込まれた文章が作成される。

また、この話し合いには初めて“バベルの塔の再現”の魔術によって通訳の無い国家間会談が実現した。

中略。

——令和十年。

：異能者の全人口が統計によって百万人を超過したとアメリカの統計局が発表。年々、異能者の出生率は上昇傾向にある。

：魔導士協会科学魔術部門が、五品の魔道具を量産化に成功。皮肉にも倫理や制約に囚われないという理念が科学者たちによって文明を推し進めた結果となった。

：魔導士学会が初の人工転生の実験成功を発表。
人類は、寿命を克服する一步を踏みしめた。

§ § §

『朝だよー、春美ちゃん、起きて!!』

聞きなれた電子音声に、私の意識は呼び覚まさせられる。

「あと五分……」

『もうッ、それ二回目だよ!!』

これ以上は春美ちゃんの為にならないから、起こすよ!!』

次の瞬間、衝撃が私を襲った。

私はベッドから叩き落されたのだ。

「あ、いたたた。……この乱暴な起こし方、何とかならないの?」

私はベッドから一緒に転げ落ちた携帯端末機器に話しかける、

『イヴⅡちゃんの起床サポートサービスの満足度は98.3%を誇ってるんだよ!!』

朝を確実に起きれる、ってビジネスマンを筆頭に支持を集めています!!』

機器のモニターから浮かび上がるイヴⅡの立体映像は胸を張っている。

「それって気に入らない人はアプリを削除してるだけでしょ」

『そ、そうとも言う〜』

立体映像のイヴⅡは表情豊かに視線を逸らして口笛を吹く真似をする。

『そ、それよりも、下でみんなが集まってるよ!!』

そろそろ朝食の時間かも!!』

彼女の都合の悪い話題から話を切り替えられると、私は毛布を押しつけて身だしなみを整え始める。

私の部屋がある二階にも水道が通っていて、洗面所がある。

そこで顔を洗って歯磨きして、私は下の階へと下りる。

「おはよう、春美」

そこで待っていたのは、麗しの師匠だった。

「おはようございます、師匠!!」

私は師匠に笑顔で答える。

十年前の私は想像もできなかっただろう。

私は今、師匠と同居している。

「おはよう春美ちゃん、牛乳飲む?」

「いらない」

約一名、邪魔者は居るけど。

「小池君、私は飲むわよ」

「うん、わかったよ」

キッチンから朝食を持ってきた小池君は私たちの食卓にそれを並べ始めた。

「イヴⅡ、テレビ付けて」

『はいはい』

私は嫌な事実から目を逸らすように、テレビに目を向ける。

『みんなの偶像、^{アイドル}イヴⅡちゃんの今朝のホットニュースー!!』

そして、テレビからも自分の持ち物からする声が聞こえてくる。

『魔術実験区画より、ドクター・ティフォンのカメラが脱走してみた!!』

テレビの映像には、赤ん坊の声を逆再生させたような鳴き声の見覚えのある怪物が地上を闊歩していた。

『ふはははは、見るがいいこの私の新しい最高傑作を!!』

世界を滅ぼすまで止まることは無いだろう!! 誰か助けて!!」

その背中に必死に張り付いているティフォンが何か叫んでいた。

『そこまでよ、ドクター・ティフォン!!』

そんなヤバい怪物の前に立ちほだかったのは、私も見知った顔だった。

『魔法少女フェアリーサマー、参上!!』

ふりふりふわふわな格好をした夏芽だった。

その見た目だけは、出会った当初と変わらない。

視聴者の反応として、コメントも流れているが大体がこんな感じだった。

：はいはい、ティフォン博士の週刊世界の終わり

：でたよww 魔法少女フェアリーサマー(26歳)

：年齢の話は止めて差し上げろ(真顔)

：成長は止まってるらしいから……(震え声)

『幸いにして、彼女の活躍で被害は軽微に留まったみたいだね!!』

そして、映像は夏芽が黒焦げになった怪物の上で息を切らしている様子で締めくくられていた。

本当に幸いなのは件の怪物が本物に匹敵する性能を持っていなかったことであろう。

「夏芽ちゃんも毎週大変だなあ」

知り合いの今の姿に哀愁を感じてしまう小池だった。

『次のニュースだよー。じゃじゃーん!!』

笑顔のイヴⅡが次の話題に切り替えた。

『東京都民の皆さん!! 私たちはAⅠに支配されている!!』

皆さんも自覚しているでしょう!?! 彼女、イヴⅡの機能が徐々に私たちの生活に密接

にかかわり始めていることを!!

便利だからと言って、機械に全てを委ねても良いのでしょうか!?

機械に管理されて、それは人間と言えるのでしょうか!! 私たちは人間らしさを取り

戻すべきです!!』

スーツを着た中年の男が、壇上にて啓蒙活動をしている様子が映し出された。

『もー、酷いよね!! 私はみんなを支配なんてしてないよ!!』

あと私は機械でもAⅠでもありません、魔導知能です!! 世界初の、純正な科学魔術

の結晶なんですよ!!』

ぶんぶん、と画面の中のイヴⅡが頬を膨らませて怒っている。

：正直、プログラム通りにしか動けないAⅠより魔導知能の方が危険な気はする。

：でもイヴⅡの基本ソースは公開されてるし、かなり制約ガチガチだよ。

：昔の機械的な反応の方が萌えたんだけどなあ。

と、コメント欄は好き勝手言っている。

『あ、ついでにこの人は私の本体である“テイターニア”の破壊を目論む地下組織と接触を持ちやたらしくて、ちよっとお仕置きしちゃいました。執行部隊の皆さん、ご苦労様でしたー』

イヴⅡは変わらぬ笑顔のまま経過を報告した。

『これで私をAⅠと間違える馬鹿も減るでしょう』

笑顔のまま、そんな感情の混じらない淡々とした言葉が発せられる。

それは、イヴの遺した現代科学では再現不可能なオーバーテクノロジーのプライドなのだろうか。

：ひえッ

：イヴⅡちゃんは人間に奉仕するカワイイアイドルです。いいね？

：やっぱり機械的な対応をしてくれるパッチはよ!!

：平和には貢献しているから(目逸らし)

このコメント欄の反応が、便利さを理由に不都合を誤魔化す人間の性質が良く出ている。

『次は、ダンジョン内予報だよー』

そのニュースは私たちには関係ないので、私は朝食に集中することにした。

「今日は二人とも、遅くなるのかしら？」

「仕事の依頼次第です」

「僕はいつも通り帰れますよ」

師匠の問いに、私たちはいつも通りの返事をする。

毎日するやり取り。師匠は満足気に、そう、と頷いた。

「私は魔女会に顔を出す予定よ。」

「ご飯を作って待つてるから、早く帰ってきてね」

朝食を食べ終わると、私と小池君は今日も師匠に送り出される。

「じゃあ、行つてきます」

先に出社した小池君に続いて、私も仕事に向かう。

家から出ると、いつもの東京都の光景が目映る。

今や異能者の都市となった東京は十年前よりも背の高いビルなどが大分減っている。

だからか、十年前の震災で傾いた東京タワーを改修した「東京バベルタワー」が良く見える。

あれのおかげで、今東京には言語の壁が無いのだ。

仕事場へは徒歩で向かう。勤務地が徒歩で行ける距離と言うのは最高ではある。

私が住む場所は東京でも魔導士協会のお膝元、最重要地区の近くだ。

イヴを祭る神社に今日も観光客が入っているのがわかる。
それでいて近くには教会もあるのだから、日本人の宗教感覚はよくわからない。

§ § §

「おはよう」

職場に入ると、事務所には既に同僚たちが揃っていた。

「おはよう」

事務員の仕事を始めている千秋ちゃん。

「春美ちゃんおはよう」

仕専用の魔道具を弄っている真冬ちゃん。

「おはよー」

ソファアーに体を預け、くたくたの様子の夏芽ちゃん。

「おはようございませす、春美さん」

そして奥のデスクに座っている、所長の望海。

これが今、私が勤務している東京異能探偵事務所の面々だった。

何だかんだで、みんなとの付き合いは今も続いている。

「望海、今日の仕事は？」

「無いです。県外の仕事はありますけど、全部申請待ちですね」

それだけで、今日の午前中は殆ど暇だと言うことが確定してしまつた。

「イヴⅡ、申請の状況は？」

『はいはい、今のところほとんどが審査が30%前後つてところでしょうか』

「じゃあ仕事は明日以降になりそうね」

異能者が県外で異能を使う仕事をするのは今のところ審査が必要だ。

うちの事務所は仕事が早くて実績もあるけど、まだ異能が普及していない10年前の日本と同じ県外からの仕事ばかりなので、申請が滞つて予約待ちがいつも発生している。

「夏芽さんにCM出演の依頼とかもありますよ？」

「冗談じゃないわよ!!」

うんざりとした様子で、出会つた時から姿の変わらない友人が声を挙げる。

「私は見世物じゃないんだけど!!」

夏芽ちゃんが声を荒げると、望海も肩を竦めた。

「そう言うと思つて断つておきましたよ。ここは芸能事務所じゃないですしね。」

それにしても、見世物になるのはティフオン博士に目を付けられた時点で仕方がない

のでは?」

「それは毎回砲撃の巻き添えにして憂き晴らししてるからもう諦めてる」

夏芽ちゃんは何をしても無駄だと分かっているのか、その表情に諦念が混じっていた。

「よく毎回あのプロレスに付き合ってたあげてるわよね、夏芽」

「協会から一応謝礼出るしね。最初に暴走した怪物が出た時、何もしいなんてことはできなかったし」

「それで博士は味を占めてしまったみたいだけどね」

「あの野郎、保護対象のマスター位階じゃなかったら異次元の彼方にぶっ飛ばしてやるのに」

憐れんでいる千秋は恨めし気にしている夏芽を心配そうにしている。

それもそうだろう、夏芽ちゃんはあのステッキでの変身を繰り返すごとに、人間離れし始めている。

魔導士協会の専門家たちによると、妖精に近づいている、とのことだった。

これは妖精コティも予想外の副作用だったらしく、てへぺろ、と誤魔化しやがったのを覚えている。

「最近は大ダンジョンから取れるモンスターの死体とか利用してるみたいで、博士の作る

怪物の質も上がってきてるから、これ以上こっちもパワーアップとか勘弁んだけど」
「だそうだけど、どうなのコティちゃん」

真冬ちゃんは手を止めて、テーブルに置かれた端末に声を掛ける。

『ふふふ、夏芽の変身フォームはまだ三つ残している……』

答えたのはイヴⅡではなく、端末内に潜んでいる妖精コティだった。

『或いはもつと普段からステッキとのシンクロ率を上げれば、物質に依存してる生物なんてラクシヨーよ!!』

「私、これ以上人間辞めるつもりないんだけど」

『くすくす、どうせ今の“人間”の括りなんてしばらくすればどうでもよくなるのに』

夏芽の批難に対して、コティは怪しく笑うばかりだ。

『いずれこの世界の人間は寿命を克服する。』

そのうち肉体も捨てるようになる。私たちと同じステージに立つようになる。

果てしない退屈の地獄へと、みんなが辿り着く』

その言葉に、前にケンジさんのところであの悪魔たる準男爵が似たような事を言っていたのを思い出した。

——いずれこの世界も退屈になるのか。
と。

魔術の研究に倫理が問われない特区があるこの東京には、天才だが頭のイカれた科学者も世界中から集まってしまった。

その成果の一つが、今朝のティフオン博士の怪物である。

人間が任意で転生を行うことも、将来的には不可能ではなくなるとの見方があった。誰もが前世の記憶を保持して、生まれ変わる世界。

老いも若いも、男女の区別さえ好きにできるその世界は、果たして理想郷なのだろうか。

それは果たして、異能者はイヴⅡがインストールされた端末の保持が義務付けられてデイストピアに近づきつつあるこの東京とどれだけ違いがあるのだろうか。

『その後にも、私はみんなと遊びたいのにな!!』

コティは変わらないようで、かなり変わった。

それは夏芽ちゃんへの努力の賜物だが、その愛情表現の妖精らしさは変わらない。

「ここまで来たら、私もあんたに付き合ってもいいけどさ。」

了解も無く他のみんなを巻き込むのは止めるよ」

『わかってる、わかってる!!』

とは言え、多分だけコティも分かっているのだろう。

真冬ちゃんは彼女に師事して魔導技師の資格を取り、特区の出入りも許されている。

千秋ちゃんも以前ダンジョン災害の際に大怪我して、生身と違和感のない義肢を付けるのに魔力の扱いを学んだ。

もうこの事務所にも、普通の人間なんていない。

いや、普通の人間の定義なんて、百年後にはもう変わっているだろう。

そしてその時代を、私たちは自分の眼で見ることができるのだ。きつと。

私も、ドイツの隠れ里から移住してきた魔女会の二世世代の子供たちに師匠と呼ばれる立場だ。

コテイの言う人類が新しいステージに進む瞬間を、この目で見るのも悪くは無いのかもしれない。

結局、その日の仕事は新しい依頼の受付とその申請だけで終わってしまった。

暇なので魔導士協会の本部に出向くと、一般職員の人たちに「魔女さん」と呼ばれて思わずハツとなった。

私もいずれ師匠のように転生を経て、生まれ変わるのだろうか。

そんな将来に、不安が無いとも言えない。

「ただいま」

「お帰りなさい、春美」

だが少なくとも。

私はこの日常の先を、独りで過ぐすわけではなさそうだ。

葛藤について

「おーい、食料を持ってきたぞー」

化粧屋が両手に中身がいっぱいになったビニール袋を両手に警視庁に戻ると、庁内に詰めていた職員たちから歓声が上がった。

イヴの予言から三日経ったその頃、警視庁内は地獄だった。

三日前に仕事をしていた彼らは帰ることもできず、かといって外の有様を見て見ぬ振りもできず、公務員なのに徹夜が続いていた。

特に交通課は総動員で外の交通整理に尽力していた。

だが食料は無かった。

電気や水道に何かあったわけでもないが、これがどれだけ続くかもわからない。

しかもイヴの予言で、いつ地震が起こるかもわからない。

そんなストレスが掛かる状況を見かねた化粧屋が、彼らの為に食料の調達を買って出たのである。

「伊藤ちゃん、お疲れー」

「……ああ」

一通り食料を配り終わると、異能系の事務室にやってきた化粧屋が残りの食料を持ってやってきた。

異能系の職員たちも疲労が隠せない様子だった。

通常業務がほぼ停滞している状況で、何かできないかと外の見回りに出向いている警察官たちも多かった。

外には一刻も早く東京から逃げ出そうとして、立ち往生している人たちで溢れている。

それが何とか、少しずつだが解消され始めて来たのである。

それは警察官たちの献身があつての事だった。

化粧屋は見なかったが、自衛隊もこの混乱を治める為に出動しているらしい。

「思ったより、長引いているな」

テレビでニュースを見ているティフォンが呟いた。

ニュース番組では東京の混乱具合がヘリコプターに乗ったりポーターが詳しく実況していた。

しかしそんな光景は見飽きたのか、彼はリモコンでチャンネルを回している。

『——さん、今回の予言についてどう思いますか?』

彼がチャンネルを止めたのは、今回の一件について話している番組だった。

『東京の混乱は今、脇に置いておくとして、異能者の把握と管理は徹底すべきだと思います』

有識者らしいどこかの大学の教授が話を振られて意見を述べる。

『現状では、異能者には二種類存在します。

すなわち、魔術を扱える人間と異能に目覚めただけの人間です。

政府は前者からの呪術的な報復を恐れ、異能に対する法整備が遅れている有様です。

でも実際に問題行動を起こしているのは圧倒的に後者が多いのです』

『所謂、ホンモノの魔術を扱う人たちは、異能に目覚めた人々に比べても非常に少ないですよですからねー』

幾人の異能者を取材したと言うアナリストが教授に追従する。

『ええ、現状それらを一纏めに異能者と呼称していますが、それが事態をややくしくしている。』

先も流した三日前の宣言で自分たちを魔導士と言っていた彼女たちに対する恐れを、魔術を扱えない人たちの増長を招いている。

後者の異能者はその能力に依りますが拳銃を持っているのと変わらないでしょう』

『それは前者も変わらないのでは？』

国際社会が恐れているのは、魔術的な攻撃によって政治機能にダメージを受けたり、治安の悪化を招くことなんですから』

『その抑止力に、先の予言の映像を発信した組織がなるのでしょうか。』

彼女らが国際的な立ち位置を確保しようとしているのなら、彼女らが配ろうとしている異能者判別装置も大きな意味合いが出てくる』

他の有識者の反論に、教授は淡々と答える。

『つまり、異能は管理されるべきだど?』

『ええ、ですが勿論それは彼らを差別したり特別扱いしたりするようではダメでしょう。ただ私たちのように異能とは無縁の人間と、彼らは違うと言うことを認識してもらわないといけません。』

そこを間違えると、私たちと異能者の間には穏便な共存は出来なくなるかもしれない』

教授は司会者の言葉に、そのように締めくくった。

そして、ティフォンはテレビの電源が落とした。

「何もかも、イヴの迷惑通りか」

「ああ、気に食わないよな」

化粧屋も粗末なソファアにどかっと座ってそう言った。

「化粧屋、お前の家の方は大丈夫なのか？」

伊藤刑事が給湯室でカップ麺にお湯を注ぎながら言った。

「うちは東京と言つても端つこの方だからな、一時はすごかったが今は落ち着いてるよ」
「そうか、それはよかった」

それを聞いて、彼は少しホツとした。

「だが、状況はあまりよくないわな。」

ムカつくからつて、イヴに楯突いても意味は無いしな」

化粧屋は嘆息してそう言い放った。

「いったいどうなるんでしょうね、これから僕たち」

栄養ドリンクの瓶を下ろして、不安を隠せない妻鳥が呟く。

「なあ、あんた、昔イヴに挑んだんだらう？」

ティフォン、今回はどうするんだ？」

「化粧屋、分かりきっている問いを出すな。」

今更あれに戦いを挑んだところで、誰も味方に付くはずがないだろう」

「そうかい、少なくとも私は手伝つてやろうと思つてただけだな」

少なくとも自分から戦いを主導しない辺り、彼らが陰キャだと言うのが実感できてし

まう妻鳥だった。

「ここは警視庁だぞ、そんな物騒な話は止めろ」

胡乱な視線を投げかけながら、伊藤刑事が釘を刺す。

「いずれにせよ、イヴは偉業を成そうとしている」

その時、部屋に入ってくる者が居た。

「あ、魔術師さん」

それは仮面の魔術師だった。

「警察上層部に、先日の二次会でのイヴの計画について相談してきました」

「良いのか、そのことを話して？」

「イヴも想定済みでしょう。でなければ、千人以下の犠牲なんて実現しない」

目を見張る化粧屋に、魔術師は吐き捨てるように答えた。

「体よく警察を利用していただけであろう。」

それに、今の警察上層部はイヴの息が掛かっている」

ティフオンも彼に顔を向けてそう言った。

「本当に、あの女はこの東京で人為的に地震を起こすつもりなのか？」

口に出すだけで、伊藤刑事は震えを禁じ得なかった。

それを化粧屋たちから聞いた時、信じられなかったほどであったのに。

「どういふ魔術的手段かは知らないが、可能だからこうして行動を起こしてるんだろう」

よ」

どこか投げやりに、化粧屋が言った。

「信じられん、そんなこと、もはや神の所業じゃないか」

魔術によって地震を起こすなどと、人知を超えた行いに彼も眩暈がしそうだった。

「神の所業、か」

魔術師の言葉には、どこか万感が籠っていた。

「どうする、調停者の旦那。イヴを止めるなら付き合うぜ」

「今回は、先生」の時とは違う。分かっているでしょう」

だよな、と化粧屋もあっさり引き下がる。

「なにより、それは公平ではない。」

今、イヴに挑むのは私心に過ぎない」

自分でも何度も繰り返し返した回答なのか、魔術師の言葉は自分でも嫌気が差しているいるような声音だった。

「古代ケルトの戦士たちは、ゲッシュユを利用され望まぬ戦いにて命を落とすことが多かった。」

しかし私は、戦うことすらできなかつた。前世の祖先に顔向けできません」

「勇者殿……」

ティフォンは痛ましそうに彼を見ていることしかできなかった。

「これが安っぽいネット小説ならば、悪人は必ず倒され、主人公は功績を得るのである」

そして彼は、ポツリと言葉を漏らす。

「では、召喚術で異世界から勇者でも呼ぶか？」

この事態を円満に快刀乱麻を断つかの如く解決できるチート能力とはいかなるものだ？

仮に解決できたとして、この後我ら異能者はどうなる？

どうせせいづらが出るのは、自分たちの都合のいい国を創ることぐらいであろう。

そうして周辺諸国から反感を買い、争いの火種となるのだ。主人公が活躍する次の舞台の為にな。

—— 実に、実にくだらない!! 我らの世界は、日常は、そんな安っぽい主人公にすら救われる価値はないのだよ!!」

もはや我慢できないと言っても言わんばかりに、ティフォンは胸中を吐露した。

「空想の主人公ですら、イヴを超えられない!!」

こんな無様があるだろうか!! 我々はその女に未来を与えられ、施されるのだ!!

イヴ以外に誰もそれを出来なかった、それがたまたまなく悔しいのだ!!

何よりも、何もできない自分の無力が恨めしい!!」

彼の嘆きを、誰もが否定できなかった。

化粧屋も、魔術師も、己の無力を実感していた。

「どうせ、奴の作る世の中も、ろくなモノではないだろう」

そして諦念と共に彼にそう吐き捨てたのだ。

「この無力感、あの時を思い出すなあ。

そう思わないか、調停者の旦那」

「そう、だなあ」

今度は魔術師の仮面の奥から、深いため息が漏れた。

「“先生”のことは、本当に残念だった」

本当に惜しそうに、化粧屋は呟いた。

「なあ伊藤ちゃん、魔術つてのは窮めるとどういふことが出来るかわかるか？」

「さてな、地震を起こせるくらいだからな」

素人の伊藤刑事には想像もつかないことだった。

「俺らが生きていた時代、それはそれは優れた呪医が居てな。

当時でも世界最高の医者だったと思うぜ」

「お前が言うんだから相当だな」

彼も化粧屋の医療技術が卓越していることを知っている。

そんな彼女が世界最高と言うのだから、相当なのだろう。

「呪医つてのは、やっぱり魔術を使って病気を治したりするのかわ？」

「そう言うこともあつたらしいが、今の外科医と大して変わらないぜ。

そうだな……」

そこで化粧屋は悪戯を思いついたような表情になつて、彼に近づいた。

「な、なんだよ」

「それッ」

嫌な予感を覚えて後ずさる伊藤刑事に、遠慮なく手を突き出す化粧屋。

「うげッ」

すると信じられないことに、化粧屋の手が彼の肉体をすり抜けていた。

「霊媒手術つて言つてな、こうやって体に傷を付けずに体内の病巣を切除したりするんだ。

人体の影響も少ないし、これは現代の医術でも真似できないだろう？」

化粧屋が手を引っこ抜くと、居心地が悪そうに彼女に触れていた場所に手を当てる伊藤刑事に。

「まるで触れたい物にだけ触れる能力みたいですね」

まさにマンガみたいな現象に妻鳥も呆気にとられていた。

「まあ、優れた医者だったよ。そんな人でも、ペストはどうにもならなかった」

化粧屋の言葉に、魔術師もため息を漏らす。

「あの人はペストの治療方法を模索するうちに、自らもペストを患ってしまった。

死の間際、あの人は起死回生の手段と共に魔術の究極奥義を実行することにしたんだ」

「究極奥義ねえ」

それこそマンガみたいなネーミングだった。

だが化粧屋は真剣だった。

「俺の師匠から聞いたんだが、魔術を窮めると概念の最果てへと辿り着けるらしい」

「何だか抽象的な表現ですね」

「今で言うところの、アカシックレコードに触れられるみたいなことだろうな。」

そうして人智を超えた様々な奇跡が起こせるんだとか」

化粧屋も実感が湧かないのか、妻鳥に説明するもその態度は軽かった。

「何だか夢みたいな話ですね」

「そうだな、夢みたいな話だ。」

だが、あの人は実行した。そうやって、ペストをこの世から消し去ろうとしたらしい」
「だが、それは叶わなかった」

「ああ。あの人は失敗して、ペストの化身みたいになっちゃった」

化粧屋も魔術師も、肩を落とした。

「魔術の究極奥義なんて言うから、てつきり周囲を心象世界で塗りつぶしたりするものかと」

「ゲームのやりすぎだよそれは」

妻鳥の物言いに化粧屋も苦笑を浮かべる。

「でもそんな相手に、二人は挑んだんですよね」

「ああ、マジで勝てる気がしなかった」

嘆息しながら、彼女は当時は懐古していた。

「勇者殿の武勇伝か。是非とも聞いてみたいものだが」

「武勇伝なんてモノではありませんよ。結局は私も命を落としましたから」

ティフオンの興味を振り払うように、魔術師は否定の言葉を述べる。

「先生」には、未熟な頃に本当に世話になったもんだ。

俺の前世の両親は、ペストで亡くなつてな。一時期共同研究とかしてたんだが、あの人は俺を残して逝っちゃった。

そして無様にもその供養すら出来なかった」

「化粧屋……」

伊藤刑事が初めて聞く化粧屋の前世は過酷な人生であった。

それに比べると、今生の彼女は随分と恵まれていた。

「転生なんて経験すると、二度目の人生なんてものはヌルゲーで楽勝だなんて思うかもしれないけどな、実際はそんなもんじゃない。

人間つてのは、精神、肉体、魂によつて構成されているとされている。

これは密接な関係があつて、精神や魂が成熟していても肉体から影響を受けるんだ」
自らの過去を悔いるように化粧屋は虚空を見上げる。

「唐突に思い出す自分じゃない前世の記憶に混乱するし、異なる常識に戸惑つて、普通に考えたらやらないようなことさえやっちゃうもんだ」

伊藤刑事は、化粧屋が今生にて学校でトラブルを起こしたということを思い出していた。

「結局私は、現代社会には馴染めなかった。

体がガキつてだけで、俺は自分に振り回されちまったもんだ。

両親に恵まれてなかったら、俺はまっとうに生きてちやなかつただろうな」

化粧屋の言葉に、うんうん、とティフォンも頷いている。

なお、今も真つ当に生きているのだろうか、と言う疑問が妻鳥に浮かんだが、それを口に出すほど彼は愚かじやなかった。

「だから、異能を得てイキつてる連中の気持ちもわかるんだわ。

そういう連中が異能ゆえに世間に馴染めない気持ちもな」

彼女の言葉は、この場に居る異能者の面々には重い言葉だった。

「もしイヴが……」

やがて、魔術師が目を瞑つて厳かに口を開いた。

「人々に仇なす時は、ゲツシユも何も関係ない。

私はあの女を全霊を持つて、止めましょう」

「まあ、その時になつたら声かけてくれや。付き合うよ」

まるで居酒屋にでも行くような気軽さで、化粧屋は魔術師にそう言った。

「僭越ながら、その時は私も供をしよう。勇者殿」

「ありがとう」

ティフォンの助力の言葉に、彼も少しだけ頭を下げるのだった。

警視庁の慌ただしさは、まだまだ続きそうだった。

夏の終わりについて

「あれ……？」

冷たい感触に、小池は目を覚ました。

「ここは、どこだ？」

奇妙な感覚だった。

目を開けている筈なのに、何も見えない。

まるで、視界を奪われたかのような感覚だった。

体を動かそうとすると、ガチャガチャと金属音が鳴る。

両手は後ろで手錠のような何かで拘束されているようだった。

両足は金具の音はしないが、布のような何かで縛られている。

地面は金属のような冷たい感触で、どう考えても自分の部屋と言う感じではなかった。

状況をひとつずつ確認していくごとに、血の気が引いていくような感覚だった。

これはどう考えても、拉致監禁状態だった。

「俺、そもそもなんでこんな状況に陥っているんだ？」

こんな状況に陥る直前の記憶を探るが、まったく思い出せない。

最後の記憶は、スマホの着信音が鳴って画面を確認しようとしたところで途切れている。

いや、それすらもあやふやで、不確かだった。

そもそも、平凡な一般家庭の人間である自分を拉致監禁する心当たりが彼には無かったのだ。

奈落の底にいるような暗闇が彼の冷静の思考を奪っていく。

混乱の極みに陥っている彼に、ようやく光明が差した。

「——おはよう、小池君」

尤も、それはある種の絶望と表裏一体であった。

「え、その声って……」

「そう、私よ」

間違えるはずもない。小池の彼女である、魔女の声だった。

「あ、あなたが俺をここに連れて来たの？」

「当たり前」

くすくす、と鈴を転がしたような笑い声が近づいてくる。

「でもちよつと残念だわ。」

あなたは私が助けに来たとは思ってくれないのね」

「いやだつて、こんなことできるの俺の近くでじゃあなたくらいですし」
ひとまず、危害を加えてくるような相手ではないことに彼は安堵した。

「あの、これって何の冗談ですか？」

早く拘束を解いてほしいんですけれど……」

「それはダメよ」

「……ええ？」

彼女の即答に、小池は思わず絶句した。

「あのお、この悪ふざけはいつまで続くんですか？」

「ずっとよ」

「えッ、冗談ですよね？」

「冗談に聞こえる？」

今度は耳元で囁くように、彼女の声が聞こえた。

次に小池が思考したのは、この人ならそれをやれてしまう、だった。

人一人を拉致監禁してそれを問題にしないくらい、難しくも何ともないのだと。

それに思い当たって、彼の背筋はゾツとした。

「あッ、あの、俺、なにかあなたの気に障るようなことをしたんですか!？」

ここで相手に当たり散らさない辺り、彼は善良な人間だった。

そして、理由も無く彼女はこんなことをしないと断言することも理解していた。

「そうよ」

そして案の定、彼の言葉には肯定が帰ってきた。

「少し前、あなたは私の昔の話を聞いたわよね」

「え、はい、確かに教えてもらいましたけど……」

少々言葉のニュアンスにおかしさを感じながらも、小池は肯定した。

「あの話をしたのは、私じゃないの。」

私の前世からの知り合いで、私と同じ魔女だわ」

「えッ、嘘でしょう?」

「本当よ。私はその時、田舎で農作業の手伝いをしていたもの」

ここにきてようやく、なんで彼女がこんなことを仕出かしたのか、彼にも思い当たり始めた。

「彼女、面白がつてあなたにちよつかいをかけたのよ。」

まあ、それは良いわ。あの子にはお仕置きをしておいたもの。

でもなんで、あなたは私だと気づいてくれなかったの？」

それはあまりにも理不尽な、理屈の通じない糾弾だった。

「あなたは私の彼氏よね。」

それなりの付き合ひのはずなのに、どうして私じやないってわからなかったの？」

「そ、そう言えば、なんとなく思い返してみれば違和感が……」

小池の覚えた違和感は、確かだった。

だが、問題はこの場でそれを口にしても言い訳にしか聞こえないことだったが。

「だったらどうしてそれをすぐに指摘しなかったの？」

私の近くにいると言うことは、人を惑わすような怪異も寄せ付けることもある。

一歩間違えれば、あなたは帰ってこれなかったのかもしれないのよ？」

その言葉は彼を心配している、と言うだけには聞こえなかった。

いうなれば、焦燥感のような感情が多分に含まれていたのだ。

「私は、あなたが心配なのよ」

そしてどこか甘ったるいような、甘やかすような声音で。

「だからここで、一生私があなただを守ってあげる」

魔女が、堕落を誘う。

「……ッ、いやいやいや、そんな必要ありませんって!!」

その甘美な音色に、彼は一瞬心を奪われかけた。

数多の男を墮落させ、骨抜きにした魔性の言葉に彼は抗った。

「あのですね、これって拉致監禁ですよ!!」

ずっとこのままって言うのはあれですし、何より俺の家族も心配します!!

それにあなたも俺の為とか言って、犯罪をするなんてしてほしくありませんから!!」

彼はまともだった。面白みも無いほど普通だった。

言葉巧みに相手を翻弄して窮地を乗り越えるなんてまず無理で、単なる常識を必死に語るぐらいしかできなかつた。

「……………うーん、やっぱり?」

だから、彼女からそんな言葉が返ってきた時、彼は思わず「ヘッ?」と情けない声を出してしまった。

「どう考えても、こういうことをするのは普通じゃないわよね。」

やっぱりおかしいと思ったのよね」

彼女は彼女で、一人で何やら納得したように頷く気配がした。

「小池君、ほらこれを飲んで」

すると、彼の口元に冷たいガラスの感触が伝わって来た為、言われるがままに彼は口を開いた。

すぐに何らかの液体が口の中に流し込まれる。

「うげ、まずい」

まるで雑草を雑多に煮込んだような青臭さに顔を顰めた彼だったが、次第に視界がクリアになっていく。

何らかの薬品で彼は視力を奪われていたようだった。

「あの、なんでこんなことをしたんですか？」

小池は後ろに回って手錠を外し始めた彼女に問うた。

本日二度目の問い。だが、意味合いは違っていた。

なんでおかしいと分かかっていてこんなことをしたのだ、と皆まで言わずともそのことは彼女に伝わっていた。

「ほら、この間の海であなたに悪いことしちゃったじゃない」

「今まさに新たな悪いことをされちゃっているんですけど」

「それは悪かったわ。」

だから、真冬に聞いてみたのよ。最近、どういう女性が喜ばれるのかって」

『最近のトレンドと言えば、 “ヤンデレ” ですよ!!』

「ここここ!! ハーメルンの界限だと元々ヤンデレは根強い人気があったんですけど、ここ最近は特に豊作でしてね!!」

その中でも主人公の行動が意図せずドツボに嵌って連鎖的にヤンデレヒロインの好感度を爆上げするタイプが流行ってますね!!」

「やっぱりヤンデレが嫌いな人はここここ!! ハーメルン。あくまで個人の感想ですに居ないんですね!!』」

「真冬さああああん!!!」

その致命的な人選ミスに、小池は嘆きの声を上げた。

「もうちよつと、もうちよつと、三次元についての知識が充実している人はいなかったんですか……」

「ん？ よくわからないけど、真冬は一般的に“リア充”に分類されるタイプじゃないの？」

「そうだった……そうだった!!」

ここで根暗な自分と、どちらかと言うと陰キャとは言い難い真冬との違いに気づいてしまい彼は愕然としてしまった。

友人関係を迷彩と言いつける彼と、気の合う親友同士でいつも一緒に居る真冬とは根本的に両者は異なっていたのである。

「どうしたの、小池君？」

心にダメージを追ってしまった少年に、不思議そうに魔女は声を掛けた。

「どうしておかしいと分かったのにこんなこと実行しちゃったんですか……」

膝を抱えて傷心中の彼はぼそぼそとそんなことを口にした。

「いえ、だって、私ってもっと倒錯的な趣味の人たちの記憶があるから……」

ここにきて、彼女も遠い目になった。

ヤンデレも大分倒錯しているが、このくらいはまだ普通の範疇に入るくらいの倒錯的趣味とは何だろうか。小池は深く考えないようにした。

「お詫びと言っては何だけど、小池君がしてほしいこと、何でもしてあげる」
軽い口調で発せられたその言葉に、小池は胡乱な視線を上げた。

「何でもしてあげる、ってよく使い古された表現ですけど、一生のお願い並みに信用ならないですよ」

「あら、疑うのかしら？ 私にできることなら本当になんでもしてあげるわよ」
例えば、と言って彼女は懐から小瓶を取り出した。

中身の琥珀色の液体が、怪しく揺らめいている。

「これ、以前に妖精から作り方を教わった惚れ薬なんだけど、これを飲んで最初に見た者を愛するようになるわ」

きゅっ、とその小瓶の蓋を彼女は開けた。

「あなたはこれを私に飲んで、と言っても良いし、別の誰かに飲ませてでも良い」
どうする、と彼女は微笑みながら少年に問いかける。

「とりあえず、それが本物かどうかはともかく、しまってください」

小池は常識的な対応をした。

せつかく拘束が解けたので、開けられたその小瓶の蓋を自分で閉めたのである。
「そんなことよりも、ここはどこなんですか？」

そして問題を先送りにして有耶無耶にする。日本人の得意技だった。
彼は周囲を見渡すが、見知らない場所だった。

薄暗いところで、よくわからない荷物が重なっている。

「ここは私が借りている貸し倉庫よ。あまり使わない素材とか道具とか、ここに保管しているの」

「ああ、道理で」

得体の知れない物ばかりだ、とまで彼は口にしなかった。

「ところで、そろそろ思い出したかしら」

彼女は貸し倉庫の扉を横に開け、太陽のまぶしさに彼は目を細める。

「えーと、何がですか？」

「今日の予定よ」

ああ、とそれを聞いて不鮮明だった彼の記憶が霧が晴れるように思い出されていく。

「夏祭りに一緒に行くんですたよね」

「そうよ。せつかくだから浴衣も借りるつもりなの」

この人なら浴衣も似合うだろうな、と思いつつ彼は一緒に貸し倉庫を出た。

八月も、そろそろ終わろうとしていた。

§ § §

世間一般における地元のお祭りの認識は何であろうか？

少なくとも夏芽にとつて、毎年八月の終わりに行われる地元の祭りとは、友達と屋台を回つて食べ歩き、最後に花火を見て帰るだけのモノだった。

決してお祭りとして有名なわけではなく、その由来さえも彼女は興味を抱かなかつた。

真冬辺りに聞けば、彼女は知ってるかもしれないが。

「憂鬱だなあ」

そして八月の終わりと言うことは、夏休みの終わりでもある。

彼女にとつて地元の夏祭りとは、楽しみにしている行事であると共に学校の始まりを意味する複雑な心境になる代物でもあった。

よく似た事例として、週末の日曜日の夕方にやっているご長寿アニメを見て、月曜日の到来が陰鬱になる症候群に似ていた。

「学校、やだなあ」

お祭りの楽しさに、嘘偽りはない。

それはそれとして勉強は嫌いだった。

夏芽はいつもの友人たちと共に、地元の祭りにやってきていた。

手分けして屋台の食べ物を買って行列に身を投じ、彼女だけが集合場所に一足先にたどり着いてしまった。

そして、物思いに耽っていると、ふと近くに始まる学校の授業の事が頭に過ってしまっただけである。

「ふふッ、ここにいる連中のほとんどが、今自分がなんの行事に参加しているのか理解していないんですよ？」

人間の無関心さには呆れるわね!!」

「チョコバナナにかじりつきながらそんなこと言ってもねえ」

夏芽のチョコバナナを持つ手を足場にして妖精コティが小さな口でそれを食べていた。

気分はハムスターに餌を与える飼主だった。

「妖精にも、お祭りはあるの？」

「有るわよ!!」 むしろお祭りぐらいいしか楽しみが無いもの!!」

そうなんだ、と夏芽は反射的に相槌を打った。

「せっかくだから、私の歌と踊りを披露してあげようかしら？」

お祭りの日は特別だから、あっちから仲間も来れるのよ!!」

「やめて、多分お祭りが台無しになる未来しかみえないから」

夏芽はやんわりとコティを諫めた。

「ふうんだ、私たち流のお祭りの楽しみ方が分からないなんてかわいそうね!!」

そう言うのと、コティはそっぽを向いてしまった。

「……」

それを聞いて、夏芽に沸いた感情は、憐憫だった。

「あんたも、人間のお祭りの楽しみ方が分かってないじゃない」

「くすくす、それって安っぽい食べ物を買って行くことなの？」

「違うよ」

いつものように小馬鹿にするように笑うコティに、夏芽は真顔で否定した。

「お祭りつてのは楽しい時間をみんなで共有するためにあるんじゃないの？」

コティたちのお祭りは違うの？」

「……」

珍しく、コティは彼女の言葉に押し黙った。

「私たちはコティみたいに自由じゃないさ。」

私も来週からは学校が始まって勉強とかうんざりだし。

でもだから、この代わり映えしない毎年のお祭りでも思い出しようつてみんなが集まろうつて思えるんだ。

別にこのお祭りが特別つてわけじゃないよ」

花火も毎年見てるし何が何でも見たいわけじゃないし、と夏芽は苦笑する。

「わかんない。同じことをただ茫然と繰り返して、何になるの？」

「うーん、コティたちの価値観じゃ、そういうのに意味を感じられないつてのはわかるよ。」

多分それは真つ当な意見だと思うし」

妖精の価値観は、あまり頭のいいとは言えない彼女には理解しがたかった。

先日、夏芽はあの仮面の魔術師と連絡先を交換して、いくつかの妖精との付き合い方についてアドバイスを受けた。

その中で最も重要だと言われたのが、こんなことだった。

『決して、彼らの信用を裏切るような嘘を吐いてはいけません。

それをすれば彼らは最も残酷な方法であなたを殺すでしょう。

———連中は嘘吐きを、決して赦さない』

「逆にさ、コティにとって大事な事つてなに？」

思えば、彼女はコテイの嫌な事ばかりしか知らなかった。

そんな単純な事さえも夏芽は彼女に尋ねたことは無かった。

「楽しいこと!! 仲間と一緒に遊ぶこと!!」

彼女の好きなことは実にシンプルだった。

シンプルすぎて、夏芽にもそれはよく理解できた。

「最近さ、私もあんたを連れまわすようになったじゃん？」

「そりゃあ一人にしたら何するかわからないってのもあるけど、やっぱり家の中に一人きりッて寂しいじゃない」

少なくとも、コテイはあの山に一人きりで数百年を過ごしていた。

たまに山を下りて友達を作っていたようだが、それも長くは続かなかったようだ。

妖精を視認できるのは感受性の高い子供か、特別な資質の人間や魔術を用いなければならぬ。

そして子供と言うのは、幼い頃のことなど忘れてしまうものだ。

「こうして今日もお祭りにあんたを連れて来たのも、この面白みの無いお祭りをみんなで共有して楽しみたかったからだし。」

妖精はその瞬間瞬間を楽しく生きているのが良いのかもしれないけどさ、人間はちよつと昔の事を振り返って、あの時あんなことがあつたなあんな馬鹿話したよな、っ

て笑い合うもんなんだ」

「ふうん、そういうものなの？」

コテイにはいまいちピンとこない話らしかった。

「でも一緒に遊びたいなら、そう言えばいいのに!!」

そして、彼女はくすくすと妖しく笑った。

「夏芽、やっぱり私たちはずっと『友達』だよね!!」

「うん、そうだよ」

妖精に気に入られることは、決して人間にとって幸せな事ではない。

それでも夏芽は、彼女のその無邪気さに抗えなかった。

的外れなことかもしれないが、一瞬一瞬を楽しみながら生きなければこの人間ばかり

の世界では退屈に耐えられないのかもしれないと夏芽は感じたのだ。

妖精にとって退屈とは、それほどまでに耐え難いのもかもしれない、と。

「少なくとも、私は死ぬまで友達でいてあげるよ」

そう言った夏芽の言葉に、コテイの瞳が揺れたのは錯覚だろうか。

「うふふ、大好きだよ、夏芽!!」

少なくとも、この信頼に背くような人でなしにはなりたくない、と夏芽は思った。

『人位遡行』

十二月某日。

イヴは人気の無くなった東京を見下ろしていた。

普段は人々が通行している道路は無人で、既に多くの建物が放棄されていた。

東京都知事主導による東京都民避難計画は順調とは言い難かったが、おおよそ計画通り進んだ。

勿論、この町から逃れられない人間も多かった。

都政による立ち退き命令とも言える避難活動は多くの反対運動を起こしたし、都知事は非難的になった。

「本当に、やるんですね。イヴさん」

その都知事が、彼女と一緒に東京タワーの展望室から見納めになる光景を見下ろしていた。

「今この東京には、度重なる避難警告に従わずにおよそ二十万人の人間が残留していると報告がありました。」

その中で、どれだけ犠牲者が出るか……」

「今更他人事のように言わないことね。

あなたも賛同したことでしょう。それにお互い最善を尽くしたはずだわ」

違うかしら、と彼女の視線を受け彼は複雑そうに口を閉じた。

東京都の人口は日本の人口の一割弱。一千万人を軽く超える。

それを二万人まで退避させたのだから、彼は十分に都知事としての手腕を發揮したと言えるだろう。

無論、それを当人を含め他者が納得するかどうかは別だが。

「貴方の名前は歴史に残る、この私と共に。世界に名を刻みましょう」

罪悪感に苦しんでいる彼の肩を叩き、彼女は展望室の内側に歩みを進めた。

そこには、地震の被害を軽減する為の儀式を行う、と言う名目で集まった転生者たちが連日泊まり込んで騒いでいた。

各々酒を飲んだり、論議を交わしたり、様々だった。

そんな連中を尻目に、イヴは独りあの南極で見つけた巨大な船からサルベージした映像ログを取り出す。

今までに何度も見返したそれを、もう一度見直す。

§ § §

移民船『メアリー号』の映像ログ。

「私は、かねてより開発されていた開拓移民船『メアリー号』の船長のメアリーよ」
海の上を行く船の船長も必ず航海日誌を残すという。

故に、次元の海を進むあの遺跡船もまた、その船長はログを残していた。

「この船は私が建造を主導し、竣工と同時に新たな開拓地を求めて旅立つことになる。
私は私に与えられた使命を果たすために、数多の種族の同胞と共に彼らの指導者としてこの移民船を任された。

この旅路に、我が主上の加護があらんことを」

映像ではイヴと全く同じ顔の、同じ声の人間が自信に満ち溢れた笑みを浮かべていた。

画面の彼我を超え、両者は性格まで瓜二つだった。

航行七日目。

「次元間移動は順調である。

我々人類が生活できる世界を発見し、開拓し、そこに原住民が居れば彼らに文明の光を与え、世界そのものを発展させる。

これこそが私たちの目的。まだ見ぬ同胞たちと手を取り合うことを我が主上はお望みである。

その榮譽に打ち震える。早く、分析装置の結果を把握したいものね」

航行十一日目。

「いよいよ次元空間の分析が終わり、我々が住める条件を満たした世界を見つけた。

大気の成分、重力、危険生物の有無、いずれも問題なし。

我々は新たな故郷を見つけたのかもしれない。今日より進路を取る」

航行十四日目。

「予想外のトラブルが発生した。

次元間の魔力流に遭遇し、本来の目的である世界よりやや座標がずれた位置へ流されてしまった。

その為、目的地の条件の異なる世界へと漂着してしまった。

同一軸の並行世界であるため、生存には問題が無い為、調査隊を派遣し周囲の調査を試みる」

航行十五日目。

「なんてことなの。この世界の魔力濃度はほぼゼロ……!!」

私たちの常識では万物の生命の根幹を成すのは魔力だということに!!

この惑星の生物は単なる食物連鎖による迂遠な進化を遅々として繰り返して誕生したとでもいうの!?

……私たちは今更ながら、自分たちの常識なんてものが異世界へ漂着してしまったことを実感していた」

航行十六日目。

「このメアリー号は周囲の魔力を吸収し、貯蔵することで魔力エネルギーを活用する仕組みだ。

故に我々はこの惑星に取り残された。元の世界に助けを求めることも出来ない。

メアリー号内部だけで千年単位の居住が可能とは言え、この船は我々にとってあまりにも狭すぎる。

だが、この船の外は私たちにとって文明の恩恵を受けられない地獄なのだ。

我が主上、我が神よ、なぜこのような試練を私に……」

航行三十日目。

「多くの船員が、この船を去った。

彼らは生粋の開拓者であることを誇りに思う反面、私の方針に反対した彼らを恨めしく思う。

私は何よりも、船員たちの命を守らなければならないのだ」

航行百七十七日目。

「メアリー号船内にて生成不可能なくつかの貴重な物質が底をついた。

我々は生存だけならばこの船の中にてずっと可能だ。

だが、それは生きているだけだ。船員たちは不満を募らせている。

船外では魔法の心得のある船員たちが原住民相手に好き勝手振舞っている。

本来なら法によって許されないことだが、我々はそれを裁く余裕もない」

航行千三百二十五日目。

「ついに恐れていたことが起こってしまった。

船内の環境維持装置のメインシステムのメンテナンスで、互換不可能な部品の素材が

尽きた。

我々は選択を迫られた。

このまま元の世界のような生活をこのまま続けるか、その全てを捨てて外の世界で生

きるか。

……我が主上よ、どうすればいいのですか。教えてください」

航行千三百二十七日目。

「……我々は、『メアリー号』を放棄することを決定した。

この船は最低限の設備維持と病人の保管だけを行い、船員は私を含む全員が退避する

こととなった。

外では魔力で動く装置は全てガラクタ同然。

この世界にて、魔力は我らの体内にて生成されるだけとなった。

このような地獄のような新天地に放り込むことが、我が神のご意思だということのか」

航行××日目。

「……同胞たちの争いが、絶えない。

私たちは日々、魔力を扱う能力が衰えていくのを実感する。

この世界の法則が、我々の体内にある魔力を拒絶しているのだ。

私たちは水の無い砂漠へと放り込まれたのも同然だった。

なんで、なんでなのよ……。私はこの移民を成功させるはずだったのに」

最初のログからは、想像もできないほど無残にすり切れたメアリー船長が、船内のカメラにもたれ掛かって嘆き苦しんでいた。

「私は、私はこんなことを願っていない。

どうして、どうして……。私は貴方様と同じ才能、同じ知性、同じ姿と同じ名前を貴女様に頂いたのに。

私は貴方様のようにみんなに称えられ、人々に貢献して、みんなに惜しまれて死にたいだけだったのに。

何で何もかもが上手くいかないのよ。何で誰も私に付いて来ないのよ」

だん、だん、とカメラの正面に突っ伏したメアリー船長が、いら立ちを示すようにモーターを叩く。

「どうして、私じゃなくて、私の妹ばかりちやほやするのよ。

あんなグズでどうしようもない、愛想がいいだけのくせに……」

もはや記録の為でなく、泣き言だけしかログに残されていなかった。

「……このままじゃ、私たちは何も残さず消えるだけ。」

この世界の土となって消えるだけ。こうなったら、最後の手段を行うしかない。

我が主上によつて禁じられた、あの禁術を実行するしかない。

……ちようどそこに、生贄も十分にあることだし」

そして顔を上げたメアリー船長は、半分正気を失っていた。

「我が主上に並び立つかの御方よ、我が傲慢、我が邪悪、我が偉業を見るがいい!!」

私は己のエゴによつてこの世界に魔力を齎し、我が神の御座へと至るのだ!!」

……それ以降の記録は無い。

§ § §

「儀式の準備が整ったわ」

映像ログを見終え、顔を上げると召喚士がイヴの前に立っていた。

他の面々も、もう既に移動していた。

「……また見ていたの？」

「自分のルーツだもの。」

とは言え、私のオリジナルがこんなのだと呆れちゃうけど」

「……………寂しくなりますね」

「どうして？」

「私はずっと、あなたの側に居るわ」

イヴは彼女の脇を抜けて、外へと出向く。

「本当に、寂しくなる」

独り、展望室に召喚士のおつぶやきが消えた。

東京タワーの展望室の更の上、特別展望室を貸し切って儀式は始まった。

東京都はこの日、首都直下型地震が訪れる。

その要因は、至ってシンプルだ。

この日の為に集まった数十人の転生者たちが、特別展望室を中心にして朗々と呪文を唱える。

その中心に居るのは、召喚士だ。

「エロイムエツサイム、我は求め訴えたり」

唱えるのは、一般人にも有名な呪文。

「我が名は東雲イデア、地の底より我が声、我が願い、我が祈りを聞き届けたまえ」

彼女は両手に嵌めた十の黄金の指輪を掲げ、魔術の行使を周囲の者たちが補佐をす
る。

「80の軍団を率いる王ベリアルよ、その右腕を一時、我が手に貸し与えたまえ」

特別展望室にびっしりと書き込まれた魔法陣が、淡く輝く。

虚空が歪み、その中心に孔が穿たれる。

その際果てから、何か形容のし難い途轍もない力が迫って来くる!!

「ああ……」

その光景を見守っていた都知事が、呻いた。

次の瞬間、大地が震えた。

彼らが取った方法は実にシンプルだった。

大悪魔の腕を召喚して、直接地殻に刺激を与えることだった。

たったそれだけのきっかけで、大地が鳴動する。

その中心だった東京タワーは傾き、高層ビルが倒壊する。

時間にして、揺れたのは30秒にも満たない。

だが、たったそれだけで傾いた東京タワーから見える光景は見るも無残の一言だった。

道路はひび割れ、建物は崩壊し、映画のジオラマのように文明が崩壊した光景が広がっていた。

「これで、終わったのですね」

カタリナが半壊した都内を見下ろしそう呟いた。

「いいえこれから、新しい時代が始まるのよ」

そんな彼女に、黒衣の魔女が語り掛けた。

「私の家、なくなっちまったかな」

化粧屋が哀愁に満ちた声を漏らす。

「これでよかった。そう思いたいですね」

仮面の魔術師が、眼下の犠牲を慮る。

時代の節目、各々がその瞬間に立ち会ったことに感慨を抱いていると。

パチパチパチ、と拍手が鳴り響いた。

「みんな、ご苦勞様」

魔術行使を統括していたイヴは、まず全員を勞つた。

そして。

「では、儀式の第二段階へと進めましょう」

本当の彼女の計画が始まろうとしていた。

§ § §

「第二段階つて、どういうことだよ？」

真つ先に、化粧屋が問うた。

「ここまでは実益、ここから先は私の使命を果たす為」

「意味が分からないのですが」

「聞いたことぐらいあるでしょう、この世界に魔術を齎した神々の伝承を」

彼女は仮面の魔術師の声に、笑みを浮かべて答えた。

「私たちは偉業を成して、そして眼下には供物となる死者の魂が居る。

……全ての条件は整った」

イヴは全てを計算しつくしていた。

全てはこの瞬間の為だった。

「私は、——神の御座へと至るわ」

彼女は傾いた展望室のガラスへと歩んでいく。

「おい!! 待てよ!!」

彼女を引き留めようとする化粧屋の前に、それを遮るように前に立ちはだかる者が居た。

「あなたは、預言者」

「やあ」

無機質な少年が、彼らの前に突如として現れた。

「ついにこの時が来たのですね」

「ああ、そうだよ」

輪廻の門の教祖が、万感を胸に目を閉じる。

「いい加減、正体を現したら?」

仮面の魔術師の肩にずっと座っていた妖精レプが吐き捨てるようにそう言った。

「そうだね、彼女が何をしようとしているか、説明する必要もあるだろうし」

そう言つて、預言者は頷いた。

そしてその場にいる面々は目を見張つた。

予言者の背から、まるで両手を広げるかのように神秘的で幾学的な模様が広がつた。

それは、翼と言うには虫の翅に近かつた。

だが、その頭上にはまぎれも無い光エンジェル・ハイロウのオーラ。

「天使様……」

カタリナが膝を折つて、天使の降臨という奇跡に涙した。

そう、この少年にも少女にも見える彼は、そもそもどちらでもなかつたのだ。

「でもその前に、一万年の成果の結実を見ようか」

そして、彼は肩越しに後ろを見やった。

天使に守られ、世界が変わろうとしていた。

……

……

.....

「人は初め、知恵を知らなかった。

知恵とは穢れであり、知恵を身に着ければ付けるほど、無垢とは程遠くなる」
イヴは膝を突いて、身に纏っていた衣服を脱いだ。

「人は禁断の果実を口にした時、自身が服を着ていないことを恥じた。

衣服とは技術の象徴であり、穢れであった。

そして人は神に罰として、原罪を与えられた」

そもそもヒトではない、原罪のないイヴが原初の罪を語る。

「ならば、人が最も神に近い状態とは、白痴の獣である。

——故に私は、この知恵を神に返しませう」

故に、*“人位遡行”*。

産まれたままの姿のイヴは空を仰いで、両手を広げた。

転生者たちには、常人には知覚できない何かがいヴの中から消えていくのを感じていた。

そして、そのままぐったりと力が抜けたかのように床に倒れた。

「さようなら、私の親友」

召喚士は二度と動かなくなつた抜け殻を抱き起し、友に別れを告げた。

「ああ、ようやくまた会えた。私のマスター」

イヴについて

「まず、事の発端について語ろうか」

無機質な天使は、イヴの抜け殻を掻き抱く召喚士に一瞥し、その場の全員に語り出した。

「今より、この世界の時間の単位で一万年前に遡る。

この世界に移民の為に異世界の住人がやって来た。

そう、君たちの祖先であり、魔術という文化を齎した始祖たちだ」

天使はスツと腕を振るう。

すると、特別展望室から見える景色が宇宙色へと変化した。

その虚無の狭間を潜行する、卵型の船が原始の地球へと舞い降りる光景が外に映し出される。

「彼らは、とある使命を我が主上、ボクが仕える女神によって与えられていた。

この星を、この地球に文明を根付かせ発展させる、と言う使命を」

だが、と天使は首を振った。

「ハッキリ言つて、これは失敗するはずの無い事業だった。

なぜならば、我が主上の偉大なる権能は、文明を与えること”。

失敗すればそれは我が主上の沽券に係わる。

身も蓋も無い言い方をするなら、ボクのような存在は万が一にも事業が失敗しないように監視する為に派遣される」

しかし彼の背後に映る光景は、魔法使い同士に殺し合いだった。

当時の地球の原住民を率いていた、一対一だったり様々だが。

「どう見ても、これで行儀よく勉強を教えているように見えないが」

食い入るようにその光景を見ている化粧屋が皮肉気にそう呟いた。

「この移民団の船長は、我が主上たる至高の女神に願った。

貴女のような偉大なる存在になりたい、と。不相応にも。

——これがすべての始まりだった」

天使は目を瞑り、溜息を吐いた。

彼の背後の光景が映し出すのは、一人の女性が漠然とした巨大すぎる何かに祈りを捧げる宗教画のような光景が繰り返り広げられていた。

「これを我が主上は、自分のような至高の神に成りたい、と解釈なされた」

その言葉に、これを聞いた面々は明らかに両者の食い違いを感じた。

プツと妖精が嘖き出す声が響いた。

「だから我が主上は、彼女に与えたのだ。

かつて人間だった自分の姿、自分の才覚、自分の知性、自分の名前を。

そして、移民の責任者としての任を与えた。

だがここで、我が主上はそんな簡単な仕事を成功させる程度で、自分と同じ領域にたどり着けるわけがないと判断なされた」

ここにきて、一同は嫌な予感を感じていた。

そう、大抵の場合、女神という連中はろくなことをしないと断言することを。

「故に、我が主上は彼女に試練を与えた。

ボクは我が主命により、彼女に数々の挫折と失敗を授けた」

彼が横目で見る先には、メアリー船長の必死の奔走が映し出される。

やることなすこと空回りし、心労ですり切れる彼女の姿が。

「だが、その甲斐あつてか彼女は魔導の秘奥を試み、この世界には存在しないはずの魔力を齎すという偉業を成した」

「魔術の秘奥……まさか!!」

「君にも覚えがあるだろう？」

魔術を窮め、魂の位階を極限まで高めた者にのみ許される、究極の魔術。

そう、——世界法則の改変だ」

仮面の魔術師はその事実に呻いた。

彼は知っている。その秘奥を以ってペストそのものになってしまった哀れな成れの果てを。

「君たちには神になれるとか、天国に行けるとか、アカシックレコードに至れるとか伝わっているそれだよ。

そうして、この世界にはたった一人のエゴによって都合の良いように魔力が産まれるようになった。

だが、それだけだった。一度の秘奥によって改変できる事象は一つだけ。

その偉業だけで彼女は満足できなかった。

だから彼女は自己増殖を行い、現世に分身を残していた。

彼女らは我が主上の御業を再現すべく、接ぎ木のようにこの世界の改変を密かに続けて行った。

その最新にして最高傑作の分体が、イヴだった」

そして、彼女は己の使命を果たした。

自らを犠牲にして、この世界に革新を齎したのだ。

「……ちよつと待つてほしい、天使殿。

では、イヴはいったいどのような改変をしたのだ!？」

その事実を聞いて、ティフオンが青ざめる。

どう考えてもイヴがまともな法則の改変をするとは彼は思えなかったのだ。

「安心するといい。言っただろう?」

イヴは最高傑作だと。彼女は本当に特別な個体だった」

だがその不安を払しょくするように、天使は微笑む動作をした。

「ひとつ、真理を語ろう。」

例えば、君たちの魂。並行世界や全く別の異世界であろうと、探してみれば完全に同一の魂と言うのを見つけることが出来る。

そして我が主上は、人間にして人間たる人間の為の女神。

もうこれ以上は言わなくても分かるだろう?」

ここにいる面々は、全く話についていけない東京都知事を除いて、誰もが魔術に精通している。

だから、理解してしまった。イヴの行った、あまりにも大掛かりなこの世界の改変を。「なるほど、イヴは異世界の女神の完全な同位体だったのね」

納得したように黒衣の魔女が関心のあまり溜息を吐いた。

この世界に魔力を齎したイヴ達の始祖は、唯一願った神と同じではないものがあつ

た。

それが、魂だった。魔術に精通した者たちが、才能の根源と考えるそれだ。

「途方もない類感呪術だな。」

イヴ達は、異世界の女神と同じ魂を引き当てるくじ引きをずっとしていたのか」

儀式に参加していた陰陽師が引きつった笑みを浮かべてそう言った。

「そして彼女は、我が神と同じように神域へたどり着いた。」

これにて漸く、我が主上に願った彼女の願いが完遂されたのだ。

これで一万年もの計画の遅延も清算できるといふものだ」

まさに、一万年越しの大願成就だった。

メアリー船長の願いは、イヴによって果たされたのだ。

「——人類よ、祝福しよう。」

我が主上と完全に同一となった彼女によって、この世界の人類繁栄は約束された。

イヴ様はこの世界の守護者となり、人類だけを最厚し、人類だけを優遇し、人類だけを発展させるシステムそのものになった。

君たちが精神的安寧の為に縋る神とは違う。實在し、祈り願えば対価と引き換えに恩寵を齎し祝福する、人類の「文明」そのものになったのだ」

天使が翹を羽ばたかせる。

のです。

瞬間的に死者が大量発生することにより、彼岸との距離が縮まる。

どのみち被害が発生するなら、それを利用する手は無いと」

「どこまでも人でなしだったな、こいつ」

「ああ、本当にな」

化粧屋とティフォンが複雑そうな表情でぼやいた。

二人は、いや二人以外の大勢が彼女との長年の知己との永遠の旅立ちを、言葉で表現できないでいた。

「まさか、あなたがヘカテー様みたいになつてしまうなんてね」

だが黒衣の魔女が彼女の髪を撫でる。

その表情は慈愛に満ちていた。

「利用されたこと、それ自体に不満はないが……」

「あの女が自ら魔術の法則のそのものになったのあれば、それ自体は喜ばしいこと」

「だが例の話はどうなるのだ？」

そう、彼女は自分たちの盟主となるはずだった。

その為の根回しはとつくに終わっており、組織体制もある程度協議し終えている。

彼女はその全てを放り出して、神の領域へ旅立ったのである。

「それについては、イヴは後釜を用意しています。」

私個人としては少々不安ですが、そのうち発表があるでしょう」

イヴの盟友として、召喚士はそうのように答えた。

一先ず面々はそれで一応の納得をした。

「もう一つ、問題があります」

カタリナが前に出て、更なる問題を提起した。

「イヴの遺骸を、いえ、この場合は聖骸と言うべきでしょうか」

その言い方で、この場の面々は事態を認識した。

「この最新の聖遺物の扱いを、どのようにするべきでか決めるべきでしょう」

カタリナはイヴの抜け殻を見下ろしてそう皆に告げる。

「ふふ、さしずめこのローブは聖骸布になるのかしら」

召喚士は思わず低く笑ってしまった。

「この私が、聖ヴェロニカのように神の子を氣遣っただけで聖人になるのかしら」

笑えない冗談だった。

ならばこの場に居る全員は天使の降臨を目の当たりにし、神の化身が天上に帰るのを

見届けたことになる。

この場の面々は、もう既に奇跡の二つや三つを目の当たりにしているのだから。

「我が教団で、御神体として安置すべきでは？」

予言者を崇めていた教団の教祖が申し出る。

「いえ、万が一にもこの御神体を辱められることが有つてはならないでしょう。

この国の作法に則り、火葬にて葬るべきでは」

処刑人が周囲に睨みを利かせ、そのように反論した。

「まあ、アウトローとして意見を言わせてもらうと、靈験あらたかな逸品つてのはどんな手を使つてでも欲しがる連中は幾らでも出てくるぞ。

不心得者がこの場の面々以外に確実に出てくるだろうな」

海賊少女が肩を竦めてそう言った。

「そんな世俗の価値などどうでも良い。

この遺骸は、もうすでにそれだけで途方もない触媒となろう」

眉を顰めている吸血鬼が、皆が扱いに困っている抜け殻に歩み寄る。

「例えばこの遺髪だけだろうとも——」

彼が身を以て、その遺骸の価値を示した。

吸血鬼たる彼がイヴの髪に触れた瞬間、その指先が発火したのである。

「……なるほど、この場合、人間判定なされなかつたことを喜ぶべきか否か」

手を振つて火を消し、彼は忌々しそうに距離を取つて更に顔を顰めた。

「なんなら、今から私が降霊でもしてどうすればいいか当人に聞くか？」

こんな馬鹿馬鹿しい話し合いに嫌気が差したのか、化粧屋が嫌味っぽくそう言った。

「いえ、この儀式、『人位遡行』は自身の穢れを完全に漂白する代わりに自意識さえも消失させてしまうもの。」

イヴという特別な存在だから成しえた荒業なのです」

だからもう、イヴの意識はどこにも存在しないだろう、と召喚士は小さく漏らした。

「本来かの秘奥は気の遠くなるほどの修業期間を要し、ゆつくりと世界に同一化すると聞いた。」

それを大幅に短縮する代わりに、それくらいの代償はあるだろう。

尤もそれは、異界の女神と同一化した彼女にとって代償とは言えないかもしれないが」

失敗例を見たことが有る仮面の魔術師にすれば、ものの見事に成功させてみせたイヴに呆れや関心が混じっていた。

「イヴの遺骸は、彼女の妹たちに引き渡すべきでしょう」

「それが一番かしらね。調停者、立ち合いをお願い」

「任せました。皆さんもこの場はそれで構いませんね？」

召喚士の提案は最も無難な選択しに落ち着いた。

魔女がそれに頷き、仮面の魔術師が周囲に同意を求めた。

周囲の反応は、消極的な同意。すなわち無言だった。

この場に居る面々の誰もが、この先この遺骸が世間を騒がせるだろうと予感していながら、誰も口を出さなかったのである。

§ § §

日本から離れた、中国の奥地。

前世の自分が修行した霊峰にて、老師は瞑想をしていた。

「あのイヴとかいう女、邪法を用いたか」

彼は意識を自然に向けており、この世界が改変されたことを認識していた。

「多くの命が消えた、天へと帰って行った。

私もこの世界の礎となり、師や兄弟たちのところへ行くべきなのやもしれぬ」

とは言え、それ早くて数百年。時間をかけて、意識や肉体を世界に同化させながら行う。

本来、世界を改変するとはそれほどまでに大掛かりな、だからこそ究極の奥義なのだ。

彼は懐古する。

この世の者とは思えない美しい天女である師と、兄弟たちとの修行の日々を。

「師よ、今日も自然に語り掛けていたのですか？」

「ええ。この世の自然は澄んでいて冷たい。」

ですがそれ故に心地よい。静かで、壮大だ」

霊峰にて瞑想する彼の師は、一本の樹木のように静かで根深く不動だった。

「まだ、魔力がこの世界に馴染んでいない。」

私たちが生きるにはこれだけでは不足でしょう。

やはり、この世界の異物である私たちが献身を行うべきなのでしょう」

彼の師が言うことは、彼にはよく理解できないことが多かった。

「天女である我が師にも、悩みがあるのですね」

「いいえだから、私はエルフ族……いえ、もう天女で良いです」

なにやら複雑そうな笑みを浮かべて、彼女は彼に向き直った。

「我らのエゴに、あなた達に付き合わせてしまうのは心苦しいのですが……」

「何を仰る!! 師は疫病に見舞われていた我が村を救ってくださいました!!」

その神通力で惜しげもなく多くの病人を治癒なされた!!」

そのあなた様の行くところに、我らが供をしない理由などない」

そうだろう、と彼は共に修行する兄弟たちに語り掛けた。
背後で多くの賛同が上がった。

彼女の容姿ではなく、その行動に魅かれて数多くの同胞が居た。

「……ありがとう、皆さん。」

だからこそ、私は本^ま当^まにあ^また達^だの天女になろうと思えたのです」

「我が師……？」

老師は思わず瞑想を止め、意識を覚醒させた。

彼は見た。

この世界を蝕もうと徐々に広がって行った病魔の化身が、絶大な何かによつて跡形も無くこの世から消し去られたのを。

そのイメージは、後光によつて全体の容姿が見えないが、その姿は女性であった。

それにより、断末魔すら無く悪の病巣は消滅させられた。

老師があれほど苦戦した相手、赤子の手をひねるかのようにあっさりど。

手にした弓を下げ、死の風を薙ぎ払った神域の天女はより上位の次元へと帰って行つ

た。

老師は、天女の消えた先を名残惜しそうにずっと見上げていた。

父親について

私は、平凡で面白みの無い男だった。

そんな自分が嫌で、若い頃はロックバンドなんて始めて見たりもした。

小さな店で演奏したこともある。

妻とは、バンド仲間だった。

私はギターで、彼女がボーカル。当時はもう二人の仲間と、彼女を取り合ったものだった。

なぜ彼女が私を選んでくれたのか、今でも不思議に思う時もある。

だが事実として、私達は愛し合っていた。

それが変わったのは、その愛の結晶である娘が産まれて、彼女が小学生に入ってからだった。

娘は昔から絵が好きだった。

幼稚園の頃はよく妻や私の似顔絵を描いてくれた。

天真爛漫、というほどではなかったが、明るく優しい最愛の娘だった。

妻は将来娘は画家になると、自慢げに語っていた。

私は話半分だったが、彼女は本気だった。

妻の両親は幾つもの画廊のオーナーをしており、まあ彼女は所謂良いところのお嬢様だった。

だから、絵画の知識に彼女は明るかった。

彼女の両親も、孫である娘を可愛がって画材を与えたりもした。

結婚のご挨拶に伺った時はあんな厳しい表情をしていたお義父さんも、孫には甘かった。

そんな妻とお義父さんに、小学生に上がる時に娘は本格的な画材道具を頼んだのを覚えてる。

思えば、その頃から私たちの娘は決定的に変わり始めていたのだろう。

それが最悪の形で表に出た時には、娘は世間と決定的な決裂を決めていた。

異能者。

ここ数年で、現れ始めた異様な能力を持つ人たち。

そう、娘は異能者だったのだ。

私がそれを知ったのは、娘がクラスメイト達の前で異能を披露し、気味悪がられて逃げ帰って来たのだと、仕事が終わって帰って来て妻に言われた時だった。

青天の霹靂とはこのことだった。

私のようなつまらない男から、尋常ではない能力を持った娘が産まれたのだ。

私は勿論混乱した。

この時期はまだ、異能者のことなんて全く分かっていない時勢だった。

私達両親が彼女に出来たことは、世間の偏見から守ることだけだった。

「お父さん、お母さん、私には前世の記憶があるの」

そう彼女が告白してくれたのは、それからしばらく経ってからだった。

娘は、私達に隠し事はしなかった。

でも私は半信半疑だった。

私達の最愛の娘が、娘ではないものに変わってしまったことを信じなくなかったのか
もしれなかった。

だから彼女は、私達にそれを信じさせるように、少しずついろいろなことを始めた。
塩で固めた人形を動かしてみたり、高度な数学や占いの知識、そして何より絵画の技

術。

絵画に詳しくない私でさえ知っている偉人から教わったと言つて、私達に見せた絵はとても小学生だった少女に描けるものでは無かつた。

天才、という言葉すら適合しない、常軌を逸した才覚だった。

どんな天才であろうとも、学ばなければ才能を開花できない。

娘の才能は、すでに開花しきつていた。

私は日中仕事に出かけているが、妻は娘がその絵を描く姿を見ていたという。

そして、失われている筈の技法がいくつも使用され、再現して見せたと妻は興奮気に語つていた。

「芸術の神様が、あの子を私たちに授けてくれたのよ」

そう、妻は誇らしげだった。

彼女のその表情を見て、私は世間から娘を離すという選択が正しかつたと悟つた。

娘の絵は、その見た目や年齢不相応な退廃的なものだった。

キセルで薬物を吸う女性、処刑を待ち望む民衆、妻の不倫を目撃する旦那、ギャングですべてを失う男、などなど。

まるで、彼女の前世の記憶の風景を書き写したかのような、命の息吹があつた。

彼女は市販の絵の具を使わず、植物や鉱石から色を抽出し絵具としてキャンバスに描く。

私のような知識のない人間にも圧倒される画力があつた。

だから、妻やお義父さんの受けた衝撃は凄まじかつただろう。

お義父さんはすぐにでも娘の絵を売り出そうと提案したが、娘は首を横に振つた。

自分の絵は、欲しい人間にタダであげてほしい、と希望したのである。

そのようにお義父さんに伝えた彼女は、どこか複雑そうにしていた。

私は分かつていたはずだったが、彼女の書く絵の題材から娘がそれまでと隔絶した価値観や知識を得たことを理解せざるを得なかつた。

だが、これは娘の異様さの序の口でしかなかつた。

「パパ、今日は仕事に行かないで」

順調に学校を卒業していたら、中学生になっていただろう娘が、朝の出勤前に私のスーツの裾を掴んで引つ張つて来た。

「……急に、どうしたんだい？」

正直、休みの日か食事の時ぐらいしか、娘とは顔を合わせない。

彼女はいつも、自室に閉じこもつてなにかしらの作業をしている。

「お願い、いかないで」

私は、困ったようにこちらを見る妻の顔を見て、肩を竦めた。

「わかったよ、今日は一緒に買い物でも行こう」

「ダメ、外に出ちやダメ」

娘はどこか、鬼気迫る表情で私にそう言った。

「あのな、どうしてなのか教えてくれないか？」

私は努めて優しく聞いたはずだったのだが。

「ッ!!」

次の瞬間、娘は私に香水瓶に入った何かの液体を吹きかけた。

私は前後不覚になり、玄関に倒れた。

「今日一日寝てれば、毒は抜けるから」

私は意識を失う瞬間、そんな娘の声を聴いた。

次に目を覚ましたのは、その日の昼間の事だった。

私の事を看病してくれた妻が、事情を説明するよりも早く、テレビを付けた。

「そんな、バカな」

私は驚愕した。

私がいとも通勤に使用するバスが、事故に遭つて大破していた。しかもびつたり私が通勤に行く時間帯のバスだった。

異能。

その言葉を、強く意識したのはこの時が初めてだった。

その日の夜、だいぶ調子を取り戻して、食卓に現れた娘を叱りつけた。

「今日事故に巻き込まれるとわかつてたのなら、なぜそう言わなかったんだ」

私の声に、台所の妻の調理の手が僅かに止まった。

対面に座る娘は、ずっとしかめっ面だった。

「だって、信じてくれないもん」

「……私は至らない人間だとは思うが、十年以上君の父親をしてきたつもりだ。

それで信じて貰えないのなら、私の努力が足らなかったのだろう」

娘は顔を上げる。そんなことを言わせるつもりは無かった、と顔に書いてあった。

「だが、何も言わずに手を出すのはいけないことだ。

君は特殊な境遇ゆえに手は掛からなかったが、そう言うことを教えてあげられなかったのは私の不徳が致すところだ」

娘は、私のようなつまらない、言い換えれば普通の人間とは違う。

私の娘は、日本人なのにイタリア語を始めとしたヨーロッパの言語を日本語以上に操

れる。

絵画だけでなく、薬物や宗教、数学など私が想像を絶する知恵や知識を持っている。だがこの日本の常識を、根気よく教えたことはなかった。

「人間に毒を吹きかけてはいけないんだ」

「知ってる……」

「……そうか」

何なんだろうか、この会話は。

「ねえパパ」

「なんだね」

「あのね、前世の私に、パパとママはいなかったの」

それは、初耳であった。

「子供の頃に、ペストで死んじゃったんだって」

娘の前世は、ペストが猛威を振るった時代に生きていた、とは聞いていた。

当時のヨーロッパの人口の三分の一を奪ったという、病の蔓延。

確率にして三割、両親が居ないことなど、珍しくはなかったのだろう。

「だからいっぱい調べたんだ。

人間を解剖したり、お薬だったり、宗教だったり、占いだったり、魔術だったり。

いろんなことをいっぱい調べて、死んだらどうなるかずっと考えてた」

誰もが今よりもずっと死に近い時代など、比較的医療が進んだ日本では想像がつかなかった。

「古代メソポタミアより古くから、芥子の実から取れる乳液は優れた薬効と依存性を有していた。

古代の人々は、神が人間に与えた薬だと、そう称した。

その依存性は人間を殺すほどだったが、人々はその薬効から芥子を手放せなかった」突如として、娘がそんなことを話し始めた。

ともすれば小学校でも習うかもしれない、歴史の話だった。

「そうして芥子はアヘンになった。昔の科学者たちは、どうにかアヘンから薬効だけを取り出そうと苦心した。そうして、モルヒネが産まれた。

そのモルヒネから薬効を取り出そうとして、キングオブドラッグことヘロインが産まれた。

依存性の無い芥子の秘薬は、人類の夢だった。

前世の私は、魔術の力を用いて芥子の依存性を打ち消す存在と出会った。

芥子の薬効ではなく、その神秘性に着目した人たち、古代の魔女の血族と魔術師たちの横つながりだった。

前世の私が、魔術師の一員になるのは当然の事だった。

「そうやって、死後の世界を見ようとした」

「でも所詮、薬物が見せる幻覚症状だろう？」

「私がパパとママから産まれたのも、薬物の幻覚だっていうの？」

私は口を閉ざすことしかできなかった。

「魔術を窮め、薬物の扱いを極めると、普通の人間にはあり得ざる第六感が研ぎ澄まされ、手足のように感覚の延長になる」

そうして、彼女は食卓の上にタロットカードを並べ始めた。

「術者のシックスセンスが要求される占いで、今日のパパは酷い運勢だった。」

だからバスの事故から、別の不幸に置き換えなれないといけなかった」

娘は、毒薬を吹きかける理由はそれだと語った。

確かに、説明されて信じられるかどうかは別だった。

「……パパに死んでほしくなかった」

「そうか」

実際のところ、例のバス事故に死傷者は出なかった。

それでも重傷者は数名いたし、もしかしたら自分は今頃病院のベッドで寝ていたかもしれない。

「次からはちゃんと教えてくれな」

「うん」

一先ず、今日はこれで終わりにすることにした。

ある時、妻の父親、つまりお義父さんが持病の悪化で亡くなってしまった。

葬儀に出席し、妻の血筋の本家とも言える場所で親戚が集まることになった。

そして、後悔した。

妻が泣いていた。お義父さんの財産目当てで醜く争い合う親戚たち。

葬儀の時間だというのに、怒鳴り合い始めた時は私も正気を疑った。

だがそれ相応の遺産を、お義父さんは私達に遺したのだ。

葬儀が一時中断となり、式場に戻って来た私たちは目を疑った。

「お前たち、私はちゃんと遺言を残したはずだ。

なぜその通りにして、粛々と静かに見送ってくれないのだ？」

棺の中から、死に装束のお義父さんが立ち上がったのだ。

親戚たちや葬儀場のスタッフも、悲鳴を上げた。

怯え竦んで、床に尻もちをつく親戚一同を睨みつけると、お義父さんは最期に自分の

孫に笑いかけた。

そして、死に目に会えなかった妻に言葉を掛けると、何事も無かったかのように棺の中へと戻って行った。

まるで、最初から何もなかったかのように。

私は、娘が口に手を当てて笑いを噛み殺しているのを横目で見ることはできなかつた。

最近で、一番衝撃だったのは私達が若い頃に憧れていたロックスターが亡くなったことだろうか。

御年八十を超えたお爺さんのだから、何時亡くなってもおかしくはなかったのだが。

『イエーイ、お前たち!! 俺の人生最後のロックンロールを聞けえい!!』

私はテレビの前で、啞然としていた。

先日、テレビで亡くなったとされたロックスターが、葬儀場で蘇って棺の中に手向けてあつたギターを弾き鳴らしたのである。

それどころか、まさか死後に自分の葬式で新曲の発表。彼の人生は、まさにロックだった。

ちなみにその曲は、オリコンチャートで前代未聞のヒットを飛ばした。

「これ、君の仕業だな」

同じ食卓にいた娘は、にやりと笑った。

「だつてこの前、パパとママがこのお爺さんのこと昔ファンだつたつて言つてたから」「だからつて、こんな騒ぎを起こすようなことは止めなさい」

「はい」

言葉の上ではそう言つても、かつてリスペクトしていた人の最期を彩つてくれたことを感謝してはいた。口にはしないが。

というか、娘が「化粧屋」なんて名乗つて活動していることを初めて知った。

お義父さんの葬式以来、私の実家の田舎にお盆休みで帰る時に地元の爺さん婆さんたちと何だか仲良くなつていた。

後から聞いてみたら、娘は降霊の魔術で死者の言葉を聞かせていたらしかった。

だから私は気になつて、聞いてみた。

本当にお盆には、死者が戻ってくるのか、と。

「日本と言う土壌だと、実際にそうであるかどうかにも関わらず、その行事としての認識が一定の効力を持つているから。」

「本物の幽霊にとってはある意味では過ぎやすい環境だと思ふ」

私は戦慄した。

この世に、ホンモノの幽霊なんてモノが存在することに。

私はその日娘に聞いた話は忘れるようにすることにしたのだ。

また、ある日、私はテレビのニュースで、異能者の子供を持った両親が上手くいかずに悲惨な状況であることを報道した。

「馬鹿な人たち、私はパパとママのこと大好きなのに」

その報道を見て、娘はそんなことを言った。

異能を持った子と、その両親の確執はお互いに原因はあったのだろう。

私としては、お互いに歩み寄る機会があることを願うばかりだ。

さて、今日も仕事だ。

「行つてらっしゃい、あなた」

「行つてらっしゃい、パパ」

今日も私は、妻と娘に見送られて仕事へ向かうのだった。